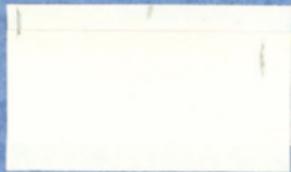


後川・中筋川
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

古津賀遺跡
具同中山遺跡群



1988. 6

高知県教育委員会

後川・中筋川
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

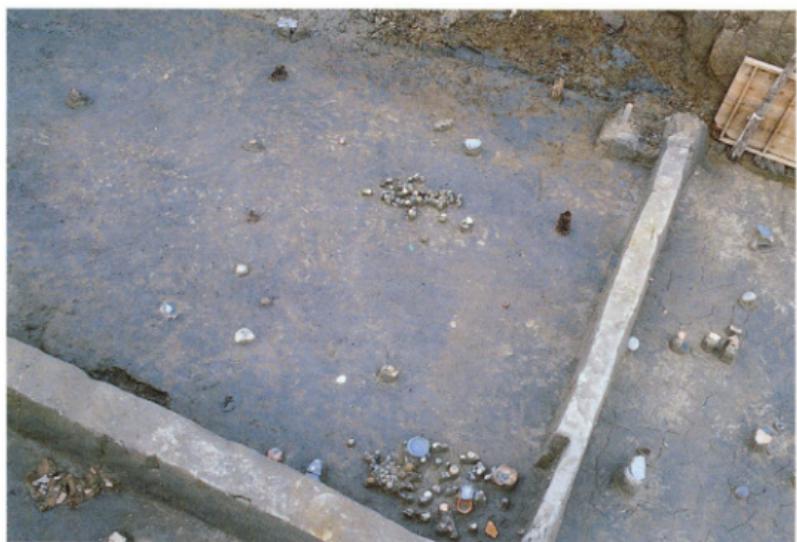
古津賀遺跡
具同中山遺跡群



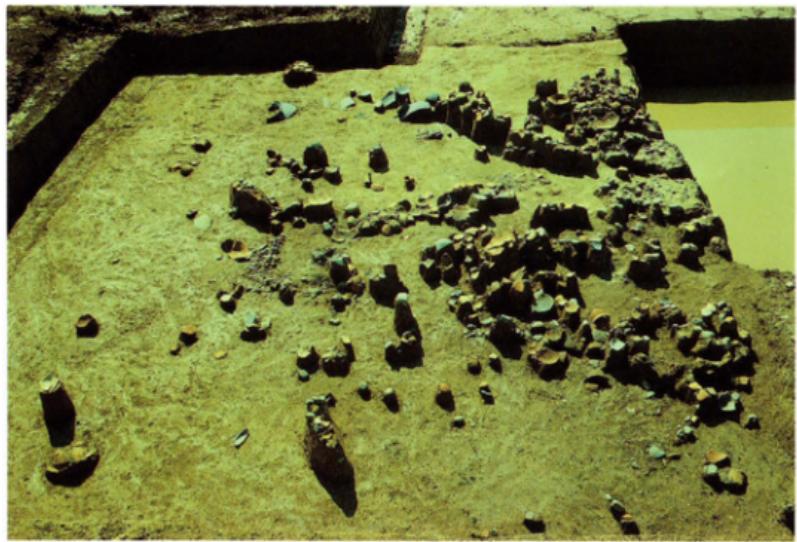
古津賀遺跡航空写真



具同中山遺跡群航空写真



古津賀遺跡 SF 2・3



具同中山遺跡群 SF 2

序

渡川（四万十川）は、日本最後の清流として有名ですが、この流域には遠い我々の祖先の生活の跡が数多く残されており、遺跡の宝庫としても知られています。

高知県教育委員会では、建設省四国地方建設局の委託を受けて、中筋川・後川の河川改修工事に伴う緊急発掘調査を実施してきました。

本書は、その調査結果を取りまとめたものです。今回の発掘調査により古墳時代中期から後期にかけておこなわれた祭場が発見され、河川に対する祭りの跡と考えられていますが、今も昔も河川に対する畏怖と感謝の念は変わらないようです。祭祀遺跡として全国的にも有名な古津賀遺跡・具同中山遺跡群の成果をおさめることができた、この報告書が、埋蔵文化財の保護・保存、更には今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

なお発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局の深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、関係各位から寄せられた多大の御協力と御指導に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和63年6月

高知県教育委員会

教育長 西森 久米太郎

例　　言

1. 本書は、中筋川、後川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財—古津賀遺跡・具同中山遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 具同中山遺跡群は、具同中山地区、東神木、ボケ地区等に点在する遺跡群を総称した。
3. 調査は、建設省四国地方建設局の委託を受け、高知県教育委員会が実施した。発掘調査期間は、昭和61年6月1日から昭和62年2月10日まで、出土遺物整理作業及び報告書作成は昭和62・63年度に実施した。
4. 発掘調査体制は次のとおりである。

調査顧問　岡本健児（高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会会長）

調査員　出原忠三（高知県教育委員会文化振興課主事）

　　タ　　廣田佳久（　　タ　　）

　　タ　　松田直則（　　タ　　）

庶務　楠瀬陽介（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班長）

5. 発掘調査は、古津賀遺跡を出原、具同中山遺跡群を松田が主に担当し、整理作業及び報告書作成は出原・廣田・松田が、試掘調査については山本哲也（高知県教育委員会文化振興課主幹）が分担した。文責は文末にそれぞれ記し、編集は高知県教育委員会が行った。
6. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、調査顧問岡本健児教授には御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
7. 出土遺物の写真図版中の番号については、実測図の番号と一致している。
8. 遺構については、祭祀跡と考えられる集中地点をS F、その他の集中地点をS X、土壤をS Kで標示した。
9. 報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
10. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所、及び中村市教育委員会の御協力をいただいた。また、現場作業員並びに整理作業員の皆様の御援助に対し、記して感謝する次第である。
11. 出土遺物、その他の関係資料は、高知県教育委員会において保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 研究略史と周辺の歴史地理的環境	3
第Ⅲ章 古津賀遺跡	7
1. 試掘調査	7
2. 本調査	9
第Ⅳ章 具同中山遺跡群	97
1. 試掘調査	97
2. 本調査	100
第Ⅴ章 総括	255
1. 遺構	255
2. 遺物	260

挿図目次

古津賀遺跡	
第1図 周辺の遺跡分布図	第30図 須恵器実測図
第2図 遺物出土状態	第31図 タ
第3図 調査区位置図	第32図 タ
第4図 調査区セクション図	第33図 タ
第5図 古津賀遺跡 S 区祭祀跡配置図	第34図 タ
第6図 柱半截図	第35図 タ
第7図 柱実測図	第36図 タ
第8図 S F 1 遺物出土状態	第37図 タ
第9図 S F 7 タ	第38図 タ
第10図 S F 8 タ	第39図 タ
第11図 S F 9 タ	第40図 タ
第12図 古津賀遺跡試掘調査、出土遺物実測 図 1	第41図 石器実測図
第13図 古津賀遺跡試掘調査、出土遺物実測 図 2	第42図 タ
第14図 土師器実測図	第43図 タ
第15図 タ	第44図 タ
第16図 タ	第45図 タ
第17図 タ	第46図 石製品・石器実測図
第18図 タ	第47図 鉄器実測図
第19図 タ	具同中山遺跡群
第20図 タ	第48図 石丸地区試掘調査土層断面図
第21図 タ	第49図 具同中山遺跡群試掘調査区
第22図 タ	第50図 具同中山遺跡群調査区位置図
第23図 タ	第51図 A・B 区周辺地形図、集中地点配置 図
第24図 タ	第52図 A 区セクション図
第25図 タ	第53図 C 区周辺地形図、集中地点配置図
第26図 土師器・手捏土器実測図	第54図 B・C 区セクション図
第27図 手捏土器実測図	第55図 D 区周辺地形図
第28図 手捏土器・土製模造品実測図	第56図 T R 10~14周辺地形図
第29図 須恵器実測図	第57図 E 区周辺地形図
	第58図 D・E 区セクション図
	第59図 T R 21~23周辺地形図

第60図	T R 24・25周辺地形図	第92図	土師器実測図
第61図	F区周辺地形図、集中地点配置図	第93図	タ
第62図	F・G区セクション図	第94図	タ
第63図	G・G'区周辺地形図、集中地点配置図	第95図	タ
第64図	G'・J区セクション図	第96図	タ
第65図	H区周辺地形図、集中地点配置図	第97図	タ
第66図	I・K区セクション図	第98図	タ
第67図	T R 41~44周辺地形図	第99図	タ
第68図	I・J・K区周辺地形図、集中地点配置図	第100図	タ
第69図	S K I 全体図	第101図	タ
第70図	土師器実測図（試掘調査）	第102図	タ
第71図	土師器・土製模造品・石器実測図 （試掘調査）	第103図	タ
第72図	須恵器実測図（試掘調査）	第104図	タ
第73図	弥生土器実測図	第105図	タ
第74図	土師器実測図	第106図	手捏土器実測図
第75図	タ	第107図	タ
第76図	タ	第108図	タ
第77図	タ	第109図	タ
第78図	タ	第110図	須恵器実測図
第79図	タ	第111図	タ
第80図	タ	第112図	タ
第81図	タ	第113図	タ
第82図	タ	第114図	タ
第83図	タ	第115図	タ
第84図	タ	第116図	タ
第85図	タ	第117図	タ
第86図	タ	第118図	タ
第87図	タ	第119図	タ
第88図	タ	第120図	タ
第89図	タ	第121図	土師器・綠釉陶器・輸入陶磁器実測図
第90図	タ	第122図	須恵器実測図
第91図	タ	第123図	土錘実測図
		第124図	土製・石製模造品実測図
		第125図	白玉実測図
		第126図	タ

第127図	鉄器・石器実測図
第128図	時期別須恵器出土比率図
第129図	古津賀遺跡須恵器変遷図1
第130図	タ 2

第131図	具同中山遺跡群須恵器変遷図1
第132図	タ 2
第133図	調査区分出土遺物種別内訳

表 目 次

古津賀遺跡	
第1表	周辺遺跡一覧表
第2表	多角測量座標成果一覧表
第3表	甕I類細分表
第4表	甕II類 タ
第5表	甕III類 タ
第6表	椀分類表
第7表	高杯分類表
第8表	瓶分類表
第9表	土師器組成
第10表	手捏土器I類細分表
第11表	手捏土器II類 タ
第12表	手捏土器III類 タ
第13表	古津賀遺跡出土遺物観察表 具同中山遺跡群
第14表	多角測量座標成果一覧表1
第15表	タ 2
第16表	S F 2 出土遺物一覧表
第17表	S F 3 タ

第18表	S F 4 出土遺物一覧表
第19表	S F 6 タ
第20表	S F 7 タ
第21表	具同中山遺跡群(試掘)出土遺物観察表
第22表	具同中山遺跡群出土遺物観察表
第23表	祭祀跡の時間的推移表
第24表	集中地点の時期的推移表
第25表	形態別各祭祀跡出土表
第26表	土師器形態別時期的推移表
第27表	S K 1 出土遺物法量表
第28表	土錘計測表
第29表	須恵器形態別集中地点出土表
第30表	土師器形態別集中地点出土表(甕)
第31表	タ (椀)
第32表	タ (壺)
第33表	タ (高杯)
第34表	タ (脚付椀)
第35表	タ (手捏土器)

図版目次

古津賀遺跡	
図版1	古津賀遺跡遠景(南より) タ (北より)
図版2	S区セクション(北壁) タ (東壁)
図版3	S F 10・11遺物出土状態
図版4	S F 1 遺物出土状態 タ
図版5	S F 3 遺物出土状態 タ
図版6	S F 2・3 遺物出土状態 S F 3 遺物出土状態
図版7	S F 4 遺物出土状態 須恵器壺出土状態
図版8	S F 4・5 遺物出土状態 S F 5 遺物出土状態
図版9	S F 9 遺物出土状態 タ
図版10	S F 10 遺物出土状態 タ
図版11	S F 11土師器壺出土状態 S F 10須恵器杯出土状態
図版12	S F 11遺物出土状態 タ
図版13	S F 3 柱検出状態及び半截状態
図版14	紡錘車・砥石・土師器高杯・須恵器 杯出土状態
図版15	出土遺物(鉄器)
図版16	出土遺物(土師器)
図版17	タ
図版18	タ
図版19	タ
図版20	出土遺物(土師器)
図版21	タ
図版22	タ
図版23	タ
図版24	タ
図版25	タ
図版26	出土遺物(土師器・手捏土器)
図版27	出土遺物(手捏土器)
図版28	出土遺物(手捏土器・土製模造品)
図版29	出土遺物(須恵器)
図版30	タ
図版31	タ
図版32	タ
図版33	タ
図版34	タ
図版35	タ
図版36	タ
図版37	タ
図版38	タ
図版39	タ
図版40	タ
図版41	タ
図版42	タ
図版43	タ
図版44	タ
図版45	タ
図版46	タ
図版47	タ
図版48	タ
図版49	タ
図版50	出土遺物(石器)
図版51	タ

具同中山遺跡群	C区S F 5 遺物出土状態(南西より)
図版52 試掘調査出土遺物(土師器)	図版71 C区S F 5 遺物出土状態
図版53 タ	C区全景(北東より)
図版54 タ	図版72 D区南西壁セクション
図版55 タ	タ
図版56 試掘調査出土遺物(須恵器)	図版73 D区遺物出土状態(南東より)
図版57 具同中山遺跡群、具同中山地区遠景 (西より)	D区全景
具同中山遺跡群、東神木・ボケ地区 遠景(東より)	図版74 E区全景
図版58 A区S×1 遺物出土状態(南東より) タ	E区西壁セクション
図版59 A区S F 1 遺物出土状態(南東より) A区S×2 遺物出土状態	図版75 F区S F 6 遺物出土状態(南より)
図版60 A区全景(北東より)	タ
A区セクション	図版76 タ
図版61 B区S F 2 遺物出土状態(南東より) タ	タ
図版62 B区S×3 遺物出土状態(南東より) タ	図版77 タ
図版63 B区S F 3 遺物出土状態(南東より) B区S F 3 遺物出土状態	タ
図版64 タ タ	図版78 F区S F 6 遺物出土状態
図版65 B区S K 1 (北東より) B区全景(北東より)	タ
図版66 C区南西壁セクション タ	図版79 タ
図版67 C区S F 4 遺物出土状態(北西より) C区S F 4 遺物出土状態(北東より)	F区セクション
図版68 タ	図版80 F区S F 6 遺物出土状態(東より) F区S F 6 遺物出土状態(西より)
C区S F 4 遺物出土状態(南より)	図版81 F区S F 6 遺物出土状態
図版69 C区S F 4 遺物出土状態 タ	タ
図版70 C区S F 5 遺物出土状態(南西より)	図版82 F区セクション F区全景
	図版83 G区S F 7 遺物出土状態(北東より) タ
	図版84 G区S F 7 遺物出土状態 タ
	図版85 タ
	タ
	図版86 タ タ
	図版87 G区セクション タ

図版88	G'区 S × 5 遺物出土状態(北西より)	図版108	出土遺物(土師器)
	G'区 S × 5 遺物出土状態(南東より)	図版109	タ
図版89	G'区 S × 5 遺物出土状態	図版110	タ
	G'区 IV - 2 層鉄器出土状態	図版111	タ
図版90	G + G'区全景	図版112	タ
	H 区 遺物出土状態(東より)	図版113	タ
図版91	H 区 S × 6 + 7 遺物出土状態(東より)	図版114	タ
	H 区 S × 7 遺物出土状態(北東より)	図版115	タ
図版92	H 区 S × 7 遺物出土状態	図版116	タ
	H 区 S × 6 遺物出土状態	図版117	タ
図版93	H 区 S F 8 遺物出土状態(南より)	図版118	タ
	H 区 S F 8 遺物出土状態	図版119	タ
図版94	タ	図版120	タ
	H 区西壁セクション	図版121	タ
図版95	H 区全景	図版122	タ
	I 区 S F 9 遺物出土状態(東より)	図版123	タ
図版96	I 区 S F 9 遺物出土状態	図版124	タ
	タ	図版125	タ
図版97	I 区 S F 9 遺物出土状態(南より)	図版126	タ
	I 区 S F 9 遺物出土状態	図版127	タ
図版98	I 区西壁セクション	図版128	タ
	I 区全景	図版129	タ
図版99	J 区 遺物出土状態(東より)	図版130	タ
	J 区 遺物出土状態	図版131	タ
図版100	J 区東壁セクション	図版132	タ
	J 区全景	図版133	タ
図版101	K 区全景	図版134	タ
	K 区東壁セクション	図版135	タ
図版102	出土遺物(弥生土器)	図版136	タ
図版103	出土遺物(弥生土器・土師器)	図版137	タ
図版104	出土遺物(土師器)	図版138	タ
図版105	タ	図版139	タ
図版106	タ	図版140	タ
図版107	タ	図版141	タ
		図版142	タ

图版143 出土遺物(土師器)

图版144 夕

图版145 夕

图版146 夕

图版147 夕

图版148 夕

图版149 夕

图版150 夕

图版151 夕

图版152 夕

图版153 出土遺物(手捏土器)

图版154 夕

图版155 夕

图版156 夕

图版157 夕

图版158 夕

图版159 出土遺物(土師器·土錘·土製模造品)

图版160 出土遺物(須惠器)

图版161 夕

图版162 夕

图版163 夕

图版164 夕

图版165 出土遺物(須惠器)

图版166 夕

图版167 夕

图版168 夕

图版169 夕

图版170 夕

图版171 夕

图版172 夕

图版173 夕

图版174 夕

图版175 夕

图版176 夕

图版177 夕

图版178 夕

图版179 夕

图版180 出土遺物(土師器)

图版181 夕

图版182 出土遺物(土師器·綠釉陶器·輸入陶磁器)

图版183 出土遺物(須惠器)

图版184 出土遺物(土製·石製模造品·石器)

图版185 出土遺物(石製模造品·臼玉)

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1 古津賀遺跡

後川左岸の古津賀地区は、全国的にも著名な古墳時代の祭祀遺跡を持つ地域として知られているところであるが、同時に県下でも屈指の洪水地帯であり多くの水害を付近住民にもたらした。なかでも、昭和10年と38年の被害は甚大で、付近は「望渺々たる泥海」という状況であったという。これに対処するため建設省は、堤防の造築と護岸の強化を進めてきている。

かかる状況の中で、高知県教育委員会と中村市教育委員会は、埋蔵文化財保護の立場から、建設省四国地方建設局中村工事事務所と協議を重ね、遺跡の正確な範囲及び深度等を把握するために昭和56年と57年に試掘調査を実施するこびとなった。試掘調査の結果は、すでに概報にも記載されているように、後川鉄橋下流域に2,000m²以上にわたる遺跡の広がりのあることが確認されている。そして護岸補強工事による河川敷掘削前に際しては、記録保存のための事前緊急発掘調査を必要とする事になった。ここに高知県教育委員会と建設省中村工事事務所は昭和61年に委託契約を結び、今次の発掘調査に至った。調査期間は昭和61年6月1日から9月21日まで、調査面積は1,100m²である。

(出原)

2 具同中山遺跡群

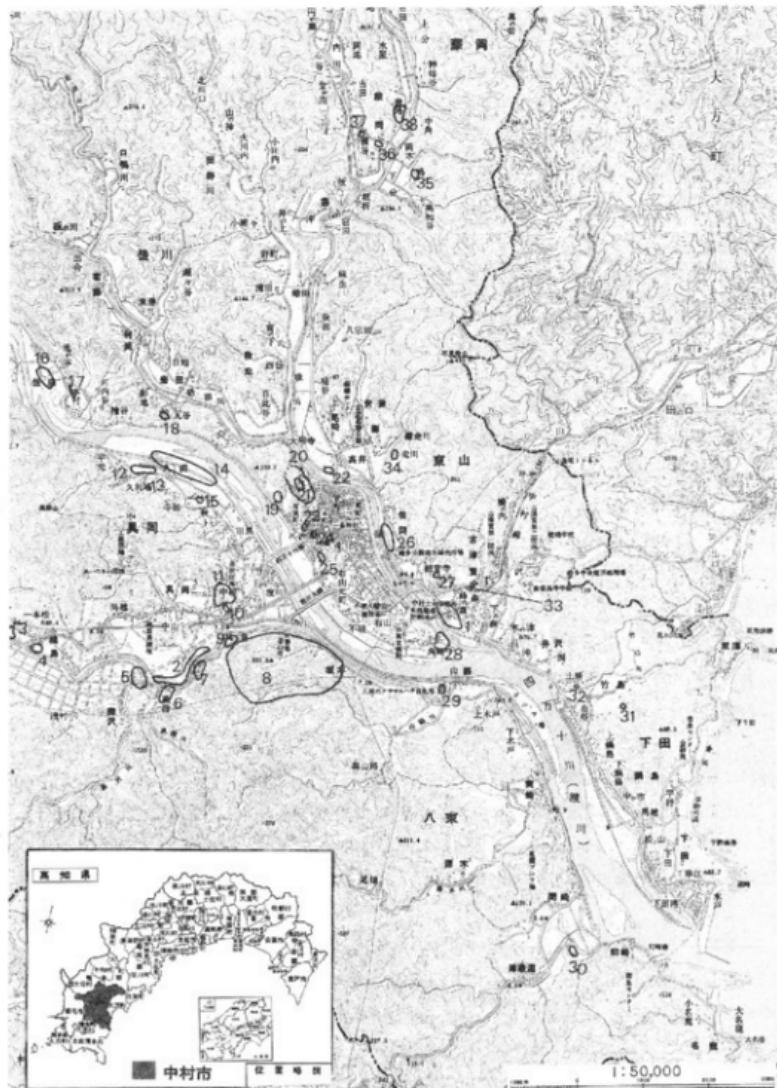
一級河川中筋川の高水敷には、東神木・ボケ遺跡等の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在している。この流域の遺跡は、昭和20年代の堤防工事に際し発見され、祭祀遺物が出土したということで出土地点の小字名をとって東神木・ボケ遺跡等という名称で呼ばれていた。しかし、今回の調査では小字の範囲以上に遺跡の範囲が存することから、広域的に具同中山遺跡群と呼ぶことにした。

具同中山遺跡群が所在する中筋川流域は、出水になると水位が上昇し危険地帯であるため建設省四国地方建設局中村工事事務所は、その改修工事を昭和60年度から計画的に実施することになった。当該工事区域には、前述した周知の埋蔵文化財包蔵地が所在するため、文化財保護法に基づく事前の発掘調査が必要となった。

このため、建設省四国地方建設局中村工事事務所と、高知県教育委員会、中村市教育委員会は、数度の協議を実施した結果、工事対象面積が広く調査も長期間に亘るものと考えられることから、建設省四国地方建設局から委託を受けて、高知県教育委員会が発掘調査を実施することとなつた。

発掘調査は、具同中山遺跡群の範囲等について不明確な点が多いため、前段階で4×4mを基本としたトレンチを中筋川に沿って任意に50ヶ所程設定し試掘調査を実施した。試掘調査は、昭和61年9月22日から10月16日まで実施した。試掘調査の結果、各トレンチで集中して遺物が出土した地点を選定し、そのトレンチを中心に拡張し本調査を実施した。本調査は、昭和61年10月17日より実施し、昭和62年2月10日に終了した。調査対象面積は45,700m²で、発掘調査面積は5,000m²である。

(松田)



第1図 周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章 研究略史と周辺の歴史地理的環境

1 研究略史

古津賀遺跡・具同中山遺跡群は、5世紀～6世紀にかけての祭祀遺跡としてすでに著名な遺跡であり、古墳時代の祭祀を語る上で避けて通ることのできない重要な遺跡として位置づけられている。古津賀遺跡は、四万十川の支流である後川左岸の河川敷に立地しており、昭和30年の堤防工事に際して偶然に発見されたものであるが、地元の人々の言によれば、それ以前から、川床より土器等の出土することがあったと言うことであり、遺跡周辺は大場千軒と呼ばれている。また対岸には、同時の祭祀遺跡としての角崎遺跡がある。

具同中山遺跡群も、四万十川の支流中筋川左岸の沖積地に立地しており、古津賀遺跡よりはるかに広い面積を有している。この遺跡も昭和20年代の堤防工事に際して偶然に発見されたものである。これら一連の発見は、地元の考古学研究家木村剛郎氏によってなされ、その後岡本健児氏によって、古墳時代の祭祀遺跡として広く全国に紹介されるに至った⁽¹⁾。また発見時における木村氏の詳細な観察は、以後の諸研究を進める上で重要な意義を持っており、この功績は大いに評価されなければならない。

掘削工事や表探による遺物は、断片的なものであるが石製模造品・有孔円板・白玉・手捏土器など祭祀遺跡と断定する上で、内容の濃い遺物を含んでいる。岡本氏は、両遺跡出土遺物の分析から、具同中山遺跡群を古津賀遺跡に先行する祭祀遺跡として時間的な位置付けを行い、祭祀の性格としては、洪水に悩まされることの多かった古墳時代の人々が、「川」を崇拜の対

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	古津賀遺跡	古墳	14	入田遺跡	縄文・弥生	27	觀音寺遺跡	縄文
2	具同中山遺跡	タ	15	秋トシ遺跡	弥生・中世	28	角崎遺跡	古墳・中世
3	国見遺跡	縄文・古墳	16	池本遺跡	弥生・奈良・中世	29	山路遺跡	弥生
4	栗中小学校校庭遺跡	古墳	17	佐田遺跡	弥生	30	宮ノ沢遺跡	縄文
5	舟戸遺跡	タ	18	鉢カ森遺跡	タ	31	福重古墳	古墳
6	風指遺跡	紀・平安・中世	19	吹越山遺跡	タ	32	白臘山古墳	タ
7	アゾノ遺跡	中世	20	中村城跡	中世	33	古津賀古墳	タ
8	香山寺跡	中・近世	21	古城山遺跡	弥生・奈良・平安	34	走川端遺跡	弥生
9	具重遺跡	古墳	22	後川橋西遺跡	弥生	35	程岡遺跡	タ
10	西和田遺跡	弥生	23	久山遺跡	タ	36	横谷遺跡	縄文
11	栗本城跡	中世	24	中村貝塚	縄文	37	丸山遺跡	縄文・中世
12	源池遺跡	弥生・中世	25	岩崎山遺跡	弥生	38	奈路駄馬遺跡	縄文・弥生
13	本井城跡	中世	26	佐岡遺跡	弥生・古墳			

象としたと論じている⁽²⁾。一方小松葉子（旧姓井本）氏は、県下の祭祀遺跡の中に古津賀・具同中山両遺跡を位置づけ、主として古式須恵器や石製模造品等の分布から、祭祀の歴史的あるいは政治的な背景について論究し、その結論として、祭祀行為の中に「畿内勢力」の浸透、「土佐土着の地方豪族の服属または同盟」という政治的関係が投影されていることを指摘している⁽³⁾。

2 周辺の歴史地理的環境

古津賀・具同中山遺跡群の所在する中村市は、高知県西部における経済文化の中心的な機能を果している。応仁2年（1468）一条氏下向以来培われてきた町並は、土佐の小京都として親しまれ、土佐にありながら独特の文化を発展させて来ている。中村市は、その大部分が山地であり平野部は、四万十川と後川に挟まれた市街地と後川河口の古津賀や中筋川流域に谷平野が形成されているに過ぎない。四万十川は、吉野川に次ぐ四国第二の河川であり、上流域は我国有数の降雨地帯でありながら、下流に形成された平野部が極端に少ない。このことは、中村市域の発展を規定したもう一つの大きな要因として注目しなければならない。降水量と平野面積の不均衡は、河況係数⁽⁴⁾に敏感に表われている。すなわち吉野川（中央橋）788、荒川（寄居）745、に対して四万十川は824（具同）となっている⁽⁵⁾。この数字は、四万十川がいかに制御しにくい不安定な河川であったかを示唆している。また中筋川・後川の下流域は、上流よりも降水量が大きく、洪水ともなれば、四万十川本流から逆流現象が起り、内陸部にまで泥水が浸入する。『四万十川四十年史』の渡川の変遷によれば、「野中兼山の中筋川改修以来明治中期までの230年間における水位10m以上の大洪水は23回、反収6割以下の中洪水（6 m）72回、浸水50時間以上の小洪水（4 m）、24時間冠水以上を含めると1,000回近い浸水記録」がある。中村の人々が如何に河川の猛威にさらされ、厳しい生活を強いられたのか看取ることができる。今日の中村市を築き上げた人々の歴史は、まさに水との戦いの歴史であったと言っても過言ではない。

地質ボーリング調査や中村貝塚の調査結果から、中村平野及び両河川流域の旧地形を復元すると、具重から不破・角崎・観音寺にかけて海岸線が形成され、今日よりもかなり海が湧入していたことが考えられる。また四万十川の流れが今日の形となったのは、寛弘6年（1009）の洪水以降のことと言われており、それ以前は、流域にいくつもの自然堤防を形成しながら、入田源池から具同西麓を流れ、坂本の具重で中筋川に合流していたと考えられている⁽⁶⁾。

中村市周辺における祖先の生活の営みの跡は、縄文時代に遡ることができる。中筋川上流のツグロ橋下遺跡からは、縄文前期の轟BⅡ式土器が出土しており、四万十川中・上流域の河岸段丘上には、縄文時代中・後期の遺跡が数多く存在し、縄文期の遺跡では県下で最も濃密な分布地域を形成している。これらの遺跡からは、共通して多量の漁撈具が出土しており、四万十川の豊富な水産資源に生業を求めて発展してきたことを物語っている。晩期後半に至ると、遺跡は低地部に進出し、中村市山手通りに中村貝塚が出現する。中村貝塚は、現地表（海拔8 m）

下4～6mにあり、下層からは中村I式土器と共にカキ・ハマグリ等が出土し、上部貝層からは刻目突芯文を有する中村II式土器が、淡水産のヤマトシジミを主体として出土している。また上下貝層における貝殻の差違は、採集経済の行き詰まりを示すものとして示唆に富むものである⁽⁷⁾。晩期終末になると四万十川右岸の自然堤防上に入田遺跡が営まれる。ここからは、晩期終末の入田B式土器と共に、弥生前期初頭の入田I式土器が出土しており、当地域の播作農耕の開始を示す遺跡として注目される。しかしこの時期以降弥生前期後半に至る遺跡は、現段階ではほとんど見るべきものもなく、わずかに前期末の土器片が入田遺跡等で散在しているに過ぎない。このような状況は、中期前半まで続くが、中期後半に至ると様相は一変し、飛躍的に遺跡数が増加する。また遺跡の立地にも大きな変化が見られる。すなわち、四万十川左岸に吹越遺跡、久山遺跡、岩崎山遺跡があり、中村市街を一望できる古城山遺跡からは神西式土器と共に太形蛤刀石斧や石鏡が出土している。これら山上に立地する集落は、古城山遺跡をのぞくと極めて狭隘な面積しかなく独立した集団經營がなされたとは考え難い。従って山上に点散する小集落の拠点的集落は、低地部の沖積層の下に埋没しているものと考えられる。また、この時期に青銅器が入って来る。中村市域では、中広銅矛I式と同II式⁽⁸⁾が1点づつ出土している。前者は、昭和26年中筋川堤防工事に際して、具同中山遺跡群の東神ノ木地区より出土したもので、県下の銅矛の中では、高知市三里出土のものと共に最古の例に属する。後者は、伝中村市山路城跡出土⁽⁹⁾と言われるものである。

弥生時代後期になると遺跡の立地に変化が見られ、再び低地部に所在するようになる。後川流域の佐間遺跡や中筋川右岸の風指遺跡、左岸の具同中山遺跡群等を挙げることができるが、総じて中期後半に比べると遺跡数が減少する。これは県下の弥生後期の遺跡の動向からすると異った現象であり、本来の姿とは考えられない。すなわち、遺跡立地の変化によって現在発見されていない遺跡が相当数存し、中期後半から継続して発展したと解釈した方が妥当であろう。

古墳時代は、前期の状況は不明な点が多いが、中期になると中筋川上流の宿毛市平田に曾我山古墳と高岡山古墳群⁽¹⁰⁾が出現する。前者は、全長60m前後を測る前方後円墳と推定されているが、現在は後円部しか残っていない。舶載の獸首鏡や仿製の獸形鏡等が出土している。後者は、5世紀代に比定できる2基の円墳からなっており、1号墳からは筒形銅器や玉類、2号墳からは石鏡や内行花文鏡が出土している。県下の中期古墳は、4～5基しか存在しないがその半数、以上が幡多地方にある。このことは、当地方の生産力の発展と豪族層の政治的成长を表徵するものに他ならない。そして同時に幡多地方が、土佐における古墳時代の文化流入の門戸的位置にあったことを示すものである。また岡本氏は、古墳時代における「中央から土佐へ」の主要通路として、伊予から幡多路を通るルートを考えている⁽¹¹⁾。

古墳時代後期になると、中筋川流域には古墳は見られなくなり、四万十川を渡った古津賀や竹島に7世紀に比定される古津賀古墳や竹島土居山古墳等が出現する。この立地の変化は、祭祀遺跡の変化とも対応しており興味深い現象である。

古代の文献資料は、極めて少ないが『先代旧事本紀』の「国造本紀」に「波多国造」の記載があり、『和名類聚抄』には土佐七郡の中に「幡多郡」として記され、傘下に大方・宇和・山田・^{イサノ}鯨野・枚田の5郷がある。

(出原)

(註)

- (1) 岡本健児「四國」「神道考古学講座」第二巻 雄山閣 1972年
- (2) 註(1)と同じ
- (3) 井本葉子「高知県の祭祀遺跡」「高知の研究」1 地質・考古篇 清文堂 1983年
- (4) 最大流量の最小流量に対する比
- (5) 市瀬由自「四十川流域における洪水」 1985年
- (6) 建設省四国地方建設局中村工事事務所「渡川改修40年史」 1980年
- (7) 岡本健児「高知県史考古編」 高知県 1968年
- (8) 岡本健児「高知県発見の銅矛について」「高知の研究」1 地質・考古篇 清文堂 1983年
- (9) 橋田庫欣「弥生時代の生活」「中村市史」 中村市 1969年
- (10) 高知県教育委員会「高岡山古墳群発掘調査報告書」 1985年
- (11) 註(7)と同じ

第Ⅲ章 古津賀遺跡

1 試掘調査

昭和56年度に高知県教育委員会は、一級河川渡川水系左支川後川の堤防工事計画（古津賀地区）に伴い、工事対象範囲について事前の試掘調査を実施した。

発掘調査は、堤防拡幅による掘削工事部分を対象として計13ヶ所のトレンチ（TR 1～13）を設定し、昭和56年7月27日～7月30日（TR 10～13）、昭和57年2月6日～2月22日（TR 1～9）の間に行なった。総発掘面積は350m²である。

調査の結果、TR 1・6～8（建設省基本杭No.1～4間・南北約75m間）から、古墳時代後期の遺物包含層が検出され、多量の土器（須恵器・土師器）、石器（砥石・叩石・磨石・石皿）、石製模造品（紡錘車）、小形手捏土器等が出土した。なお、TR 3～5・9（建設省基本杭No.5～9間）では数点の土器片（須恵器・土師器）が出土したものの中には遺物包含層は存在せず、後世の強い擾乱を受けていることが、また、TR 10～13（建設省基本杭No.12～20）においては遺物包含層は形成されておらず、堆積土は自然堆積によるものであることが確認された。

TR 1・6～8で検出された遺物包含層は、標高1.80～2.30m間で形成された泥土の沈殿層で、色調から3層に区分されるものであり（第V層黄褐色粘質土、第VI層明灰色粘土、第VII層暗青灰色粘土）、遺物包含層中からコンテナ箱（内法34×54×10cm）20箱分、完形品約200点に達する遺物が出土した。また、第V～VII層については、出土遺物（特に須恵器）に型式的変遷が認められ、第V層がA・D 6 C末～7 C前半、第VI層A・D 6 C中頃～後半、第VII層A・D 5 C末～6 C前半、を前後する時期に形成されたものと考えられる。

遺物の出土状態としては、TR 6から祭祀遺物を含む遺物の集中出土がみられたほかは、全体的に散在した状態で出土し、特に遺物の集中箇所はみられなかった。

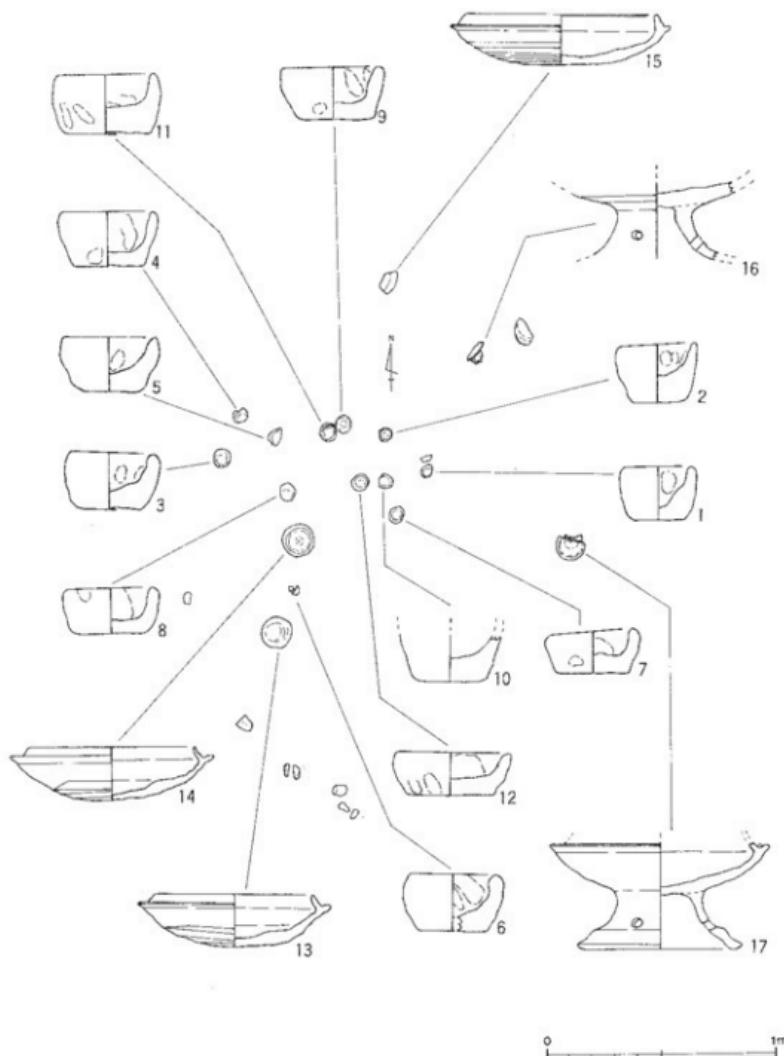
TR 6では、第V層中、第VI層上面にかけて、1.6×2.2mの範囲に小形手捏土器が集中し、須恵器杯身、高杯が伴出して出土した。また、遺物の集中箇所の下面（第VI層上部）では、2.2×2.3mの範囲で3～5cm大の玉石が集中して検出され、注目された。

TR 6で検出された遺物の集中箇所は、祭祀行為の痕跡として捉えられるものであり、遺物の内容からA・D 6 C末～7 C前半における祭祀形態の一部を示す遺構であると考えられる。

古津賀堤防の拡幅工事計画に伴い実施された当該試掘調査によって、工事計画地の一部から古墳時代後期の遺物包含層が検出され、古津賀遺跡の様相が明らかになったことから、工事に先立つ本発掘調査を実施することが必要となった。

（山本）

註 「古津賀遺跡 中村市古津賀堤防拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」 昭和57年3月 高知県教育委員会



第2図 遺物出土状態

2 本 調 査

(1) 調査方法

渡川鉄橋の上流を N 区、下流を S 区として調査区を設定した。

古津賀遺跡周辺には、測量のための基準点が設置されていないため、発掘調査に先立ち基準点の設定を行った。基準点は、任意座標とし、X 軸は真北に向う値を正、Y 軸は X 軸に直交する軸として真東に向う値を正とするようにとり、TP 1 - 17までを設置した。多角測量は、TP 1 の座標を X = 1,000.000, Y = 1,000.000 とし、10秒読みの光波距離計を使用して行った。なお調査区西の標高約 57.0m を測る山頂にある鉄塔を方位標とし、鉄塔 A と呼称した。測量結果は第 2 表に記し、同時に実測した水準測量の結果も同表に記載した。 (廣田)

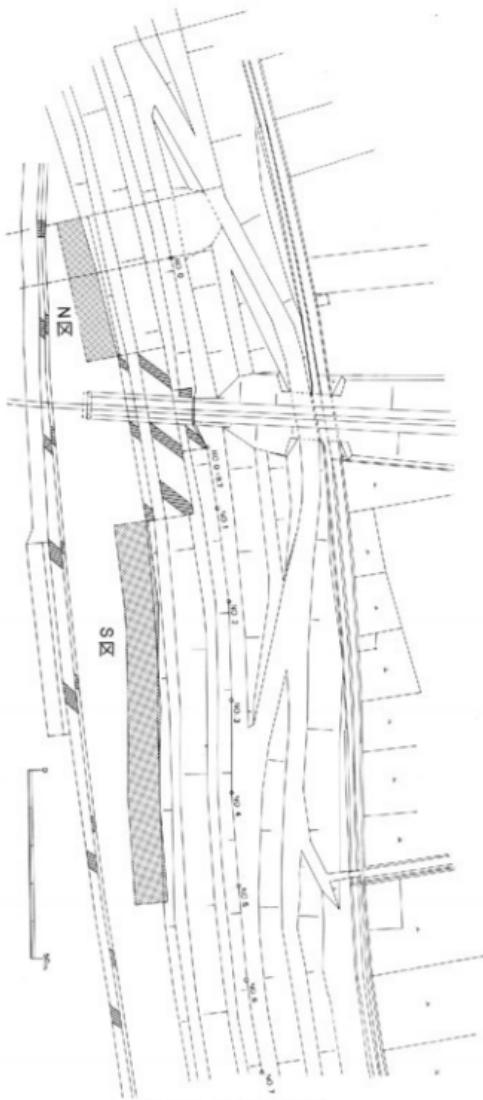
(2) 基本層序 (4 図)

S 区の基本層序は、図示したように I ~ X 層で構成されている。I 層は、堤防工事に際して盛られたもので場所によって厚さにかなりの差がある。II ~ IV 層は、C - H, I - J では明瞭

第 2 表 多角測量座標成果一覧表

(路線名 古津賀遺跡
(測点名 TP 1 から TP 16 実測精度 1/2,2949)

測角点	方向点	整正方向角	水平距離 (m)	X (m)	Y (m)	座標点	標高 (m)
TP 16	TP 1	8° 14' 38"	26.697	1,000.000	1,000.000	TP 1	11.409
TP 1	TP 2	284° 01' 43"	18.427	1,004.467	982.124	TP 2	6.095
TP 2	TP 3	333° 16' 58"	26.934	1,028.525	970.015	TP 3	6.127
TP 3	TP 4	329° 40' 21"	25.503	1,050.537	957.138	TP 4	5.163
TP 4	TP 5	323° 51' 31"	32.299	1,076.620	938.089	TP 5	5.423
TP 5	TP 6	322° 19' 12"	17.371	1,090.369	927.471	TP 6	5.215
TP 6	TP 7	326° 01' 24"	19.353	1,106.416	916.656	TP 7	4.570
TP 7	TP 8	177° 56' 52"	28.707	1,077.727	917.684	TP 8	3.159
TP 8	TP 9	163° 07' 18"	16.715	1,061.732	922.537	TP 9	2.557
TP 9	TP 10	149° 16' 49"	43.351	1,024.463	944.683	TP 10	2.685
TP 10	TP 11	153° 21' 30"	47.109	982.354	965.808	TP 11	2.574
TP 11	TP 12	149° 25' 01"	24.265	916.464	978.154	TP 12	2.436
TP 12	TP 13	153° 05' 55"	17.069	946.242	985.877	TP 13	2.431
TP 13	TP 14	149° 57' 13"	21.615	927.531	996.700	TP 14	2.444
TP 14	TP 15	22° 39' 56"	25.252	950.833	1,006.431	TP 15	6.255
TP 15	TP 16	335° 43' 24"	24.953	973.579	996.172	TP 16	6.160
TP 16	TP 1	8° 14' 38"	26.697	1,000.000	1,000.000	TP 1	11.409
TP 15	鉄塔 A	263° 0' 06"	513.736	888.240	496.522	鉄塔 A	—
TP 16	タ	260° 18' 27"	506.885	タ	タ	タ	—



第3図 調査区位置図

につかむことができるが、他の場所では完全に次如（C-D）していたり、十分に把握することができない（A-B, E-F）。これは、堤防工事の時に削平されたり、擾乱を受けたことによるものと考えられる。IV層は、G-H・I-Jでは10-20cmの水平堆積をしており、A-Bでは、岸側が50cm余りと厚く堆積し川に向って次第に薄くなり、やがて消滅する。A-Bに見られるこの現象は、本来の堆積の状態ではなくやはり削平によるものと考えられる。C-D・E-Fでは、IV層を明瞭に把握することができない。またこのIV層からは、極小量ではあるが、中世の土器細片が出土しており、中世に形成せられたものと判断することができる。なおI-Jの深く抉ぐられた擾乱層も堤防工事によるものである。以上のI~IV層は、場所によってかなりのばらつきが見られ、不安定な層序を形成していると言わなければならない。しかしながらこの現象は、すでに述べたように本来の堆積状況ではない。

これに対して、V層以下は、各地点ともほぼ安定した水平堆積が見られる。V層は、地点によつて多少の差はあるものの、標高2.6-2.8（TPW）に上面があり、厚さ60-100cmを測るシルト層である。VI層は、砂層で5-20cmの厚さで堆積している。このV・VI層は、全く遺物を含まない無遺物層を形成している。VII層は、灰色砂質土層であり古墳時代の遺物包含量である。VII層の厚さは、調査区北端のA-B地点では10cm未満であるが、他の地点では20cm前後を測る。VIII層は、灰色粘土層で炭化物を含み古墳時代の遺物を多量に包含している。VIII層の堆積については旧地形を復元する上で注目しなければならない現象が見られる。それは、後川に直交する方向で観察したA-B・E-Fのラインについてである。すなわちAとFが川側で、BとEが岸側であるが、川側に向ってVII層が上昇しているのである。ポイントBに対してポイントAは12cm、ポイントEに対してFは16cmそれぞれ高くなっている。この現象は、祭祀遺跡の立地からその性格を導き出すという点において見逃すことのできないことである。IX層も粘土層で、古墳時代の遺物包含層を形成している。最下層のX層も粘土層であるが、無遺物層となつている。X層以下は、部分的に重機で1-2mの深掘りをしたが無遺物層が続いている。

以上I-X層の基本層序の中で、I層以外は全く礫を含まない粘土・砂・シルトによって構成されている。この堆積は、すでに説かれているように洪水に際して四万十川本流からの逆流現象によって沈殿堆積したものであり、逆流型自然堤防を形成する地層と言うことができよう。

古墳時代の遺物包含層は、現地表下1-2mのVII層から始まりIX層まで形成せられ、包含層の厚さは、50-60cmを測る。VI層から中世の遺物包含層（IV層）までの無遺物層の厚さもほぼ60cm前後である。このことは、古墳時代における堆積は、それ以降中世-現代に至るまでの堆積よりも、速度がかなり速かったということが出来る。このことは、当地の自然環境を復元する上でも貴重な資料となるであろう。

(3) 遺構

今次調査では、VII・IX層から調査区全面から多量の遺物が出土したが、明確な遺構として認められたものは、調査区北部のS F 3と調査区南端のS F 12だけである。しかしながら、遺物

の出土状況を詳細に観察すると、当時の地表面に遺物が集中して置かれ、しかも原位置を動いていない状況を呈するところが何箇所か確認された。これらの遺物集中出土地点は、何ら遺構に伴ったものではないが、その性格から考えて、祭祀行為の行われた跡と把えることができる。したがってこれらの集中地点に S F のナンバーをつけ、祭祀跡として以下記述を行う。

① S F 1 (第8図)

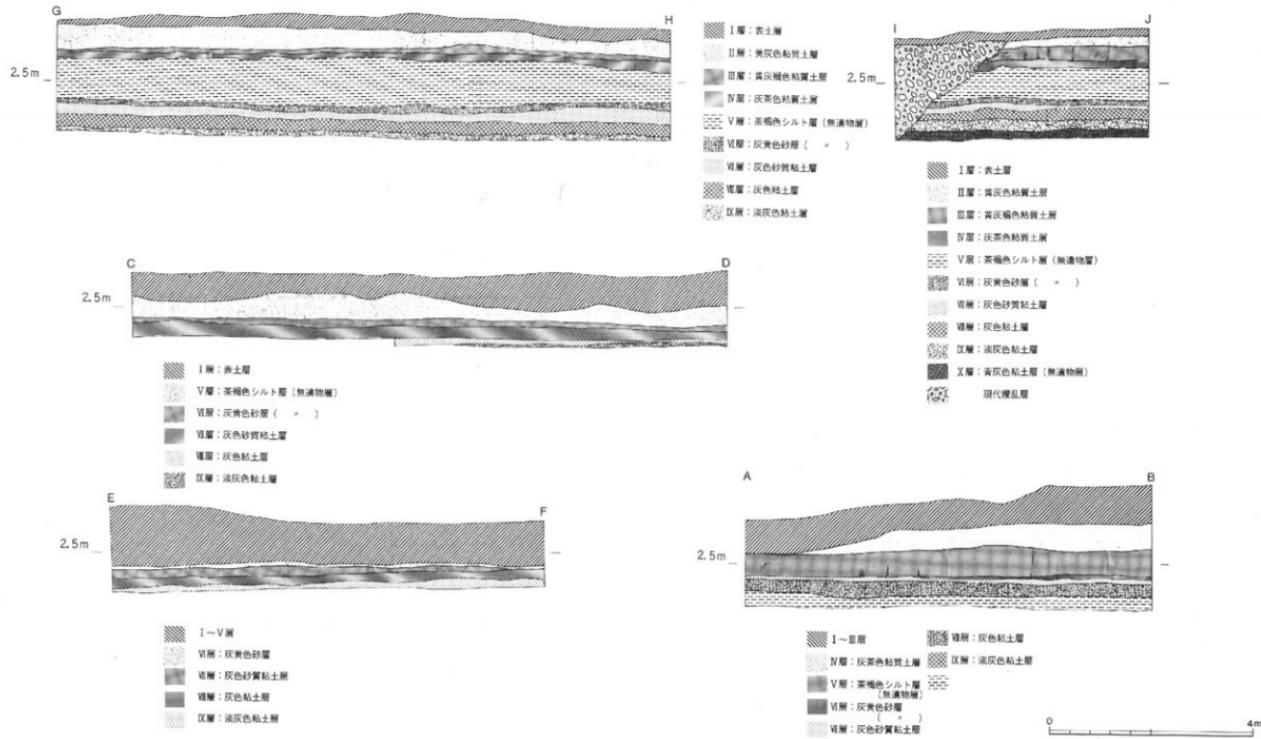
調査区の北部に位置し、遺物はすべてⅩ層中から出土している。0.8×1mの範囲から手捏土器26点(168・175・177・179・182・195・196・198・199・201・203・207・223)等が出土している。これらの手捏土器と共に1~3cm大の円礫が数点散在して出土している。手捏土器は、口縁部を上または横にして出土しており、口縁部が下向いているものはない。一緒に出土した小円礫は、自然堆積の中には全く認められないものであり、手捏土器と共に祭祀に供せられたものである。しかし手捏土器の中に小円礫が入っていたものは見られない。

② S F 2 (付図1)

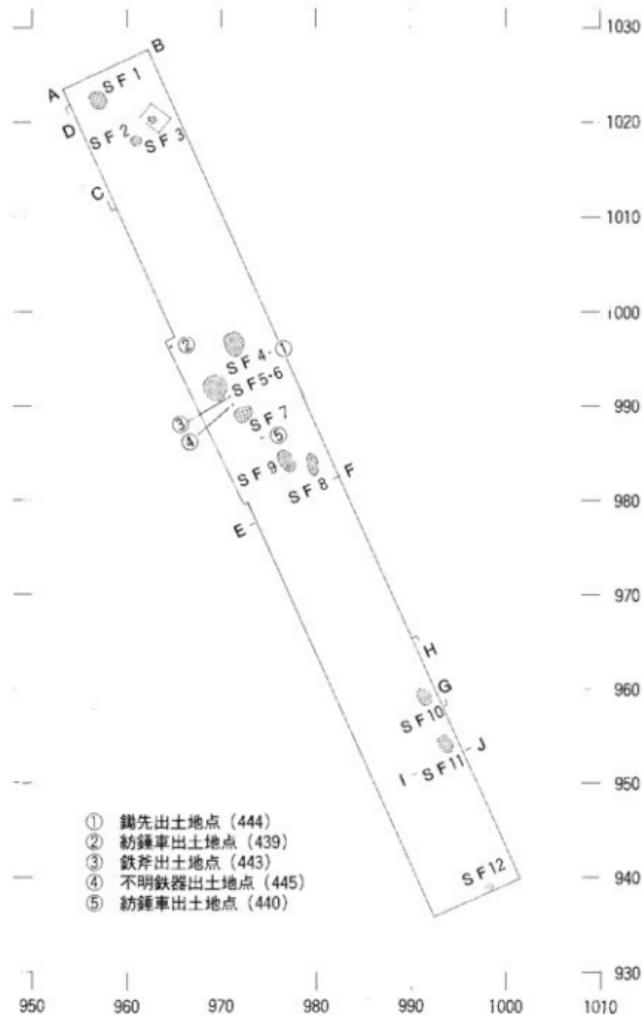
S F 1 の南約8mの地点に位置し、遺物はⅩ層中から出土している。手捏土器、土師器碗・壺底部、須恵器杯及び小円礫から構成されている。出土の範囲は、2×2.5mの中におさまる。手捏土器は10点(142・143・149・150・152・156・178・180・181)等出土し、すべて口縁部を上または横にしている。須恵器杯身は2点出土している。1点(312)は完形品であるが、他の1点は破片であり土師器碗の上に載っており、しかも、出土レベルが他の一群の土器よりも5cmほど浮いているため、S F 2 に伴うものとは考え難い。したがってS F 2 に伴う須恵器は、312の1点のみである。土師器壺底部は、S F 2 の南端から出土しており、底部内面に6個の小円礫が入れられている。また小円礫は、壺底部に入れられていたもの以外に32点が、土器の周辺から出土している。なおS F 2 は、位置的な関係から次に述べるS F 3 と関連を有する可能性がある。以上の遺物群の出土レベルは、標高1.80~1.84mの間におさまる。

③ S F 3 (付図1・第6図)

S F 3 は、S F 2 の2.2m東に位置するもので、今次調査では、数少ない遺構に伴うものである。Ⅹ層中に4本の柱を打ち込み、方形に開いた中に手捏土器が集中的に置かれたものである。四隅に打ち込まれた柱の西北隅のものをNo. 1とし、以下時計まわりにNo. 2~4とした。No. 1の柱は、長さ34.0cm、最大幅16.0cm、No. 2は長さ64.0cm、最大幅18.0cm、No. 3は長さ64.0cm、最大幅18.4cm、No. 4は長さ40.0cm、最大幅20.0cmを測る。各柱共に根元部分に最大径を有し、上部はすべて風化によって磨耗しており、その本来の長さを知ることはできない。ただ風化の状況から考えて、Ⅹ層上面が地表面であったときに打ち込まれたものと考えができる。これらに使用されている柱は、自然の丸木ではなく、かなりの径を有する木を縦に割裂したものを使っている。各柱とも掘り方を見るべく第6図のように半截し精査したが、その跡を検出することはできなかった。従ってこれらの柱は、掘り方を掘って埋められたのではない。また、柱の材質はすべて桧である。



第4図 調査区セクション図



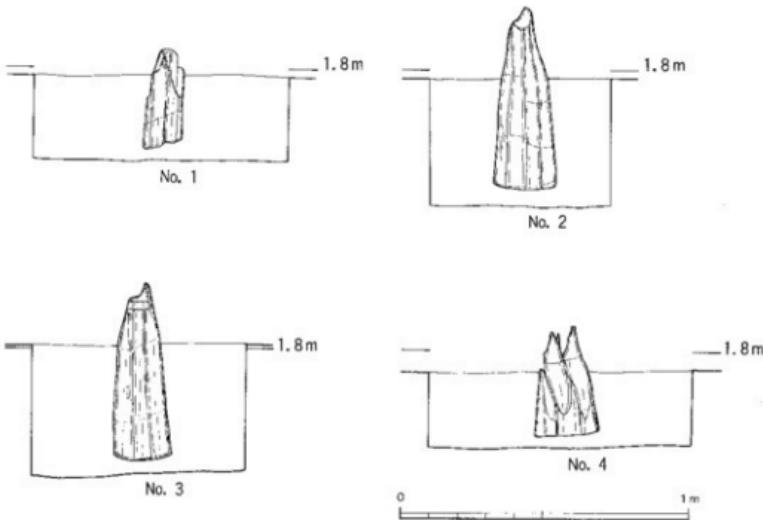
第5図 古津賀遺跡S区祭祀跡配置図

これらの柱の間隔は、No. 1 - 2 が2.01m, No. 2 - 3 が2.72m, No. 3 - 4 が1.83m, No. 4 - 1 が2.50mを測る。長軸の方向はほぼ北を示している。

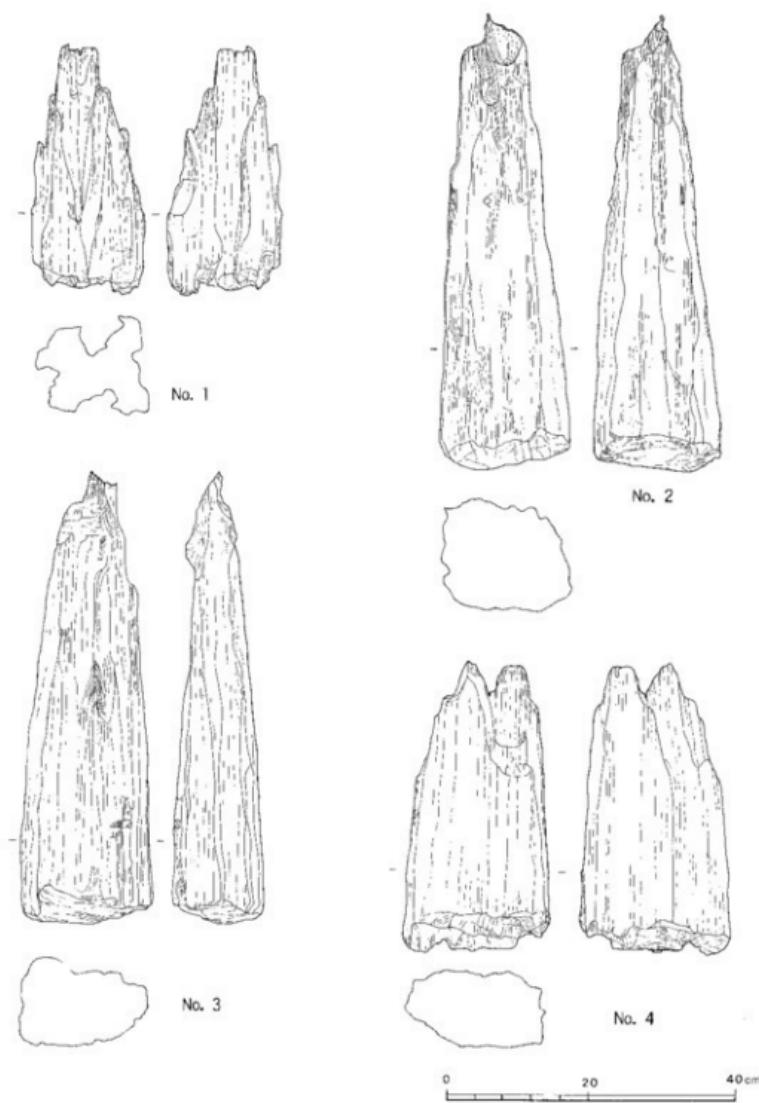
手捏土器を中心とする遺物の集中地点は、方形に開まれた空間の中にありNo. 1 とNo. 4 のラインのはば中央部寄りにあり、60×65cmの範囲内に納まる。手捏土器は11点（153～155・157～160・162）等が出土している。これらのうち153・197など4点は口縁部を完全に下にした状態で検出され、他の手捏土器は、口縁部を上または横にしていた。これらの土器と共に4点の小円碟が出土した。小円碟は、他の祭祀遺跡に見られるような「玉石を敷く」というような状況ではなく手捏土器と共に置かれている状況にある。小円碟と手捏土器のレベルは、標高1.79～1.84mの間にござり、多くは1.83～1.84mの間にある。このレベルは、柱が打ち込まれた旧地表面と同じか2～3cm高い位置にある。またS F 2 の遺物群とは、ほぼ同じレベルに位置している。

④ S F 4 (付図2)

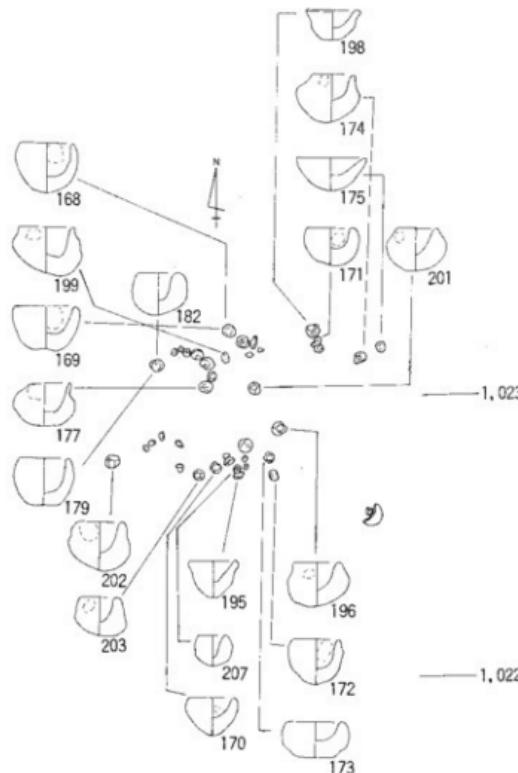
S F 4 は、S F 2 の南23mの地点に位置する。遺物は、須恵器壺(381)・壺(368)・杯蓋(324)・土師器壺(27・42・43・47・78・79)などによって構成されており、土師器壺が5個体分あり最も多くを占めている。これらの遺物は、すべて埴層中より出土しており、その範囲は1.8×1.5mの中におさまる。3点の須恵器は、遺物群の西端に位置しており、壺(381)は、押しつ



第6図 S F 3 柱半截図



第7図 S F 3柱実測図



ぶされたような状況で細かく破碎していた。しかし各破片は、原位置を留めておりほぼ完形に復元することができた。壺（368）は、長頸壺の口頭部であるが胴部以下は発見することができなかった。土師器壺の（27・43）は、遺物群の中央部分にあり、（47・78）は東端部に、（42）は、須恵器杯蓋（324）の裏から出土している。これらの土器の中に20~30cm大の河原石が数個置かれていた。これらの河原石は、自然の堆積の中にあるものではなく明らかに意図的に置かれたものである。

またこれらの遺物群は、F 1~3のようにいわゆる祭祀遺物によって構成されているものではなく日常的に使用せられる土器のみで構成されている。須恵器壺のところで触れたように、これらの土器は、こまかく破れた状況で検出されたが、図示しているように相近接する破片で復元することが可能であり、ほとんど原位置を動いていないと判断することができる。

⑤ S F 5（付図2）

S F 5は、S F 4の4m西南に位置する。多量の須恵器と少量の土師器を用いた祭祀跡を示すものであり、遺物の集中出土範囲として把握できるのは4×4m前後である。すべて埋層中よりの出土である。出土遺物中最も多かったのは、須恵器杯身であり12点（285・292・294~298・300・317・322・328・331）を数える。次いで須恵器蓋が10点（247・248・260・261・264・268・270・272・273・333）、須恵器壺は6点（366・371・376・377・379・390）、須恵器高杯1点（349）提瓶1点（389）が出土している。一方土師器は、壺4点（11・53・56・60）、瓶2点（101・104）が出土している。この他用途不明の鉄器（445）1点と、砥石（430）や叩石（393・411~413）、用途不明石器が出土している。

次にこれらの遺物の出土状況について見ると、土器群の中心に大型壺（371）があり、その両脇に小型壺（376・377）が置かれている。須恵器杯類は、この壺の周囲に配せられているものが多いが、（247・260・270・297）及び（248・272）は、中心部から出土している。そして前者は、大型壺（371）の中に入っていたものと考えられる。提瓶（389）も同様の可能性がある。須恵器杯類は、S F 10で後述するように、二重三重に重なりあって出土しているものはない。また、中に小円襍の入っている例も見られない。土師器は、壺（56・60）と瓶（104）が南端から、壺（11）が東から、壺（53）と瓶（101）が北隅から出土している。

これらの土器群は、S F 4と同様にかなり細かく破碎しているが、原位置で押しつぶされたような状況を呈しており、ほとんど動いていないものと考えられる。S F 5の祭祀も、いわゆる祭祀遺物を含まない日常的な土器を利用しての祭祀行為である。また、土器群東端には、炭化物が、長さ90cm、幅15~30cmの面的な広がりを有している。しかしながら、周辺の土や土器に焼け跡を認めるることはできない。土師器壺には、煤の付着している例も多く見られることから、この周辺において火が使用されていたことは確実である。

またS F 5の北には、須恵器杯（246・271・275・329）等、長頸壺（364）、提瓶（392）や土師器壺（30・68）、瓶（99）、椀（119）等が散在している。

⑥ S F 6（付図2）

S F 6 は、S F 5 の東に隣接して存在する祭祀跡である。他例に比して遺物の出土状況が散在的である。須恵器と土師器によって構成され、その範囲は1.5×2.3mの中におさまる。すべて埴輪出土である。須恵器は杯身が6点(263・275・306・316・329・333)、蓋が1点(239)、甕が1点(380)で、土師器は甕が6点(12・45・48・61・66・82)出土している。出土状況としては、土師器甕(12・61・66・82)が南に集中し、須恵器は甕と杯(306・329)が東に集中している。S F 6 も全て日常的な土器が使用されている。

⑦ S F 7 (第9図)

S F 7 は、S F 5 の南2.5mの地点を中心に展開している。S F 7 も他例に比べると散在的で使用せられる遺物も少量である。すべて埴輪で検出されたもので、北と南の2小群からなっている。北の小群は60×60cmの範囲内に須恵器杯2点(243・286)と土師器椀1点(132)・手捏土器1点(146)が出土している。これら4点の土器は、いずれも口縁部を上にしている。南の小群は、須恵器甕1点(375)、杯1点(284)と手捏土器1点(144)が70×55cmの中に集中している。須恵器甕は、ここでも細く破碎しており、杯と手捏土器は、口縁部を上にして完形で出土している。そして杯(284)の中には、白玉が2点(435・436)と小円環が入っていた。また、本例は土師器と須恵器が混在していることも他例と異なる点である。

⑧ S F 8 (第10図)

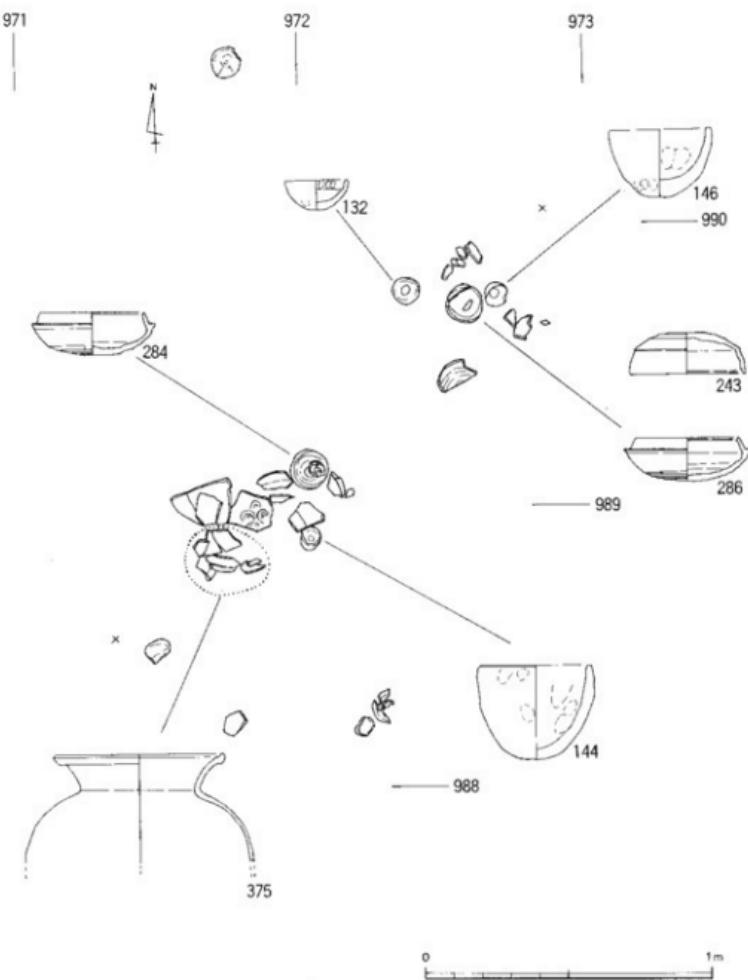
S F 8 は、S F 7 の南5mの地点に南北に長く展開している。遺物は、土師器甕を中心で、手捏土器と須恵器杯蓋が1点ずつ出土している。土師器甕は、(7・10・51・65・69・70)が2mの範囲にはば直線的に並んでいる。(70)と(65)の間にも復元できなかったが1個体分の壺がある。これら1群の甕は、細かに破碎されているが、原位置は動いてないと考えられる。また甕群の中に、須恵器甕の破片が数点入っている。須恵器杯(323)は、甕(7)の25cm西に、手捏土器(204)は、甕(10)の10cm南に位置している。これら的一群とは、1m以上間隔をとつて、須恵器杯と土師器甕底部(76)が出土している。

⑨ S F 9 (第11図)

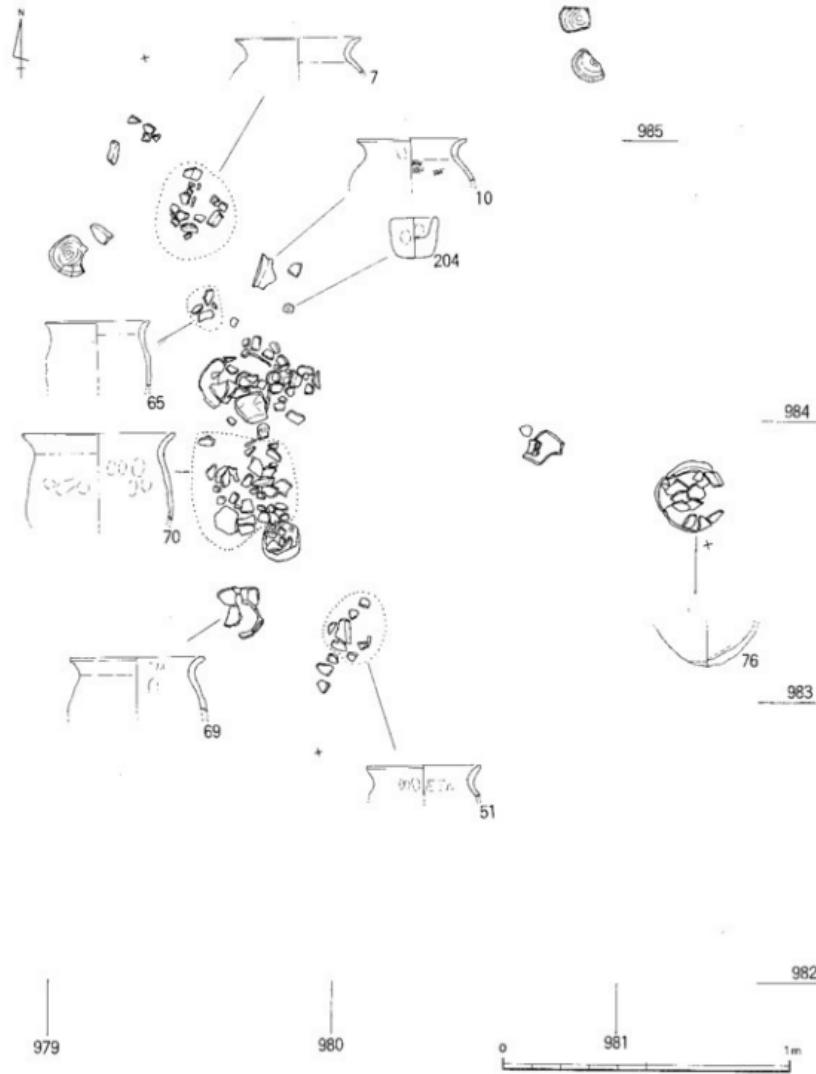
S F 9 は、調査区のはば中央部に位置し、S F 8 の1.5m西に展開している。遺物はすべて埴輪出土で、2×1.2mの空間の中に多量の手捏土器と須恵器甕1点、土師器甕破片2点・勾玉の石製模造品1点、小円環が数点検出された。手捏土器は、図示できたものが39点(148・151・163~167・184~194・200・211~221・225~233)であるが、図示できなかったものや取り上げる段階でくずれたものを加えると50点近くになる。これら手捏土器の出土状況は、秩序だった配置ではなく、散在していると表現した方が良い。そして口縁部を上にしているものが圧倒的に多く、横または下を向いているものは少ない。これに対して甕(357)は、明らかに口縁部を下にして、逆立ちの形で置かれていた。勾玉の石製模造品(441)は、甕の南20cmのところから出土している。

⑩ S F 10 (付図3)

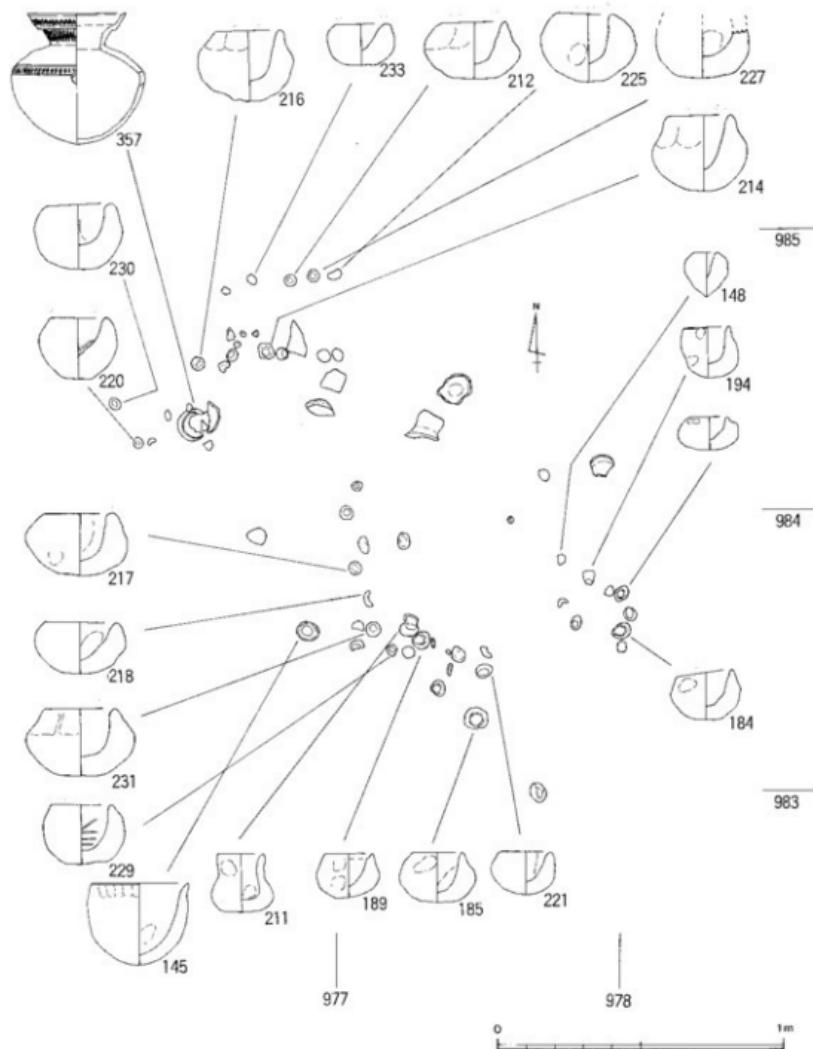
S F 10 は、S F 9 の南25mの地点に展開している。3×2.5mの空間に須恵器杯・甕・高杯、



第9図 S F 7遺物出土状態



第10図 SF 8 遺物出土状態



第11図 S F 9 遺物出土状態

土師器壺・椀などが置かれている。すべて壠層出土である。須恵器杯が最も多く22点を占めている。この内杯身が12点（280・287～289・301・303～305・307・308・314・315），杯蓋が9点（240・241・249～253・256・257）である。

出土状況は、大型壺（373）を中心にして、須恵器高杯（345）・小型壺（382）や先述の杯が周辺に配される。杯では、身（315）の上に身（305）が重なり、更にその上に蓋（251）が被さっていた。また身（303）の上に蓋（252）が被さっていた。蓋（252）を開けると身（303）の中から8点の小円碟がつまっていた。この他杯内に碟が入れられていたものは、（240・241・257・287～289）が存在する。大壺は細く破碎しているが、高杯・杯はほとんど完形で出土している。

土師器は、壺2個体分（18・58・81）が、大型壺の東側に接するようにして出土している。これらの壺のうち（58）は、外面下脇部が煤けている。この他壺（34）は大型壺より1.5m西で、椀（114）と脚付椀（131）は、須恵器杯（241・280）と共に出土している。本例の遺物もほとんど原位置を動いていないと考えることができる。またS F 10も、いわゆる祭祀遺物は用いず高杯を除けば日常的な什器によって構成されている。

⑪ S F 11（付図3）

S F 11は、S F 10の4.5m南に展開している。すべて壠層出土で、 $2.5 \times 1.5\text{m}$ の範囲におさまっている。土師器・手捏土器・土製模造品によって構成されており須恵器は1点も含まれない。土師器は、壺4個体分（40・83・91）等・壺2個体分（3・5・6）・椀7個体分（115～118・120・121）等、手捏土器10個体以上（176・205・206・208～210・224）等である。土製模造品は、鏡を模したもので3点（236～238）が出土している。壺の中には数個の角碟が入れられているものもある。2個体の壺は、外面に丹が塗られている。また、手捏土器と土製模造鏡は、一地点から集中して出土している。

⑫ S F 12

S F 12は、調査区南端に位置する。長さ110cm、基部幅10.3cmの柱を斜めに立てている。柱は、桧材で基部が最も大きく、先端に行くにしたがって細くなっている。Ⅷ層上面から掘り込んだ径30cmの掘り方が明瞭に認められ、掘り方も柱の角度と平行するように斜めに掘られている。Ⅹ層直上からは2個の手捏土器と壺の把手が出土している。前者は柱が埋められた後に置かれたものと思われる。

(4) 遺 物

古津賀遺跡からの出土遺物は、Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ層から土師器・須恵器を中心に土製模造品・紡錘車・白玉・石器・鉄器等が見られ、その量はコンテナケース約100箱を数える。以下各種類別に説明を行ふ。



S F 12 裁割図

① 土師器

土師器は、須恵器と共に出土量の最も多くを占めるものである。器種は、壺・甕・榠・高杯・瓶で、甕が最も多く出土している。以下各器種別に分類を行い諸特徴等について記述する。また各器種の点数については、口縁部片を数えたものである。

(a) 壺

口縁部の特徴から2つに分けることができる。

A類：短頸で、外方に立ち上がる口頭部を有するもの。(第12図-1~3)

B類：長頸で、ほとんど直線的に外方に立ち上がる。(第12図-4~5)

(b) 甕

全体のプロポーションからA・B・C類に大別した上で、肩部の形態や内外面の調整技法によって細分する。

大分類

A類：最大頭が胴部にある。なかには胴部径が、口縁径の1.5倍ぐらいのものもある。II・III類に比して口縁部が短いものが多い。

B類：最大径が口縁部にあり絶じて長胴をなすもの。

C類：胴部径が口縁部を少し上まわるか、ほぼ口径と同じ大きさのもの。

細分

A類

(i) 肩部の形態

I：一旦肩が強く張り出して胴部に移行し、最大径が胴部中位～上胴部にあるもの。

II：頸部からゆるやかなカーブを描いて胴部に向って下降する。最大径が胴部中位～下胴部にあるもの。

(ii) 外面の調整

④指ナデによる調整。

⑤ハケ原体による調整。

(iii) 内面の調整

①指ナデによる調整。

②ハケ原体による調整。

③ヘラ削りによる調整。

④ヘラによるナデ調整。

B類

(i) 外面の調整

④指ナデによる調整。

⑤ハケ原体による調整。

第3表 甕 I類細分表

分類	図版No	全体数	%
A-I-(a)-(1)	7, 8, 11, 13, 14~18, 22, 58	202	70.0
A-I-(a)-(2)	10	1	0.3
A-I-(a)-(3)	1	1	0.3
A-I-(a)-(4)	9	1	0.3
A-I-(b)-(1)	20, 21	2	0.6
A-I-(b)-(2)	12	1	0.3
A-I-(b)-(3)	23	1	0.3
A-II-(a)-(1)	25~29, 31~38, 40	76	26.0
A-II-(a)-(3)	30	1	0.3
A-II-(b)-(1)	19, 39	2	0.6
		計	288 99.0

(ii) 内面の調整

- ①指ナデによる調整。
- ②ハケ原体による調整。
- ③ヘラ削りによる調整。
- ④ヘラによるナデ調整。

Ⅲ類

(i) 外面の調整

- ①指ナデによる調整。
- ⑥ハケ原体による調整。
- (ii) 内面の調整
- ①指ナデによる調整。
- ②ハケ原体による調整。

(c) 槌

法量や器型によって A～D 類に大別した上で、A・B・D 類は底部や口縁部の形態・調整によって細分できる。

- A 類：口径15cm以上、器高8cm以上を測る大型のもので、底部はすべて丸底である。II・III 類に比して胎土に砂粒の混入が多いもの。
- B 類：口径10cm以上15cm未満で、器高5～6cm前後を測る。I 類に比して胎土には砂粒の混入が少ない。

C 類：脚付のもの。

D 類：口径が10cm未満のもの。

細分

A 類

- Ⓐ：口縁部が内湾気味に立ち上がるるもの。
- Ⓑ：口縁部が外方に開いたまま終るもの。

B 類

(i) 底部の形態

I：丸底

II：平底

(ii) 口縁部の形態

- Ⓐ：内湾気味に立ち上がるもの。

第4表 壺Ⅱ類細分表

分類	図版 No	全体数	%
B-Ⓐ-①	41～48	57	95.0
B-Ⓑ-①		3	5.0
		計 60	100.0

第5表 壺Ⅲ類細分表

分類	図版 No	全体数	%
C-Ⓐ-①	49, 51～57, 59, 61～70, 73	87	94.6
C-Ⓐ-②	50, 72	3	3.2
C-Ⓑ-①	60, 71	2	2.2
		計 92	100.0

第6表 槌分類表

分類	図版 No	全体数	%
A-Ⓐ	112	1	0.97
A-Ⓑ	111	1	0.97
B-I-Ⓐ-①	113～116	4	3.9
B-I-Ⓐ-②	110, 117～119, 121～123	76	73.7
B-I-Ⓑ-①		3	2.9
B-I-Ⓑ-②	120, 124	3	2.9
B-I-C-①		3	2.9
B-II-Ⓐ-①		1	0.97
B-II-Ⓐ-②	127, 128, 130	6	5.8
B-II-Ⓑ-②	125, 126	2	1.9
C	131	1	0.97
D-I-Ⓐ-③	132	1	0.97
D-II-Ⓐ-②	129	1	0.97
		計 103	99.82

⑥強く内湾するもの。

⑦外反するもの。

(iii) 口縁部の調整

①ハケ調整の見られるもの。

②ナデ調整によるもの。

③指頭圧痕の残るもの。

D類

(i) 底部の形態

I : 丸底

II : 平底

(ii) 口縁部の調整

②ナデ調整によるもの。

③指頭圧痕の残るもの。

(d) 高杯

A - I類：杯底部から明瞭な段をなして立ち上がり、口縁部が外反するもの。脚部は下半
がハ字状に開く。

A - II類：杯底部からの立ち上がりが、明瞭な段をなさずに凹状の窪みを呈し、口縁部が
外反するもの。脚部は下半がハ字状に開く。

B - I類：椀状の杯部を呈し、口縁部がわずかに外反する。脚部はI類に比して短く笠状
を呈す。

B - II類：椀状の杯部を呈し、口縁部が内湾しておわるもの。脚部はII - A類と同じ。

(e) 瓶

瓶は、口縁部と底部とを同一個体で確認できる資料が少ないために、口縁部と底部とを別
個に分類することにする。

口縁部

A類：直立しておわるもの。

B類：外反するもの。

底部

A類：底部が、径5~7cmの
筒状を呈するもので、
脇に径1cm未満の小孔
を焼成前に穿つ。

B類：底部が、筒状をなさずに数個の小孔を焼成前に穿ったもの。

以上土器器各種の分類を行った。各器種の組成は、表-9のとおりであり、甕が73.1% (440

第7表 高杯分類表

分類	図 版 No	全体数	%
A - I	133	11	42.3
A - II	134~137	13	50.0
B - I	138	1	3.8
B - II	141	1	3.8
		計 26	99.9

第8表 瓶分類表

分類	図 版 No	全体数	%
口 縁 部	A 99~101, 103	38	65.5
	B 106~109	20	34.5
底 部		計 58	100.0
	A 102, 104, 105	27	96.4
	B	1	3.6
		計 28	100.0

点)で最も多くを占めている。次いで壺17.1% (103点)・瓶4.7% (28点)・高杯4.3% (26点)・甌0.8% (5点)となっている。以下分類で表わせなかつ細かな特徴等について若干の考察を加える。

〈壺〉

壺は、A～C類に大別し更に肩部の特徴や調整技法によって細分を行った。大分類の比率は、A類65.4% (288点)、B類13.6% (60点)、C類20.9% (92点)で、A類が最も多い。このA類中では、肩部の張るI類が70% (209点)を占めている。A～Iは、壺全体の中でも47.5%を占めている。当遺跡の壺の主流を占めるものであり、同時に型態的な特徴をなすものである。調整技法では、全体を通して内外面とも指ナデ調整によるものが圧倒的に多く98%以上を占める。内面ヘラ削りを有するものは、(23・30)等細片を含めて3例を数えるにすぎない。(23)は内面胴部下半に見られ、幅1.5cm前後の原体で下→上に施す。(30)は下胴部から頸部内面にまで同様の手法・原体で施している。また頸部屈曲部内面には、(26・51・69)等に見られるように一見横方向のヘラ削りを思わせる手法が見られる。すなわち幅0.5～0.7cmの原体で強く押しあて横方向にナデたものである。ハケ調整は原体の単位を明らかにできる例はないが、例外なく胴部外面は縱方向、胴部内面は横方向に施される。

次に成形技法について観察できたことについて述べると、胴部の成形は幅1.5～2cmの粘土紐積み上げによるものであり、すべて内傾接合を成している。この成形痕は、土器壁面(27・34・47)等や胴部内面(34・36・39)等で容易に觀ることができる。このようにして作られた胴部に浅くて厚い椀状の底部を接合している。つまり胴部と底部は別個に作られ接合によって仕上げている。(48・77・90・94)等は、底部と胴部の境が凹みをなしているが、これは接合による成形痕をとどめるものである。口縁部は外傾接合で上胴部に接合せられることが(23・27・34)等によってわかる。以上のべた壺は、器表の内外面に凹凸が激しく著しくいびつな形である。焼成については、例外なく茶褐色に発色しており、(45・46)には底部外面付近に黒斑が見られる。また(84)の底部外面には3箇所に楕円痕が認められる。

使用法について見ると、約3割が二次的な火を受けて変色あるいは煤が付着している。煤が付着するものの中で、(20・22・37)などは胴部外面にのみ5～9cm幅で帯状に煤けているものがあり、今後使用法を考える上で注目すべき現象である。

〈椀〉

椀は壺に次いで多い器種である。A～D類に大類したが、B類が最も多く約95% (98点)を占め、他の類は1～2%未満である。底部は丸底が90%以上で、口縁部の形態は、内湾または強く内湾する④・⑤類が97%を占め、外反する⑥類はB類中に3例を数えるのみである。器面調整は、ナデ調整が90%で主流を占めている。ハケ調整や指頭圧痕が残るものも少量あるが、ヘラ磨きを施すものは1点も見られない。C類の(131)は、全面に丹が塗られている。その

第9表 土器器組成

器種	点数	%
壺	5	0.8
甌	440	73.1
碗	103	17.1
高杯	26	4.3
瓶	28	4.7
計	602	100.0

他椀の注目すべき点を挙げると、(110) の底部外面に「メ」のヘラ記号があり、(130) の底部外面には木葉の圧痕が見られる。また (119) の外面には、煤が付着している。

〈瓶〉

瓶は、28点 (4.7%) を数え、土師器中に占める割合は少ない。口縁部・底部共に A 類が多くを占めている。把手は角状を呈するものが、21点出土している。しかし胴部と一体となって把握した例はなく、すべて把手のみが分離して出土している。これらの把手はすべて、本体胴部に挿入するように作られている。A 類の底部は、他の部位に比して肥厚し外面に指頭圧痕が残っている。成形技法は甕と同じく粘土帶を内傾接合で積み上げており、(101・103) 等の壁面で接合痕を確認することができる。瓶の胎土には他の器種に比して砂粒が著しく多量に入っており、また器面調整を確認できるものはない。

〈高杯〉

高杯は、4.3% (26点) で土師器に占める割合は少ない。A 類が多く、B 類は 2 例にすぎない。A 類では、杯部立ち上りで明瞭な稜をなす A-I 類が 11 点、明瞭な稜をなさない A-II 類が 13 点である。I と II の型態差は、成形手法の差に起因することが考えられる。すなわち、I は杯底部端の横に立ち上り部を接合するのに対して、II は底部端の上に立ち上り部を接合している。これは、(133・134) 等によって観察することができる。A 類杯部の口唇部は、すべて丸くおさめており面取るものはない。また (133) の脚部はわずかに中脹れするが、他はそのまま裾に移行する。裾部内面は、水平な面をなして面上に地に接するものではなく端部のみが接する。脚部内は、(133) がヘラ削り (左→右) を比較的丁寧に施しているが、他はほとんどヘラ削りを施さず成形の際に生じたしぼり目が残るものもある。他の調整は、ハケ調整がわずかにみられる他はすべてナデ調整であり、ヘラ磨きは確かめられない。II 類杯部の型態が I・II の 2 つに分かれるが、脚部は共通しており内面は A 類に比してより明瞭なヘラ削り (右→左) を施している。

高杯の形成技法は、A・B 類共杯部と脚部を別個に作っておいて、脚端部を杯底部に挿入する方法をとっている。

〈壺〉

壺は 6 点出土しているが、5 と 6 は同一個体の可能性が強い。土師器の中では最も出土量が少ない。頸部の長・短によって 2 つに分けることができた。両者共に他の器種に比して精選された胎土を使っており、丁寧なナデ調整によって仕上げられているがヘラ磨きを施した可能性もある。またこれら 6 点は、すべて丹塗りが施されている。5・6 の器壁に接合痕が見られるが、幅狭い粘土帶を内傾接合で成形していることがわかる。

② 手捏土器

手捏土器は合計 258 点出土している。法量と器型によって A-D 類に大別をし、その中の諸特徴を捉えて細分をすることができる。

A 類：口径 5.0cm 以上を測る大型のもので、個々の型態はさまざまである。

B類：器高2.5～5.0cmのもの。

C類：器高2.5cm未満のもの。

D類：実用の壺・壺等を模したいわゆるミニチュア土器。

細分

A類

(i) 形 態

I：丸底のもの。

II：平底のもの。

(ii) 胎 土

④胎土中に砂粒を多く含むもの。

⑤精選された胎土で砂粒を含まないもの。

B類

(i) 形 態

I：丸底

II：平底

(ii) 胎 土

④胎土中に砂粒を多く含む。

⑤精選された胎土で砂粒を含まない。

(iii) 成形手法

①口縁部を強くおさえる。

②口縁部をつまない。

③粘土塊に指を突っ込んだだけ

のもの。

C類

(i) 形 態 B類に同じ

(ii) 胎 土 B類に同じ

(iii) 成形手法 B類に同じ

D類

(i) 形 態

I：壺を模したもの。(235)

II：壺を模したもの。(211)

第10表 手捏土器I類細分表

型態	図版	No	全体数(点)	%
A-I-(a)	142~146		12	13.2
A-I-(b)			0	
A-II-(a)			28	30.8
A-II-(b)	234		51	56.0
			計 91点	100.0

第11表 手捏土器II類細分表

型態	図版	No	全体数(点)	%
B-I-(a)-(1)	165, 227		5	3.3
B-I-(a)-(2)	147, 149, 151		10	6.6
B-I-(a)-(3)	148		3	2.0
B-I-(b)-(1)	174, 177, 183~196 198~203, 212~216, 231		33	22.0
B-I-(b)-(2)	150, 152, 154~156 158, 161~164 166~173, 175, 176, 180~182 197, 201, 217~226 228~230		53	35.3
B-II-(a)-(1)			1	0.7
B-II-(a)-(2)			7	4.6
B-II-(b)-(1)	234		6	4.0
B-II-(b)-(2)	153, 157, 159, 160 179, 204		32	21.3
			計 150点	99.8

第12表 手捏土器III類細分表

型態	図版	No	全体数(点)	%
C-I-(a)-(3)	208~210		3	17.6
C-I-(b)-(1)	207		1	5.9
C-I-(b)-(2)			2	11.7
C-I-(b)-(3)	205, 206, 232 233		6	35.3
C-II-(b)-(2)			5	29.4
			計 17点	99.9

手捏土器で最も多かったのは、大分類のB類で全体の半分以上（150点、57.7%）を占め、B類の中では、B-I-⑥-②が35.3%（53点）で最も多い。これは手捏土器全体の中でも2割を占めるものである。底部の形態では、I（丸底）：II（平底）の比率がA類で13.2%：86.8%，B類で69.3%：30.7%，C類で70%：30%となり、B・C類は、丸底が圧倒的に多いのに対してA類は逆に平底が多くなっている。次に胎土では、⑤：⑥の比率がA類で44%：56%，B類で17.2%：82.8%，C類で17.6%：84.4%となり、全体を通して⑥が多いが、II・III類は8割以上を占めている。成形手法は、B類では②が最も多く67.8%を占め、①が30%，③が最も少なく2%であるのに対して、C類では③が52.9%，②が41.1%，①が5.9%となり、最も小型のC類に多い。したがって③の手法は手捏土器の大きさに規定される傾向が認められる。また、A-II-⑥類の（234）は、内面に底部から口縁部に向って指頭で強く粘土を掻き取っている。

③ 土製模造品

3点出土しておりすべて土製模造鏡である。（236）は径4.0cm・高さ1.6cm以上、（237）は径4.5cm・高さ3.3cm、（238）は径4.7cm・高さ2.5cm以上を測る。鏡は半環状をなすまで粘土を摘まみ上げて山形にしたものであるが、どれも鏡面径に比して鏡が大きい。外面は丁寧にナデて仕上げているが、裏面及び鏡は指頭圧痕が顕著に見られる。
（出原）

④ 須恵器

古墳時代後期の須恵器が多量に出土した。器種としては、杯（蓋・身）・高杯（有蓋・無蓋）・魁・壺（長頸・短頸）・甕・提瓶がみられ、器台等のその他の器種は出土しなかった。これらの須恵器は灰色又は青灰色の粘土から出土し、摩耗はなく完形品の占める割合が高かった。出土状態としては、同一層中に型式的に数時期に分類される須恵器が混在した状況で検出されており、必ずしも層位的に得られたわけではない。しかし、平面的な分布としては、同一時期に分類される須恵器が、単独又は土師器・手捏土器・石製模造品等と共に出土する集中地点がみられ、遺物廃棄時の痕跡が遺存していた。この集中地点は、祭祀行為の痕跡を示す遺構（祭祀跡）であると推察され、出土した須恵器は祭祀に使用された後に廃棄された日常容器類として捉えることができる。

須恵器の形態としては、古墳時代後期前半（5世紀末～6世紀初頭）から後期後半（6世紀後半～7世紀初頭）にわたる約百年間のなかで把握される須恵器が出土している。集中地点から一括して得られた資料等を基に、各器種について形態・手法の特徴から分類を行えば以下のとおりである。

杯（蓋）（第29～31図 239～274）

A類（第29図 239～245）

天井部と口縁部の境に稜をもつが、稜は短く鋭さはない。口縁部は比較的高く、口縁端部に段を有する。器高は口径に対して低く、天井部は平らである。

B類（第29・30図 246～259）

一条の沈線を回らすことによって、形骸化した稜を付す。口径に対して器高は低く、扁平な印象を与える。天井部内面に、同心円又は円弧の叩きがスタンプされているものがある。

C類（第30図 260・261）

天井部は丸みをもち、天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部内面に段を有する。

D類（第30図 262～266）

全体的に丸みを帯び、口縁端部は丸く仕上げられている。天井部外面の回転ヘラ削り調整は少々以下である。

E類（第30・31図 267～274）

天井部は低く平らで、口径の小型化したものがみられる。天井部上面に、回転ヘラ切り未調整のものが多くみられ、全体的に粗雑化している。

杯（身）（第31～34図 275～337）

A類（第31図 277）

たちあがりが高く、口縁端部は平坦な面をもつ。受部は外上方へ長くのび、端部は丸味を帶びている。

B類（第31図 275・276）

受部は外上方へのびるが、A類に比べて短い。口縁端部は、凹面をもって内傾する。

C類（第31図 278～281）

たちあがりは低く、内湾している。口縁端部内面に段をもつ。外底面は丸みをもつ。

D類（第31・32図 282～291）

A～C類に比べて大型化している。たちあがりは、内湾気味に低くたちあがっている。口縁端部に段をもつものと、もたないものがみられる。底体部は浅く、扁平である。

E類（第32・33図 292～309）

たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げられている。受部内面に、沈線が施されている例が多い。口径に比べて器高は低く、底体部は浅い。底部の $\frac{1}{2}$ 前後に、回転ヘラ削り調整が施されている。

F類（第33図 310～315）

口縁端部、受部端部とともに丸く仕上げられている。回転ヘラ削り調整の範囲は $\frac{1}{2}$ 前後で、底体部はやや丸味を帶びている。

G類（第33・34図 316～328）

たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げられている。底体部は丸く、安定性を欠いている。口径に対して器高は低く、たちあがりは、受部端上面より上方であるものの、E・F類に比べて長さは短い。

H類（第34図 329～337）

器高は低く扁平であり、たちあがりは短く内傾する。底部に、回転ヘラ切り未調整のものが

みられ、全体的に粗雑化している。(330) は、口縁端部をわずかに内傾させたもので、(329・331～337) に比べて後出の感を与える。

以上、杯については、蓋が5類、身が8類に大別することができる。出土資料のなかで蓋について、A類20%、B類35%、C類6%、D類15%、E類24%で、特にA・B類の出土点数が多い。また、身については、A類1%、B類3%、C類6%、D類16%、E類29%、F類10%、G類20%、H類15%で、E・G類の出土が目立った。

集中地点から出土した資料のなかで、(247・251・252・297・303・305) は蓋と身がセットになって出土し、また、(241・247・251・252・256・257・280・287～289・297・301・303・305・307) は近接して出土した。

遺物の出土状況から、蓋A類と身C・D類、蓋B類と身E類は同時期に使用されたものと考えられる。

なお、蓋D類と身G類、蓋E類と身H類についても、集中地点から一括して出土した例や同時件出した例などから、同時期又は極めて近接した時期に使用されたものであると考える。

高杯（第35・36図 338～356）

A類（第35図 343）

脚部の破片で、器高の低い有蓋高杯である。長方形の透し窓をもち、体部外面に回転クシナデ調整の痕跡がみられる。

B類（第35図 344）

外反する口縁体部をもち、外面に2条の凸線がみられる。脚部は高く、長方形一段の透し窓が三方向に施される。

C類（第35図 338・345）

(338) は、有蓋高杯に伴う蓋で、扁平なつまみを施し、口縁部内面には内傾する段をもつ。(345) は、無蓋高杯で、外反する口縁体部をもち、外面に波状文をもつ。脚部は高く、長方形二段の透し窓が三方向に施され、外面に回転クシナデ調整が施されている。

D類（第35図 339～342・346～348）

(339～342) は、有蓋高杯の蓋である。口縁端部は丸みをもつ。(346～348) は、外反する口縁体部をもつもので、(346) には波状文が施されている。C類に比べてシャープさはない。

E類（第35図 349～351）

口縁体部と脚部の破片である。(351) は太く短い脚をもち、透し窓を有する。

F類（第35・36図 352～356）

(352・353) は、長い脚部をもつもので、二段三方向の透し窓をもつ。(354～356) は、短く太い脚部を有するもので、(354) には、脚部外面に円孔を施している。(355) は、短く内傾する口縁部をもった杯を有している。

高杯については、全体としてF～H類の出土が高い。なお、C類（345）は、杯蓋B類、身

E類と共に共存して出土した。

甕 (第36図 357・358)

A類 (第36図 357)

大形甕で、口縁部は外反しさらに屈曲させ、口頸部、口縁部に波状文が施されている。体部外面には刺突文による文様帯をもつ。

B類 (第36図 358)

口頸部の基部は細く、ラッパ状に外反する頸部をもつと考えられる。体部最大径は、体部高の半に求められる。体部には文様は施されていない。

壺 (第36・37図 359～369)

A類 (第36図 360)

短頸壺で、口頸部は短く直立し、壺部は丸い。体部外面に回転カキ目調整を施している。

B類 (第36図 359・361)

(359) は、短頸壺の蓋で、天井部は丸味を帯び、口縁部内面に内傾する段を有す。(361) は、やや長く直立した頸部をもち、端部は丸く仕上げられている。底部は丸く、回転ヘラ削り調整が体底部の半に施されている。

C類 (第36・37図 362～366・368)

短頸壺の(363) は、肩にはりの認められるもので、平坦な底部をもつ。(364・368) は長頸壺で、(364) の体部外面には刺突文が施され、透し窓をもつ脚が付されている。(365・366) は、小型の壺の感を与えるもので、口径は小さく、短かく外反して丸くおさまる頸部をもつ。(362) は、内湾気味にたちあがり、端部が丸みをもつもので、広口である。体部下半を欠損している。他の器種である可能性もある。

D類 (第36・37図 367・369)

(367) は、短かく外反し、端部を丸くおさめる頸部をもつ。(369) は、口縁部で外反して広がるもので、長頸壺のなかでも後出の感を与える。

甕 (第37～40図 370～388)

A類 (第38図 370)

口頸部の壺部近くに1条の凸線がめぐり、頸部外面に波状文が施されている。体部外面は、縱方向の細い平行叩き目の上に、横方向の回転カキ目調整が施され、内面はスリケシ調整による丁寧な仕上げがおこなわれている。

B類 (第37図 371・372)

(371) は、口頸部に凸線によって画された波状文による文様帯を有し、最大径を胴部上半にもつ大甕である。外面は平行叩きが、また、内面には同心円・円弧の叩きが施されている。(372) は、口頸部に回転カキ目調整がみられる。

C類 (第37・38図 373～378)

(373・374) は、口頭部に波状文による文様帶をもつ大甕である。(375～378) は、ゆるやかに外反する口頭部をもち、端部は肥厚して丸みをもつ。

D類 (第38・39図 379・380)

口頭部は短かく外反し、端部は丸みをもつ。口頭部には文様帶はない。

E類 (第39図 381～383・385・386)

口頭部の端部は丸みをもち、肥厚する。胴部最大径は、胴部高の $\frac{1}{3}$ 前後に求められる。

以上、甕は5類に大別される。甕のなかで、C類(373)の大甕は、杯蓋B類・身E類と共伴して出土した。なお、甕のなかでも古相をもつB類(371・372)は、一括して出土した資料から判断して、杯蓋A類・身B類と同時期又は近接した時期に位置づけられるものと考える。

提瓶 (第40図 389～392)

A類 (第40図 389・390)

球体形の体部に、口頭部を付したもので、環状の把手をもち、体部外面は回転カキ目調整を施している。

B類 (第40図 391・392)

把手が形骸化したもので、カギ形の突起となっている。口縁端部はゆるやかにたちあがり、丸味をもって仕上げられている。(山本)

⑤ 石製模造品

紡錘車3点、勾玉1点、白玉3点、管玉1点の他に懸垂用の孔と考えられる小孔を穿った砥石が2点出土している。

紡錘車 (第46図 438～440)

(438・439) は滑石製で、前者はドーム状の断面を呈し底径3.7cm、厚さ1.6cm、重量33.2g、中央の円孔径0.7cmを測る。外底面に円孔を中心に2重の圈線を回らし、7個の鋸歯文を配す。鋸歯文内には格子目を線描きしている。後者は、断面五角形状を呈し底径3.5cm、厚さ1.7cm、重量30.2g、中央の円孔径0.7cmを測る。外底面に円孔を中心に2重の圈線を回らし中心から沈線を放射線状に配す。側面には、上下2本の沈線を回らしその沈線間を間仕切るように輻方向の沈線を配す。(440) は碧玉製で断面台形状を呈す。底径3.7cm、上面径2.1cm、厚さ1.3cm、重量26.1g、中央の円孔径0.8cmを測る。底面には一条の圈線を施し外区と内区に分かれ、外区には8個の鋸歯文を配す。側面にも8個の鋸歯文を配している。

勾玉 (第46図 441)

扁平な形状をなす。長さ3cm、幅1.3cm、厚さ0.35cmを測る。一端に径0.2cmの懸垂孔を穿つ。両正面に研磨時の条痕が顕著に見られる。

白玉・管玉 (第46図 434～437)

白玉は3点(434～436)出土しておりすべて滑石製である。管玉は1点(437)出土しており碧玉製である。全面著しく磨耗しているが長さ2.3cm、径0.8cm、重量1.9gを測る。

砥石（第46図 432・433）

砥石は、2点（432・433）出土しており石材は共に細粒砂岩で乳白色に発色する。（432）は、長軸6.2cm、短軸3.6cm、厚さ2.9cm、重量55gを測る。一端に0.5cmの懸垂孔を穿ち、使用面は四面である。（433）は、長軸6.6cm、短軸3.4cm、厚さ1.7cm、重量48.3gを測る。一端に0.5cmの懸垂孔を穿ち、使用面は4面である。

⑥ 鉄器（第47図 442～445）

鉄鎌1点（442）、鉄斧1点（443）、鉄鋤先1点（444）、不明鉄器1点（445）が出土している。鉄鎌は圭頭斧箭式に属するもので先端と基部を欠損する。長さ6.1cm以上、最大幅2.7cm、基部幅1.2cm、厚さ0.7cm、重量115gを測る。

鉄斧は、錆張れが著しいが原形を把握することはできる。長さ8.1cm、刃部幅約4.5cm、袋部は外径3.5cm×2.5cmを測る槍円形を呈す。わずかながら肩部が認められ、合わせ目は1cmほど開いており、袋部内には木質等は見られない。

鋤先（444）

U字型鋤先で、長さ19.5cm、刃部最大幅16.5cm、最大厚1.5cm、重量335gを測る。内縁は木芯を挿入するために断面V字状を呈する。

不明鉄器（445）

断面方形で長さ5cmを測る棒状のものである。全面に錆がまわっている。

⑦ 石器（第41～43図 393～410）

石器は、叩石・砥石その他用途不明の礫類が多量出土している。

叩石（393～406）は、すべて砂岩が使われており、主面中央部あるいは側縁部に打痕が認められる。砥石（407～410）も砂岩で使用面等は観察表に譲る。これらの他用途不明の自然石が多量に出土しており、砂岩・泥質フォルンヘルス・細粒花崗岩等である。これらの自然石は、先述のように自然堆積によるものではなく意図的に持ち込まれたものである。中でも泥質フォルンヘルス細粒花崗岩は、四万十川本流の鬼ヶ城山滑床で産するもので後川水系には求めることができない。したがって本流から持ち込まれたと考えなければならない。

（出原）

第13表 古津賀遺跡出土遺物観察表

博証番号	遺構番号	器種	口径 器高 柄高 (cm)	形態・文様	手法	備考
14-1	堆層	土師器 壺	7.2 10.9 11.3	丸底で、胴部単位が強く振り出し、最大径を有する。口縁部は外反しながら短く立ち上がり、通部は丸くおさめる。	口縁部内外面は横方向の強いナデ調整。腹部外面は、不安方向の強いナデ調整。胴部内面には粘土帶接着痕(内縫接合)が見られる。	外面全面丹塗り。 I類
*-2	*	ケ +	9.8 7.8 9.9	丸底で、上側部がわずかに盛り出す。口縁部は、内部の筋曲部に横をして、直線的に外反、通部は丸くおさめる。	全面ナデ調整。	外面全面丹塗り。 精選された粘土で 砂利をほとんど含まない。 I類
*-3	S F 11	*	— — 13.0 4.8	平底で、輪郭部の脚部を有する。山線部は、単座部内面は、接合時に生じた段を有し、強く外反する。	*	外面全面丹塗り。 精選された粘土で あるがわずかに砂 粒を含む。 II類
*-4	直縁	*	8.7 15.0 14.0	丸底で、輪郭部の脚部を有する。口縁部が規則的に外方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	*	外面全面丹塗りで、 一部口縁内面にまで及ぶ。 III類
*-5	S F 11	*	— — — — 8.6	長頸の壺で、下半分は内済気泡に立ち上がるが、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。	外面には、ヘラ磨きがあったと 考えられるが、厚底は不明。	外面全面丹塗り。 6と同様、全体の可 逆性性。 II類
*-6	*	*	— — (8.8) 11.0	丸底で輪郭形の胴部を有する。	外面には、ヘラ磨きがあったと 考えられるが、単位は小形。内 面は、ナデ調整を施し、上部に は指頭圧痕が見られる。断面に 粘土帶接着痕(内縫接合)が見ら れる。	外面全面丹塗り。 II類
*-7	S F 8	壺	17.8 (5.2) —	肩の張った上側部から、口縁は強 く外反し、内部の筋曲部にわずか に棱が見られる。口縁部は丸く おさめる。	全面ナデ調整。上側部内面に、 指頭圧痕がある。	I-A-(1)-(2)
*-8	直・直縁	*	13.6 (6.9) —	上側部からゆるやかに口縁部に移 行し、口縁部は、強く外反する。 口縁部は丸くおさめる。	内面の調整観察は、器表があ れているために不可能。口縁部 は著しく厚くつくられている。 上側部内面に指頭圧痕が見られ る。	I-A-(1)-(2)
*-9	直縁	*	— — — — 15.8 (5.9)	肩の張った上側部から、口縁部は 強く外反し、口縁部は丸くお さめる。	口縁部内外面は、横方向の強い ナデ調整。腹部外面はナデ調整。 頭部尾部部外面には、粘土帶接 合時に生じた段が残る。上側部 内面には、凹状工具によるヘラ 削りのよう強いナデが見られ る。	I-A-(1)-(2)
*-10	S F 8	*	15.4 (6.0) —	*	口縁部内外面及び側部外面は、 ナデ調整。頭部内面には、横方 向のハケ調整が見られる。	I-A-(1)-(2)
*-11	S F 5	*	16.0 (7.2) —	上側部からゆるやかに口縁部に移 行し、口縁部の外反は弱い。口縁 部は丸くおさめる。	外面は、全面ナデ調整。口縁部 内面は、板状または凹状の工具 を強く押してて横方向にナデ している。上側部内面に指頭圧痕 が見られる。	I-A-(1)-(2)
*-12	S F 6	*	18.6 (11.4) —	肩の張った上側部に、知りが強く 外反する口縁を有する。口縁部は 丸くおさめる。	口縁部内外横方向のハケ調整。 胴部外面は横方向。内面は横方 向のハケ調整を施す。	I-A-(2)-(3)
*-13	直縁	*	16.3 (17.4) —	胴部中央に最大径を有し、ゆるや かなカーブを描いて、頭部に移行 する。口縁部の外反は弱く、口縁 部は、丸くおさめる。	口縁部内外面は、横方向のハケ 調整後、ナデ調整を施す。	外面は全面塗けて おり、内面頭部中 位も塗いている。 I-A-(1)-(2)

押出番号	濃淡番号	器種	口径 基底 直径 (mm)	法 則 高 度 底 径 (mm)	形態・文様	手 法	備 考
14 - 14	複層	土師器 甕	16.9 (14.0)	—	最大径を胴部下半に有する長頸の甕で、肩がわずかに盛り出す。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、横方向のナデ調査。肩部は内外面ナデ調査。 上縁部内面には、指捺圧痕が見られる。	I - A - ① - ③
~ - 15	直層	*	14.0 24.3 22.0	— — —	丸窓式。肩形に近い。腹部を有する口縁部は、内面に凹い様をなして、外方に立ち上がり、端部付近でわずかに強く外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、横方向のナデ調査。肩部外縁は、ハケ調整後ナデ調査を施す。内面はナデ調査。	胴部上半は全面焼けだが、上半は全く焼けない。 I - A - ① - ④
15 - 16	複層	*	18.1 (9.1)	— — —	肩の張った上部から、口縁部は細長の内面に弱い傾きをもつてゆるやかに外反する。口縁部は丸くおさめるが、外方に肥厚する。	口縁部内外面はナデ調査。肩部内面には指捺圧痕が見られる。	外面は全面焼ける。 I - A - ① - ③
~ - 17	*	*	18.8 (9.9)	— — —	肩の張った上部に、直線的に外反するU縫部を有する。口縁部は丸く外反。	全面ナデ調査で、ところどころ指捺圧痕が見られる。	I - A - ① - ②
~ - 18	S F30	*	19.8 (16.6) 26.4	— —	胴部中央に最大洋を有し、上縁部はゆるやかなカーブを描いて内湾する。口縁部は、底盤部内面に接してゆるやかに外反する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面は横方向のナデ調査を施す。肩部外縁は横方向のハケ調査がわずかに見られる。 内面はナデ調査。	I - A - ① - ②
~ - 19	直層	*	30.8 (10.0)	—	上縁部は、比較的直線的にすばまろ、口縁部は、ゆるやかに外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部外縁は横方向の強いナデ調査。肩外縁はナデ調査を施すが、下縁に木版の弱いハケ調整が認められる。	I - B - ② - ④
~ - 20	複層	*	16.0 (21.9) 21.6	— —	上縁部に唇状往を有する。口縁部は、強く屈曲し、直線的に外方に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	口縫部内外面ナデ調査。肩部外縁は、木版の弱いハケ調査。内面はナデ調査。	胴部中央が囁き5cmで要状に探げている。 I - A - ② - ⑤
~ - 21	*	*	17.5 22.7 20.4	— — —	丸窓の底部は厚くつくられ、胴部は半球に最大径を有する。U縫部は強く外反し寛敞形に伸びる。 U縫部端部は丸くおさめる。	U縫部外縁は、横方向の強いナデ調査。肩部内面には指捺圧痕が見られる。肩部外縁は板状方向のハケ調査。内面はナデ調査。	I - A - ② - ⑤
~ - 22	*	*	12.2 22.5 20.5 4.0	— — — —	半球底の底部を有し、唇状往は胴部中央にある。口縁部は、脇部内面に弱い傾きをもつと、一旦内面に立ち上がってから外反する。口縁部は丸くおさめながら、内面には筋状に突出している。	口縫部外縁横方向の強いナデ調査。胴部内外面は、ナデ調査を施すが、ところどころ下縫に板状底の底往が見られる。新面には、軽十帝隠合模(内模合)が明顯に見られる。他の土器に比して堅度が厚い。	胴部中央が囁き9cmで要状に探げている。 I - A - ① - ⑤
~ - 23	*	*	18.2 (23.6) 27.3	— —	胴部中央に最大洋を有し、上縁部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がる。口縁部は強く外反する。U縫部は唇状往に立ち上がる。内面には、ハラで押出した輪郭の直線がめぐり、内面には筋状に突出している。	口縫部内外面は、横方向の強いナデ調査。肩部外縁は、木版の弱いハケ原形による脇方向のハケ調査。内面はドーラのヘラ削りを施すが上手部は、ナデ消している。	肩部外縁が窺ける。 I - A - ② - ⑥
16 - 24	*	*	14.4 (8.0)	—	わずかに冠の張った上縁部から、口縁部は外方に直線的に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	口縫部内外面ナデ調査。内面に帆立貝の半壳を認める。1半壳の幅は約1cm。	外縁は、二重的な角を受け紅く変色し、煤が付着。 I - B - ① - ⑤
~ - 25	*	*	14.4 (12.2) 18.1	— —	最大洋を胴部中央に有し、上縁部からゆるやかに脇部に移行する。口縁部は強く外反し、端部はわずかに尖り気味。	U縫部外縁は、横方向の強いナデ調査。内面は、前U縫の強い横方向のナデ調査。肩部内外面はナデ調査。内面のところどころに指捺圧痕が見られる。	I - B - ① - ⑤
~ - 26	複層	*	15.7 (13.5) 18.0	— —	胴部中央に最大洋を有し、上縁部からゆるやかに脇部に移行する。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさめる。	U縫部外縁は、横方向の強いナデ調査。内面は、前U縫の強い横方向のナデ調査。肩部内外面はナデ調査。内面のところどころに指捺圧痕が見られる。	I - B - ① - ⑤

辨認番号	種属着分	器 機	口径 法量 (cm) 頭部 頭径 頭延 頭長	形 狹・又 細	手 法	備 考
16-27	S F 4	土器器 甌	17.8 (13.6) 19.5 —	上腹部に最大径を有するが、ゆるやかに頭部に移行し、口縁部はなめらかに外反する。口縁部は丸くおさめる。	口頭部外面横方向の強いナデ調整。内・外面はナデ調整。内面は下地に横方向のハケが見られる。 制記紙面に、粘土帶茎合巻(内縫合巻)を認める。粘土筋の幅は1.5~2 cm。	I-B-①-④
*-28	甌器	*	5.4 8.8 8.2 —	丸底で、上胴部に最大径をもち、イナデク形の胴部を有す。口縁部は丸く外反する。頭部は丸くおさめる。	全面ナデ調整を施すが、胴部外面の一部に下地のハケ調整が認められる。	I-B-①-④
*-29	*	*	17.4 (12.6) 18.6 —	上腹部に最大径を有するが、ゆるやかに頭部に移行し、口縁部はゆるやかなカーブを描いて外反する。口縁部は丸くおさめる。	口頭部内外面は、横方向の強いナデ調整。頭部内外面もナデ調整を施すが、外面筋衣は凹凸が激しい。	I-B-①-④
*-30	S F 5	*	18.4 (12.7) 22.4 —	頭部中位に最大径を有し、筋部がわずかに張り出でて頭部に至る。口縁部は丸くおさめる。	外面は全面ナデ調整。内面は、下→上の強いヘア削り。	I-B-①-④
*-31	甌器	*	11.0 12.7 12.4 —	丸底で、最大径が胴部中位に有し、頭部に内側に立ち上がり頭部を呈す。口縁部は丸く外反し、頭部に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	頭部外筋は、横方向の強いナデにより凹凸をなす。	I-B-①-④
*-32	*	*	15.7 (19.4) 22.0 —	頭部中位に最大径を有し、頭部から内側にゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部は丸く外反する。頭部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナデ調整。頭部外筋は、下地のハケがわずかに認められる。	I-B-①-④
*-33	甌器	*	14.5 22.0 21.0 5.5 —	球形に近い胴部に平底風の底部を有す。口縁部は丸く外反し、端部は丸くおさめる。	口頭部内外面は横方向の強いナデ調整を施す。頭部外筋は横方向のハケ調整の上をナデしている。	I-B-①-④
*-34	S F 10	*	— (21.0) 22.0 2.5 —	最大径を有する頭部中位が、やや強く外方に傾いて居す。底部は平底風。口縁部は、堅型接縫から制離している。	頭部内面に粘土筋の単筋がちられる。1単位の幅は1~1.5 cm。底部付近二次の粘土筋を受けた軽く柔軟な色外筋はほどこ間にわたって握り付いている。	I-B-①-④
17-35	甌器	*	15.0 21.7 21.8 —	丸底で胴部中位に最大径を有す。上胴部は、内側にゆるやかなカーブを描いて頭部に至る。口縁部は丸くおさめる。	口縁部外筋は、ハケ状全体による横方向の強いナデ調整。	外筋全周握り付ける。
*-36	*	*	11.4 17.8 14.5 —	丸底で、胴部中位に最大径を有し、肩がわずかに張り出でて頭部に至る。口縁部は丸くおさめる。	内面は、横上縫接合時に生じた段差が認めるに見られる。口縫接合外筋方向のナデ。胴部外筋は横方向のハケ調整の上をナデする。	I-B-①-④
*-37	*	*	19.0 (21.7) 24.0 —	頭部と半部に最大径を有し、肩が立ち上がり頭部を呈する。口縁部は丸く外反する。口縁部は丸くおさめる。	頭部内面に頭筋によるナデ。頭部単位に板状全体の仕組が残る。外筋はナデ調整。	頭部単位に幅8 cm。各筋に探がつく。 I-B-①-④
*-38	甌器	*	18.5 (13.8) 24.8 —	頭部中位に最大径を有し、上胴部は、比較的直線的に外反し頭部を呈す。口縁部は丸くおさめる。	口縫接合外筋方向のハケ調整。上胴部内面に、指筋によるナデが見られる。筋面に粘土筋の接合筋(内縫合巻)が見られる。	I-B-①-④
*-39	*	*	16.0 29.2 34.6 —	底盤は、丸底で厚いつくり。頭部中位に最大径を有する長筒の型器。上胴部はゆるやかなカーブを描いて内折し、頭部に至る。口縁部は丸く外反し、頭部は丸くおさめる。	口縫接合外筋は横方向のナデ調整。内面は、右→左の順度のトネをナデしている。頭部外筋面は、木理の細いヶ原体で不完全方向に調整した後に、指ナデを施す。	制記外筋下には、一次的な火を受けた軽く変色し、傷ける。 I-B-①-④
*-40	S F 11	*	22.1 33.2 25.7 —	施形は丸底で厚いつくり。頭部中位に最大径を有する柳型の型器。口縁部は丸くノ字状に外反し、頭部は丸くおさめる。	口縫接合外筋は横方向の強いナデ調整。頭部外筋は、ナデ調整を施すが、下地にハケがちられる。制記外筋のところどころに、指筋仕組が見られる。	I-B-①-④

辨認番号	遺傳番号	石種	口径 器高 (cm) 底径	形態・文様	手法	備考
18-41	瑪瑙	土縫碧玉	14.2 (15.0) 14.3 —	上部部が、わずかに張り出しみの。口縫部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。	内外面ナデ調整。	
*-42	S F 4	*	18.6 16.2 15.5	縫部がほとんど発達しない。口縫部は強く外反し、端部は丸くおさめる。	全面ナデ調整。呑壁に巻雲が多く入る。	II-①-④
*-43	*	*	17.2 (10.2) 16.0 —	*	口縫部内外面横方向の強いナデ調整。口縫部内部上面には、板状工具を押しあげて、面をつくっている。縫部背面には、倒鉗工具による凹凸が残る。	II-①-④
*-44	瑪瑙	*	15.6 22.9 16.7 —	底部は丸底で厚いくつくり。底部はほとんど発達しないが、上部部に幾次と重ねた有す。口縫部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。	U縫部内部油は横方向の強いナデ調整。底部外表面は木理の細い原体による縫方向のハケの上をナデ調整。	II-①-④
*-45	S F 6	*	22.1 (10.0) 19.6 —	制部がほとんど発達せず、上部部から直線的に立ち上がり、口縫部に重なる。口縫部は、強く外反する。	U縫部内部の原曲部は、板状工具による圧痕があり、面をつくっている。口縫部内外面横方向の強いナデ。倒鉗内外油はナデ調整。口縫部は厚くつくられる。	底部外表面の一帯に3×2.5mmの斑斑あり。 此部付近に底盤あり。
*-46	瑪瑙	*	15.8 19.5 15.6 —	丸底の後部から、直線的に立ち上がり、上部部に最大径を有す。縫部は著しく肥厚し口縫部は直線的に外反し、端部は丸くおさめる。	縫部は著しく肥厚し、内面には横彫刻痕が見られる。内外面の調査は不明。	II-①-④
*-47	S F 4	*	26.0 (11.7) 21.8 —	縫部はほとんと発達せず、口縫部は直線的に外反する。	口縫部内外前縫方向のナデ調整。縫部底部背面が削がれています。縫部内外面はナデ調整。縫部に粘土接着合板(内縫接合)を認める。	II-①-④
*-48	S F 6	*	11.4 13.4 11.2 —	底部が著しく厚くつくれられ、外側の内側との間に凹みが生じている。底部あまり発達せずに頂部に至る。口縫部は一旦直線的に外反した後、さらに屈曲。	口縫部内外横方向の強い調整。縫部内外面ナデ調整。	II-①-④
*-49	瑪瑙	*	11.2 (12.6) 13.1 —	制部部位に最大径を有し、口縫部は直線的に外方に立ち上がる。縫部内部は、面をなす。	口縫部は厚くつくられ、内面に指爪が残る。断面に粘土接着合板(内縫接合)を認む。	II-①-④
*-50	*	*	36.0 23.4 18.7 —	丸底の上部部に棘大径を有する。わずかに肩が張り出し、口縫部は丸く外反し、端部は丸くおさめる。縫部内側は、幅5mm前後の板状原体を押しこして面をつくり出す。	口縫部外面は、横方向のナデ調整。口縫部内面は、右下りのハケ調整を施すが、下半はナデ消されている。縫部外表面は、ナデ調整を施すが、下地のハケ原体が残られる。	II-①-④
19-51	S F 8	*	16.2 (4.6) —	口縫部は丸く外反し、端部は丸くおさめる。縫部内側は、幅5mm前後の板状原体を押しこして面をつくり出す。	口縫部内外面は、横方向のナデ調整。縫部外表面に横彫刻痕が見られる。	内面が剥けている。
*-52	瑪瑙	*	19.3 (6.4) 18.1 —	上部部に最大径を有し、口縫部は丸く外方に屈曲する。	縫部内側は、幅5mm前後の板状原体を用いて横方向にナデする。口縫部内外面は、横方向の強いナデ調整。	II-①-④
*-53	S F 5	*	15.8 (6.6) —	縫の張った上部部から、口縫部は直線的に立ち上がる。	器表の荒れが激しく、調整修理不可能。	II-①-④
*-54		*	17.4 (6.5) —	肩の張った上部部から、直線的に縫部へ移行し、口縫部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。口縫部のつくりは堅い。	縫部内面は、板状原体による押しだけが見られる。	II-①-④
*-55	瑪瑙	*	16.2 (8.7) —	強く内側に立ち上げた上部部から、やや長めの口縫部が外反し、端部は丸くおさめる。縫部内面は複数をなす。	口縫部内外横方向のナデ調整。外側は塗ける。	II-①-④

辨認番号	通称番号	器種	法量 (cm)	口縁部 最高 鋼鉄 周辺	形態・文様	手 法	備 考
19-56	S F 5	土器器 表	15.4 (6.0) —	上縁部は、ゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部は一旦直線的に立ち上がり、更に外反する。腹部は丸くおさめる。縁部は内側に肥厚する。	全面ナテ調整。断面に粘土帶複合板(内傾複合)を認める。	III-①-⑥	
*-57	*	*	17.0 (11.5) —	肩の張った上縁部から、口縁部は丸く外反する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部が調査方向の強いナテ調整。内面には板状工具による津ナゲ取れが見られる。上縁部内面には、指痕压痕が認める。	III-①-⑥	
*-58	S F 10	*	14.6 22.3 19.7 —	極めて不均整な器型である。先底で、わずかに肩が張り、口縁部は丸く外反する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部外表面は横方向のナテ調整。内面には凹凸が激しい。	外表面は、二次的な熱により紅く変色し、裂ける。 III-①-⑥	
*-59	罐	*	16.8 (16.0) 19.2 —	上縁部に最大径を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部外表面は、横方向のナテ調整。胴部内面に帶頭压痕がある。	III-①-⑥	
*-60	S F 5	*	21.0 (13.8) 19.3 —	上縁部に最大径を有し、わずかに張り出す。口縁部はゆるやかに外反し、底部は突り気味。	口縁部外表面は、横方向の強いナテ調整。胴部外曲面は、縱方向のハケ調整を行なう。底部はナテ消す。胴部内面は、丁寧なナテ調整。	外表面は、全面剥ける。 III-②-⑤	
*-61	S F 6	*	23.3 (12.6) 25.6 —	上縁部に最大径を有し、わずかにふくらみをもつて腹部に移行。口縁部は、一旦直線的に立ち上った後、外反する。口縁部は丸くおさめる。	全面ナテ調整。	III-①-⑥	
*-62	罐	*	17.4 (8.7) —	胴部中央から、口縁部に向って比較的直線的に立ち上がる。口縁部は近く外反し、腹部は丸くおさめる。口縁部は厚くつくられる。	内外面ナテ調整であるが、下地のハサがわざかに認められる。	III-①-⑥	
20-63	*	*	12.0 (13.2) 14.6 —	上縁部が下方に張り出し、腹部に向って直線的に立ち上がる。口縁部はゆるやかに外反し、腹部は丸くおさめる。	口縁部外表面は、横方向のナテ調整。内面には、沿頭圧痕が残る。胴部外表面は、凹凸が大きい。	III-③-④	
*-64	筒・玉彌	*	16.2 (11.9) 17.1 —	胴部に位する最大径を有す。上縁部はわずかにふくらみをもつて腹部に移行。口縁部は先いカーブを描いて外反するが、内腹尾輪部は複数をなす。口縁部は丸くおさめる。	器表の荒れが激しく、調査觀察不可能。口縁部は厚手のつくり。	III-①-⑥	
*-65	S F 8	*	14.4 (9.5) 15.2 —	胴部がほとんど直線である。わずかに肩が張て腹部に移行。口縁部の外反は近く端部は丸くおさめる。	口縁部内面接觸方向の強いナテ調整。器表外表面はナテ調整、内面は、強いナテ調整で擦痕を思わせる。	III-①-⑥	
*-66	S F 6	*	18.2 (5.2) —	ゆるやかなカーブを描いて外反する口縁部であり、腹部は丸くおさめる。	口縁部外曲面は横方向のハケ調整。内面にナテを施すが、下地にハケが認められる。	III-①-⑥	
*-67	罐	*	18.0 (9.2) —	上縁部は、比較的直線的に立ち上がり、口縁部はゆるやかにカーブを描いて外反。腹部は丸くおさめる。	口縁部外面横方向のナテ調整。内外面にハケ原作の圧痕が見られる。	III-①-⑥	
*-68	S F 5	*	24.6 (7.4) —	口縁部は、一貫直線的に外方に立ち上った後に外反。腹部は丸くおさめる。	器表調査は不明。	III-①-⑥	
*-69	S F 8	*	18.9 (8.1) —	上縁部は、比較的直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反。	口縁部外表面は、横方向のナテ調整。内面は、横方向の前りの上を横ナテ調整。胴部内外重横方向のナテ調整。	外表面は焼ける。 III-①-⑥	
*-70	*	*	21.8 (12.5) —	胴部中央に最大径を有し、上縁部は比較的直線的に立ち上る。口縁部はゆるやかに外反し、腹部は丸くおさめる。	口縁部外表面は、横方向の強いナテ調整。器表外表面は、凹凸が激しい。	内、外表面剥ける。 III-①-⑥	

押回番号	遺傳番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 頸径 底径	形態・文様	手 法	備 考
20-71		土師器 甌		18.8 16.0 19.3 5.4	平底甌の底部から、底部中位まで比較的直線的に立ち上がり、上側部もくくらみをもたずに頭部に移行。13種類の外反は弱い。口縁部は丸く外反する。	頭部外側は、右下りのハケ調整。底体は2種あり、上半は荒く、下半は細い。	頭部中位以下深ける。 Ⅲ-②-④
*-72		甌	*	24.2 30.0 26.0	丸底、削型の胴部。口縁部はゆるやかに外反し、腹部は丸くおさめる。	頭部内面に指添(直角)。制御外沿は瓶方角のハケ調整を施すが大部分ナデ消す。内向は、上下横方向のハケ。下半はナデ消している。	Ⅲ-①-⑤
*-73	*		*	15.4 24.9 38.0	瓶入径を下底部に有し、若干下ぶくれた器型である。口縁部は丸いカーブを描いて強く外反し、瓶部は丸くおさめる。	内外面ナデ風整。表面には、粘土質結合部(内縮接合)が見られる。	Ⅲ-①-⑤
21-74	*	*	*	(8.5) 31.0 4.0	丸底甌の底部から強く内湾して立ち上がる。最大径を制御中位に有する。	瓶部内面上半横方向のナデ。	瓶部外側に模様瓶織の圧板が見られる。
*-75			*	(7.5) 35.0	平底甌底の底部から頭部が屈曲して立ち上がり、頭部中位からゆるやかに頭部に移行する。	底部は厚い。内面底頭による強いナデ調整。	
*-76	S F 8		*	(5.2)		内外曲ハケ調整のうえをナデ調整。瓶部外側は凹凸が激しい。	底部内面に大きな溝度あり。
*-77	甌	*	*	(5.9)	頭部と底部の接合部に窪みが見られる。	内外曲ナデ調整。	
*-78	S F 4	*	*	(6.0)		器表の荒れが激しく、内外面の調整検査不可能。	
*-79	*	*	*	(8.5)	丸底の底部から半球状のカーブを描いて立ち上がり頭部へ至る。	内面横方向、外向縱方向のハケ調整のうえをナゲる。	
*-80	甌	*	*	(12.0)	*	内外面ハケ調整のうえをナゲる。	
*-81	S F 10	*	*	(8.5)	平底甌の底部で、内側に向けて開んでいる。	内面右下り、外向カタチ方向のハケ調整。内曲のハケ底体は木理が弱い。	
*-82	S F 6	*	*	(11.5)	平底甌の底部から、わずかに屈曲をしながら立ち上がる。		
*-83	S F 11	*	*	(27.0) 24.5	瓶形の胴部。底部は厚くくられ、胴部との境がわざかに窪む。	内外面ナデ調整。	
*-84		*	*	(25.0) 23.0	丸底の底部は厚くくられる。筋部に横たわる。浮きやかなかカーブを描いて頭部に至る。頭部内側に段差なし。口縁部は垂直に立ち上がる。	内面ナデ調整。	下部外側は二次的な柄により、丸く染色。上側部は深ける。 底部外側に捺压痕を3個所認める。
22-85	甌	*	*	(10.2)	やや尖底気味の底部は厚くくられる。胴部との境が大きくなっている。	内面ハケ調整後にナデ調整。	
*-86		*	*	(8.5)	丸底の底部から、急角度で瓶部中位に向って立ち上がる。	外向縱方向のナデ、内面板状工具によるハケ。	
*-87		*	*	(7.1)	丸底の悪い底部、下側面は、底部から断面が直線的に外方へ立ち上がる。底部と胴部との間が窪む。	内面は、横方向の荒いハケ、外面は瓶方角の荒いハケ。	
*-88		*	*	(13.4)	尖底の悪い底部から、下側部は急角度で立ち上がる。		内面は、底部以外が荒れる。 底部外側が尖色。
*-89	甌	*	*	(8.4)	丸底の底部から、下側部は急角度に立ち上がる。	内外面ナデ調整を施すが、内曲は下地にハケ調整あるを認む。	

機器番号	道機番号	器種	口径 最高 耐圧 強度 (cm)	形態・文様	手法	備考
22-90		複層	土管部 表	(11.8)	丸底の底部から、下脚部は半円に 丸いカーブを描いて立ち上がる。	内外面ナゲ調整。
*-91	S F 10		*	(17.7)	丸底の底部から、直線的に立ち上 がり、上脚部に最大径を有す。	内外面ナゲ調整で仕上げるが、 下地には、外周輪方向、内面側 のハケ削りがある。内外面凸凹 が激しい。断面に粘土帶接合部 を認める。
*-92		複層	*	(19.4)	丸底の底部から、直線的に外方に 立ち上がり、最大径を有する脚部 中空は垂直に立ち上る。	内外面ナゲ調整。
*-93	*	*	(18.3) 23.0	*	丸底の底部から、下脚部は内溝し て立ち上がり、脚部中位は、直線 的に外方に立ち上る。上脚部に 最大径を有し、裏張り出す。	内外面、ハケ調整の下地の上を ナゲ調整する。
*-94	*	*	*	(4.1)	近部と脚部の間に凹みあり。	外歯は擦れを恐わせる荒いナゲ。 底体は小形。内面に指添圧痕あり。
*-95	*	*	(12.5)	平底風の底部から直角度に立ち上 がり脚部中位に向う。	内面にハケ削りの圧痕があり。 内外面に凸凹がある。	
23-96	*	*	脚	19.5 (17.8) 19.8	下脚部は、直線的に立ち上り、 中位以上は、直線的に立ち上り、 口縫部はわずかに外反する。口縫 部は丸くおさめる。	内外面ナゲ調整。
*-97	*	*	*	22.9 (9.6) 22.0	脚部中位でわずかに屈曲して、直 線的に立ち上る。脚部は丸くおさ める。口縫部内面に、接合による 凹ができる。	内外面ナゲ調整。断面に粘土帶 の接合痕(内接接合)が見られる。
*-98	*	*	*	22.6 (14.6) 22.5	脚部中位は、ほとんど直線的に立 ち上がり、口縫部はわずかに外反 し、脚部は丸くおさめる。	器具調整の観察不可能。
*-99	S F 5		*	18.0 22.0 18.0 8.0	脚部は、ゆるやかなカーブを描 いて立ち上る。最大径を脚部中 位に有す。上脚部は、わずかに内 側に傾斜して直線的に立ち上る。 脚部はわずかに外反する。口縫 部は丸くおさめる。底部の円孔 は直径 8 cm を有り、断面には、 径 6 mm の穿孔(焼成痕)。	内外面ナゲ調整か。
*-100	複層	*	*	23.3 (16.2) 24.0	脚部は、直線的に外方に立ち上 がり、上脚部はわずかに内側し、そ のまま口縫部に至る。口縫部は丸 くおさめる。	*
*-101	S F 5	*	*	21.8 (10.9) 21.5	脚部中位から、直線的に立ち上 がり、口縫部は丸くおさめる。断 面に粘土帶接合痕(内接接合)を認 める。	金網ナゲ調整。表面に電気が多い。
*-102	複層	*	*	(13.9)	下脚部は、わずかに内溝気味に立 ち上る。下脚部は尖り気味。底 部の円孔は 13cm を有り、下脚部に 径 6 mm の穿孔(焼成痕)。	内外面ナゲ調整。下脚部内面に 指添圧痕あり。
*-103	*	*	*	18.2 24.5 20.2 7.0	脚部下半はゆるやかなカーブを描 いて立ち上る。最大脚を上脚部 に有す。上脚部から脚部にかけて は、内側に傾斜し、口縫部はわず かに外方に立ち上る。	内外面の器面調整不可能。下脚 部は肥厚する。
24-104	S F 5	*	*	(11.3)	脚部は、ゆるやかなカーブを描 いて内溝しつつ立ち上る。底部 の円孔は 10 cm を有り、下脚部に 径 8 mm の穿孔がある(焼成痕)。	下脚部内面に指添圧痕が頗る。
*-105	複層	*	*	(11.1) 12.0	下脚部は、ゆるやかなカーブを描 いて内溝しつつ立ち上る。底部 の円孔は 13 cm を有る。	他のものに比して、器具が厚い。
						1-①-③

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	部類・文様	手 法	備 考
24-105	複層	土器器頭	21.9 (12.3) —	脚部中央で、わずかに内側に傾曲。上部は、直線的に立ち上がり。口縁部はわずかに外反。端部は丸くおさめる。	器表の変形が激しく、調査観察不可能。	口縁部外側は熱を受けてくび変形。 II-①-⑤
*-107	*	*	21.0 (13.4) 21.0	上脚部にはわずかにふくらみを有する。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナゲ調整。端部に粘土帯接着部(内部接合)を認む。	II-①-⑤
*-108	*	*	17.5 (12.4) 16.7 —	上脚部は直線的に立ち上がり。口縁部は、わずかに外反し端部は丸くおさめる。口縁部内面が内側に肥厚。	内外面觀方向のナゲ調整。	II-①-④
*-109	*	*	25.5 (14.1) 24.5 —	上脚部は、わずかに内溝し、口縁部は直線的に外方に伸びる。端部は丸くおさめる。	全面ナゲ調整。	II-①-④
*-110	*	火候	13.8 5.6 —	丸底の底部から、内溝して立ち上がり。口縁部は丸くおさめる。	外面は、棒状の工具でナゲ。内面は指ナゲ調整。	底部外側に×のへき記号。 II-A-①-⑤
*-111	瓦層	*	16.1 6.0 —	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	内外面ナゲ調整。	I-②
*-112	複層	*	13.8 8.7 —	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。そのまま口縁部に至る。端部は丸くおさめる。	外面右下りのハケ、内面にも横方向のハケ調整がわずかにみられる。	I-①
*-113		*	12.1 5.5 —	平底風のつくりの底部から強く内溝して立ち上がる。	口縁部外側は、ハケ全体による強いナゲ。下部に指捺圧痕あり。内面ナゲ調整。	II-A-①-⑤
*-114	S F 10	*	16.2 6.1 —	丸底の底板から、内溝して立ち上がり。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナゲ調整。	II-A-①-④
25-115	S F 11	*	12.0 6.1 —	*	厚手のつくり。口縁部内面にハケ目が残る場合は、内外面ナゲ調整。外側の一帯に指捺圧痕あり。	II-A-①-④
*-116	*	*	12.7 6.2 —	*	II.縁部内外面ナゲ調整。肩部外縁横方向のナゲ。内面はハケ調整の後ナゲ調整。	II-A-①-④
*-117	*	*	10.4 6.0 —	丸底の底部から、内溝して立ち上がり。口縁部は丸くおさめる。底部と脚部の間が凹状となる。	調査観察不可能。	II-A-①-④
*-118	*	*	12.4 6.2 —	丸底の底部から内溝して立ち上がり。口縁部に至る。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面横方向のナゲ調整。	II-A-①-④
*-119	S F 5	*	11.8 6.0 —	*	調整不明。	外側に傷け。
*-120	S F 11	*	13.0 6.1 —	丸底の底板から。内溝気体に立ち上がり、口縁部は外側に突出をしない。内側に屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、強指でつまんでナゲ調整。	II-A-②-⑤
*-121	*	*	11.5 6.0 —	やや厚手の丸底の底板から、内面気体に立ち上がり。口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	II.縁部外沿及び内面上部は横方向のナゲ調整。底部内外面は不定方向のナゲ。	II-A-①-④
*-122	複層	*	11.9 5.7 —	丸底の底部から内溝して立ち上がり。口縁部に至る。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面は、横方向のナゲ調整で仕上げるが、下地に横方向のハケあり。	II-A-①-④
*-123	*	*	12.2 5.4 —	*	全面ナゲ調整。	II-A-①-④
*-124	*	*	11.9 5.6 —	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。	II.縁部内外面横方向のナゲ調整。	II-A-②-③
*-125	*	*	12.6 6.1 4.0	平底の底板から、内溝して立ち上がる。口縁部に至る。端部は尖り気味。	全面ナゲ調整か。	II-B-②-⑤

掲回番号	流槽番号	器種	法量 (ml)	口径 器高 測定 範囲	形態・文様	手 法	備 考
25-126		土瓶器 燒		12.2 35.5 55.5 5.8	平底の底部で、口縁部は強く内湾する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部外表面は、横方向のナデ調整。底部内面は、不定方向のナデ調整。	II-B-(2)-(5)
*-127	薬壺	*		15.5 6.8 7.0	平底の底部から、直線的に立ち上がり、口縁部に至る。底部は丸くおさめる。	口縁部外表面は、推表のようなナデ調整。	II-B-(2)-(5)
*-128		*		13.0 6.0 —	平底の底部から、内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。底部は丸くおさめる。	外面上半は、横方向のハケが認められ、下下及び内面はナデ調整。	II-B-(1)-(5)
*-129	仄壷	*		8.7 6.7 — 2.7	平底風の底部から、内湾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は丸くおさめる。	外面上半は、横方向のハケが認められ、下下及び内面はナデ調整。	IV-B-(1)-(5)
*-130	電壷	*		13.4 4.2 — 8.6	平底の比較的薄い底部から、直い体部が斜めに立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	底部外面に木葉の压痕あり。外面上半は、横方向のハケが認められ、下下及び内面はナデ調整。	II-B-(1)-(5)
*-131	S F 10	鉢付梗		11.6 8.2 — 7.4	脚部は、ハノ字型に開き、端部は丸くおさめる。柄部は、内側して立ち上がり、口縁部は内側に屈曲。端部は丸くおさめる。	内面ハケ調整。脚と杯の接合部には、指紋は底が残るが、横方向のナデ調整を無す。	目
*-132	S F 7	鉢 燒		8.9 4.4 —	丸底の底部から内湾して立ち上がり、口縁部下で、わずかに内側に屈曲。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内面に切妻形底顎叢。外表面は、ナデ調整。	IV-A-(1)-(5)
*-133		*		16.8 11.8 — 11.7	杯部は、底部外側にしっかりと設をなして外方に立ち上がり、口縁部はゆるやかなカーブを描いて外反する。底部は丸くおさめる。脚部は、ややふくらみをもつた柱状部から内面に凹形をなして強く外方に開く。底部は丸くおさめる。脚部は杯型。	口縁部外表面は横方向の並いナデ調整。口縁部内面、底部内面はナデ調整。脚部内面は、右→左のヘラ割り。杯部外表面は強いハケ調整が見られる。	杯底高=脚底高=6:5
*-134	仄壷	*		17.0 11.9 — 10.1	杯部は、底部から外方に直線的に立ち上がり、口縁部は、わずかに外反し、底部は丸くおさめる。底部と口縁部の境は、後とどういうも凹状の窪みを呈す。脚部は、外側斜する柱状部から、柄部は丸いカーブを描いて外反し、底部は丸くおさめる。	脚部内面に、わずかに右→左のヘラ割りを認めるが、ほとんどナデ調整されている。	杯底高=脚底高=5.6:5.9
*-135	薬壺	*		16.5 (5.1)	杯部は、底部が直線に凹状の窪みを介して立ち上がり、口縁部は、わずかに外反する。口縁部は丸くおさめる。	脚部内面に、わずかに右→左のヘラ割りを認めるが、ほとんどナデ調整されている。	I-A-(2)
*-136		*		16.5 (7.0)	内湾気味の底部から、外面上に凹状の窪みを介して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内面が横方向のハケ調整。底部外表面は、指筋内板あり。	I-B-(2)
*-137		*		16.6 11.0 — 9.2	脚部に比べて、柄部が著しく大きい。杯部は、底部から凹状の窪みを介して直線的に外方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。底部は丸くおさめる。杯部は、柱状部から、強く外反して水平に開く底部に至る。底部は丸くおさめる。脚部内面には、脚をつくる。	口縁部内面が横方向のハケ調整。脚部内面及び底部外表面は、ナデ調整。	I-B-(2)
*-138	哥・瓦壷	*		14.8 10.5 — 10.6	杯部は、横状を呈し、口縁部は近く外反する。脚部は、柱状をなすらず等状を呈し、端部は上方に反り上がり、丸くおさめる。	杯部内面は横方向のハケ調整。外表面はナデ調整を施す。脚部内面は左→右のヘラ割り。外表面はナデ調整。脚部と脚部は、脚部で制御しており、杯底部に脚部を押入する仕組になっている。	杯底高=脚底高=5:4
26-139	福音	*		(5.6) — 11.2	脚部は内面に筋をつくって強く外反。底部は丸くおさめる。	内面には、右→左のヘラ割りが施されはじめ目を消している。削りは、ナデよりほとんど消える。外表面はナデ調整。	II-(1)
*-140		*		(7.0) — 11.0	わずかにふくらみをもつ柱状部から、脚部は強く外反する。底部は丸くおさめる。	脚部外表面ナデ調整。内面は右→左のヘラ割り。脚部内外面には、ハケ調整が見られる。	脚部外表面の一部に黒斑あり。

検査番号	遺傳子号	着種	LJ達 法量 (cm) 胸深 底径	形態・文様	手 法	備 考
26-141	昌層	土脚器 高杯	14.2 9.8 — 胸深12.2	杯部は、病状を呈し、口縁部は内側に強く内凹する。底部は丸くおさめる。輪部は短く笠状を呈し、輪部は失り気味。	背加内面下半は左→右の弱い削りが見られる。他の部位は、ナメ調整である。	II-B 井留高：肩高=5.5:4.3
*-142	S F 2	* 手挽土器	9.0 5.3 —	丸底で、内凹して立ち上がり。LJ縁部は丸くおさめる。	内面に新頭圧痕あり。	I-A-①
*-143	*	*	6.0 4.9 —	*	*	I-A-①
*-144	S F 7	* *	8.4 7.0 —	*	内面に指頭圧痕顕著。内外面ナメ調整。	I-A-①
*-145	S F 9	* *	7.2 6.1 —	丸底で、内溝気味に立ち上がり。LJ縁部は、部分的に外反する。	口縁部外面に、指頭圧痕著。	I-A-①
*-146	S F 7	* *	7.3 5.2 —	丸底で、内溝して立ち上がり。口縁部は丸くおさめる。	外面上に指頭圧痕あり。内外面ナメ調整。	I-A-①
*-147	*	*	5.9 3.1 —	丸底で堅いつくりの底部から直線的に外方に立ち上がり。LJ縁部は丸くおさめる。	外面上に指頭圧痕あり。	II-A-①-⑤
*-148	S F 9	* *	1.6 (3.0) —	丸底の船上機に、唇を突込んだだけ。	ナメ調整。	II-A-①-⑤
*-149	S F 2	* *	4.0 3.4 —	平底丸底の底部の底面から、車面に立ち上がり。LJ縁部は丸くおさめる。	*	II-A-①-⑤
*-150	*	*	4.4 3.8 —	丸底の底面で、内溝気味に立ち上がり。LJ縁部は丸くおさめる。	*	II-A-②-⑤
*-151	S F 9	* *	4.9 4.0 —	直底風の底部から内溝して立ち上がり。輪部は失り気味。	内面に新頭圧痕あり。	II-A-①-⑤
*-152	S F 2	* *	5.8 4.3 —	丸底の底部から内凹して立ち上がる。底部は丸くおさめる。	ナメ調整。	II-A-②-⑤
*-153	S F 3	* *	2.7 3.3 —	平底の底部から、強く内凹して立ち上がる。	内面に指頭圧痕あり。 ナメ調整。	II-B-②-⑤
*-154	*	*	3.4 4.1 —	丸底の底部から内溝して立ち上がる。	*	II-A-②-⑤
*-155	*	*	2.5 3.1 —	*	ナメ調整。	II-A-②-⑤
*-156	S P 1	* *	2.8 3.0 —	*	*	II-A-②-⑤
*-157	S F 3	* *	3.1 3.0 —	平底の底部から内溝して立ち上がる。底部は丸くおさめる。	*	II-B-③-⑤
*-158	*	*	3.3 3.0 —	丸底の底部から、内凹して立ち上がる。	外面上に指頭圧痕あり。	II-A-②-⑤
*-159	*	*	(2.3) —	*	内面に指頭圧痕あり。ナメ調整。	II-B-②-⑤
*-160	*	*	2.0 2.9 —	平底の底部から一旦直線的に外方に立ち上がり、途中で強く内側に回曲。	*	II-B-②-⑤
*-161	*	*	3.8 2.8 —	丸底の底面から、内溝気味に立ち上がる。LJ縁部の高さが一定ではない。	*	II-A-②-⑤
*-162	S F 3	* *	2.8 4.4 —	丸底の底面から、内溝して立ち上がる。LJ縁部は丸くおさめる。	ナメ調整。	II-A-②-⑤
*-163	S F 9	* *	2.8 3.5 —	直底風の底部から、内溝して立ち上がる。LJ縁部は丸くおさめる。	外面上に指頭圧痕あり。	II-A-②-⑤
*-164	*	*	2.8 3.3 —	丸底の底部から直線的に立ち上がる。LJ縁部は丸くおさめる。	内面に指頭圧痕あり。	II-A-②-⑤
*-165	*	*	(1.5) —	丸底の底面		II-A-②

測定番号	機種番号	部種	法量 (cm) 基準 鋼直 規格	形態・文様	手 法	備考
26 - 166	S F 9	土姫器 手握土器	3.4 <u>3.4</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	ナテ調整。	I-A-(2)-(1)
* - 167	*	*	2.7 <u>3.9</u>	厚いつくりの丸底の底部から、内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
27 - 168	S F 1	*	3.9 <u>3.7</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	内面に折曲江模。ナゲ調整。	I-A-(2)-(1)
* - 169	*	*	4.6 <u>2.8</u>	内側にやや深んだ底部から曲線的に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 170	*	*	3.4 <u>2.8</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 171	*	*	3.2 <u>2.8</u>	*	*	I-A-(2)-(1)
* - 172	*	*	3.3 <u>3.4</u>	*	*	I-A-(2)-(1)
* - 173	*	*	3.9 <u>2.7</u> <u>2.1</u>	平底の底部から、一旦内側に立ち内で溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 174	*	*	2.9 <u>3.6</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面を折頭で強くつまむ。ナゲ調整。	I-A-(2)-(1)
* - 175	*	*	3.1 <u>2.5</u>	丸底の底部から、直線的に外方に立ち上がる。口縁部は尖り気味。	ナテ調整。	I-A-(2)-(1)
* - 176	S F 11	*	3.2 <u>2.7</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部のつくりが堅めて厚い。	*	I-A-(2)-(1)
* - 177	S F 1	*	3.1 <u>3.3</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がり、口縁部に綾を生じる。	口縁部内外面は、強い折曲江模。	I-A-(2)-(1)
* - 178	S F 2	*	2.7 <u>4.3</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	ナゲ調整。	I-A-(2)-(1)
* - 179	S F 1	*	3.7 <u>3.5</u> <u>2.1</u>	平底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-B-(2)-(1)
* - 180	S F 2	*	4.5 <u>3.1</u>	丸底の底部から内溝気味に立ち上がる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 181	*	*	4.4 <u>4.4</u>	丸底の底部から、一旦直線的に外方に立ち上がり、内側に屈曲。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 182	S F 1	*	3.7 <u>3.3</u>	丸底の底部から、内溝気味に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 183	*	*	3.3 <u>3.3</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	内面に折曲江模あり。	I-A-(2)-(1)
* - 184	S F 9	*	4.1 <u>3.7</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面を折頭で強くつまむ。	I-A-(2)-(1)
* - 185	*	*	3.8 <u>3.7</u>	*	*	I-A-(2)-(1)
* - 186	*	*	2.5 <u>3.2</u>	*	*	I-A-(2)-(1)
* - 187	*	*	4.0 <u>2.9</u>	丸底の底部から、外反して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 188	*	*	3.6 <u>3.4</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がり、口縁部は直をしてわずかに外反。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)
* - 189	*	*	3.6 <u>3.3</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がる。口縁部は尖り気味。	*	I-A-(2)-(1)
* - 190	*	*	4.0 <u>3.3</u>	丸底の底部から、内溝気味に立ち上がり、途中で内側に屈曲。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(1)

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 部高 度及 び底 部深	形態・文様	手法	備考
27-191	S F 9	土器器 手縫口縁	4.2 <u>3.7</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面を指標で強くつまむ。	I-A-(2)-(5)	
*-192	*	*	3.3 <u>3.1</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-193	*	*	3.4 <u>3.1</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-194	S F 9	*	3.8 <u>3.7</u>	*	*	I-A-(2)-(5)	
*-195	S F 1	*	3.3 <u>2.7</u>	丸底の底部から外反気味に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-196	*	*	3.2 <u>3.2</u>	丸底の底部から一旦内溝して立ち上がり、内側に直角。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-197		*	2.8 <u>2.4</u>	丸底の底部から、内溝して立ち上がり。口縁部は丸くおさめる。	内外面ナテ調整。	I-A-(2)-(5)	
*-198	S F 1	*	3.8 <u>2.3</u>	丸底の底部、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面を指標でつまむ。	I-A-(2)-(5)	
*-199	*	*	4.1 <u>3.7</u>	丸底の底部から、内溝気味に立ち上がる。唇部の凹凸が激しく、口縁部は尖り気味。	*	I-A-(2)-(5)	
*-200	S F 9	*	2.8 <u>2.9</u>	丸底の底部から、内溝気味に立ち上がり、口縁下に強い段を有す。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-201	S F 1	*	2.9 <u>3.2</u>	丸底の底部から内溝して立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-202	*	*	3.4 <u>3.7</u>	丸底の底部から内溝気味に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-203	*	*	2.9 <u>2.9</u>	丸底の底部から、内面に直角的に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)	
*-204	S F 8	*	3.1 3.0 <u>2.6</u>	平底の底いつくりの底部から、直線的に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	内外面に指標圧痕あり。	I-B-(2)-(5)	
*-205	S F 11	*	1.6 <u>1.7</u>	丸い粘土塊に泥を突込んで成形。	ナテ調整。	I-A-(1)-(2)	
*-206	*	*	(1.2)	丸底、上部欠損。	*	I-A-(2)-(5)	
*-207	S F 1	*	2.0 <u>2.3</u>	丸底で、内溝して立ち上がり。口縁部は尖り気味。	口縁部に指標圧痕。	I-A-(2)-(5)	
*-208	S F 11	*	2.7 <u>1.9</u>	丸い粘土塊に泥を突込んで成形。	ナテ調整。	I-A-(1)-(2)	
*-209	*	*	2.5 <u>2.1</u>	*	外面上部圧痕。ナテ調整。	I-A-(1)-(2)	
*-210	*	*	2.4 <u>2.3</u>	*	*	I-A-(1)-(2)	
*-211	S F 9	*	3.5 4.3 4.6 5.0 <u>3.1</u> <u>2.9</u>	扁球形の鋸部に、長い口縁部を有す。底部は丸くおさめる。長頸部の3/ニチ。 <u>アカ</u> 。	内外面に指標圧痕あり。	I-B	
28-212	*	*	*	丸底で、口縁部を強くつまむ。	口縁部外面に指標圧痕あり。	I-A-(2)-(5)	
*-213	*	*	4.8 <u>3.2</u>	厚いつくりの底部で。口縁部を外方につまみ出す。	口縁部内外面に指標圧痕あり。	I-A-(2)-(5)	
*-214	*	*	3.1 <u>3.9</u>	丸底で、口縁部を上方につまみ出す。	*	I-A-(2)-(5)	
*-215	*	*	3.3 <u>4.0</u>	*	*	I-A-(2)-(5)	

検査番号	遺構番号	器種	法量 器高 幅径 厚径 (cm)	形態・文様	手法	備考
28-216	S F 9	土器部 手捏り器	3.2 3.6	丸底で、口縁部内外面をつまみ出す。	口縁部内外面に指痕花痕あり。	I-A-(2)-(5)
*-217	*	*	3.2 3.2	丸底で、口縁端部は丸くおさめる。	内面に指痕花痕あり。外面ナデ調整。	I-A-(2)-(5)
*-218	*	*	3.6 2.6	*	*	I-A-(2)-(5)
*-219	*	*	3.7 3.0	*	*	I-A-(2)-(5)
*-220	*	*	2.9 3.1	*	外面ナデ調整。	I-A-(2)-(5)
*-221	*	*	3.8 3.2	*	内外面に指痕花痕あり。	I-A-(2)-(5)
*-222	S F 12	*	3.5 2.9	*	内面に指痕花痕あり。	I-A-(2)-(5)
*-223	S F 1	*	3.1 3.3	丸底で、口縁端部は尖り気味。	*	I-A-(2)-(5)
*-224	S F 11	*	3.6 3.3	裏しく器壁が厚い。	*	I-A-(2)-(5)
*-225	S F 9	*	2.5 3.5	丸底で、口縁部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5)
*-226	*	*	2.6 3.3	*	外面ナデ調整。	I-A-(2)-(5)
*-227	*	*	(2.5)	丸底。口縁部は欠損。	内面に指痕花痕あり。	I-A-(2)
*-228	*	*	2.2 3.2	丸底で、内溝して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	*	I-A-(2)-(5) 外表面の一部に黒斑あり。
*-229	*	*	3.0 3.0	*	外面ナデ調整。	I-A-(2)-(5)
*-230	*	*	3.2 3.3	*	外面ナデ調整。内面に指痕花痕あり。	I-A-(2)-(5)
*-231	*	*	3.5 3.4	丸底で、口縁部を指頭でつまみ上げる。	外面上に指痕花痕あり。	I-A-(2)-(5)
*-232	*	*	3.3 2.1	丸底で、口縁部は丸くおさめる。 指を押し込むのみで穿孔。	内面に指痕花痕あり。外面ナデ調整。	I-A-(2)-(5)
*-233	*	*	2.4 2.1	*	外面上に指痕花痕あり。	I-A-(2)-(5)
*-234	S F 12	*	6.2 4.1 3.1	平底で口縁部は尖り気味。	内面には、粘土をかきとったような指痕花痕がつく。	I-B-(2)
*-235	*	*	3.8 3.7 3.6 3.5	平底の底部。僅く肩が張り出しざた上側部に鋭い口縁部がつく。	口縁部以外面。内面に指痕花痕あり。	IV-A
*-236	S F 11	横柄造	径4.0 高(1.6)	比較的大きな鉢を、指頭でつまみ出す。表面は平滑面となる。	表面はナデ調整。表面及び縁には指痕花痕が現る。	
*-237	*	*	4.5 (3.3)	比較的大きな鉢を、指頭でつまみ出す。表面は、凸状を呈す。	*	
*-238	*	*	4.7 (2.5)	比較的大きな鉢を、指頭でつまみ出す。表面は、平滑面となる。	*	

持国番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 口徑 高さ 底径 底深	形態・文様	手法	備考
29-239	S F 6	須恵器 杯(蓋)	14.8 4.6 14.5 —	縁は短くに低い。 口縁部は、内傾する段を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/5を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	14-18 色調は、内外面とも青灰色。断面は赤灰色。
-240	S F 10	* *	15.0 4.7 14.6 —	口縁に比べて器高は低い。天井部 はややいびつ。 縁は短く、下に一条の凹痕がある。 口縁端部は鋸歯状。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	
*-241	*	* *	13.0 5.0 13.0 —	LH縁部は直立に下り、端部は内傾 する段をもつ。 天井部は高く、丸みを帯びる。 縁は断面三角形である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/5を回転ヘラ削 り調整。	
*-242	*	* *	13.0 4.4 13.0 —	口縁部は直立に下り、端部は尖る。 縁は短く、下に一条の凹痕が有る。 天井部は低く、中央部は平底である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	
*-243	S F 7	* *	13.8 5.0 12.7 —	口縁部はやや外方に開く。端部は 丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	14-18, B-D
*-244	*	* *	13.0 4.6 13.2 —	口縁部は短く、端部には内傾する 段を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。	
*-245	*	* *	12.4 5.1 13.7 —	LH縁に比べて器高は低い。 縁は短くにのみ。後の下に一条の 凹痕がある。 天井部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側4/5を回転ヘラ削 り調整。	
*-246	*	* *	15.1 5.0 14.3 —	天井部は低く丸味を帯びる。 口縁に比べて器高は低い。 縁はに低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側2/3を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。 天井部外側に「」の内記号。	H-18 S F 5 北
*-247	S F 5	* *	15.0 4.3 14.4 —	天井部は低く丸味を帯びる。 口縁部は直立に下り。端部は丸味 をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側4/5を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	14-18, B-D 297とセットで出 丁。
*-248	*	* *	14.8 5.0 14.6 —	天井部は低く丸味を帯びる。 縁は甘く、一帯の凹痕が腰下を回 る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側4/5を回転ヘラ削 り調整。	14-18, B-D
*-249	S F 10	* *	14.4 3.9 13.8 —	縁はきわめてに低い。 LH縁部高は低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	
*-250	*	* *	15.3 4.3 13.9 —	縁はに低い。 口縁部高は高い。天井部は低く、 平らである。 LH縁に比べて器高は低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	
*-251	*	* *	14.5 4.8 13.8 —	天井部は丸味を帯びる。 口縁に比べて器高は低い。 口縁部は、やや外方に開く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側4/5を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	305とセットで出 丁。
*-252	*	* *	14.6 4.2 14.7 —	口縁部は丸く、端部は丸みを帶 びる。 天井部は丸味をもち。中央部は平 らである。 縁は短く甘い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側1/2を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	303とセットで出 丁。 天井部外側に「」の内記号。
*-253	*	* *	15.8 4.8 15.1 —	天井部は丸味をもち。天井部高は 低い。 口縁部は丸味を帯びる。 縁はに低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部の外側4/5を回転ヘラ削 り調整。他は回転ナガ調整。	

博物館番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 脚径 底径	形態・文様	手 法	備 考
29-254	通鑑	頸部器 杯(蓋)		17.0 4.3 —	器高は低く、天井部は丸味を帯びる。 口縁端部は丸味をもつ。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部の外周1/3を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	
30-255	*	*		12.3 4.2 12.3	天井部は丸味を帯びる。 口縁部は比較的細い。 口縁端部には内側する段を有する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部の外周1/3を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	
*-256	S F 10	*		14.8 4.5 14.0	天井部は丸味を帯びる。 器高は甘く、口縁部と天井部の境は段をなさない。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部の外周1/3を回転ヘラ削り調整。	
*-257	*	*		14.1 4.5 —	口縁部は、やや内傾し、端部は丸味をもつ。 天井部は丸味を有する。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部の外周1/3を回転ヘラ削り調整。	
*-258	*	*		12.4 3.3 12.8	一側の凹面を向すことによって、 天井部と口縁部の層を形成す。 口縁に比べて器高は低い。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部の外周1/3を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	
*-259	*	*		— — —	天井部の破片。	内面に、円弧叩き目が施される。	
*-260	S F 5	*		14.7 4.5 —	天井部は丸く、中央部は平らである。 天井部と口縁部の層は、不明確である。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/5を回転ヘラ削り調整。	
*-261	*	*		15.0 4.8 —	天井部は丸味をもち、口縁部は内凹する。端部は丸味をもつ。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/2を回転ヘラ削り調整。	
*-262	*	*		15.0 3.8 —	口縁に比べて器高はさわめて低い。 口縁部高は低く、口縁端部は丸味を帯びる。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/2を回転ヘラ削り調整する。 天井部外周に「 <u>ヒ</u> 」のヘラ記号をもつ。	天井部外周に、自然縞が付着する
*-263	S F 6	*		14.4 4.3 —	天井部は丸味を帯びる。 口縁部は内凹しておわら。端部は尖る。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/2を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	土佐国御所 S 7-01. No. 76 杯蓋に類似した文様を、 口縁端部外周にもつ。
*-264	S F 5	*		14.4 4.1 —	口縁端部は丸味をもつ。 器高は低い。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部の外周1/2を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	14-18 B-D
*-265	*	*		13.8 3.8 —	口縁部は、やや外反し、端部は尖る。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/2を回転ヘラ削り調整。	14-18
*-266	*	*		14.2 4.3 —	全体的に丸味をもつ。 口縁端部は、丸味をもつ。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/5を回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	14-18
*-267	*	*		12.8 4.0 —	器高は低く、全体的に丸味をもつ。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周は、ヘラ切り末脚製。 天井部外周に、「 <u>フ</u> 」状のヘラ記号をもつ。	14-18 B-D
*-268	*	*		13.1 4.1 —	全体的に丸味を帯びる。 口縁端部は丸味をもつ。	マキアゲ。ミズビキ成形。 天井部外周の1/2を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-4

辨認番号	通構番号	器種	法基 (cm)	口縁 器高 脚底 底径	形態・文様	手法	備考
30-269		環唇	頭裏唇 杯(蓋)	13.6 4.0 —	口縁部は内済しており、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 大井部外面の2/3を回転ヘラ削りする。	14-18, B-D
~ -270	S F 5	*	*	14.2 4.8 —	器高がさわめて低い。 口縁端部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18
31-271	*	*	*	15.0 3.9 —	天井部は平田で、器高はさわめて低い。 口縁端部は内済する。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18 S F 5 北
~ -272	*	*	*	11.6 3.3 —	器高は低く、口徑も小さい。 口縁端部は内焼する凹面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18
~ -273	*	*	*	13.4 4.9 —	天井部は半円である。 口縁端部は丸く、口縁端部に凹線が一点ある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部は、ヘラ切り来調整。	14-18
~ -274	*	*	*	13.2 4.1 —	天井部は丸く、口縁部は内済する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面の4/5を回転ヘラ削り調整。 大井部外面に凹孔叩き目が残る。	371-11
~ -275	S F 6	*	杯(身)	11.2 3.9 2.9 受部径 13.4	たちあがりは内側し、準面は凹面をもつ。 受部は短く水平にのびる。 底部は丸く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	14-18 S F 5 北
~ -276	*	*	*	12.2 4.8 2.1 受部径 14.6	たちあがりはやや内傾し、底部は平頂な面をもつ。 受部はや長く、上外方へののびる。 底部は比較的の浅く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
~ -277	B 壶	*	*	10.4 4.7 2.0 受部径 12.8	たちあがりは、ほぼ直面にのびる。 底部は坦な面をもつ。 受部は短く、上外方へのひび。 底部はや丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
~ -278	環唇	*	*	10.0 4.7 1.5 受部径 12.6	たちあがりは無く、器底内間に内傾する段をもつ。 受部は比較的長い。 底部は丸味を帯びる。外側一面に自然袖が付着する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
~ -279	*	*	*	11.2 5.2 1.6 受部径 13.6	たちあがりはハ字形に内傾する。 受部は短く、底部三角形を呈する。 底部は丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
~ -280	S F 10	*	*	9.6 4.6 1.4 受部径 12.0	たちあがりは短く、内傾する。 たちあがり高1.4 底部は丸味をもつ。 底部外周に「ノ」字のへら記号を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
~ -281	*	*	*	10.9 4.5 13.6 1.7	たちあがりは短く内傾である。 底部は丸く、平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	小石立彌をそえる。 (1個は砂岩剝石。)
~ -282	*	*	*	12.6 6.3 1.6 受部径 15.2	器高が高く、器部は深い。 受部は比較的の長く、上外方へのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調整。	
~ -283	*	*	*	13.3 4.5 1.3 受部径 15.7	口縁に比べて、器高はさわめて低い。 底部は丸味をもち、低い。 底部端部内間に段をもつ。 底部外周に、自然袖が付着する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周4/5を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	14-18, B-D

押送番号	通査番号	SS 様	法量 (cm)	口経 番高 胸径 底径	形態・文様	手 法	備 考
31-284	S F 7	須磨器 杯(舟)		12.4 5.1 たらあがり高 1.5 受部径 14.9	たちあがりは内傾し、縁部は尖る。 受部は細く長い。 底部は丸味をもつ。 底部外周に斜状のヘラ記号を有し、自然顔が付着する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調整。 他の回転ナガ調整。	14-18, B-D 白玉(435, 436) 2 個、土石 5 個をい れる。
*-285	S F 5	*		12.0 5.2 たらあがり高 0.9 受部径 14.8	たちあがりは短く内傾する。 受部は細く、上外方へのびる。 底部は比較的深く。丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調整。 他の回転ナガ調整。	14-18, B-D
*-286	S F 7	*		12.2 5.2 たらあがり高 1.5 受部径 15.4	受部は短く、丸味を帯びる。 底部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-D 小石 1 個をそえる。
*-287	S F 10	*		13.2 4.4 たらあがり高 1.1 受部径 15.6	たちあがりは短く内傾する。 受部は比較的長く、外上方へのびる。 底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調整。	小石 1 個、炭化木 片が内部から出で る。
*-288	*	*		13.2 4.9 たらあがり高 1.3 受部径 16.0	たちあがりは短く内傾する。 受部は上外方へのびる。 底部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3以上を回転ヘラ削り調 整する。 底部内面は、指ナガ調整を施す。	砂岩製石 6 個をそ える。
32-289	*	*		13.0 4.4 たらあがり高 1.4 受部径 14.8	たちあがりは、ハ字型に内傾し。 通部は丸味をもつ。 受部は甘く、丸味をもつ。 底部は丸味をもつ。 底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3を回転ヘラ削り調 整する。	砂岩小石 1 個をそ える。
*-290	*	*		12.2 3.7 たらあがり高 1.5 受部径 14.5	ハ字型にたちあがり、通部は平ら な面をもつ。 受部は短く丸味を帯びる。 底部は比較的平らに近い。 底部外周に斜状のヘラ記号を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3を回転ヘラ削り調 整する。	
*-291	*	*		12.3 4.8 たらあがり高 1.5 受部径 14.9	ハ字型にたちあがり、通部は内傾 する段をもつ。 底部は平らたい。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調 整する。	102-106
*-292	S F 5	*		12.5 4.8 たらあがり高 0.9 受部径 15.3	ハ字型にたちあがり、縁部は尖る。 受部は丸味をもつ。 底部の一部を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3を回転ヘラ削り調 整する。	14-18
*-293	*	*		13.8 4.8 たらあがり高 1.3 受部径 16.2	口縁端部は丸味をもつ。 受部は比較的長い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3を回転ヘラ削り調 整する。	14-18
*-294	*	*		12.6 4.5 たらあがり高 1.2 受部径 15.3	たちあがりは短く、縁部は丸味を もつ。 受部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調 整する。	14-18
*-295	*	*		13.0 3.8 たらあがり高 1.1 受部径 15.4	口縁に比べて、脚高は低い。 たちあがりはハ字型に内傾する。 受部は上外方へのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調 整する。 底部内面に同心円印き目が残る。	14-18
*-296	*	*		12.3 4.2 たらあがり高 1.1 受部径 14.8	たちあがりは短く。ハ字型に内傾 する。 たらあがり高 1.1 受部は短く丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調 整する。	14-18
*-297	*	*		12.8 4.3 たらあがり高 1.1 受部径 15.0	たちあがりは短い。 受部は外上方へのび、縁部は丸味 をもつ。 底部は低く、いじつである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周2/3を回転ヘラ削り調 整する。	247 とセッテで出 土。
*-298	*	*		13.0 3.7 たらあがり高 1.1 受部径 15.6	たちあがりは強く内傾する。 受部は丸味を帯びる。 底部は平らたい。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周1/3を回転ヘラ削り調 整する。	14-18

接頭番号	通構番号	器種	法量 (cm) 制作 底盤	形態・文様	手 法	備 考
32-299	留置	楕圓器 杯(身)	12.0 4.2 たちあがり高 1.1 受部径 14.3	受部端部は短く丸味を帯びる。 底部は丸味をもつ。 たちあがりは短い。 受部径	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	
+ -300	S F 5	*	12.8 4.8 たちあがり高 1.0 受部径 15.3	受部は短く外下方へのびる。 底部はややいびつである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。	
+ -301	S F 10	*	11.8 4.8 たちあがり高 1.0 受部径 14.4	受部は外上方へのびる。 底部中央部は平らたい。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。	
+ -302	*	*	12.6 4.6 たちあがり高 1.3 受部径 15.7	たちあがりは短く、内縮する。 受部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。	
+ -303	*	*	12.6 4.3 たちあがり高 15.2 受部径 1.0	たちあがりはハ字型に内縮する。 受部は短く、丸味をもつ。 器身は比較的の低く、底部からならかに尖部へ傾く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	252とセットで出土。
+ -304	*	*	12.8 4.4 たちあがり高 1.1 受部径 14.9	たちあがりは短く内縮する。 受部は短く、溝部は丸味をもつ。 底部は比較的の平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。	
33-305	*	*	12.4 4.7 たちあがり高 1.3 受部径 14.9	たちあがりはハ字型に内縮し、端部は丸味をもつ。 受部は短く、ほぼ水平へのびる。 底部は比較的の深い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4/5を回転ヘラ削り調整。	251とセットで出土。
+ -306	S F 6	*	12.8 4.8 たちあがり高 1.2 受部径 15.1	受部は外上方へ短くのびる。 底部は比較的の深く、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4/5を回転ヘラ削り調整。	
+ -307	S F 10	*	12.2 4.5 たちあがり高 1.3 受部径 14.9	受部は短く、外上方へのびる。 U線端部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。 底部内面に円弧叩き目が残る。	
+ -308	*	*	12.8 4.5 たちあがり高 1.0 受部径 14.9	受部は外上方へのびる。 たちあがりは内縮する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4/5を回転ヘラ削り調整。 底部内面に円弧叩き目が残る。	
+ -309	*	*	13.6 4.9 たちあがり高 1.6 受部径 16.0	たちあがりは比較的の高く、端部は丸味をもつ。 底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3を回転ヘラ削り調整。 底部内面に同心円叩き目が残る。	
+ -310	*	*	12.8 4.9 たちあがり高 1.4 受部径 15.6	底部は丸味を帯び、比較的のならかに尖部へ傾く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3を回転ヘラ削り調整。	
+ -311	*	*	11.8 4.6 たちあがり高 1.3 受部径 14.2	たちあがりは短く、水平へのびる。 底部は全体的に丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3を回転ヘラ削り調整。	
+ -312	S F 2	*	11.4 4.4 たちあがり高 1.2 受部径 14.2	たちあがりは短く、溝部は丸味をもつ。 受部は外上方へのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3を回転ヘラ削り調整。	
+ -313	*	*	12.8 4.2 たちあがり高 1.3 受部径 15.0	器高は低く、底部は平らである。 たちあがりは短い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4/5を回転ヘラ削り調整。	

津田番号	清掃番号	器種	口径 器高 側径 底径 底深	形態・文様	手 注	備 考
33-314	S F 10	兩面器 杯(身)	12.6 4.5 たちあがり高 1.4 受部径 15.2	たちあがりは八字型に内傾し、端部は丸い。 受部は近く、丸味を帯びる。 底部外縁に「ノ」状のヘラ記号をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁1/3を回転ヘラ削り調整。 他是回転ナガ削彫。	
*-315	*	*	13.8 4.5 たちあがり高 1.1 受部径 14.6	受部は短く、外上方にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁2/3を回転ヘラ削り調整。	
*-316	S F 6	*	12.1 4.7 たちあがり高 1.2 受部径 14.7	底部からなだらかに受部にのびた 器高をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁4/5を回転ヘラ削り調整。	14-18
*-317	S F 5	*	12.4 4.5 たちあがり高 0.8 受部径 14.7	たちあがりは短い。 底部は水平にのび、上縁は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁2/3を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-D
*-318	*	*	14.2 4.8 たちあがり高 1.5 受部径 17.2	口徑大で、底部は全体的に丸味を 含む。 受部は外上方へのび、上縁に凹面 をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁4/5を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-D
*-319	*	*	12.8 4.6 たちあがり高 1.0 受部径 15.2	たちあがりは短く、端部は丸味を 含む。 底部は全体的に丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁4/5を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-D
*-320	*	*	12.0 4.3 たちあがり高 1.2 受部径 14.8	たちあがりは厚く内傾してのびる。 受部は短く、水平にのび、底部は 丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁1/3を回転ヘラ削り調整。 底部内面に同心円又は円弧叩き 目が残る。	
34-321	*	*	12.1 4.1 たちあがり高 1.2 受部径 15.0	器高は低く、底部は全周的に丸味 を含む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁2/3を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-D
*-322	*	*	12.0 3.9 たちあがり高 1.0 受部径 14.8	たちあがりは短く内傾する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁2/3を回転ヘラ削り調整。	14-18, B-D
*-323	S F 8	*	11.5 4.2 たちあがり高 1.1 受部径 14.2	たちあがりは短く内傾し、端部は 丸い。 底部は全体的に丸味をもつ。 底部外縁に「ノ」状のヘラ記号を もつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁2/3を回転ヘラ削り調整。	
*-324	S F 4	*	13.0 5.0 たちあがり高 0.9 受部径 14.8	たちあがりは施して短く、端部は 丸い。 受部は水平に長くのびる。 底部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁2/3を回転ヘラ削り調整。	
*-325	*	*	12.0 4.0 たちあがり高 1.1 受部径 14.4	たちあがりは、やや内傾して垂直 にのびる。 受部は短く丸味を含む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁1/3を回転ヘラ削り調整。	
*-326	*	*	13.4 3.8 たちあがり高 1.0 受部径 14.0	口徑に比べて器高は低い。 受部は長く外方へのびる。 底部外縁に「ノ」状のヘラ記号を有 す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁1/3を回転ヘラ削り調整。	
*-327	*	*	11.8 3.8 たちあがり高 0.9 受部径 14.6	たちあがりは厚く内傾する。 受部は近く水面上にのびる。 底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁1/3を回転ヘラ削り調整。	
*-328	S F 5	*	13.0 3.6 たちあがり高 0.9 受部径 15.4	器高は低く、浅い。 たちあがりは短く内傾する。 受部は短い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁1/3を回転ヘラ削り調整。	

押出番号	邊機番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 脚径 底径	形態・文様	手法	備考
34-329	S F 6	瓶 壺 杯(身)		13.2 3.9 たらあがり高 0.9 受部径 16.0	たらあがりは極めて短い。 受部は水平にのびる。 底部は平らたい。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、ヘラ切り未調整。	14-18, B-D S F 5北
△-330	*	*	11.6 5.1 たらあがり高 0.6 受部径 14.4		たらあがりは極めて短い。 器高は高く、底部は深い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、ヘラ切り未調整。	14-18, B-D
△-331	S F 5	*	13.2 4.0 たらあがり高 1.0 受部径 15.8		口縁に比べて器高が低く、浅い。 底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側中央、ヘラ切り未調整。	14-18, B-D
△-332	*	*	12.6 (4.0) たらあがり高 0.8 受部径 14.2		たらあがりは短く、やや内側する。 受部は外上方へのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。	
△-333	*	*	12.2 3.7 たらあがり高 0.9 受部径 14.6		たらあがりは内傾し、底部は丸味 を寄せる。 受部はやや水平にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側に「フ」状のへり記号をもつ。	14-18, B-D
△-334	*	*	12.1 3.6 たらあがり高 0.8 受部径 14.9		器高は低く、底部は丸味を帯びる。 受部基部に円錐をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、ヘラ切り未調整。	14-18, B-D
△-335	*	*	12.4 3.9 たらあがり高 0.9 受部径 15.0		受部基部に凹縫をもつ。 受部は長く、先端は丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18, B-D
△-336	*	*	13.0 3.1 たらあがり高 0.8 受部径 15.4		たらあがりはきわめて短い。 受部は外上方へのび、通體は丸い。 底部は平らである。 底部の「足」を欠損する。 底部外側に「X」状のへり記号をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18, B-D
△-337	*	*	13.8 3.5 たらあがり高 0.9 受部径 16.7		器高は低く、底部は平らである。 受部は比較的長く、外上方へのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18, B-D
35-338	*	高杯(蓋)	13.6 4.2 12.1 つまみ径 3.3 つまみ高 0.9		天井部と口縁部の境には、一条の 凹縫が引る。 天井部の中央には、断面四角の扁 半なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみは、ハリツカによる。 天井部外側1/2を回転ヘラ削り 調整。	
△-339	*	*	14.5 4.0 大井 4.5 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5		口縁部は、比較的低く、通體は 丸味をもつ。 大井部の中央には、断面四角の扁 半なつまみを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみは、ハリツカによる。 天井部外側1/2を回転ヘラ削り 調整。 他は、回転ナデ調整。	19-21
△-340	*	*	14.4 4.5 13.7 つまみ径 3.2 つまみ高 0.8		口縁部はやや内傾する。 天井部と口縁部の境には、一条の凹 縫が引る。 天井部の中央には、扁半なつまみを 付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみは、ハリツカによる。 天井部外側1/2を回転ヘラ削り 調整。	19-21
△-341	*	*	13.6 4.2 12.1 つまみ径 3.2 つまみ高 0.9		つまみ以下を欠損する。 断面四角の扁半なつまみである。	つまみは、ハリツカによる。	
△-342	*	*	14.5 3.4 10.4 4.3 6.0		天井部中央以下を欠損する。 大井部は丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみは、ハリツカによる。	
△-343	*	高杯(脚部)	6.0 10.4 4.3 6.0		脚部欠損。 脚部は基部より外反して下がり、 強く下内方へ弧曲しておわる。 脚部三方向に直方形のスカラシ窓を もつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部、回転カキ目調整。 靴は回転ナデ調整。	

標図番号	遺傳番号	性 種	口径 汎量 (cm) 胸郭	形 态・文 細	手 法	備 考
35-344		雄	12.4 11.5 3.6 6.9 8.8	口縫体部は外方へ外彌してのび、 体部中位に2条の凸線を認らす。 脚部には三方向長方形のスカシを 一段現む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部は回転ナダ調整。	色調は外深青灰色。 内面灰色。
*-345	S F 10	*	11.0 14.0 3.4 10.3 7.6	口縫体部は外方へ外彌してのび、 体部中位に2条の凸線を認らす。 その下方に波状文による文様をもつ。 脚部は三方向長方形のスカシを現む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部は、回転ナダ調整。	
*-346	*	*	11.4 14.0 3.2	脚部の吸片である。 11脚体部中位に凸線をもち、その 下部に波状文による文様をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。	14-18, B-D
*-347	*	*	12.3 14.0	口縫端は丸味をもつ。 口縫体部下方に2条の凸線を認らす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部は回転ナダ調整。	
*-348	*	*	12.6 6.4 ---	脚部の吸片である。口縫体部は、 外上方へ外彌してのび、脚部は丸 くおさめる。 体部中位に凸線を認らす。	マキアゲ、ミズビキ成形。	
*-349	S F 5	*	12.1 5.0	口縫部は、体部中位から外反気味 にのびる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外腹部外側は、回転ヘラ削り調 整。 脚部は回転ナダ調整。	
*-350	*	*	10.4 3.1	脚部上半、脚底部を欠損する。 脚部中位に2条の凸線を認らす。 二段四方向長方形のスカシを現 む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	
*-351	*	*	5.0 4.7 3.6 9.9	脚部上半、脚底部を欠損する。 脚部を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	
*-352	*	*	18.0 5.5 17.3 18.0	脚部の広がった、長脚の脚部をもつ。 脚部を欠損する。 二段三方向長方形のスカシを現 む。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	
*-353	*	*	14.5 3.7 13.4	脚部上端、脚部を欠損する。 二段三方向長方形のスカシを現 む。 外端面は、丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	
*-354	*	*	3.7	花形端は、四面をもつ。 脚部中位に2条の凸線を認らす。 上方に、二方向の凹孔を認む。	マキアゲ、ミズビキ成形。	
36-355	*	*	11.4 11.6 7.8 5.0 3.1 10.3	脚のたたらあがりは近く、受部は上 外方へのびる。 脚部は、下外方へ外反し、さらに 内渦気味に屈曲しておわる。端部 は平緩な圓をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。 脚部外側は、回転ヘラ削り調 整。	
*-356	*	*	6.9 3.9 4.0 10.6	脚部上半を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	
*-357	S F 9	*	12.0 15.9 16.3 6.7 3.9	口縫部は外反して上方へのび、 中位で外方へ屈曲し、縫部は内側 する平面を認む。口縫部、脚部には 波状文による文様をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	
*-358	雌	*	9.6 9.3 4.6 2.7	口縫端上下を欠損する。 体部最大径は、中位にある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	

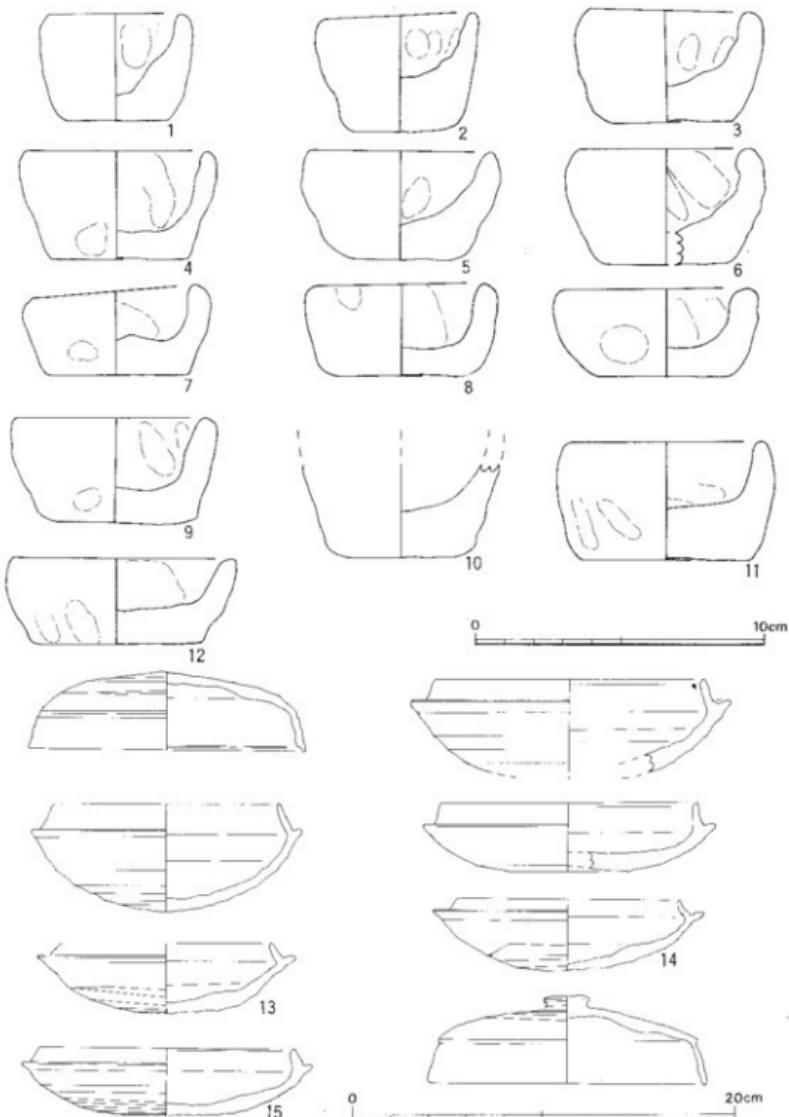
接図番号	造形番号	器種	法量 口徑 蓄葉 脚延 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
36-359	留葉	黑漆器 加藤窓(蓋)	12.0 4.2 11.7 —	有蓋短筒型の蓋で、丸井部は丸味をもち、楕は妙くにぶり。 口縁端部には内傾する段を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 楕は圓軸ナナ子調整。	
*-360	*	* 蓋	8.0 6.4 —	頭部は直くちあがり、蓋部は丸味をもつ。 傳説最大径は上半にある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部は、回転カキ目調整。	
*-361	*	*	8.8 8.4 11.7 —	頭部は比較的長く、やや外反してのびる。 体部下半に最大径をもち、底部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部は、回転ヘラ削り調整。 楕は同軸ナナ子調整。	
*-362	*	*	14.4 9.0 —	体部は、中央位に最大径をもち、内済する体部から、ほほ直線にたかがる頭部をもつ。 体部下半を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 同軸ナナ子調整。	14-18. B-D
*-363	*	* 綾頭蓋	7.8 7.7 12.0 6.0 —	垂直にたちあがる頗る頭部をもつ。 体部最大径は、上半にある。 底部は平型である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 同軸ナナ子調整。	14-18. B-D
*-364	*	* 黒漆蓋	8.3 16.9 12.6 —	口縁部は基部から外反してたちあがり、兩端は肥厚する。 頭部中央に二条の凹縫を回らし、両腰間に刺文を施す。 台を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 同軸ナナ子調整。	14-18. B-D S F 5 北
37-365	*	*	12.6 10.4 10.8 —	頭部は直く。口縁端部は斜上方へ傾く屈曲する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 同軸ナナ子調整。 内面、同心円明き目を施す。	14-18. B-D
*-366	S F 5	*	11.4 4.2 —	頭部はきわめて短く、端部を肥厚させす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外面平行タタキ、内面同心円タタキを施す。	14-18. B-D
*-367	*	*	12.4 4.5 —	頭部は、基部から外反気味にたちあがらせ、端部は丸味をもって肥厚する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 頭部は下、外面平行タタキ、内面同心円タタキを施す。	
36-368	S F 4	*	11.4 6.6 —	頭部以下を欠損する。 頭部はゆるやかに外反してたちあがる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナナ子調整。	14-18. B-D
*-369	*	* 細頭蓋	9.3 9.2 —	頭部は長く、頭部上半で強く外反する。 端部は丸味をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 同軸ナナ子調整。	
38-370	直壁	*	27.0 20.0 —	口縁部はゆるやかに外反してたちあがり、端部に断面三角形の棱を有する。 頭部に1条(6本)の流状文を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面は、『涼なスリケ』と調整を行なう。	
37-371	S F 5	*	36.8 92.4 72.4 33.6 —	大甕である。口縁部はゆるやかに外反し、さらに外方へ屈曲させ、頭部に断面凸状の段を有する。頭部に凸筋によって区画された液状文による文様をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外面平行タタキ、内面同心円タタキを施す。	
*-372	*	*	19.0 4.8 —	口縁部は、頭部を上にのぼし、外側面は凸筋をもす。 口縁部下半以下を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部下半以下を欠損する。 楕は、同軸ナナ子調整。	
*-373	S F 10	*	41.4 84.4 70.0 23.0 —	口縁部は外済気味にのび、頭部は上下にのぼる。 口縁部外側の凸筋の間に、上下に1条の波状文を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外面平行タタキ、内面同心円タタキ。 楕は同軸ナナ子調整。	

辨別番号	遺漏番号	器種	法量 器高 柄径 成形	形態・文様	手 法	備 考
37-374	374	環頭	21.0 残存高 18.6 —	口頭部は外反した後、端部で屈曲する。頭部外側面には2段の、波状による文様帶をもつ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面、回転ナガ調整。 口頭部外側、回転カキ日調整。	
38-375	S F 7	*	30.0 残存高 13.1 —	口頭部は外反してのび、瘤部で上にのばす。 全体下半を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 頭部外側面、平行タタキ。	14-18
*-376	S F 5	*	20.1 31.0 28.7 9.0	口頭部は外反し、瘤部で上下にのばして外端面が凸状をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	14-18, B-D
*-377	*	*	17.6 31.4 32.0 11.4	口頭部は細く、外反して瘤部で下にのばす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	97-116
*-378	*	*	18.4 残存高 31.0 32.4	口頭部は外反した後、瘤部で上下にのばす。 全体下半を欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	
39-379	*	*	16.8 28.5 28.3 8.5	口頭部は外反し、外端面は凸状をなす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	14-18, B-D
38-380	S F 6	*	17.7 33.0 29.8 8.4	口頭部は外反し、瘤部で上へのばす。 食入縫は、頭部中央位にある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	14-18, B-D
*-381	S F 4	*	20.8 44.7 41.2 9.0	口頭部は外反し、瘤部を上外方に屈曲させる。瘤部は丸味をもつ。 食入縫は、頭部上位にある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	14-18, B-D
*-382	S F 10	*	21.2 33.8 33.8 13.4	口頭部は外反し、瘤部は丸みをもつ。 食入縫は、頭部中央位にある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面同心円タタキ。	
*-383	*	*	17.0 残存高 7.5 —	口頭部は外反した後、瘤部で外下へ肥厚する。瘤部は丸味を帯びる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部外側、回転カキ日調整。	
*-384	*	毫(京部)	底部の破片。 残存高 4.3 — 18.0	底部の破片。 底部は平壌である。	マキアゲ、ミズビキ成形。 系切り施。	97-116 系切り施で混入品。
*-385	*	毫(京部)	—	頭部の破片。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面円弧タタキ。	
*-386	*	*	—	頭部の破片。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面円弧タタキ。	
40-387	*	*	—	頭部の破片。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面円弧タタキ。	
*-388	*	*	—	頭部の破片。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外側平行タタキ後、カキ日調整。 内面円弧タタキ。	
*-389	S F 5	*	残存高 20.7 基部径 5.1 —	口頭の体部に口頭部を付す。 口頭部上半を欠損する。 瘤部には、2個1対(1個欠損)の瘤状の把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部、把手はハリツケによる。 体部外側、回転カキ日調整。 他は回転ナガ調整。	14-18, B-D
*-390	*	*	残存高 10.4 基部径 3.2 —	口頭部の破片。 口頭部は外反してのび、瘤部は外方へ強く盛りだす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部、把手はハリツケによる。 体部外側、回転カキ日調整。 他は回転ナガ調整。	14-18, B-D
*-391	*	*	7.6 残存高 22.4 基部径 6.1 —	体部下半を欠損。 口頭部、体部下半を欠損する。 瘤部に、2個1対の丸味をもつ把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部、把手はハリツケによる。 体部外側、回転カキ日調整。 他は回転ナガ調整。	
*-392	*	*	残存高 8.0 基部径 5.2 —	口頭部、体部下半を欠損する。 口頭部、瘤部下半を欠損する。 瘤部に、2個1対の丸味をもつ把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 体部外側、回転カキ日調整。 他は回転ナガ調整。	14-18, B-D

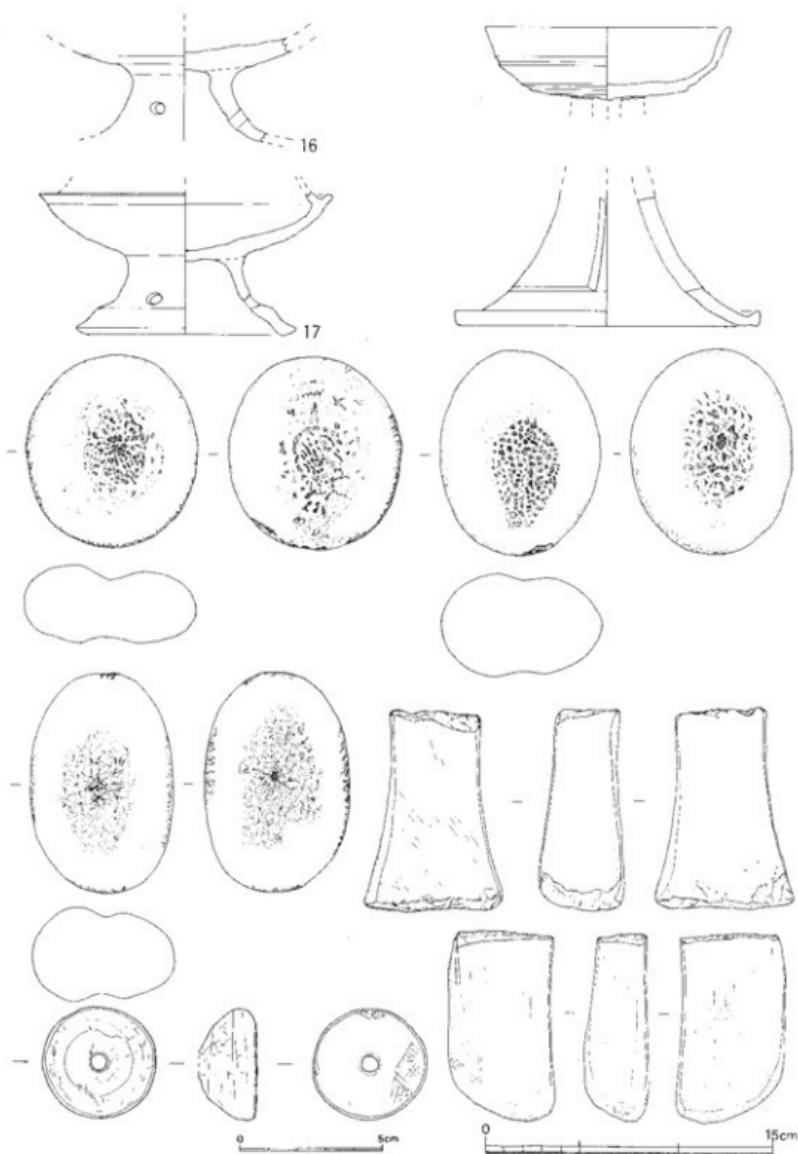
博物番号	遺構番号	器種	長径(cm) 幅(横)(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	石材	特徴	備考
41-393	複層	叩石	10.4 7.6 6.3 708	砂岩	卵形の河原石で、2面に叩打痕が認められる。	
41-394	*	*	5.0 6.2 3.9 155	*	大部分が欠損している。1面に美しい叩打痕が認められ、凹状を呈す。	
41-395	*	*	9.5 9.5 5.1 560	*	一方の正面中央部に著しい叩打痕が見られる。	
41-396	*	*	8.7 5.6 1.9 145	*	扁平な河原石を利用しており、半分が欠損している。両正面の中央部に叩打痕が見られる。	
41-397	複層	*	8.4 8.1 4.1 429	*	平面形は、卵形に近く河原石である。両正面中央部に著しい叩打痕が見られ、両面共に凹状を呈す。また縦部にも弱い叩打痕が見られる。	
41-398	直層	*	10.0 10.5 4.8 955	*	不整粒扁平な河原石であり、一方の正面の中央部に叩打痕が見られる。	
41-399	複層	*	11.4 8.3 4.0 620	*	不整粒円形をなし、両正面中央部と縦部に叩打痕がある。両正面は、著しく凹状を呈す。	
42-400	*	*	10.7 7.3 2.7 295	*	不整粒円形で、扁平な河原石である。両正面の中央部に叩打痕が見られるが、一方の面の使用頻度が高く、著しく凹状を呈す。	
41-401	*	*	13.4 11.1 2.4 445	*	河原石を板に打削している。自然面と剥離面とからなり。自然面の中央部に叩打痕が見られる。	
41-402	*	*	9.4 5.8 1.3 115	*	不整粒円形で、扁平な河原石である。両側縁端部近くに左右対称的に叩打痕がある。	
41-403	*	*	10.7 9.8 6.0 290	*	平面形が、卵形に近く河原石を利用。両正面と縦部の一部に叩打痕がある。両正面中央部は、叩打により凹状を呈す。	
41-404	*	*	15.1 11.2 3.6 865	*	不整粒円形で、扁平な河原石の一方の長側縁から打削している。自然面の中央部に叩打痕が見られる。	
41-405	*	*	11.9 11.1 6.6 1340	*	平面形は、ほぼ円形を呈す。両正面中央部に叩打痕が見られる。	
41-406	*	*	14.8 5.6 5.4 726	*	断面方形で棒状を呈す。相対する2面に叩打痕が見られる。	
43-407	*	砾石	13.9 15.8 3.7 1290	*	2面を砥石として使用、他面には弱い柔痕が認められる。	
41-408	*	*	16.3 8.0 4.8 905	*	棒状の河原石を使用。2面が砾石として使用されている。	
41-409	*	*	15.3 9.5 3.7 910	*	断面三角形で棒状を呈する河原石である。使用面は1面。	
41-410	*	*	13.3 3.3 4.2 375	*	棒状を呈する河原石である。使用面は1面。	
41-411	*	用途不明	17.8 8.0 4.5 520	*	断面方形で棒状を呈する河原石で、部分的に剥離痕が見られる。	一部剥ける。
41-412	*	*	12.0 8.5 6.2 770	*	自然面は、研磨されている。	*
41-413	*	*	12.9 8.0 7.9 1020	*	4方向から打削されている。	火を受けている。
41-414	*	*	9.9 8.6 3.6 205	*	自然面は、研磨されている。	*
41-415	*	*	8.1 4.7 10.9 740	*	自然面は、上下2面に残り他の4面はすべて剥離面。	

標図番号	測定番号	器種	長径(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	石 材	特 訴	備 考
44-416	44-416	砥石	13.8 6.1 2.9 395	砂 岩	研石としての使用面は2面。一方の上面には、叩打痕がほぼ全面に広がる。	
*-417	44-417	砥石	12.9 4.8 5.1 480	*	中央部にふくらみをもった柱状の叩石。一方の端部に叩打痕が複数あるが、他方は研磨によりなめらかな面をなす。	
*-418	44-418	砥石	16.8 4.8 4.2 650	*	棒状の円筒石を使用している。一面は砥石として使用され、3か所に叩打痕がある。	
*-419	44-419	砥石	21.0 7.5 2.8 680	*	断面方形で、平面形は三角形を呈す。一方4面に叩打痕がある。また、その面は砥石としても使っている。	
*-420	44-420	砥石	19.1 14.3 2.1 1973	*	断面方形で、平面形は三角形を呈す。使用面は3面。	
*-421	*-421	用済不明	18.5 3.7 2.1 315	*	棒状を呈し、加工痕は見られない。	
*-422	*-422	砥石	18.8 6.2 7.9 1565	細粒砂岩	使用面は、4面でうち2面には叩打痕あり。	
*-423	*-423	用済不明	11.8 2.0 1.5 82	*	棒状を呈し、加工痕は見られない。	複数ける。
45-424	*	*	15.4 13.8 7.1 1805	細粒砂岩	棒状を加工により丸めている。	
*-425	*	*	14.0 2.2 6.0 1040	*	欠損部以外全面研磨されている。	
*-426	*	*	30.3 12 9.5 3109	砂 岩	加工痕なし。	
*-427	*	*	20.5 12.2 7.1 2190	砂質泥岩	*	
*-428	*	*	5.2 7.5 2.6 172	砂 砂	使用痕は見られず。	火を受けた変色。
*-429	*	*	17.4 10.4 3.1 820	*	*	
46-430	*	砥石	7.0 2.9 2.6 104	細粒砂岩	断面方形を呈し、4面を使用。	搽けている。
*-431	*	*	3.4 6.1 3.3 250	*	*	
*-432	*	*	6.2 2.9 2.9 55	*	断面方形を呈し、4面を使用。一端に5mmの貫通孔あり。	
*-433	*	*	6.6 2.4 2.7 48.3	*	断面方形を呈し、4面を使用。一端に3~4mmの貫通孔あり。 使用面に墨痕あり。	
*-434	*	白玉	7mm 7mm 1mm 1.9g	滑 石 製	*	
*-435	*	*	5mm 5mm 2mm 0.2g	*	*	
*-436	*	*	5mm 5mm 1mm 0.2g	*	*	
*-437	*	碧玉	長さ 2.3cm 幅 0.8cm 厚さ 1.9cm 重量 1.9g	碧 玉 製	半透明しく弱耗している、径3mmの円孔あり。	
*-438	*	彷彿草	径 3.7cm 厚さ 1.6cm 重 量 33.2g	滑 石 製	ドーム状の断面。内緑色に発色。外表面に円孔を中心にして2重の器縫をめぐらし、外面上に7箇の透肉穴を配す。断面内側には植物目を施す。円孔の径は7mm。	
*-439	*	*	径 3.5cm 厚さ 1.7cm 重 量 30.2g	*	断面五角形。外緑色に発色。外表面に円孔を中心にして2重の器縫をめぐらし、中心から放射線状に、透肉穴を配す。断面には、上下2体の沈縫をめぐらし、更に断面方向に沈縫を配す。	

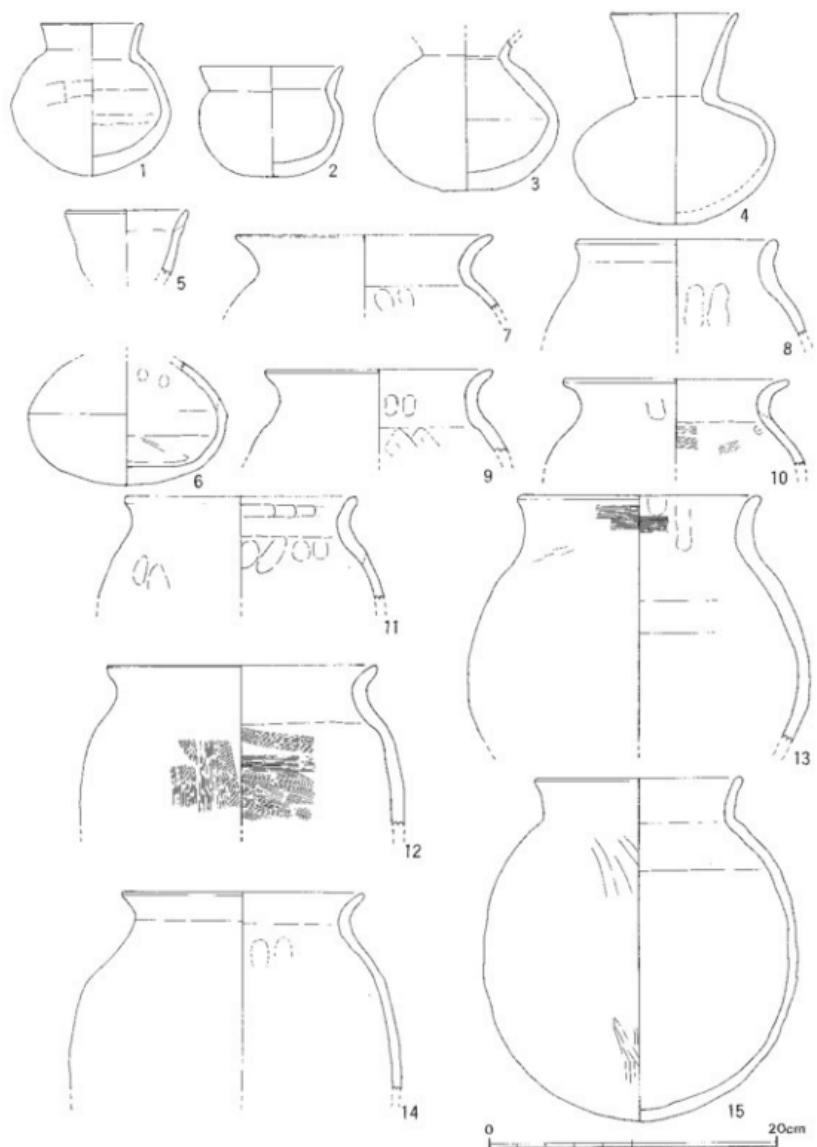
持回番号	遺情番号	器種	長径(cm) 直径(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	石 材	特 殊 性	備 考
46-440		蒸餾車	径 3.7cm 厚さ 1.3cm 重量26.1g	碧 玉	断面台形。通洞を呈す。円孔は径 8mm。外表面には、 幾の巻轍を拂し、外区と内区とを分からし、外区には 8個の筋肋文を配す。洞面にも 8個の筋肋文を配す。	



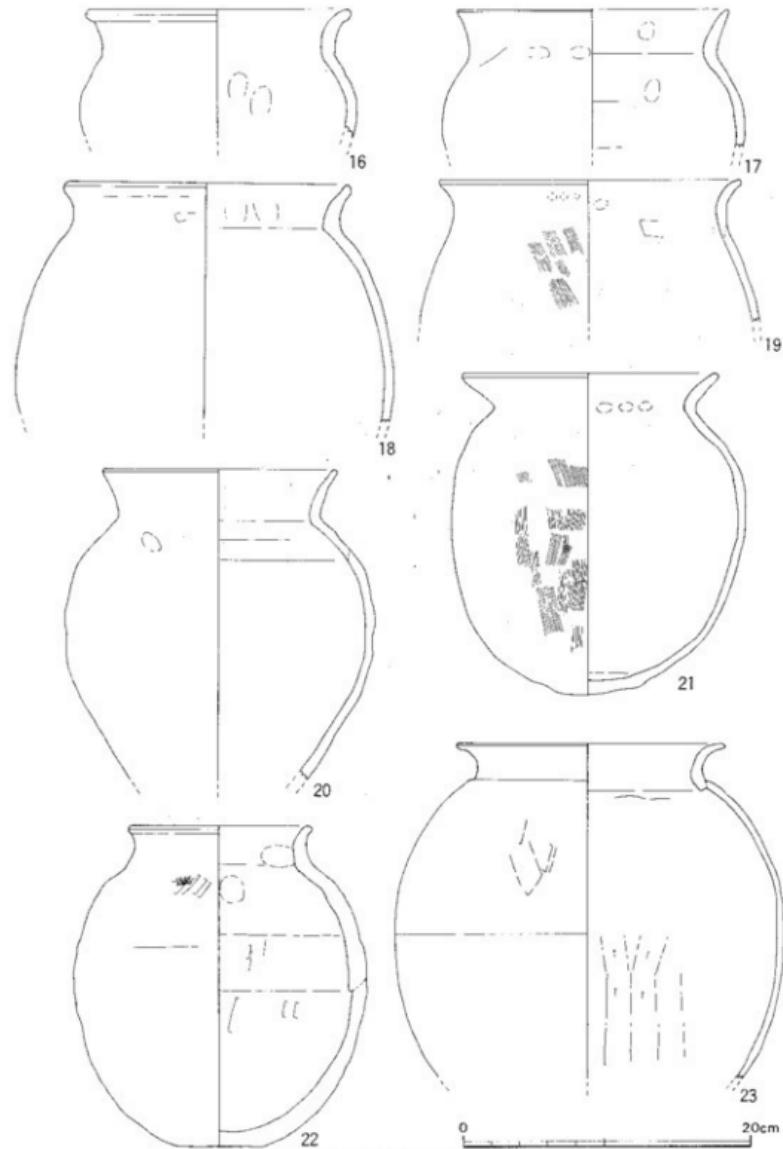
第12図 古津質遺跡試掘調査出土遺物実測図 1



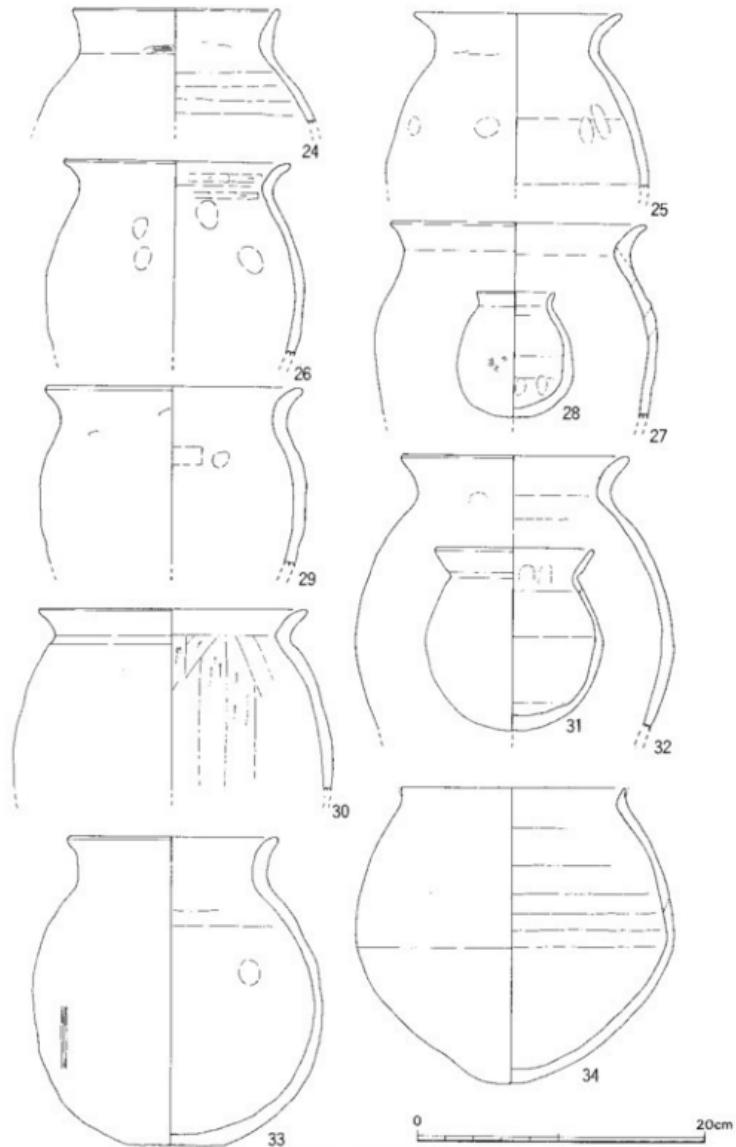
第13図 古津賀遺跡試掘調査出土遺物実測図 2



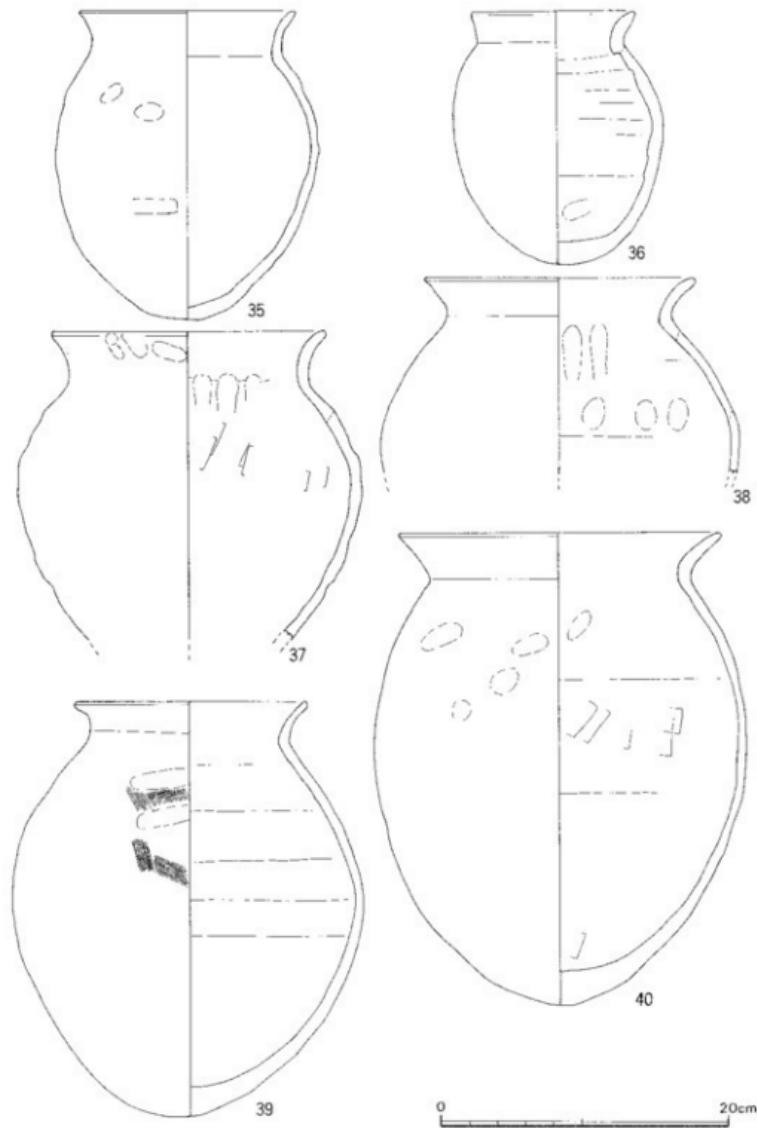
第14図 土師器実測図



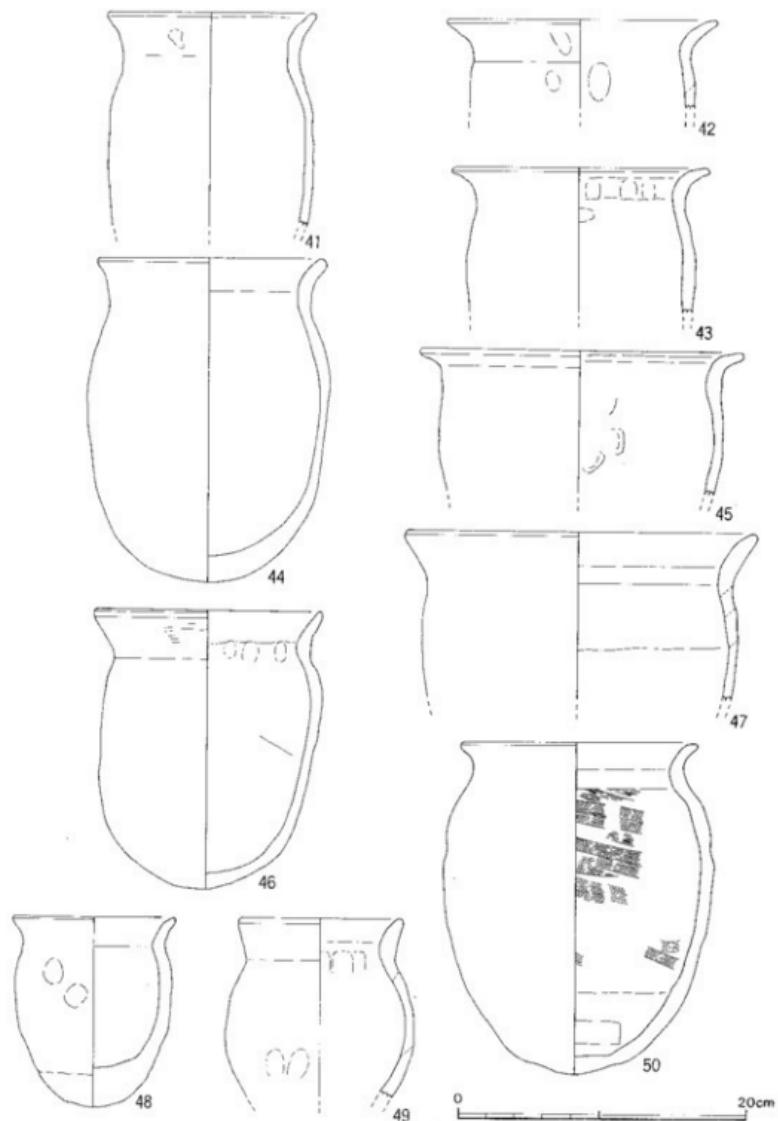
第15図 土師器実測図



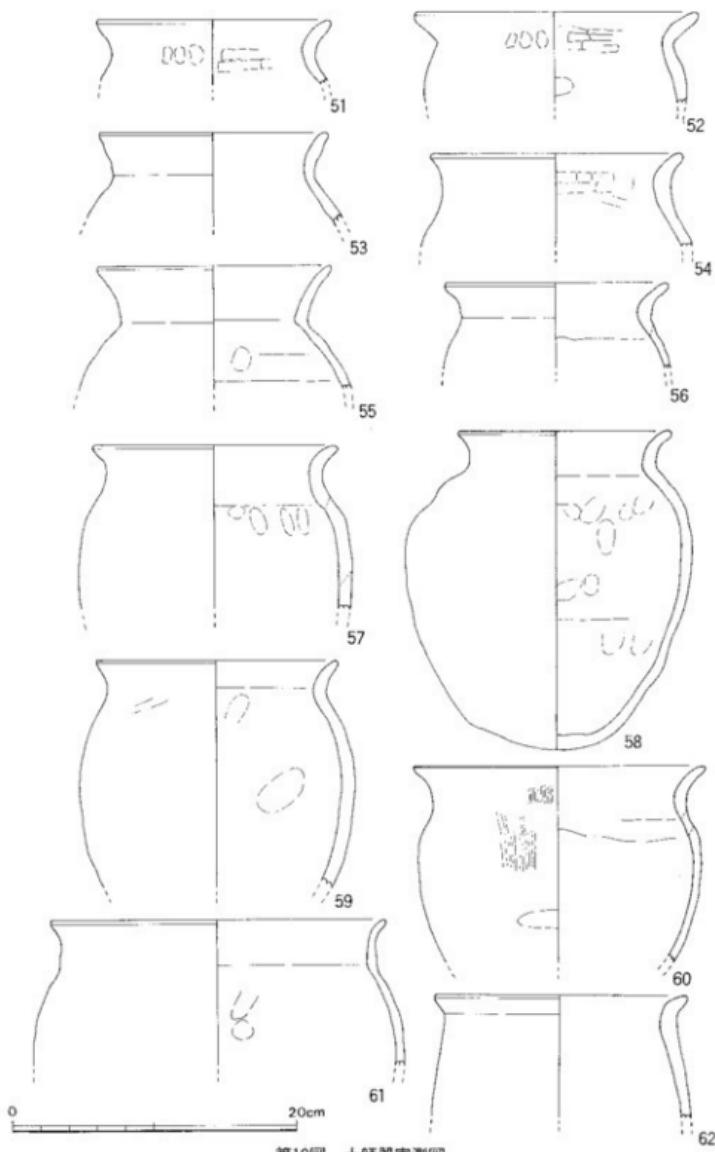
第16図 土器実測図



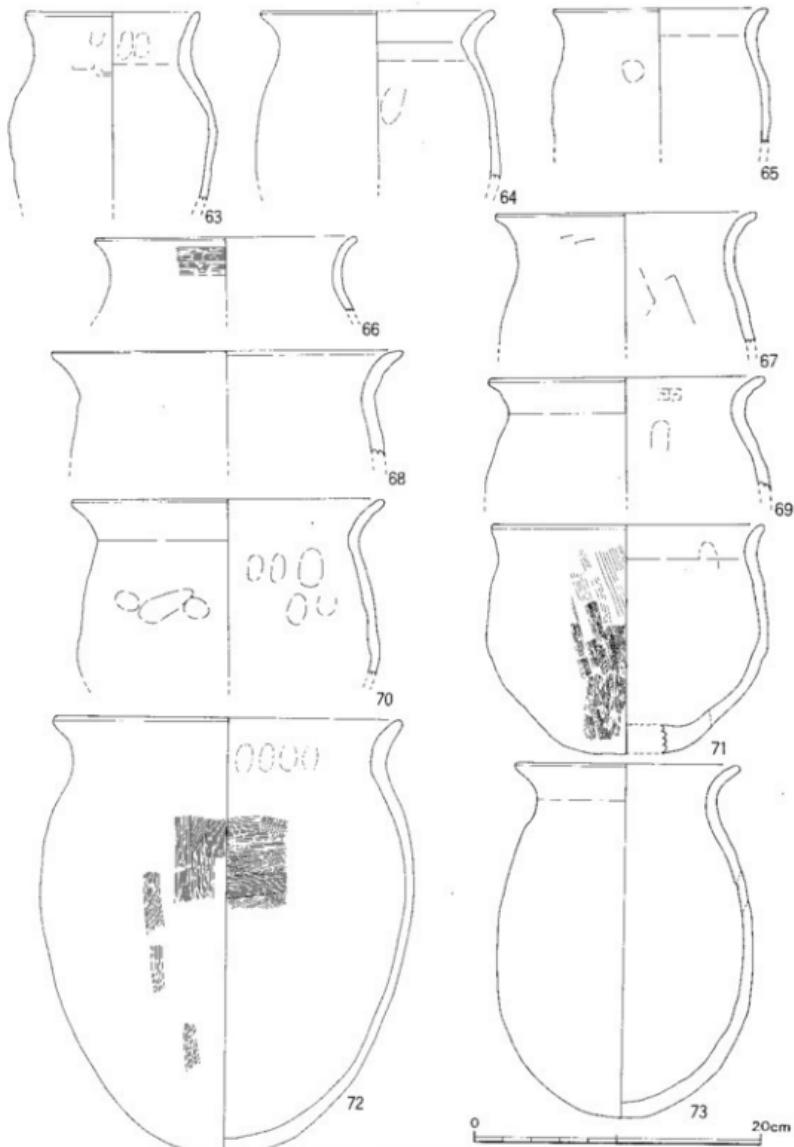
第17図 土器実測図



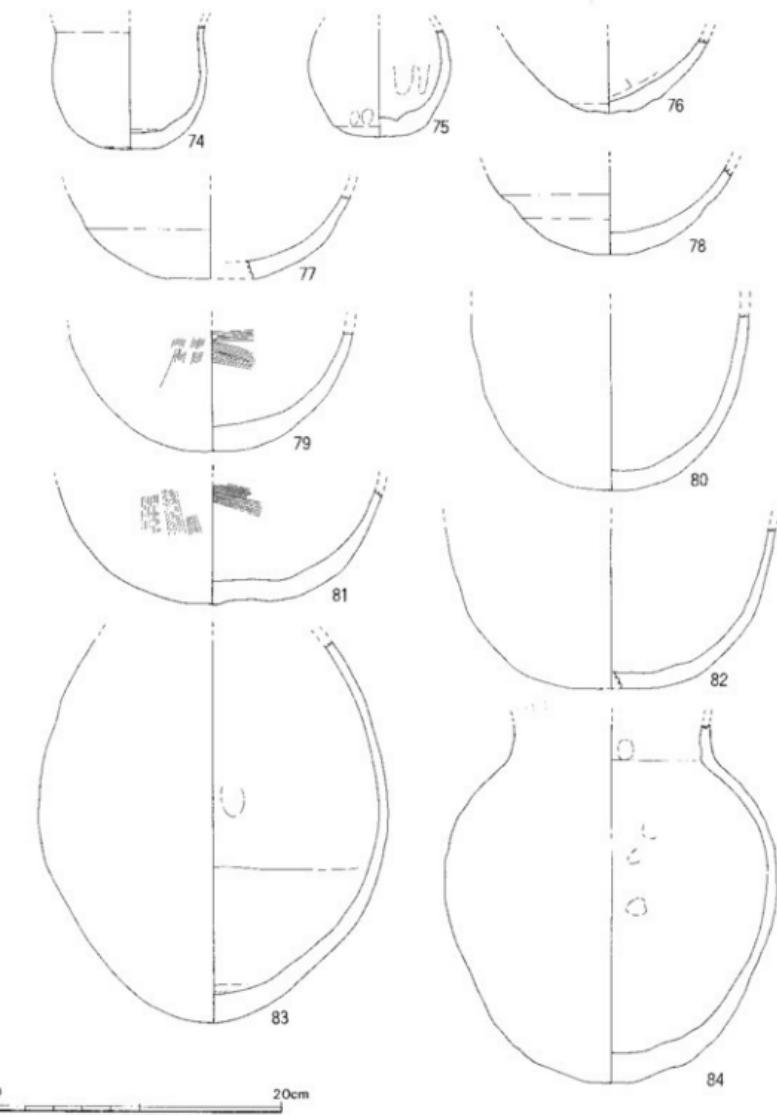
第18図 土器実測図



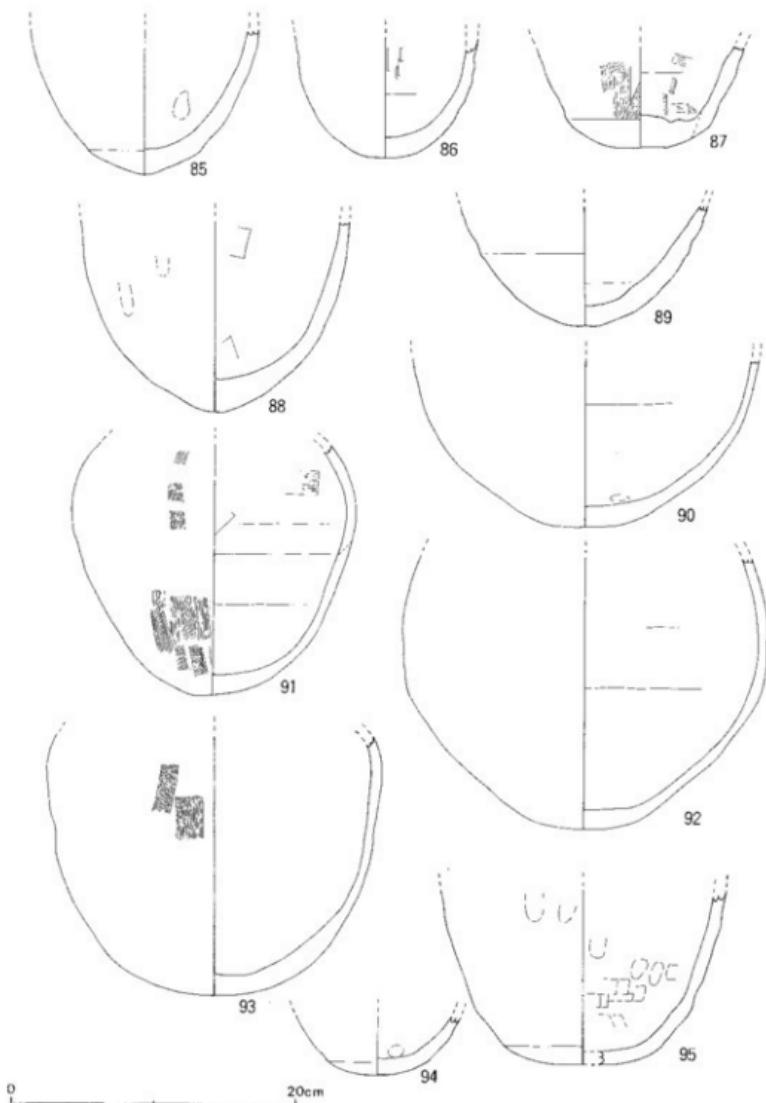
第19図 土師器実測図



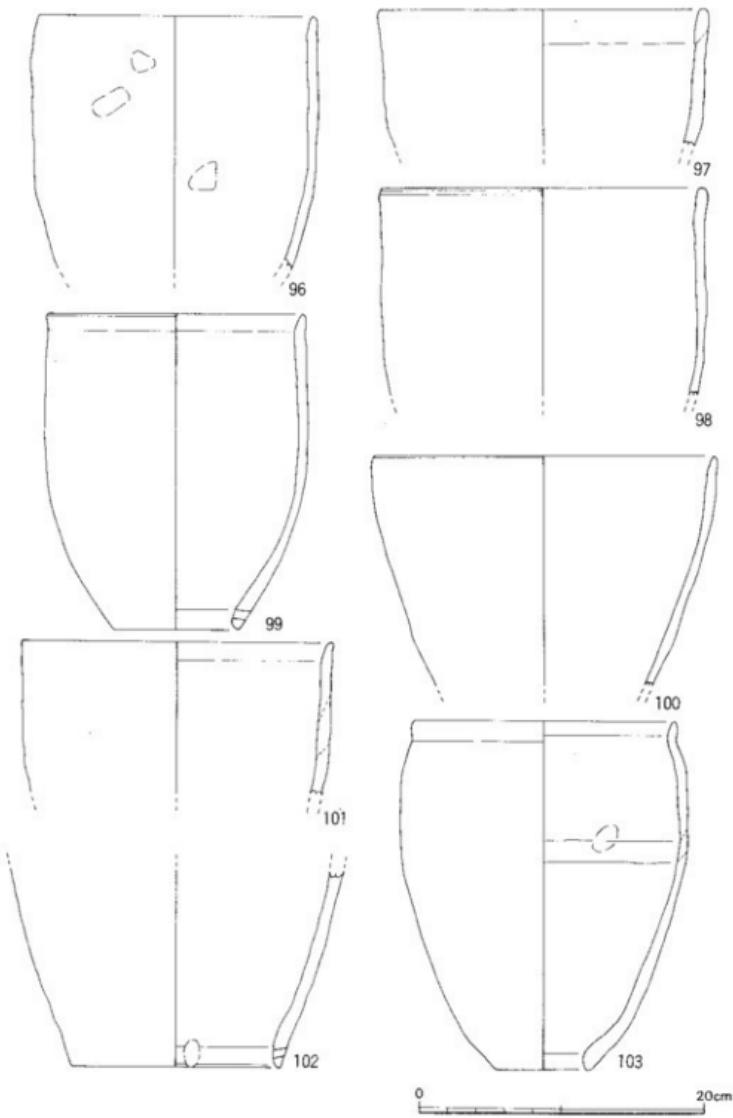
第20図 土師器実測図



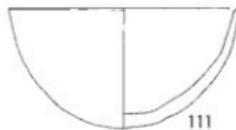
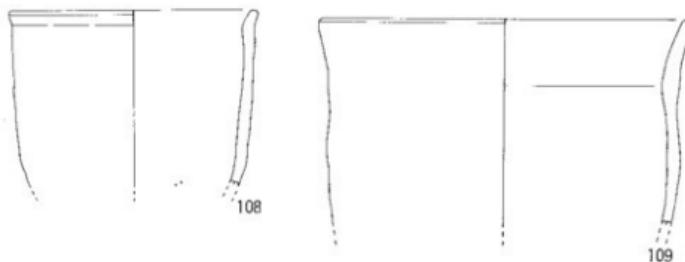
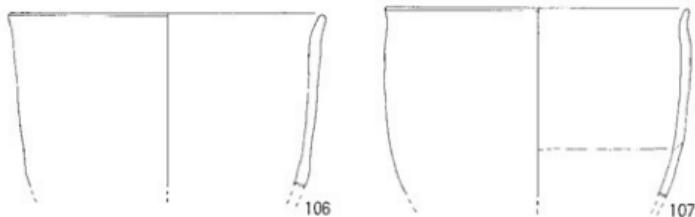
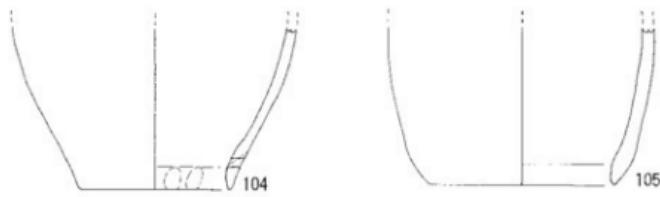
第21図 土器実測図



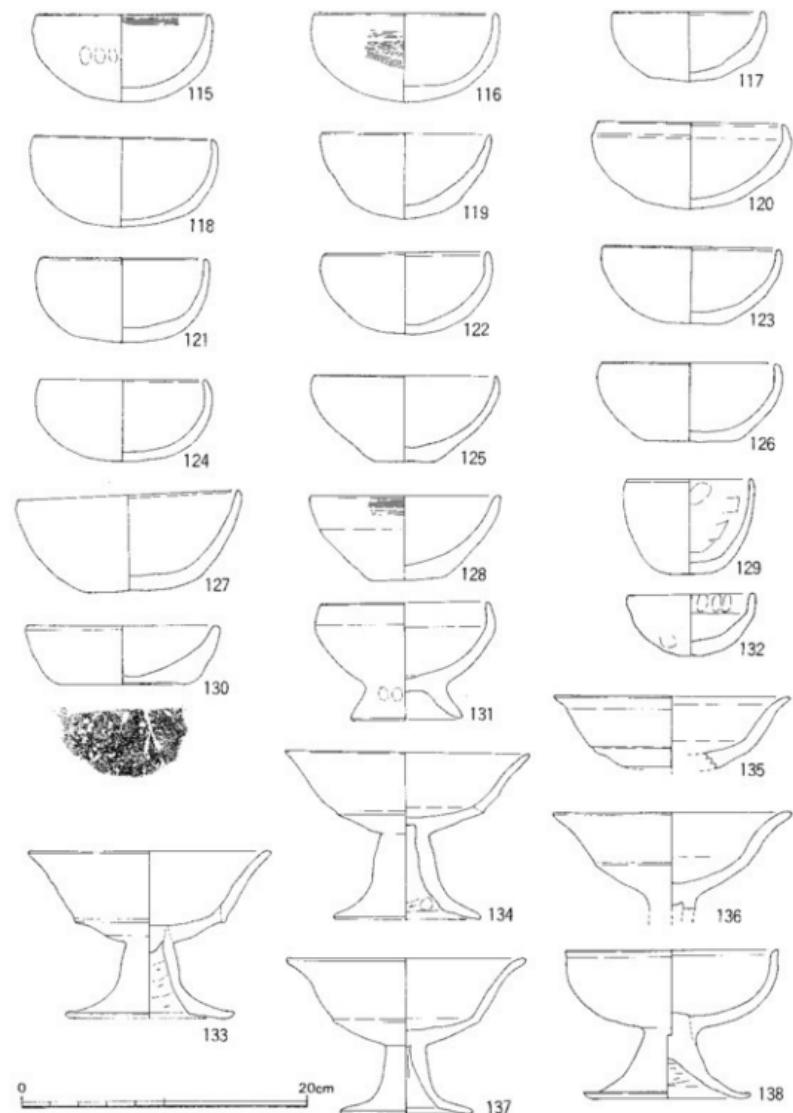
第22図 土師器実測図



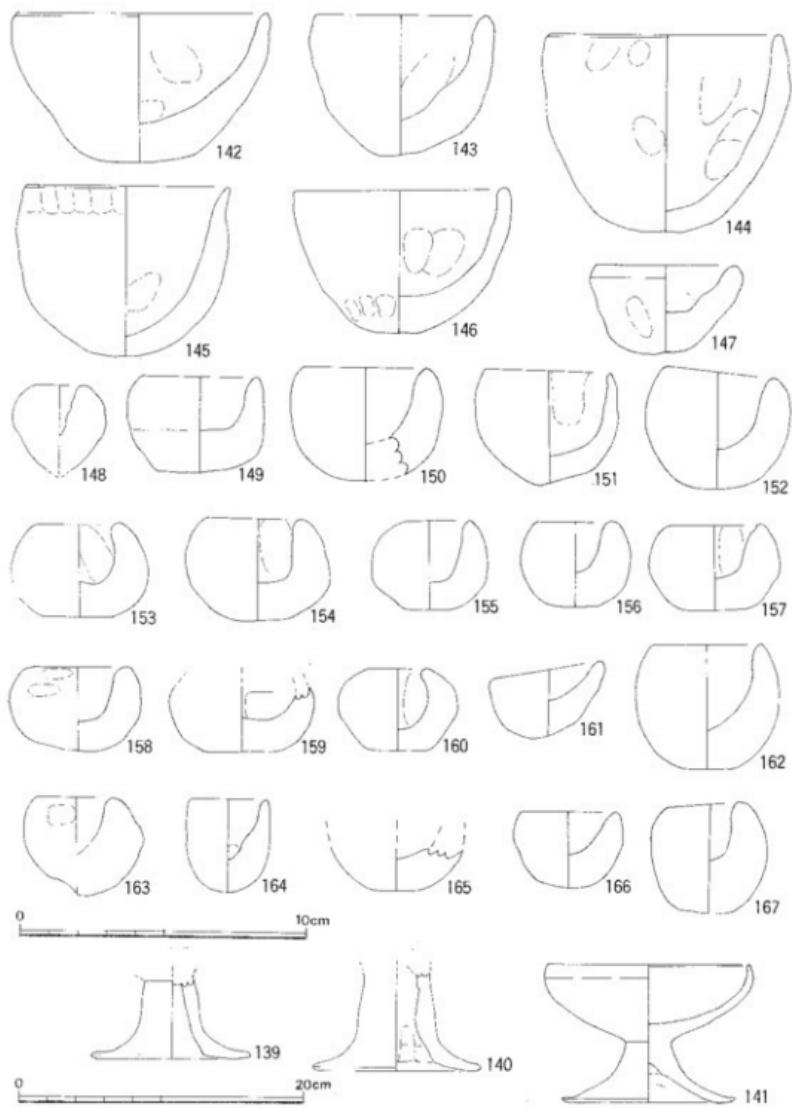
第23図 土師器実測図



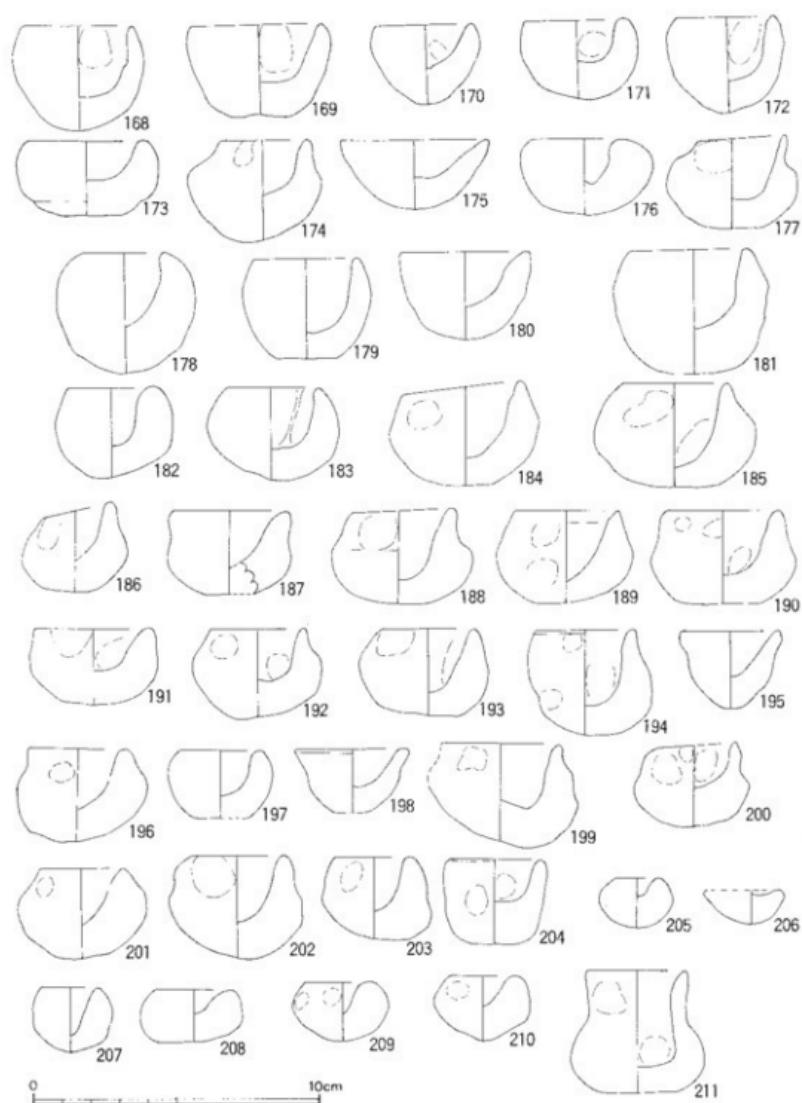
第24図 土器実測図



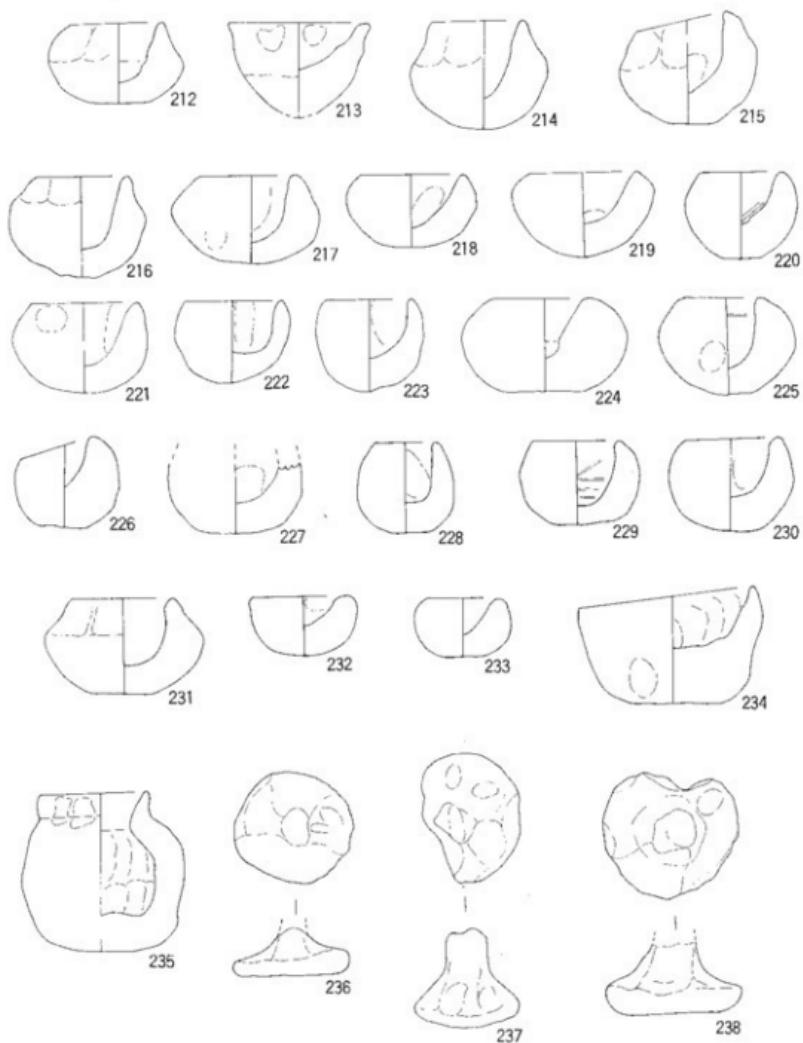
第25図 土師器実測図



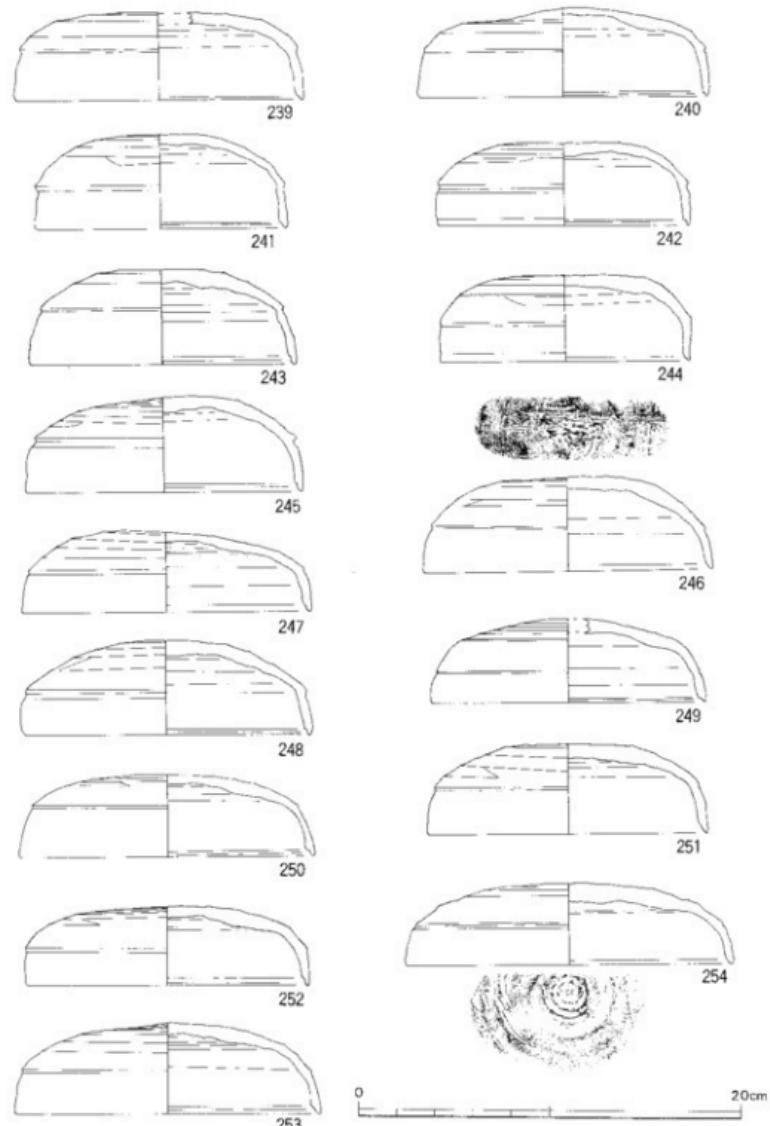
第26図 土師器・手捏土器実測図



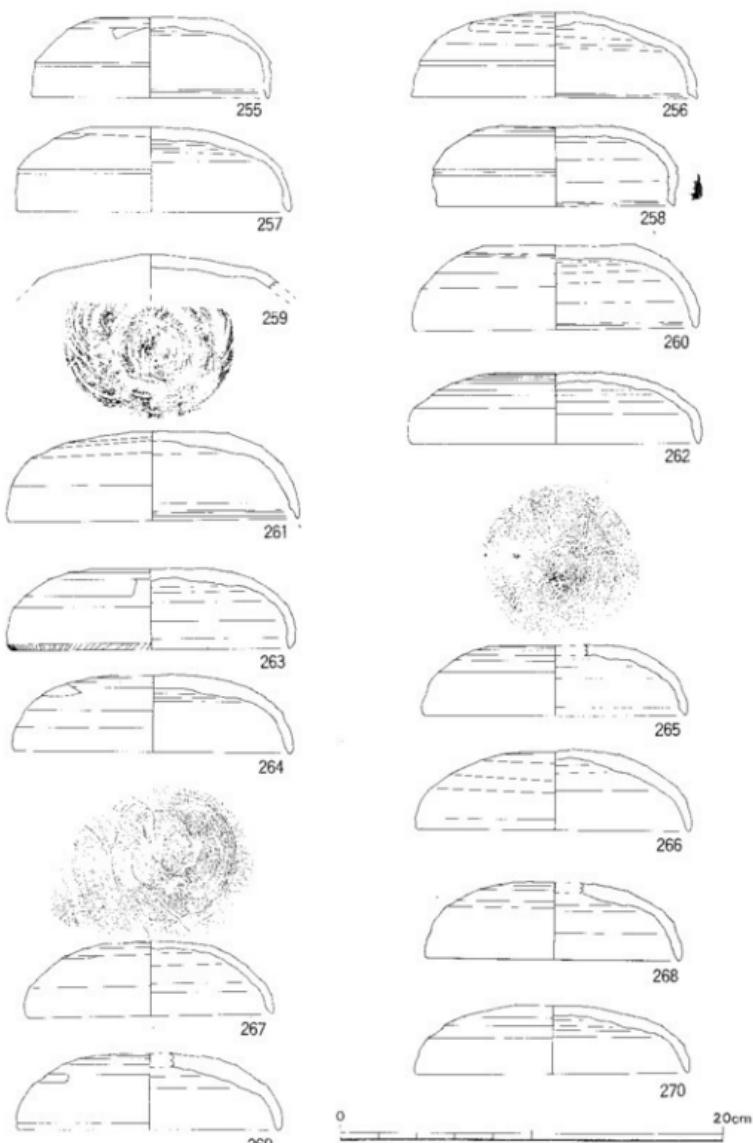
第27図 手捏土器実測図



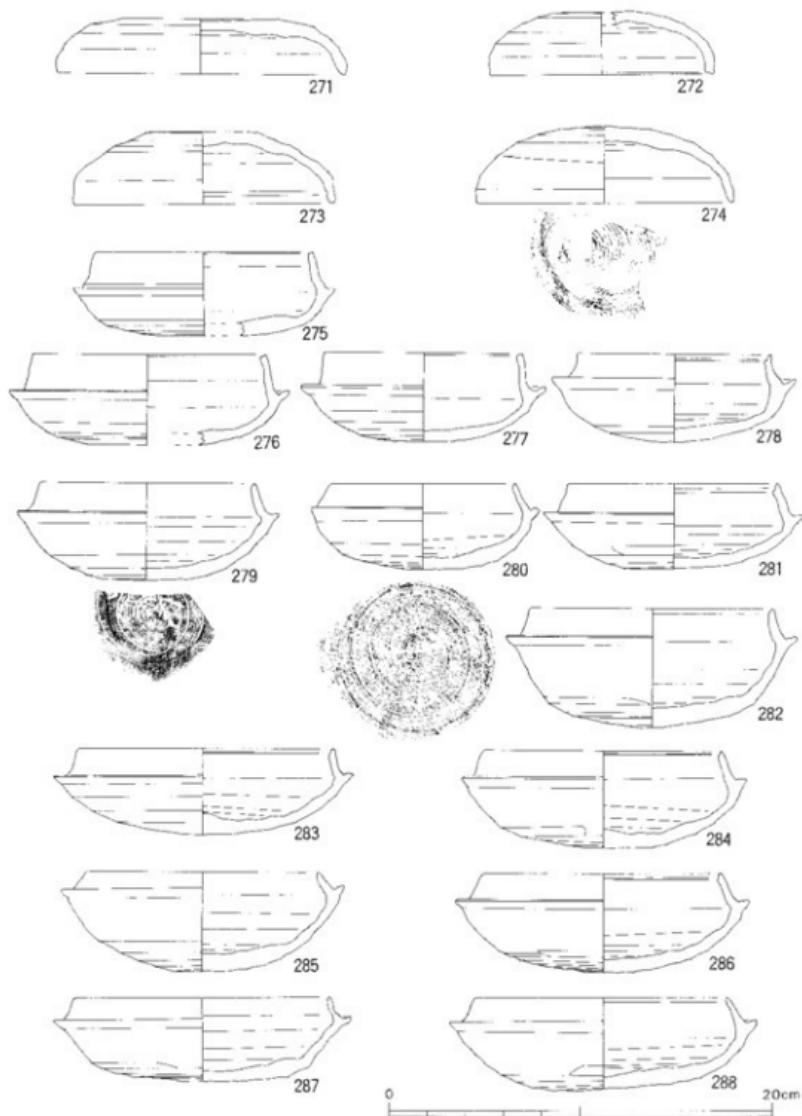
第28図 手捏土器・土製模造品実測図



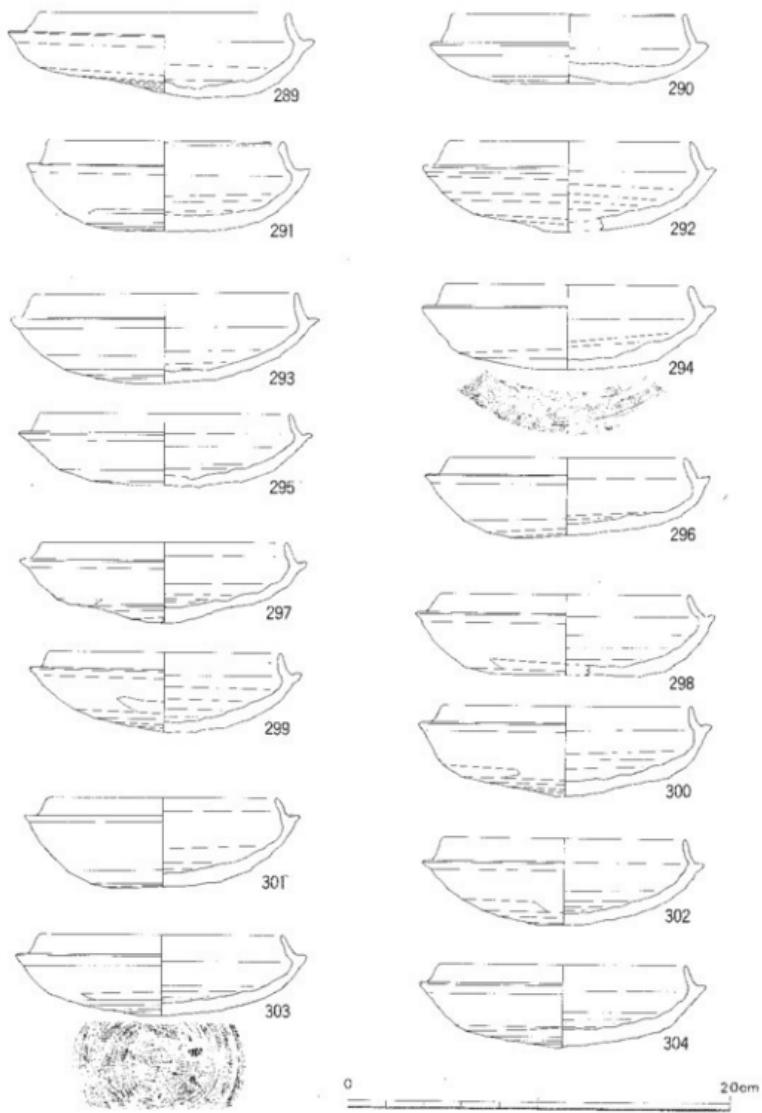
第29図 須恵器実測図



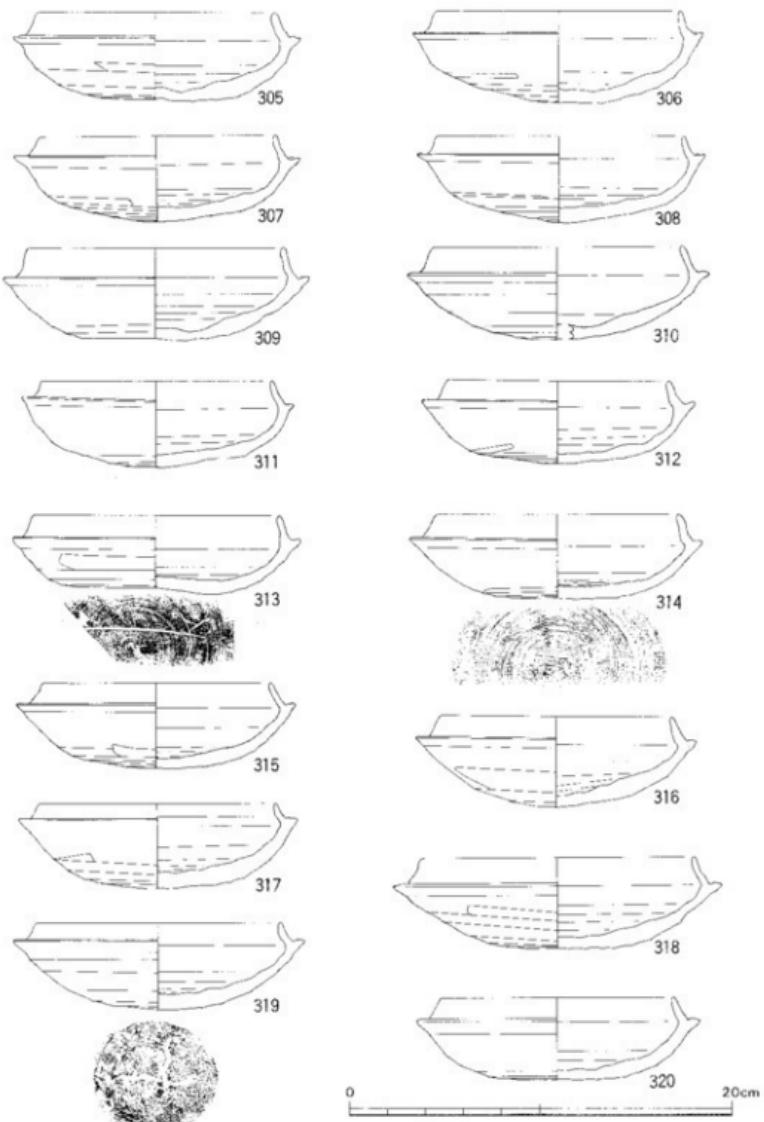
第30図 須恵器実測図



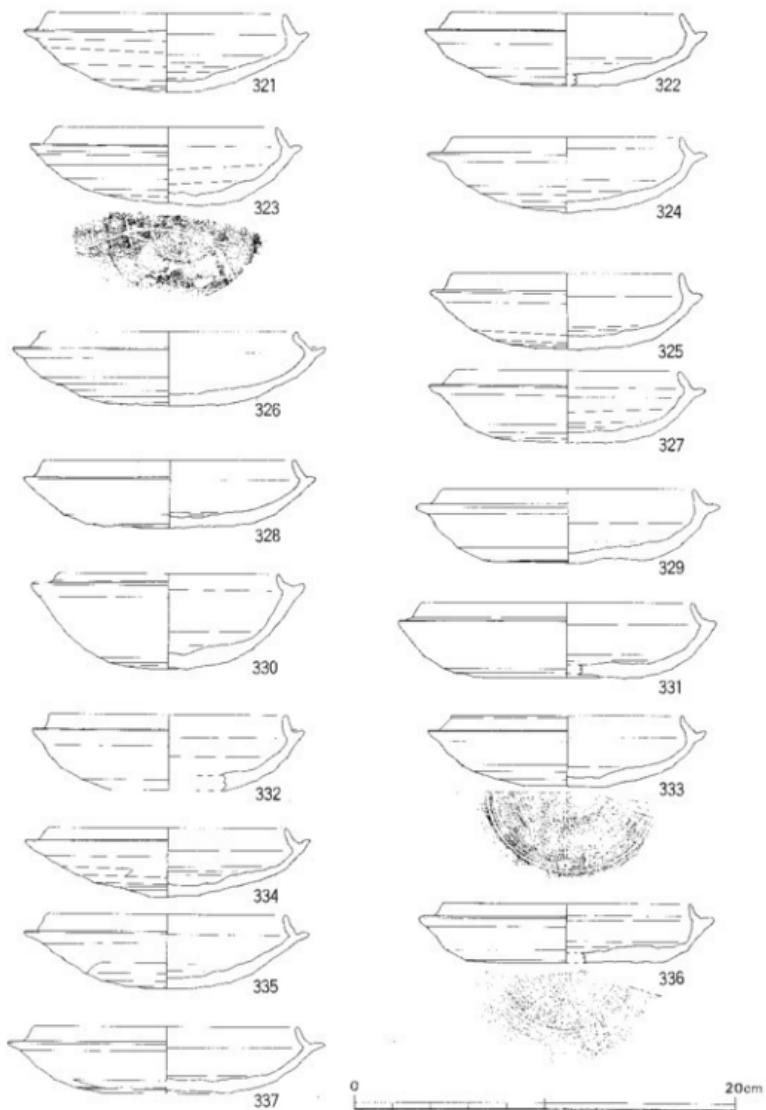
第31図 痔瘻器実測図



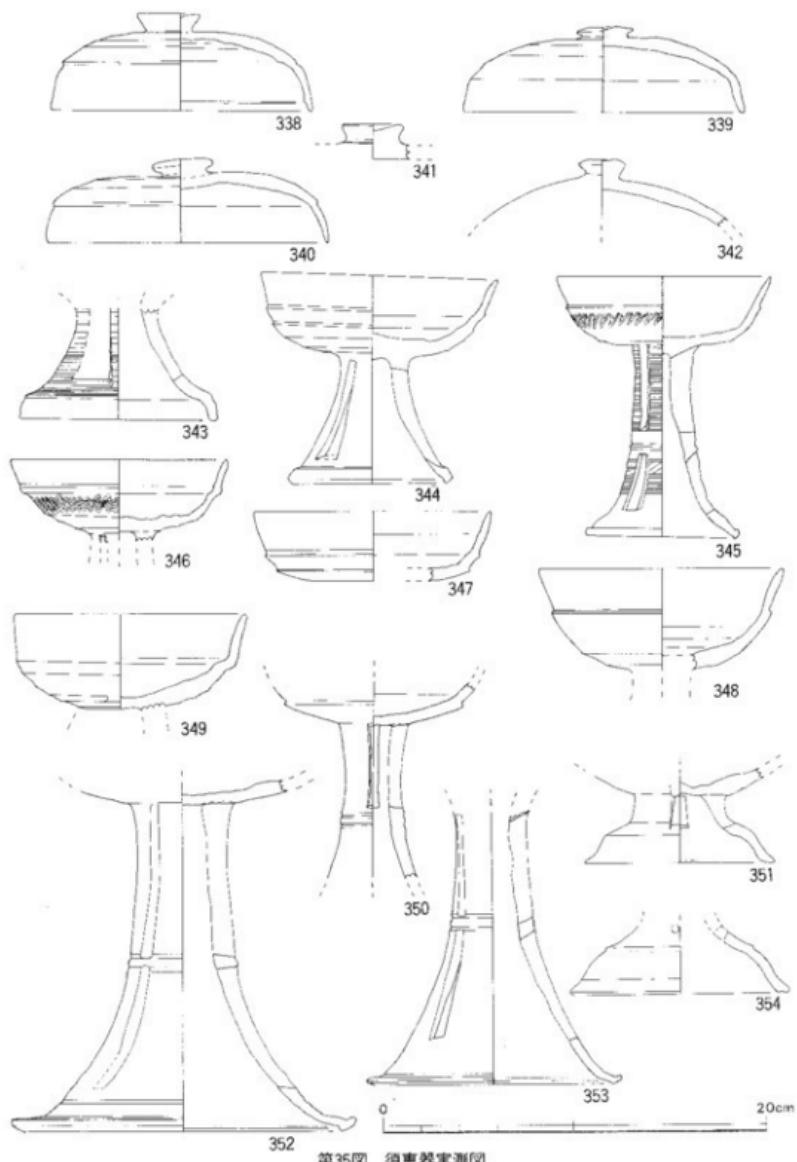
第32図 須恵器実測図



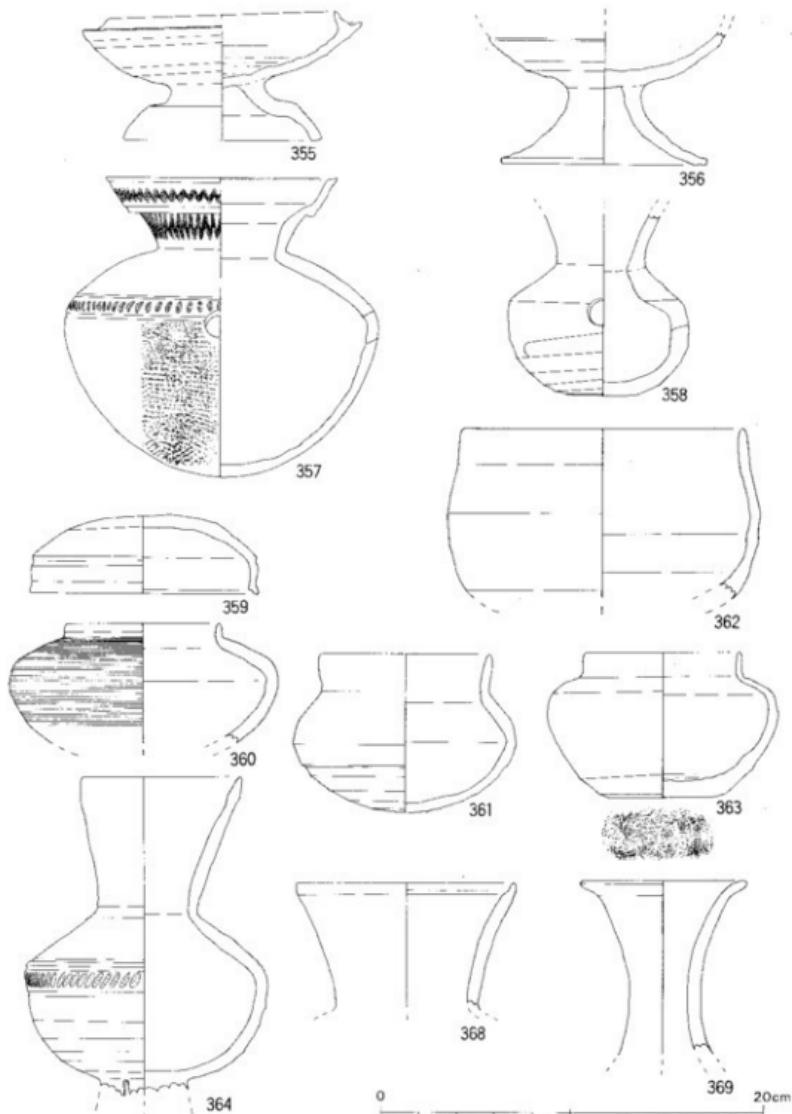
第33図 須恵器実測図



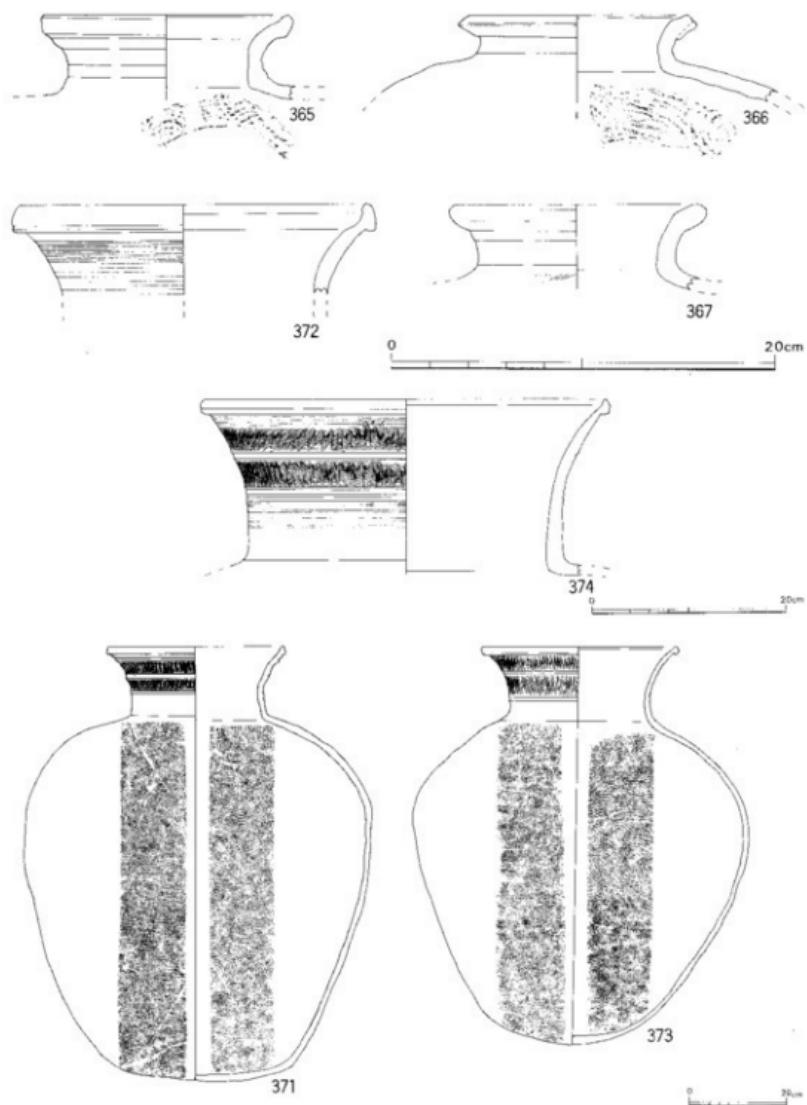
第34図 須恵器実測図



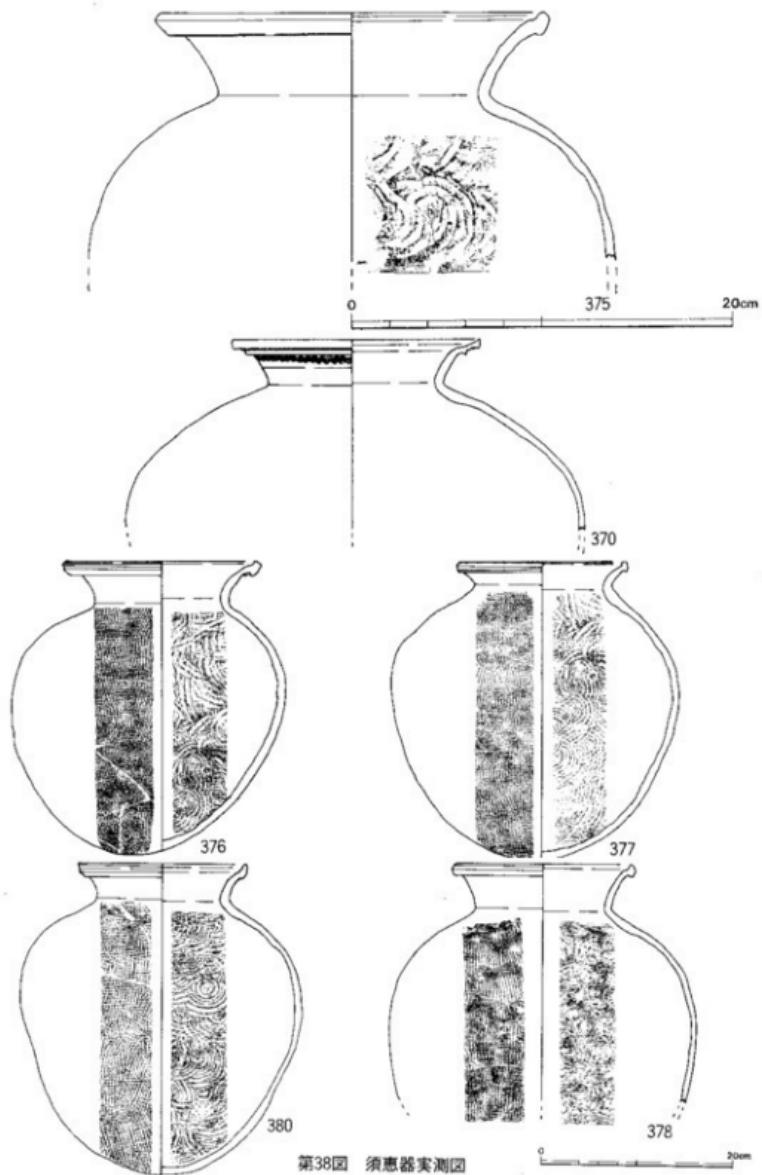
第35図 須恵器実測図



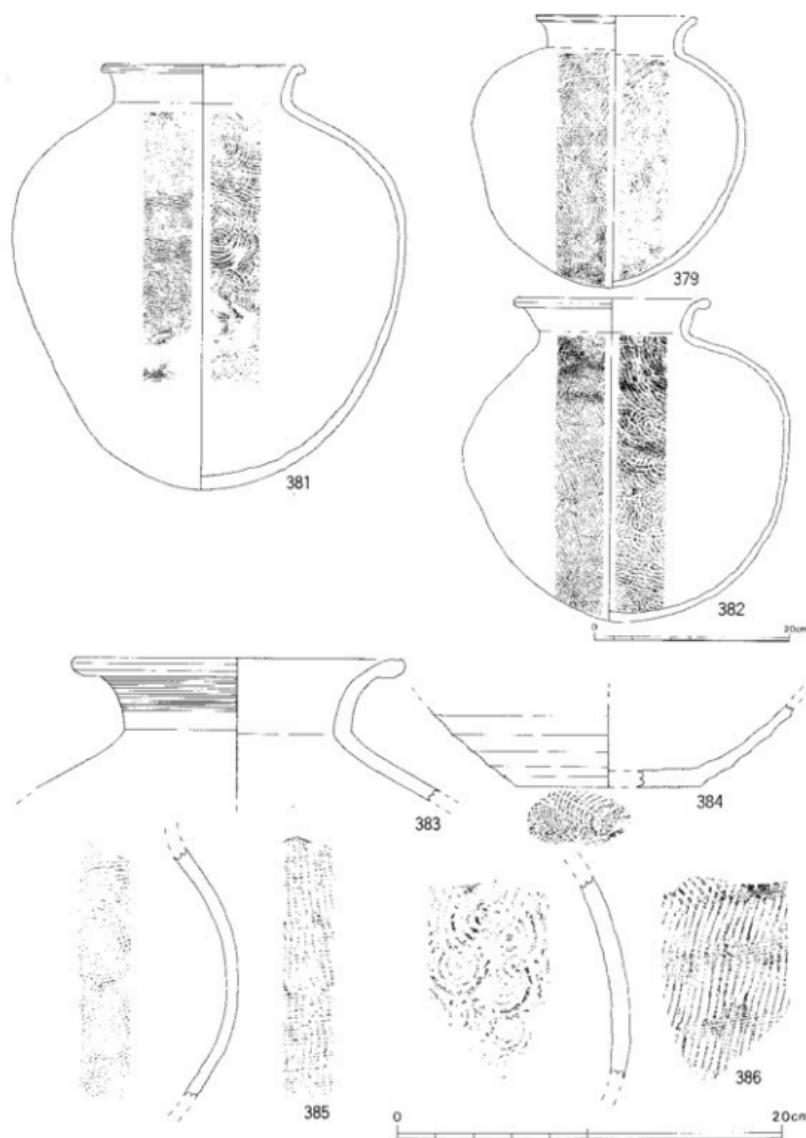
第36図 須恵器実測図



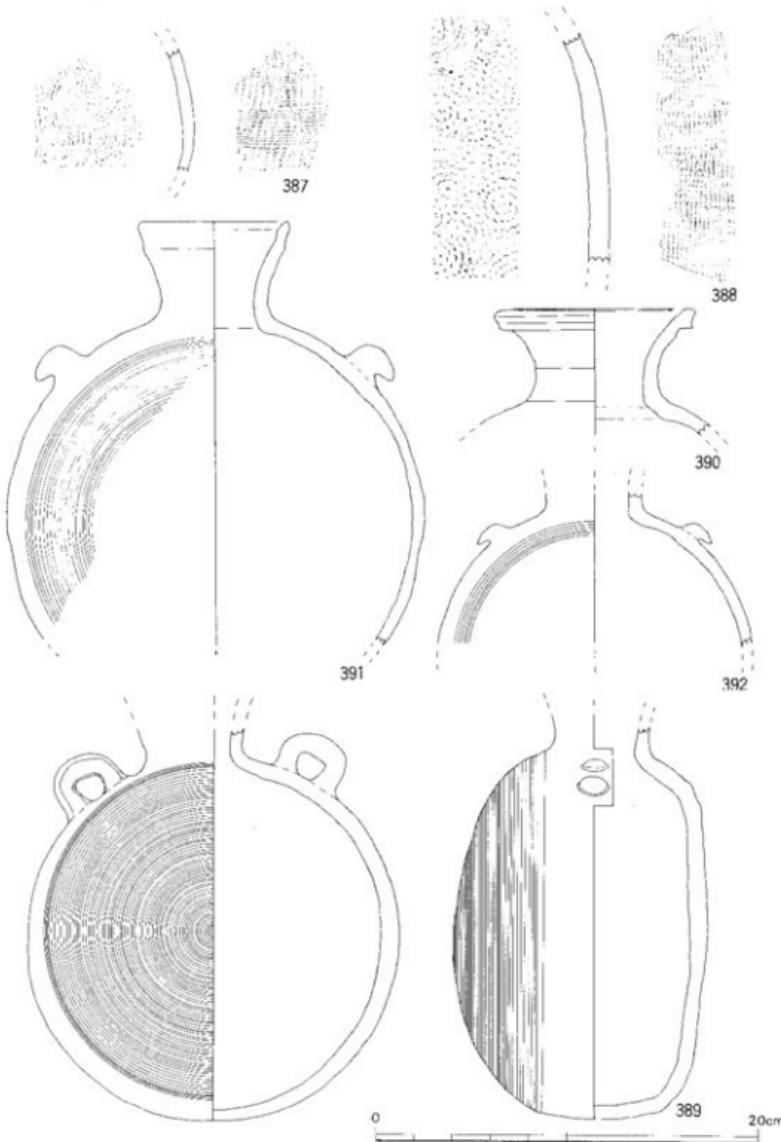
第37図 須恵器実測図



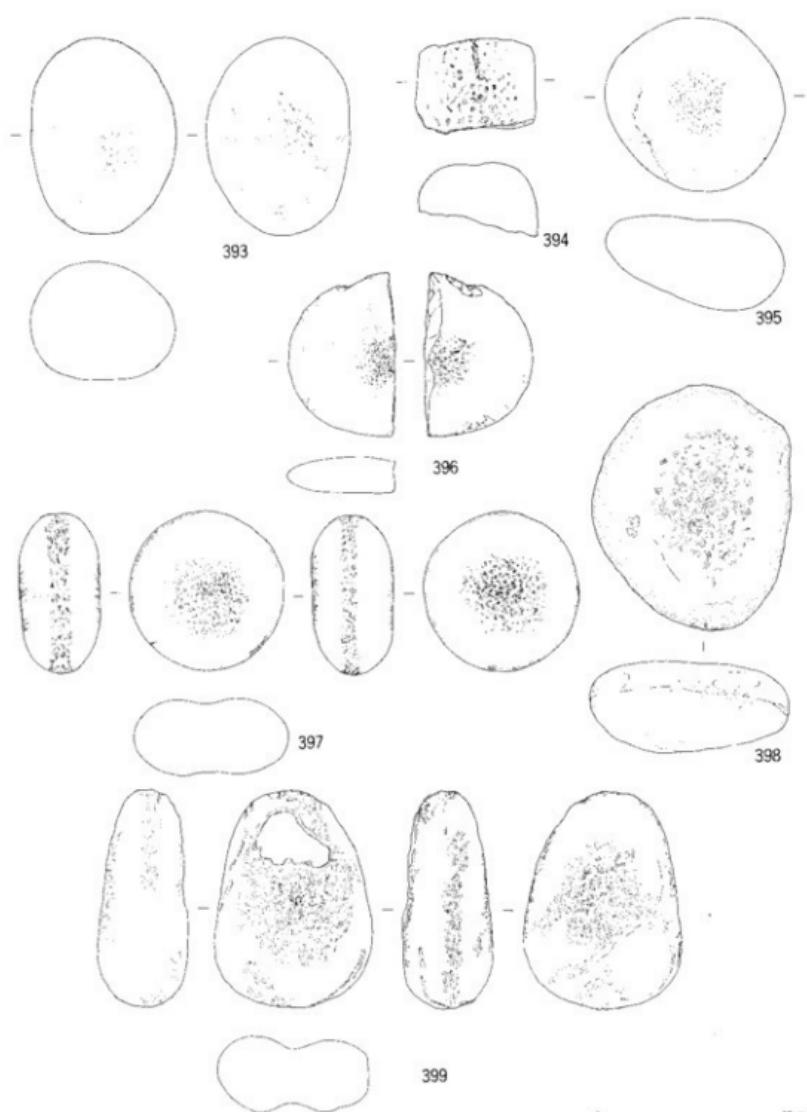
第38図 須恵器実測図



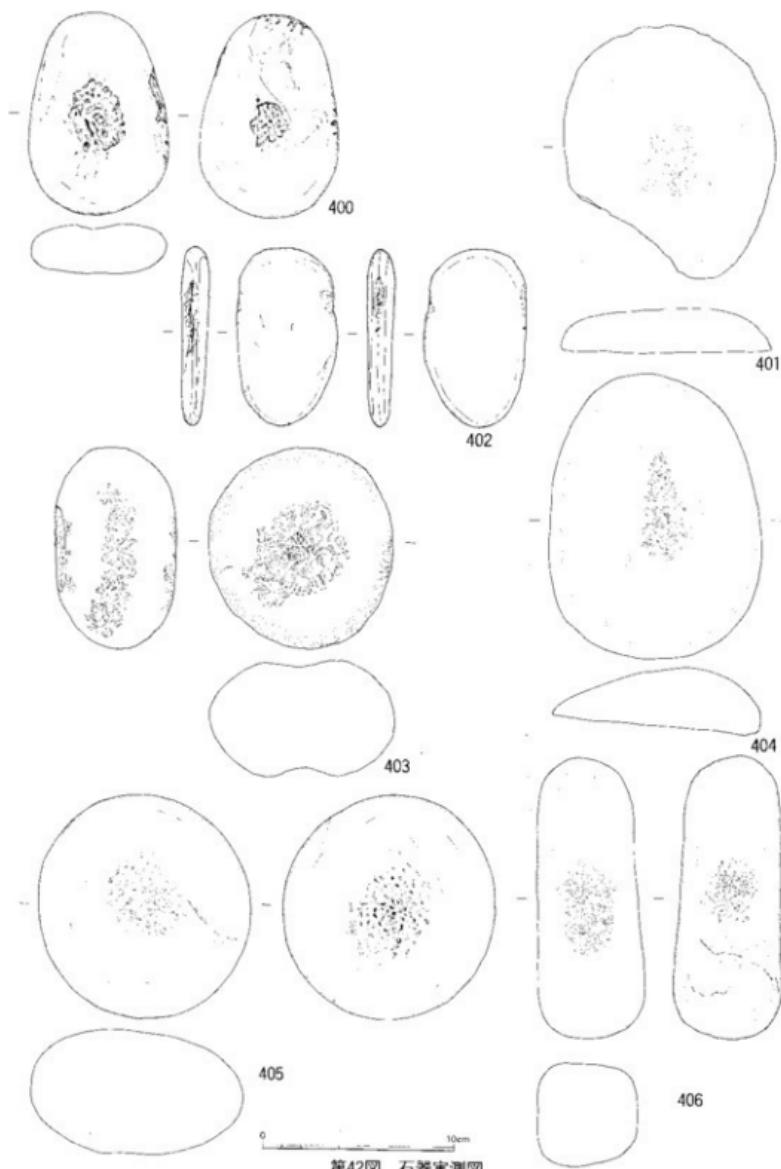
第39図 須患者実測図



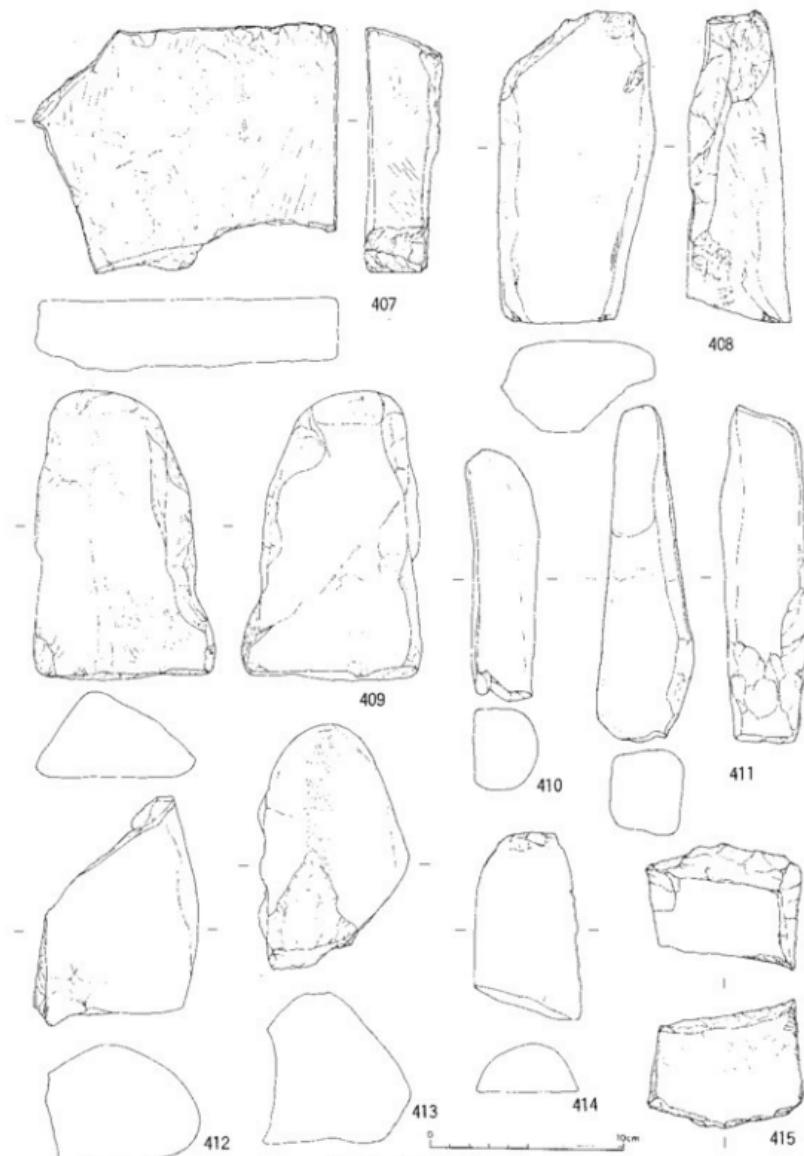
第40図 須恵器実測図



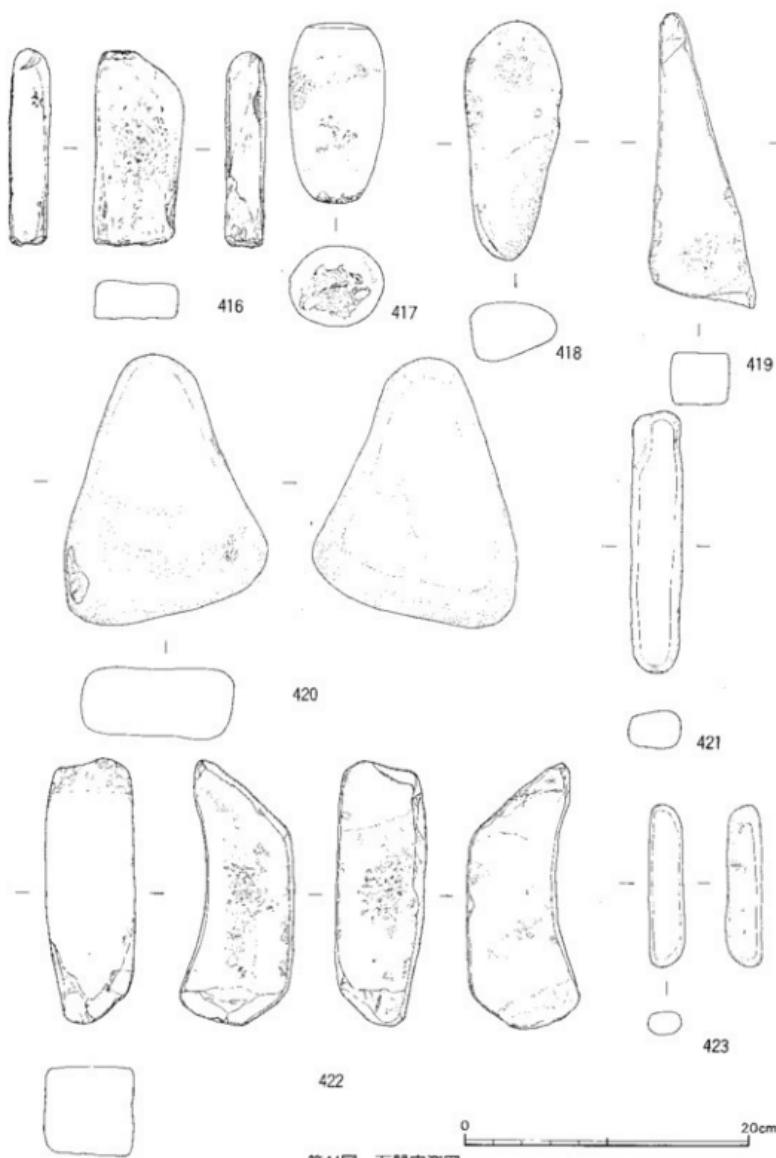
第41図 石器実測図



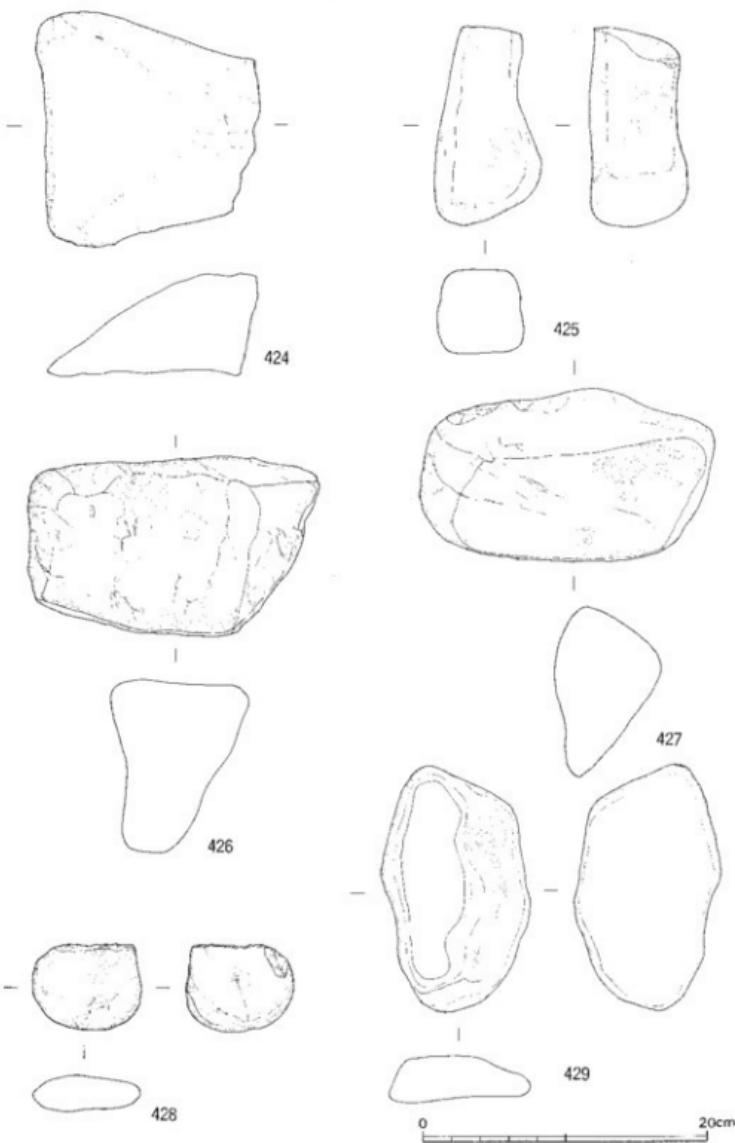
第42図 石器実測図



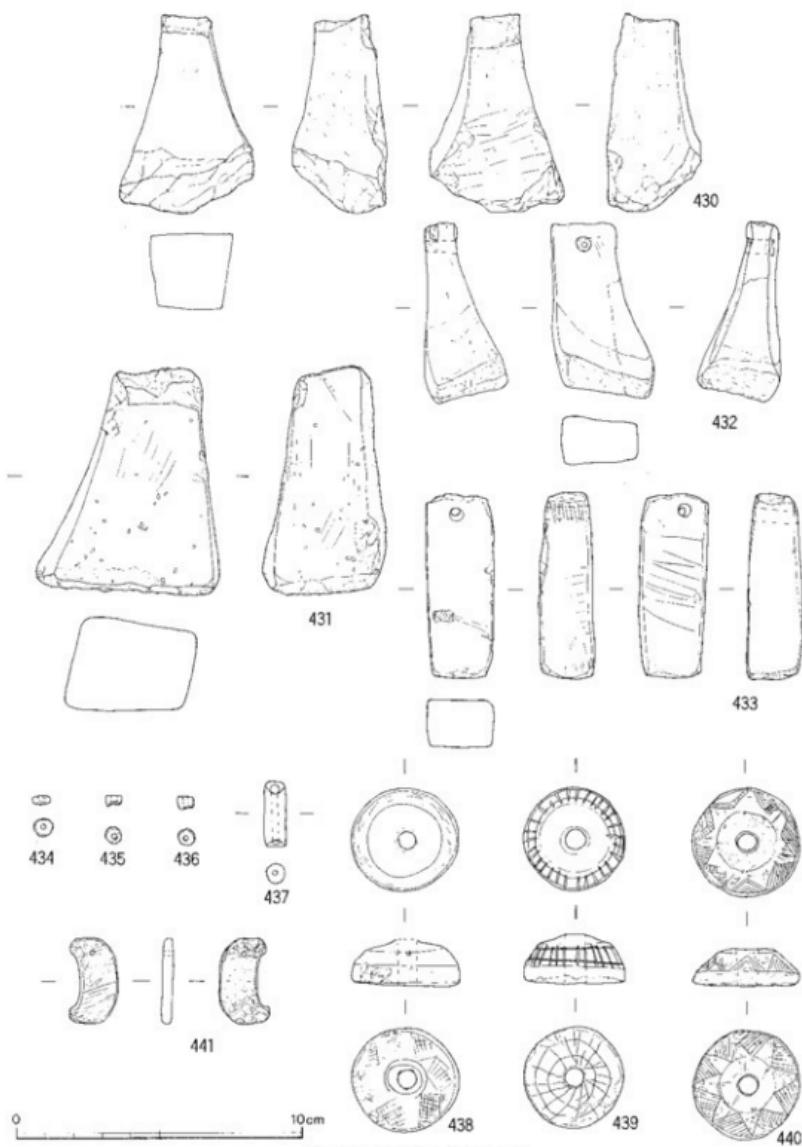
第43図 石器実測図



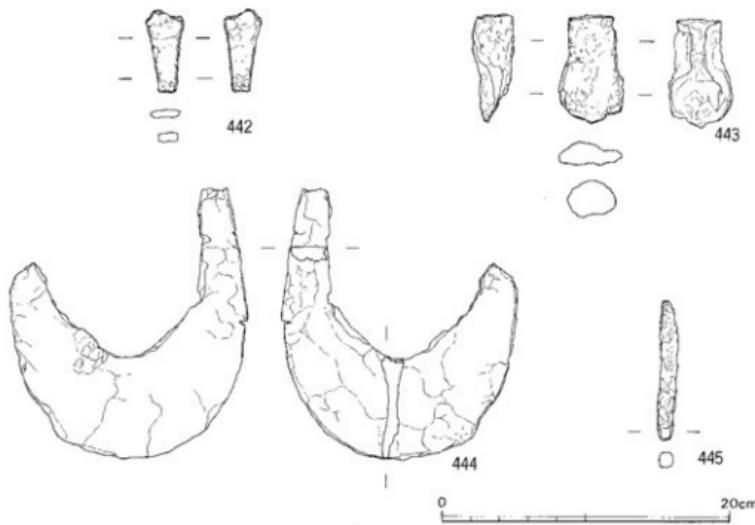
第44図 石器実測図



第45図 石器実測図



第46図 石製品・石器実測図



第47図 鉄器実測図

第IV章 具同中山遺跡群

1 試掘調査

一級河川渡川水系右支川中筋川の河川改修工事計画（高水数据削工事）に伴い、工事計画地に所在する具同中山遺跡群について、昭和59・60年度に事前の試掘調査を実施した。

昭和59年度の調査

中筋川左岸高橋樋門から井上樋門の間に、計10ヶ所のトレンチ（TR 1～10）を任意に設定し、石丸地区の試掘調査を実施した。調査は、昭和60年3月18日から3月20日までの間を行った。

調査の結果、TR 1～8においては遺物包含層・遺構は検出されなかったが、TR 9・10から神式土器（弥生時代中期後半）の細片が出土した。遺物は、TR 9の第IV層緑灰色粘土、TR 10の第V層緑色粘土中から出土した。

工事計画地から、細片ではあるが弥生土器が出土したことから、さらに縦密な試掘調査を実施することが必要となった。

昭和60年度の調査

前年度の調査に統いて、石丸地区の試掘調査を昭和60年10月22日から10月29日までの間に実施した。調査は、中筋川左岸の高橋樋門から井上樋門にかけて、TR 1～8周辺に計33ヶ所、TR 9・10周辺に計6ヶ所のトレンチを任意に設定して発掘を行った。その結果、中筋川左岸の池田川水門から井上樋門にかけては、出土遺物は無く、堆積土は自然堆積により形成された泥土の沈殿層で、遺物包含層・遺構は形成されていないことが判明した。また、高橋樋門から池田川水門にかけては、TR 9・10周辺の発掘区から磨耗した数点の弥生土器片が緑灰色粘土中から出土したが、遺構等は検出されなかった。

石丸地区・中山地区的試掘調査

高橋樋門周辺から井上樋門間にかけての高水数据削工事に伴う石丸地区的発掘調査を、また、中山地区についての試掘調査を昭和60年12月16日から12月27日の間に実施した。総発掘面積は約392m²である。

石丸地区については、試掘調査時に弥生土器の細片が出土したTR 9・10周辺に2ヶ所のトレンチを設定して調査を行ったが、明確な遺物包含層及び遺構は確認されなかった。

石丸遺跡の調査結果から、これまでの試掘調査で出土した弥生土器片は、緑灰色粘土中へ混入したものであり、発掘区周辺に弥生時代の遺構等は形成されていないことが判明した。

中山地区については、計8ヶ所のトレンチ（TR 1～8）を任意に設定し、発掘を行った。その結果、TR 1から4にかけては出土遺物は無く、遺構等も検出されなかったが、TR 5からTR 8にかけて、須恵器、土師器等を多量に含む古墳時代後期の遺物包含層が検出された。遺物は、第III層茶灰色粘土質土、第IV層青灰色粘土から出土したが、特に、TR 7から手捏土器、

土製模造品が集中して出土した。出土遺物の数量はコンテナ箱（内法34×54×15cm）15箱分である。なお、遺物の内容は以下のとおりである。

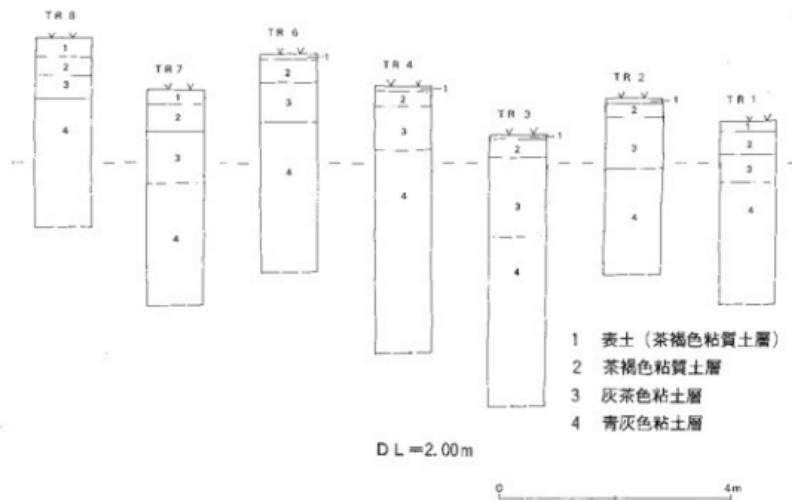
須恵器…杯（蓋、身）、高杯、壺、壺 手捏土器 石器（叩石）

土師器…榠、高杯、壺、壺、瓶 土製模造品（鏡、壺）

出土遺物は、その形態的特徴から、古墳時代後期前半（5世紀末～6世紀初頭）、後期後半（6世紀後半～7世紀初頭）に位置付けられるもので、大別して二時期にわたる土器類が認められた。また、須恵器のなかには、古式須恵器の範囲で捉えられる杯蓋（第72図 36・37）、高杯（第72図 47・48）等が含まれており、古墳時代後期前半のなかでも比較的早い段階から遺跡が形成されていたことが判明した。

遺物包含層は厚さ約30～40cmを測る粘土層で、層位的に遺物が出土したわけではないが、完形品の土器類が多く含まれており、遺物の廃棄行為をある程度反映したものであることが推測された。具同中山遺跡群の試掘調査の結果から、TR 8より上流の中山地区においても、古墳時代後期の遺物包含層が形成されていることが確認され、河川改修工事に先立ち本発掘調査を実施することが必要となった。

(山本)

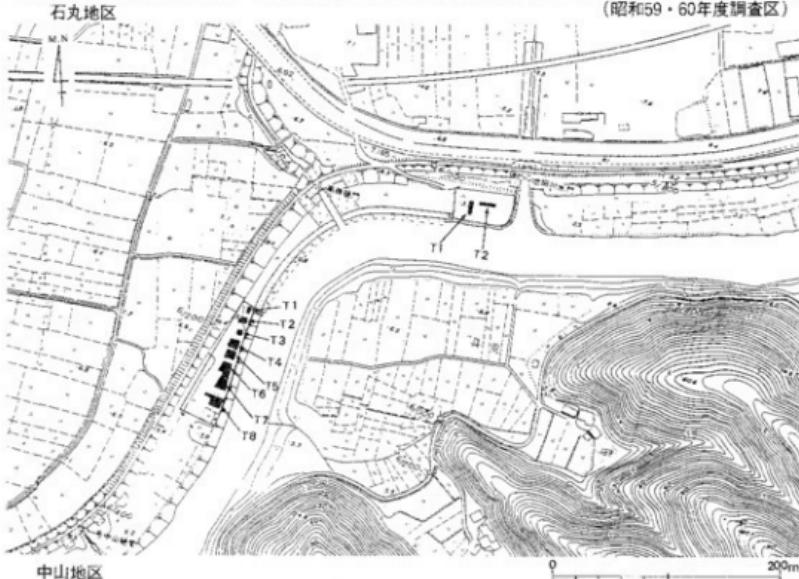


第48図 石丸地区試掘調査土層断面図



石丸地区

(昭和59・60年度調査区)



中山地区

第49図 具同中山遺跡群試掘調査区

2 本 調 査

(1) 調査の方法

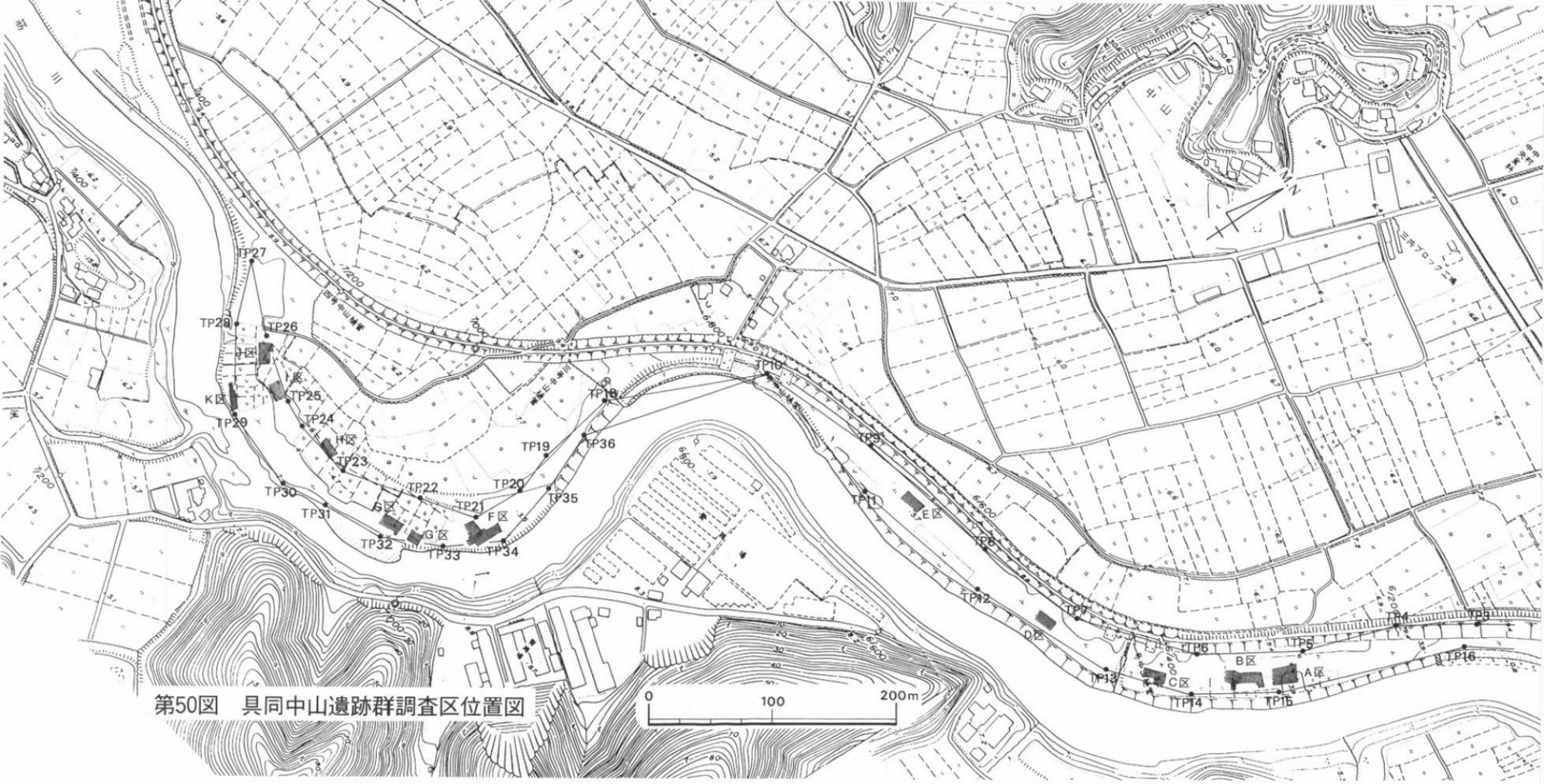
具同中山遺跡群は、中筋川左岸に位置する河岸上である。調査にあたっては、対象面積が広いため、まず遺構、遺物の遺存状態を確認することを目的に 4×4 m を基本にしたトレーニングを地形に沿って任意に 50ヶ所設定し試掘調査を実施した。トレーニングは、下流から TR 1 ~ 50 の名前を与えた。試掘調査の結果から、遺物が比較的集中しているトレーニングを中心拡張し、本調査を実施した。小字の具同中山地区には、TR 1 ~ 20までの範囲で拡張した 5ヶ所を A ~ E 区とし、東神木・ボケ地区で TR 21 ~ 50までの拡張区を F ~ K 区と名称した。

具同中山遺跡群周辺には、測量のための基準点が設置されていないため、発掘調査に先立ち基準点の設定を行った。基準点は、任意座標とし、X 軸は真北に向う値を正、Y 軸は X 軸に直交する軸として真東に向う値を正とするようにとり、調査区東側に TP 1 ~ 17、調査区西側に TP 10 ~ 18 ~ 36 を設定した。多角測量は、TP 1 の座標を X = 2,000.000, Y = 2,000.000 とし、

第14表 多角測量座標成果一覧表 1

(路線名 具同中山遺跡群 1
(測点名 TP 1 から TP 17 実測精度 1/5530)

測角点	方向点	整正方向角	水平距離(m)	X (m)	Y (m)	座標点	標高(m)
TP 17	TP 1	307° 19' 00"	49.587	2,000.000	2,000.000	TP 1	6.895
TP 1	TP 2	252° 42' 44"	46.119	1,986.293	1,955.959	TP 2	5.745
TP 2	TP 3	217° 03' 06"	103.463	1,903.727	1,893.624	TP 3	—
TP 3	TP 4	209° 45' 40"	61.059	1,850.728	1,863.319	TP 4	9.226
TP 4	TP 5	193° 00' 34"	78.289	1,774.464	1,845.699	TP 5	—
TP 5	TP 6	206° 53' 13"	83.682	1,699.839	1,807.861	TP 6	6.466
TP 6	TP 7	226° 10' 49"	102.908	1,628.588	1,733.612	TP 7	7.002
TP 7	TP 8	246° 14' 12"	91.452	1,591.733	1,649.905	TP 8	6.520
TP 8	TP 9	251° 04' 44"	124.417	1,551.384	1,532.197	TP 9	6.702
TP 9	TP 10	244° 06' 24"	101.736	1,506.952	1,440.666	TP 10	6.564
TP 10	TP 11	79° 52' 49"	121.570	1,528.309	1,560.325	TP 11	6.522
TP 11	TP 12	69° 46' 50"	121.302	1,570.228	1,674.139	TP 12	5.877
TP 12	TP 13	61° 54' 31"	123.173	1,628.223	1,782.793	TP 13	5.824
TP 13	TP 14	42° 50' 31"	71.707	1,680.803	1,831.554	TP 14	5.698
TP 14	TP 15	28° 38' 22"	70.272	1,742.486	1,865.240	TP 15	4.322
TP 15	TP 16	14° 53' 33"	151.374	1,888.804	1,904.152	TP 16	—
TP 16	TP 17	59° 03' 05"	157.765	1,969.932	2,039.446	TP 17	—
TP 17	TP 1	307° 19' 00"	49.587	2,000.000	2,000.000	TP 1	6.895



第50図 具同中山遺跡群調査区位置図

調査区西側を行い、TP 1～TP 17の測量結果から得たTP 10の座標（X=1,506.952, Y=1,440.666）を基準に、調査区東側を行った。測量には、それぞれ10秒読みの光波距離計を使用して実施した。なお、方位標を調査区北東にあるラジオアンテナと調査区西の森沢本村と風指の間の尾根上にある鉄塔の2ヶ所とし、前者を方位標A、後者を方位標Bと呼称した。測量結果は第14・15表に記し、同時に実施した水準測量の結果も同様に記載した。（松田・廣田）

第15表 多角測量座標成果一覧表2

(路線名 具同中山遺跡群2
測点名 TP 10・18-36 実測精度1/43,746)

測角点	方向点	整正方向角	水平距離(m)	X (m)	Y (m)	座標点	標高(m)
TP 36	TP 10	10° 56' 37"	156.028	1,506.952	1,440.666	TP 10	6.564
TP 10	TP 18	199° 48' 12"	132.796	1,382.009	1,395.678	TP 18	6.349
TP 18	TP 19	161° 35' 21"	64.903	1,320.428	1,416.177	TP 19	6.727
TP 19	TP 20	163° 24' 47"	34.626	1,287.242	1,426.062	TP 20	6.156
TP 20	TP 21	179° 10' 42"	40.028	1,247.218	1,426.636	TP 21	4.443
TP 21	TP 22	226° 18' 26"	47.667	1,214.289	1,392.171	TP 22	6.358
TP 22	TP 23	229° 06' 55"	63.779	1,172.542	1,343.953	TP 23	5.192
TP 23	TP 24	256° 00' 10"	47.706	1,162.002	1,297.664	TP 24	6.009
TP 24	TP 25	267° 09' 00"	24.012	1,159.808	1,273.681	TP 25	6.022
TP 25	TP 26	279° 28' 44"	55.081	1,168.879	1,219.352	TP 26	6.169
TP 26	TP 27	288° 44' 22"	56.504	1,187.032	1,165.843	TP 27	6.907
TP 27	TP 28	136° 42' 56"	47.360	1,152.556	1,198.314	TP 28	5.773
TP 28	TP 29	119° 22' 39"	72.944	1,116.772	1,261.878	TP 29	4.817
TP 29	TP 30	83° 43' 53"	67.928	1,124.118	1,329.400	TP 30	3.845
TP 30	TP 31	54° 00' 47"	40.456	1,147.959	1,362.136	TP 31	3.492
TP 31	TP 32	61° 24' 12"	49.764	1,171.777	1,405.830	TP 32	3.326
TP 32	TP 33	36° 05' 14"	49.720	1,211.956	1,435.117	TP 33	3.063
TP 33	TP 34	22° 53' 42"	48.816	1,256.926	1,454.110	TP 34	3.316
TP 34	TP 35	342° 20' 31"	54.566	1,308.921	1,437.557	TP 35	4.894
TP 35	TP 36	329° 24' 08"	52.094	1,353.762	1,411.043	TP 36	5.649
TP 36	TP 10	10° 56' 37"	156.028	1,506.952	1,440.666	TP 10	6.564
TP 25	方位標A	39° 57' 00"	1,770.348	2,516.963	2,410.458	方位標A	—
TP 26	タ	41° 27' 45"	1,798.906	タ	タ	タ	—
TP 23	方位標B	232° 17' 18"	876.262	636.543	650.743	方位標B	—
TP 30	タ	234° 18' 18"	835.646	タ	タ	タ	—

(2) 調査区の概要

試掘調査の結果拡張したA～K区の概要は以下の通りである。

A区

共同中山地区の東端の調査区で、下流に位置する。TR 1で、II層からIV層にかけて包含層を確認し、遺物も比較的多く出土したので拡張した。A区は、東西20m、南北15mで約300m²を拡張した。基本層序は、第I層表土層、第II層茶色シルト層、第III層茶褐色シルト層、第IV層青灰色粘質土層、第V層暗青灰色粘質土層である。上層のII層を大きく掘削されており、SF 1等は表土層を除去した段階で検出した。東側（川側）に向ってやや傾斜しており、SX 1はIV層でゆるやかな斜面に堆積している。SX 2は、南西部のV層で検出した。

B区

A調査区の南側8mの地点に位置する。TR 2・3にかけてSF 2・3の一部が検出されたので、東西8m、南北30mの範囲で約240m²を拡張した。また、北東部SF 2、南西部SF 3の範囲の広がりが認められるためさらに拡張した。南東部ではSK 1の端を検出したため南東部も部分的に拡張した。基本層序は、第I層表土層、第II層茶色シルト層、第III層茶灰色シルト層、第IV層明青灰色砂質土層、第V層青灰色粘質土層、第VI層暗青灰色粘質土層、第VII層青灰色砂質土層、第VIII層暗灰色砂質土層である。A区と同様にII層は大部分削平されている。北東部のSF 2は、表土層を除去した段階で検出した。SF 3もII層で検出したが東部は一部攪乱されている。SX 3は、III層で検出した。

C区

C調査区は、B調査区の南西側53mの地点で、一号中山樋管の北東側に位置する。TR 6のIV層で遺物の集中を検出したため、南北17m、東西11mの範囲で約187m²に拡張した。北側のTR 5では遺物の包含層は確認できなかった。基本層序は、第I層表土層、第II層茶色シルト層、第II'層暗茶色シルト層、第III層茶灰色シルト層、第IV層青灰色粘質土層である。II層は、B区程削平されておらず厚く堆積している。北東部のSF 4はII層の中でも下層で検出した。南西部のSF 5は、第V層で検出しておりSF 4と層位的に区別することができる。

D区

D調査区は、一号中山樋管の南西部に位置する。TR 9で包含層を確認したため、南北8m、東西14mの約112m²を拡張した。基本層序は、第I層表土層、第II層茶色シルト層、第II'層暗茶色シルト層、第III層茶灰色シルト層、第IV層青灰色粘質土層である。第II層が古墳時代の包含層であるが、散在している状況で集中は認められなかった。包含層中でも北西部に遺物が多い。

E区

D調査区の南西部120mの地点に位置する。TR 17で包含層を確認したため、南北9m、東西17mの約153m²を拡張した。基本層序は、第I層表土層、第II層茶色シルト層、第II'層暗茶

色シルト層、第Ⅲ層茶灰色シルト層、第Ⅳ層青灰色粘質土層である。D区と同様な堆積で、遺物包含層も第Ⅱ層であるが、散在している状況で集中は認められなかった。

F区

F区からは、東神木・ボケ地区である。中筋川3号中山樋管の南側120mの所に位置する。TR27のⅢ層において、遺物の集中を確認したため、まず西側に拡張した。西側拡張区では、Ⅳ-3層で約直径1mの範囲で炭化物の集中を確認し、その東側ではSX4を検出した。この炭化物の集中とSX4は同層位からのものであり、なんらかの関係を想定することができる。東側拡張区においては、地形が東側（川側）に向って傾斜しており、第Ⅲ層は既に削平され表土下にⅣ-1層を確認した。Ⅳ-1層は若干遺物を含んでいるが集中は認められず、その下層のⅣ-2層において斜面堆積しているSF6を検出した。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅲ層茶灰色シルト層、第Ⅳ-1層淡青灰色粘質土層、第Ⅳ-2層暗青灰色粘質土層、第Ⅳ-3層青灰色粘質土層である。

G区

F調査区から南西部へ80mの地点に位置する。TR32のⅣ-2・4層において遺物の集中を確認したため、南北12m、東西20mの範囲で約240m²を拡張した。北西部のTR31では遺物は確認できていない。集中して出土したSF7は、Ⅳ-4層で斜面堆積している。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅳ-1層青灰色粘質土層、第Ⅳ-2層青灰色砂質土層、第Ⅳ-3層青灰色粘質土層、第Ⅳ-4層暗青灰色粘質土層、第Ⅳ-5層青灰色粘質土層、第Ⅳ-6層青灰色砂質土層、第Ⅳ-7層淡青灰色粘質土層、第Ⅳ-8層青灰色粘質土層、第Ⅳ-9層暗青灰色粘質土層、第Ⅳ-10層青灰色砂質土層、第V層暗青灰色砂質土層である。調査区が川側に近いため、削平が著しく第Ⅰ層を除去した段階でⅣ-1層を検出した。Ⅳ-4層の包含層から出土した遺物で土器以外には、イノシシと考えられる歯骨片がある。

G'区

G調査区の東側5mの地点に位置する。TR30では、遺物は認められなかったが、G区で集中して出土しているため包含層の東端を確認するためにトレンチを設定し調査した。調査区は、東西10m、南北10mの範囲で約100m²である。G区と同様に削平が著しく、また斜面堆積しているため南側（川側）は、Ⅰ層除去後Ⅳ-1層を検出し、北側（岸側）はⅣ-3層の上面まで削平されていた。G'区においてはG区のSF7に統くと考えられる包含層を確認したが集中が認められず、東端では消滅している。SX5は、調査区の北西部のⅣ-3層において検出した。前述した如く削平が著しく表土を除去した段階である。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅳ-1層青灰色砂質土層、第Ⅳ-2層暗青灰色粘質土層、第Ⅳ-3層青灰色粘質土層、第Ⅳ-4層淡青灰色粘質土層である。

H区

G区より南西側75mの地点に位置する。TR39で集中して出土しており、南北5m、東西14m

の範囲で約70m²拡張した。拡張した段階で、南東部でSX7を検出したため、さらに南東部に拡張した。この地点は、他と比べて岸側でレベルが高い。SF8をⅡ層で、SX6は北東部のⅣ層で、SX7は南東部のⅡ層上面で検出した。SX6・7は小規模であるが、SF8も含め層位的に捉えることができた。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅱ層茶色シルト層、第Ⅲ層明茶色シルト層、第Ⅳ層茶灰色シルト層、第Ⅴ層青灰色粘質土層である。

I区

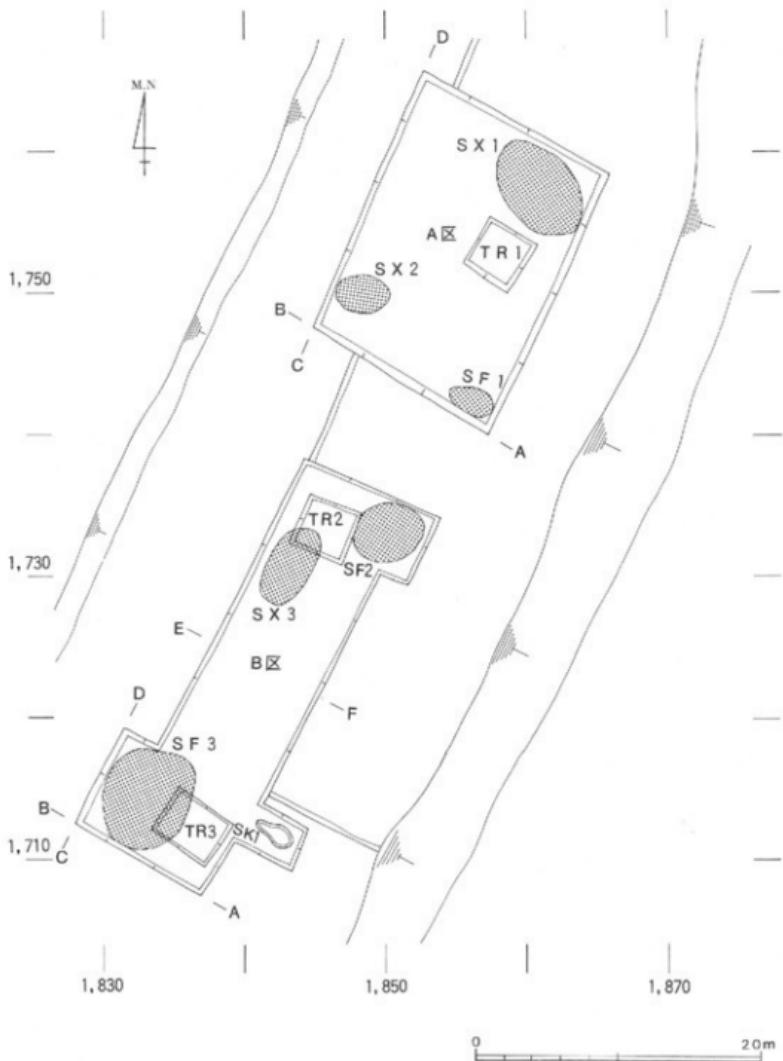
H調査区より南西側に62mの地点に位置する。TR45で遺物の集中を確認したため、東西15m、南北10mの範囲に150m²拡張した。SF9をⅢ層で検出した。H区と同様に標高は他と比べて高い。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅱ層茶色シルト層、第Ⅲ層茶灰色シルト層、第Ⅳ層青灰色粘質土層である。

J区

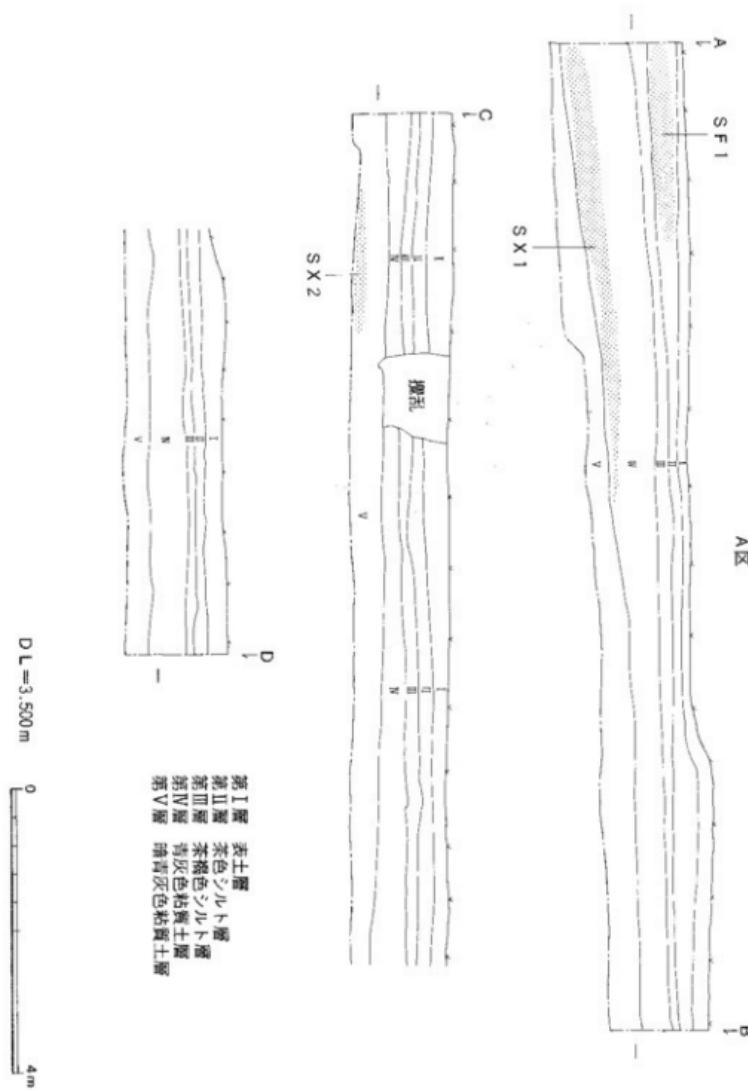
I調査区の西側35mの地点に位置する。TR47で遺物包含層を確認したため、東西17m、南北8mの範囲で約136m²拡張した。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅱ層茶色シルト層、第Ⅲ層暗茶色シルト層、第Ⅳ層茶灰色シルト層、第Ⅴ層青灰色粘質土層である。このJ区では、遺物の集中は確認できなかった。

K区

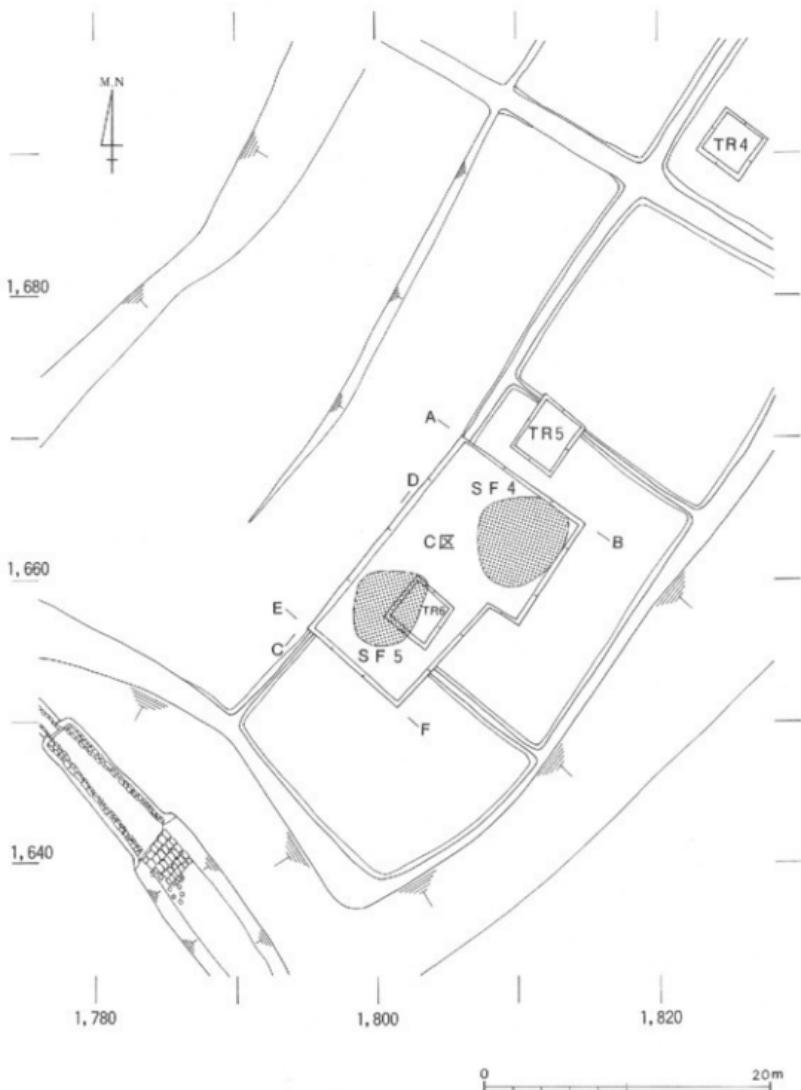
J調査区の南東側42mの地点に位置する。TR49・50において遺物包含層を確認したため、南北5m、東西21mの約105m²を拡張した。基本層序は、第Ⅰ層表土層、第Ⅱ層茶色シルト層、第Ⅲ層暗茶色シルト層、第Ⅳ層青灰色粘質土層である。K区では、遺物の集中は確認できなかった。



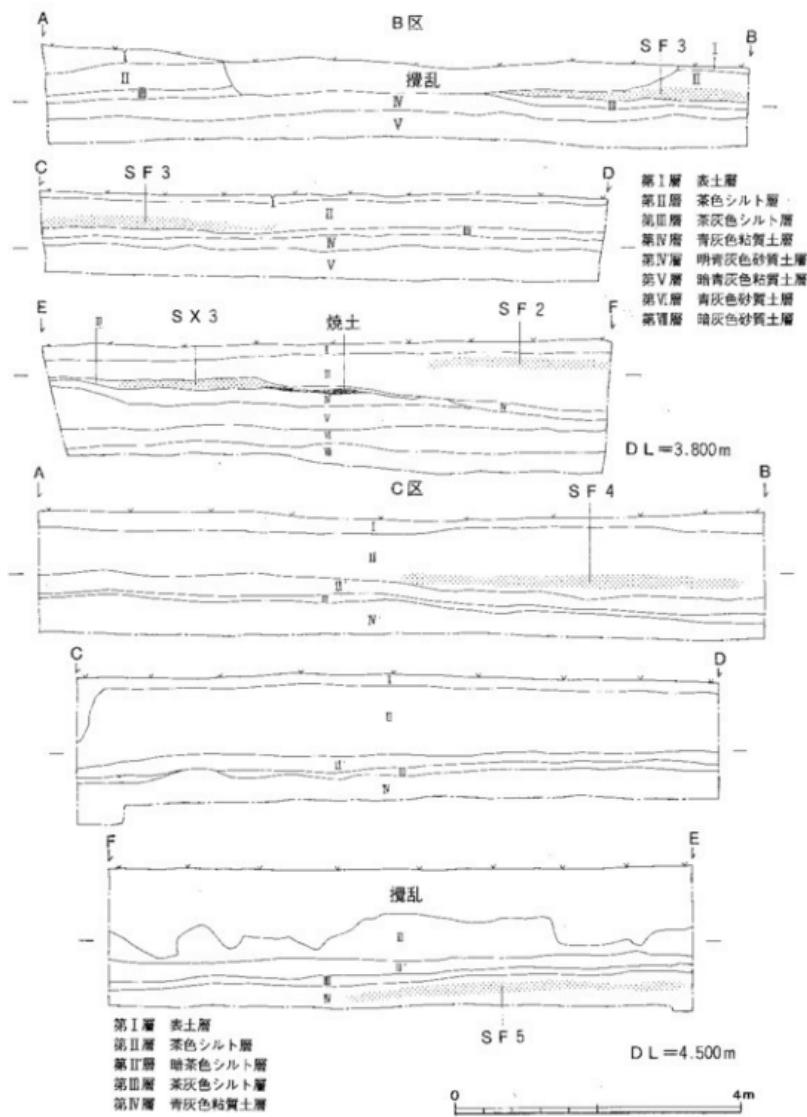
第51図 A・B区周辺地形図、集中地点配置図



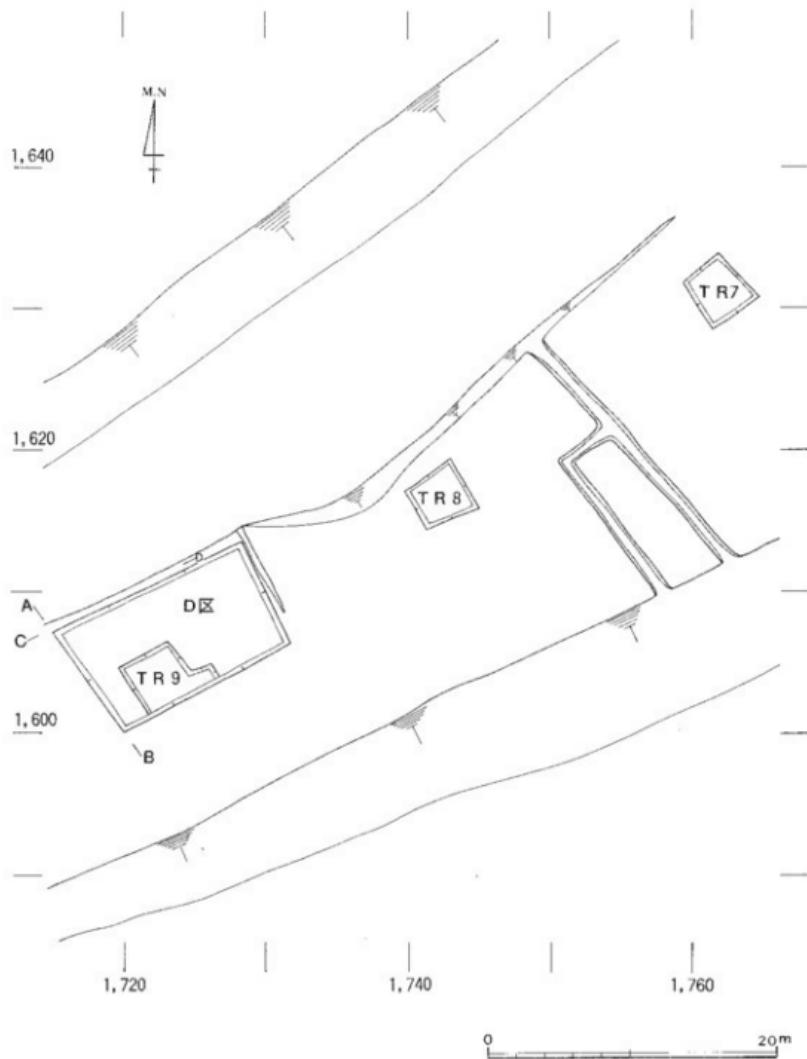
第52図 A区セクション図



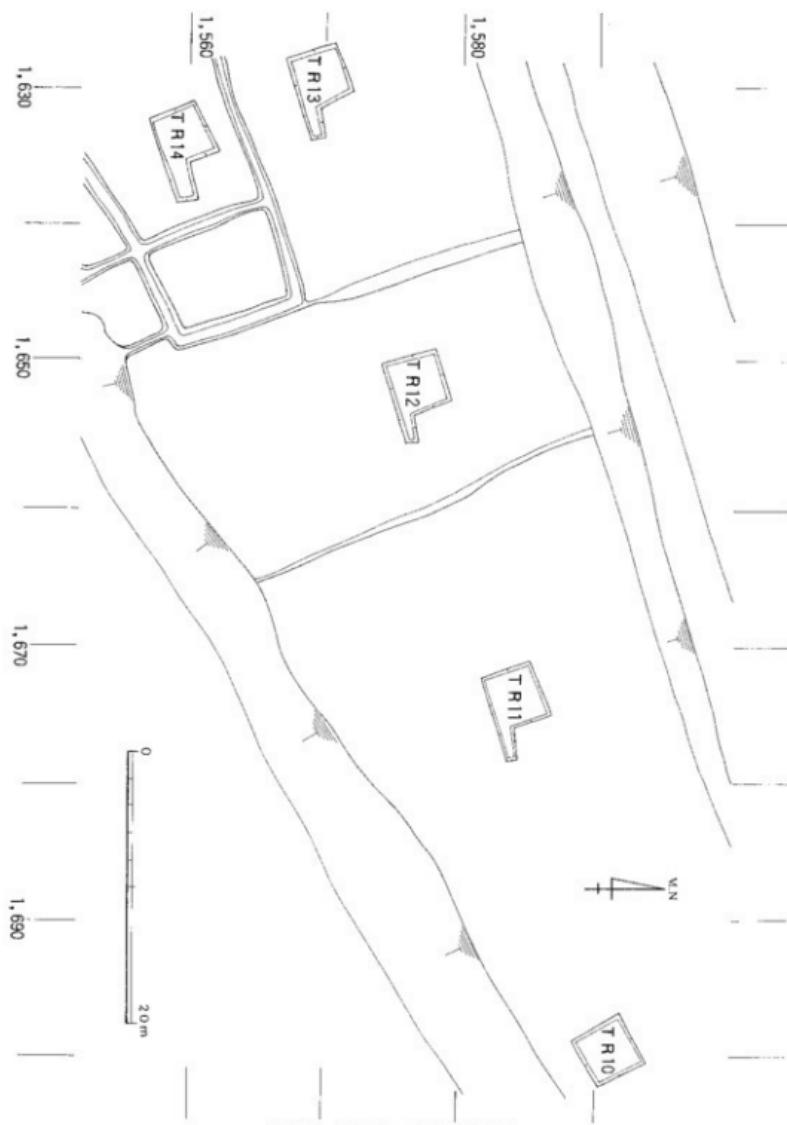
第53図 C区周辺地形図、集中地点配置図



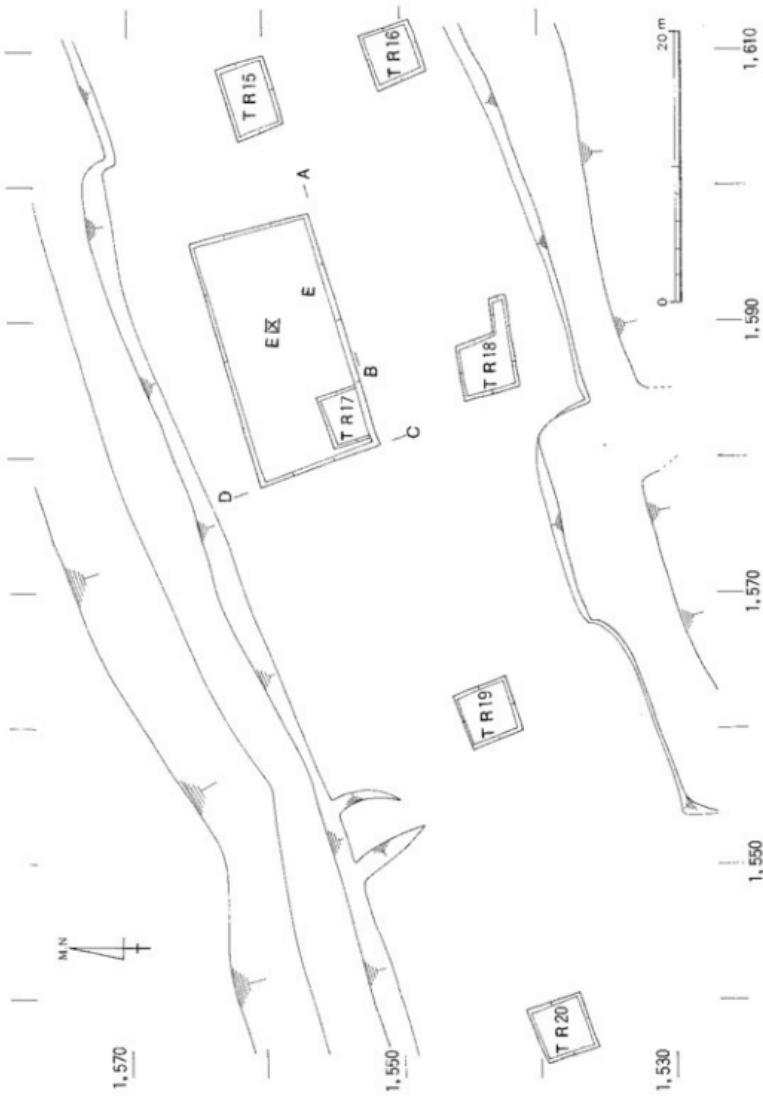
第54図 B・C区セクション図



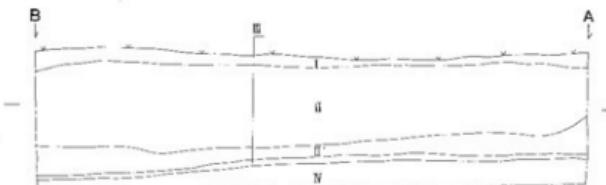
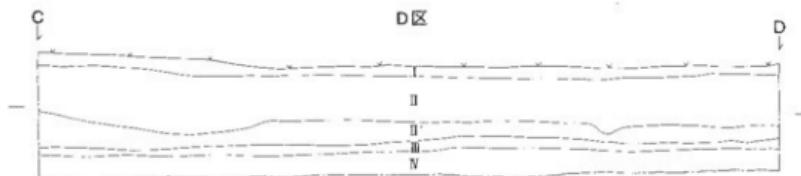
第55図 D区周辺地形図



第56図 TR 10~14周辺地形図

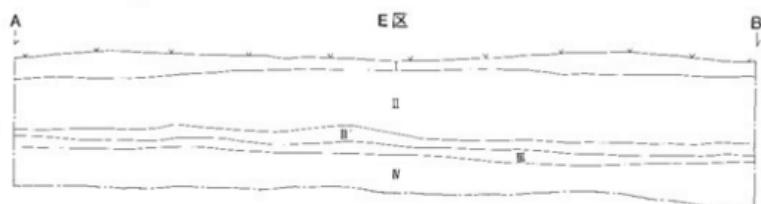


第57図 E区周辺地形図



第Ⅰ層 表土層
 第Ⅱ層 茶色シルト層
 第Ⅲ層 暗茶色シルト層
 第Ⅳ層 茶灰色シルト層
 第Ⅴ層 青灰色粘質土層

D L = 5.000m

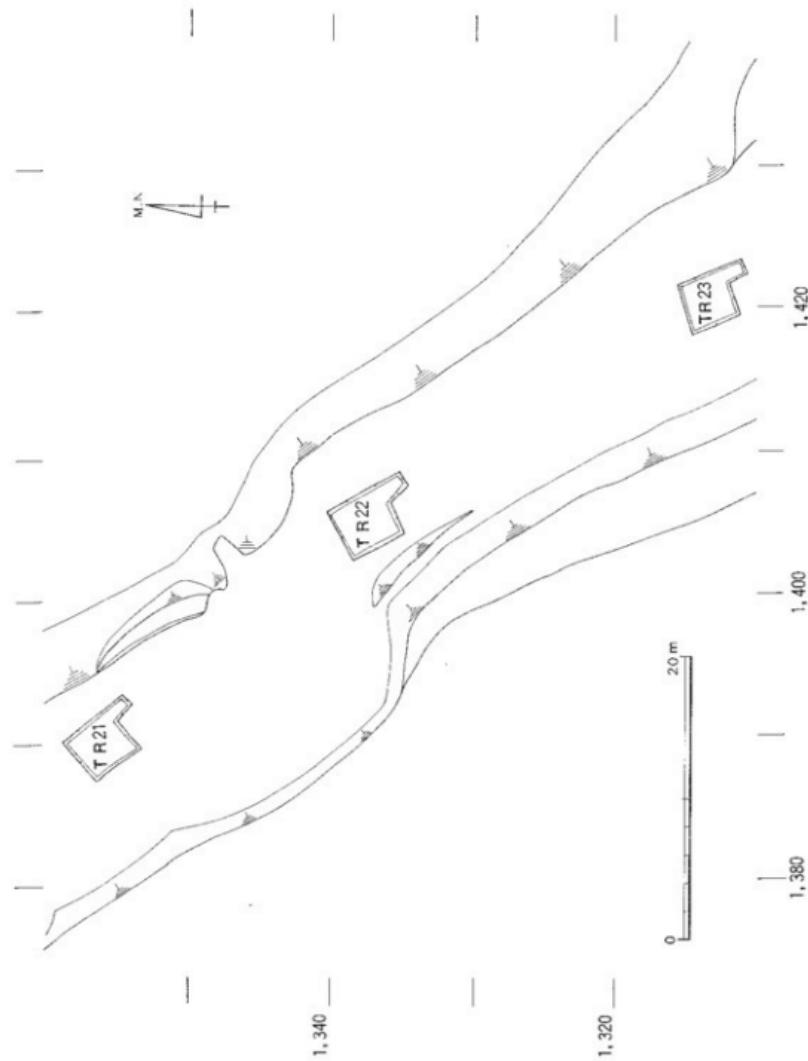


D L = 4.500m

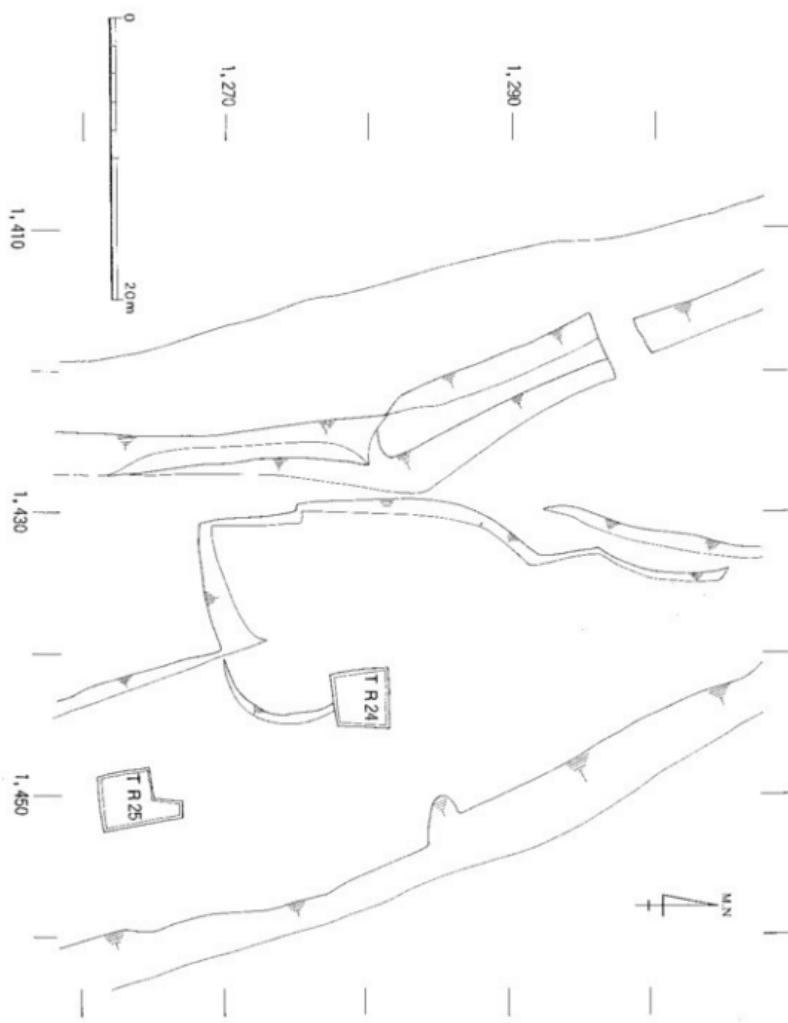
第Ⅰ層 表土層
 第Ⅱ層 茶色シルト層
 第Ⅲ層 暗茶色シルト層
 第Ⅳ層 茶灰色シルト層
 第Ⅴ層 青灰色粘質土層



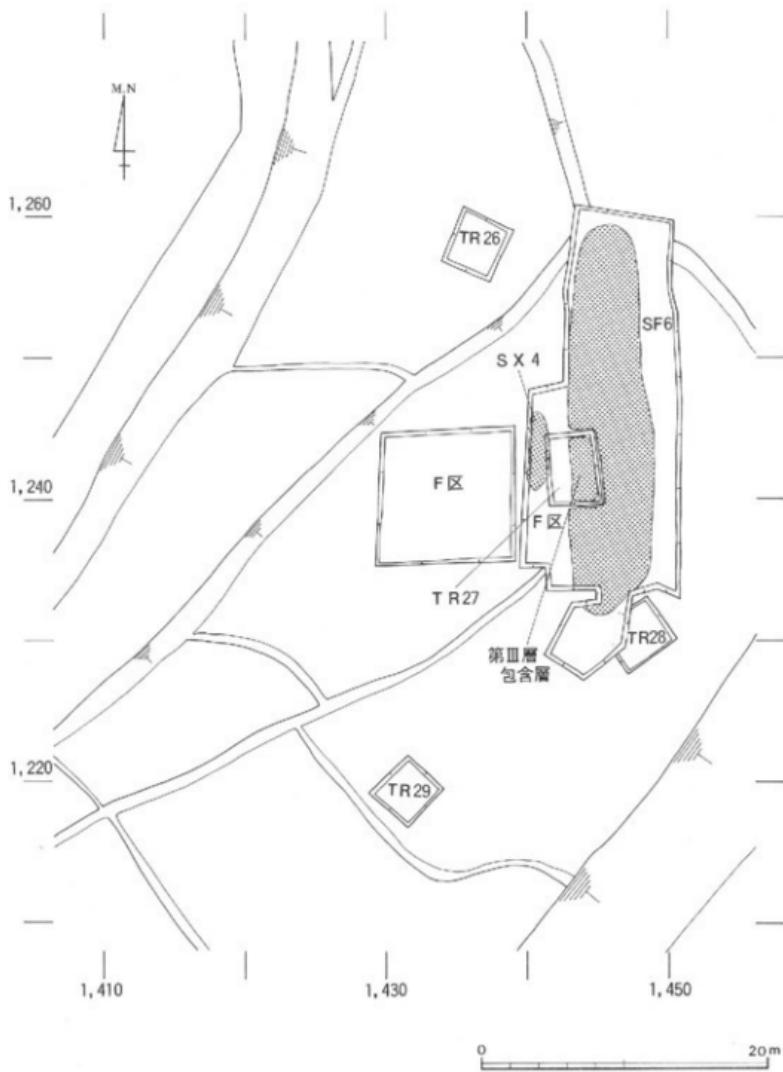
第58図 D・E区セクション図



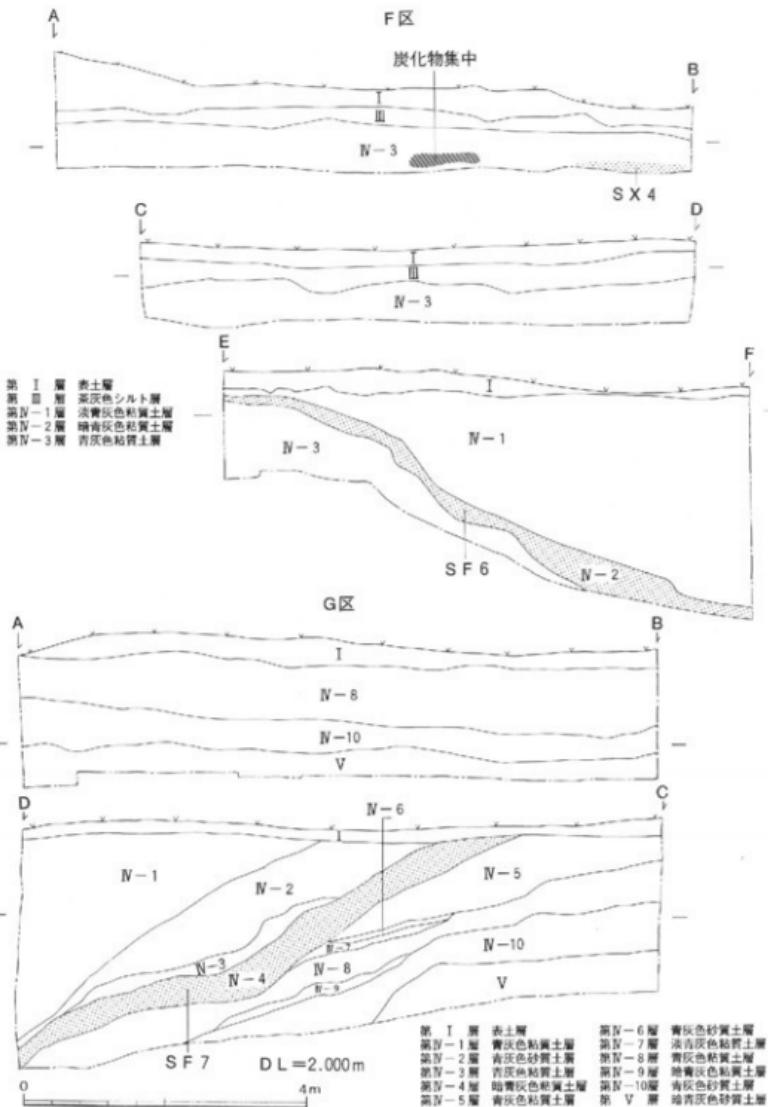
第59図 TR 21~23周辺地形図



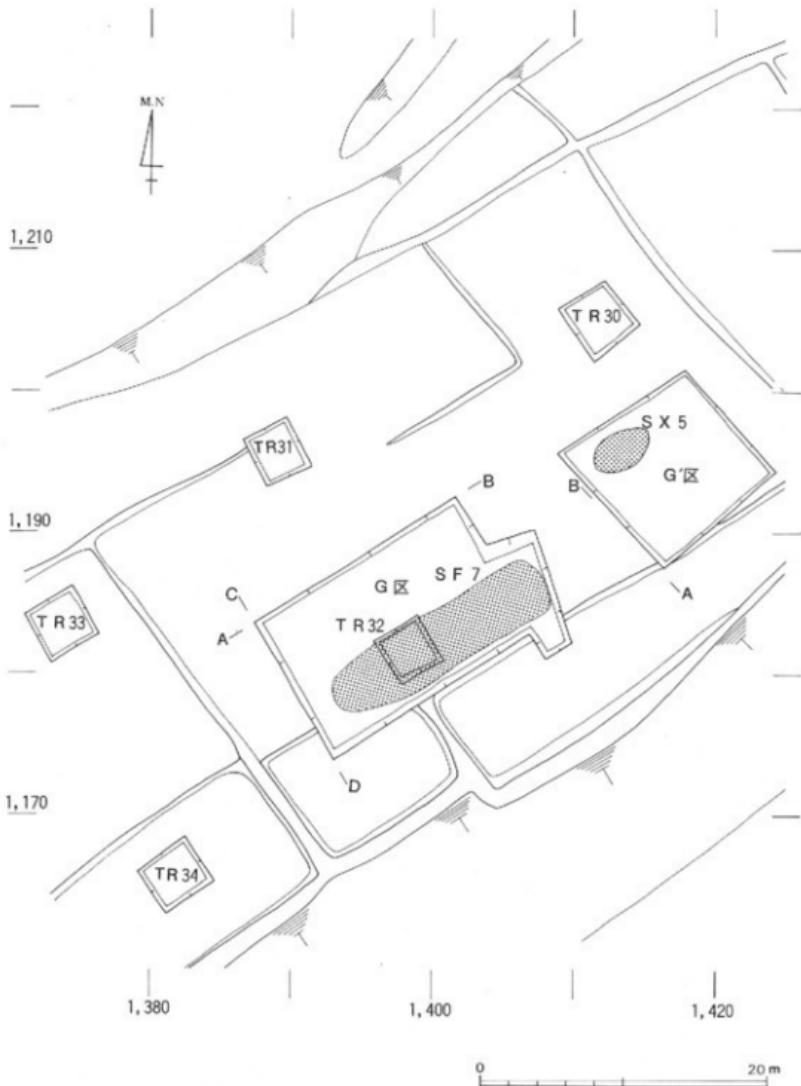
第60図 TR 24・25周辺地形図



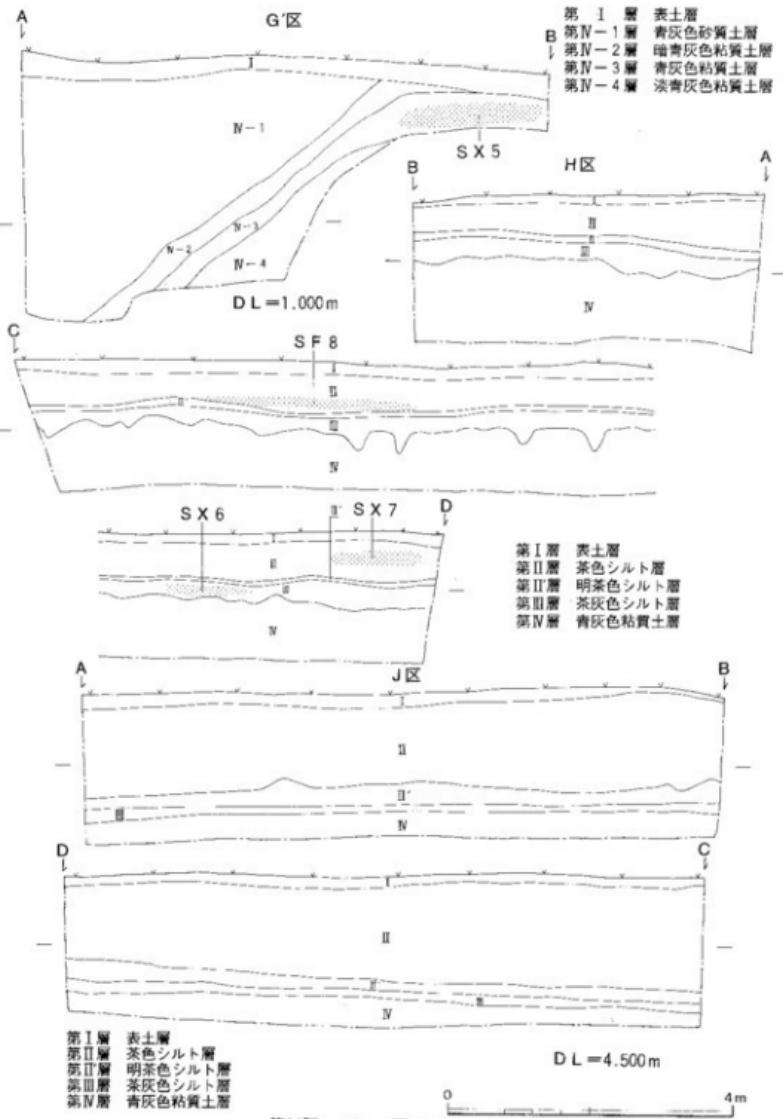
第61図 F区周辺地形図、集中地点配置図



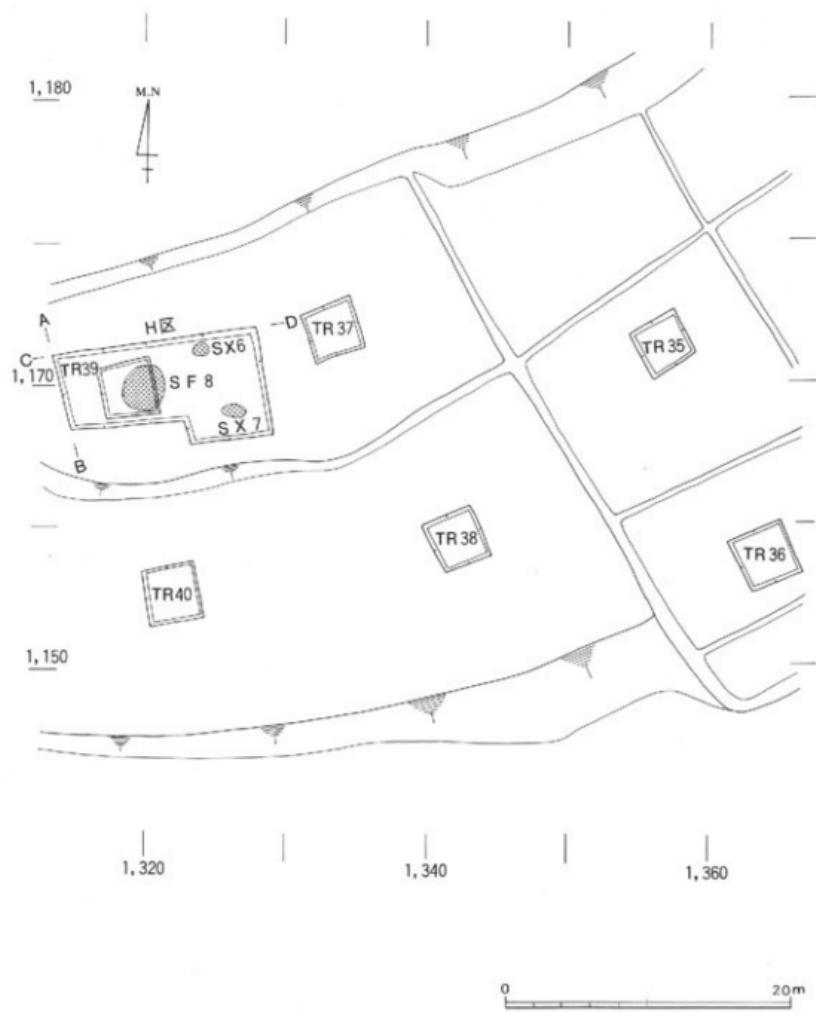
第62図 F・G区セクション図



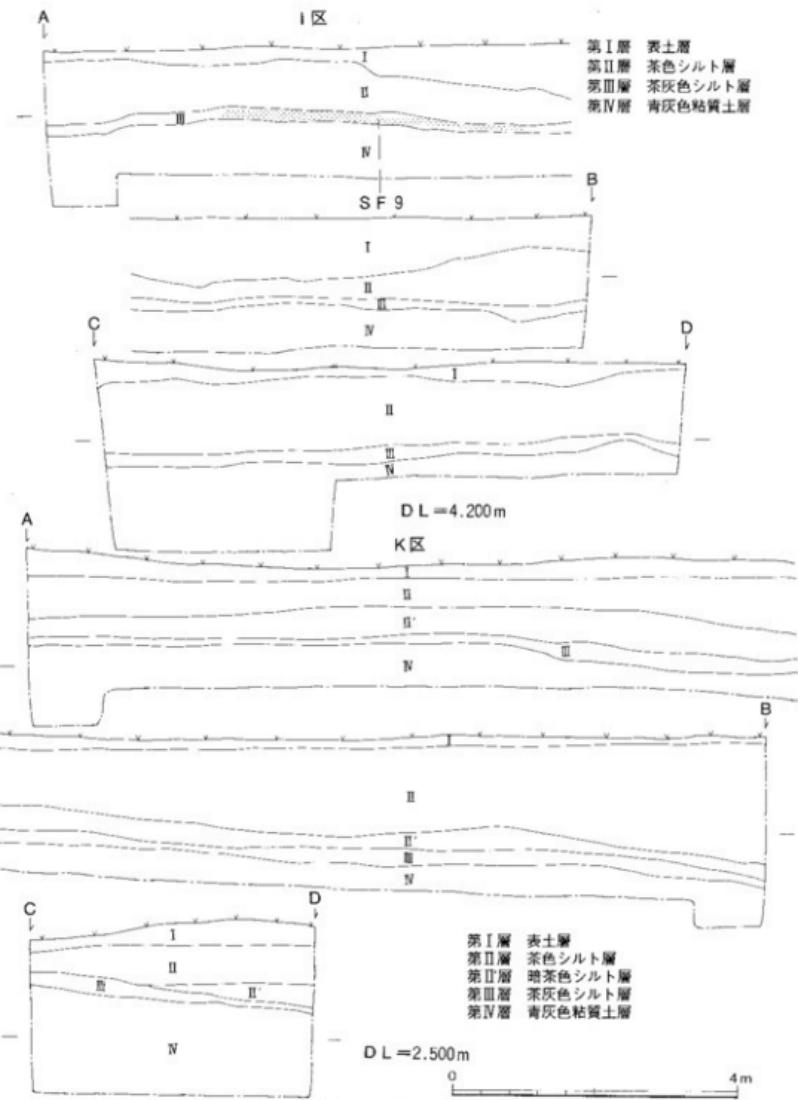
第63図 G・G'区周辺地形図、集中地点配置図



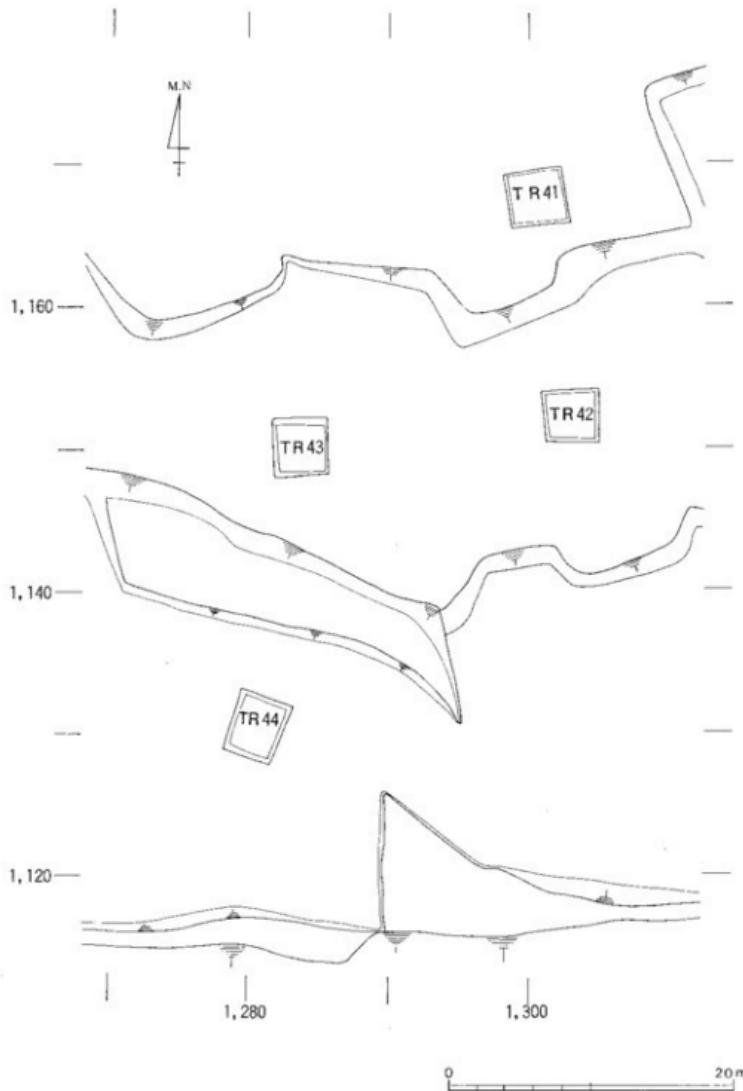
第64図 G'・J区セクション図



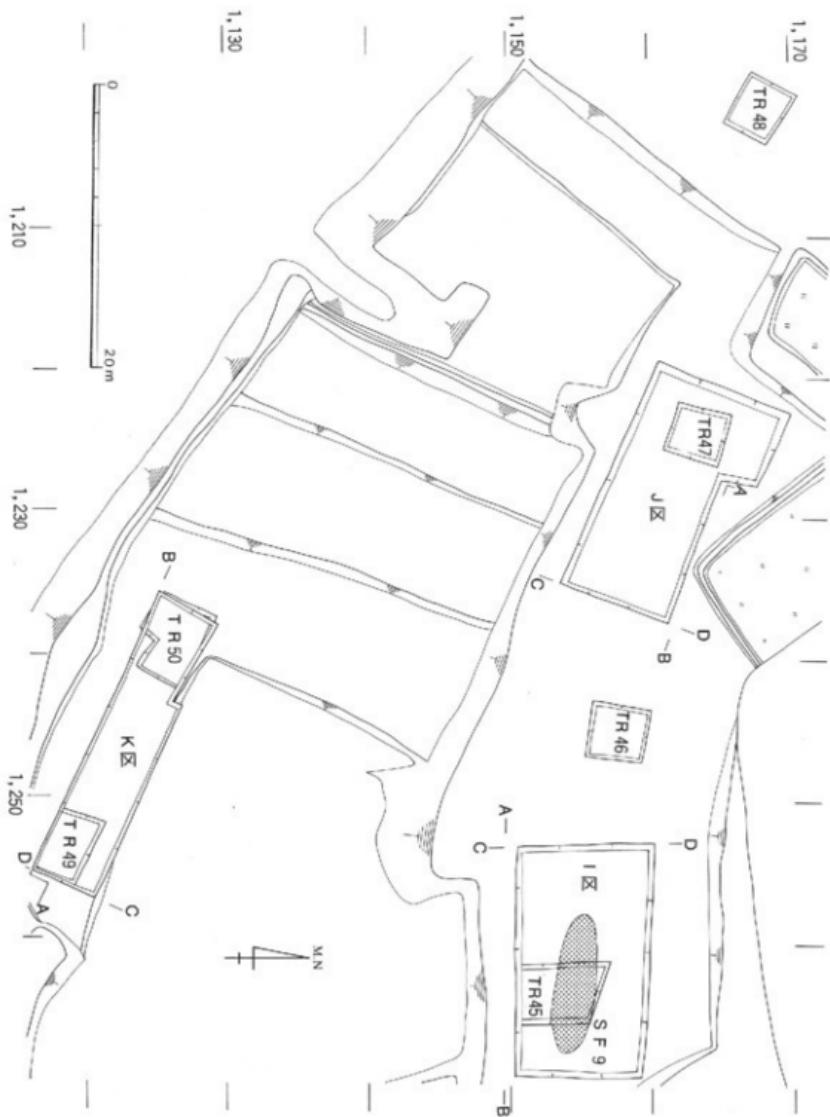
第65図 H区周辺地形図、集中地点配置図



第66図 I・K区セクション図



第67図 TR 41～44周辺地形図



第68図 I・J・K区周辺地形図、集中地点配置図

(3) 遺構

今次調査は、試掘調査によって確認した遺物集中地点を中心にA～K区までを拡張し調査を実施した。その結果A・B・C・F・G・G'・H・I区の包含層より多量に遺物が集中して出土した。遺構として捉えられるものは、B区のS K 1だけであるが、遺物の出土状況、個々の性格からこれらの遺物集中地点は、掘り込みをもつ遺構に伴ったものではないが、古津賀遺跡と同様に祭祀行為の行なわれた場所として捉えることができる。これらの集中地点をS Fのナンバーをつけ祭祀跡として、また祭祀跡と考えるについては不明確である集中地点をS Xとして記述することにする。

古墳時代

① S F 1 (付図4)

A調査区で検出した。S F 1は、A調査区の中で南東部に位置する。遺物は、第II層中から南北3.0m、東西1.0mの範囲に集中して出土している。集中地点としては小規模なものである。遺物は土師器のみで形成されており、壺・高杯・手捏土器が出土しているが、図示でき得たものは、(359)の高杯のみである。その他は、3～5cmの小円碟と、15～20cmの大碟が集中して出土している。

② S F 2 (付図6)

B調査区で検出した。S F 2は、B調査区の北東部に位置する。遺物は、第II層から出土している。南北4.5m、東西4.8mの範囲で円形状に集中している。須恵器の壺・杯身・杯蓋・甌・土師器は壺・高杯・椀が出土している。S F 2の南部に須恵器壺の602が散在しており、北部には、小碟が散在している状況である。土師器壺は、北東部に比較的まとまっている。S F 2の約10cm下層には、南北1.5m、東西1.6m程の範囲で炭化物の集中を検出した。炭化物の集中と同レベルで出土した土器と上層の土器が接合できることから、同一時期のものと考えることができる。出土遺物は以下の通りである。

第16表 S F 2 出土遺物一覧表

器種	掲 図 番 号	計	器種	掲 図 番 号	計
土 壺	64・72・73・157	4	須 梗	441～444・446・450・462	12
師 梗	198・233・234	3	杯	464・469・491・534・535	
高 杯	311・321・334・337	4	甌	583	1
			壺	602	1

③ S F 3 (付図7)

B調査区で検出した。S F 2より南西27mの地点に位置する。遺物は、第II層から出土している。南北7m、東西6mの範囲で円形状に集中している。この地点では、須恵器が認められず、S F 1同様土師器のみで構成されている。土師器の壺・高杯・椀・脚付椀・甌が出土している。またこの地点は手捏土器が認められない。S F 3の出土状況で特徴的な点は、甌の周囲

に高杯・椀が出土していることである。遺物は3.30~3.40mのレベルから出土している。出土遺物は以下のとおりである。

第17表 S F 3 出土遺物一覧表

器種	挿図番号	計	器種	挿図番号	計
土壺	26	1	土 梗	229~232・281・282	6
甌	58・71	2	脚付椀	302・305	2
瓶	182	1	器	310・336・360~363	6

④ S F 4 (付図8)

C調査区で検出した。S F 4は、C調査区の南東部に位置する。遺物は、第II層から出土しており、南北6.0m、東西6.5mの範囲で円形状に集中している。この集中地点は須恵器、土師器も多量に出土しているが、その他に手捏土器、土製模造品、石製模造品が出土している。手捏土器は、いろいろなタイプのものが出土しており、バラエティーに富んでいる。土製模造品は勾玉・鏡・土玉が、石製模造品では有孔円盤、剣形品が各1点、白玉が多数出土している。各器種の配置であるが、おおまかに中心部に土師器の甌が集中しており、その周囲に土師器の椀、手捏土器がみられる。須恵器は南西部に杯が多く出土している。これらの中で土師器の椀、甌、須恵器の杯の中に3~5cm大の小砾が混入している。出土状況は水平な面に同レベルで出土しており、祭祀跡として現位置を移動していないものと考えられる。出土遺物は以下のとおりである。

第18表 S F 4 出土遺物一覧表

器種	挿図番号	計	器種	挿図番号	計
甌	59・69・77・79・80~82 128~130・146・173	12	土 師 器	369~375・377・378・388 ~393・395~399・402~404 406・407・410~413・415 416・418~420・424~426 428~430・432	41
瓶	184	1	石 製 模 造 品	677・680・687~706	22
椀	195・199・200・204~207 211・213・214・235~237 239~245・283・285	22	須 惠 器	95・107・118・123・160 162・164・166・170	9
脚付椀	294~297・299・306	6	高 杯	109・149・155	3
高 杯	319・320	2	甌	126	1
土 製 模 造 品	667・669・671~675	7			

⑤ S F 5 (付図8)

C調査区で検出した。S F 4の南西部10mの地点に位置する。遺物は、第IV層から出土している。南北5m、東西5.5mの範囲で円形状に集中している。集中度は密ではないが良好な資料が出土している。土師器は高杯(312・313・338・364)、甌(78・177)、手捏土器(379・414)、須恵器は杯(438)が出土している。北東部で出土しているS F 4より下層で出土しており、時期的な差を認めることができる。器種別の配置パターンを明確に捉えることができない。水平な面に同レベルで出土している。

⑥ S F 6 (付図9・10)

F調査区で南北の帯状に検出した。S F 6は、F調査区の東部に位置する。遺物は、第IV-2層から主に出土しており、南北27.0m、東西6.0mの範囲で東側(川側)に傾斜した状態で川に沿って帯状を呈している。この集中地点は、須恵器の壺・甕・高杯・杯・蓋・土師器の壺・高杯・椀・脚付椀・瓶・壺・手捏土器が出土している。S F 6の南東部で、(594)の甕、(439)の杯が出土した地点では、土製模造品の鏡、石製模造品の臼玉・有孔円盤・勾玉が集中して出土している。S F 6は、土師器の高杯が比較的多く出土しており、手捏土器が少ない。出土状況は、土層のIV-2層に混入しているものがほとんどであり、東側(川側)に向って斜面堆積している。西部(岸側)のレベルは、2.05-2.10mで、東側(川側)のレベルは0.20-0.30mであり、傾斜角度は約25-30°である。出土遺物は以下のとおりである。

第19表 S F 6出土遺物一覧表

器種	挿図番号	計	器種	挿図番号	計
土 師 器	壺	20-23・29-30	土 師 器	309・314・317・322-325	21
		6		327-330・333・340・342	
	甕	40・60・66-68・83-85		344-346・349・365-367	
		48		380・381・408・417・421	
土 師 器	瓶	87-107・121・122・125		433・434	7
		131・132・134-136・145		668・670	
	碗	148・153・159・160・162		678・679・681・682	
		163・167・171・176・181		708-829	
土 師 器	瓢箪	183・185・188	土 製 模 造 品	439・477・478・485・489	126
		193・217-219・225・226		510・511・514・516-518	
	椀	247-262・264-266・276		523-525・527・536・538	
		・277・286・288・289		573-577	
脚付椀	301・303	2	須 恵 器		17

⑦ S F 7 (付図11)

G調査区で出土した。S F 7は、調査区の南部の地点に位置する。遺物は、第IV-4層から主に出土しており、南北4m、東西17mの範囲で、南側(川側)に傾斜した状態で川に沿って

第20表 S F 7出土遺物一覧表

器種	挿図番号	計	器種	挿図番号	計
土 師 器	壺	25	土 師 器	手捏土器	1
		1		431	
	甕	65・108-111・113-117		448・452・453・460・461	24
		23		463・473・481・488・508	
土 師 器	瓶	119・124・143・137-141		509・513・519・532・533	
		149・155・164・168・172		540・541・544・546・547	
	碗	186・187・189・190		549・558・561・562	
		4			
土 師 器	椀	202・203・212・267-271	土 製 模 造 品	高杯	581
		10		586	1
	脚付椀	273・291		甕	586
		1		壺	604・607
高杯	304	1			2
	308・318・352・354・356 357・368	7			

帶状を呈している。この集中地点から須恵器は、杯・壺・甌が出土しているが、ここでは高杯が少ない。土師器は、壺・甌・椀・脚付椀・高杯・瓶・手捏土器が出土している。この地点では、石製・土製模造品の出土が認められない。出土状況は、上層のⅣ-4層中からのものが主であり、南側（川側）に向って斜面堆積している。北側（岸側）のレベルは、2.2~2.3mで、南側（川側）のレベルは、0.2~0.3mを測り、傾斜角度は約30°~35°である。

⑧ S F 8 (付図13)

H調査区で検出し、ほぼ中央部に位置する。遺物は、第Ⅱ層から出土している。東西3m、南北3.1mの範囲で集中している。この集中地点は、土師器の甌(123・142・151・170)、椀(216・279)、手捏土器(383・423)、須恵器の杯（身・蓋）(482・529・548・550)がみられる。その中で(142)の甌の周囲に(482)の杯（蓋）や(279)の椀が出土しているように、(151)を中心としたものと、(170)や(123)を中心としたものもみられる。この地点でも土師器・須恵器の高杯がみられないかわりに手捏土器が存在する。集中地点とすれば小規模なものである。出土状況としては、水平な面に4.5~4.6mの同レベルで出土しており、現位置をさほど移動していないものと考えられる。

⑨ S F 9 (付図14)

I調査区で検出し、ほぼ中央部に位置する。遺物は、第Ⅲ層から出土している。東西10m、南北2mの範囲で集中している。この集中地点は、須恵器の甌(606)を中心にして須恵器の杯（身・蓋）(476・552・553)、土師器の甌(154)、手捏土器(435)、椀(278)が出土している。この集中地点は、他と比べると小規模で散在している状況である。出土状況は、4m前後のレベルで水平であり、現位置をさほど移動していないものと考えられる。

⑩ S X 1 (付図4)

A調査区で検出した。S F 1 の北西部11mの地点に位置する。第V層から出土しており、東西3.6m、南北2.9mの範囲で集中している。弥生時代の包含層からのもので、壺(4)、甌(8~11)が出土している。同レベルで出土しているからこの時期の一括資料と考えられる。

⑪ S X 2 (付図5)

A調査区で検出した。S X 2 は、調査区の北東部でS F 1 の北側15mの地点に位置する。遺物は、第Ⅳ層中から出土しており、他の集中地点と比べると散在している状況である。範囲は、南北5.0m、東西8.0mである。遺物は、土師器・須恵器が出土しており、土師器は、甌(42・56・126)、高杯(335)、椀(228)、壺(27)で須恵器は、杯(556・567)が出土している。S X 2 の北部で手捏土器(400)と甌(42)が出土しているが、この2点はS X 2 に含まれるものではない。S X 2 の中央部に一辺50cmを測る三角形状の台石の周辺に土師器甌(126)、椀(228)、須恵器杯(567)が出土しており同レベルから出土していることから共伴資料と考える。

⑫ S X 3 (付図6)

B調査区で検出した。S F 2 の西部7mの地点に位置する。第Ⅲ層から出土しており、東西

3.1m, 南北6.0mの範囲で集中している。この集中地点で、壺(39・74)は、その他のグループとは分けて捉える必要がある。南側のグループには、土師器の壺(36), 壺(43・45・47), 梶(208・220)がセットとして捉えられ、すべて外面にタタキを施されるものである。同レベルから出土しており、出土状況を考えると同一時期で現位置を移動していないものと考えられる。

⑩ SX 4 (付図10)

F調査区で検出した。F区のはば中央部でSF6の約3m西側に位置する。第Ⅵ-3層でSF6の下層から出土している。東西5.5m, 南北1.8mの範囲で集中して出土しているこの集中地点では、土師器の壺(32), 壺(48・49・52)が出土しており、小規模にまとまっている。東側(川側)に向ってやや傾斜して斜面堆積しているが、これらの土器群は、外面にタタキが施され、形態・手法からも同一時期の所産と考えられる。

⑪ SX 5 (付図12)

G調査区で検出した。G区の東側の調査区で、SX5は北西部に位置する。第Ⅳ-3層から出土しており、上層のⅣ-2層は、SF7に続く5世紀末から6世紀の包含層である。東西4.5m, 南北3.0mの範囲で集中して出土している。この集中地点では、土師器の壺(37), 壺(51・53・55), 梶(194・201・221-223)が出土しており、B区のSX3と同様なセット関係である。出土状況は、南側(川側)に向ってやや傾斜しているが、SX4と同様に土器群の外面にタタキが施されるものであり、同一時期の所産と考えることができる。

⑫ SX 6 (付図13)

H調査区で検出し、SF8の北東5.0mの地点で、SX6は調査区北東部に位置する。第Ⅳ層から出土している。上層のⅡ層は、SF8, SX7を含む包含層である。SX6で図示でき得るものは、土師器の壺(38)1点のみであるが、SF8より一時期古いものと考えられるのでとりあげてみた。

⑬ SX 7 (付図13)

H調査区で検出し、SF8の北東7mの地点で、SX7は調査区南東部に位置する。第Ⅱ層から出土している。SF8は第Ⅱ層の下面で検出しており、SX7は同層位のSF8より20-30cm上面で出土している。実測可能なものは、土師器の壺(120・150)2点であるが、その他に須恵器の壺と共に伴している。壺は内面に青海波文のタタキが施され、土師器の壺もやや時期的に新しくおくことができる。周囲に3-5cm大の小礫がみられ、他の出土例から土師器の壺の中に小礫をいれ、小規模な祭祀がおこなわれた可能性がある。

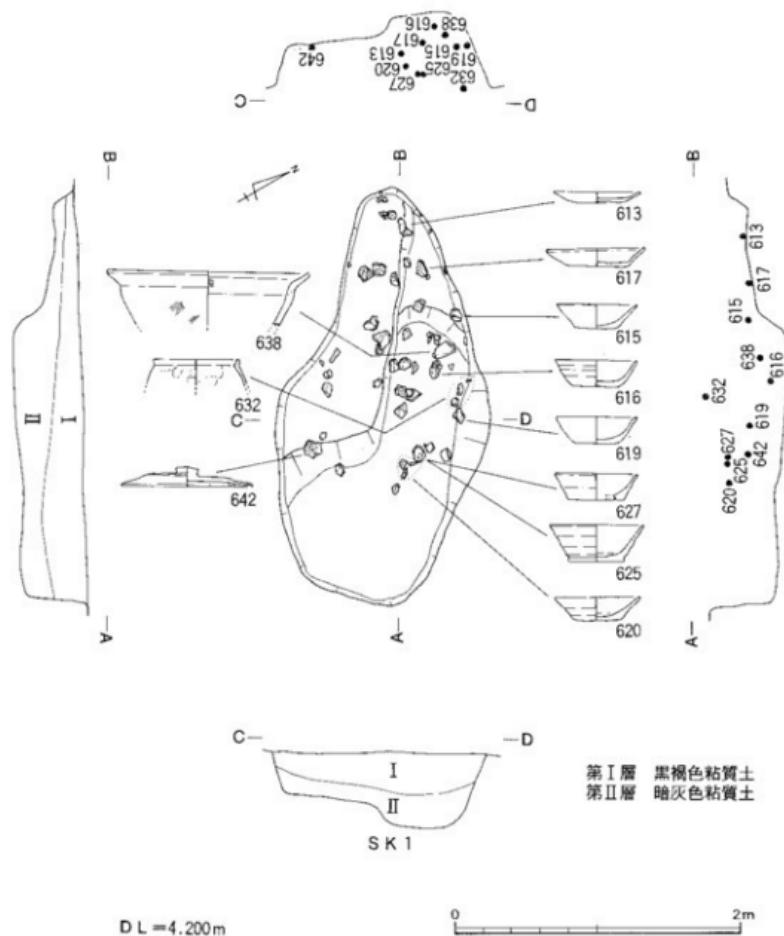
古代

① SK 1 (第69図)

B調査区の南西部に位置する。I層を除去した段階で検出した。不整梢円形のプランを呈し、長軸2.95m, 短軸1.5m, 深さ30-50cmを測る。床面は南東壁側が低くなり、南西壁が高くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は2層に分層でき、上層黒褐色粘質土、Ⅱ層

暗灰色粘質土である。出土状況はⅠ～Ⅲ層の間で北部に集中している。遺物は、土師器皿(613・617)、杯(615・616・619・620・625・627)、鍋(638)、壺(632)、須恵器の蓋(642)等が主に出土している。

(松田)



第69図 SK 1 全体図

(4) 遺物

貝河中山遺跡群から出土した遺物は、弥生時代から古代に亘るものであるが、その中心は古墳時代である。出土状態は、包含層中で集中しているものが大半である。遺物の集中地点は、祭祀場所として捉える考え方で遺物も説明を加えていかねばならないが、古代のSK1を除き人為的な掘削による遺構からの出土ではないため、本稿では、各時代ごと器種別に記載し形態分類することにより説明を加えていくこととする。尚詳細は遺物観察表を参照されたい。

① 弥生土器（第73図）

弥生土器は、100点近い破片が出土したが図示し得たのは19点である。すべて壺であり甕は1点も含まれていない。幡多地方における弥生土器は、資料の僅少さから編年は未確立であるために詳しく述べることとはできないが、1が中期中葉に他はすべて中期後葉に属するものである。後者においては、口縁部外面に粘土帯を貼付して肥厚させるものが多く、胎土には花崗岩を多く含む。

（出原）

② 土師器

貝河中山遺跡群の土師器は、古墳時代と古代（平安時代）のものが出土しており、古墳時代の遺物がその中心をなす。古墳時代の器種構成として、壺・甕・瓶・椀・脚付椀・高杯・手握土器が出土している。古墳時代の遺物は、すべて包含層中で、特に祭祀場と考えられる集中地点から出土している。古代の遺物は、B調査区から出土しており、その大半はSK1から出土しているものである。以下器種ごとに形態分類も加え説明していく。

古墳時代

壺（第74図20・第76図38）

壺は、口縁部の形態及び、外面の調整で主に分類した。

A類（第74図20～28）

胴部は、球胴型を呈し口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。調整は、口縁部内外面はヨコナデ、胴部はヘラナデが施されるものが多い。色調は、浅黄橙色からにぶい橙色を呈するものが大半である。胎土は、1～2mmの砂粒を含む。器高は15cm内外で、B区出土の（26）のみがやや小型である。

B類（第74図29～31）

胴部は、球胴型を呈し口縁部は内湾して上方に立ち上がる。調整は、口縁部内外面ヨコナデで胴部はヘラナデ及びナデが多い。口縁端部は、内傾する特徴を有する。色調は、黄橙色を呈する。胎土は、1mm大の砂粒を含む。（30）は器高が18.6cmでやや小型で、（31）は29.9cmでやや大型である。

C類

C-I（第75図33・36）

C-II（第75図32・37）

C類は、外面にタタキを有し、胴部は球胴型を呈するものである。口縁部の形態によってさらに分類する。C-I類は、口縁部がラッパ状に開くもので、C-II類は口縁部が大きく「く」の字状に外反するものである。器高35cm内外を測るもので大型品である。調整は分類で行った如く、外面にタタキを有し、内面はハケ調整である。色調は、黄橙色で胎土は2~4mm大の砂礫を含むものが多い。

D類（第76図38）

胴部は、球胴型を呈し、口縁部は複合口縁を有するものである。1点のみH調査区S X 6から出土している。

甕（第76~95図39~181）

甕は、多量に出土しており、また形態も類似しているものが多く、形態分類も明確におこなうことができなかったが、主に分類の基準として、底部・口縁部の形態、胴部の最大値及び外面の調整もつけ加え行つた。

A類

A-I（第76図39・40）

A-II（第76図41・44）

A類は、器高20cm以上で、口径15cm以上を測り底部が平底のものである。口縁部の形態によって細分した。A-I類は、口縁部が大きく外反するものである。この中でも若干外反度が異なっている。A-II類は、口縁部がゆるやかに外反し貼付口縁を有するものである。調整は、(40)を除き、胴部外面に斜位・横位のハケ調整、(41・44)は内面横位のハケ調整が行なわれている。色調は全体的に橙色からにぶい橙色を呈する。胎土は、0.5~1mm大の砂粒を含有する。

B類（第76・77図42・43、45~55）

底部は丸底で、口縁部は「く」の字状に外反し外面に平行から斜位のタタキが施されるものである。口縁端部が面取りされるものと、丸くおさめるものがある。器高は、20~30cmを測るものが多く、その中でも(50)は大型品である。外面は、すべてタタキが施されるが、その後ハケ調整によって消されている。内面の調整は、斜位のハケ調整である。色調は、赤褐色からにぶい橙色を呈する。胎土は、1~2mmの砂粒を若干含む。

C類

C-I-①（第78図56~62、第79図63）

C-I-②（第79図64~69）

C-II-①（第80図70~75、第81図76~81、第82図82~89、第83図90~95、第84図96~100、
第85図101~105、第86図106~111、第87図112~117、第88図118~123、第89
図124・125）

C-II-②（第89図126~130、第90図131~136、第91図137~143、第92図144）

C-II-③（第92図145・146）

C - III (第92図147~151)

C類は、器高20cm以上で、口径15cm以上を測り底部は丸底を呈するものである。最大径によってI~III類に分類し、さらに口縁部の形態によって①~③に細分した。

C - I - ①は、最大径を胴部上位に有し、口縁部が大きく外反するものである。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部はヘラ状工具によるナデ調整が多い。(58・60)などは、内面にハケ調整が施される。色調は、浅黄橙色を呈するものが多いが、(60)などは灰白色である。胎土は、0.5~1mmの砂粒を多量に含む。

C - I - ②は、最大径を胴部上位に有し、口縁部がゆるやかに弱く外反するものである。調整は、内外面ヘラナデ及びナデが施されるものが多い。(64)は、内面にヘラ削りが残る。色調は(67)のみが灰白色を呈し、その他は橙色から褐色である。胎土は、1mmの砂粒を含む。

C - II - ①は、最大径を胴部中位に有し、口縁部が大きく外反するものである。壺の中ではこのタイプが多量に出土している。調整は、口縁部は内外面ヨコナデ、胴部は外面ハケ調整、内外面ヘラナデ調整が施されるものが多い。色調は、浅黄橙色から赤褐色が主流で、灰色を呈するものもある。胎土は、0.5~2mmの砂粒を含む。

C - II - ②は、最大径を胴部中位に有し、口縁部がゆるやかに弱く外反するものである。C - II - ①類と明確に区分することは不可能であるため、C - II - ①類の範中に含まれるものも存在する。頸部で上方に立ち上がり、口縁部のみゆるやかに外反するものもみられる。調整、色調、胎土はC - II - ①と同様な特徴をもつ。

C - II - ③は、最大径を胴部中位に有し、貼付口縁でゆるやかに外反するものである。2点のみ出土している。

C - IIIは、最大径を胴部下位に有するもので、口縁部が外反する。頭部で屈曲し、「く」の字状に外反するものと、屈曲せずゆるやかに外反するものがみられる。

D類

D - I - ① (第93図152・153)

D - I - ② (第93図154~156)

D - II - ① (第93図157)

D - II - ② (第93図158~161)

D - III - ① (第93図162・163, 第94図164~169)

D - III - ② (第94図170~172)

D - IV (第94図173・174, 第95図175)

D類は、器高20cm以内の小型品で、底部は丸底を呈するものである。最大径によってI~IV類に分類し、さらに口縁部の形態によって細分した。

D - I - ①は、口縁部に最大径を有するもので、口縁部が「く」の字状に外反するものである。2点のみ出土しており、内外面ヘラナデ調整が施される。色調は、にぶい褐色を呈し、胎

土は、0.5~2mmの砂粒を含有している。

D-I-②は、口縁部に最大径を有するもので、口縁部はゆるやかに弱く外反するものである。3点出土しており数少ない。調整は、D-I-①と同様で、(156)の内外面にはハケ調整がみられる。

D-II-①は、胴部上位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状に強く外反する。1点のみB区のS.F.2から出土している。調整は内面にヘラ削りが施される。D-III-①と形態的に大差はない。

D-II-②は、胴部上位に最大径を有し、口縁部はゆるやかに弱く外反するものである。4点出土しているが、その中の2点はF区のS.F.6からである。調整は、内外面ヘラナデであるのが主流であるが、(160)のように一部ハケ調整が施されるものもある。

D-III-①は、胴部中位に最大径を有し、口縁部が強く外反するものである。調整は、内外面ヘラナデが施される。(165・166)などは、ハケ調整もみられる。色調は、橙色から褐色を呈する。

D-III-②は、胴部中位に最大径を有し、口縁部がゆるやかに外反するものである。調整は、D-III-①と同様である。

D-IVは、胴部下位に最大径を有するもので、口縁部が「く」の字状に外反するものである。

E類（第95図176・177・179）

E類は、器高が20cm前後を測り、球胴型を呈するものである。口縁部は「く」の字状に大きく外反する。調整は内外面ハケ調整が施されるものがある。

その他に特徴的なものとして、(178・180・181)がある。(178)は頭部から胴部の破片であるが頭部外面に3条1単位とする横描文が3帯施され、その下に烈点文を配する。(180・181)は、籠型土器と考えられる。口縁部が欠損しているため全体の器形は不明であるが、底部外面に籠型を用いて成形した圧痕が認められる。

瓶（第96図182~190）

瓶は、出土量が少ないため形態分類は行なわなかった。形態は、(182)が体部が内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反するタイプである。(183~188)は体部が内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたるタイプである。調整は、内外面ヘラナデが施される。(182・187)は多孔で、その他は单孔である。(189・190)は同一個体になると考えられるもので、把手付きのもので、体部は直線的に外上方に立ち上がるるものである。外底は多孔である。

椀

椀は、甕について多量に出土している。形態及び法量で分類した。

A類

A-I（第96図191~194）

A-II（第96図195・196）

A類は、小型品で口径11cm以内、器高5cm内外を測る。A-Iは丸底、A-IIは平底で細分した。調整は、ヘラナデが施され、口縁部はヨコナデが施される。色調は黄褐色からぶい褐色を呈する。

B類

B-I (第96図197~201)

B-II (第97図202~208)

B-III (第97図209~210)

B類は、口径12cm以下で口径に比して器高が高いものである。底部の形態で細分をおこなった。B-Iは丸底、B-IIは平底、B-IIIは尖底である。これらの中ではあるが、口縁部が外反するもの、または外上方に立ち上がるものが見られるが明瞭な差は認められない。調整は、内外面ヘラナデが施されるものと、外面ヘラナデ、内面ハケ調整がみられる。B-Iの(201)やB-IIの(208)は外面にタタキが施される。色調は、橙色から明褐色を呈する。

C類

C-I (第97図211~212)

C-II (第97図213~218)

C-III (第97図219)

C類は、口径13cm内外で、器高7~9cmを測り、B類よりやや大型品である。底部の形態は、丸底が3点、平底が2点、平底風の丸底が4点あり、不明瞭な部分が多いため分類は行なわず。口縁部の形態によって細分した。C-Iは口縁部が外反するもの、C-IIは体部から内湾気味に外上方に立ち上がるもの、C-IIIは貼付口縁を有するものである。調整は、内外面ヘラナデが施されるものが大半である。色調は、橙色から赤褐色を呈する。

D類

D-I (第97図220~223)

D-II (第97図224~225)

D-III (第98図226)

D類は、口径15cm以上で、器高6~8cmの大型品で丸底である。口縁部の形態及び調整によって細分した。D-Iは、外面にタタキが施され口縁部は外上方にそのまま立ち上がる。D-IIは、口縁部はやや外反し端部内面を面取る。D-IIIは、口縁部が外反するものである。調整は、タタキ以外は、内外面ヘラナデが施される。色調は、(226)が黒褐色でその他は黄褐色から黄橙色を呈する。

E類

E-I (第98図227~249、第99図250~273、第100図274~279)

E-II (第100図280~292)

E類は、口径12~14cm内外で、器高5~6cmを測り丸底である。C類に比すと器高が低い。

E-I類は、椀としては出土量が多く典型的なタイプで、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるるものである。E-II類は、口縁部が外反するものである。調整は、口縁部が内外面ヨコナデで、体部はヘラナデ及びナデが多く施され、若干ハケ調整もみられる。色調は、(232・254・290)は灰白色で、(245・283・285)が赤褐色、その他は黄橙色を呈する。

脚付椀

脚付椀は、椀での分類の基準を適用し形態分類をおこなった。胎土色調は、すべて類似しており、1~2mmの砂粒を含み、赤褐色から黄橙色を呈する。

A類

A-I (第100図293)

A-II (第100図294)

A類は、口径10cm以内の小型品である。A-Iは、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるもの。A-IIは、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるものである。2点のみ出土しており、C区のS F 4からである。脚部の形態が異なり、指頭圧痕が多く残る。

B類

B-I (第100図295~297、第101図298)

B-II (第101図299~301)

B類は、口径11~13cmを測り、椀部の形態が椀C類に類似するものである。B-Iは、体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるもの。B-IIは、直線的に立ち上がるものである。脚台の特徴は「ハ」の字状に大きく開き、接合部外面に指頭圧痕が残る。

C類

C-I (第101図302~304)

C-II (第101図305~307)

C類は、口径14cm以上を測り、椀部の形態が椀E類に類似するものである。C-Iは口縁部をヨコナデすることにより、若干外反するもの。C-IIは口縁部を内湾気味におさめるものである。高台は、(307)を除き「ハ」の字状に大きく開く。調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はナデ及びヘラナデ、脚部内面はヘラ削りが施されるものがある。

高杯

高杯は、完形品が多く出土しておりまとまった資料を得ることができた。脚部・杯部の形態によって分類した。胎土・色調は類似しており、浅黄橙色から橙色を呈し、(342)のみ灰白色である。

A類

A-I (第101図308・309)

A-II (第101図310)

A類は、杯部が深く口径22~23cmを測り大型品で、脚部は柱状である。A-Iは、杯底部に

明瞭な稜を有し、口縁部は外反し端部は面取りされる。A-Iは、杯底部の稜が消え凹状になり、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。調整は、口縁部から体部にかけてヨコナデ及びナデで、脚部内面はヘラ削りである。

B類

B-I (第102図311~316)

B-II (第102図317・318)

B類は、杯部が深く、口径20cm以内のもので脚部は柱状である。B-Iは、杯底部に稜を有するもの。B-IIは、杯底部の稜が不明瞭なものである。調整は、A類と同様で脚部内面にヘラ削りが認められるのが特徴である。

C類

C-I (第102図319~322、第103図323~333)

C-II (第103図334~338、第104図339~353、第105図354~358)

C-III (第105図359・360・362~365)

C類は、高杯の中で最も多量に出土している。杯部がA・B類に比すと浅く、口径20cm以内のもので、脚部は柱状である。C-Iは、杯底部の稜が明瞭なもので、体部は外上方に大きく開き口縁部は外反するものである。C-IIは、杯底部の稜が不明瞭なもので、体部はC-Iと同様である。C-IIIは、杯底部の稜が消滅し、体部は内湾して外上方に立ち上がるものである。調整は、口縁部から体部にかけてヨコナデで、底部内面は不定方向のナデ調整である。脚部は、内面ヘラ削りが多いが、ナデ調整も若干みられる。

D類

D-I (第105図367)

D-II (第105図366・368)

D類は、出土量が少なく3点のみである。脚部が短脚で笠状になり、「ハ」の字状に脚端部が広がるものである。D-Iは、杯底部の稜が若干認められ、口縁部が外反するもの。D-IIは、杯底部の稜が完全に消滅し、杯部は外上方に内湾して立ち上がり口縁部にいたるものである。調整は、杯部がヨコナデ及びヘラナデが施され、D-Iの(367)は脚部内面にヘラ削りがみられる。

手捏土器

各調査区から出土しているが、その中でまとまっている地区はC区のS.F.4である。胎土は0.5~1mmの砂粒を含み、色調は全体的に橙色から褐色を呈し、一部(379・380・422・433)等は灰白色である。

A類

A-I-① (第106図369~387)

A-I-② (第106図388~394、第107図395~399)

A - I - ③ (第107図400)

A - II - ① (第107図401・402)

A - II - ② (第107図403～405)

A - III (第107図406)

A類は、口径6cm以内、器高3～5cmを測り指頭のみで成形しているものである。底部形態で分類し、体部・口縁部の形態でさらに細分した。

A - I - ①は、口縁部が内湾しておさまるものや、上方や外上方に立ち上がるるものである。器高3～4cm内外で小型品である。(387)は、外面にタタキが施される。A - I - ②は、口縁部が外反するものである。器高が4～5cmを測り、A - I - ①よりやや大型品である。A - I - ③は、貼付口縁を有するもので1点のみ出土している。いずれも底部は丸底である。

A - II は平底である。A - II - ①は体部が直線的に立ち上がるもので、A - II - ②は体部が内湾して上方に立ち上がり口縁部にいたるものである。A - III は高台付の手捏土器で1点のみ出土している。

B類

B - I - ① (第107図407～410)

B - I - ② (第107図411～413、第108図414～417)

B - II - ① (第108図418～422)

B - II - ② (第108図423)

B - II - ③ (第108図424)

B - II - ④ (第108図425・426)

B - III (第108図427)

B類は、口径6～8cmにおさまるもので、A類に比すとやや大型品である。B - I は底部が丸底で、B - I - ①は体部が内湾して外上方に立ち上がるもので、B - I - ②は口縁部が外反するものである。B - II は底部が平底である。B - II - ①は体部が内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたるもの、B - II - ②は体部が直線的に立ち上がるもの、B - II - ③は口縁部が外反するもの、B - II - ④は貼付口縁を有するものである。B - III は、高台付で体部が直線的に外上方に立ち上がるものである。

C類

C - I - ① (第109図428)

C - I - ② (第109図429)

C - II - ① (第109図430)

C - II - ② (第109図431)

C - II - ③ (第109図432)

C - III (第109図433)

C類は口径8cm以上で、器高5~8cmを測り大型品である。C-Iは底部が丸底で、C-I-①は口縁部が外反するもの、C-I-②は貼付口縁を有するものである。C-IIは平底で、C-II-①は口縁部が外反するもの、C-II-②は体部が直線的に外上方に立ち上がるもの、C-II-③は貼付口縁を有するものである。C-IIIは高台付で体部は内済して外上方に立ち上がるるものである。(432)は、梶のA類と法量・形態が類似しているが、口縁部の手法の差で類別した。

(松田)

③ 須恵器

須恵器は、古墳時代のものと古代のものに大きく分けることができ、その大半は古墳時代のものに属す。古墳時代のものの器種には、杯・高杯・魁・壺・甕があり、古代のものの器種には、杯・皿・盤・壺がある。古墳時代の須恵器では、杯(蓋と身)が圧倒的に多く、壺・甕の出土量は少なかった。以下、時代別に各器種について説明する。

古墳時代

杯(蓋)(第110~112図437~507)

口縁部と天井部の境に明瞭な稜を有するものから全くその痕跡を止めないものまでが出土しており、これらは6類に大別することができる。

A類(第110図437~451)

口縁部高が高く、器高の1/2以上あり、口縁端部は浅い凹面をなすものも存在するが、一般に平面に近くなっている。天井部はやや丸味を有するものも存在するが、ほぼ平坦である。

B類(第110・111図452~471)

口縁部高は比較的高く、器高の1/2前後であり、口縁端部は段または凹面をなすものが多く、中には平面をなすものも認められ、口径は12cm以上を測る。天井部は丸味を有するものがほとんどである。

C類(第111・112図472~492)

口縁部高は器高の1/2以下となり、口縁端部は段または凹面をなすものがほとんどであり、口径は12cm以下を測る。天井部は丸くなり、杯の身と合わすと球体に近い形を呈するものが多くみうけられる。

D類(第112図493~496)

口縁部高は低く、器高の2/5以下であり、口縁端部は段または凹面をなすものが多い。稜は下に門線を巡らすことにより、稜を明確にしたものが多くみうけられる。口径は13cm以上と大きくなる。天井部は丸い。

E類(第112図497~501)

口縁部高は低く、器高の1/3以下であり、口縁端部は丸く仕上げられたものが大半であるが、内傾する平面をなすものもみられる。稜は凹線を巡らすことによって表わすのみである。口径はD類同様に大きく天井部も丸い。

F類（第112図502～507）

稜が全くなくなり、口縁部と天井部の境が不明瞭となる。口縁端部は丸くまたは鋭く仕上げられたものに限られる。天井部は平坦なもののみられるが、丸味を有するものが大半を占める。

以上、A～F類に大別でき、さらに、口縁端部の形態により5類、稜の形態により5類にそれぞれ細分可能である。

まず、口縁端部の形態では以下の5類に細分できる。

- a類 平面をなすもの。
- b類 凹面をなすもの。
- c類 段をなすもの。
- d類 鋭く仕上げるもの。
- e類 丸く仕上げるもの。

A類にはa・b類、B～D類にはa～c類、E類にはa・d・e類、F類にはd・e類の形態がみられる。a類は、古い形態であるが、やや後出のb・c類よりも手法としては後まで残り、次にd・e類に変わることが看取できる。

次に、稜の形態では以下の5類に細分できる。

- ア類 断面三角形の稜を造り出すもので、その稜が鋭いものと鈍いものがある。

イ類 稲の下に凹線を巡らすことにより、稜をより明確にするもの。

ウ類 段にすることにより、稜を造り出すもの。

エ類 凹線を巡らすことにより稜とするもの。

オ類 稲を全く有さないもの。

A～C類にはア～ウ類、D類にはイ～エ類、E類にはエ類、F類にはオ類の形態がみられる。類は古い形態ととらえることができ、イ類もア類同様古い形態ではあるが、手法としては後まで残り、ア・イ類よりやや後出とみられるウ類とはほぼ同じ頃、エ類に変わると考えられる。そして、オ類に移行するとみられる。

杯（身）（第113～116図508～570）

たち上がりが高く、端部が内傾する平面をなすものから、たち上がりが短く、端部を丸く仕上げるものまでが出土しており、これらは7類に大別することができる。

A類（第113図508～513）

たち上がりは高く、その高さは器高の1/2以上を占めており、その端部は内傾する凹面をなすもののみられるが、内傾する平面をなすものが大半である。底部は深く、平らである。

B類（第113・114図514～536）

たち上がりは比較的高く、その高さは器高の1/2前後であり、その端部は内傾する平面をなすものから丸く仕上げられたものまであり、バラエティーに富む。口径は10.5cm以上を測る。底部は比較的深く、丸味を有す。

C類（第114・115図537～554）

たち上がりは比較的高いが、その高さは器高の1/2以下であり、その端部はB類同様バラエティーに富む。口径は10cm前後と小さくなる。底部は丸く、杯の蓋と合わせると球体に近い形を呈するものが多くみられる。

D類（第115図555～565）

たち上がりは低く、その高さは器高の2/5以下であり、その端部はB類同様バラエティーに富む。口径は11.0cm以上と大きくなる。底部は丸味を有す。

E類（第115図566）

たち上がりは低くなり、その高さは器高の1/3前後となり、その端部は丸く仕上げるものか鋭く仕上げるものに限られるとみられる。口径はD類同様大きく、底部は丸い。

F類（第116図567～569）

たち上がりは低く、その高さは1cm前後となり、その端部は丸く仕上げるものか鋭く仕上げるものに限られるとみられる。口径はD類同様大きく、底部は丸味を有す。

G類（第116図570）

たち上がりは非常に低く、その高さは1cm以下となり、その端部は丸く仕上げるものか鋭く仕上げるものに限られるとみられる。口径はやや小さくなり、底部は丸味を有す。

以上、A～G類に大別でき、さらにこれらは、たち上がり端部の形態により杯の蓋の口縁端部の形態同様以下5類に細分可能である。

a類 平面をなすもの。

b類 凹面をなすもの。

c類 段をなすもの。

d類 鋭く仕上げるもの。

e類 丸く仕上げるもの。

A類には、a・b類、B～D類にはa～e類、E～G類にはd・e類の形態がみられる。これらは杯の蓋のそれとは似た状況を呈する。

高杯（第116図571～581）

高杯では、有蓋と無蓋があるが、出土量は少ない。残存する脚部はすべて短脚1段透しのものに限られる。これらは、有蓋高杯で2類、無蓋高杯で3類に大別できるが、有蓋高杯の蓋については、同種のもののみ出土している。

有蓋高杯（蓋）（第116図571～574）

口縁部は比較的高く、口縁端部は杯蓋のa～c類があり、口径はほぼ12cm以上を測る。縁の形態には杯蓋のア・ウ類がある。天井部は比較的高く、丸味を有し、外面ほぼ中央部には扁平なつまみが付くものが3点、擬宝珠形のつまみが付くものが1点ある。

有蓋高杯

A類（第116図575）

たち上がりは比較的高く、2cmを測る。口縁端部は内傾する凹面をなし、口径は10.5cm以上を測る。底部は丸味を有し、脚部には3方に台形の透しが付く。

B類（第116図576）

たち上がりはA類に比べ低く、1.5cmを測る。口縁端部は内傾する平面をなし、口径は10cm以下を測る。底部は丸味を有し、脚部には3方に台形の透しが付く。

無蓋高杯

A類（第116図577）

杯部は深く、口縁部は直立気味に上がり、外面には断面三角形の凸帯が3カ所に回る。下方の凸帯の下から把手が付く。脚部には台形の透しが四方に付く。

B類（第116図578～580）

杯部は比較的深く、口縁部は上外方へのび、外面には鈍い凸帯が回り、凸帯と凸帯の間には1条の波状文を施す。（578）には波状文上より把手が付く。脚部には台形の透しが3方に付くものと四方に付くものがある。

C類（第116図581）

杯部は浅く、外面には稜が回るが、施文は全くみられない。

匙（第117図582～594）

匙では、小型と大型がみられるが、出土量は少ない。口頭部は全般に短く、その高さが体部の高さを上回るものはない。また、口径が体部最大径を超えるとみられるものは1点で、それ以外は、体部最大径以下である。これらは、3類に大別することができる。

A類（第117図586～588・593・594）

口径が体部最大径を超えるものはない。肩の張りは少なく、なだらかに下り、体部の断面は梢円形に近い。大型匙もみられる。

B類（第117図589～591）

口径が体部最大径に近くなるが、それを超えるものはない。体部は全体に丸味をおび、球体に近い形となる。

C類（第117図592）

口径が体部最大型を超え、口頭基部がB類に比較して太くなる。体部は、B類以上に丸味を帯び、球体となる。

壺（第118図595～597）

頸の長短から長頸壺と短頸壺に分けることができるが、その出土量は極めて少ない。また、長頸壺は口頭部の破片であり、全体を知ることはできなかった。

長頸壺（第118図595・596）

口頭部は上外方へ外反気味にのび、端部は丸い。外面には鈍い稜があり、波状文が、(595)には1条、(596)には3条施されている。

短頭壺 (第118図597)

小さな短頭壺で、口頭部は短く直立し、体部は球体となり、最大径は胴部ほぼ1/2に求めることができる。

甕 (第118~120図598~612)

古津賀遺跡から出土しているような大型の甕の出土例はない。口縁部外面に断面三角形の凸帯を回らしたものから口縁部が短く外反し、無文のものまで出土しているが、その出土量は少ない。これらは、4類に大別することができる。

A類 (第118・119図598~602)

口縁部は緩やかに外反してのぼり、端部外面近くに凸帯があり、その下に波状文を施すもの、無文のもの、回転カキ目調整を加えるものがある。最大径は胴部1/2ないし上位1/3に求めることができる。胴部内面は同心円文のタタキの後、丁寧にスリケシ調整を行っている。

B類 (第118・T19図603~605)

口縁部は外反してのぼり、外面に凸帯が回るものはみられず、波状文等の施文をしたもののが出土例はなかった。最大径は胴部上位1/3に求めることができ、内面は同心円文のタタキ目その後、スリケシ調整を行っている。

C類 (第120図606~609)

口縁部は外反してのぼり、口縁端部を肥厚させている。口縁部外面には全く施文されていない。胴部はほとんど欠損するが、内面には同心円文のタタキ目が明瞭に残る。

D類 (第120図610~612)

口縁部は短く外反し、口縁端部を肥厚したものと肥厚しないものがみられる。口縁部外面には全く施文されていない。胴部はほとんど欠損するが、内面には同心円文のタタキ目が明瞭に残る。

(廣田)

古代

④ 土器類 (第121図613~638・641)

古代の土器類は、A区、D区から各1点出土して他はすべてB区である。B区の中でもSK1からのものが大半である。器種構成としては皿・杯・甕・釜・鍋が存在する。(613・617)は皿である。(617)はやや大型の皿で口徑13.6cmを測る。体部内外面ロクロナデ調整で底部はヘラ切りである。(614~616・618~628)は杯である。口徑11~13cmを測り、器形は体部は直線的に外上方に立ち上がるものの、口縁部が外反するものがみられる。体部内外面はロクロナデ調整で、底部はヘラ切りである。(626)は貼付高台を有する。皿・杯の色調は、浅黄色から灰白色を呈する。(629~633・635)は甕である。(629・633・635)は同形態の長胴の甕である。口縁部は大きく外反し、端部は上方にやや拡張され面を有する。調整は、口縁部内外面ヨコナ

テ、胴部外面は継位のハケ調整、内面は横位のハケ調整が施される。(630～632)は、口縁部が「く」の字状に短く外反するものである。(634・636・637)は釜である。口縁部外面に短い貼付の鈎を有する。外面は、継位のハケ調整が施される。(638)は鍋である。胴部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。胴部外面に斜位のタタキが施される。(641)は高台付の椀である。貼付高台で「ハ」の字状に開き、外底はヘラ切り、体部はロクロナデである。

⑤ 緑釉陶器・輸入陶磁器 (第121図639・640)

緑釉陶器・輸入陶磁器は、B区の包含層より2点出土している。(639)は緑釉陶器で、底部は蛇ノ目高台を有し、全面に緑釉が施される。(640)は白磁碗で、底部は削り出し高台で、内面のみ施釉され若干の貴人がはいる。
(松田)

⑥ 須恵器

杯 (蓋) (第122図642～644)

口縁部は緩やかに下外方へ下り、端部で下方へ屈曲さす。天井部は平らで、外面ほぼ中央部に擬宝珠形のつまみが付く(642・643)。

杯 (身) (第122図645～649)

高台が付くもの(645～647)と高台が付かないもの(648・649)とがある。口縁部は上外方へのび、底部は平らで、すべて回転ヘラ切りによる。(645～647)の底部端にはハの字形に開く高台が付く。また、(648)の体部外面には火だしきがかかる。

皿 (第122図650～652)

口縁部は短く斜め上外方へのび、(650・652)の端部は鋭く、(651)の端部は内側に若干曲げ丸く仕上げる。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。

壺 (第122図654・655)

口縁部は短く上外方へのび、端部は丸い。底部は平らで、ハの字形に開く比較的高い高台が付く。焼成時の塗が全体的に残る。

壺 (第122図654・655)

両方とも台付の壺で、口頭部から胴部にかけてが欠損する。(654)は小型で、平らな底部には下方を向く高台が付く。胴部外面中位には回転カキ目調整を施す。また、胴部外面下位には回転ヘラ削り調整を施す。(655)の底部は平らで、端部には大きくハの字形に開く高台が付く。胴部外面下位には回転ヘラ削り調整を施す。
(廣山)

⑦ 土鍤 (第123図656・666)

土鍤はB・E区から若干出土している。B区のS K 1からのものが多い。形状は管状を呈し長さ5cm内外で幅1.5cmを測る。色調は、土師器の皿・杯と同様で灰白色を呈するものが多い。

⑧ 土製模造品 (第124図667～676)

土玉・土製模造鏡・土製勾玉が、C・F・J区から出土している。土玉は、長径2cmを測

り、中央部に径3mm程の孔が穿たれている。土製模造鏡は大小の差が認められ、いずれも粘土円板に指頭押圧で成形し、中央部をつまみあげ孔を穿ち鏡の鋏を表現している。土製勾玉は、棒状粘土塊を中央部でおひらげて作成しており、頭部に一孔を穿ち勾玉としての表現をしている。(668・670) がF区、(676) がJ区でその他はすべてC区から出土している。(松田)

⑨ 石製模造品 (第124~126図677~829)

有孔円板 (C・F区)、剣形品 (C区)、勾玉 (F区)、白玉 (B~D・F区) が出土した。

有孔円板 (677~679) は、楕円形に整形し二孔を穿つもので、直径1.9~2.5cm、厚さ0.25~0.4cm、重さ1.8~2.5gを測る。(677) は滑石、(678) は蛇紋岩、(679) は緑泥片岩を素材としている。

剣形品 (680) は、緑泥片岩を素材とし、一孔を穿っており、長さ2.0cm、厚さ0.3cm、重さ1.0gを測る。

勾玉 (681・682) は、偏平な板石を加工しコ字型に整形したもので、頭部に一孔を穿つ。蛇紋岩製で、製作時の擦痕が顕著に残る。(681) は、全長2.8cm、厚さ0.4cm、重さ2.6gで、(682) は全長3.7cm、厚さ0.7cm、重さ8.6gを測る。

白玉 (683~829) は、合計1,184個を数え、このうち1,135個 (95%) がF区から出土した。色調には相違がみられるが、すべて滑石製である。径4.2~6.0mm、厚さ1.2~2.0mm、重さ0.01~0.2gを測り、大小に差がある。ソロバン状、臼状等の形態を示すほか、端面の作りにも違いがみられる。

⑩ 鉄製品 (第127図830)

G区から鉄鎌が出土した。全長20.0cm、幅5.0cm、厚さ0.8cmで、刃先は内へ彎曲する。柄装着部は直角に立ち上がり、刃とはやや斜めに交叉する。

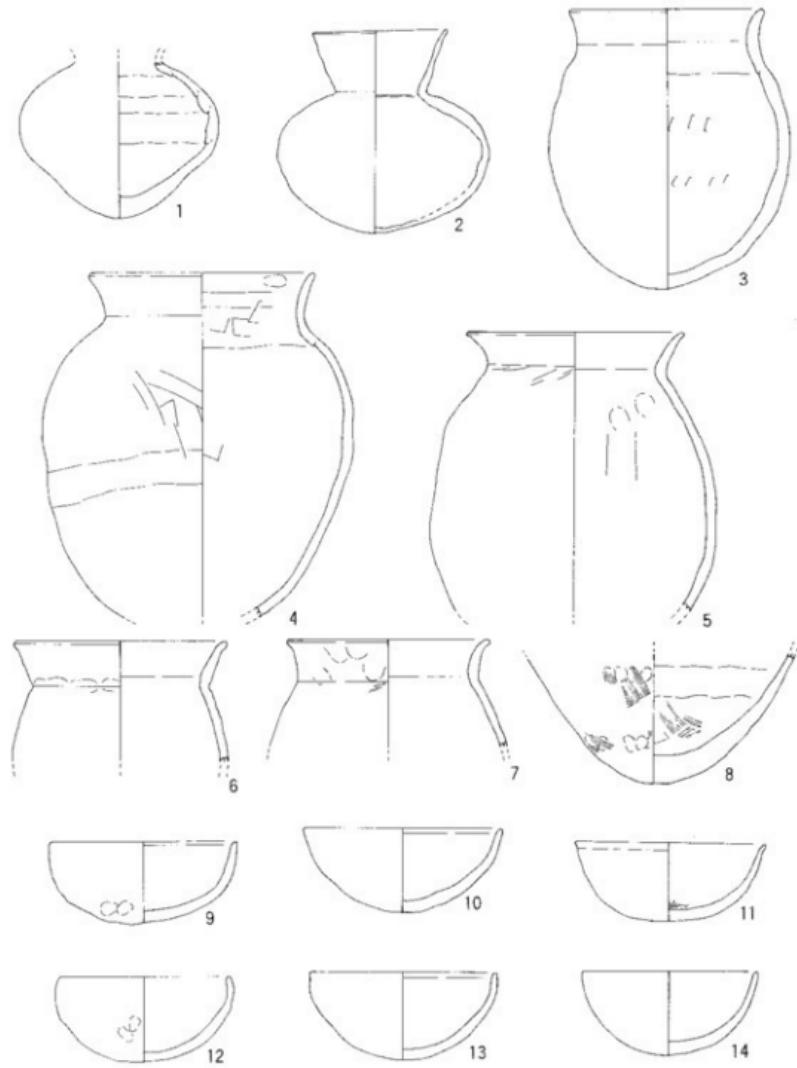
⑪ 石器 (第127図831~835)

石器は、A・E区から叩石、B・F区から砥石が出土している。叩石は、表裏面を敲打しており、長縁部にも若干認められる。砥石は、(833) が小型で3面を使用している。(834・835) は大型品で、自然面が残っており、2箇所が研磨されており、使用されている。(山本)

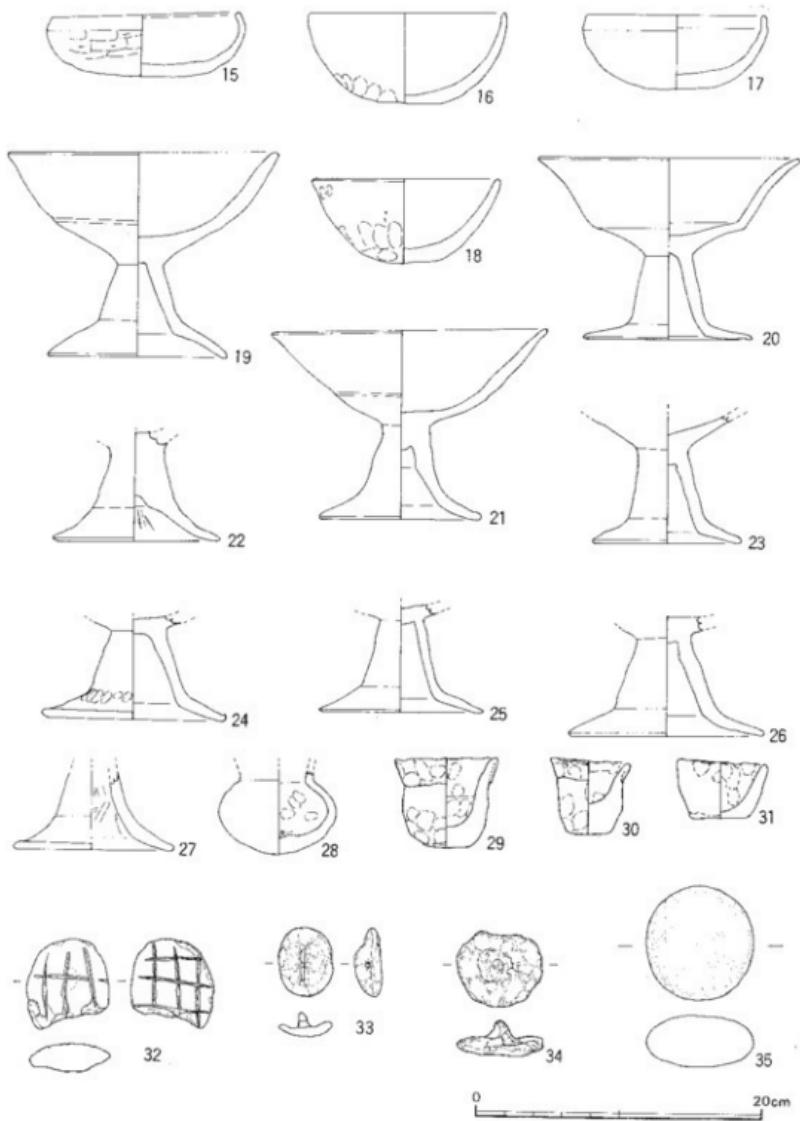
第21表 具同中山遺跡群(試掘)出土遺物觀察表

井田番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 高さ 側径 底径	形態・文様	手法	備考
70-1	音槽	主顎部 蓋		(11.1) 11.0	口頭部以上を欠損する。側面最大 径は、側頭高さ倍率である。	外面は、ナゲ調整。 内部には、粘土柱の輪積み痕が みられる。	TR 7
8-2	*	*		9.4 13.3 15.0 1.8	膺円部の側面から、やや外方へ側 面高さにたちあがる口頭部をもつ。 「複雑部」は、丸味を含む。	内外面とも丁寧なナゲ調整が施 される。	TR 7
8-3	目槽	主 顎		15.7 (24.3) 32.0	表面性状を仄く丸紙をもつ。口頭部 は極く、膺部は丸味をもつ。	内だらか前り、何葉は、ナゲ調 整により、丁寧に仕上げる。	TR 6
8-4	*	*		14.8 (19.6) 20.0	底部を仄く。口頭部は、丸味を もつ。	内外面ともハラ前りの上に、丁 寧なナゲ調整を施す。	TR 6
8-5	*	*		14.6 (8.5)	側面半ト半を仄く。胡鉗部大径は、 側頭下寸に求められる。	口頭部内面に指頭印痕を残す。	TR 6
8-6	*	*		13.8 (7.6)	口頭部は丸味をもっておわる。	口頭部内面は、指ナゲを施す。	TR 6
8-7	音槽	*		—	底部の破片。外面に傷が付着。	内外面とも、ハケ目調整の上を ナゲる。輪積み痕を明瞭に残す。	TR 8
8-8	*	*		(10.3) 2.0	—	—	TR 7
8-9		掩		13.1 5.0	丸底の底部より内汚気味にたちあ がる。	口頭部は、内外面ともに強いヨ コナゲ調整を施す。	
8-10				3.8	—	—	
8-11				13.2 5.5 3.5	口頭部は極く外反しておわる。	底部内面に、放射状のハラ前 りを残す。	
8-12				11.9 6.0 2.5	丸底の底部より内汚気味にたちあ がる。	口頭部は、内外面ともに強いヨ コナゲを施す。体部下半に、指 頭印痕を残す。	
8-13				12.9 6.3 3.8	口頭部は直線気味にたちあがる。	内外面ともに強いヨコナゲ調整 を施す。	TR 7
8-14				12.1 6.0 3.6	丸底の底部より内汚気味にたちあ がる。	—	
71-15	音槽	杯		13.2 4.4 5.0	器高は低く、口頭部は内汚気味 におわる。	口頭部は強いヨコナゲ調整を施 す。内外面は、ハラ前りの後、 ナゲ調整を施す。	TR 6
8-16				13.8 6.5 4.4	やや平底氣味の底部から、内汚 気味にたちあがる。内外面に傷が付 着。	底部外面は、ハラ前りの後、 ナゲ調整を施す。	
8-17	音槽			12.6 9.2 4.5	比較的の安定した平底をもつ。口頭 部は直線的にたちあがる。	口頭部は、強いヨコナゲ調整を 施す。	TR 7
8-18				12.9 6.0 4.3	口頭部は丸底をもつ。	内外面ともにナゲ調整により仕 上げる。	
8-19	音槽	高杯		18.4 14.5 12.2	杯部は外方へ直線的にのびる。 膺部底部は丸みをもつ。	杯部の内外面は、丁寧なナゲ調 整を施す。	TR 7
8-20	*	*		18.0 12.9 11.5	杯部はやや外反して窪く。膺部部 は低い。杯部の底は卵形である。	内外面共に、丁寧なナゲ調整を 施す。	TR 7
8-21	*	*		19.0 13.4 10.9	杯部は外方へ直線的にのび、膺部 を丸くおさめる。	—	TR 7
8-22	音槽	*		— (7.7) 11.2	杯部を欠損する。膺部は尖り氣 味におわる。	内面にしづら痕を残す。	TR 7
8-23	IV槽	*		9.1	膺部部端は尖り氣味におわる。	内外面ともに丁寧なナゲ調整を 施す。	TR 7
8-24	音槽	*		10.6 (7.2) 12.3	膺部部端を上方へつまみあげる。	外面は、特に丁寧なナゲ調整を 施す。	TR 7
8-25	音槽	*		7.7 11.0	膺部部端は尖り氣味におわる。	内外面ともに丁寧なナゲ調整を 施す。	TR 6

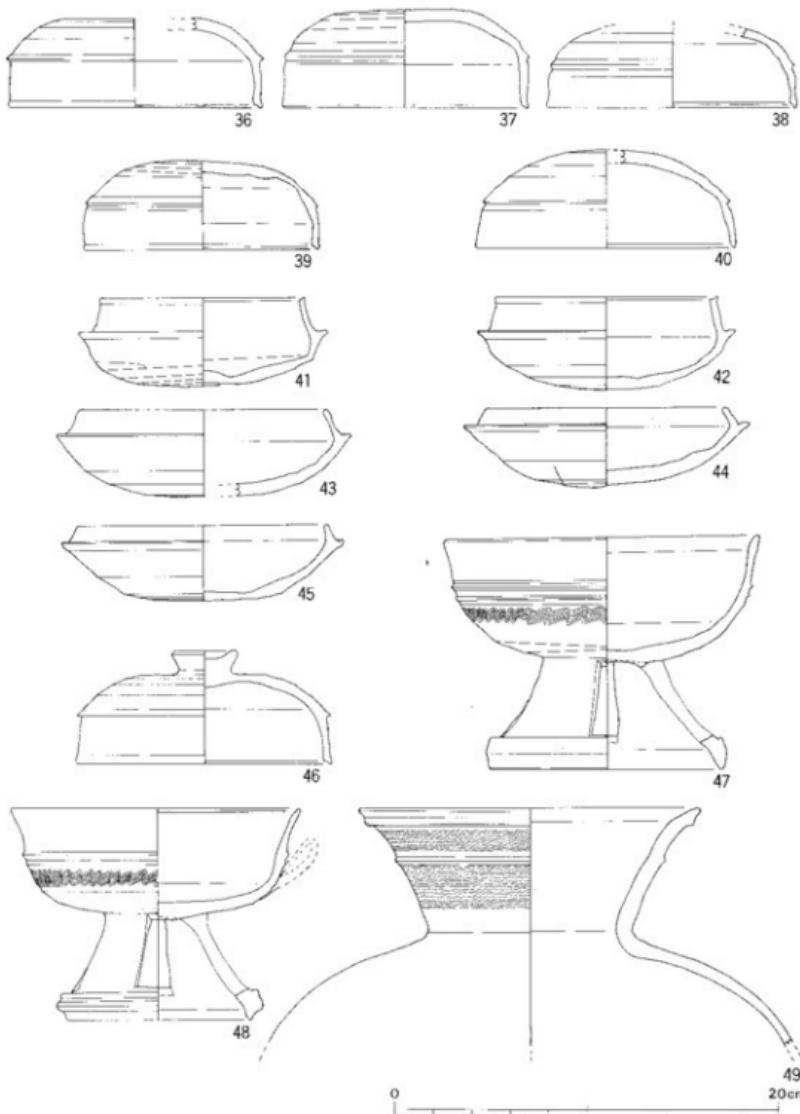
序因番号	遺傳番号	器 僕	口器高 法量 (cm) 別併 底径	形態・文様	手 法	備 考	
72 - 36	引唇	頭蓋器 杯(蓋)	後 徑 13.0 13.7 12.4 —	口縫部にははく縫に下り、端部は外反する。端部は内縫する平面を成す。 縫は断面三角形を成し、鋸い。大井型は比較的高く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周4/5、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 7	
* - 37	*	梗 徑	12.8 5.2 12.6 —	口縫部はやや外方へ下り、端部は内縫する平面を成す。 縫は断面三角形を成すが、鋸い。 大井部は高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。		
* - 38	*	梗 徑	12.9 (4.2) 12.7 —	口縫部は内方外縫に下り、端部は内縫する凹形を成す。 縫は断面三角形を成すが、鋸い。 天井部は一部外側するが、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 5	
* - 39	*	梗 徑	13.1 4.7 12.1 —	口縫部は内方外縫に下り、端部は内縫する凹形を成す。 縫は断面三角形を成すが、鋸い。 天井部は比較的高く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 7	
* - 40	引唇	梗 徑	13.4 5.2 12.8 —	口縫部はハの字形に下り、端部は鋸い。 縫は鋸く、下に1束の四縫を有する。 天井部は高く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	*	
* - 41	*	杯(身)	30.6 4.7 13.0 —	たちあがり裏 1.8 受部往 1.8 受部往 13.0 —	たちあがりは内縫してのび、端部は内縫する凹形を成す。 受部はやや上方へのび、端部は鋸い。 底部は比較的高く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周4/5、回転ヘラ削り調整。底部内縫ナダ調整。他の回転ナダ調整。	被成時の中が底部に残る。
* - 42	茎管	*	11.5 4.9 13.4 —	たちあがりは内縫してのび、端部は内縫する凹形を成す。 受部は上外方へのび、端部は鋸い。 底部は鋸く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周4/5、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 6	
* - 43	*	たちあがり裏 1.4 受部往 1.4 受部往 15.3 —	12.8 4.6 15.3 —	たちあがりは内縫してのび、端部は丸味を有する。 受部は鋸く水滴にのび、端部は鋸い。 底部は比較的高く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。		
* - 44	*	12.8 4.1 14.9 —	12.8 4.1 15.3 —	たちあがりは内縫してのび、端部は丸味を有する。 受部は水滴にのび、端部は丸味を有する。 底部は比較的高く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 7 底部外周にヘラ記号がある。	
* - 45	*	13.0 4.0 14.9 —	12.8 4.1 15.3 —	たちあがりは内縫してのび、端部は丸味を有する。 受部は水滴にのび、端部は丸味を有する。 底部は比較的高く、丸味を有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周3/4、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 7	
* - 46	*	13.4 6.9 13.2 3.1 —	13.4 6.9 13.2 3.1 —	13.4 6.9 13.2 3.1 —	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周4/5、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。		
* - 47	茎管	*	16.2 6.6 12.0 —	16.2 6.6 12.0 —	口縫部は内方外縫にのび、さらに上外方へのび、端部は丸味。 体部外周に2束の断面三角形の凸帯を回らし、下方に1束(8本)の波状文を有する。 脚部はハの字形に開き、端部は鋸い。内方に2束のスカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外周、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ調整。	TR 7
* - 48	引唇	*	15.1 11.2 5.3 5.7 9.5 —	15.1 11.2 5.3 5.7 9.5 —	口縫部はやや外方へのび、端部は丸く、端部内縫に1束の凹縫を有す。体部外周には2束の断面三角形の凸帯と1束の刃縫の間に1束(8本)の波状文を有す。波状文の上から環状の把手が付くが、ほとんど欠損する。 脚部はハの字形に開き、端部は鋸く下方へ凹縫する。四方に内縫のスカシを有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部外周は内縫筋が剥落しており調整不明。 脚部内縫は同心円文のタタキの後、ナダ調整。他の回転ナダ調整。	*
* - 49	*	*	17.8 (12.6) —	17.8 (12.6) —	口縫部はやや外方へのび、端部は丸く、端部内縫に1束の凹縫を有す。体部外周には2束の断面三角形の凸帯と1束の刃縫の間に1束(8本)の波状文を有す。脚部はやや斜が弧があるが、そのほとんどが欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部外周は内縫筋が剥落しており調整不明。 脚部内縫は同心円文のタタキの後、ナダ調整。他の回転ナダ調整。	*



第70図 土師器実測図（試掘調査）



第71図 土器器・土製模造品・石器実測図（試掘調査）



第72図 須恵器実測図（試掘調査）

第22表 具同中山遺跡群出土遺物観察表

標団番号	遺物番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 容積 底径 底径 底径	形態・文様	手 法	備 考
73-1	V層	弥生土器	32.2 (8.8)	—	直線的に立ち上がる縁部から、口縁部は大きく外反する。腹部は下方に肥厚し、口縁部は大きく外反する。縁部は下方に肥厚し、口縁部は大きく外反する。縁部は肥厚なし、下方に削りを施す。縁部外側には、3条の小突起を貼付。	口縁部外側は不定方向のハケ調整。 内面は横方向のハケ調整	A区
*-2	*	*	13.7 (8.9)	—	上縁部に最大洋を有し、頸部に向って内湾し、口縁部は直線的に下方に立ち上がる。口縫部外側に幅1cmの粘土帯を貼付し、口縫部は圓をなす。	口縫部外側に脂頭庄張。頸部内面に脂頭庄張。	B区
*-3	*	*	13.4 (7.8)	—	上縁部から内側に直線的に立ち上がる。 口縫部は短く、わずかに外反。口縫部外側に幅1.5cmの粘土帯を貼付。	口縫部外側を脂頭で押圧。頸部外側は、左下のハケ調整。	*
*-4	SX1	*	(7.0)	—	直腹型である。縁部外側に薄縫造文様、上縁部から横円形浮文を配付。	器面調整不明。	A区
*-5	V層	*	17.0 (3.0)	—	ラッパ状に外反する口縫部。口縫部は直面取り、筋目を配す。口縫部外側はヘラ状原形による列点文、その下には横円形浮文を施す。	*	*
*-6	*	*	23.4 (2.7)	—	ラッパ状に外反する口縫部。	口縫部は横方向の盛いナデにより凹状を呈す。	口縫部外側油焼ける。A区
*-7	*	*	14.0 (3.9)	—	ラッパ状に外反する口縫部。口縫部は凹状をなし、下半に削目。	口縫部内外面及び口縫部は横方向の盛いナデ調整。	A区
*-8	SX1	*	15.0 (4.2)	—	直線的に開く口縫部。外側には幅1.5cmの粘土帯を貼付。口縫部は圓をなす。	口縫部外側、口縫部横方向のナデ調整。	*
*-9	*	*	20.5 (4.0)	—	—	*	*
*-10	*	*	22.4 (14.3)	—	上縫部はあるやかなカーブを描いて内湾する。外反気味の頸部から、口縫部は強く外反する。口縫部は丸くおさめる。	器面調整不明	*
*-11	*	*	19.6 (7.5)	—	長めの頸部から、口縫部が強く外反する。 口縫部外側に幅2cmの粘土帯を貼付する。口縫部は圓をなす。	*	*
*-12	V層	*	29.4 (4.0)	—	ラッパ状に外反する口縫部。外側に断面三角形の粘土帯を貼付。口縫部は厚くなリ、四角を呈す。	口縫部外側横方向のナデ調整。	*
*-13	Ⅱ層	*	(4.8) 6.9	—	平底の底部から、下縫部が内湾気味に立ち上がる。	器面調整不明	B区
*-14	V層	*	(8.7) 5.8	—	平底の底部からわざかに内湾するカーブを描きながら立ち上がる。	*	*
*-15	*	*	(5.2) 5.2	—	平底の底部から、下縫部は直線的に立ち上がる。	*	*
*-16	*	*	(2.3) 5.8	—	底部外側が剥離。下縫部は内湾気味に立ち上がる。	外側に横方向のハケ調整。	*
*-17	*	*	(14.0) 4.4	—	平底の底部から、一旦は直線的に立ち上がり、下縫部で直進。	内面に脂頭直張あり。	*
*-18	*	*	(5.0) 7.2	—	平底で円盤状の底面から直線的に立ち上がる。	*	A区
*-19	*	*	(1.7) 7.2	—	平底の底部	*	*

標本番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 網縫 底延	形態・文様	手 法	備考
74-20	S F 6	土縛器 蓋	9.4 15.1 15.5		長頸の蓋で、口縁部は外上方へ内 湧気味に立ち上がる。側部は球形 を呈する。口縁部は丸くおさめ る。	口縁部外面はヨコナデ、内面は ヨコナデの後ハラナデ。側部は ナデが施される。内面は不明。	網縫外涙に黒斑F 区A類
*-21	*	*	8.9 15.1 13.1		長頸の蓋で、口縁部は外上方へ直 線的に立ち上がり、腹部は若干外 反する。側部は球形を呈する。	口縁部外面はヨコナデ、内面は ヘラナデ及びヨコナデ。側部は 麻粒が著しく不明であるが底部 はヘラナデが施される。	F区 A類
*-22	*	*	10.0 (5.0)		長頸の蓋で、口縁部は外上方へ立 ち上がる。側部は欠損。	口縁部外面は、ヨコナデが施 される。	*
*-23	*	*	8.9 (5.7)		*	口縁部外面はヨコナデ、内面は ヘラナデが施される。	*
*-24	Ⅳ-1番	*	(12.6) 13.2		長頸の蓋であるが、口縁部は欠損 しており、側部は外上方に立ち上 がる。側部は球形。	側部外面はヨコナデ、内面はヘ ラナデ。側部外面はハラナデ が施される。側部中位に粘土等 接合痕が残る。	*
*-25	S F 7	*	(10.1) 14.0		長頸の蓋で、口縁部は欠損。側部 は球形を呈する。	側部外面はヘラナデ、内面は上 部がナデ、底部はヘラナデが施 される。側部上位内面に粘土等 接合痕が見られる。	外面は丹赤り。 G区 A類
*-26	S F 3	*	(5.6) 9.1		長頸の蓋と考えられるが、口縁部 は欠損。側部は球形を呈する。	側部外面裏地が著しく不明。	B区 A類
*-27	S X 2	*	8.4 13.0 15.0		口縁部は外反して外上方に立ち上 がる。側部は球形を呈する。	全体的に磨耗が著しく不明。	側部の下位から底 部にかけて葉付着 A区。 A類
*-28	Ⅳ-2番	*	10.2 (15.4) 15.0		長頸の蓋で、口縁部は外上方へ直 線的に立ち上がる。側部は球形を 呈する。口縁部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ、内面は ヨコナデの後ハラナデ調節を施 す。側部外面はヘラナデ及びナ デで、内面はナデ調節内面に粘 土等接合痕が残る。	G Z A類
*-29	S P 6	*	11.1 (10.1)		口縁部は上方に内湧氣味に立ち上 がり、側部は内傾し凹面を有する。 側部は球形ではなく長制形の側面に なる。再部内面に粘土等接合痕が 残る。	口縁部内面ヨコナデ、側部外 面はナデ、内面はヘラナデ調節 を施す。	F区 B類
*-30	*	*	8.4 18.6 17.4		口縁部は上方に内湧氣味に立ち上 がり、側部は内傾する面を有する。 側部は球形を呈する。底部は丸底。	口縁部外面ヨコナデ、側部外 面は、上位がナデ、下位がヘラ ナデが施される。内面は上位に ヘラナデ調節できる。内面に 粘土等接合痕が残る。	F区、 B第 胸部中位から下位 にかけて葉付着。
*-31	Ⅳ-2番	*	13.3 29.9 25.0		口縁部は上方に内湧して立ち上 がり、側部は内傾する面を有する。 側部は球形を呈する。底部は丸底。	口縁部はヨコナデ。口縁部か ら側部にかけてナデ調整。底部 内面にヘラナデが施される。	G区 B類
75-32	S X 4	*	15.7 34.5 29.0		口縁部は大きく斜形直線的に外 方に立ち上がる。側部上位に最大 径を有し、底部は丸底。	口縁部外面は側位のハケ調整内 面は斜位のハケ調整。側部はナ デ。側部外面はタクナデ、内面は ナデのハケ調整、内面に 粘土等接合痕が残る。	F区 C-E類

掉問番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 脚底径	形態・文様	手法	備考
75-33	Ⅲ層	土器		18.2 (4.6) —	口縁部は大きく外反しラッパ状に開く。腹部は垂子底張される。脚部は欠損。	口縁部外面は瓶位のハケ調整。内面は横位のヘラナギの後、斜位のハケ調整が施される。	F区 C-I類
*-34	Ⅲ層	*		(7.1) —	口縁部と肘部が欠損。颈部に斜格子の刻みをもつ貼付突起を有する。	全体的に磨耗が著しく不明。	B区
*-35	Ⅲ層	*		(18.6) 27.0 —	口縁部は欠損。瓶部は、球形を呈すると考えられる。	瓶部外面は、平行タタキの後斜位のハケ調整が部分的に施される。内面は、下位に長い斜位のハケ調整。	B区 C類
*-36	S X 3	*		23.2 (35.3) 31.3 —	口縁部は、大きく外反してラッパ状に開いて外方に立ち上がる。底部は欠損する球形を呈する。口縁部は曲取る。	口縁部外面は、斜位のハケ調整。瓶部外面は、平行のタタキが施される。内面は不明。	B区 C-D類
*-37	S X 5	*		9.5 (17.2) (22.6) —	口縁部は、外上方に更規則的に立ち上がる。瓶部は球形を呈する。口縁部は、周取りされる。	口縁部の外面はナデ。内面は斜位のハケ調整。瓶部はヨコナギが施される。瓶部外面は平行タタキの後斜位のハケ調整。内面は斜位のハケ調整が施される。	G'区 C-II類
76-38	S X 6	*		19.0 (36.5) 32.7 —	瓶部から大きく外反し、瓶部は上方に括弧で複合1縫を有する。瓶部は明瞭を呈する。底部に列点状の無みが施される。	内外面ともに磨耗が著しく不明。内面に粘土密接合板が残る。	H区 D類
*-39	S X 3	*		17.6 30.2 19.1 6.0 —	底部は平底で、やや上げ底になる。瓶部の器底はなく長脚で、瓶部に最大径を有する。口縁部は大きく外反し、瓶部をさらに外反させる。	口縁部外縁はハケ調整の後ヨコナギ。内面は不明。瓶部外縁は斜位。斜位のハケ調整。内面に粘土密接合板が残り、全体的に滑痕斑状が残る。	B区 A-T瓶口 張鉢型。脚上位。 内面脚下位に堆付土。
*-40	S F 6	*		15.7 25.7 18.4 5.4 —	底部は、粘土密接合板である。瓶部は位に最大径を有する。瓶部は「く」の字状に大きく外反する。瓶部は丸くおさめる。	口縁部は、内外面ヨコナギ。一端へ状斑状が残る。瓶部外面は、全体的にナデ調整であるが部分的にヘラ状斑状が残る。内面は中位から下位にかけてヘラ状斑状が残る。	F区 A-I類
*-41	IV層	*		16.3 (4.3) —	口縁部はゆるやかに外反し、瓶部は貼付している。	口縁部外縁は、斜位のハケ調整。内面は横位のハケ調整が施される。	A区 A-II類
*-42	S X 2	*		11.8 20.5 15.5 2.8 —	底部は丸底で、瓶部中位に最大径をもつ細部を呈する。口縁部はゆるやかに外反し直腹的に外方に立ち上がる。	口縁部外面は磨耗して不明。瓶部外縁は、横位・斜位のタタキの後ハケ調整。内面は斜位のハケ調整。	A区 B層 瓶部に採付痕
*-43	S X 3	*		(12.4) 13.5 —	瓶部は丸底で、卵形の瓶部を呈する。	瓶部外面は、平行タタキ。内面は斜位のハケ調整が施される。底部はセン状のタタキ。	B区 B類
*-44	IV層	*		15.3 22.5 18.3 6.2 —	瓶部は、やや上げ底の半底である。瓶部はゆるやかに外上方に立ち上がり瓶部上位に最大径を有する。瓶部からゆるやかに外反し、口縁部は貼付している。瓶部は面を有する。	口縁部は、貼付しており、横位のハケ調整。瓶部から瓶部にかけて斜位及び横位のハケ調整が施される。瓶部内面は横位のハケ調整。	A区 A-E瓶 張鉢型。瓶部を除き深付土。

標本番号	通称番号	器種	口径 器高 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
76-45	S X 3	七輪器 樂	— (20.9) 17.0	底部は丸底で、長圆形の腹部を有する。腹部中位に最大太径をもつ。口縁部は欠損するが、外反する。	側部外曲は平行・斜位のタタキ、内面は斜位。縦位のハケ調整が施される。	B区、B類 腹部中位外間に黒付着。
77-46	*	*	15.4 (18.4) 15.5	底部は欠損し、腹部上位に最大径を有する。口縁部は大きく外反し、腹部は面取る。	口縁部外曲は、平行タタキ、内面は、縦位のハケ調整。腹部外曲は、平行・斜位のタタキの後縦位のハケ調整が施される。側部上位に粘土等合板がみられる。	*
*-47	*	*	17.3 (17.3) 16.6	底部は欠損。腹部上位に最大径をもつ長圆形。口縫部は、大きく外反し、腹部は面取りされる。	口縫部外曲は、深いハケ調整。内面は縦位のハケ調整。側部外曲は、斜位のタタキ、内面は斜位の深いハケ調整。	B区、B類 側部上位に黒斑
*-48	S X 4	*	15.6 21.8 15.6 2.2	底部は半底風丸底で、腹部中位に最大太径を有し、縫部は圆形を呈す。口縫部は、外上方に直線的に外反する。腹部は面取る。	口縫部外曲は、平行タタキの後縦位のハケ調整。内面は斜位のハケ調整。腹部外曲は、平行タタキの後下位から底部にかけて斜位のハケ調整。内面は、縦位のハケ調整。	F区 B類
*-49	*	*	15.8 23.9 17.0 2.6	底部は半底風丸底で、腹部の最大径は、中位にもつ。口縫部はゆるやかに外反する。腹部は面取る。	口縫部外曲は、平行タタキ、内面はナデ。腹部外曲は、タタキの後ハケ調整。内面もハケ調整であるが下位は指頭压痕が残る。	*
*-50	IV-1号	*	25.6 (13.6) 23.0	底部は欠損。腹部上位に最大径をもつ。口縫部は、強く外上方に直線的に立ち上がる。腹部は丸くおさめる。	口縫部は、内外面深いハケ調整。腹部外曲は、斜位のタタキ、内面は斜位の深いハケ調整が施される。口縫部はナデ。	*
*-51	S X 5	*	19.0 32.8 23.2	底部は丸底。腹部中位に最大径を有する。口縫部は強く外反する。腹部は面取る。	口縫部、側部外曲は平行タタキ。腹部下位から底部内面にかけて斜位のハケ調整が施される。	C'区 B類
*-52	S X 4	*	16.5 (22.7) 16.5	底部は尖底状の丸底。腹部上位に最大径を有する。口縫部は強く外反する。腹部は面取り。	口縫部外曲は、タタキの後ハケ調整。内面はハケ調整であるが指頭压痕が残る。縫部は縦位のタタキ、後ハラナデ。内面は、ナデ調整であるが底部はハケ調整。腹部中位に粘土等合板。縫部にもみられる。	F区 B類 口縫部から腹部下位まで掲付着
*-53	S X 5	*	13.9 20.5 15.7	底部は半底風の丸底。腹部中位に最大太径を有する。縫部は圆形を呈する。口縫部は、強く外反する。腹部は面取る。	口縫部内面は、ハケ調整。外面は不明だが、タタキと考えられる。腹部外曲は平行タタキ、内面はハケ調整。	G'区 B類
*-54	IV-1号	*	15.9 (14.8) 17.0	底部は欠損。腹部下位に最大径を有し、長圆形である。口縫部は直線的に外上方に立ち上がる。腹部は丸くおさめる。	口縫部外曲は、ハラナデ状が残る。内面は深いハケ調整。腹部外曲は、平行タタキの後下位にかけて縦位のハケ調整が施される。口縫部は、貼付し補強している。	F区 B類 全体的に黒が付着している。

辨区番号	遺構番号	器種	口径 石高 (cm) 底径	形態・文様	手法	備考
77-55	S X 5	土器器 類	17.6 (14.9) 18.5 —	肩部下位から欠損。胴部上位に最大径を有する。口縁部は強く外反する。腹部は面取りされる。	口縁部から胴部にかけて、平行のタスキが施される。内面は不明。肩部上位に粘土帯接合痕がみられる。	C'区 B型
78-56	S X 2	+	16.3 (13.7) 20.0 —	胴部下位から欠損。肩部上位に最大径を有する。口縁部は外反するが、腹部はさらに外反させる。腹部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は斜位のヘラ削り。胴部外面は、磨耗して小明。内面は康熙のヘラ削りが部分的にみられる。粘土帯接合痕がみられる。	A区 C-I-① 胴部外面に保付着。
*-57	B型	+	20.0 (13.0) 19.8	肩部中位から欠損。肩部上位に最大径を有する。腹部からゆるやかに外反し、さらに縦部は強くなる。腹部は丸くおさめる。	口縁部は、内外面ヨコナデ。胴部外面は、ヘラナア及びナデ調整。内面は部分的にヘラナデが施される。	D区 C-I-①
*-58	S F 3	+	21.0 27.8 23.6 —	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。胴部は卯形を呈する。口縁部は大きく外反する。腹部は丸くおさめる。	口縁部外周はヨコナデ。内面は小明。胴部外面は、過耗が著しく不明。内面は、下位から底部にかけて斜位のハケ調整が施される。	B区 C-I-① 胎土は薄く焼成不良。胴部中位から底部にかけて焼付着。
*-59	S F 4	+	19.2 26.2 21.5 —	底部はゆるやかな丸底。胴部の上位に最大径を有し、長楕円形である。口縁部は強く外反する。腹部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。内外面に擦痕圧痕が残る。内面に粘土帯接合痕がみられる。	C区 C-I-①
*-60	S F 6	+	14.4 22.8 17.9 —	底部はゆるやかな丸底。胴部の上位に最大径を有する長楕円形。口縁部は直線的に外方に立ち上がる。	口縁部内外面にヘラナデが残る。胴部は斜面位置がずれ、下位がハケ調整。内面はハケ調整が施される。上位に粘土帯接合痕が残る。	F区 C-I-④
*-61	B型	+	13.6 (21.8) 16.6 —	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。腹部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。腹部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部外周にヘラナデが施される。内面は不明。内面に粘土帯接合痕が残る。	D区 C-I-① 胴部外面下位に保付着。
*-62	+	+	15.6 (25.0) 17.0 —	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。内面に屈曲し外反する。腹部はさらに外反し、丸くおさめる。	口縁部外面は、ヨコナデ。胴部外面はナデ調整。内面は磨耗して不明。	K区 C-I-③
79-63	+	+	17.0 26.1 19.9 —	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。口縁部はゆるやかに外反し、腹部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は不明。内面はヘラ状圧痕が残る。	D区 C-I-①
*-64	S F 2	+	17.8 17.8 21.8 —	底部は欠損。胴部上位に最大径を有する。口縁部はゆるやかに外反し、腹部は丸くおさめる。	口縁部内外面は不明であるが、ナデ調整が施される。胴部内面はヘラ削りが下から上へ施される。外面に擦痕圧痕が残る。	B区 C-I-②
*-65	S F 7	+	12.6 (18.6) 19.6 —	底部は欠損。胴部上位に最大径を有する。口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。腹部は丸くおさめる。	口縁部外周は、ナデ調整。内面の一部にヘラナデが施される。胴部外周は、ナデ及びヘラナデ。内面の胴部上位にはヘラナデが施される。中位に粘土帯接合痕が残る。	G区 C-I-② 口縁部外周に擦付着。

標記番号	遺傳子母	器種	法量 cm 高 横 後 頭 深	形態・文様	手 法	備 考
79-66	S F 6	土師器 甕	14.6 (21.3) 18.0 —	底部は欠損。胴部上位に最大径を有する。肩部がやや張り気味で、頭部から外上方にゆるやかに外反する。縫部は丸くおさめる。	口縫部外側は、指痕の後ヨコナデ。内面はヘナナデ。胴部外側はナナゲ調整。内面は全体的にヘナナデがおこなわれる。	F区 C-I-②
*-67	*	*	16.4 22.3 18.2	底部は、ゆるやかな丸底。胴部上位に最大径を有するが、長楕形の頭部、肩が張り、口縫部はゆるやかに外反する。縫部は丸くおさめる。	口縫部の外側はヨコナデ。その付近は耗減して不明。内外面に粘土帯接合痕が残る。	*
*-68	*	*	18.3 21.0 19.0	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。頭部は下方に立ち上がり、口縫部はゆるやかに外反する。	口縫部外側はヨコナデ。頭部にはヘラ状江戸が残る。胴部外側下位から縫部にかけて、ハケ調整。内面はヘラ状接合痕が残る。内外面に粘土帯接合痕がみられる。	F区 C-I-② 口縫部と胴部中位に焼付着。
*-69	S F 4	*	25.2 33.4 28.8	底部は厚く丸底。胴部上位に最大径を有し、口縫部は、頭部からゆるやかに外反する。縫部は丸くおさめる。	口縫部は、内外面ヨコナデ。頭部外側は、全体的に崩落が著しく不明だが肩・腹は一部ナナゲ調整。粘土帯接合痕が残っている部分に指痕压痕が多い。	C区 C-I-③
80-70	呂甕	*	18.3 18.8 22.8 —	底部は欠損。胴部中位に最大径を有し、頭部で強く后屈し、口縫部は外反する。	口縫部外側は不明であるが、内面一部に指痕压痕が残る。胴部中位に横裂。部位のハケ調整。内面は崩落で不明。	A区 C-II-①
*-71	S F 3	*	15.9 (13.0) 24.2	底部は欠損。胴部中位に最大径を有し、球形を呈す。口縫部は強く外反する。	全体的に耗減が著しく不明。	B区 C-II-① 成形不良 砂粒多量含有
*-72	S F 2	*	19.5 (29.0) 34.0	底部は欠損。肩部は張りがなくながらに縫部に移行し、口縫部は強く外反する。縫部は丸くおさめる。	口縫部外側はヨコナデ。内面は指痕压痕が残る。胴部内面に粘土帯接合痕が残りその部分に指痕压痕が多い。	B区 C-II-① 頭部全体に焼付着。
*-73	*	*	17.2 (17.1) 20.8	胴部下位から欠損。頭部の張りがなく、だらかに縫部に移行し、口縫部は強く外反する。縫部は面取る。	口縫部外側はヨコナデで部分的に指痕压痕が残る。胴部外側も指痕压痕が多い。	B区 C-II-①
*-74	S X 3	*	17.6 (19.3) 28.4	胴部下位から欠損。頭部の張りが強く、球形を呈す。口縫部は強く外反し、縫部は面取る。	外面は、斜位・横位の深いハケ調整。口縫部は指痕压痕が残る。内面は、粘土帯接合痕の部分に指痕压痕が多い。	B区 C-II-① 胴部外側に焼付着。
*-75	日甕	*	15.2 (19.6) 19.9	胴部下位から欠損。頭部の張りがなく、頭部に移行する。頭部からながらに外上方に立ち上がり、口縫部で強く外反する。縫部は丸くおさめる。	口縫部外側に、指痕压痕が残るが、全体的に消耗著しく不明。	D区 C-II-①
81-76	*	*	13.6 (14.1) 19.0	頭部下位から欠損。頭部の張りがなく、頭部に移行する。頭部からながらに最大径を有する。頭部からなら大きく外反し口縫部にいたる。縫部は丸くおさめる。	口縫部は内外面ヨコナデ。胴部外側は、ナナゲ調整。内面は、不明。全体的に指痕压痕が残る。	*

検査番号	選択番号	器種	法量 (m)	口唇 苔高 既往 歴性	形態・文様	手 法	備考
81 - 77	S F 4	土節器 業	14.8 18.3 17.8 —	腹部下位から欠損。腹部中位に最大径を有し、ながらに頭部に移行する。口縫部は、強く外反する。端部は丸くおさめる。	口縫部内外面はヨコナデ。頭部上位外側に、腹部のハケ調整。内面はヘラナデが施される。粘土帯接合部に指頭圧痕が残る。	C区 C-II-①	
* - 78	S F 5	*	18.1 (23.7) 18.8 —	底部は欠損。腹部中位に最大径を有する。制部の張りがなく、彌散部に移行する。口縫部は強く外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。粘土帯接合部に指頭圧痕が残る。	*	
* - 79	S F 4	*	14.3 (25.0) 19.0 —	底部は欠損。腹部中位に最大径を有する。腹部は彌散形を呈し、口縫部は、強く外反する。端部は丸くおさめる。	口縫部内外面はヨコナデ。頭部から脚部にかけて、外面一帯にハケ調整が施される。内面は頭部中位にヘラナデ。粘土帯接合部に指頭圧痕が残る。	*	
* - 80	*	*	14.1 27.7 21.2 —	底部は厚く丸底。頭部中位に最大径を有し、張りが強い。頭部で屈曲し、口縫部は強く外反する。	磨耗が著しく不明であるが、全体的に指頭圧痕が残る。内面に粘土帯接合痕。	*	
* - 81	*	*	15.2 24.0 17.8 —	底部はゆるやかな丸底。頭部中位に最大径を有するが、張りがなく、彌散部に移行する。ゆるやかに外反する。頭部から強く外反する口縫部をもつ。端部は丸くおさめる。	口縫部は、内面ヨコナデ。頭部外面は、全体的に新陳旺盛が残る。内面は中位にヘラナデが施される。内面に粘土帯接合痕が残り、指頭圧痕が多い。	*	
82 - 82	*	*	16.2 26.6 17.4 —	底部は丸底。腹部中位に最大径を有する。張りがなく長制形を呈する。口縫部は直線的に外方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	頭部下位にヘラナデ調整が残る。その他は、磨耗して不明。	C区 C-II-① 頭部中位から底部にかけて黒斑。	
* - 83	S F 6	*	15.4 23.4 17.7 —	底部は厚く丸底。頭部中位に最大径を有する。頭部はやや張りがあり、ゆるやかに頭部に移行。口縫部は強く外反する。端部は丸くおさめる。	口縫部内外面は、ヨコナデ。頭部は、外側ヘラナデ。内面はヘラナデ及びグリッタ削り。頭部上位は、ヘッサ工具の先端部による圧痕。底部は指頭圧痕が残る。制部内面に粘土帯接合痕。	F区 C-E-① 頭部外面に既付着。	
* - 84	*	*	14.7 21.1 16.4 —	底部は厚く安定した丸底。頭部中位に最大径を有し、やや張りがある。口縫部は、強く外反し、端部は丸くおさめる。	口縫部内外面は、ヨコナデ及び指頭圧痕。頭部外側上位はヘラナデ調整。	F区 C-II-① 頭部下位に既付着。	
* - 85	*	*	15.4 20.0 17.5 —	底部は丸底。頭部中位に最大径を有し、張りがなく長制形を呈する。口縫部は、内面気味に外反する。	口縫部はヨコナデ。頭部内面上位はヘラナデ調整。	F区 C-II-① 頭部中位に既付着。	
* - 86	H-1番	*	15.6 21.6 15.6 —	底部は丸底。頭部中位に最大径を有し、張りがなく長制形を呈する。口縫部は、内面気味に外反する。	口縫部はヨコナデであるが、内面一部にヘラナデ。頭部外側はナダ調整。内面は不明。頭部内面下位に粘土帯接合痕。	F区 C-II-① 口縫部から頭部中位まで既付着。	
* - 87	S F 6	*	13.1 23.5 (18.2)	底部は丸底。頭部中位から最大径を有しやや張りがある。口縫部は強く外反する。	口縫部内外面では、ヨコナデ。頭部内面にヘラナデがみられる。粘土帯接合部に指頭圧痕。	F区 C-II-① 頭部外側に既付着。	

探査番号	直構番号	部種	法量 器高 側壁 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
82-88	S F 6	土師器 甕	11.9 28.0 21.2 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、部形の断面を呈する。口縁部は、強く外反する。	口縁部外面は、ナゲ調整。胴部内面はヘラナダ及びナゲ調整。内面はヘラナダ調整で底面に粘土帯接着痕が多い。	F区 C-II-①
*-89	*	*	16.0 24.0 18.2 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有するが、脇部の強りがない。頭部は上方に、口縁部は強く外反する。端部はよくおさめる。	口縁部外面は、ヨコナデ。脇部内面は、複数のヘラナダ。外面は、磨耗して不明。胴部内面は、下方にヘラナダ調整。粘土帯接着痕がある。	*
83-90	*	*	17.6 (22.2) 18.7 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有するが、脇部の強りがない。口縁部は強く外反し、底部は丸くおさめる。	口縁部外面はヨコナデ。内面はハケ調整。胴部外面は、ナゲ为主であるが、一部にハケ調整。内面はナゲ調整で粘土帯接着痕がある。	*
*-91	*	*	14.7 24.5 17.9 —	*	口縁部内面はヨコナデ。外面一部に衝突圧痕。胴部上位にハケ調整と粘土帯接着痕がある。頭部内面に粘土帯接着痕。	F区 C-II-① 底部を除く焼付着
*-92	*	*	15.6 24.7 20.4 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、側窓の振りがある。口縁部は、強く外反する。	口縁部外面は、ヨコナデ。胴部外面は、ナゲ調整。内面はヘラナダ及びナゲ調整。底部内外面はヘラナダ。内面に粘土帯接着痕があらわれる。	F区 C-II-①
*-93	*	*	16.4 22.8 21.1 —	*	口縁部外面は、ヨコナデ。胴部上位外面は、ナゲ。中位から底部にかけてはヘラ状工具によるナゲ調整。内面に粘土帯接着痕があらわれる。	F区 C-II-① 胴部中位から下位にかけて焼付着
*-94	*	*	18.0 26.8 21.4 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し脇部が強らずゆるやかに頭部に移行する。口縁部は強く外反する。	口縁部外面は、ヨコナデ。脇部内面はハケ調整。その他の部分は磨耗して不明。内面に粘土帯接着痕がある。	F区 C-II-①
*-95	*	*	17.0 27.3 21.1 —	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有し、頭部の断面を呈する。口縁部は、強く外反し端部は丸くおさめる。	口縁部内面は、ヨコナデ。頭部外側の一辺にヘラ状圧痕。胴部内面は、ナゲ調整。内面はヘラ状圧痕。粘土帯接着痕がある。胴部下位外側の粘土帯接着部にはヘラ状圧痕。底部外側はヘラ削り。	*
84-96	*	*	15.4 27.1 22.1 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、張りがあり頭部を呈する。口縁部は、強く外反する。	口縁部外面は、ヨコナデ。内面は、ヘラ状工具によるナゲの様ヨコナデ。頭部外側は、ヘラ状工具によるナゲ調整。内面は、ヘラ状工具の圧痕が残る。	*
*-97	*	*	18.4 28.1 22.6 —	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有する。張りがあり頭部を呈する。頭部で強く屈曲し口縁部は外反する。	口縁部外面は、ヨコナデ。頭部内面にヘラ状圧痕がつくる。胴部内面に粘土帯接着痕が残る。	*

辨認番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 器高 側厚 底径	形態・文様	手法	備考
84-198	S F 6	土器器 甌	14.6 27.6 21.5 —	底部は丸底でゆるやかに立ち上がる。制部中位に最大径を有しやや張りがある。口縁部は、強く外反する。	口縁部内外面は、不明。制部内面は不明。制部外面は、ハケ調整。内面に粘土帯接合痕が残る。	F区 C-II-①
*-199	*	*	17.2 26.0 23.6 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。頭部内面には、ツラ状工具によるナデ調整。制部内面は、ヘラ状工具によるナデ。底部外曲へラ状工具によるナデ。内面は圧痕がつく。	*
*-200	*	*	15.4 24.9 19.9 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。頭部外面は、ヘラナデ及びナデ調整。内面はヘラナデ。頭部内面に粘土帯接合痕。	*
85-101	*	*	16.6 28.7 23.5 —	底部は厚く丸底で、腹部中位に最大径を有し、張りがある。口縁部は、頭部で屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。頭部外面は、ナデ調整。内面はヘラナデが施される。内面に粘土帯接合痕。	*
*-102	*	*	19.4 30.0 22.1 —	底部は丸底でゆるやかに立ち上がる。制部中位に最大径を有しやや張りがある。口縁部は強く外反し、底部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。内面一部ハケ調整。制部内外面はハケ調整。	*
*-103	*	*	14.6 28.4 21.1 —	底部は平底風の丸底。頭部中位に最大径を有し、卵形を呈する。腹部で強く屈曲し、口縁部は外反する。底部は直線的。	口縁部内外面はヨコナデ。頭部外面にヘラ状の圧痕。頭部外面に粘土帯接合痕。ヘラ状工具によるナデ。	*
*-104	*	*	17.8 30.5 22.7 —	底部は、丸底でゆるやかに立ち上がる。制部中位に最大径を有し、口縁部は、強く外反する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。頭部外面は、ヘラ状工具によるナデ。内面も横幅のヘラ状工具によるナデ。	*
*-105	*	*	16.2 27.1 22.0 —	底部は丸底。頭部中位に最大径を有し、形態を立てる。頭部で屈曲し、口縁部は強く外反する頭部は直線的。	口縁部内外面は、ヘラナデ。頭部外面は、ナデ調整。内面上位はヘラナデ及びナデ調整。下位はヘラナデ及び指捺圧痕が残る。	F区 C-II-① 頭部下位に保存者。
86-106	*	*	17.5 27.7 20.0 —	底部は平底風の丸底で、ゆるやかに立ち上がる。頭部中位に最大径を有するが、頭部の張りはない。口縁部は、強く外反する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。頭部外面は、ヘラナデ。内面は、ヘラナデ及びナデ調整。	F区 C-II-① 頭部下位に保存者。
*-107	*	*	18.6 30.5 22.3 —	底部は厚く丸底。頭部中位に最大径を有し、張りがある。頭部で屈曲し、口縁部は上方に直線的に立ち上がる。底部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。頭部外面は、委託して不明。内面はヘラナデ及びナデ調整。	F区 C-II-①
*-108	S F 7	*	17.2 (22.1) 24.6 —	底部は欠損。頭部中位に最大径を有し、張りがある。頭部で屈曲し、口縁部は上方に直線的に立ち上がる。底部は丸くおさめる。	口縁部は、外面ヨコナデ。内面はヨコナデ及びヘラナデ。頭部外面はヘラナデ。内面もヘラナデ。頭部内面に指捺圧痕が残る。頭部粘土帯接合痕。	G区 C-II-① 頭部外側保存者。
*-109	*	*	16.8 (16.4) 22.9 —	底部下位から欠損。頭部中位に最大径を有し、張りがある。頭部で強く屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部外面は、ヨコナデ。内面はヘラナデ。頭部内外面ヘラナデ。内面に粘土帯接合痕が残る。	*

標本番号	遺傳番号	器種	法差 器高 制限 底差 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
86-110	S F 7	土器器 皿	16.2 (22.1) 19.8 —	腹部下位から欠損。腹部中位に最大径を有する。腹部にゆるやかに移行し、腹部は強く膨張する。口縁部は、直線的に外上方に立ち上がる。底部は丸くおさめる。	口縁部外面は、ヨコナデ及びハラナデ。内面はヘラナデ。腹部外面は、ハケ及びハラナデ調整。内面はヘラナデ。内面粘土帶接合痕がみられる。	G区 C-II-① 口縁部から腹部にかけて擦付着。
*-111	*	*	16.3 (22.4) 22.6	腹部下位から欠損。腹部中位に最大径を有し、強張りがある。口縁部は頗るく、強く外反する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。腹部内外面は、ヘラナデ調整。内面に粘土帶接合痕がみられる。	*
87-112	V-2層	*	17.0 21.1 19.1 —	腹部は丸底。腹部中位に最大径を有する。腹部に張りがあり、球形を呈する。腹部で屈曲し、底部は、直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部外面は、ヨコナデの後ハケ調整。内面はヘラナデ及びハケ調整。腹部外面は、複数のハケ、内面は複数のハケ調整。底部外面は、ヘラナデ。	G区 C-II-①
*-113	S F 7	*	15.8 24.6 20.9 —	底部は丸底で、立ち上がりが急で、制限がない。腹部中位に最大径を有し、張りをもつ。口縁部は、強く外反する。底部は丸くおさめる。	口縁部外面は、ヨコナデ。腹部外面は、ハラナデ。腹部内面から腹部内面もヘラナデ。内外面粘土帶接合痕がみられる。	G区 C-II-① 口縁部と腹部に擦付着。
*-114	*	*	16.8 26.4 17.8 —	底部は丸底で、ゆるやかに立ち上がる。腹部中位に最大径を有する。腹部に張りをもつ。口縁部は、張りがなくゆるやかに屈曲して移行する。腹部から強く外反する。	口縁部内外面はヨコナデ。腹部外面は、ナデ及びヘラナデ。内面はヘラナデが施される。	G区 C-II-①
*-115	*	*	16.5 27.5 20.6 —	底部は厚く丸底。制限中位に最大径を有し、ゆるやかに屈曲して移行する。口縁部は、強く外反する。腹部は丸くおさめる。	口縁部外面は、ヨコナデ。腹部外面は、ヘラナデ調整。	G区 C-II-① 口縁部から腹部にかけて擦付着。
*-116	*	*	37.3 (25.8) 23.6	底部は丸底。腹部中位に最大径を有する。腹部に張りをもち、底部で屈曲し、口縁部は強く外反する。	口縁部は、内外面ヨコナデだが一部ヘラナデ。腹部内外面はヘラナデ。	G区 C-II-① 腹部に擦付着。
*-117	*	*	14.6 (20.0) 19.7	腹部下位から欠損。腹部中位に最大径を有し、腹部の張りはない。口縁部は外反する。	口縁部は、内外面ヨコナデ。腹部外面は、ヘラナデ。内面に粘土帶接合痕がみられる。	G区 C-II-① 外面に擦付着。
88-118	吾-2層	*	14.4 28.0 20.0 —	腹部は丸底。腹部中位に最大径を有し、腹部の張りがあり、球形を呈する。口縁部は強く外反する。	口縁部はヨコナデ。一部内面にヘラナデ。腹部内外面はヘラナデが施される。	G区 C-II-① 外面に擦付着。
*-119	S F 7	*	17.5 26.3 21.9 —	腹部は丸底。腹部中位に最大径を有し、球形を呈する。口縁部は強く外反する。底部は丸くおさめる。	口縁部は、内外面ヨコナデ。腹部内外面はヘラナデ。内面に粘土帶接合痕がみられる。	G区 C-II-① 外面に擦付着。
*-120	S X 7	*	17.8 24.5 20.2 —	腹部は厚く丸底。腹部中位に最大径を有する。腹部に張りをもち、口縁部は強く外反する。	全体的に摩耗して不明。腹部外面に一部ヘラナデ調整が残る。	H区 C-II-①
*-121	S F 6	*	16.4 25.1 19.6 —	底部は厚く丸底。腹部中位に最大径を有する。腹部に張りをもち、腹部形を呈する。口縁部は強く外反する。	*	F区 C-II-① 外面に擦付着。

標示番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
88-122	S F 6	上部器 蓋	18.0 25.7 19.2 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、張りはない。口縁部は強く外反する。	口縁部内外面は、ヨコナデ調整。胴部外周はヘラナゲ。内面に粘土帶接合痕がみられる。	F区 C-II-① 外周に擦付着	
*-123	S F 8	*	17.0 25.2 19.8 —	底部は丸底で、芯に立ち上がり、胴部中位に最大径を有し、ゆるやかに頭部に移行する。頭部で膨脹し、口縁部は強く外反する。	全体的に磨耗しているが、ヘラによるナデ調整がみられる。	D区 C-II-②	
89-124	S F 7	*	17.6 26.5 24.0 —	底部は丸底で、ゆるやかに立ち上がる。胴部中位に最大径を有し、球形を呈する。口縁部は、強く外反し、腹部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。胴部外周は、ヘラによるナデ調整。	G区 C-II-①	
*-125	S F 6	*	21.6 35.5 27.6 —	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有する。頭部で上方に立ち上がり、口縁部は強く外反する。腹部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	F区 C-II-①	
*-126	S X 2	*	15.9 23.1 18.4 —	底部は厚く丸底で、ゆるやかに立ち上がる。胴部中位に最大径を有するが、張りはない。口縁部はなめらかに外反する。	口縁部外周は、ナゲ調整の指頭圧痕が多く。内面はヘラナゲ及び横位のナゲ。胴部外周はヘラナゲ及びナゲ調整。内面に粘土帶接合痕がみられる。	A区 C-II-③	
*-127	II種	*	15.0 (15.8) 18.0 —	胴部中位から欠損。頭部の張りがなく、頭部は上方に立ち上がり、口縁部は強く外反する。腹部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。胴部外周は、一部ハケ調整。内面は磨耗して不明。	D区 C-II-② 外周に擦付着。	
*-128	S F 6	*	14.4 20.2 16.6 —	底部は平底風丸底。胴部中位に最大径を有するが、張りがない。頭部にゆるやかに移行し、口縁部の外反は弱い。	口縁部内外面は、ヨコナデ。胴部内外面に指頭圧痕が残る。	C区 C-II-③	
*-129	*	*	16.5 22.6 19.5 —	底部は丸底。頭部中位に最大径を有し、張りがある。頭部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。腹部は丸くおさめる。	口縁部は、内外面ヨコナデ及び横位のナゲ調整。他は磨耗が著しく不明。粘土帶接合部に面頭圧痕が多い。	C区 C-II-② 底部内外面に黒斑。	
*-130	*	*	12.4 20.5 17.6 —	*	全体的に磨耗が著しく不明。内外周に指頭圧痕が残る。	C区 C-II-③	
90-131	S F 6	*	15.0 24.3 19.0 —	底部は丸底で、ゆるやかに立ち上がる。胴部中位に最大径を有するが、張りはない。口縁部は下方に直線的に立ち上がり、頭部のみ外反する。腹部は丸くおさめる。	口縁部端は、ヨコナデ。口縁部外周は、ナゲ調整。内面はヘラナゲ。頭部内面は、ヘラナゲ。底部外周はヘラ状工具の先端部でナゲ及び削り。内面にヘラ状工具が残る。	F区 C-II-② 胴部外周に擦付着	
*-132	*	*	15.8 25.9 18.7 —	底部は丸底で、ゆるやかに立ち上がる。胴部中位に最大径を有する。頭部に張りがある。口縁部は、直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。胴部外周は、ヘラ状工具の先端部でナゲ及び削り。内面にヘラ状工具が残る。	F区 C-II-③	
*-133	Ⅳ-1種	*	12.6 (23.8) 18.6 —	底部は欠損。胴部中位に最大径を有する。頭部の張りがない。口縁部は、ゆるやかに外反する。	口縁部内外面は、ナゲ調整。肩部外周はハケ調整。胴部外周はヘラナゲ。内面はハケ調整。	F区 C-II-② 外周に擦付着。	

辨別番号	直機番号	器種	口縫 器合 側径 (cm)	形態・文様	手法	備考
90-134	S F 6	土筋巻 兜	16.0 24.8 18.3	底部は丸底で、ゆるやかに立ち上がる。頭部中位に最大径を有する。頭部で黒曲し、口縫部はゆるやかに外反する。	口縫部内外面は、ヨコナデ。頭部から脣部にかけて、外面へラック状張。内部はヘラ状工具によるナデ。内部に粘土等接合痕が残る。	F区 C-II-(2) 口縫部と頭部外面に煤付着。
*-135	*	*	15.2 27.0 19.4 ---	底部は丸底。頭部中位に最大径を有する。頭部の張りがなく頭部に平行する。口縫部は、ゆるやかに外反する。頭部は丸くおさめる。	口縫部は、内外面ヨコナデ。内面はヘラ状張が残る。頭部外面にヘラナダが施される。	G区 C-E-(2) 頭部外面に煤付着。
*-136	*	*	13.8 25.9 18.6 ---	底部は丸底。頭部中位に最大径を有し、やや張りをもつ。頭部は、上方に立ち上がり、通部は外反する。	口縫部は、内外面ヨコナデ。頭部外面は、ヘラナダ及びナデ調整。内部はヘラナダが施される。	*
91-137	S F 7	*	10.2 21.7 13.9 ---	底部は丸底。頭部中位に最大径を有し、張りがなく長方形を呈する。ゆるやかに頭部に移行し口縫部が短く外反する。	口縫部内外面は、ナダ調整。頭部内外面は、ヘラナダが施され、粘土等接合痕が多い。	G区、C-II-(2) 底部を除き煤付着。
*-138	*	*	16.3 27.3 18.4 ---	底部は丸底。頭部中位に最大径を有するが、張りがない。頭部で黒曲し、口縫部は外反する。頭部は丸くおさめる。	口縫部は、内外面ヨコナデ。頭部から脣部にかけて、密なハケ調整。内部は、完いハケ調整。底部内面は、ヘラ状張が残る。	G区 C-II-(2) 頭部外面に煤付着。
*-139	*	*	16.2 22.0 20.4 ---	底部は、丸底。頭部中位に最大径を有するが、立ち上がりが悪い。口縫部は外反する。	口縫部は、内外面ヨコナデ。頭部内外面ナダ及びヘラナダ調整。	G区、C-II-(2) 口縫部、頭部外面に煤付着。
*-140	*	*	17.6 27.9 21.7 ---	底部は丸底。頭部中位に最大径を有するが、張りがない。頭部にゆるやかに移行し、上方に立ち上がる。口縫部はゆるやかに外反する。頭部は丸くおさめる。	内外面にヘラナダ調整が施される。内部に粘土等接合痕がみられる。	G区 C-II-(2)
*-141	*	*	20.6 (16.3) 21.7	頭部中位から丸底。中位に最大径を有するが張りがない。ゆるやかに頭部に移行し、頭部は上方に立ち上がる。口縫部はゆるやかに外反する。頭部は丸くおさめる。	口縫部内外面は、ヨコナデ及びヘラナダ。	G区 C-II-(2) 外面に煤付着。
*-142	S F 8	*	17.0 26.4 18.5 ---	底部は、平底風の丸底。頭部中位に最大径を有する。口縫部は、ゆるやかに直線的に外上方に立ち上がる。	全体的に歯耗が著しく不明だが、外側の一部にヘラナダが認められる。	H区 C-II-(2)
*-143	S F 7	*	18.0 29.7 24.0 ---	底部は丸底。頭部中位に最大径を有する。頭部で黒曲し、口縫部は直線的に外上方に立ち上がる。	口縫部内外面はヘラナダ調整。頭部外面は、ハク状工具によるナダ調整。	G区 C-II-(2) 外面に煤付着。
92-144	V器	*	14.8 23.1 16.4 ---	底部は厚く、外上方に立ち上がり、頭部に移行する。頭部中位に最大径を有し、頭部で黒曲し、口縫部は直線的に外上方に立ち上がる。	頭部外面は、縦位のハケ調整その他の歯は、歯耗が著しく不明。	E区 C-II-(2)

辨別番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備考
92-145	S F 6	土縁器 甌	15.7 (9.1) (15.8) —	胴部中位から欠損。最大径は中位に有するとも考えられる。口縁部は外反する。貼付口縁。	縁部外縁は、ヘラナデ。胴部中位は、ヘラミガキか? 内面はヘラナデ調整。	F区 C-I-③ 外曲に貼付着。	
*-146	S F 4	*	25.0 (14.3) 27.9 —	胴部中位から欠損。最大径は中位に有する。口縁部は、外上方へ内済気味に立ち上がる貼付口縫。	全体的に磨耗が著しいが、縁部に折削圧痕が残る。	C区 C-II-③	
*-147	Ⅲ層	*	14.6 (21.8) 18.9 —	底部は欠損。最大径は胴部下位に有し、瓶形である。口縁部は外上方に直角的に立ちあがり、端部は丸くおさめる。	口縁部外縁は、ヨコナデ。胴部内面はヘラナデ。	D区 C-Ⅲ 口縁部と胴部上位外縁に貼付着	
*-148	S F 6	*	13.6 20.7 17.9 —	底部は丸底。最大径は、胴部下位に有する。口縁部は、外反する。	底部外縁にハケ調整。その後は全体的に磨耗が著しく不明。縁部内面に粘土寄せ合痕。	F区 C-Ⅲ	
*-149	S F 7	*	14.8 22.5 17.6 7.6	底部は平底風の丸底。胴部下位に最大径を有する。縁部は上方に立ちあがり。口縁部は強く外反する。	口縁部は、内外面ヨコナデ。胴部内面は、ヘラナデ。内面に粘土寄せ合痕。底部外縁にカゴ型圧痕が施されるが一部ナデ消されている。	G区 C-Ⅲ 胴部外縁に貼付着	
*-150	S X 7	*	17.1 24.2 17.9 —	底部は厚く、ゆるやかに立ち上がる。胴部下位に最大径を有するが、並みやや大きい。縁部は上方に立ちあがり、口縁部は強く外反する。	口縁部外縁は、横位のヘラナデ。胴部外縁は、ナデ及びヘラナデ調整。	H区 C-Ⅲ	
*-151	S F 8	*	13.7 22.3 17.8 —	底部は丸底。胴部を中位から下位にかけて最大径を有する。口縁部は強く外反する。端部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	*	
93-152	N-2層	*	16.4 14.2 14.7 —	底部は丸底。胴部は内済して外上方に立ちあがる。縁部で周曲し、口縁部は外反する。	内外面ヘラナデ。	G区 D-I-① 外曲に貼付着	
*-153	S F 6	*	12.6 13.6 12.2 —	底部は平底気味の丸底。口縁部に最大径を有する。縁部で屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部外縁は、ヨコナデ。内面は一部ヘラナデ。胴部外縁は横位、縁部のヘラナデ。内面もヘラナデ。粘土寄せ合痕がみられる。	F区 D-I-① 胴部外縁に貼付着	
*-154	S F 9	*	12.8 14.3 22.4 —	底部は丸底。胴部から上方に立ち上がり、口縁部のみゆるやかに外反する。	全体的に磨耗が著しいが、外縁にハケ状工具によるナデ。内面にヘラナデがみられる。	I区 D-I-②	
*-155	S F 7	*	12.4 11.6 12.2 —	底部は丸底。口縁部に最大径を有する。口縁部は、ゆるやかに外上方に立ちあがる。端部は丸くおさめる。	口縁部は内外面ヨコナデ。胴部外縁は、ヘラナデ。内面に粘土寄せ合痕がみられる。	G区 D-I-②	
*-156	N-2層	*	15.0 (14.1) 14.1 —	底部は平底風の丸底。胴部から上方に立ち上がり、縁部で屈曲する。口縁部は外上方に直角的に立ちあがる。	外縁は、ハケ及びヘラナデ調整。内面は、縁部が斜位の直なハケ調整。底部がヘラナデが施される。	*	

序号番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器高 横径 底径	形態・文様	手 法	備 考
93-157	S F 2	上部器 底	15.0 (17.7) 17.1 —	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。口縁部は、強く外反し、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。外面は、表面が著しく不明。胴部内面は、ヘラ削り及びヘラナダ調整。	B 区 D-Ⅲ-① 胴部上位に保付着。
* -158	II 罐	*	10.6 18.7 12.0 —	底部は、平底風の丸底。胴部の張りがなく、長胴型を呈する。口縁部は、外上方に直線的に立ち上がる。	口縁部は、外観一部ハケ調査が残る。胴部外側の粘土帯接合部に指頭圧痕が多い。内面にヘラ仕上げが残る。	D 区 D-Ⅲ-②
* -159	S F 6	*	12.4 16.5 12.6 —	底部は丸底。胴部上位に最大径を有する。器部は、上方に立ち上がり、歩るやかに口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	内外面ヘラナダが施される。	F 区 D-Ⅲ-② 外面に保付着。
* -160	*	*	13.6 18.4 15.1 —	底部は厚く丸底。胴部上位に最大径を有する。器部は、上方に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。胴部内面にヘラ仕上げが残る。胴部下位から底部外側にかけて瓶底のハケ調査。	F 区 D-Ⅲ-② 胴部外側に保付着。
* -161	V 罐	*	11.5 13.9 12.0 —	底部は丸底。胴部は張りがなく颈部に移行し、口縁部は外上方に弱く直線的に立ち上がる。	全体的に表面が著しく不明。	E 区 D-Ⅲ-②
* -162	S F 6	*	12.3 (14.2) 12.3 *	底部は丸底。胴部は張りがなく颈部に移行し、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。周囲外面は、ナダ調整。内面は、ヘラナダが施される。粘土帯接合痕がみられる。	F 区 D-Ⅲ-① 口縁部と胴部外側に保付着。
* -163	*	*	12.2 14.8 13.2 —	底部は平底風の丸底。胴部中位に最大径を有する。頭部で屈曲し、口縁部は強く外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。周囲内面は、ヘラ仕上げによるナダ。内外曲軸上部接合痕がみられる。	F 区 D-Ⅲ-①
94-164	S F 7	*	14.1 18.5 16.2 —	底部は平底風の丸底。胴部の張りがないが、中位に最大径を有する。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面は表面が著しく不明。内面はヘラナダ調整。内面に粘土帶接合痕がみられる。	G 区 D-Ⅲ-① 口縁部、胴部外側に保付着。
* -165	IV' 罐	*	12.3 14.4 13.8 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有する。口縁部は外反する。	口縁部外面は、ヨコナデ。胴部外面は、ハケ仕上げ工具によるナダ及びヘラナダ調整。	G' 区 D-Ⅲ-① 外面に黒斑
* -166	Ⅳ-1 罐	*	13.3 11.5 13.5 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、球形を有する。頭部で屈曲し、口縁部は強く外反する。	口縁部内外面は、ハケ調整。表面のみナダが施される。胴部外側はハケ調整で、下部はナダで削されている。内面はナダ調整。	F 区 D-Ⅲ-①
* -167	S F 6	*	10.2 10.3 11.4 —	*	口縁部内外面はヨコナデ。外面に指頭圧痕が残る。胴部内外面はナダ調整。	*
* -168	S F 7	*	11.2 11.2 11.5 —	底部は平底風の丸底。胴部中位に最大径を有する。口縁部は強く外反する。	口縁部は、内外面ヨコナデ。胴部外面はヘラナダ調整。頭部内外面に指頭圧痕が残る。内面に粘土帶接合痕がみられる。	G 区 D-Ⅲ-① 外面に保付着。
* -169	B-2 罐	*	7.4 11.3 9.5 —	底部は尖底風の丸底。胴部中位に最大径を有する。口縁部は強く外反する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。胴部外面は、ナダ及びヘラナダ調整。内面はヘラナダ。	G 区 D-Ⅲ-①

辨認番号	遺物番号	器種	口径 底径 高さ (cm) 底径	形態・文様	手法	備考
94-170	S F 8	土器器裏	10.8 15.7 11.8 —	底部は厚く丸底。胴部中位に最大径を有するが、張りがない。口縁部はゆるやかに外反する。底部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	H区 D-III-② 底部外側に黒斑
*-171	S F 6	*	12.8 12.5 13.1 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有し、球形を呈する。口縁部は、ゆるやかに外反する。	口縁部は、ヨコナデ調整。胴部外側はナダ、内面は粘土帯接合部に指痕生板が残る。	F区 D-III-② 口縁部から胴上部にかけて保付着。
*-172	S F 7	*	11.6 18.4 13.4 —	底部は、厚く丸底。胴部中位に最大径を有するが、張りがない。口縁部は、外方に直線的に立ち上がり、端部は曲をなす。	口縁部外側は、ヨコナデ。胴部外側はハケ調整。胴部外側は、ヘラナデ及びナダ調整で、指痕圧痕が残る。内面はハケ及びヘラナデ調整。底面内面はヘラナデ。	C区 D-III-③ 口縁部から胴上部にかけて保付着。
*-173	S F 4	*	14.0 16.3 18.0 —	底部は丸底。胴部下位に最大径を有する。口縁部は強外反する。端部は丸くおさめる。	外側は、磨耗して不明。内面に一部ハケ調整。粘土帯接合部に指痕圧痕が残る。	C区 D-IV
*-174	Ⅳ-1層	*	11.8 16.7 16.2 —	底部は欠損。胴部下位に最大径を有する。口縁部は強く外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。外側に指痕圧痕が残る。内面に粘土帯接合部がみられる。	F区 D-IV
95-175	Ⅱ層	*	10.1 12.6 12.2 —	底部はなめらかに丸底。胴部下位に最大径を有する。口縁部ゆるやかに外反する。底部は丸くおさめる。	内外面磨耗が著しく調査不明内面粘土帯接合部に指痕圧痕が多く残る。	B区 D-IV
*-176	S F 6	*	15.0 19.2 17.3 —	底部は半平風の丸底。胴部中位に最大径を有する。頭部で強く追出し。口縁部は外反する。	口縁部外側は、斜位のハケの後ヨコナデ。底部はヨコナデ。内面は、横位のハケ。胴部外側は、横位、新設のハケ。底部は、ハケの後ナダ調整。	F区 胴部外側に保付着。
*-177	S F 5	*	13.8 19.5 19.2 —	底部は丸底。胴部中位に最大径を有する。張りがあり球形を呈する。頭部で強く追出し。口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	口縁部外側はヨコナデの内面は不明。胴部外側は、前位、斜位のハケ調整。内面は横位、斜位のハケ調整。	C区 E
*-178	Ⅱ層	*	— (9.0) —	口縁部と胴部下位から欠損。頭部外側に3条1単位とする構造を3巻、その下に列点文を配する。	内外面ナダ調整	B区
*-179	Ⅳ-1層	*	12.9 19.8 19.8 —	底部は半平風の丸底。胴部中位に最大径を有し、球形を呈する。張りで強く曲曲し。口縁部は外反する。	口縁部外側は、ヨコナデ。内面はヘラナデ。胴部外側はヘラナデ及びナダ調整。内面はヘラナデ。粘土帯接合部がみられる。	F区 E
*-180	*	*	17.8 (15.6) 6.7 —	底部は平底。胴部中位に最大径を有し、長卵形を呈する。口縁部は欠損。	胴部内外側は、ヘラナデ調整。底部外側に乱状の圧痕がつく。錐型土器である。	F区
*-181	S F 6	*	— (10.7) 6.2	底部は平底。胴部中位から口縁部にかけて欠損。長卵形を呈すると考えられる。	*	*

標本番号	遺物名	器種	口径 器高 底径 底径 底径	形態・文様	手法	備考
96-182	S F 3	土器	18.1 10.2 —	底部は平底風。丸底。体部は、内溝して外上方に立ち上がり。口縁部は、若干外反する。	外面は、磨耗が著しく不明。口縁部内面は、ヨコナデ。体底部内面は、ナデ調整で一部ヘラ削り。底部に径1.2cmの円孔が2ヶ所に穿たれる。	B区
* -183	S F 6	*	14.5 8.9 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	外面は、ヘラ状工具底部によるナデ。内面はヘラナデ。	F区
* -184	S F 4	*	— (4.7) —	底部は丸底。体部は外上方に内溝気味に立ち上がる。	内外面磨耗が著しいため不明。底部に径1.1cmの円孔が穿たれる。	C区
* -185	S F 6	*	15.4 11.2 —	底部は丸底。体部は、外上方に内溝して立ち上がり溝部にいたる。	口縁部外面は、ナデ調整。体部内外面は、ヘラナデ。口縁部内面に指頭圧痕が残る。底部に径2cmの円孔が穿たれる。	F区 体部外側に傷付着。
* -186	S F 7	*	15.0 10.7 —	断面は厚く丸底。体部は、外上方に内溝して立ち上がり。口縁部は上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	内外面ともにヘラナデ調整のヘラナデ痕が残る。底部に径2.5cmの椭円孔が穿たれる。	G区
* -187	*	*	— 3.65 —	底部は丸底の体部は外上方に立ち上がる。	内外面ともヘラナデ。底部に径0.7cmの円孔が1ヶ所穿たれる。	*
* -188	S F 6	*	17.0 12.3 —	体部は、内溝して外上方に立ち上がる。口縁部は外上方に内溝気味に立ち上がる。	外面は、擬似のヘラナデ。内面は、横位のヘラナデ。底部に孔が2ヶ所穿たれる。	F区
* -189	S F 7	*	— (4.7) —	底部は平底で、体部は外上方に直線的に立ち上がる。	外面はヘラ削り。内面はナデ調整。底部は多孔。	G区
* -190	*	*	23.8 13.3 —	体部外面に把手がつく。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外側は、斜位のヘラ調整。内面にヘラナデ調整。指頭圧痕が残る。	*
* -191	II型	*	9.7 5.2 —	底部は丸底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	外面は、磨耗して不明。底部内面に指頭圧痕が残る。	C区 A-1
* -192	IV-2型	*	10.7 5.2 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり。口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	外側は磨耗が著しく不明。内面はヘラナデ及び指頭圧痕が残る。	G'区 A-1
* -193	S F 6	*	10.6 5.2 —	底部は厚く丸底。体部は内溝気味に外上方に立ち上がり。口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	口縁部外面は、ヨコナデ。体部外面は、磨耗して不明。内面はヘラナデ調整。	F区 A-1
* -194	S X 5	*	10.9 6.3 —	*	全体的に磨耗が著しく不明。	G'区 A-1
* -195	S F 4	*	9.4 5.1 —	底部は平底。体部は内溝気味に、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。	体部内面は不定方向のヘラナデ。その他の磨耗して不明。	C区 A-1

辨認番号	遺傳者号	器種	口径 器高 器径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
96-196	Ⅲ層	土師器 柄	9.9 4.8 — 3.6	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	内面にハケ工具によるナゲ。その生は磨耗が著しく不明。	C区 A-II 黒斑
*-197	Ⅲ層上面	*	12.7 6.8 —	底盤は欠如。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。底部は丸くおさめる。	外面は磨耗が著しく不明。内面は斜位のハケ調整。	B区 B-I
*-198	S F 2	*	11.2 6.5 —	底部は丸底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内外曲磨耗が著しく不明。	*
*-199	S F 4	*	10.9 4.6 —	*	口縁部内外面は、ヨコナゲ。外面はヘラナゲ調整。	C区 B-I
*-200	*	*	10.2 6.9 —	底部は丸底。体部は内湾して外上方に、口縁部に内方へ内湾して立ち上がる。	体部外面に一筋ヘラナゲ。内面は磨耗が著しく不明。	*
*-201	S X 5	*	11.8 7.6 —	底部は丸底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	外面は、タタキが施される。	G'区 B-1
97-202	S F 7	*	10.2 7.7 —	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。底部は丸くおさめる。	内外面にハケ状工具によるナゲとヘラナゲ調整。	G区 B-II 外面に黒斑
*-203	*	*	10.5 5.9 4.1	*	外面にヘラナゲ及びナゲ調整内面は、ハケ状工具によるナゲ。	G区 B-II
*-204	S F 4	*	11.2 5.9 4.6	*	内外曲ともに磨耗が著しく不明。	C区 B-II
*-205	*	*	9.8 6.1 4.7	*	*	C区 B-II 底部外面に黒斑
*-206	*	*	10.6 5.6 4.5	底部は、平底。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	外面は、ナゲ調整で端頭圧板が残る。内面はヘラナゲ調整。	C区 B-II
*-207	*	*	9.8 6.3 4.5	*	*	*
*-208	S X 3	*	11.5 7.2 3.5	底部は平底。体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。底部は丸くおさめる。	外面は底部に横位のタタキが施される。内面は、斜位のハケ調整。	B区 B-II
*-209	Ⅳ層	*	12.2 7.4 —	底部は尖底。体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部から体部外所は、ヘラ削りで口縁部から体部にかけての内面は、ハケ調整である。	A区 B-III
*-210	Ⅳ層	*	11.7 7.3 —	底部は尖底。体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	外面は磨耗が著しく不明。内面は、体部の偏位。斜位のハケ目、底部がナゲ調整。	B区 B-II

博物番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 例往 例逆	口縁 器名 例往 例逆	形態・文様	手 法	備 考
97-211	S F 4	土師器 模	— — —	(9.4) — —	底部は丸底、体部は内湾気泡に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	全般的に磨耗して不明だが、内曲に指壓圧痕が残る。	C区 C-I
*-212	S F 7	*	13.1 7.8 —	— — —	底部は平底風の丸底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	外面は、ヘラナデ。内面はハケ状工具によるナデ。	C区 C-I 内外曲に黒斑。
*-213	S F 4	*	11.3 7.7 —	— — —	底部は平底風の丸底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	L1縁部内面は、ナデ調整。体部内面ヘラナデ。外面に指壓圧痕が残る。	C区 C-II
*-214	*	*	12.1 6.9 —	— — —	*	内外面に指壓圧痕が残る。	C区 C-II 口縁部外 面に黒斑。
*-215	II層	*	13.4 5.9 —	— — —	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、L1縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	全般的に磨耗して不明。内外面に指壓圧痕が残る。	E区 C-II
*-216	S F 8	*	12.9 8.2 —	— — —	底部は平底風の凹凸が激しい丸底である。体部は内湾気泡に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	内外面にヘラ状圧痕が残る。内面ナデ調整。	II区 C-II
*-217	S F 6	*	13.6 7.5 3.8	— — —	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は内上方に立ち上がる。	口縁部外面及び体部内面は、横位のヘラナデ。体部外面は縱位のヘラ先によるナデ。底部内面は、不定方向のヘラナデ。外面は、木漿文様が付着する。	F区 C-II
*-218	*	*	14.7 8.1 —	— — —	底部は丸底。体部は、内湾して外上方にいたり。口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	口縁部内面は、ヨコナデ。外面はその後指壓圧痕がつく。体部外面は、指壓及びヘラナデ。内面はヘラナデ。	*
*-219	*	*	11.1 8.9 —	— — —	底部は、平底風の丸底。体部は、全般的に上方に立ち上がり。口縁部は、施付している。	L1縁部は、内外面ナデ調整。外 面は、ヘラナデ及びヘラナデ。内面は、ヘラ状工具によるナデ。内面に熱土帶結合痕が残る。	F区 C-III
*-220	S X 3	*	16.9 8.5 —	— — —	底部はえ底。体部は、内湾気泡に外上方に大きく立ち上がり、L1縁部にいたる。	口縁部は、内外面のヨコナデ。外 面は、平底のタタキ。内面は、ヘラ状工具によるナデ。	B区 D-I, 体部外 面に黒斑。
*-221	S X 5	*	18.4 8.7 —	— — —	*	全般的に磨耗が激しい。外曲にタタキが残る。	G'区 D-I
*-222	*	*	15.5 8.1 —	— — —	*	内曲は磨耗が著しく不明。外曲全体にタタキが施される。	G'区 D-I 底部内面に黒斑。
*-223	*	*	16.9 7.4 —	— — —	*	全般的に磨耗が著しく不明	G'区 D-I 口縁部内面に黒斑
*-224	II-2層	*	15.5 6.8 —	— — —	*	*	G'区 D-II

押出番号	連機番号	器 像	口 横 法 番 器 高 (cm) 底 頂 頂	形 素 文 様	手 法	備 考
97-225	S F 6	土器器 例	18.2 (7.5) — —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部内面を曲げる。	口縁部外側は、ナデ調整。口縁部内面はヨコナガ。体部はヘラナデ。	F 区 D-I. 外面に保有者。
98-226	*	*	16.6 8.7 — —	底部は丸底。体部は内溝底に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面はヨコナガ。体部から底部にかけて外側はヘラナデ及びナデ調整。内面はヘラナデ。	F 区 D-II
*-227	瓦器	*	12.5 5.9 — —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。底部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナガ。体部外側はナデ調整。内面は、不安定方向のナデ及び指腹圧痕が残る。	A 区 E-I
*-228	S X 2	*	12.9 5.1 — —	底部は平底風の丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	外側磨耗して不明。	A 区 E-I. 底部外面に保有者。
*-229	S F 3	*	12.0 6.2 — —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	*	B 区 E-I
*-230	*	*	13.0 6.5 — —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。底部は丸くおさめる。	外側はナデ調整。その他は供耗して不明。	B 区 E-I 色調、棕色。
*-231	*	*	14.0 4.1 — —	底部は丸底。体部は内溝して大きく外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面磨耗して不明。	B 区 E-I
*-232	*	*	11.6 7.4 — —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	*	*
*-233	S F 2	*	13.2 5.3 — —	底部は平底風の丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。底部は丸くおさめる。	内外面磨耗して不明。	*
*-234	*	*	12.5 7.0 — —	*	*	*
*-235	S F 4	*	11.7 5.9 — —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナガ。内面はナデ調整。外側は不明。	C 区 E-I
*-236	*	*	12.6 5.6 — —	*	内外面磨耗が著しく不明。	*
*-237	*	*	12.6 6.6 — —	*	*	*
*-238	瓦器	*	12.9 5.7 — —	*	口縁部内外面は、ヨコナガ。外側は一筋上から下へラ削り。内面は横倒。到達のハケ調整。	*

被調査番号	流情番号	器種	計量 口径 背高 頭頂 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
98-239	S F 4	土器器 柄	12.2 5.5 —	底部は丸底。体部は内凹して外方に、口縁部は上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	内外面磨耗して不明。	C区 E-I
*-240	*	*	11.8 5.2 —	*	*	*
*-241	*	*	11.3 6.0 —	*	*	*
*-242	*	*	12.2 6.7 —	*	*	C区 E-I, 口縁部外 面に黒斑。
*-243	*	*	12.3 6.1 —	*	*	C区 E-I
*-244	*	*	12.2 6.6 —	*	*	*
*-245	*	*	13.5 6.5 —	*	*	C区 E-I, 内面に黒 斑。
*-246	日輪	*	13.2 6.2 —	底部外面は、横位。擬位のハケ 調整。	D区 E-I	
*-247	S F 6	*	13.6 6.7 —	底部は平底風の丸底。体部は内凹 して外方に、口縁部は上方に立 ち上がる。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体 部内外面は、ヘラナデ調整。	F区 E-I
*-248	*	*	15.7 5.8 —	底部は半底風の丸底。体部は内凹 気味に外上方へ大きくなっている。 口縁部にいたる。端部は丸くおさ める。	LII縁部外面、ヨコナデ。体部 から底部にかけて、ヘラナデ調 整。	*
*-249	*	*	12.3 5.8 —	底部は丸底。体部は内凹して外方に、 口縁部は上方に立ち上がる。 端部は丸くおさめる。	*	*
99-250	*	*	12.6 5.0 —	*	内外面磨耗して不明。	*
*-251	*	*	12.0 6.5 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。体 部から底部にかけて、ヘラナデ 調整。口縁部内面に指添圧痕が 残る。	F区 E-I 芯壁が厚い。
*-252	*	*	12.8 6.8 —	底部は丸底。体部は内凹して外上 方に大きく立ち上がり、口縁部は内傾す る。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。体部 から底部にかけて、ヘラナデ調 整。	F区 E-I
*-253	*	*	14.6 5.8 —	底部は丸底。体部は内凹して外上 方に大きく立ち上がり、口縁部に いたる。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体 部内外面は、ヘラナデ。内面はヘ ラナデ及びナデ調整。	*

採集番号	通称番号	器種	口径 器高 幅厚 (mm)	形態・文様	手法	備考
99-254	S F 6	土器器種	14.8 5.3 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方へ大きく立ち上がり、口縁部にいたる。	体部内面は、ヘラナデ調整。その他は磨耗して不明。	F区 E-I
*-255	*	*	13.4 7.3 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方へ立ち上がり、口縁部は上方に立ち上がる。縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部は、ヘラナデ及び指屈圧痕が残る。体部内面は、ヘラナデ及び一部指痕が残る。	*
*-256	*	*	13.0 6.0 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部外側は、ヘラナデ。内面はナデ調整。	*
*-257	*	*	12.8 6.2 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部外側は、ナデ。内面はヘラナデ調整。	*
*-258	*	*	13.2 5.9 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部外側は、横位。斜位のハケ。縁部はヘラナデ調整。体部内面はヘラナデ調整。	*
*-259	*	*	12.5 5.9 —	底部は厚く丸底。体部は、内溝して外上方に立ち上がり。口縁部にいたる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部外側は、ナデ及び指屈圧痕が残る。内面はヘラナデ調整。	*
*-260	*	*	13.2 6.6 —	底部は平底風の丸底。体部は、内溝して外上方に立ち上がる。口縁部は上方に立ち上がる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部外側は、ヘラナデ。底部外側は、ナデ調整。	*
*-261	*	*	12.5 6.9 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部は、内側する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部内外面は、ハケの後ナデ調整。底部外側はナデ調整。	*
*-262	*	*	11.0 5.8 —	底部は平底風の丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。縁部は丸くおさめる。	口縁部は、内外面ヨコナデ。体部内面は、ヘラナデ。外側は磨耗して不明。	*
*-263	N-1号	*	12.0 6.3 —	*	口縁部は、内外面ヨコナデ。体部外側は、ヘラナデ。内面は、ナデ及びヘラナデ調整。	*
*-264	S F 6	*	13.4 6.0 —	底部は尖底風の丸底。体部は内溝気溝に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部内外面は、ヘラナデ調整。	*
*-265	*	*	11.8 5.5 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部内面は、ヘラナデ。外側は磨耗して不明。	*
*-266	*	*	12.7 5.6 —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部内面は、ナデ調整。外側は磨耗して不明。	*
*-267	S F 7	*	11.5 6.1 —	*	*	G区 E-I

辨認番号	遺構部分	器種	法量 (cm)	口縁 器底 脚部 底径	形態・文様	手法	備考
99-268	S F 7	土師器 瓶	11.7 —	(6.0) —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部は内傾する。	内外面ナデ調整。	G区 E-I
*-269	*	*	12.3 5.8 —	—	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部は上方に立ち上がる。 底部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。 外面及び内面はナデ調整。	*
*-270	*	*	12.1 6.1 —	—	底部は丸底。体部は内溝して外上方にやや内傾して立ち上がる。 底部は丸くおさめる。	*	*
*-271	*	*	11.4 5.9 —	—	*	*	*
*-272	Ⅳ-2層	*	10.4 6.1 —	—	底部は丸底。体部は、内溝部に外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。 底部は丸くおさめる。	内外面ナデ調整	*
*-273	S F 7	*	12.9 4.2 —	—	*	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面はナデ調整。	*
100-274	Ⅴ-2層	*	13.8 5.5 —	—	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。 底部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	G'区 E-I
*-275	Ⅲ層	*	14.3 (4.9) —	—	底部は丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。 底部は丸くおさめる。	*	J区 E-I
*-276	S F 6	*	12.0 6.0 —	—	*	口縁部外面は、ヨコナデ。内面にヘラ仕痕が残る。	F区 E-I
*-277	*	*	13.4 5.8 —	—	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	*	*
*-278	S F 9	*	11.2 5.6 —	—	*	内面はハケ調整。外面は磨耗して不明。	E区 E-I
*-279	S F 8	*	12.4 5.5 —	—	底部は平底窓の丸底。体部は内溝して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	内外面磨耗が著しく不明。	H区 E-I
*-280	Ⅱ層	*	14.1 5.3 —	—	底部は平底窓の丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	H区 E-II 外面に黒斑。
*-281	S F 3	*	13.3 6.0 —	—	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	内外面磨耗が著しく不明。	B区 E-II 底部外層に一部黒斑。
*-282	*	*	14.8 5.5 —	—	*	*	B区 E-II

押送番号	運送会員	器種	法量 (ml)	口経器高 器径 底径	形態・文様	手法	備考
100-283	S F 4	土器器 械	12.5 6.3 —	底部は平底風の丸底。体部は内溝 気球に外上方に立ち上がり、口経部は、外反する。	口経部内外面は、ヨコナデ。内 面は、ハケ調整。外面は消耗が 著しく不明。	C区 E-II	
*-284	日曆	*	13.1 6.7 —	*	内外面消耗が著しく不明。	*	
*-285	S F 4	*	13.9 6.3 —	底部は丸底。体部は内溝して外と 方に立ち上がり。口経部は外反す る。	底部内面に折線圧痕が残る。内 外面消耗して不明。	*	
*-286	S F 6	*	10.6 5.5 —	底部は平底風の丸底。体部は内溝 して外上方に立ち上がり、口経部は 外反する。	口経部は、内外面ヨコナデ。体 部内面は、ナゲ調整。底部外面は ヘラナデ調整。	F区 E-II	
*-287	西-1層	*	13.3 6.9 —	*	口経部は、内外面ヨコナデ。体 部内外面は、ヘラナデ調整。	*	
*-288	S F 6	*	10.6 5.7 —	底部は平底風の丸底。体部は内溝 して外上方に立ち上がり。口経部は 内傾し、端部は上方に屈り立ち 上がる。	全体的に消耗が著しく不明。	F区 E-II 黄褐色の 着色された胎土。	
*-289	*	*	13.1 6.4 —	底部は丸底。体部は内溝して外と 方に立ち上がり。口経部は外反す る。	口経部は、内外面ヨコナデ。体 部外面は、ヘラナデ及び折線压 痕が残る。内面はヘラナデ調整。	F区 E-II	
*-290	日曆	*	13.5 11.6 —	底部は平底風の丸底。体部は内溝 して外上方に立ち上がり、口経部は 「く」の字状に外反する。	全体的に消耗が著しく不明。	*	
*-291	S F 7	*	13.8 5.8 —	底盤は平底風の丸底。体部は内溝 して外上方に立ち上がり、口経部で内傾し、端部は上方につまみあ げられている。	口経部内外面はヨコナデ。内 面はハケ状工具によるナデ。	G区 E-II 外面に黒斑。	
*-292	西-2層	*	12.7 6.0 —	底部は丸底。体部は内溝して外と 方に立ち上がり。口経部は若干外 反する。端部は丸くおさめる。	口経部内外面はヨコナデ。内 面にヘラ圧痕が残る。	G区 E-II	
*-293	日曆	*	8.2 6.2 4.7	脚台は短く「ハ」の字状に貼付され る。体部は、内溝して外上方に立 ち上がる。口経部はやや内傾する。	口経部内面はナデ調整。その他 は全体的に消耗が著しい。高台 外面に指痕圧痕が残る。	C区 B-I	
*-294	S F 4	*	11.2 5.5 7.0	脚台は「ハ」の字状に大きく開く。 体部は内溝気球に外上方に立ち上 がる。端部は丸くおさめる。	高台部外面に折線圧痕とナゲ調 整。機器は全体的に消耗して不 明。	C区 A-II	
*-295	*	*	11.6 9.9 7.1	脚台は、「ハ」の字状に大きくな く開く。体部は内溝気球に外上方に立 ち上がる。端部は丸くおさめる。	全体的に消耗が著しく不明。	C区 B-I 口経部外面に黒斑。	
*-296	*	*	(7.7) 9.1	脚台は、「ハ」の字状に大きくな く開く。体部は内溝気球に外上方に立 ちがる。	*	C区 B-I	

拂拭番号	遺構番号	部種	法量 器高 (cm) 底径 底径 底径	形態・文様	手法	備考
100-297	S F 7	土器 脚付楕	11.6 8.5 — 5.9	脚台は、「ハ」の字状に聞く。体部は内済して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	高台部外面は、指擦圧痕が残る。口縁部外面は、ヨコナデ。体部外面はナデ。内面はヘラナデ調整。	C区 B-1
101-298	W-2層	* *	11.9 (7.3) — —	脚台部欠損。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は、やや内傾し上方に立ち上がる。	口縁部はヨコナデ。その他は磨耗して不明。	G'区 B-1
*-299	S F 4	*	* (8.3) — 5.6	脚台は、「ハ」の字状に聞く。体部は内済気味に外上方に立ち上がる。	高台部外面に指擦圧痕が残る。全体的に磨耗が著しく不明。	C区 B-II
*-300	II層	* *	11.3 7.5 — 6.4	脚台は、「ハ」の字状に大きく聞く。体部は内済気味に外上方に立ち上がる。	口縁部内外面は、指擦圧痕。体部外面は、ヘラナデ及び指擦圧痕。内面はヨコナデ調整。	F区 B-II
*-301	S F 6	* *	13.3 7.8 — 7.6	脚台は、大きく「ハ」の字状に聞く。体部は、内済気味に外上方に立ち上がる。端部は凹取る。	口縁部は、ヨコナデの後、ヘラナデ調整。体部内外面は、ヘラナデ。高台部外面ヘラナデ。端部はナゲ調整。	*
*-302	S F 3	* *	16.4 8.7 — 9.4	脚台は高く。「ハ」の字状に大きく聞く。体部は内済して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	B区 C-1
*-303	S F 6	* *	15.0 9.4 — 10.7	脚台は高く、「ハ」の字状に大きく聞く。体部は内済して外上方へ立ち上がり。口縁部にいたる。	口縁部は内外面ヨコナデ。体部内面はヘラナデ及びナゲ調整。外表面は磨耗して不明。	F区 C-1
*-304	S F 7	* *	13.3 10.0 — 8.5	脚台は高く、「ハ」の字状に大きく聞く。体部は内済して外上方へ立ち上がり。口縁部は内傾し、上方に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナデ。体部内外面ハケ状工具によるナゲ。	G区 C-1
*-305	S F 3	* *	14.9 10.2 — 11.8	脚台は高く、「ハ」の字状に大きく聞く。体部は内済して外上方へ立ち上がり。口縁部は内傾し、上方に立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	B区 C-II
*-306	S F 4	* *	13.9 9.0 — 18.8	脚台は厚く「ハ」の字状に大きく聞く。体部は、内済して外上方に、口縁部は上方に立ち上がる。	高台部外面は、ナゲ調整。体部は磨耗して不明。	C区 C-II
*-307	Ⅲ層	* *	15.6 8.6 — 3.6	脚台は、短く「ハ」の字状に聞く。体部は内済して外上方に立ち上がり。口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しく不明。	T R 20 C-II
*-308	S F 7	* 高杯	21.8 16.0 — 14.8	柱状部は、下方へいくに従って広がり、端部は屈曲して水平に聞く。杯部は、下で口を有し、杯底は外上方に立ち上がり。口縁部は外反する。端部は凹取る。	口縁部から体部にかけてヨコナデ調整。底部内面は、不定方向のナゲ。端部はナゲ調整。底部内面は、ヘラ削り。	G区 A-1
*-309	S F 6	* *	23.3 14.3 — 13.4	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。体部はナゲ調整。端部は、ヨコナデ調整。	F区 A-II

種同番号	遺構番号	器種	法量 (cm) 器内 制作 底径	形態・文様	手 法	備 考
101-310	S F 3	土器 高杯	21.9 13.8 13.4	柱状部は、下方へいくに従って広がり、縁部は屈曲して水平に弧く聞く。杯部は、底部中位に棱を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸取る。	全体的に磨耗が著しく不明。	B 区 A - II
102-311	S F 2	*	18.6 (13.7) —	柱状部は、下方にいくに従って広がり、縁部は外反する。杯部は下方に棱を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。縁部は丸くおさめる。	体部は内外面ヨコナデ。その他の不明。	B 区 B - I
* - 312	S F 5	*	19.6 (7.5) —	脚部は欠損。杯部は、下半に棱を有し、屈曲して体部は外上方に立ち上がる。口縁部は若干外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	C 区 B - I
* - 313	*	*	17.3 14.5 12.2	柱状部は、下方に広がり、縁部は屈曲して狭く聞く。杯部は下半で屈曲し棱を有する。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	*
* - 314	S F 6	*	18.1 14.0 11.0	柱状部は、下方に広がり、縁部は屈曲して狭く聞く。杯部は下半で棱を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は若干外反する。	体部内外面は、ヨコナデ。縁部内面は、ヘラナデ。縁部外面はナデ。内部はヘラナデ調整型。縁部内面はヨコナデ。	F 区 B - I
* - 315	N - 1番	*	18.0 15.5 12.0	*	杯部内外面は、ヨコナデ。脚部外側は、ナデ調整、内面はヘラ削り。縁部内面はヨコナデ及びヘワナデ調整。	*
* - 316	*	*	13.8 13.7 10.3	*	杯部内外面は、ヨコナデ。脚部外側はナデ。内面はヘラ削り。縁部外側に一部ヘラナデが認められる。	G 区 B - I
* - 317	S F 6	*	19.1 16.6 12.9	柱状部は、下方に広がり縁部は屈曲して狭く聞く。杯部は下半に棱を有し、体部は内渦して外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。	体部内外面は、ヨコナデ。一部ヘラナデが認められる。脚部は外側縫合部のヘナデ。内面はヘラ削り。縁部は外側ナデ、内面はヨコナデ調整。	F 区 B - II
* - 318	S F 7	*	17.2 14.7 12.5	*		G 区 B - II
* - 319	S F 4	*	15.0 9.2 11.0	柱状部は、下方に広がり縁部は屈曲して狭く聞く。杯部は下半に棱を有し、体部は外上方に外反して立ち上がり、口縁部にいたる。縁部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	C 区 C - I
* - 320	*	*	17.0 (8.0) —	脚部は欠損。杯部は下半に棱を有し、体部は外上方に外反して立ち上がり、口縁部にいたる。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけてヨコナデ。施縫内面は一部ヘラナデ。	*
* - 321	S F 2	*	18.9 (6.5) —	脚部は欠損。杯部は下半に棱を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は若干外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	B 区 C - I

標本番号	通査番号	器種	法量 (cm) 底径 高さ	口経 器高 底径	形態・文様	手法	備考
102-322	S F 6	土師器 高杯	18.9 11.8 — 11.4	柱状部は、下方に広がり縁部は屈曲して、ほぼ水平に開く。杯部は、下半に梗を有し体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は大きく外反する。	口縁部から体部にかけて、ヨコナダ。底部内外面はナデ調整。柱状部外表面は擬位のヘラナダ。内面は縦拉のヘラ削。縁部は内外面ヨコナダ。	F区 C-I	
103-323	*	*	18.5 11.6 — 11.3	柱状部は、下方に広がり縁部は屈曲して、水平に開く。杯部は、下に梗を有し体部は、外反して、口縁部にいたる。縁部は面取る。	口縁部内面から外面向けてヨコナダ。体部内面はヘラナダ。柱状部は、ヘラ削り。縁部はヨコナダ調整。杯部底面にはハケ調整。	*	
*-324	*	*	17.5 11.8 — 10.4	柱状部は、下方に広がりをみせ、縁部は、屈曲して水平に近く開く。杯部は、下半に梗を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナダ。底部内外面は、ナデ調整。縁部内面は、ハケ状工具によるナデ調整。	*	
*-325	*	*	19.2 12.5 — 11.6	柱状部は下方にいくに従ってやや広がり、縁部は水平に近く開く。杯部は、下半に梗を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。縁部は丸くおさめる。	全体的に網目が審しく不明。	*	
*-326	Ⅳ-1層	*	16.4 11.5 — 10.3	柱状部は、下方にいくに従って広がり、縁部は屈曲して開く。杯部は、下半に梗を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナダ。底部内面、縁部外面はナデ調整。底部内面は、横位のヘラ削り。	*	
*-327	S F 6	*	16.5 (6.9) —	脚部は欠損。杯部は下に梗を有する。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縁部は丸くおさめる。	口縁部内外面は、ヨコナダ。体部から底部にかけて内外面はナデ調整。	*	
*-328	*	*	17.2 11.8 — 10.7	柱状部は、下方にいくに従って広がり、縁部は屈曲してハサの字型に開く。杯部は、下半に梗を有し、体部は直線的に外反して立ち上がり、口縁部にいたる。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけてヨコナダ。底部は内外面ナデ調整。柱状部外表面はナデ調整。内面はヘラ削り。縁部はヨコナダ及びナデ調整。	*	
*-329	*	*	18.3 (11.3) — 10.7	柱状部は、下方にいくに従って大きく広がり、縁部は屈曲して水平に近く開く。杯部は、下半に梗を有し、体部は直線的に外反して立ち上がり、口縁部にいたる。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけてヨコナダ。底部内面はヘラナダ。脚部外面はナデ調整。	*	
*-330	*	*	19.6 (8.2) —	脚部は、欠損。杯部は下に梗を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナダ。底部内外面はナデ調整。	*	
*-331	Ⅳ-2層	*	18.0 12.3 — 11.8	柱状部は、下方にいくに従って広がり、縁部は屈曲し、水平に近く開く。杯部は、下半に梗を有し、体部は外方に外反して立ち上がり口縁部にいたる。縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナダ。脚部内外面はナデ調整。	G'区 C-I	

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 周径 底径	形態・文様	手 法	備 考
103-332	西-2層	土葬器 高杯		18.3 13.2 — 12.2	柱状部は、下方にいくに従って広がり、杯部は細直し水平に開く。杯部は、下井に狭い縫を有し、体部は外反して外上方に立ち上がる。縫部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、内外面ヨコナデ調整。縫部は、ナガ調整。内面はヘラ削り。	C'区 C-I
*-333	S F 6	*		18.3 (6.1) —	脚部は欠損。杯部は、下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縫部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナデ。底部内面はヘラナダ調査。	F区 C-I
*-334	S F 2	*		16.2 (6.4) —	*	全体的に磨耗が著しく不明。	B区 C-II
*-335	S X 2	*		15.4 (3.9) —	柱状部は下方に広がりを有する。杯部は、下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	A区 C-II 口縁部外面に黒斑。
*-336	S F 3	*		16.4 (6.6) —	脚部は欠損。杯部は下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	B区 C-II
*-337	S F 2	*		18.7 (9.8) —	柱状部は下方に広がりを有する。杯部は、下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	*
*-338	S F 5	*		17.3 (6.3) —	脚部は欠損。杯部は下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	*	C区 C-II 口縁部外側に黒斑。
104-339	E層	*		— (9.4) 13.1	杯部は欠損。柱状部は下方に広がりを有し、杯部は屈曲し狭く密く。	*	C区 C-II
*-340	S F 6	*		18.0 (6.9) —	脚部は欠損。杯部は、下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけてヨコナデ。底部内面は不明。外側はヘラナダ調整。	F区 C-II
*-341	N-1層	*		18.0 11.5 — 12.3	柱状部は短く下方にやや広がる。杯部は屈曲し、水平に近く開く。有部は、下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縫部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけてヨコナデ。底部内面は、ナガ調査。 柱状部外面は一部ハケ、内面はヘラ削り。縫部はヨコナデ調整。	*
*-342	S F 6	*		17.0 13.4 — 11.3	柱状部は長く下方にやや広がる。杯部は屈曲し、水平に近く開く。有部は、下半に長い縫を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。縫部は丸くおさめる。	口縁部外側はヨコナデ。全体的に磨耗が著しく不明。	*
*-343	N-1層	*		17.0 13.3 — 10.5	柱状部は「ハ」の字状に開き杯部にいたる。杯部は、下半に凹状の窪みを有する。体部から外反して外上方に立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナデ。その他の磨耗して不明。	*

辨別番号	遺傳者名	器種	法量 (cm) 脛高 脚径	形態・文様	手法	備考
104-344	S F 6	上部唇 高杯	16.9 12.2 — 10.7	柱状部は、下方に広がりをみせ屈曲して腹部にいたる。柱部は鈍い稜を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面及び体部外側はヨコナデ。底部内面はヘラナデ。脚部外面は、ナナ調整。内面はヘラ削り。腹部はヨコナデ。	F区 C-II
* - 345	*	*	17.7 14.9 — 11.1	柱状部は、下方に広がりをみせ屈曲して腹部にいたる。柱部は下すに凹状の瘤みを有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部から体部外側はヨコナデ。底部内面は、ヘラナデ。脚部は内面がヘラ削り。その他のナナ調整。	*
* - 346	IV-1層	*	17.4 (6.4) — —	脚部は欠損。体部下半に鈍い棱を有し、体部は、外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。瘤部は丸くおさめる。	口縁部から体部外側にかけてヨコナデ調整。	F区 C-II 口縁部外側に保付石。
* - 347	IV-1層	*	17.2 13.0 — 11.0	柱状部は、下方に広がりをみせ屈曲して腹部は聞く。柱部は、下半に鈍い稜を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。瘤部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、内外面ヨコナデ。内面は磨耗して不明。脚部外側はナナ調整。内面はヘラ削り。腹部は内外面ヨコナデ調整。	F区 C-II
* - 348	IV-2層	*	18.0 11.2 — 11.0	柱状部は、「ハ」の字形に開き、腹部は屈曲して、水平に近く聞く。柱部は下半に棘を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。瘤部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、内外面ヨコナデ。両部はナナ調整で、内面はヘラ削り。	G'区 C-II
* - 349	S F 6	*	16.1 (7.3) — —	脚部は欠損。部は、下半に棱を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。瘤部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はヘラによるヨコナデ。底部内外面は、ヘラナデ調整。	F区 C-II
* - 350	IV-2層	*	19.0 13.0 — 11.6	柱状部は、下方に広がりをみせ、腹部は屈曲して、水平に聞く。柱部は、下半に鈍い稜を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。瘤部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	G'区 C-II
* - 351	*	*	15.9 (7.9) — —	脚部は欠損。部下半に鈍い棱を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。	口縁部から体部にながけて、ヨコナデ調整。腹部内面は、不定方向のナナ。	G区 C-II
* - 352	S F 7	*	17.0 (11.0) — —	柱状部は、下方に広がりをみせる。柱部は、下半に鈍い稜を有し、体部は外上方に立ち上がり口縁部は外反する。瘤部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナデ調整。腹部内面は不定方向のナナ調整。脚部外側はナナ、内面はヘラ削り。	
* - 353	S F 6	*	12.8 9.3 — —	柱状部は、柱部は欠損。柱部は内凹して、外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。瘤部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ。その他は、磨耗が著しく不明。	F区 C-II
105-354	S F 7	*	17.9 13.2 — 13.2	柱状部は、「ハ」の字形に下方に下方に開き、腹部は屈曲して水平に聞く。柱部は、下半に鈍い稜を有し、口縁部は外反する。瘤部は丸くおさめる。	体部から口縁部にかけて、内外面ヨコナデ。脚部外側は、ヘラナデ及びナナ調整。内面はヘラ削り。	G区 C-II

辨認番号	遺傳番号	器種	法量 (cm)	口縫 器高 器深 径	形態・文様	手 法	備 考
105-355	IV-2層	土器器 高杯		17.2 11.1 — 9.9	柱状部は、「ハ」の字状に下方に広がり、基部は屈曲して水平に開く。杯部は、下半に無い様を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縫部は外反する。端部は丸くおさめる。	口縫部から体部にかけて、ヨコナゲ調整。底部内面は、不定方向のナゲ調整。脚部はナゲ調整。内面はヘラ削り。	G'区 C-II
*-356	S F 7	*		18.3 12.8 — 12.4	柱状部は、下方にやや広がりをみせ、底部は屈曲して水平に近く開く。杯部は、下半に無い様を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縫部は外反する。	口縫部から体部にかけて、ヨコナゲ調整。底部内面は、ハツ仕度が残る。脚部はナゲ調整内面はヘラ削り。	G区 C-II
*-357	*	*		18.4 11.7 — 11.5	柱状部は、「ハ」の字状に下方に広がり、基部は屈曲して水平に開く。杯部は、下半に無い様を有し、体部は外上方に立ち上がり、口縫部は外反する。	口縫部から体部にかけて、ヨコナゲ調整。底部内面はナゲ調整。脚部はナゲ調整で、内面はヘラ削り。	*
*-358	裏器	*		18.2 6.3 —	脚部は欠損。体部は内済して外上方に立ち上がり、口縫部は外反する。端部は丸くおさめる。	全般的に磨耗が著しいが、口縫内外面は、ヨコナゲ。	F区 C-II
*-359	S F 1	*		(8.4) — 10.3	杯部は欠損。脚部は、「ハ」の字状に開き、底部は屈曲して弱く。	全般的に磨耗が著しく不明。	A区 C-III
*-360	S F 3	*		16.2 13.1 — 10.1	柱状部は、下方に広がりをみせ底部は屈曲して、「ハ」の字状に開く。体部は、下半に圓状の痛みを有し、体部は内済して外上方に立ち上がる。	*	B区 C-III
*-361	*	*		(9.1) — 10.6	杯部は欠損。柱状部は、下方に広がりをみせ、底部は、屈曲して水平に開く。	脚部内面は、擦傷のヘラ削り。外面は磨耗が著しく不明。	B区
*-362	*	*		17.3 12.2 — 11.3	脚部は切く「ハ」の字状に下方に広がる。底部は屈曲して同時に開く。杯部は、内済して外上方に立ち上がり、口縫部は若干外反する。	全般的に磨耗が著しく不明。	B区 C-II 体部外側と、脚部外側に擦傷。
*-363	*	*		18.0 (16.5) —	脚部欠損。杯部は内済して外上方に立ち上がり、口縫部は若干外反する。	*	B区 C-III 口縫部外側に擦傷。 器壁が薄い。
*-364	S F 5	*		16.9 (6.8) —	脚部欠損。杯部は内済気味に外上方に立ち上がり、口縫部にいたる。	*	C区 C-II
*-365	S F 6	*		17.6 (7.8) —	*	*	F区 C-II
*-366	*	*		16.4 13.6 — 10.4	脚部は、「ハ」の字状に下方に開く。杯部は、内済気味に外上方に立ち上がり、「腰部にいたる。端部は丸くおさめる。	口縫部内外面はヨコナゲ。体部外表面は、弱位のナゲ及びヘラナゲ調整。脚部は外輪、ナゲ調整。内面は土器接合痕が確認でき、施釉圧痕が残る。	F区 D-II

博団番号	遺物番号	器種	法量 (cm) 器底 底径 底厚	形態・文様	手法	備考
105-367	S F 6	土器 高杯	16.9 10.7 — 11.8	脚部は短く、「ハ」の字状に下方に開く。杯部は、内凹して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。 底部は丸くおさめる。	口縁部から体部にかけて、ヨコナデ。脚部内面は、横位のヘラ削り及びヘラナデ。	F区 D-I
* -368	S F 7	*	-- (6.9) — 12.8	脚部は、窓「ハ」の字状に下方に開く。杯部は、内凹して外上方に立ち上がる。	杯部、脚部ともナデ調整。	G区 D-II
106-369	S F 4	手型土器	4.3 3.7 —	底部は丸底。体部は内溝丸味に上方に立ち上がる。	内外面指頭圧痕が残る。	C区 A-I-①
*	370	*	3.5 3.9 —	*	*	*
*	371	*	5.2 4.1 —	底部は丸底。体部は外上方に内凹して立ち上がる。	*	*
*	372	*	4.8 3.3 —	底部は丸底。体部は上方に内凹して立ち上がる。	*	*
*	373	*	4.9 4.0 —	底部は丸底。体部は外上方に内凹して立ち上がる。	*	*
*	374	*	3.7 3.4 —	*	*	*
*	375	*	4.6 3.3 —	*	*	*
*	376	口器	4.0 3.7 —	底部は丸底。体部は内溝して上方に立ち上がる。	*	*
*	377	S F 4	4.3 1.9 —	*	*	*
*	378	*	5.7 4.4 —	底部は丸底。体部は内溝して外上方に立ち上がる。	*	*
*	379	S F 5	5.5 5.0 —	底部は丸底。体部は内凹して上方に立ち上がる。	*	*
*	380	S F 6	4.5 3.6 —	*	*	F区 A-I-①
*	381	*	3.3 3.4 —	*	*	*
*	382	N-1層	3.9 6.6 —	*	*	*
*	383	S F 8	4.4 3.7 —	*	*	H区 A-I-①
*	384	N-2層	4.3 2.6 —	底部は丸底。体部は外上方へ立ち上がる。	*	G区 A-I-①

標本番号	構造番号	器種	法長 口径 高さ 底径 底深 (cm)	形態・文様	手法	備考
106-385	Ⅱ-2番	土器器 手捏入器	5.4 4.7	底部は丸底。体部は外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面に指擦圧痕が残る。	C'区 A-I-(①)
△-386	Ⅱ層	*	4.2 3.6	*	*	C IX A-I-(①)
△-387	*	*	3.9 4.1	底部は丸底。体部は上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	底部外側にタキが施される。	T R 12 A-I-(①)
△-388	S F 4	*	6.7 4.4	底部は丸底。体部は上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	内外面に指擦圧痕が残る。	C区 A-I-(③)
△-389	*	*	6.4 5.6	底部は丸底。体部は内側して上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	*
△-390	*	*	5.3 5.5	*	*	*
△-391	*	*	6.1 5.2	*	*	*
△-392	*	*	(5.1)	*	*	*
△-393	*	*	4.6 5.3	*	*	*
△-394	Ⅱ層	*	5.8 5.1	*	*	*
107-395	S F 4	*	5.6 5.8	*	*	*
△-396	*	*	(4.6)	*	*	*
△-397	*	*	6.3 5.4	*	*	*
△-398	*	*	5.3 4.9	*	*	*
△-399	*	*	6.1 5.2	*	*	*
△-400	S X 2	*	6.9 4.1	底部は丸底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は貼付される。	外側にヘラの圧痕。 内側は指擦圧痕が残る。	A区 A-I-(③) 底部外面に付着
△-401	Ⅱ層	*	6.4 4.2 3.5	平底で台状の底部。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面は指擦圧痕が残る。	C区 A-II-(①)

番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
107-402	S F 4	土器 手捏土器	6.0 5.3 — 4.0	平底で台状の底部。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。縫合部は窓眼。	体部内面は一部ヘラナダ。 外側は指痕圧痕が残る。	C区 A-II-①
*-403	*	*	5.1 4.3 — 3.0	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	内外面指痕圧痕が施される。	C区 A-II-②
*-404	*	*	4.7 3.6 — 3.2	底部は平底。体部は直線的に上方に立ち上がる。	*	*
*-405	吉-1層	*	5.2 5.5 — 3.7	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	指痕圧痕が残り、ナデ調整。	F区 A-II-③
*-406	S F 4	*	6.1 4.9 — 4.5	「ノ」の字形に開く台底。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	台状部外側に指痕圧痕が多く残る。	C区 A-Ⅲ
*-407	*	*	7.1 5.6 —	底盤は丸底。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面は指痕圧痕が残る。	C区 B-I-①
*-408	S F 6	*	6.5 3.7 —	*	*	F区 B-I-①
*-409	日輪	*	7.8 4.3 —	*	内外面は横位のハケ調整。	E区 B-I-①
*-410	S F 4	*	6.8 5.6 —	*	内外面に指痕圧痕が残る。	C区 B-I-①
*-411	*	*	6.9 6.1 —	底部は丸底。体部は内湾して上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	*	C区 B-I-② 底部外側に黒斑
*-412	*	*	6.9 5.3 —	*	*	C区 B-I-②
*-413	*	*	6.8 4.8 —	*	*	*
108-414	S F 5	*	7.0 7.0 — 4.0	底部は平底。体部中央で外反して口縁部にいたる。	内外面に指痕圧痕が残る。内面に粘土帯接合痕が残る。	*
*-415	S F 4	*	— 5.8	底盤は丸底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	内外面に指痕圧痕が残る。	C区 B-I-② 底部外側に黒斑
*-416	*	*	7.9 4.7 —	*	*	C区 B-I-②
*-417	S F 6	*	7.3 6.5 —	*	口縁部内外面はヨコナダ。内面はヘラナダ。外面はナデ及びヘラナダ調整。	F区 B-I-③

標本番号	遺傳番号	器種	法量 口径 器高 側剖 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
108-418	S F 4	土縁部 手挖土器	6.3 4.8 — 3.0	底部は平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面は指頭圧痕が残る。内面はヘラナデ。	C区 B-II-①
*-419	*	*	7.6 4.8 — 3.3	*	内外面は指頭圧痕が残る。	*
*-420	*	*	6.8 5.8 — 2.5	底部は平底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面は下から上へ指頭圧痕が残る。	C区 B-II-① 外面に壓痕。
*-421	S F 6	*	7.2 5.9 —	*	外側はナゲ調整。内面は指頭による深いナゲ。	F区 B-II-①
*-422	E 壺	*	7.6 6.9 — 3.7	*	内面に指頭圧痕が残るが、全体的に消耗して不明。	D区 B-II-①
*-423	S F 8	*	8.3 4.5 — 4.1	底部は平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にヘラ状工具による圧痕がつく。他は指頭圧痕が残る。	H区 B-II-③
*-424	S F 4	*	6.9 5.9 — 4.3	底部は平底。体部は内湾して上方に立ち上がる。口縁部は外反する。	内外指頭圧痕が残る。	C区 B-II-③
*-425	*	*	6.2 5.7 — 4.7	底部は平底。体部は上方に立ち上がり、貼付口縫を有する。	*	C区 B-II-④ 外面に無痕
*-426	*	*	6.3 6.2 — 3.5	*	*	C区 B-II-④
*-427	N-I 壺	*	8.4 4.7 — 4.5	高台状の底部。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面はハケ調整。外側はヘラナゲ調整。	F区 B-III
109-428	S F 4	*	8.7 9.2 —	底部は丸底。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反して上方に立ち上がる。	体部内面に指頭圧痕。口縁部内面から外面にナゲ調整。	C区 C-I-①
*-429	*	*	8.3 8.7 —	底部は丸底。体部は内湾して上方に立ち上がる。口縁部はやや外反して貼付口縫。	内面は粘土層結合痕がみられる。外側は指頭圧痕が残る。	C区 C-I-②
*-430	*	*	8.7 6.0 — 4.7	底部は丸底。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	内外面に指頭圧痕が残る。	C区 C-II-①
*-431	S F 7	*	9.4 4.8 — 4.3	底部は平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面にヘラ状压痕。	G区 C-II-②
*-432	S F 4	*	10.2 6.6 — 4.3	底部は平底。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。内面に貼付する口縫部を有する。	体部外側にヘラナデ。全体的に消耗が著しく不明。	C区 C-II-③
*-433	S F 6	*	8.5 (6.2) —	高台状の底部を有する。体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	内外面に指頭圧痕が残る。	F区 C-III

標本番号	遺傳番号	器種	法老 （cm）	形態・文様	手 法	備 考
109-434	S P 6	上部器 手裡土器	6.0 8.1 —	底部は厚く丸底。体部は内溝して上方に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部は内外面ヨコナデ。内外面はナデ調整。体部上位に径5mmの円孔が外領から穿たれる。	F区
+ - 435	S P 9	* *	6.0 6.6 3.0	底部に径2.4cmの孔が穿たれる。体部は内溝して上方に立ち上がり口縁部にいたる。	内面に指痕圧痕が深く残る。	I区
+ - 436	N器	*	6.0 5.0 —	高台状の底部を有する。体部中位で屈曲し内傾する。	内面はヘラナデ。外腹はナデ調整。底部は外面に指痕圧痕が残る。	A区

検査番号	直機番号	器種	法量 (cm)	口径 石高 測定 既往	形態・文様	手 法	備 考
110-437	V層	須恵器 杯(蓋)	後 径	12.6 3.3 12.1	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は比較的低い。大井部は高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面3/4、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	C区
* - 438	S F 5	*	後 径	12.8 3.5 13.0	口縁部はやや内窓気味に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は断続三角形を成し、鋸い。天井部は高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外周面4/5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	*
* - 439	S F 6	*	後 径	13.0 4.3 12.6	口縁部はやや下外方に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は断続三角形を成し、鋸い。天井部は高く、丸味を有す。	*	F区 天井部外表面1/2が自然釉剥落。
* - 440	Ⅱ-2層	*	後 径	12.8 (4.3) 12.6	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する浅い凹面を成す。底は断続三角形を成し、鋸い。天井部はやや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。大井部外周面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区
* - 441	S F 2	*	後 径	12.8 4.6 13.5	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は断続三角形を成し、鋸い。天井部は高く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面4/5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	B区
* - 442	*	*	後 径	14.4 4.3 14.0	口縁部は下外方に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は断続三角形を成し、鋸い。天井部は比較的低い、平ら。	コキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	*
* - 443	*	*	後 径	12.8 (3.9) 12.9	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する深い凹面を成す。底は断続三角形を成す。やや丸味がある。天井部のはとんどを欠す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面のほとんどに回転ヘラ削り調整を施していたとみられる。他は回転ナガ調整。	*
* - 444	*	*	後 径	12.4 4.0 11.9	口縁部は下外方に下り、縁部は下方向に向いて凹面を成す。底は鋸く。天井部は比較的高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面4/5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	*
* - 445	Ⅱ層	*	後 径	13.0 3.6 11.6	口縁部はハバの字形に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は鋸く。縁下に凹線を回らす。大井部は高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面4/5、回転ヘラ削り調整後、回転ナガ調整。他も回転ナガ調整。	*
* - 446	S F 2	*	後 径	11.4 (4.6) 11.0	口縁部は下外方に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は鋸く。縁下に凹線を回らす。大井部は一部欠損するが、比較的高く、やや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面のほとんどに回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	*
* - 447	Ⅱ-2層	*	後 径	15.8 (5.2) 14.6	口縁部は内窓気味に下り、縁部は内傾し、外反し、底部は内傾する深い凹面を成す。底は断続三角形を成す。天井部は高く、丸味を有す。天井部外周面2/3に刺突文を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面はほぼ全周に回転ヘラ削り調整。底部分には回転ヘラ削り後に回転カキ目調整。	G区
* - 448	S F 7	*	後 径	12.8 13.0	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は比較的鋸く。断續三角形を成す。天井部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面はほぼ全周に回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区 天井部外周面が自然釉剥落。
* - 449	Ⅱ-2層	*	後 径	13.6 4.9 14.0	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は比較的鋸く。断續三角形を成す。下外方に向く。天井部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面4/5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区 天井部外周面には自然釉が部分的に剥落。
* - 450	S F 2	*	後 径	12.6 (4.2) 13.0	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する深い凹面を成す。底は鋸く。断續三角形を成す。天井部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面はほぼ全周に回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	B区
* - 451	I層	*	後 径	12.3 (4.3) 12.3	口縁部は下外方に下り、縁部は内傾する深い凹面を成す。底は鋸く。底面三角形を成す。下外方に向く。天井部は高く、平らに近い。	*	*
* - 452	S F 7	*	後 径	12.6 4.8 12.6	口縁部はほぼ垂直に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は鋸く。断續三角形を成す。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面3/4、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区 天井部外周面は自然釉剥落。
* - 453	*	*	後 径	13.4 5.3 13.2	口縁部は下外方に下り、縁部は内傾する平面を成す。底は鋸く。断續三角形を成す。天井部は比較的高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外周面2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。天井部内面に同心円文のタキ。	G区

接頭番号	遺構番号	基 標	法量 (cm)	口徑 器高 鋼径 底径	形 番・文 索	手 法	備 考
110-454	脣-2層	頭部 杯(身)	枝 径	12.8 4.4 12.5	1)端部は下外方に下り、端部は下 方を近く凹面を成す。 天井部は比較的高く、丸味を有す。 2)口部はやや下外方に下り、端部 は内側する丸く凹面を成す。天 井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は全域に同軸ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	G区 天井部外面には緑色自然釉をかぶる。
*-455	*	*	枝 径	12.9 4.2 12.9	1)端部は下外方に下り、端部は下 方を近く凹面を成す。 天井部は比較的高く、丸味を有す。 2)口部はやや下外方に下り、端部 は内側する丸く凹面を成す。天 井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2強に回転ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	G区 天井部はやや不良。
*-456	口層	*	枝 径	12.4 3.7 12.4	1)端部は下外方に下り、端部は下 方を近く凹面を成す。 天井部は丸味を有す。	*	D区
*-457	S P 4	*	枝 径	12.2 4.6 12.2	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する丸く凹面を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は全域に同軸ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	C区
*-458	N層	*	枝 径	13.0 4.5 13.0	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する丸く凹面を成す。 天井部はやや丸味を有す。	*	J区 造りは比較的丁寧であるが、施土は やや粗。
*-459	S P 4	*	枝 径	12.8 4.6 13.2	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する丸く凹面を成す。天 井部は丸味を有す。 2)端部はやや下外方に下り、端部 は内側する段を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/3、同軸ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	C区
*-460	S F 7	*	枝 径	13.2 4.9 13.2	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する丸く凹面を成す。 天井部は新面三角形を成す。	*	G区 天井部外面は自然釉封隙。
*-461	*	*	枝 径	12.5 4.8 12.3	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する段を成す。 天井部は丸味を有す。	*	G区
*-462	S F 2	*	枝 径	11.8 4.2 11.2	1)端部はハセの形割に開き、端部は内 側する平面部を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は全域に同軸ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	H区 焼成はやや不良。
111-463	S F 7	*	枝 径	12.0 4.5 12.7	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する丸く凹面を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/3、同軸ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	G区
*-464	S F 2	*	枝 径	12.8 (4.1) 12.6	1)端部はハセの形割に開き、端部は内 側する段を成す。 天井部は丸味を有す。	*	C区 焼成はやや不良。
*-465	N-2層	*	枝 径	13.6 (2.6) 12.8	1)端部はハセの形割に開き、端部は内 側する段を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 同軸ヘラ削り調整は不明。残部は 回転ナダ調整。	G区 113-526の杯(身)とセット。
*-466	*	*	枝 径	13.6 (4.5) 13.2	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する段を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2強に回転ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	G区
*-467	S F 4	*	枝 径	12.6 4.8 12.0	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する平面部を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は全域に同軸ヘラ削 り調整。他の回転ナダ調整。	C区 天井部外面は自然釉封隙。
*-468	N-1層	*	枝 径	12.2 5.3 12.2	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する段を成す。 天井部は比較的高く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は回転ヘラ削り調整。他の 回転ナダ調整。	F区
*-469	S F 2	*	枝 径	12.8 4.5 12.6	1)端部は下外方に下り、端部は内 側する段を成す。 天井部は新面三角形を成すが、無い。 天井部は丸味を有す。	*	B区
*-470	N-2層	*	枝 径	13.0 (4.4) 13.2	1)端部は内側気味に下り、端部は内 側する段を成す。 天井部は新面三角形を成す。天井部は 丸味を有す。	*	G区
*-471	*	*	枝 径	14.0 (4.4) 13.2	1)端部は内側気味に下り、端部は内 側する段を成す。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り 調整。他の回転ナダ調整。	G区 114-531の杯(身)とセット。

採回番号	通標番号	器種	法量 (ml)	口縁 器底 開口部 底径	形態・文様	子 法	備 考
111-472	Ⅲ層	細胞器 杯(裏)	31.4 (3.6)	10.9	口縁部は内寄気味に下り、端部で外反し、腹部は内傾する四面を成す。 後はよく無い。天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	H区 天井部外面を中心 に自然軸割。
* - 473	S F 7	*	12.2 (4.5)	12.0	口縁部はやや内寄気味に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。 後は断続三三角形を成すが無い。天井部は比較的の高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区
* - 474	S F 4	*	12.0 (4.2)	11.8	口縁部はほぼ直進に下り、腹部は内傾する浅い四面を成す。 後は断続三三角形を成すが無い。天井部は比較的の高く、丸い。	*	C区
* - 475	*	*	11.6 4.8	11.5	口縁部はやや内寄気味に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。天井部は高く、丸い。	*	*
* - 476	S F 9	*	12.2 4.7	12.8	口縁部はやや内寄気味に下り、端部でやや外反する。その端部は、内傾する凹面を成し、さらにその内側も凹面を成す。 後は丸く有り、腹さに欠ける。天井部は丸く有る。	*	I区 天井部から口縁部 にかけての外縁は 自然軸割。
* - 477	S F 6	*	12.2 4.4	12.4	口縁部はやや外方に下り、腹部は内傾する浅い四面を成す。 後は断続三三角形を成すが、複く複い。天井部は比較的の高く、丸い。	*	F区
* - 478	*	*	11.8 4.5	11.8	口縁部はやや外方に下り、腹部は内傾する浅い四面を成す。 後は断続三三角形を成すが、丸い。天井部は丸く有る。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	*
* - 479	IV - 1層	*	12.6 4.6	12.2	口縁部はやや外方に下り、腹部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く有り、腹さに欠ける。天井部は比較的の高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	*
* - 480	Ⅴ層	*	12.2 (3.7)	11.4	口縁部はやや外方に下り、腹部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、小さい。天井部は欠損するかとみられる。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	C区
* - 481	*	*	11.6 4.5	11.8	口縁部はやや直進に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、大きい。天井部は比較的の高く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区 天井部外面自然軸 付着。
* - 482	S F 8	*	12.7 4.4	12.2	口縁部はやや直進に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、大きい。天井部は比較的の高く、平ら。全体に、燒成時の余が残る。	*	H区 天井部外面を中心 に自然軸割。
* - 483	V - 2層	*	14.0 4.6	14.0	口縁部はやや内寄気味に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、小さい。後下に凹面を局らす。天井部は丸く有る。	*	G区
* - 484	Ⅵ層	*	11.6 (3.8)	11.2	口縁部はやや直進に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、下に凹面を局らす。天井部は丸く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	B区
* - 485	S F 6	*	12.6 5.2	12.5	口縁部はやや外下方に下り、腹部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、下に凹面を局らす。天井部は丸く、丸い。	*	F区 燒成や不良。
* - 486	S F 4	*	12.2 5.2	12.1	口縁部はやや直進に下り、端部は内傾する浅い四面を成す。 後は丸く、下に凹面を局らす。天井部は丸く、丸い。	*	C区 燒成不良で、白灰色を呈す。
* - 487	V - 1層	*	12.0 4.8	12.0	口縁部はやや外下方に下り、端部で外反し、腹部は内傾する四面を成す。 後は丸く、鋸歯が残っている。天井部は比較的の高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	F区 燒成やや不良。
* - 488	S F 7	*	11.2 5.0	11.4	口縁部は内寄気味に下り、端部で外反し、その端部は内傾する四面を成す。 後は丸く有り、下を瘤ませることにより邊だし、段のようになる。天井部は高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ底形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。他は回転ナガ調整。	G区 天井部外面自然軸 割。

種別番号	清掃番号	容積	法量 (ml) 器内 制御 度	形態・文様	手 法	備 考	
111-489	S F 6	用器 杯(蓋)	12.8 (4.1) 枝 径 13.0	口縁部は下外方へ下り、端部で外 反する。その縁部は内側する凹面 を成す。 縁は比較的低い。天井部は比較的 低い。丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	F 区 天井部外面自然剥 剝落。	
112-490	N-1 頭	*	12.4 4.2 枝 径 12.4	12.6 (4.5) 枝 径 11.7	口縁部はやや下外方へ下り、端部 は内側する後、凹面を成す。 縁は低い。天井部は比較的低い。 丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は全周に回転ヘラ 削り調整。他は回転ナダ調整。	*
*-491	S F 2	*	10.6 (2.0) 枝 径 10.6	12.6 (4.7) 枝 径 12.4	口縁部はほぼ直面に下り、端部は 下方に向く凹面を成す。 縁は低い。天井部は比較的高い。 丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。他は回転ナダ調整。	H 区 大井部から口縁部 にかけての外面部 自然剥剝落。
*-492	N-2 頭	*	10.6 (2.0) 枝 径 10.6	15.2 (4.7) 枝 径 12.4	口縁部は外反して下り、端部は下 方を向く平面を成す。 縁は低いが、高い。天井部は欠損 する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 ハラ削り調整不明。他は回転ナ ダ調整。	G 区
*-493	目 端	*	13.0 (4.2) 枝 径 12.4	15.2 (4.7) 枝 径 12.4	口縁部はほぼ直面に下り、端部は 内側する平面を成す。 縁は低い。丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。他は回転ナダ調整。	H 区
*-494	*	*	13.0 (3.5) 枝 径 12.4	13.0 (4.2) 枝 径 12.4	口縁部はハバの字形に開き、端部は 内側する段を成す。 縁は低い。天井部は比較的低い。 丸味を有す。	*	J 区 外面部自然剥剝落。
*-495	目 端	*	13.6 (3.5) 枝 径 13.2	13.6 (3.5) 枝 径 13.2	口縁部はハバの字形に開き、端部は 内側する段を成す。 縁は低い。天井部は比較的低い。 丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 前軸ヘラ削り調整不明。他は 回転ナダ調整。	C 区
*-496	目 端	*	13.0 3.5 枝 径 12.3	13.0 3.5 枝 径 12.3	口縁部はほぼハバの字形に開き、端 部は内側する平面を成す。	*	*
*-497	*	*	13.2 5.1 枝 径 14.7	13.2 5.1 枝 径 14.7	口縁部は凹面を留らして造り出す。天 井部は丸く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。他は回転ナダ調整。	*
*-498	目 端	*	15.8 4.8 枝 径 15.0	15.8 4.8 枝 径 15.0	口縁部は下外方へ下り、端部は丸 く、端部外表面はハラ状工具で浅 い跡を施す。 縁は凹面を留らして造り出す。天 井部は丸く、丸味を有す。	*	T R 7
*-499	V 端	*	14.8 5.4 枝 径 14.0	14.8 5.4 枝 径 14.0	口縁部は内凹気味に下り、端部は 丸く、端部内側に凹面を留らす。 縁は凹面を留らして造り出す。天 井部は丸く、丸味を有す。	*	E 区
*-500	目 端	*	14.2 (3.1) 枝 径 13.9	14.2 (3.1) 枝 径 13.9	*	*	D 区
*-501	*	*	12.6 (3.5) 枝 径 12.3	12.6 (3.5) 枝 径 12.3	口縁部はハバの字形に開き、端部は 内側する平面を成す。 縁は凹面を留らして造り出す。天 井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ヘラ削り調整不明。他は回 転ナダ調整。	C 区
*-502	目 端	*	12.4 3.8 枝 径 —	12.4 3.8 枝 径 —	口縁部は内凹気味に下り、端部は 丸く、端部内側に凹面を留らす。 縁は凹面を留らして造り出す。天 井部は丸く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。他は回転ナダ調整。	D 区
*-503	目 端	*	13.8 (3.6) 枝 径 —	13.8 (3.6) 枝 径 —	口縁部は内凹気味に下り、端部は 比較的低い。 天井部は比較的低い。丸味を有す。	*	*
*-504	目 端	*	14.2 4.1 枝 径 —	14.2 4.1 枝 径 —	口縁部は内凹気味に下り、端部は 比較的低い。 天井部は比較的低い。丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。天井部内面の一部をナダ調整。 他は回転ナダ調整。	C 区
*-505	目 端	*	14.0 3.7 枝 径 —	14.0 3.7 枝 径 —	口縁部は内凹気味に下り、端部は 丸く、天井部は比較的低い。丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り 調整。他は回転ナダ調整。	*
*-506	*	*	14.6 (3.3) 枝 径 —	14.6 (3.3) 枝 径 —	口縁部は下外方へ下り、端部は比 較的低い。 天井部は丸く、平らに近い。	*	*

拂因番号	遺傳番号	器種	法量 (ml)	口錠 器皿 倒伏 底径	形態・文様	手 法	備 考
112-507	日増	頸壺器 杯(壺)	15.8 4.5 —	口錠部は下外方に下り、漏部は丸い。 天井部は比較的低く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側面1/2、圓板ヘラ削り調整。大井円内面ナダ調整。他是回転ナダ調整。	D区	
113-508	S F 7	* 杯(舟)	11.6 —	たちあがりは内傾してのび、漏部 は丸錐のある平面を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。	G区	
*-509	*	*	11.9 —	たちあがり高 1.3 受部深 2.0 —	受部は水平のものが、漏部は丸い。 底部は比較的深く、平らに丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。	*
*-510	S F 6	*	10.0 —	たちあがりは内傾してのび、漏部 は丸錐のある平面を成す。 受部は水平にのび、漏部は鋭い。 底部は深く、平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面は完全に回転ヘラ削り調整。他是回転ナダ調整。	F区	
*-511	*	*	10.2 —	たちあがり高 1.9 受部深 3.8 —	—	*	F区 510と造りが全く同じ。
*-512	日増	*	11.0 4.1 —	たちあがりは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、漏部は鋭い。 底部は深く、平らで、外面にはハ フ記号がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面4/5、回転ヘラ削り調整。他是回転ナダ調整。	B区	
*-513	S F 7	*	10.0 —	たちあがり高 2.0 受部深 4.9 —	たちは内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は丸い。 底部は丸い、やや丸錐を有す。	*	
*-514	S F 6	*	10.8 4.9 —	たちあがり高 1.9 受部深 12.6 —	たちは内傾してのいため、 底部は比較的深く、丸い。 受部は水平にのび、漏部は鋭い。	*	F区
*-515	直-1層	*	13.0 5.1 —	たちあがりは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は鋭い。 底部は比較的深く、丸錐を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面3/4、回転ヘラ削り調整。他是回転ナダ調整。	*	
*-516	S F 6	*	11.0 5.0 —	たちあがり高 1.6 受部深 12.2 —	—	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面3/4、回転ヘラ削り調整。底部内側面ナダ調整。他是回転ナダ調整。	*
*-517	*	*	11.0 (4.6) 5.6 —	たちあがり高 1.8 受部深 13.5 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、漏部は丸い。 底部は比較的深く、丸錐を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面3/4、回転ヘラ削り調整。他是回転ナダ調整。	*
*-518	*	*	10.6 5.6 —	たちあがり高 1.8 受部深 12.8 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、漏部は丸い。 底部は深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面は完全に回転ヘラ削り調整。他们是回転ナダ調整。	*
*-519	S F 7	*	11.6 (5.1) 5.4 —	たちあがり高 1.5 受部深 13.5 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は丸い。 底部は深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面3/4、回転ヘラ削り調整。他们是回転ナダ調整。	G区
*-520	直-2層	*	12.0 (5.1) 5.4 —	たちあがり高 1.6 受部深 14.2 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は丸い。 底部は深く、丸味を有す。	*	*
*-521	*	*	11.8 5.4 5.4 —	たちあがり高 1.8 受部深 13.8 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は丸い。 底部は深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面1/2、回転ヘラ削り調整。底部内側面回転カキ目調整後、ナダ調整。他们是回転ナダ調整。	*
*-522	S F 4	*	10.4 5.1 5.1 —	たちあがり高 1.9 受部深 12.0 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は鋭い。 底部は比較的深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面2/3、回転ヘラ削り調整。他们是回転ナダ調整。	C区 小石 2個が付いていた。底部外側面にヘラ記号がある。
*-523	S F 6	*	11.8 4.6 5.2 —	たちあがり高 2.0 受部深 13.9 —	たちは内傾してのび、漏部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、漏部は丸い。 底部は丸錐を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面3/4、回転ヘラ削り調整。他们是回転ナダ調整。	F区
*-524	*	*	12.0 5.2 5.2 14.0	たちあがり高 2.0 受部深 13.9 —	たちは内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、漏部は鋭い。 底部は丸錐を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側面1/2、回転ヘラ削り調整。底部内側面回転カキ目調整。他们是回転ナダ調整。	F区 底部外側面に自然釉がかかる。

辨回答号	直標番号	器種	口器 法量 (cm) 側面 底面	形態・火様	手法	備考
113-525	S F 6	須唇器 杯(身)	10.6 4.8 2.0 12.8	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナナ調整。	F区
* - 526	N - 2 備	*	12.0 4.7 1.6 13.8	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は比較的浅く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側4/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナナ調整。	G区 111-465の杯(底)とセット。
* - 527	S F 6	*	10.8 4.1 1.9 13.0	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は比較的浅く、平らに近い。	*	F区
* - 528	N - 2 備	*	10.6 (4.7) 1.9 13.4	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 受部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	*	G区
114-529	S F 8	*	10.4 4.5 1.9 12.4	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、端部は鋭い。 底部は比較的浅く、丸味を有す。	*	H区
* - 530	B 備	*	12.6 5.4 2.1 15.2	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 受部は水平にのび、底部は鋭い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側ほぼ全周に回転ヘラ削 り調整。底部内面ナナ調整。他 は回転ナナ調整。	A区
* - 531	N - 2 備	*	12.3 5.2 1.9 14.4	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸 い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	G区 111-471の杯(底)とセット。
* - 532	S F 7	*	12.0 4.7 1.9 14.4	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部はほぼ水平にのび、端部は鋭 い。 底部は比較的浅く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	G区
* - 533	*	*	10.4 5.1 1.9 12.8	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部はやや上外方へのび、端部は 鋭い。 底部は比較的浅く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/3、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	C区
* - 534	S F 2	*	11.0 4.8 1.8 13.2	たちあがりは内傾してのびた後、 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、平らに近い。	*	B区
* - 535	*	*	10.6 4.3 1.9 12.8	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は上外方へ向く。 底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/3、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	*
* - 536	S F 6	*	10.3 4.8 2.1 12.6	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側3/4、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	F区
* - 537	S F 4	*	10.3 4.8 1.5 12.2	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側4/5、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	C区 底部外間にヘラ記 号がある。
* - 538	S F 6	*	9.9 4.8 1.5 11.9	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は上外方へのび、端部は鋭い。 底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	F区
* - 539	N - 2 備	*	9.8 1.6 1.5 12.0	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は上外方へのび、端部は鋭い。 底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ヘラ削り調整は不用。他は 回転ナナ調整。	G区
* - 540	S F 7	*	10.6 4.8 1.7 12.8	たちあがりは内傾して内弯骨氣に のび、端部は内傾する平面をなす。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側1/3、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	*
* - 541	*	*	10.6 4.5 1.7 12.8	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は水平にのび、端部は鋭い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側4/5、回転ヘラ削り調整。 底部内面ナナ調整。他は回転ナ ナ調整。	*
* - 542	B - 2 備	*	10.2 4.8 1.7 12.2	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	*	*

辨回番号	遺構番号	器種	口径 器高 (cm)	形態・文様	手法	備考
114-543	S F 4	猪突器 杯(身)	9.8 4.8 たちあがり高 1.6 受部径 12.0	たちあがりは内側して外反気味にのび。腹部は内側する円面を成す。この下面に一条の沈線を有する。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	C区
* - 544	S F 7	*	10.2 5.4 たちあがり高 2.0 受部径 12.2	*	*	G区
* - 545	表揮	*	10.8 (2.5) たちあがり高 1.6 受部径 12.4	たちあがりは内側してのび、端部は内側する円面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は丸く反る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ヘラ削り調整は不明。他の回転ナダ削調整。	*
* - 546	S F 7	*	10.0 (4.6) たちあがり高 2.0 受部径 12.2	たちあがりは内側してのび、端部は内側する円面を成す。受部は上方外方にのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	G区 底部外露に自然輪がかかる。
* - 547	*	*	10.0 5.1 たちあがり高 1.7 受部径 12.4	たちあがりは内側してのび、端部は内側する円面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸い。	*	C区
* - 548	S F 8	*	9.2 5.1 たちあがり高 2.0 受部径 11.4	*	*	H区
* - 549	S F 7	*	10.6 4.2 たちあがり高 2.0 受部径 12.2	たちあがりは内側してのび、端部は内側する段を成す。受部は水平にのび、端部は鋸い。底部は比較的浅く、丸味を有す。	*	G区
115-550	S F 8	*	10.6 5.3 たちあがり高 1.7 受部径 12.6	たちあがりは内側してのび、端部は内側する段を成す。受部は水平にのび、端部は鋸い。底部は厚く、丸い。	*	H区
* - 551	II層	*	10.8 5.0 たちあがり高 1.9 受部径 13.0	たちあがりは内側してのび、端部は鋸い。受部は水平にのび、端部は丸味を有す。底部は比較的深く、丸味を有す。	*	*
* - 552	S F 9	*	9.0 (4.9) たちあがり高 1.6 受部径 12.2	たちあがりは内側してのび、端部は鋸く。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸い。底部外露にヘラ跡があり。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	I区
* - 553	*	*	10.0 4.9 たちあがり高 1.5 受部径 12.1	たちあがりは丸味を有す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	*
* - 554	IV-1層	*	12.5 (3.5) たちあがり高 (0.8) 受部径 12.2	たちあがりは欠損する。受部は水平にのび、端部は鋸く。底部の歪み残り。	*	F区 機能不良で灰白色を呈す。
* - 555	IV-2層	*	12.5 11.6 たちあがり高 1.3 受部径 14.5	たちあがりは内側してのび、端部は内側する平面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	G区
* - 556	S X 2	*	12.4 9.4 たちあがり高 1.3 受部径 14.8	たちあがりは内側してのび、端部は内側する浅い凹面を成す。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	A区 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。
* - 557	IV-2層	*	12.8 (4.2) たちあがり高 1.4 受部径 15.0	たちあがりは内側してのび、端部は内側する浅い凹面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ヘラ削り調整は不明。他の回転ナダ削調整。	G区
* - 558	S F 7	*	12.0 5.5 たちあがり高 2.1 受部径 14.8	たちあがりは内側してのび、端部は内側する浅い凹面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外露2/3、回転ヘラ削り調整。他の回転ナダ削調整。	*
* - 559	IV-2層	*	11.6 (4.5) たちあがり高 2.1 受部径 14.0	たちあがりは内側してのび、端部は内側する凹面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ヘラ削り調整。	*
* - 560	*	*	11.6 5.4 たちあがり高 1.4 受部径 13.4	たちあがりは内側してのび、端部は内側する凹面を成す。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ヘラ削り調整。	*

種四番号	遺構番号	器種	口径 器高 径底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
115-561	S F 7	須彌器 朴(身)	12.0 5.2 1.7	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 底部は上方へのび、端部は低い。 底盤は比較的深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 底部内側ナダ調整。他の回転ナ ダ調査。	G区
* - 562	*	*	12.8 5.1 1.7	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 底部は水平にのび、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 底部内側ナダ調査。他の回転ナ ダ調査。	G区
* - 563	青層	*	12.4 (3.7) 1.6	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 底部は上方へのび、端部は低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	A区
* - 564	青層	*	11.2 (5.3) 1.6	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面を成す。 底部は水平にのび、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	G区
* - 565	IV - 2層	*	11.0 (4.5) 1.6	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 底部は上方へのび、端部は低い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	G区
* - 566	青層	*	13.0 4.8 1.4	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 底部は水平にのび、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	Tと18 小石3盤がはいつ ていた。
116-567	S X 2	*	12.2 (3.4) 1.2	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 底部は上方へのび、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	A区
* - 568	Ⅲ層	*	14.4 (4.2) 1.0	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。	マキアゲ、ミズビキ成形。	C区
* - 569	*	*	13.4 (4.0) 1.1	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 底部は水平にのび、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	*
* - 570	*	*	11.8 4.3 0.8	たちあがりは内傾してのび、端部 は内傾する段を成す。 底部は水平にのび、端部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側2/3、回転ヘラ削り調査。 他の回転ナダ調査。	D区
* - 571	S F 4	*	12.4 5.4 12.1 3.1	たこ足部は内凹状に表面に下り、 端部は内傾する段を成す。 底盤は削除した形で丸い。 たこ足部は高く、丸い。中央部には 筋目などをつけた。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみはハリツケによる。 天井部外側2/3、回転ヘラ削り 調査。他の回転ナダ調査。	C区
* - 572	*	*	12.0 5.2 11.8 2.9	口縁部はほぼ直角に下り、端部で 外反する。端部は内傾する凹面を 成す。 唇は厚く、鋸歯状。 天井部は高く、丸い。ほぼ中央部に やや筋目などを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみはハリツケによる。	*
* - 573	S F 6	*	11.8 5.5 11.5 2.9	口縫部は下外方に下り、端部は内 傾する凹面を成す。 唇は前面二角形で成すが、丸い。 天井部は高く、丸い。中央部に 筋目などを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみはハリツケによる。 天井部外側2/3、回転ヘラ削り 調査。他の回転ナダ調査。	F区
* - 574	*	*	12.2 5.7 12.0 2.9	天井部は高く、丸い。中央部に 筋目などを付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみはハリツケによる。 天井部外側2/3、回転ヘラ削り 調査。他の回転ナダ調査。	F区
* - 575	*	*	10.5 4.8 2.0	底盤のたちあがりは内傾してのび、 端部は内傾する段を成す。 底部は上方へのび、端部は丸い。 底盤は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底盤はハリツケによる。 底部外側2/3、回転ヘラ削り 調査。他の回転ナダ調査。	*
* - 576	*	*	9.7 (5.0) 1.5	たちあがりは内傾してのび、 端部は内傾する段を成す。 底部は下方に聞くが、ほとんど が欠損する。台形の透しを三方に 有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯、脚部はハリツケによる。 底部外側2/3、回転ヘラ削り 調査。他の回転ナダ調査。	*

辨認番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 肩径 底径	形態・文様	手法	備考
116-577	S F 6	頸壺器 高杯	18.1 12.7 6.4 5.8 10.6	口縁部は上方外方へ内凹気味にのびたもの。さらには外反としてのび、漏船は丸い。伴附外面上には、新面二重形を複数の角の凸縁と底部凹窓にて1条の凸縁を有し、その間に1条(1本)の波状文を施す。底部外面上には無地或圓形の模状をなす把手を1箇付す。 脚部は外反及び凹窓に下り、端部で段を成す。下方に台形の透しを有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 把手はハリツケによる。 底部外面、周縁へラク削り調整。 把手は回転ナガ調整。	F区	
* - 578	N-1層	*	17.0 (5.8) 4.9	口縁部は下方へのび、通部は丸く、内側に1条の波状が回る。 体部外曲と底部上端には比較的緩い凸縁を付し、それぞれ上に凹窓を回らす。その間に1条(2本)の波状文を施し、下の凸縁をはさんで縦状の把手を付す。 脚部は欠損するが、三方に台形の透しを有しているとみられる。		F区	杯部内面に自然釉がかかる。
* - 579	日幣	*	16.0 (5.6) —	口縁部は上方へのび、通部は丸く。内部外筋には切い凸筋を2条間隔す。その間に1条(5本)の波状文を施す。 底部以下は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外筋、回転ヘラク削り調整。 把手は回転ナガ削落。	J区	杯部内面は自然釉剥落。
* - 580	S F 4	*	15.0 11.4 5.5 5.9 9.0	口縁部は内凹気味にのび、さらには上方へのび、通部は丸く。 体部外曲上端に凸筋1条を付し、上に凹窓を回す。その下には1条(1本)の波状文を施す。 脚部は下外方に下り、途中からさらに開いてくる。通部は下方へ屈曲する。四方に台形の透しを有す。		C区	
* - 581	S F 7	*	14.0 (4.7)	口縁部は内凹気味にのび、通部近くで上方へのび。通部は内凹する。 通部に波状文を施す。 体部外面上には、底を固めらす。 底部以下欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 颈部は回転ナガ調整。把手は不明。	G区	
117-582	N-1層	*	11.8 (5.1) 6.2	口縁部は上方へのび、両面三角形の凸筋を境に、上方外へ内凹気味にのびる。通部は上方に向かって凹面を成す。凸縫下方に1条(12本)の波状文を施す。 脚部は凹曲して下るが、それ以下は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部内面ナガ調整。把手は回転ナガ調整。	F区	口頭部内面と肩部外面上に自然釉がかかる。
* - 583	S F 2	*	11.3 (4.2)	口縁部は上方へのび、新面二重形の凸筋を境に内凹気味にさるにのびる。通部は内傾する浅い凹面を成す。凸縫下方に1条(10本)の波状文を施す。 底部以下は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 颈部は回転ナガ調整。把手は不明。	B区	口頭部内面に自然釉がかかる。
* - 584	S F 4	*	11.4 (3.7)	口縁部は上方へのび、純い凸筋を境に内凹気味にさるにのびる。通部は丸い。凸縫下方に1条(13本)の波状文を施す。 底部以下は欠損する。		C区	口頭部内面に自然釉がかかる。
* - 585	N-2層	*	13.0 (4.4)	口縁部は上方へのび、断面三角形の純い凸筋に内凹気味にさるにのびる。通部は内傾する浅い凹面を成す。凸縫上方、下方にそれぞれ1条(4本・11本)の波状文を施す。 底部以下は欠損する。	*	G区	口頭部内面に自然釉がかかる。
* - 586	S F 7	*	(4.9) 6.3 体部最大径11.2	口縁部は上方へのびるが、ほとんどが欠損し、残部には1条(4本以上)の波状文を施す。 脚部は口縁部からあまり脛を張らずに下り、体部最大径は、体部中位よりやや上方ある。 体部最大径の部位置よりや上方に1条の凸縫を有する。凸縫下には1条(5本)の波状文を施し、波状文上端より円弧を下内方へ導す。体部はほぼ新面或圓形を呈し、底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 颈部は回転ナガ調整。把手は不明。	G区	

検査番号	遺構番号	部	法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
137-587	S - 1層	頸部 頸部 頸	9.4 10.1 5.3 体部最大径11.6	口頭部は上外方へのび、断面三角形の凸部を瘤にさらに上外方へのびる。瘤部は脱臼。凸部下方には1条(2本半径)の波状文を施す。 瘤部は口頭部からくの字形に下り、体部最大径は体部中位よりやや上にある。底部は丸い。 体部にはそれぞれ2条の波線をはさんで1条(7本)の波状文を施す。円孔は上方の2条の波線の上から穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、静止ヒラ前リ調整後、ナダ調整。体部内面ナダ調整。 他は回転ナダ鋼糸。	F区 口頭部内面と肩部外面上に自然釉がかかる。
* - 588	*	*	9.8 10.1 5.3 体部最大径11.0	口頭部は上外方へのび、断面三角形の凸部を瘤にさらに上外方へのびる。瘤部は内傾する凹部を成す。瘤部下方には1条(7本)の波状文を施す。 瘤部は比較的緩やかに下り、体部最大径は体部中位よりやや上にある。底部は丸い。 体部外側中位よりやや上には凹部をはさんで1条(5本)の波状文を施す。円孔は波状文の上から穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面、体部内面ナダ調整。 体部外側中位には回転カキ目調整。他は回転ナダ調整。	F区 口頭部内面と肩部外面上に自然釉がかかる。
* - 589	丘層	*	9.7 9.6 5.2 9.0	口頭部は上外方へのび、断面三角形の凸部を瘤にさらに上外方へのびる。瘤部は丸い。 凸部下方には1条(2本)の波状文を施す。 瘤部は比較的緩やかに下り、体部最大径は体部中位よりやや上にある。底部は丸い。 体部外側には波線をはさんで1条(7本)の波状文を施す。円孔は波状文の上から穿つ。	*	D区 口頭部内面と肩部外面上に自然釉がかかる。
* - 590	S F 6	*	10.0 10.3 5.9 11.5	口頭部は外反側方にのび、断面三角形の凸部を瘤に上外方へさらにのびる。瘤部は丸い。 瘤部下方には1条(9本)の波状文を施す。 瘤部は比較的緩やかに下り、体部最大径は体部中位よりやや上にある。底部は丸い。 体部外側には波線をはさんで1条(6本)の波状文を施す。円孔は波状文の上から穿つ。	*	F区 口頭部内面と肩部外面上に自然釉がかかる。
* - 591	表抜	*	10.4 10.1 6.2 体部最大径10.8	口頭部は外反側方にのび、断面三角形の凸部を瘤に上外方へさらにのびる。瘤部下方には1条(5本)の波状文を施す。 瘤部は瘤やかに下り、体部最大径は体部中位よりやや上にある。底部は丸い。 体部外側には波線をはさんで1条(6本)の波状文を施す。円孔は波状文の上から穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、平行のタタキのあとナダ調整。体部内面ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	D区 口頭部内面と肩部外面上に自然釉がかかる。 体部外側波状文の下にハラ張きの文様あり。
* - 592	丘層	*	(8.2) 6.9 10.4	口頭部はほとんど欠損し、残存部に1条(7本以上)の波状文が強さされている。 瘤部は瘤やかに下り。体部最大径は体部中位よりやや上にある。底部は丸い。体部外側には波線をはさんで1条(6本)の波状文を施す。円孔は波状文より上から穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側、平行のタタキ。底部内面には指圧压痕が残る。他は回転ナダ調整。	C区 肩部外面上に自然釉がかかる。
* - 593	S F 6	*	11.0 72.1 6.5 体部最大径15.2	口頭部は外反してのび、細い断面三角形の凸部を瘤に上外方へさらにのびる。瘤部は下方に向く斜面を成す。瘤部上方に1条(7本)の波状文を施す。 体部は断面横四角形をなし。体部最大径は体部中位よりやや上にある。体部外側中位よりやや上に1条(4本)の波状文を施す。円孔は波状文の下位より下内方に穿つ。円孔の直徑は1.5cmを越す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側は瘤由へ前リ調整の後、1条ナダ調整を施す。その単位は不明。体部外側面回転カギ目調整。体部内面ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	F区

検査番号	遺傳番号	器 様	口 径 法量 (cm)	口 径 筋膜 筋膜 筋膜	形 态・文 横	手 法	備 考
117-594	S F 6	直腸器	12.0 16.7	口頭部は上外方へのび、断面三角形の内帶を上外方へさらに伸びる。端部は上方を向く平面を成す。凸端下方には1条(15本)の波状文を施す。 伏部は翼があり、伏部最大径は体部上位1/3にある。体部最大径後方は下内方に内側して下り、底部は丸い。底部外端上位には刺突文を施し、下に3条の波線を回らす。円孔は刺突文の上から下内方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直腸部外面と直腸内面はナゲ調整。胞は回転ナゲ調整。但し、自然種が調査した部位は調整不明。	F区 口頭部内面、肩部外面、底部内面は自然釉剥落。	
118-595	直層	*	16.2 (5.4) — —	口頭部はやや反対気味に上外方へのび、端部はない。直部外端は頂部上位と中位にそれぞれ1条の断面三角形の凸部を回らす。上位と中位の凸部の間に1条(9本)の波状文を持つ。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直腸存部は回転ナゲ調整。	A区 口頭部内面に自然種がかかる。	
*-596	*	*	22.4 (8.5) — —	口頭部は上外方へのび、さらに外反する。直部はない。 直部外端には3条の断面三角形の凸部を回らす。凸端の下内方はそれぞれ1条(4~5本)の波状文を施す。	*	B区 口頭部内面は自然釉剥落。	
*-597	*	*	7.6 (4.6) 体部最大径10.3 —	口頭部は短く、直立して伸び。端部は丸い。 直部は、體大径を中位に求められ、翼の張りはみられず、ならだかに下る。 底部は欠損する。	*	C区 外側は自然釉剥落。	
*-598	N=2層	*	17.8 (5.3) — —	口頭部は上外方へのび、上位凸部より屈曲してさらに上外方へのびる。外端面には3条重巻の内面をなし。下方に断面三角形の凸部を回らす。口頭部上位の凸巻も断面三角形を呈す。 直部は筋筋から比較的緩やかに下るが、直部はほとんど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直部外端、平行タタキ。 直部外端から直部外端、直部カキ口調査。直部内面、ナゲ調整。部分的に直側は直が残る。他の回転ナゲ調整。	C区	
*-599	直層	*	22.8 (6.2) — —	口頭部は外反気味にのび、直部前面は内側する前面を成す。口頭部上位には断面三角形の凸部を回らす。直部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ底形。 口頭部外端、回転ナゲ調整。他は不明	C区 直部内面は自然釉剥落。	
*-600	S F 6	*	16.6 (5.2) — —	口頭部は上外方へのび、途中から屈曲してさらに上外方へのびる。 外端面は内側する山面を成し、その内面には3条の凸部を回らすことにようりよく、小さな凸部を作り出す。 凸端上方に1条(6本)と下方に1条(6本)の波状文を施す。 翼部は下に張り出する。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直部外端、回転ナゲ調整。	F区	
*-601	直層	*	20.0 40.1 41.5 —	口頭部は外反して伸び、外端面は内側する直面を成す。口頭部外端上位には小さな凸部と断面三角形をなす凸部を回らす。その下方に1条(7本)の波状文を施す。 調査段階でやや張りがあり、最大径を直部上位1/3に求めることができる。 調査最大径時は、下内方へ張りやかに下り、直部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直部外端、平行タタキ。 直部内面、同心円文のタタキの後ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。	C区 直部内面と直部外面上に自然釉がかかる。	
119-602	S F 2	*	22.6 (26.9) 47.2 —	口頭部は外反して伸び、外端面は外側する直面を成す。口頭部外端上位には断面三角形の凸部を回らす。 直部はやや張りがあり、最大径を直部上位1/3に求めることができる。 調査最大径時は、下内方へ張りやかに下り、直部は欠損する。	*	B区	
118-603	S F 6	*	20.0 36.2 29.3 —	口頭部は大きく外反して伸び、外端面はほぼ直面を成す。直部外端上位1/3で求めることができると。直部は直部外端ハーフ巻を呈す。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直部外端、椅子目のタタキの後、部分的に回転カキ口調査。直部内面同心円文のタタキの後ナゲ調整。他は回転ナゲ調整。	F区 直部内面と直部外面上に自然釉がかかる。	
119-604	S F 7	*	21.4 41.4 41.4 —	口頭部は外反して伸び、外端面はほぼ直面を成す。直部はやや張りがあり、最大径を直部上位1/3で求めができる。	マキアゲ、ミズビキ底形。 直部外端、平行のタタキの輪郭分的に直部カキ口調査。他は60度とほぼ同じ。	G区	

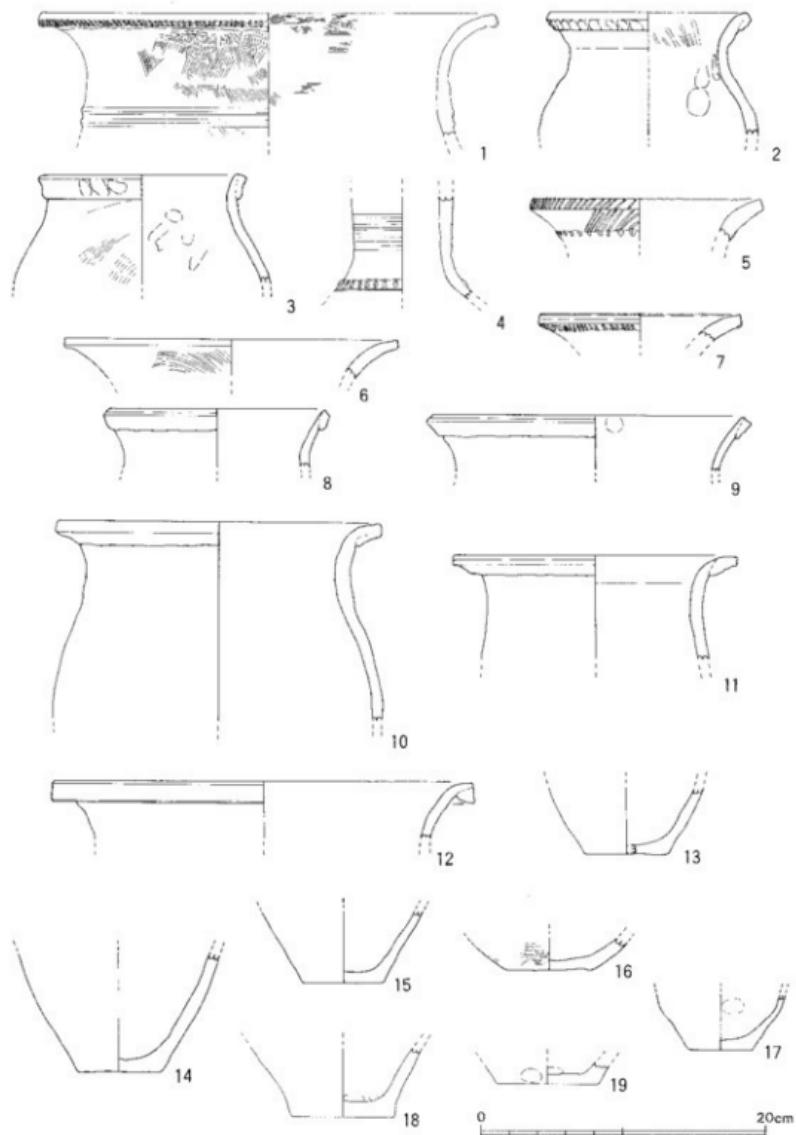
件名番号	通称番号	器種	口徑 法 算 基 高 (cm)	側 厚 別 底 径	形態・文様	手 法	備 考
119-605	新-1号	頸部沿 美	18.4 (9.4)	—	LJ頭部は直立してのびた後、大き く外反してのびる。端部は内傾す る四面を成す。 胴部はやや緩やかに下るが、ほと んど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側、平行のタタキ。 肩部内面はナガ調整するが、部 分的に折損状痕が残る。 他は回転ナガ調整。	P区 山頂部内面と肩部 外側は自然剥落。
120-606	S F 9	*	19.8 (11.8)	*	口頭部は上外方へのび、端部を肥 厚する。外端部は、外傾する凸面 を成す。 胴部は緩やかに下るが、ほとん ど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側、平行のタタキ。 肩部内面、同心円文のタタキ。 他は回転ナガ調整。	T区
*-607	S F 7	*	18.4 (4.5)	*	口頭部は外反してのび、端部を肥 厚する。外端部は、ほぼ垂直な凸 面を成す。 胴部は頭を張らずに下るが、ほと んど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部外側回転カキ目調整。他 は回転ナガ調整。	C区
*-608	新層	*	15.6 (6.4)	*	口頭部は外反してのび、端部を肥 厚する。外端部は、ほぼ垂直な凸 面を成す。 胴部は頭を張らずに下るが、ほと んど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側、平行のタタキの後、 回転カキ目調整。他は回転ナガ 調整。	A区
*-609	日層	*	16.0 (11.0)	*	口頭部は上外方へのび、端部近く で外反する。外端部は、ほぼ垂直 な凸面を成す。 胴部は頭を張らずに下るが、中位 以下は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側、平行のタタキの後、 回転カキ目調整。 肩部内面、同心円文のタタキ。 他は回転ナガ調整。	C区
*-610	*	*	23.4 (7.3)	*	LJ頭部は強く外反してのび、端部 を肥厚する。外端部は内傾する平 面を成す。LJ頭部外端上端部に純 い凸角を因らす。 胴部は下外方へ下るが、ほとん ど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側は自然剥落してお り調整不明。肩部内面、同心円 文のタタキ。他は回転ナガ調整。	D区
*-611	*	タ +	15.4 (6.0)	*	口頭部は強く外反してのび、外端 部は内傾する凸面を成す。 胴部は緩やかに下るが、ほとん ど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側 平行のタタキ。 肩部内面、同心円文のタタキ。 他は回転ナガ調整。	*
*-612	*	-タ +	19.2 (5.1)	*	口頭部は強く外反してのび、外端 部は丸い。 胴部は緩やかに下るが、ほとん ど欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外側 回転カキ目調整。 肩部内面、同心円文のタタキ。 他は回転ナガ調整。	T R 16

採集番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口縁 器高 側径 底径	形態・文様	手 法	備 考
121-613	S K 1	主婦器 皿		12.0 1.6 — 6.3	体部は外上方に稍く立ち上がり、 口縁部は若干外反する。	底部はへラ切り。ロクロナテ調 整。	B区
* - 614	*	* 杯		11.8 3.2 — 6.6	平底で、体部は直線的に外上方へ 立ち上がり、口縁部にいたる。	*	*
* - 615	*	* *		11.0 3.5 — 6.0	*	*	*
* - 616	*	* *		11.2 3.8 — 6.1	*	*	*
* - 617	*	* 皿		13.6 2.6 — 7.8	平底で、体部は直線的に外上方へ 立ち上がり、口縁部は若干外反す る。端部は潤滑る。	*	*
* - 618	II層	* 杯		11.5 3.5 — 6.4	平底で、体部は直線的に外上方へ 立ち上がり、口縁部は若干外反す る。	*	*
* - 619	S K 1	* *		10.9 3.8 — 5.6	*	*	*
* - 620	S K 1	* *		11.6 3.4 — 6.6	平底で、体部は直線的に外上方へ 立ち上がり、口縁部にいたる。	*	*
* - 621	*	* *		13.8 5.1 — 6.8	台状の底部。体部は外上方に立ち 上がり、口縁部は外反する。端部 は丸くおさめる。	*	*
* - 622	*	* *		11.8 3.8 — 8.0	平底で、体部は内凹して外上方に 立ち上がり、口縁部は外反する。	*	*
* - 623	II層	* *		12.4 3.5 — 6.8	平底で、体部は直線的に外上方へ 立ち上がり、口縁部にいたる。	*	*
* - 624	S K 1	* *		12.2 4.0 — 7.6	*	*	*
* - 625	*	* *		13.0 5.8 — 7.7	台状の底部。体部は直線的に外上 方に立ち上がり、口縁部にいたる。	*	*
* - 626	S K 1	* *		13.4 5.1 — 7.2	點付高台を有する。体部は直線的 に外上方に立ち上がり、口縁部に いたる。	体部から口縁部にかけてロクロ ナテ調整。	*
* - 627	*	* *		11.3 3.8 — 7.6	*	*	*
* - 628	*	* *		12.7 4.0 — 6.6	*	底部はへラ切り。体部から口縁 部にかけて、直線的に外上方に 立ち上がり口縁部にいたる。	*
* - 629	II層	* 皿		20.0 (6.8)	口縁部は「く」の字形に外反する。 端部は若干上方に拡張される。	口縁部の外面は、ヨコナデ。周 外部はハケ調整。内面は横位 のハケ調整。	A区

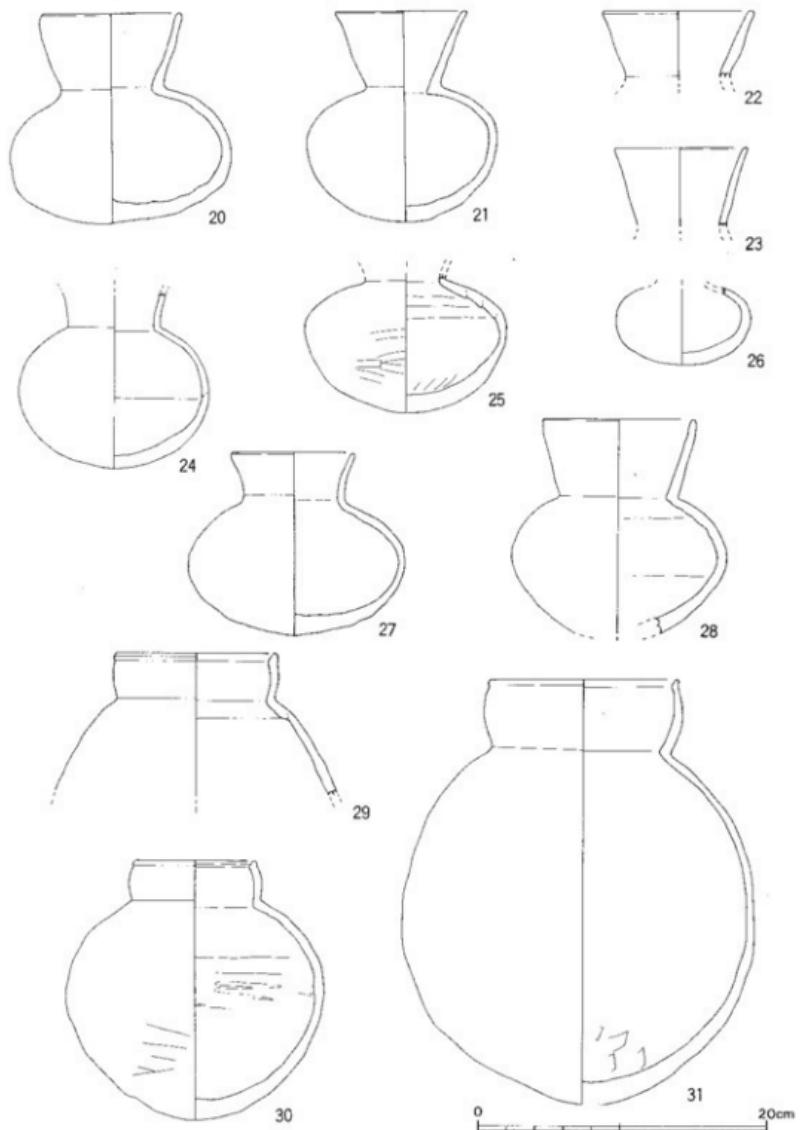
掲載番号	遺傳番号	器種	法長 (cm)	口縁 基部 周径 底深	形態・文様	手法	備考
121-630	S K 1	土師器 甕	15.2 (8.6)	15.2 (8.6) — —	側面中位に横大字を有する。口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。	B区
* - 631	*	*	25.0 (3.5)	25.0 (3.5) — —	口縁部は、外反する。腹部は腹を有する。	口縁部外側は、瓶位のハケ調整。内面は不明。	*
* - 632	*	*	11.8 (3.8)	— — —	*	口縁部内外面は、ヨコナデ。側部内外面は、ナデ調整。	B区 外面に煤付有。
* - 633	*	*	22.5 (5.1)	22.5 (5.1) — —	口縁部は「く」の字状に外反する。腹部は上位に拡張され腹を有する。	口縁部内外面は、ヨコナデ調整。腹部外側は、瓶位。横位のハケ調整。内面は横位のハケ調整。	B区
* - 634	日輪	*	21.6 (9.8)	— — —	側面は直線的に上方に立ち上がる。口縁部外面に貼付の跡を有する。	口縁部は、ヨコナデ。腹部外側は、瓶位のハケ調整。内面は不明だがヨコナデと思われる。	*
* - 635	*	塵	24.3 (8.3)	— — —	口縁部は「く」の字状に外反する。腹部は若干肥厚する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。腹部外側は、瓶位のハケ。内面は横位のハケ調整。	*
* - 636	*	*	20.0 (6.2)	— — —	口縁部外側に貼付の跡を有する。	口縁部内外面は、ヨコナデ調整。	*
* - 637	*	*	18.8 (9.4)	— — —	側部は直線的にやや内傾して上方に立ち上がる。口縁部から貼付された跡を有する。	口縁部内外面は、ヨコナデ。腹部外側は、瓶位のハケ調整。	B区 腹部外側に煤付有。
* - 638	S K 1	*	27.9 (7.8)	— — —	側面は外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。腹部は丸くおきめる。	口縁部外側はヨコナデ、内面はヨコナデ及び横位のハケ調整。腹部外側は、瓶位のタキ。	B区 外向に煤付有。
* - 639	日輪	縦釉陶器 甕	— (2.2)	— — —	全体は大きく外上方に立ち上がる。底部は、蛇ノ目向台。	全面に縦釉が施される。	B区
* - 640	*	白磁 甕	— (1.8)	— — —	削り出し高台。高台は「ハ」の字状に開く。	内面に若干青入がはいる。 外側は無釉。	D区
* - 641	S K 1	土師器 甕	— (2.3)	— — — — — — — 7.8	貼付高台で、「ハ」の字状に開く。 全体は外上方に立ち上がる。	外底はへタ切り。全体はヨクロナデ調整。	B区

辨回答号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口徑 器高 肩径 底径	形態・文様	手法	備考
122-642	S K 1	須恵器 杯(倉)		14.0 2.1 2.4	口縁部は下外方へ下り、端部で屈曲し外折する。端部は丸い。 大井部は平らで、中央部に擬宝珠形のつまみが付く。	マキアゲ。ミズビキ成型。 天井部1/2、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	B区
* - 643	Ⅱ層	*		12.4 2.0 2.2	*	マキアゲ。ミズビキ成型。 天井部内圓、ナダ調整。 他は回転ナダ調整。	D区
* - 644	*	*		19.0 (1.5)	口縁部は下外方へ下り、端部で屈曲し、済部は鋸歯状。 天井部は平ら。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底存部は同柱ナダ調整。	B区
* - 645	*	*		11.4 4.3 7.2 0.5	体部、口縁部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は下り、底部端部にはハの字形に聞く高台を付す。 高台端部は外傾する平面を成す。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底部外圓、ヘラ切りの後、ナダ調整。他は回転ナダ調整。	*
* - 646	V層	*		13.8 8.4 8.4 0.5	体部、口縁部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は下りで、底部端部にはハの字形の高台を付す。 高台端部は外傾と下方を聞く平面を成す。	*	D区
* - 647	Ⅲ層	*		12.3 4.0 7.0 0.5	体部、口縁部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は下りで、底部端部に大きくハの字形に聞く高台を付す。 高台端部は外傾する平面を成す。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底部外圓、ヘラ切り。 他は回転ナダ調整。	*
* - 648	*	*		13.0 3.0 7.4	体部、口縁部は内凹気味にのび、端部は丸い。 底部は下り平ら。体部外側には火打しきがかかる。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底部外圓、ヘラ切りの後、ナダ調整。他は回転ナダ調整。	B区
* - 649	*	*		12.0 3.4 7.0	体部、口縁部は上外方へのび、端部で小刻み外反し、端部は丸い。 底部は下り平らであるが、ヘラ切りの際の内凸が残る。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底部外圓、ヘラ切り。他は回転ナダ調整。	*
* - 650	I層	*		15.4 1.6 11.0	体部は下外方へのび、口縫部は外折面で外折し、端部は鋸歯状。 底部は平ら。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底部外圓、ヘラ切り後、ナダ調整。他は回転ナダ調整。	C区
* - 651	Ⅱ層	*		16.2 2.4 12.8	体部、口縁部は上外方へのび、端部で内側に若干折り曲げる。端部は丸い。 底部はほぼ平らで、中央部がくぼむ。	*	T R 14
* - 652	*	*		16.4 (2.1) 13.2	体部、「I」縫部は下外方へのび、端部は鋸歯状。 底部は平ら。	*	D区
* - 653	*	*		12.0 3.6 7.2 2.6	体部、口縁部は上外方へのび、端部は丸い。 底部は平らで、大きさのハの字形に聞く高台が付く。端部は外傾する平面を成す。	マキアゲ。ミズビキ成型。 底底部内圓、ナダ調整。他は回転ナダ調整。	D区 燒成時の歪が部分的に残る。
* - 654	*	*		(5.4)	体部は、底大徑を体部中位より上に求めることができる。体部最大径後は下外方へ下り、底部は平ら。 底縫部にはややハの字形に聞く高台が付く。端部は下方を聞く円窓を成す。	マキアゲ。ミズビキ成型。 体部外圓中位には回転カキ目調整。体部外圓下位に回転ヘラ削り調整。底部外圓斜ヘラ削り。 他は回転ナダ調整。	B区 外圓部分的に自然焼成。
* - 655	*	*		(4.2)	体部下位は下内方へ下り。底部は平ら。 底縫部にはハの字形に聞く高台が付く。端部は外傾する焼成窓面を成す。内側で接地する。	マキアゲ。ミズビキ成型。 体部外圓下位、回転ヘラ削り調整。他は回転ナダ調整。	B区

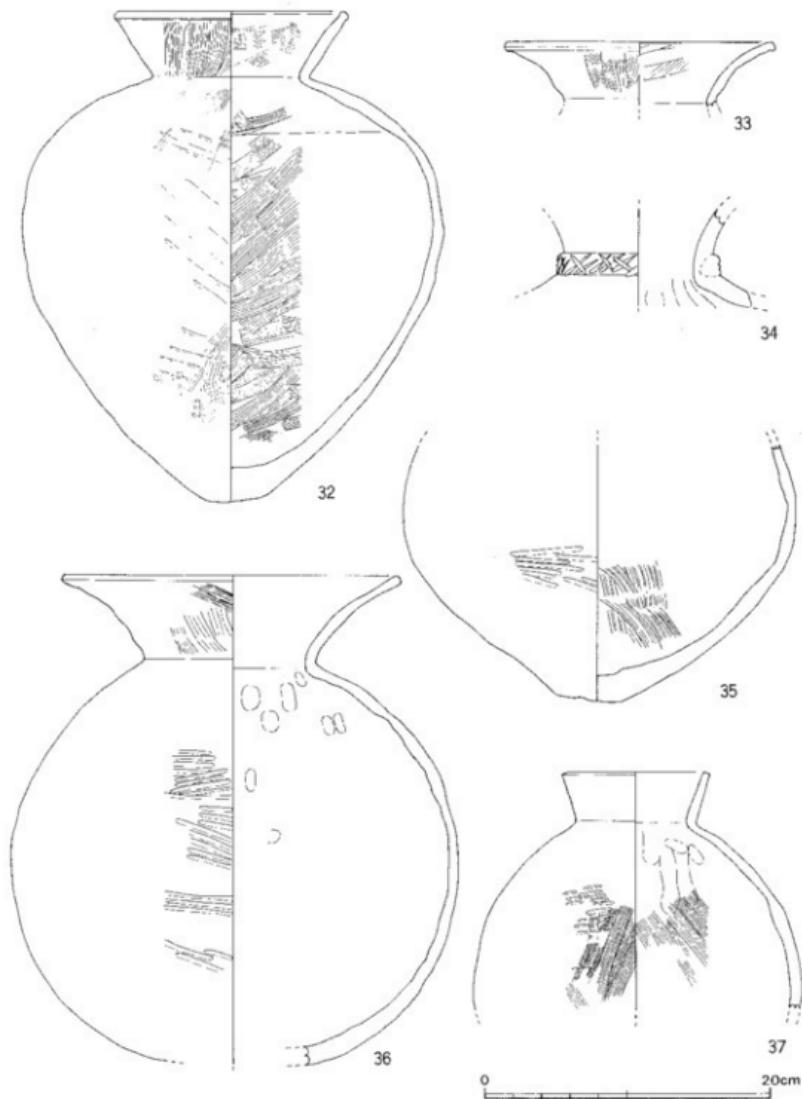
辨認番号	遺構番号	器種	長径(cm) 短径(cm) 厚さ(cm) 重量(g)	石 材	特 徴	備 考
127-831	IV層	叩石	10.0 9.2 4.7 660	砂 岩	河原石を使用しており、表裏両面に敲打痕が、顯著に認められる。長縫部の一側にも敲打痕が認められる。	E区
◆-832	V層	◆	12.5 11.4 6.0 127	◆	河原石を使用しており、表裏両面に敲打痕が、顯著に認められる。縫部には認められない。	A区
◆-833	II層	砾石	13.5 3.7 3.5 260	砂質泥岩	断面長方形を呈し、3面を使用している。	B区
◆-834	◆	◆	26.1 18.6 6.7 4600	砂 岩	表面は、自然面で3カ所にわたり、顯著に研磨されている。裏面は剥離面で使用されていない。長縫部の片面も研磨されている。	◆
◆-835	IV-1層	◆	27.9 11.2 5.9 2500	◆	断面方形を呈する。3面を研磨され使用されている砾石であるが、軽用されており、熱をうけ、赤色化及び黒化している部分がある。	F区



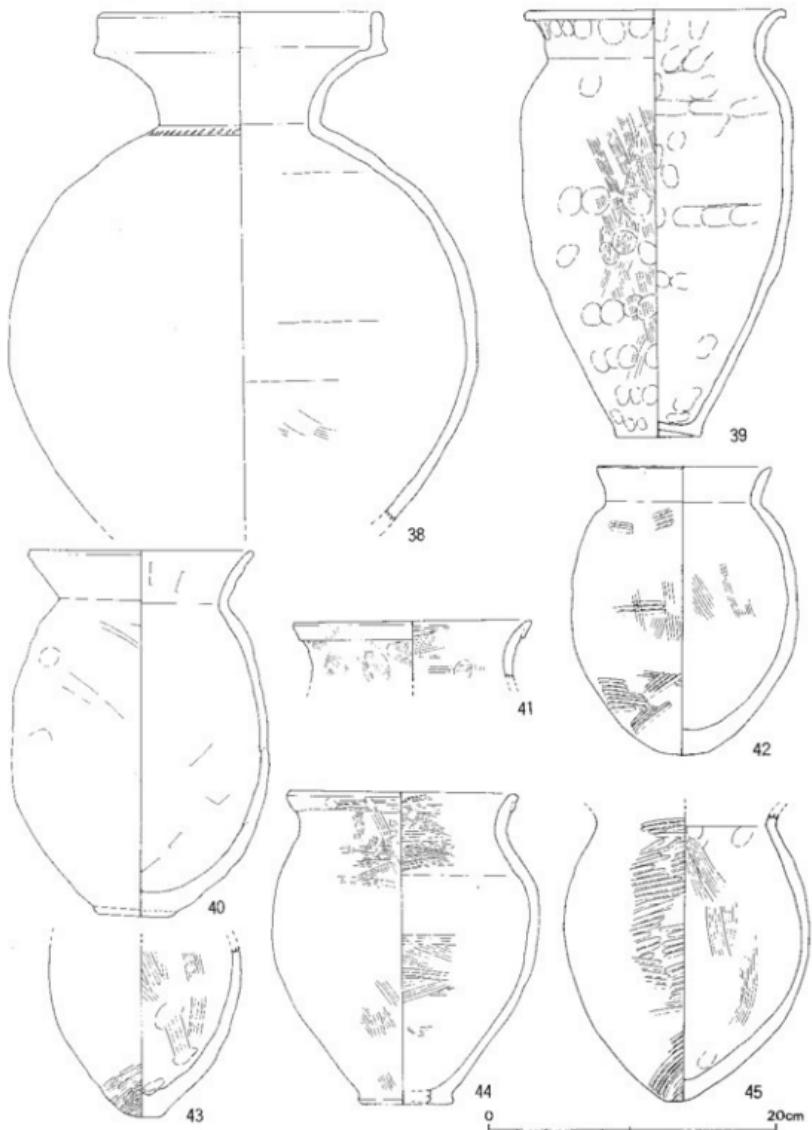
第73図 弥生土器実測図



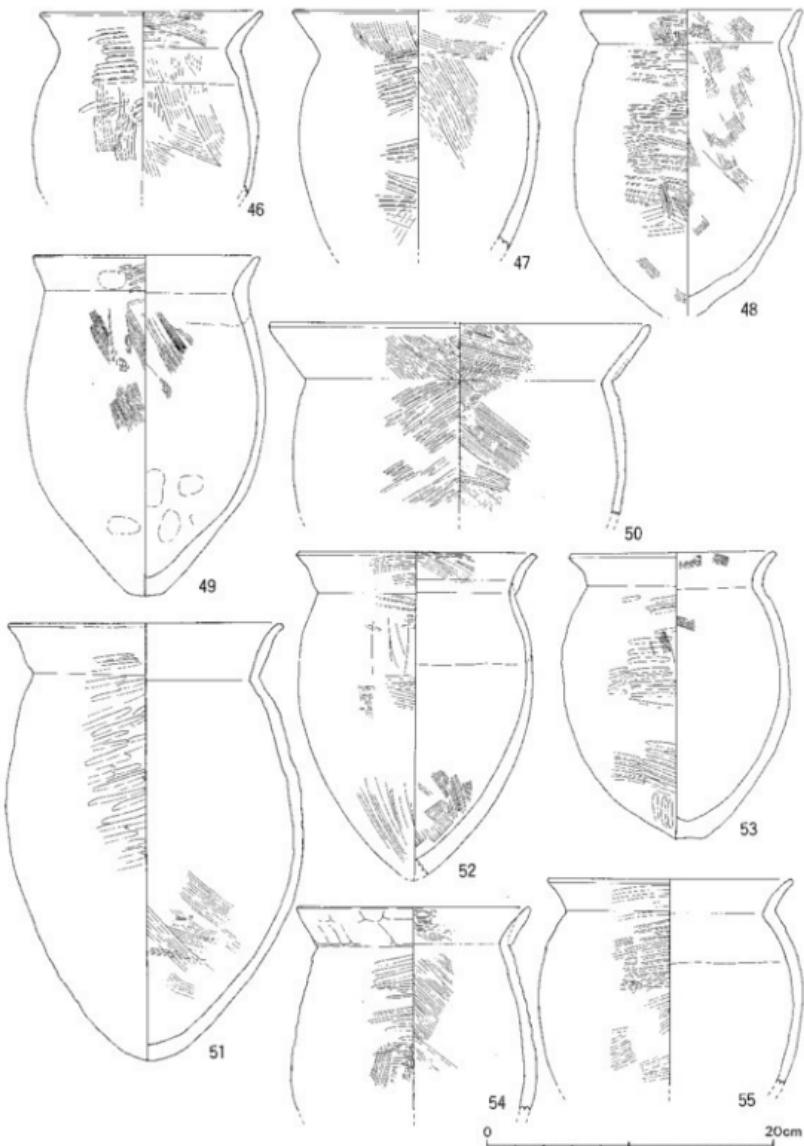
第74図 土師器実測図



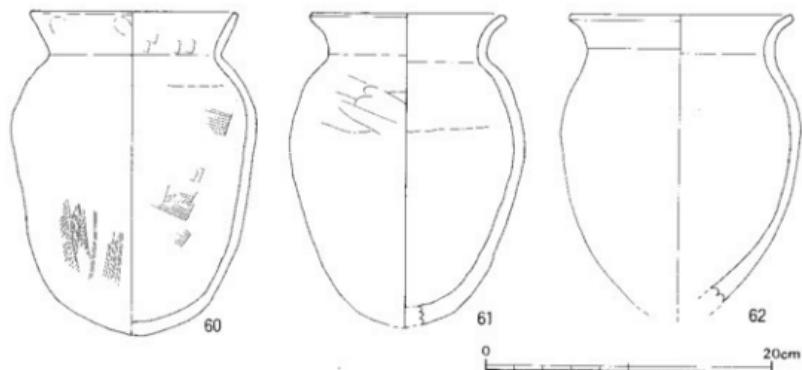
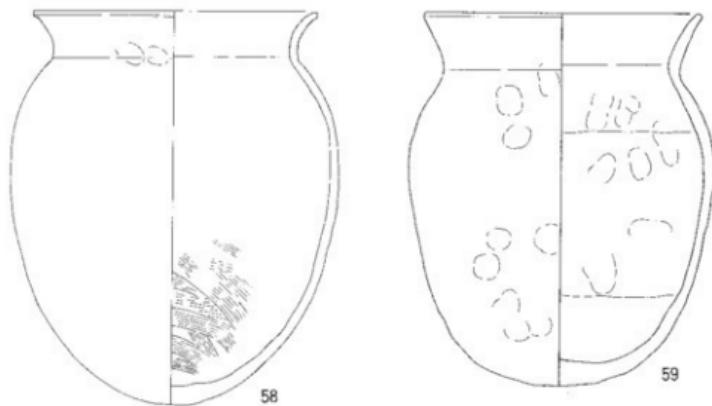
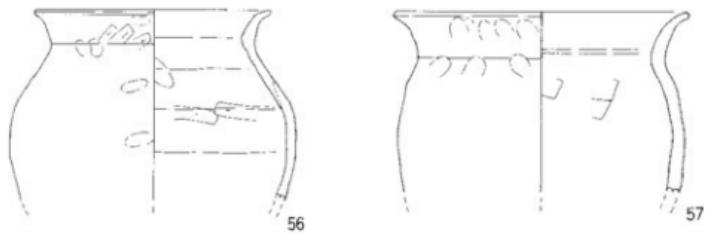
第75図 土器実測図



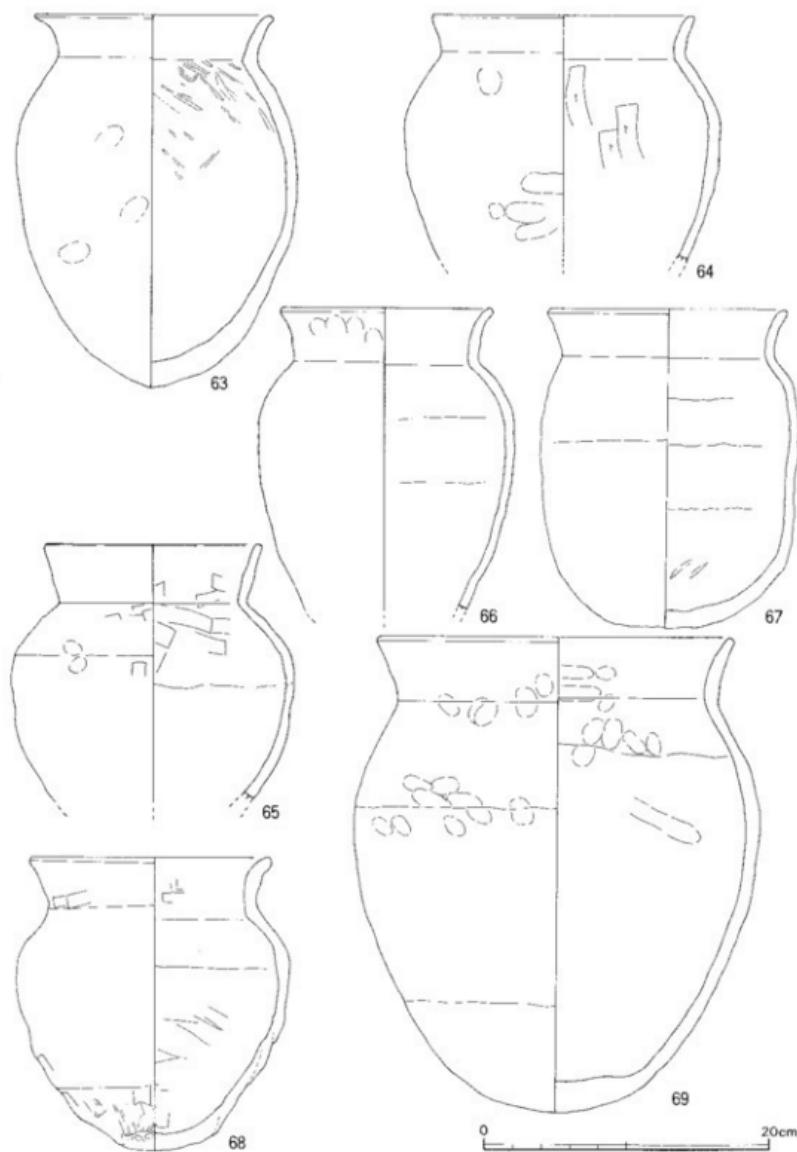
第76図 土器実測図



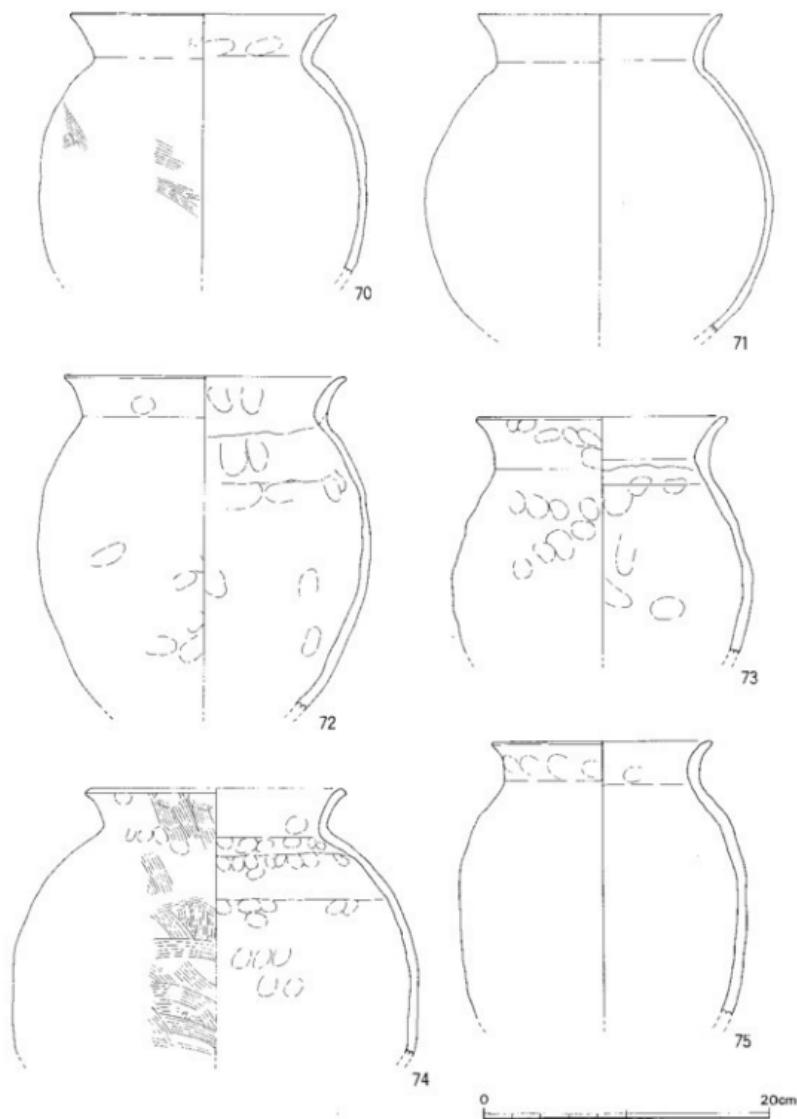
第77図 土師器実測図



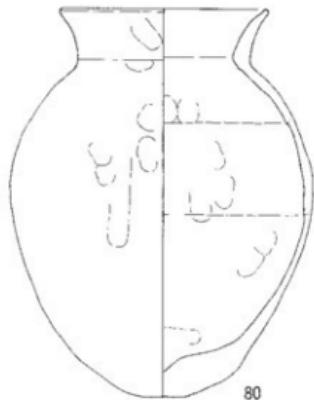
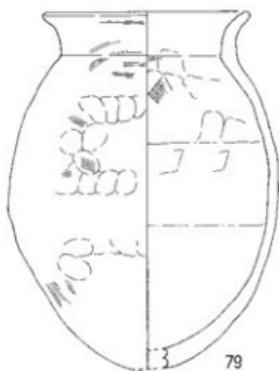
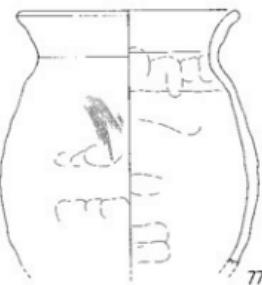
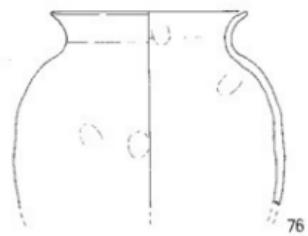
第78図 土器実測図



第79図 土師器実測図

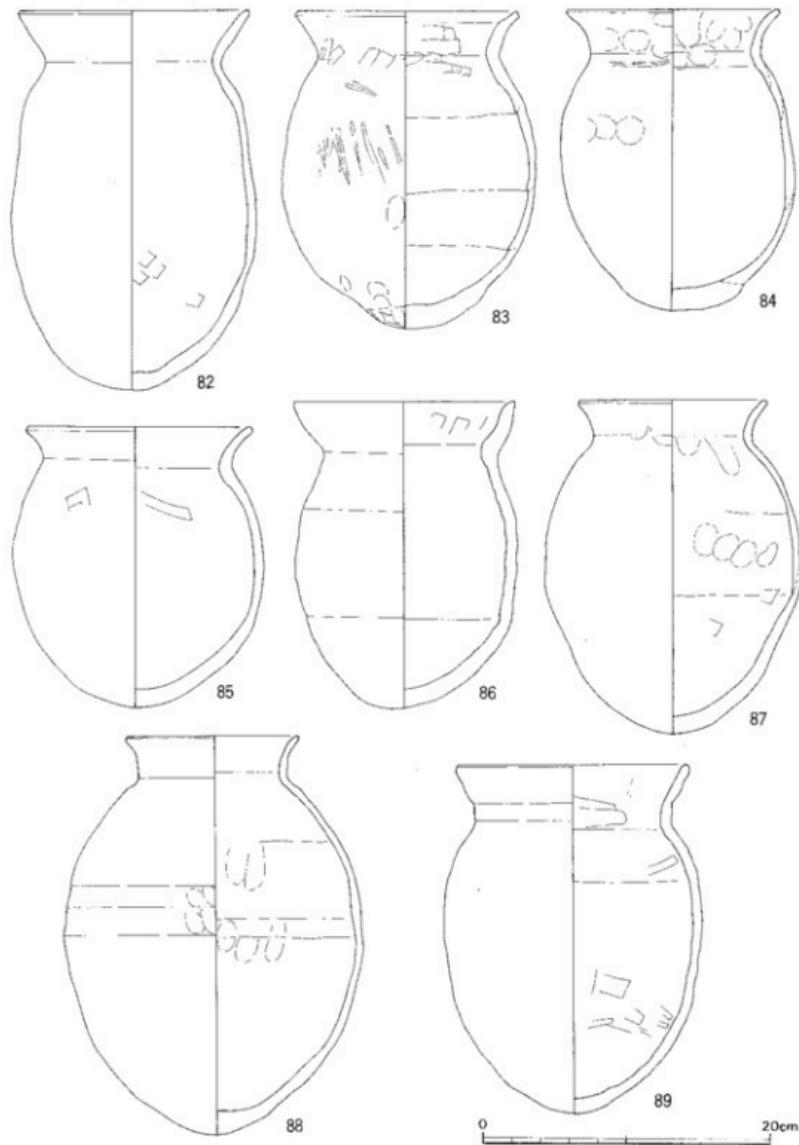


第80図 土師器実測図

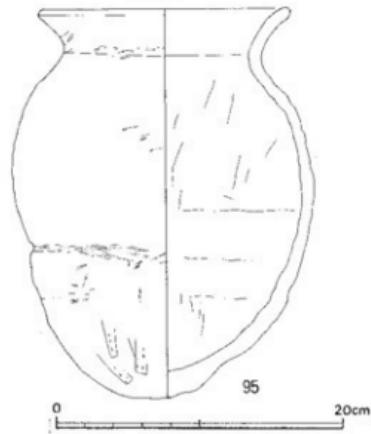
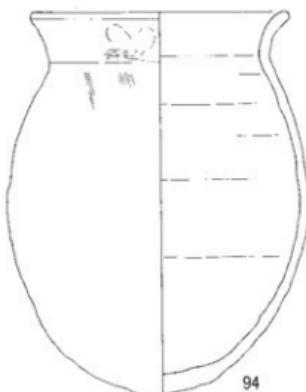
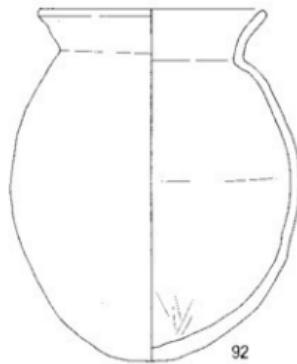
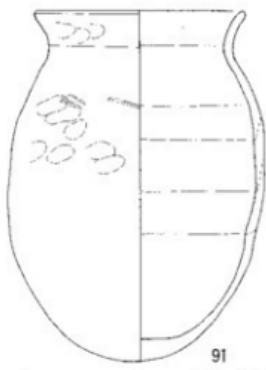
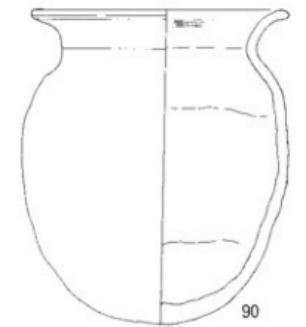


0 20cm

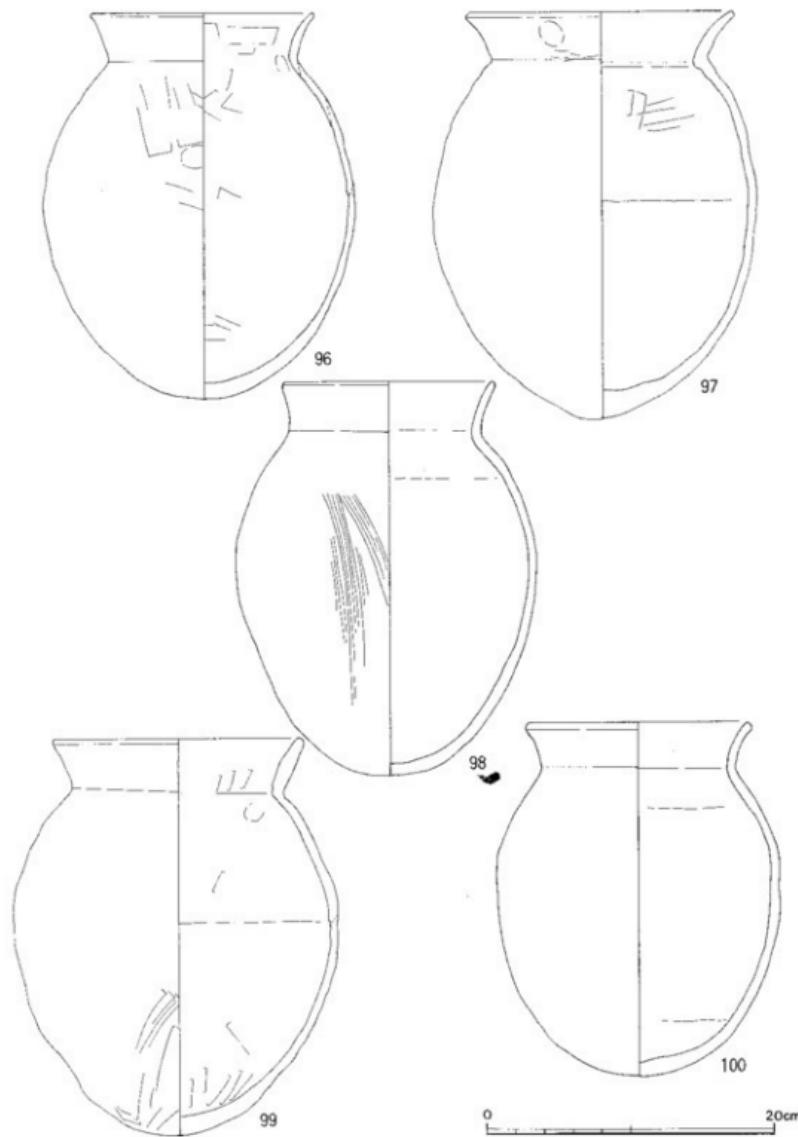
第81図 土師器実測図



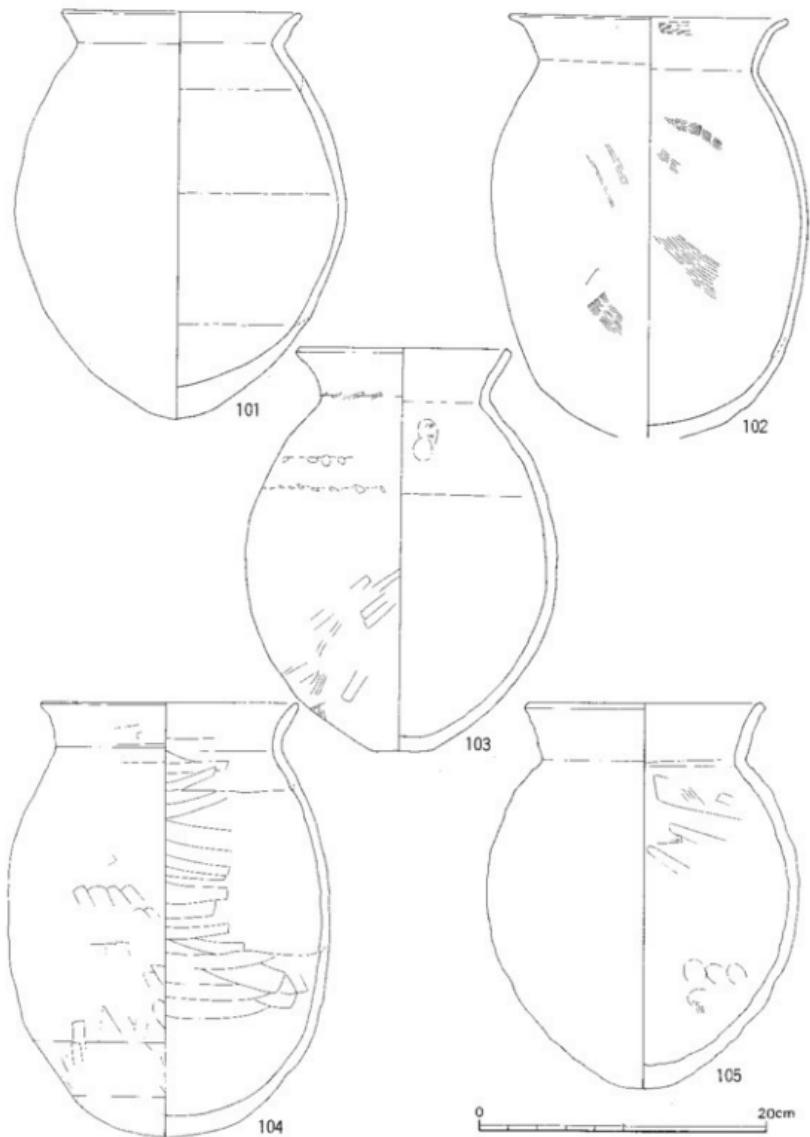
第82図 土師器実測図



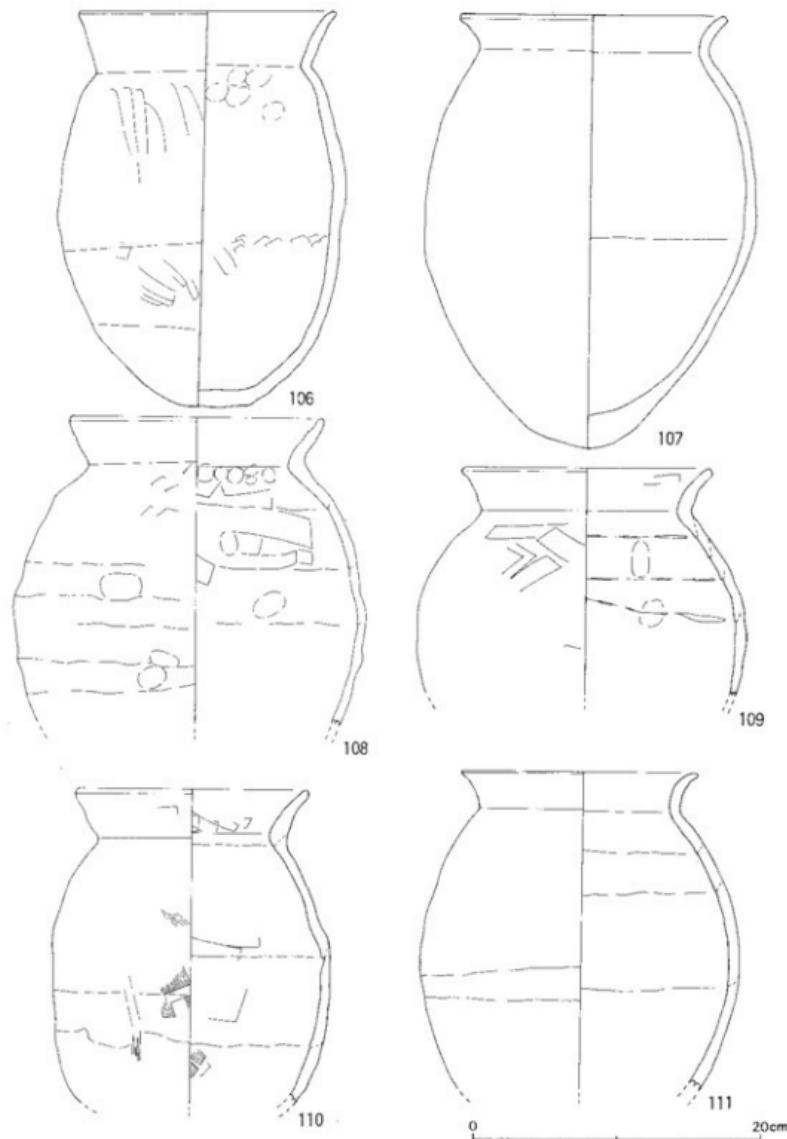
第83図 土師器実測図



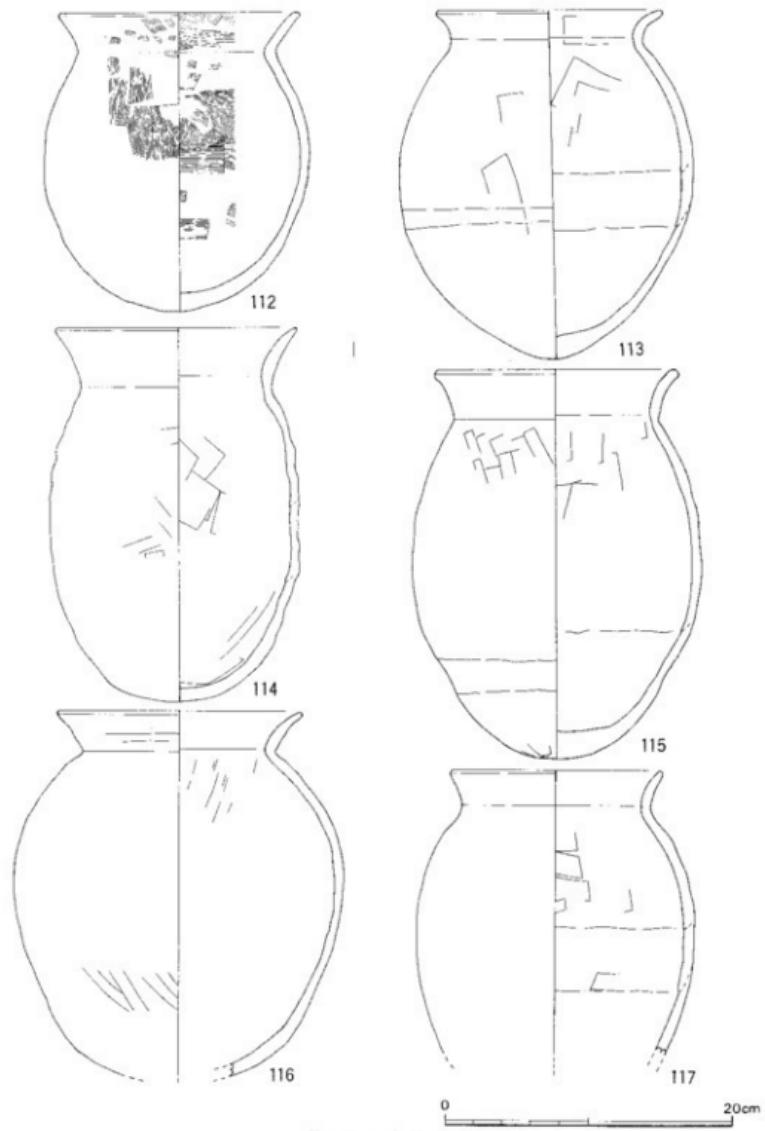
第84図 土師器実測図



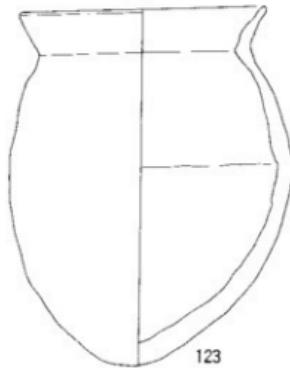
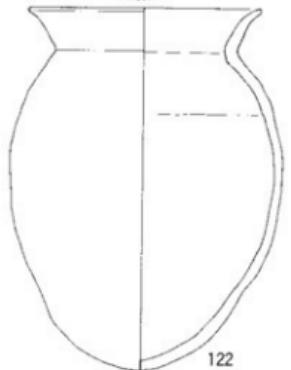
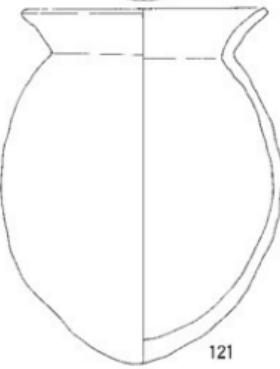
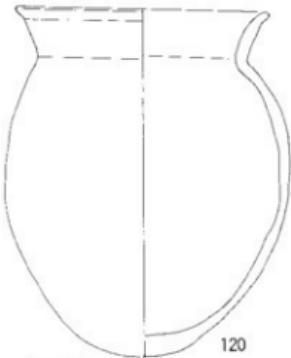
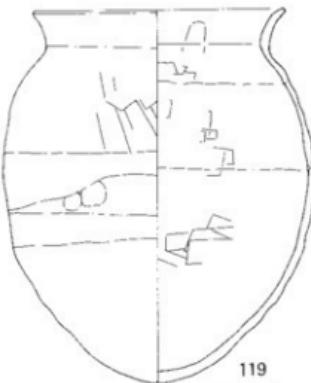
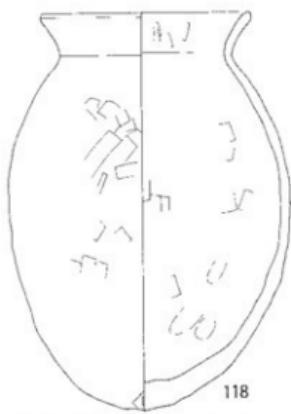
第85図 土師器実測図



第86図 土器実測図

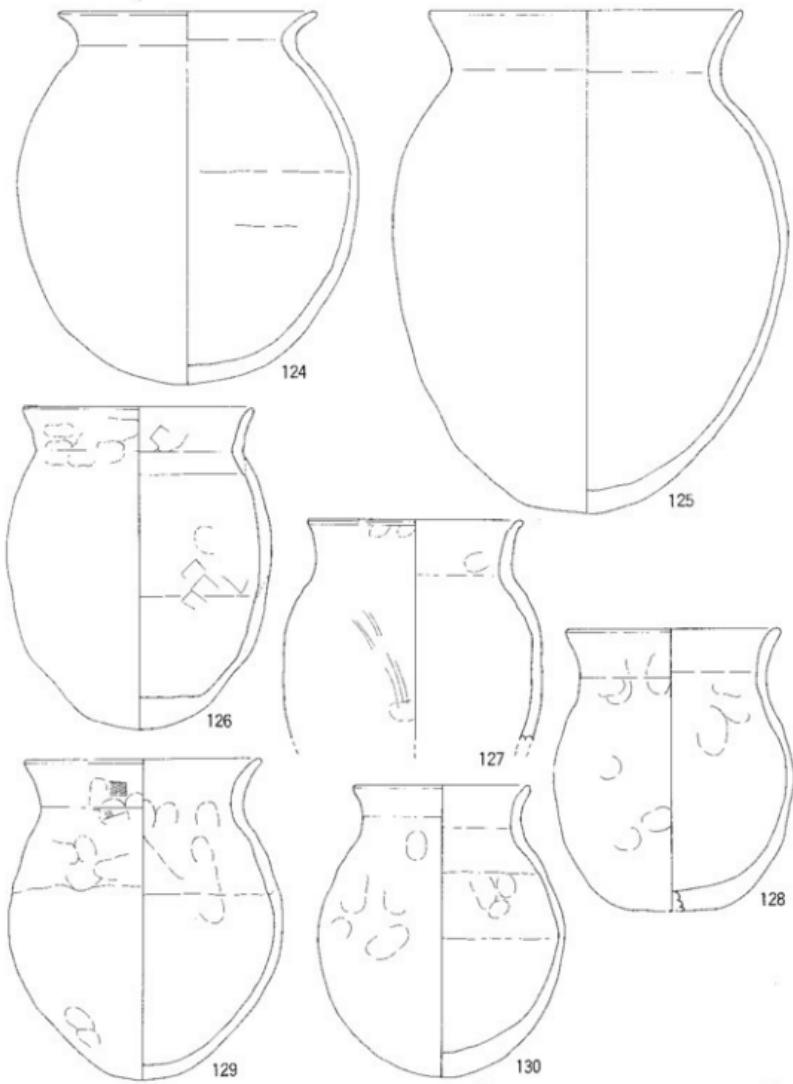


第87図 土師器実測図

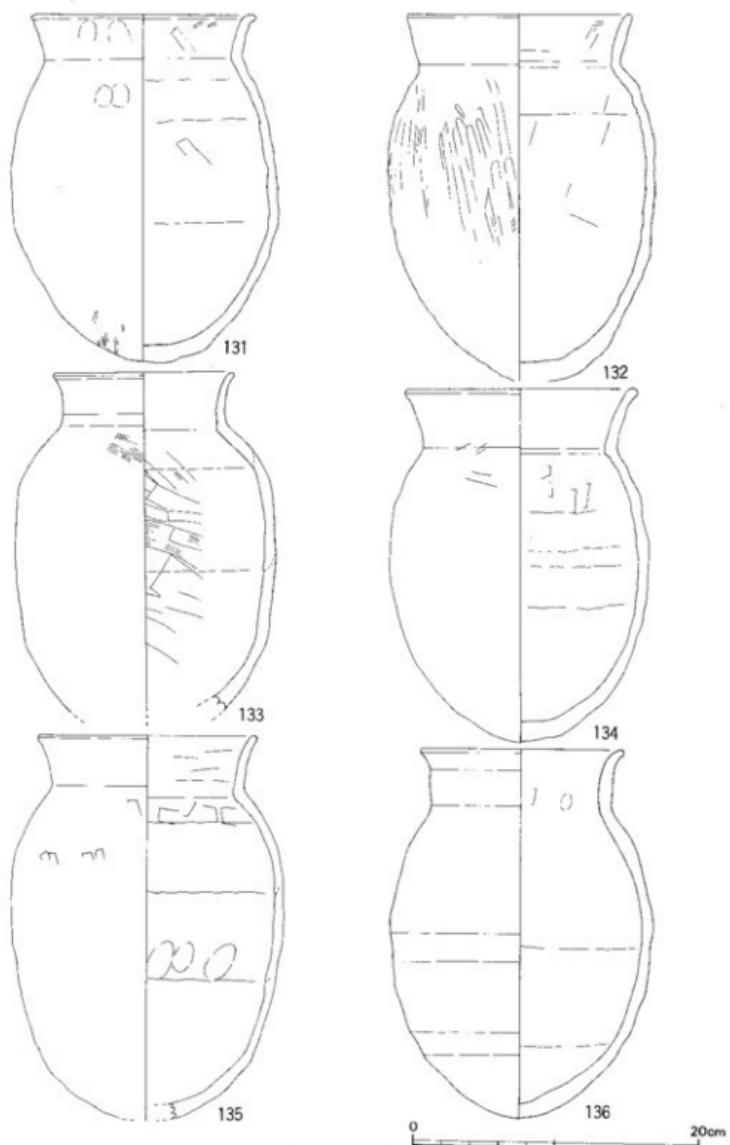


0 20cm

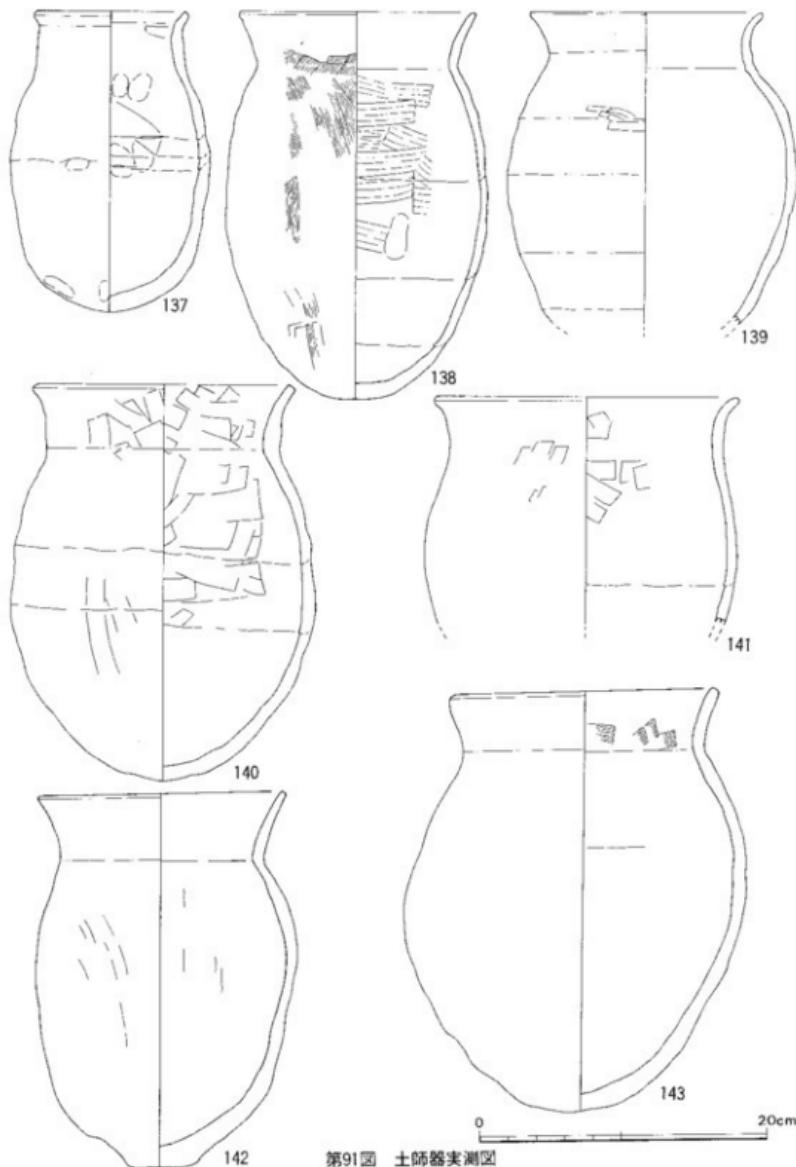
第88図 土器実測図



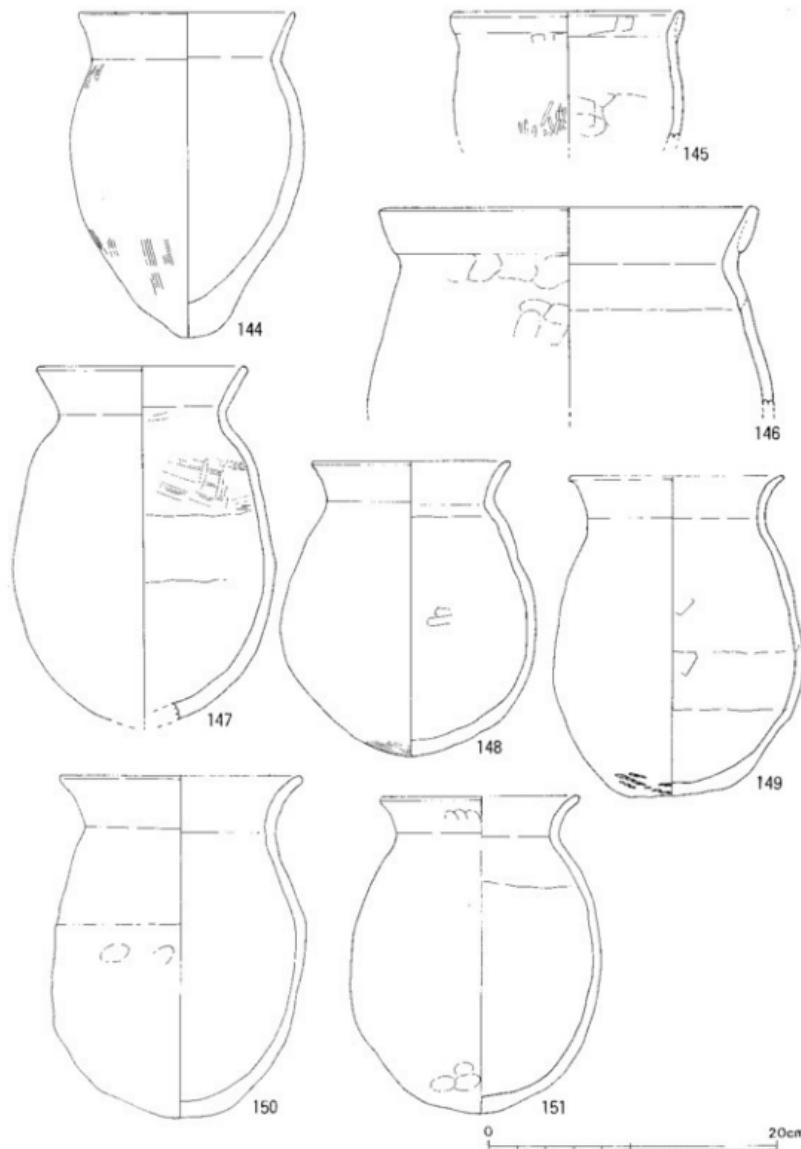
第89図 土師器実測図



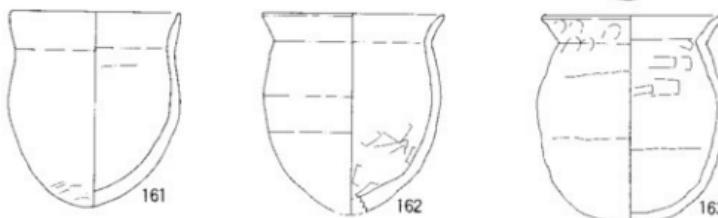
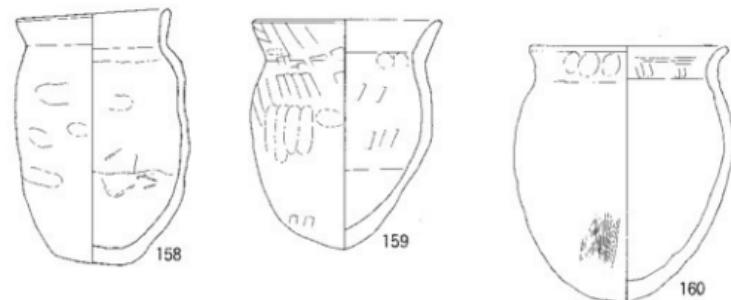
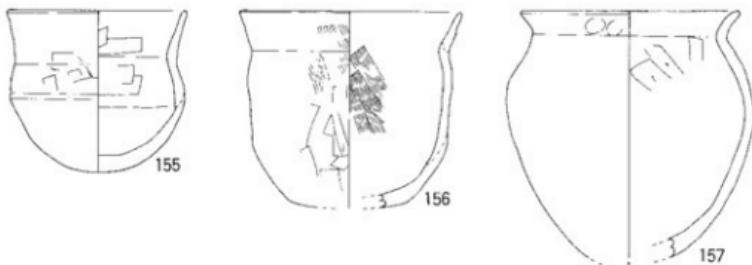
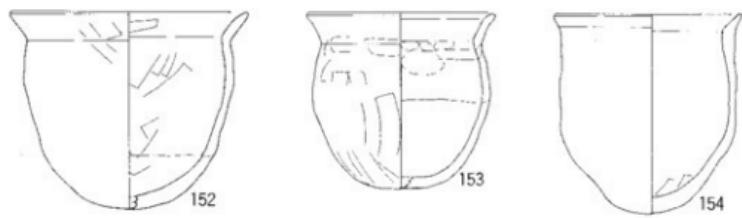
第90図 土器実測図



第91図 土師器実測図

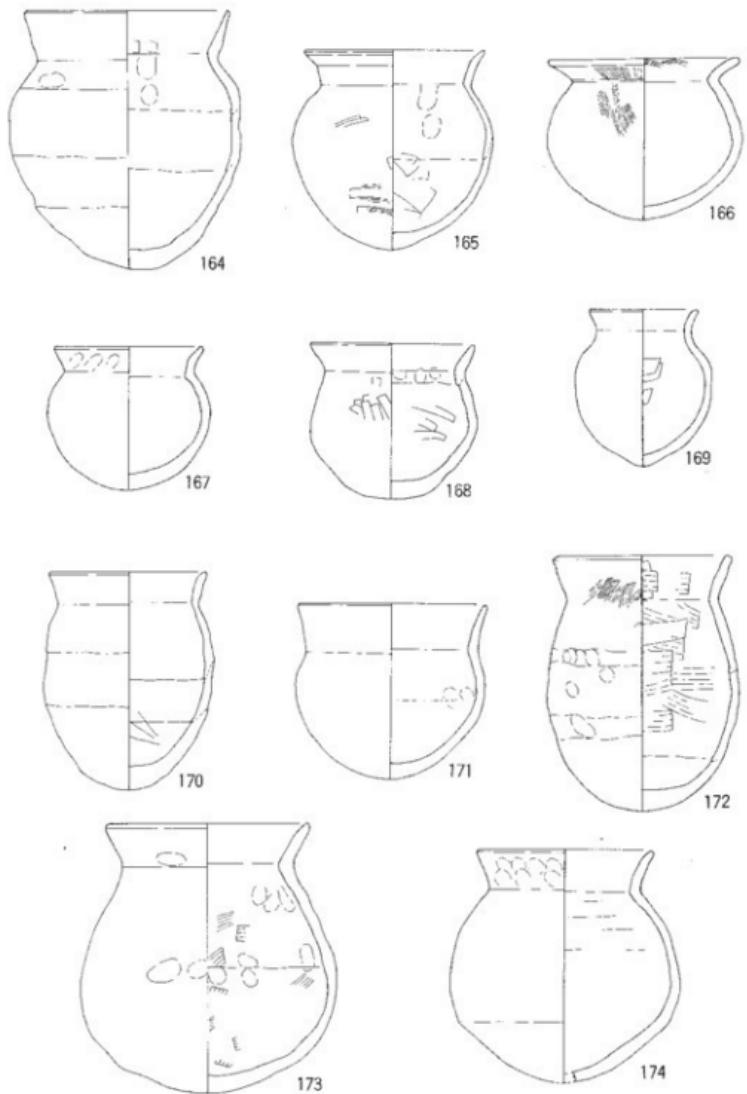


第92図 土器実測図

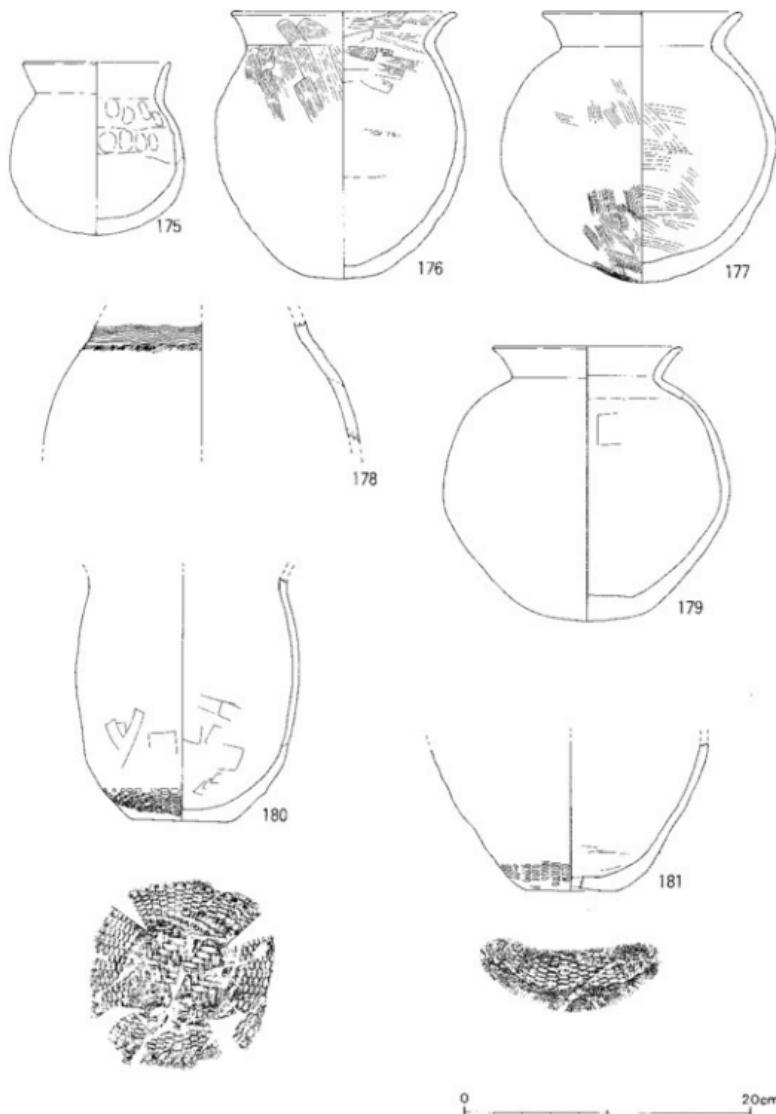


0 20cm

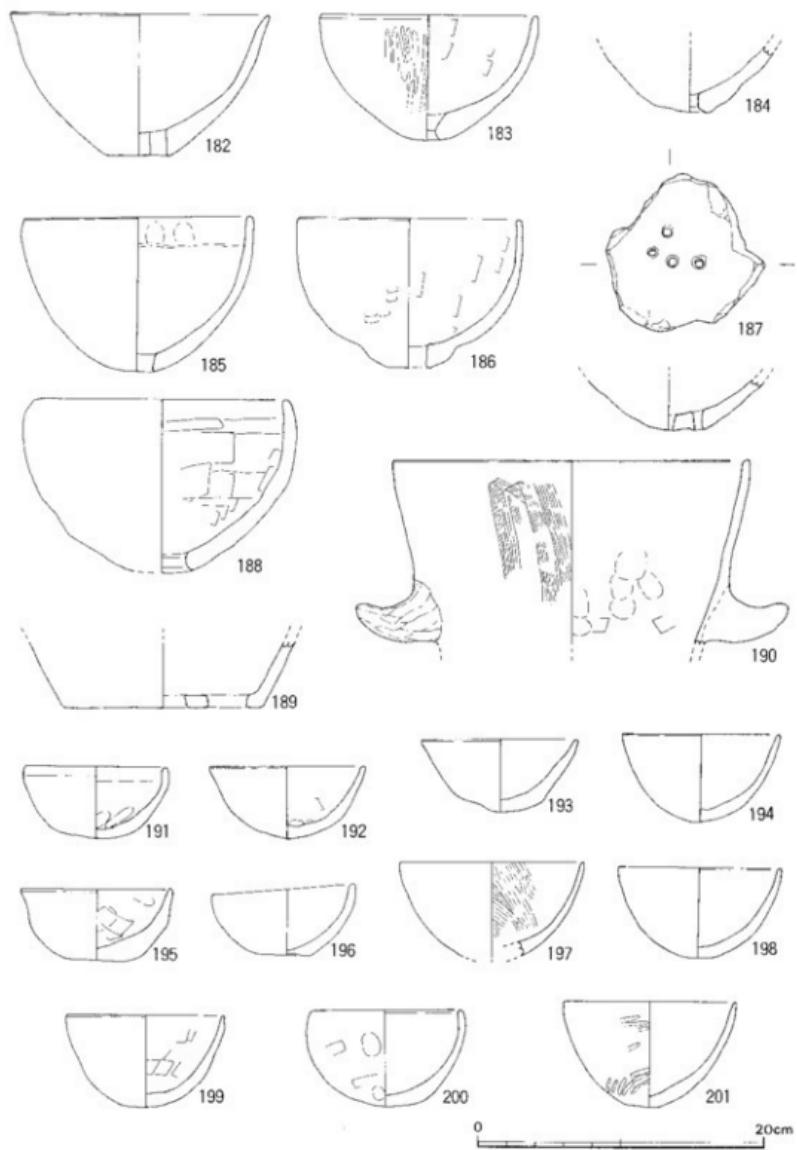
第93図 土師器実測図



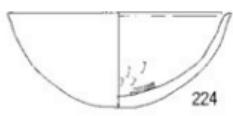
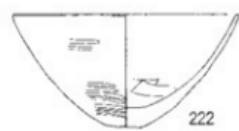
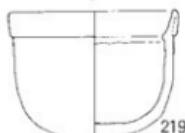
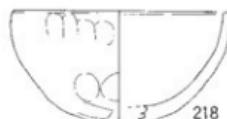
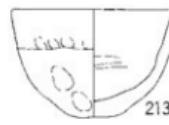
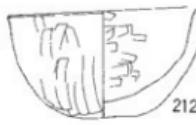
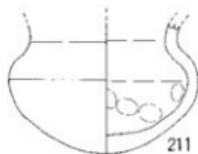
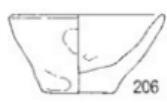
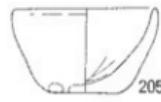
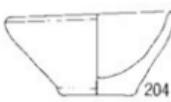
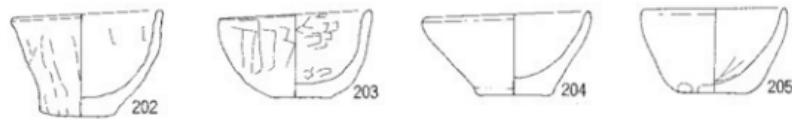
第94図 土師器実測図



第95図 土師器実測図

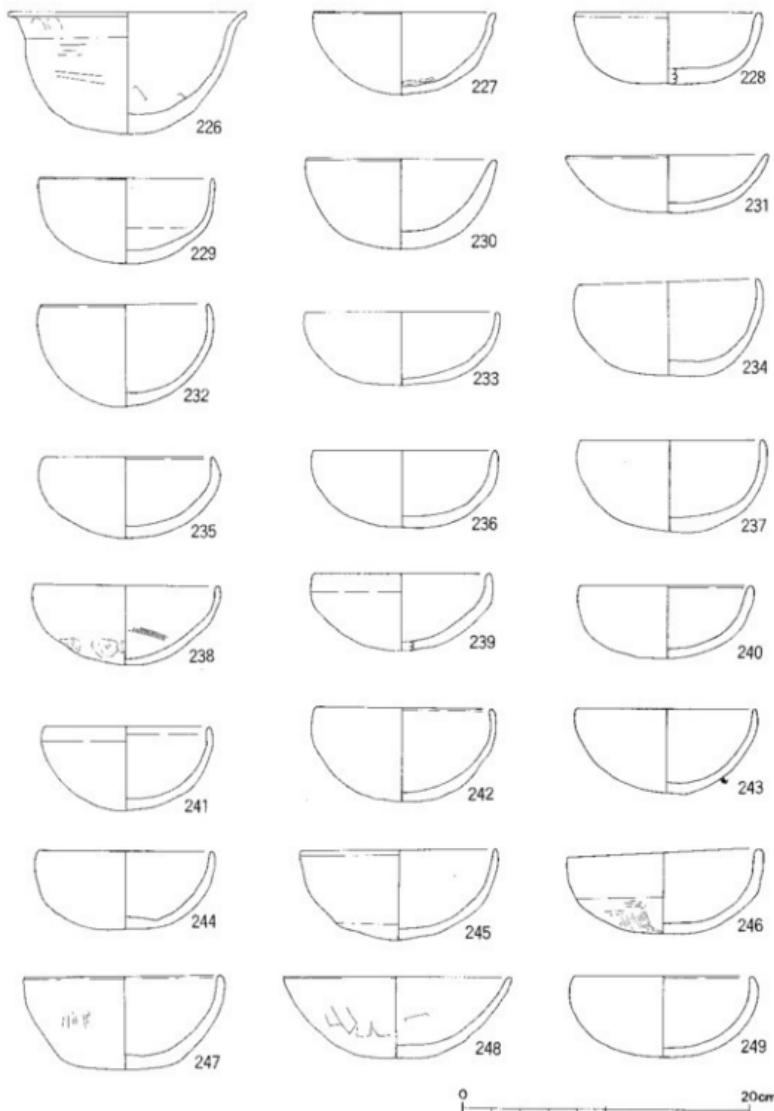


第96図 土器実測図

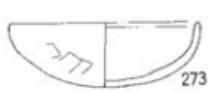
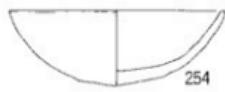
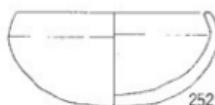
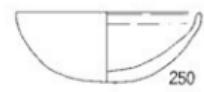


0 20cm

第97図 土器実測図

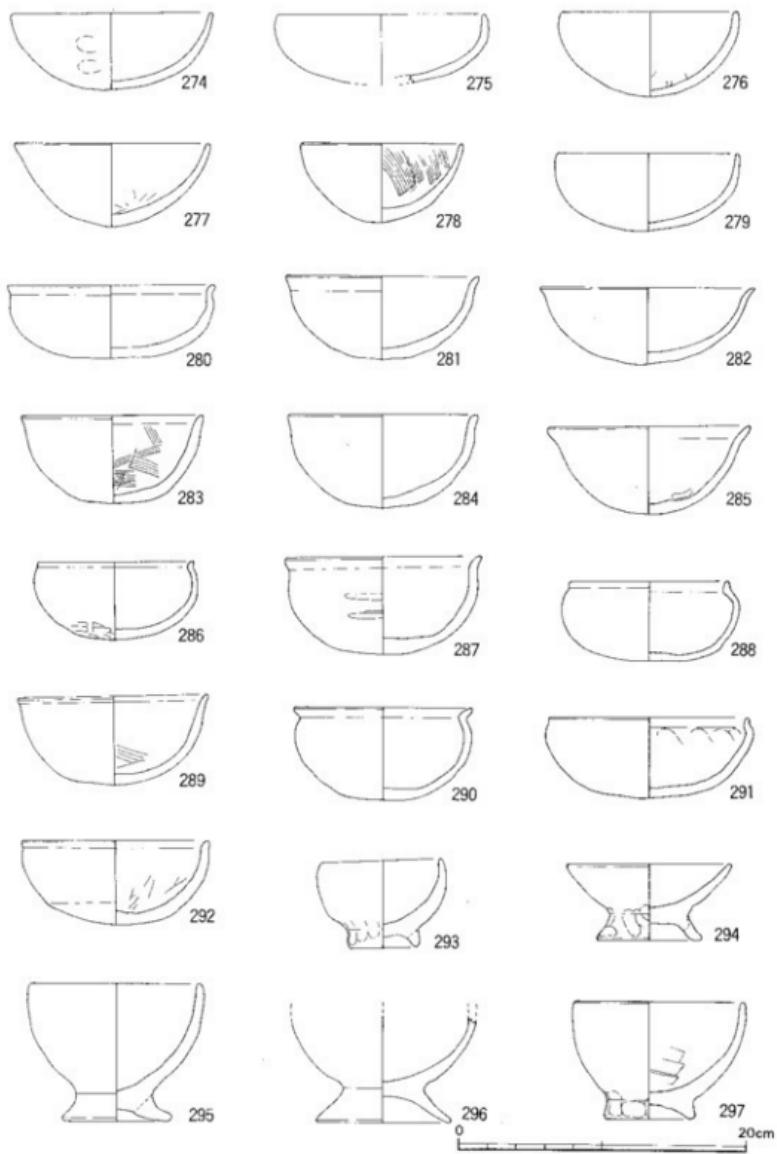


第98図 土器実測図

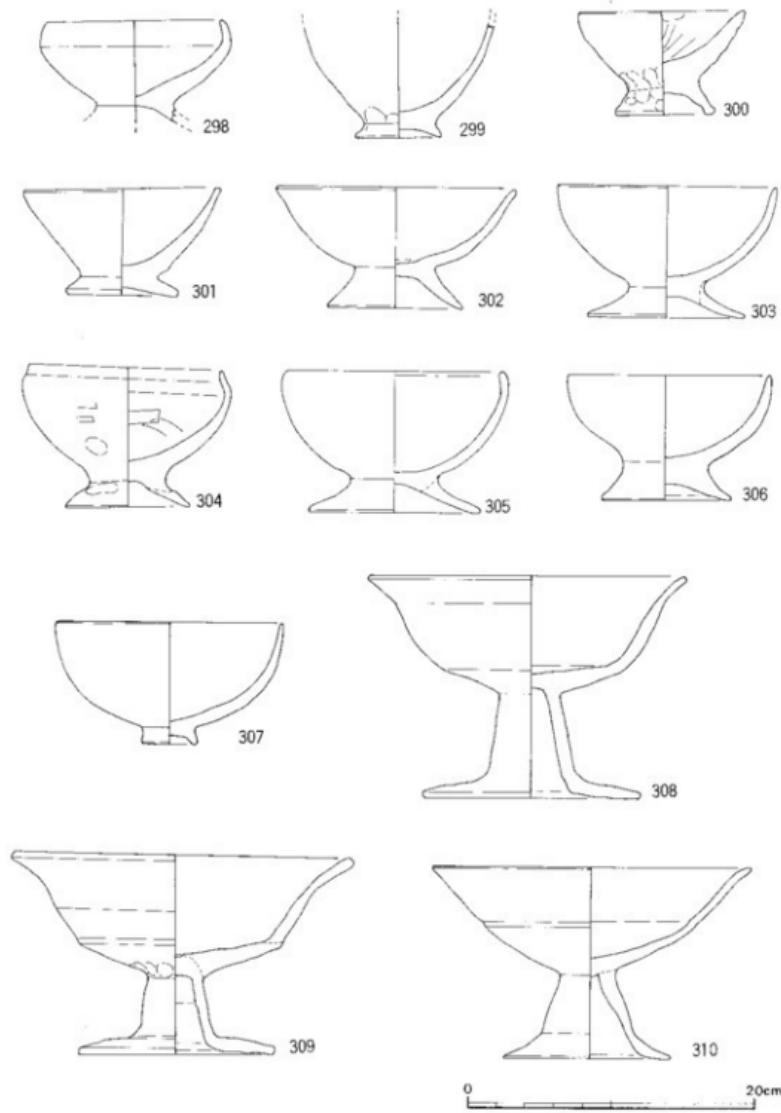


0 20cm

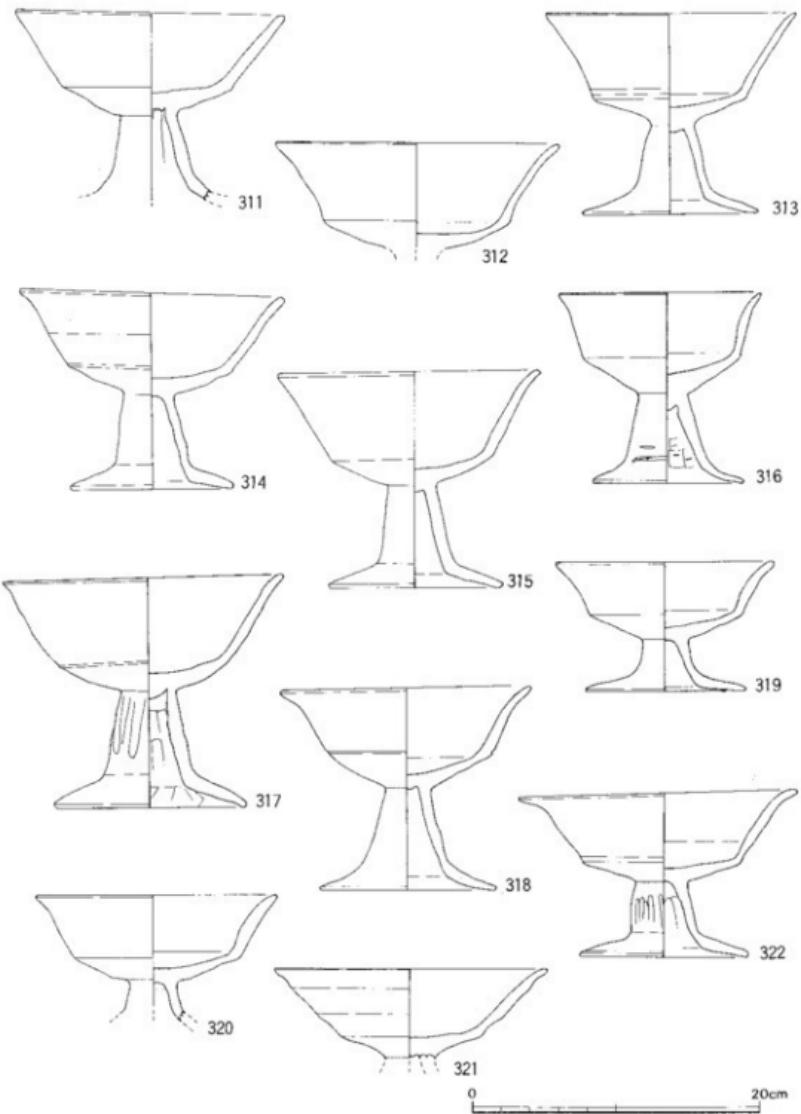
第99図 土器実測図



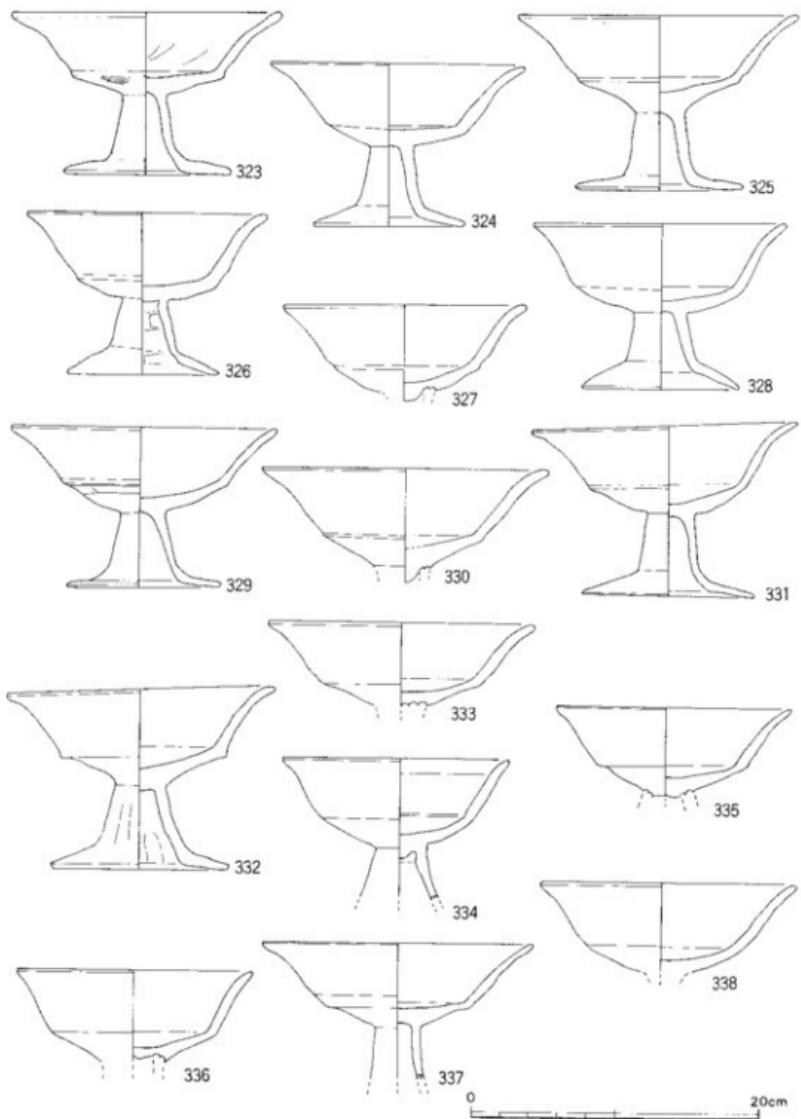
第100図 土器実測図



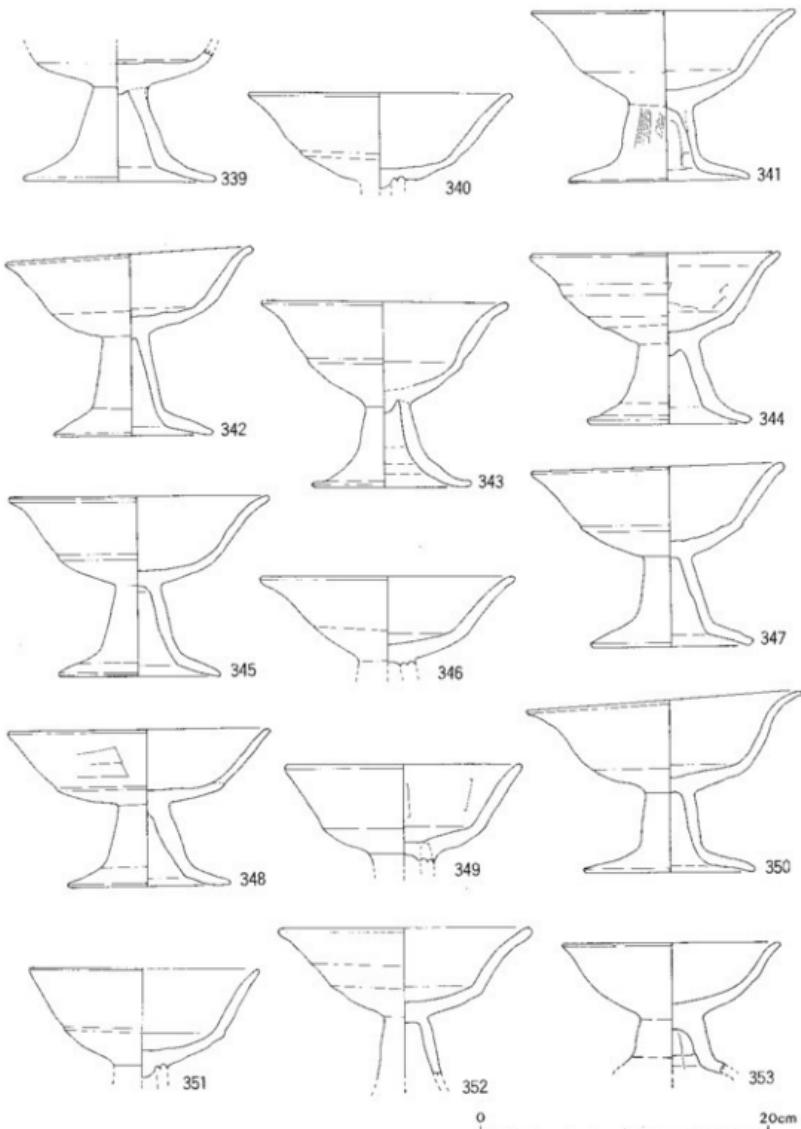
第101図 土師器実測図



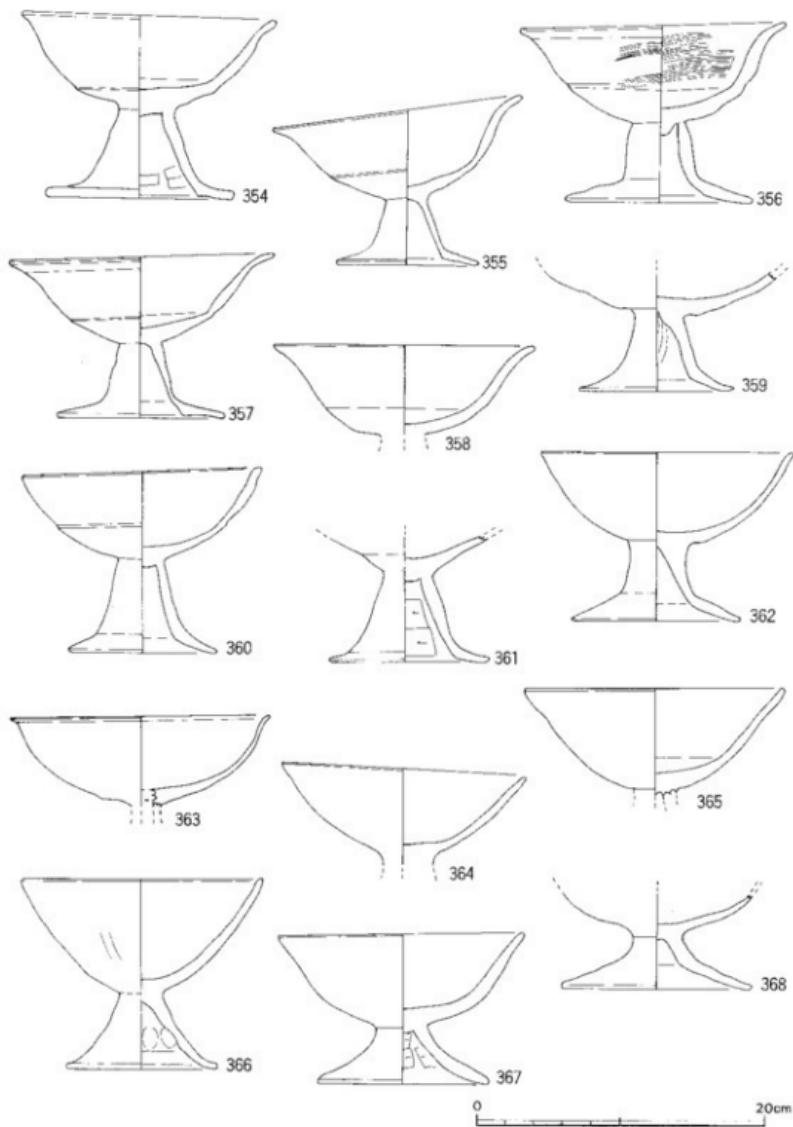
第102図 土器実測図



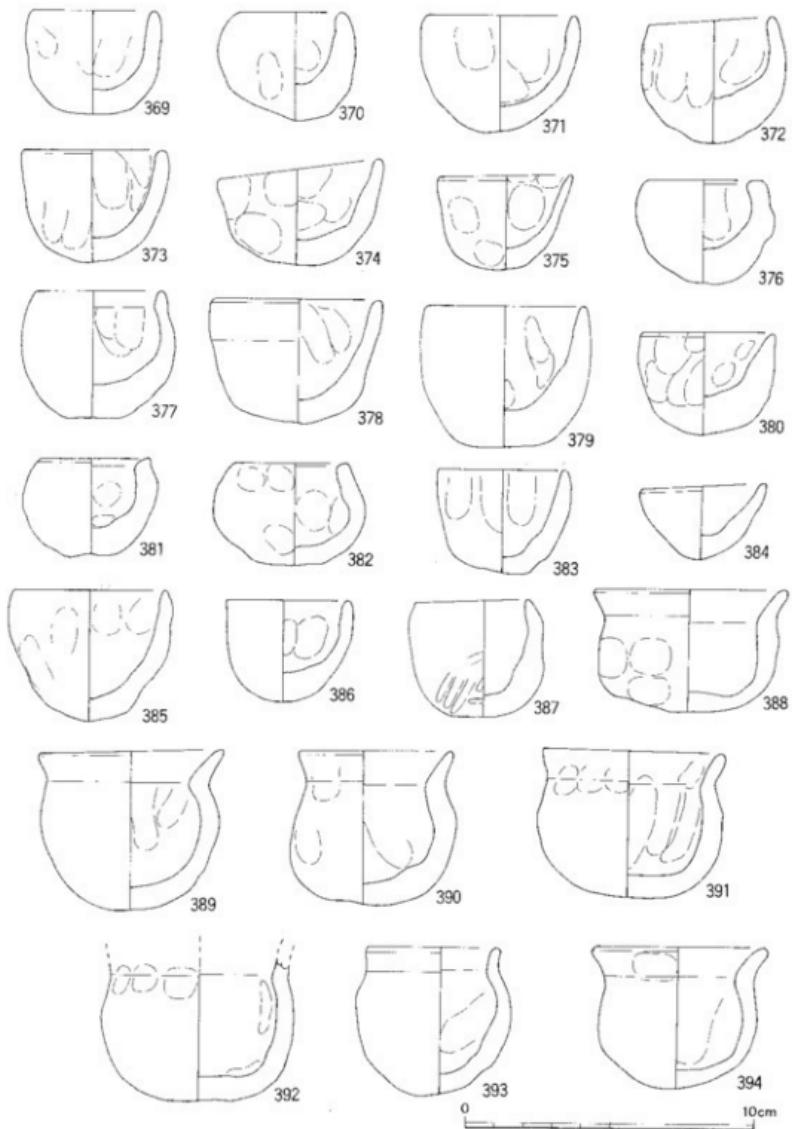
第103図 土師器実測図



第104図 土師器実測図

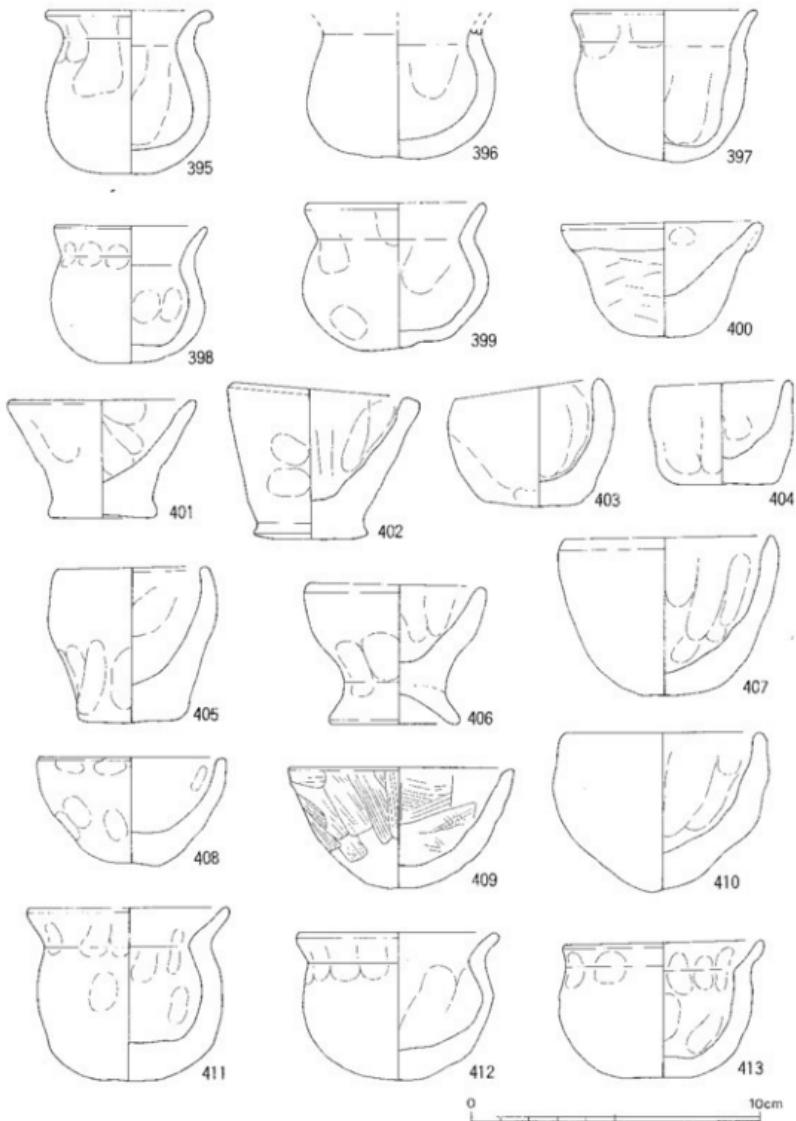


第105図 土師器実測図

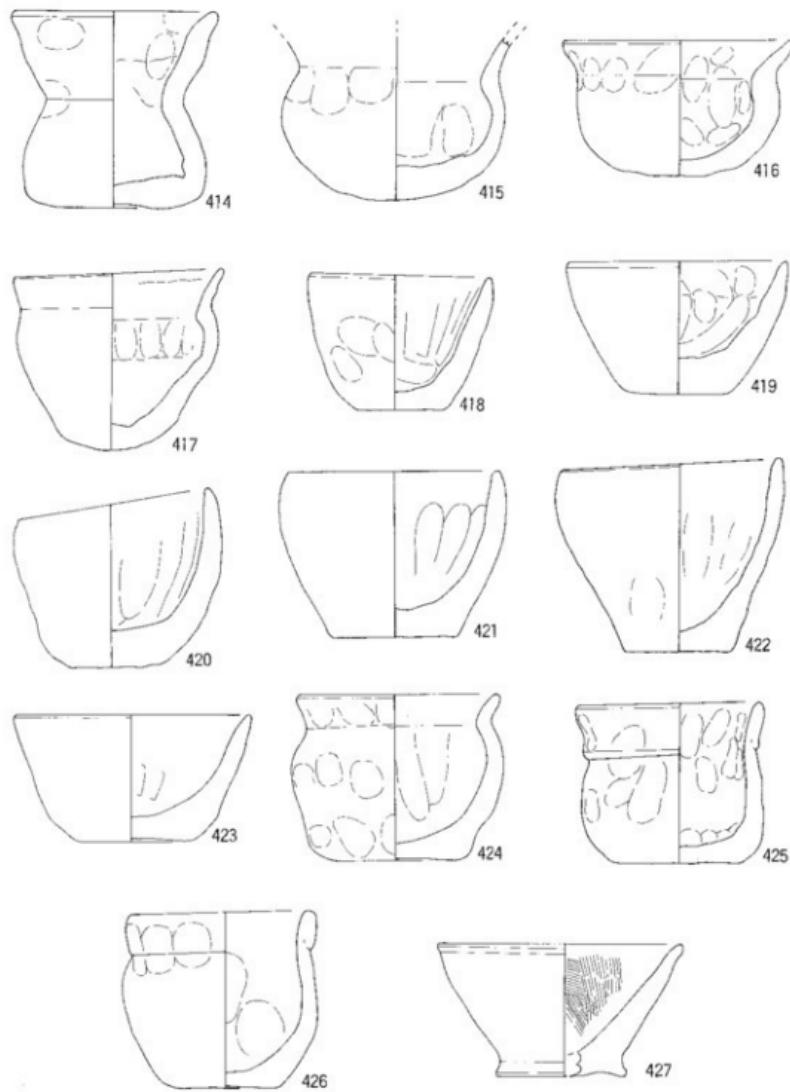


第106図 手捏土器実測図

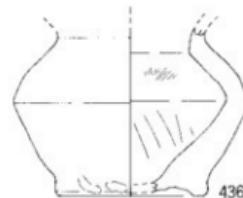
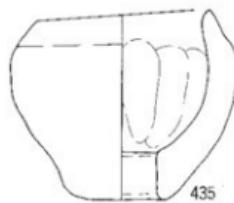
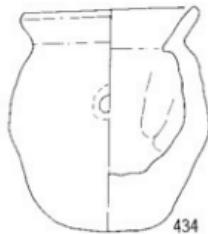
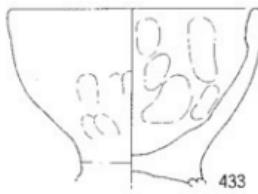
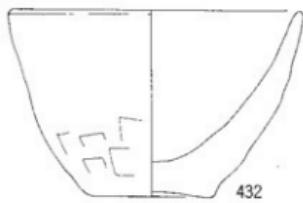
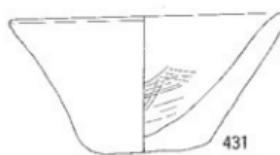
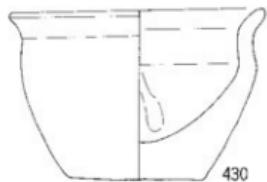
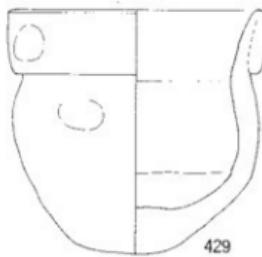
0 10cm



第107図 手捏土器実測図

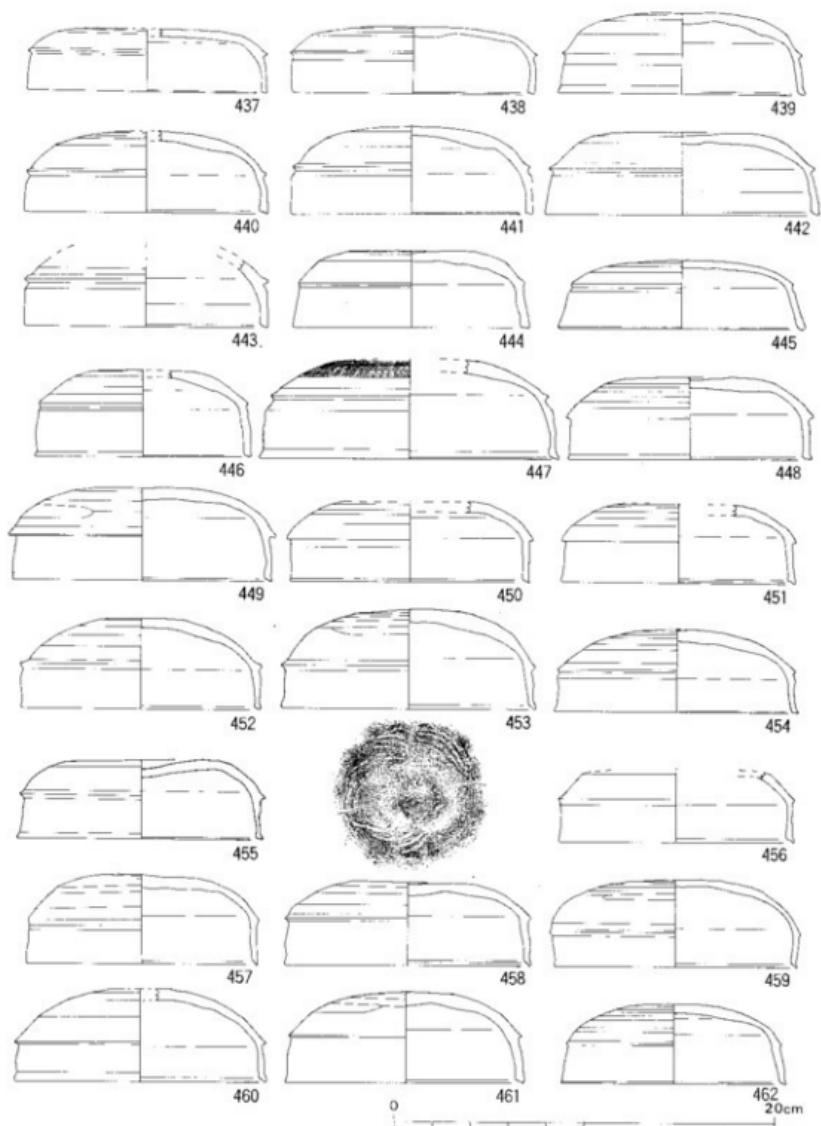


第108図 手捏土器実測図

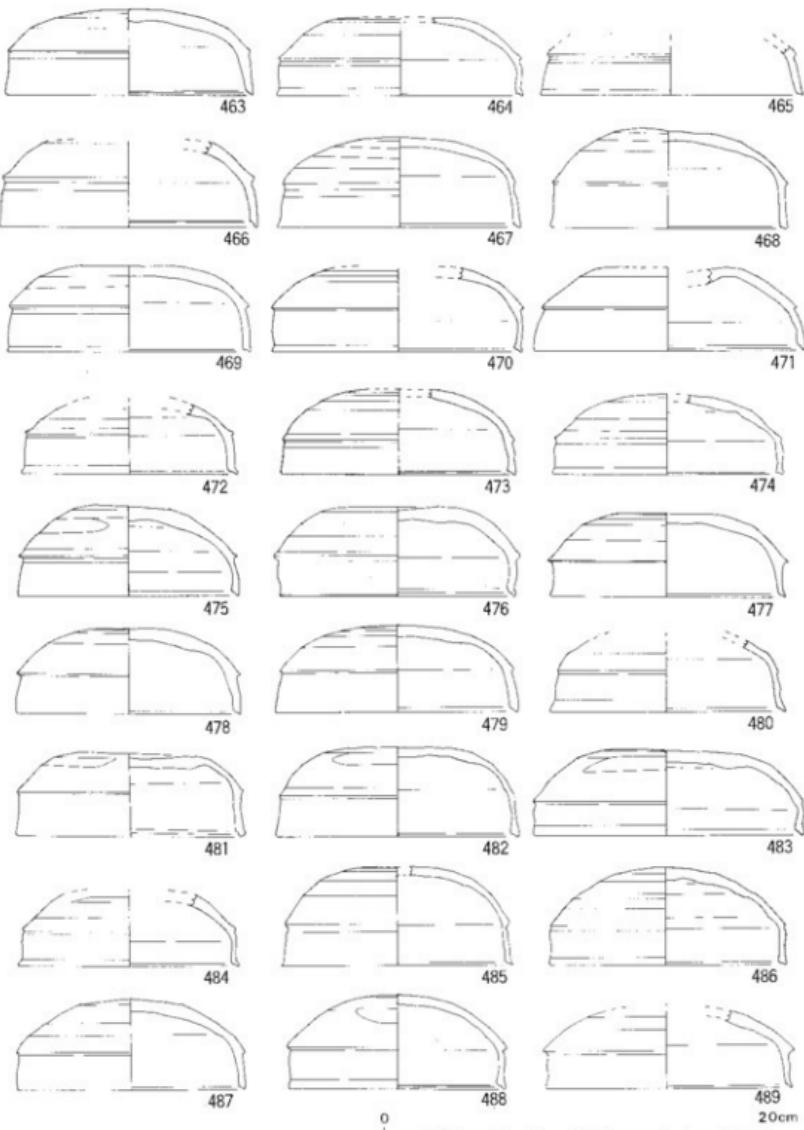


0 10cm

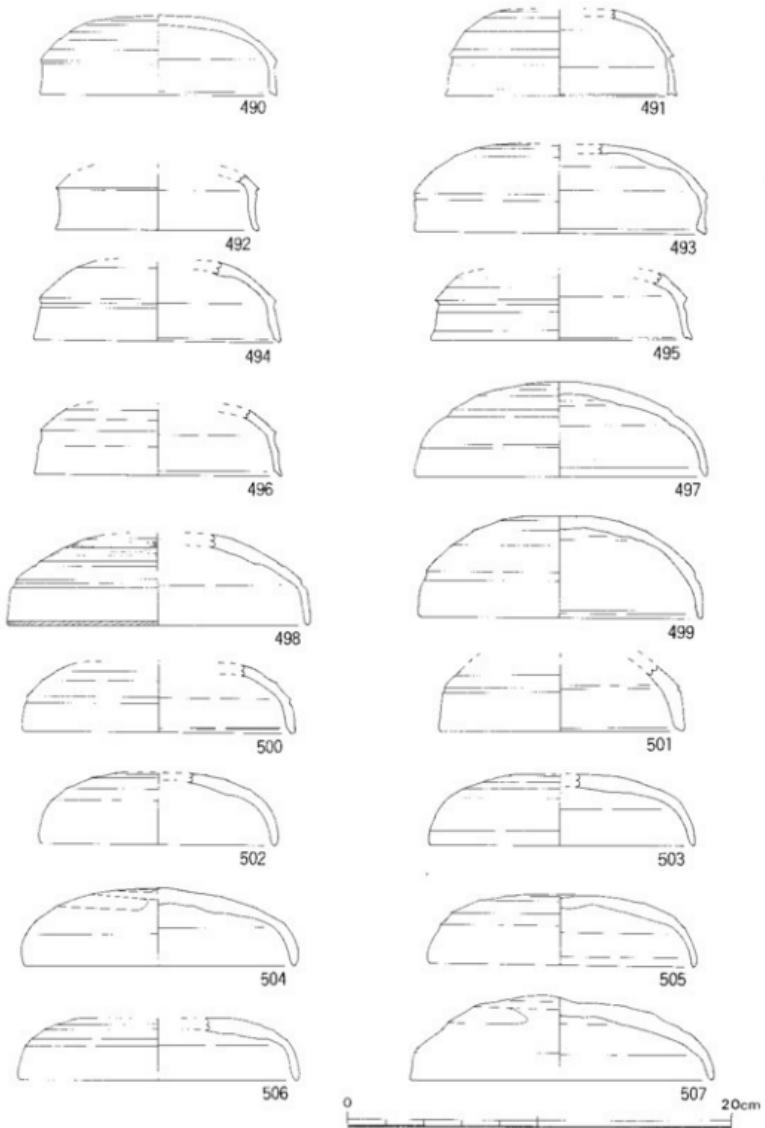
第109圖 手捏土器實測圖



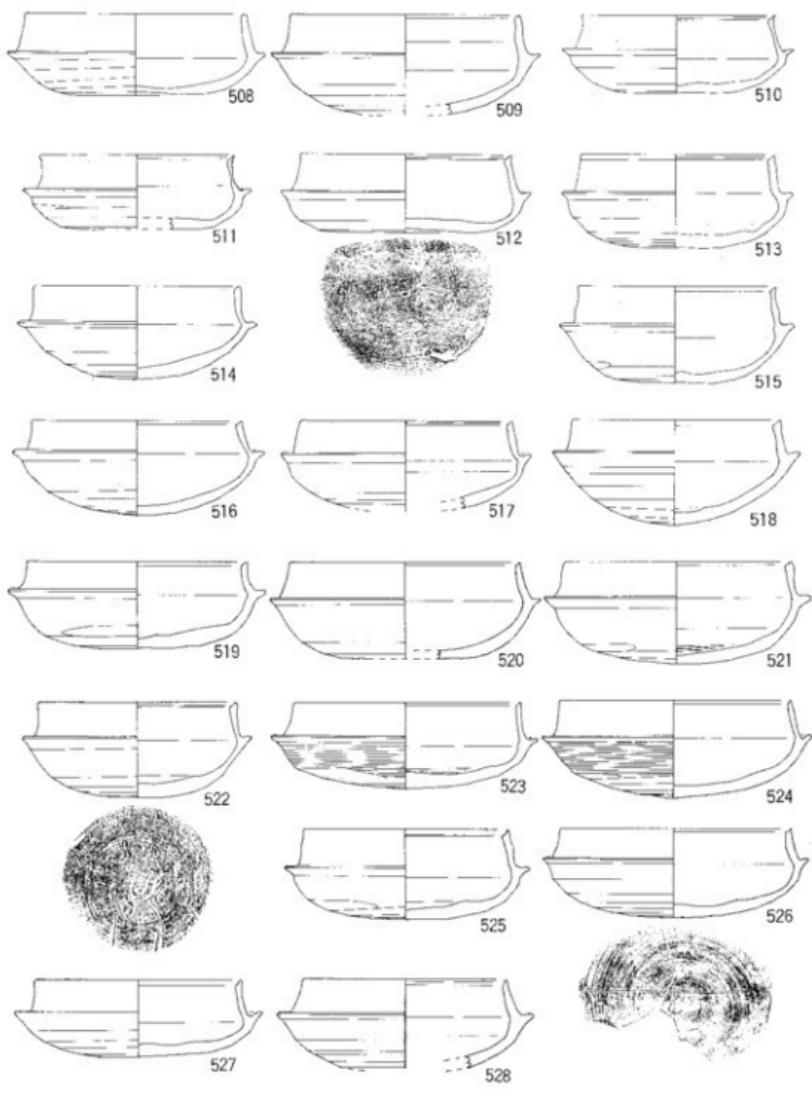
第110図 須恵器実測図



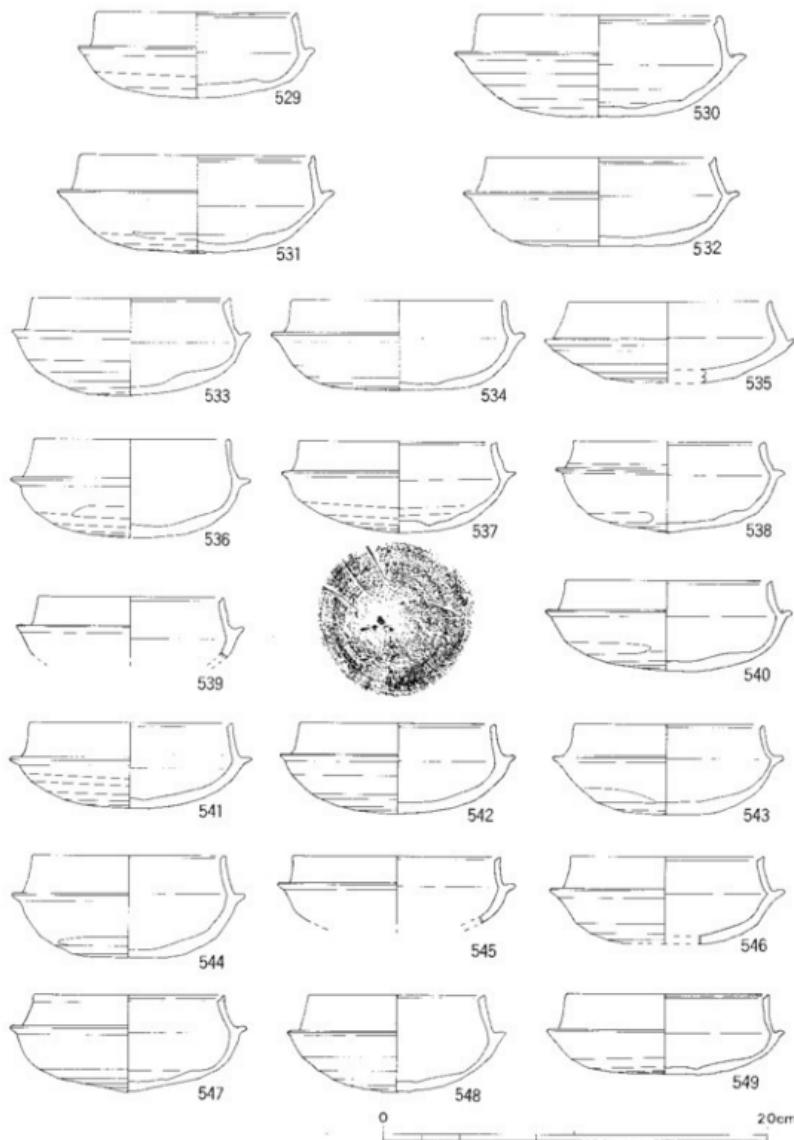
第111図 須恵器実測図



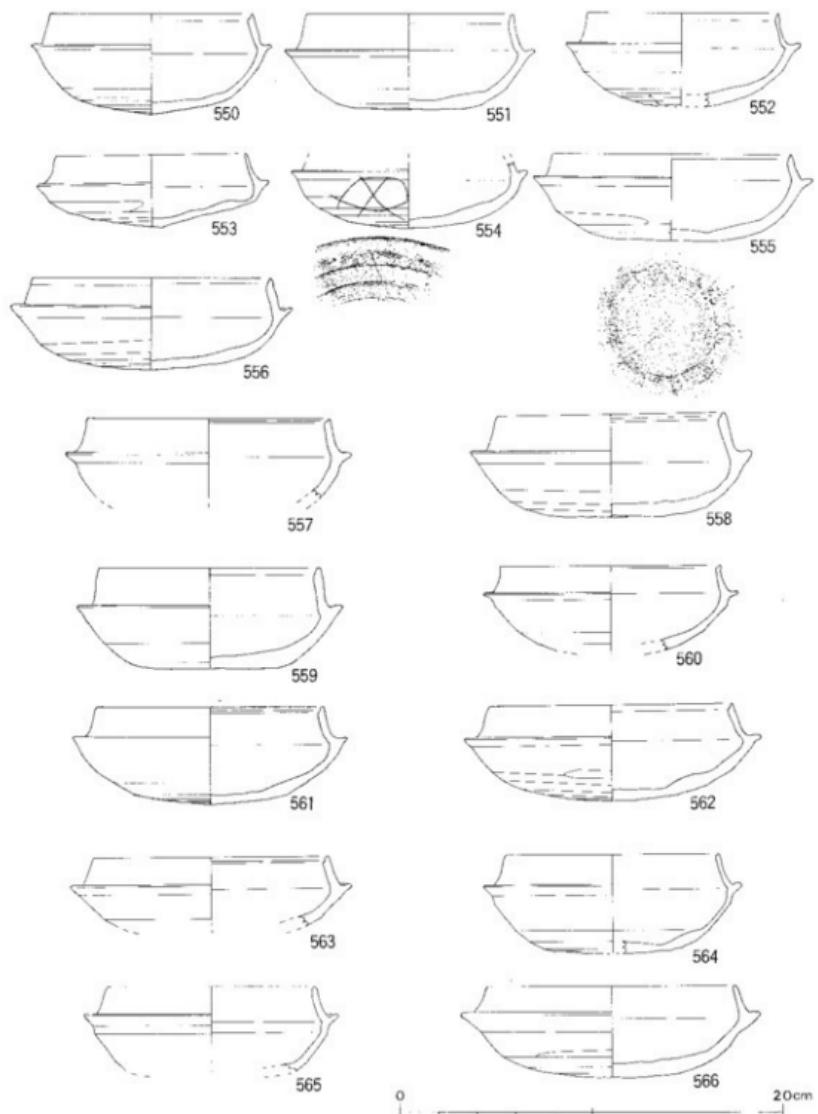
第112図 須恵器実測図



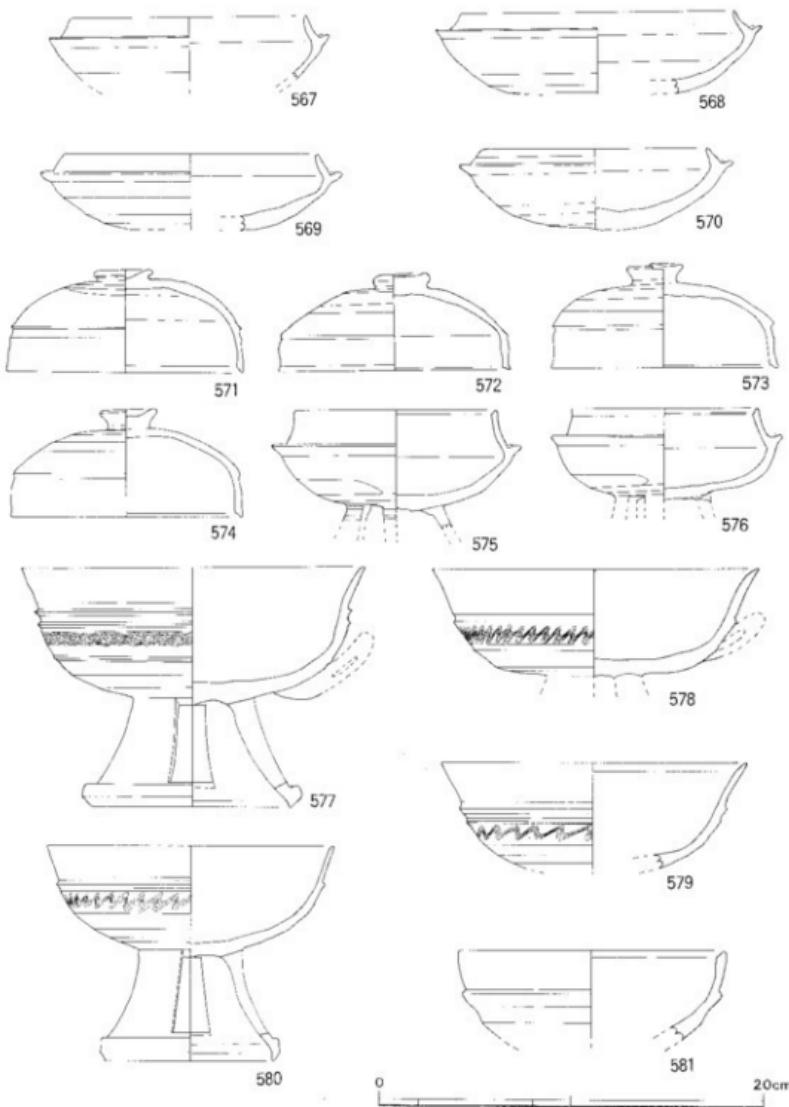
第113図 須應器実測図



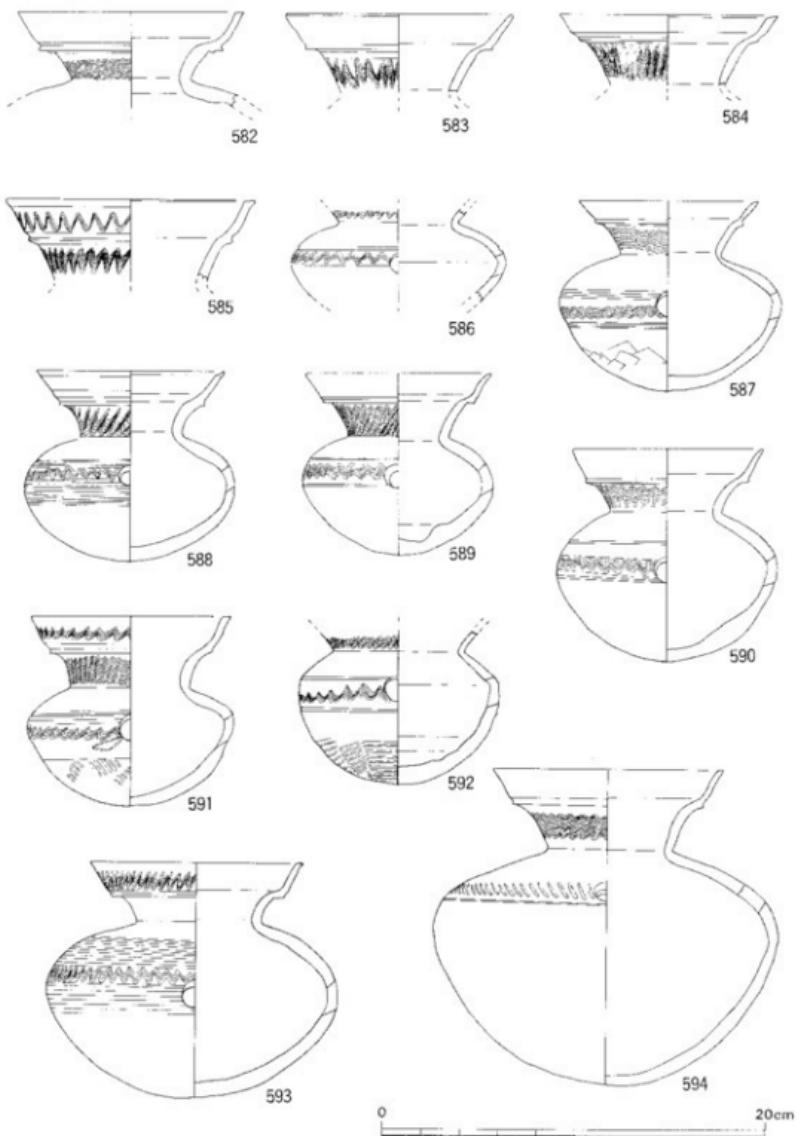
第114図 須恵器実測図



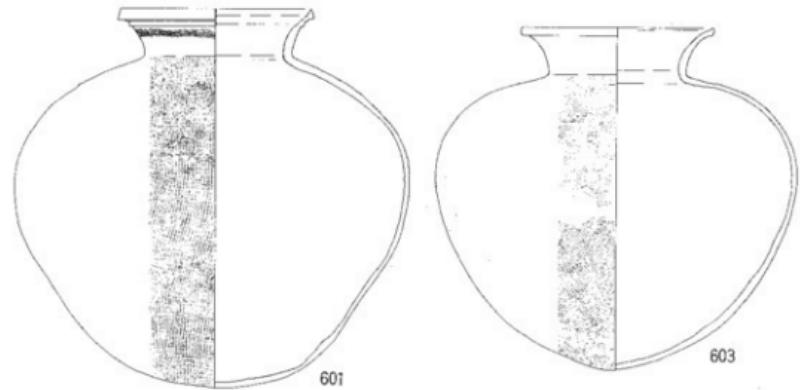
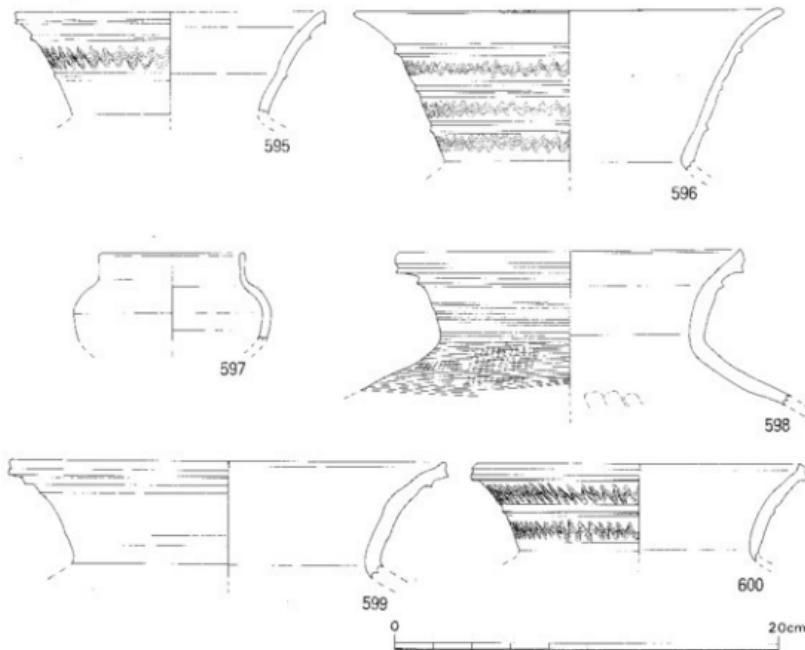
第115図 須恵器実測図



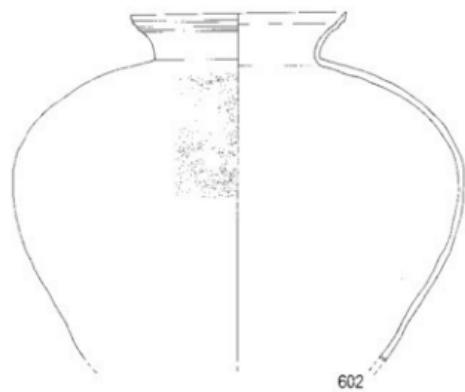
第116図 須恵器実測図



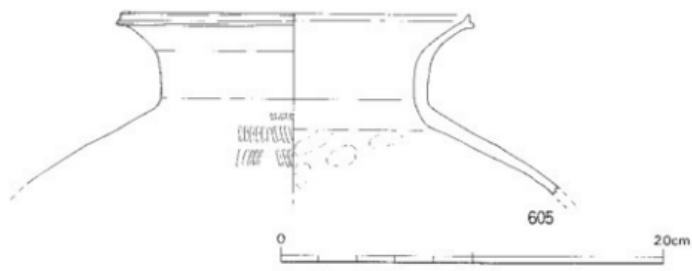
第117図 須恵器実測図



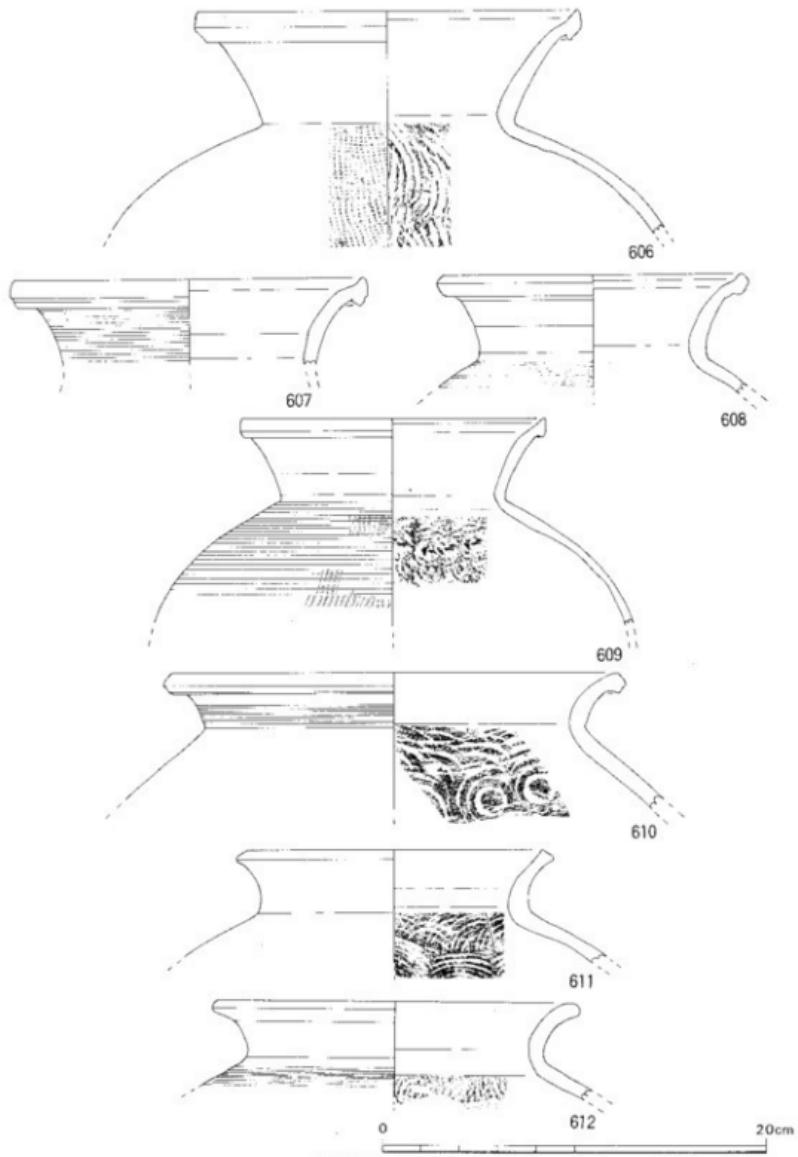
第118図 須恵器実測図



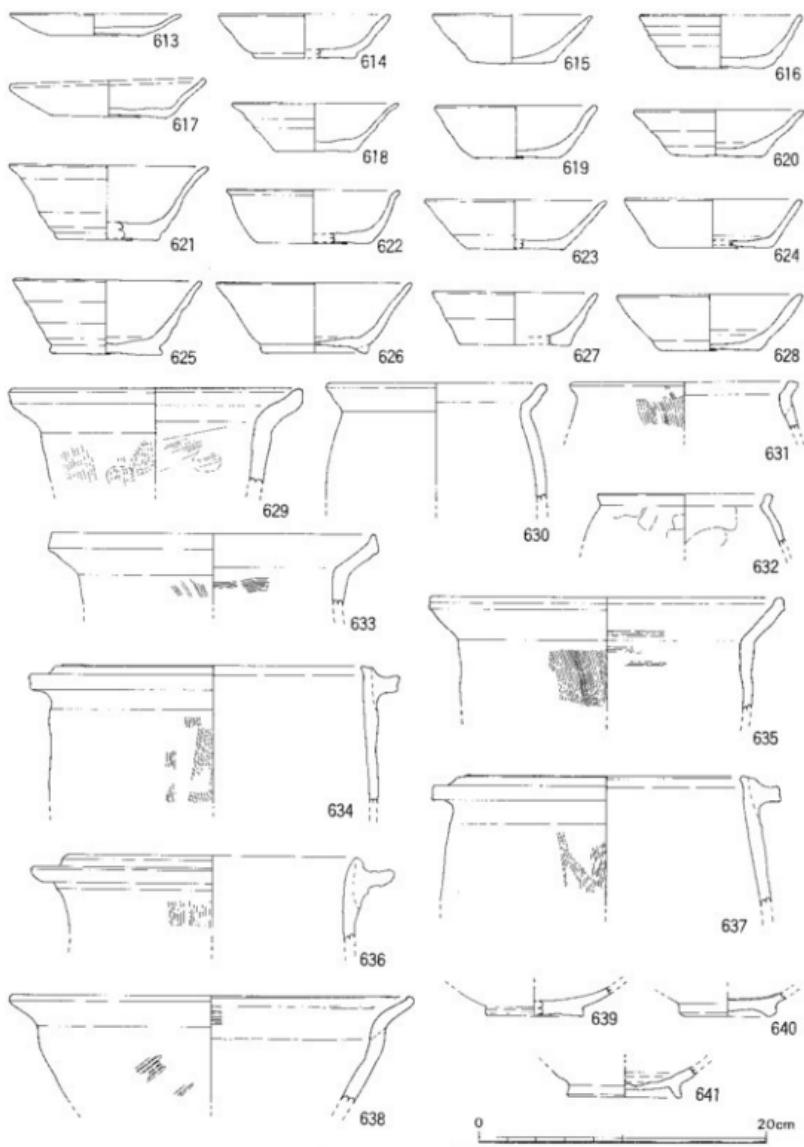
0 20cm



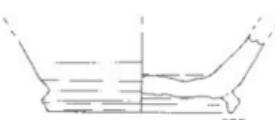
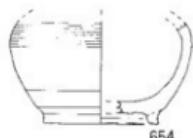
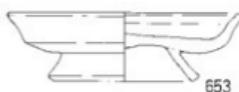
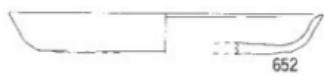
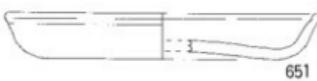
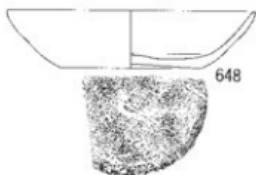
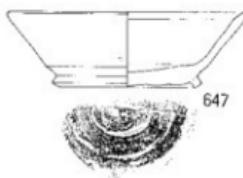
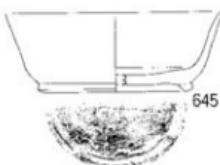
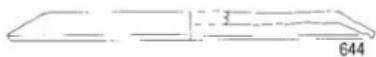
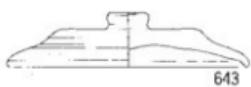
第119図 須恵器実測図



第120図 須恵器実測図

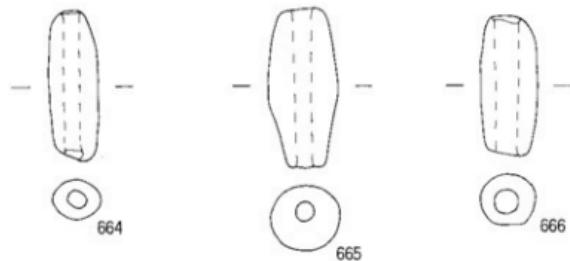
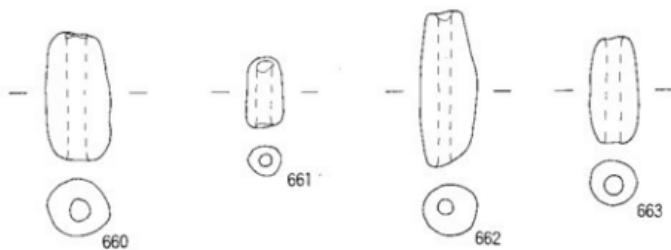
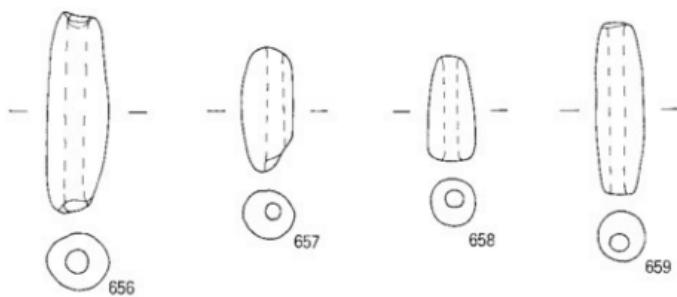


第121図 土器類・綠釉陶器・輸入陶磁器実測図

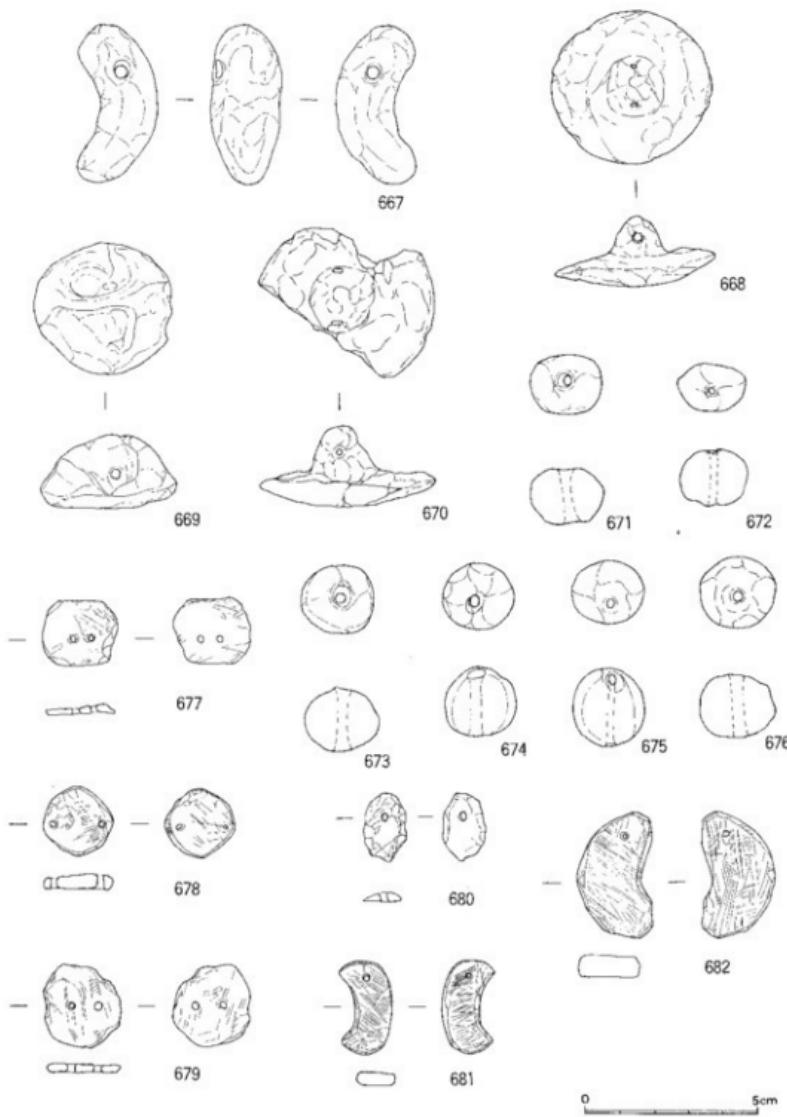


0 20cm

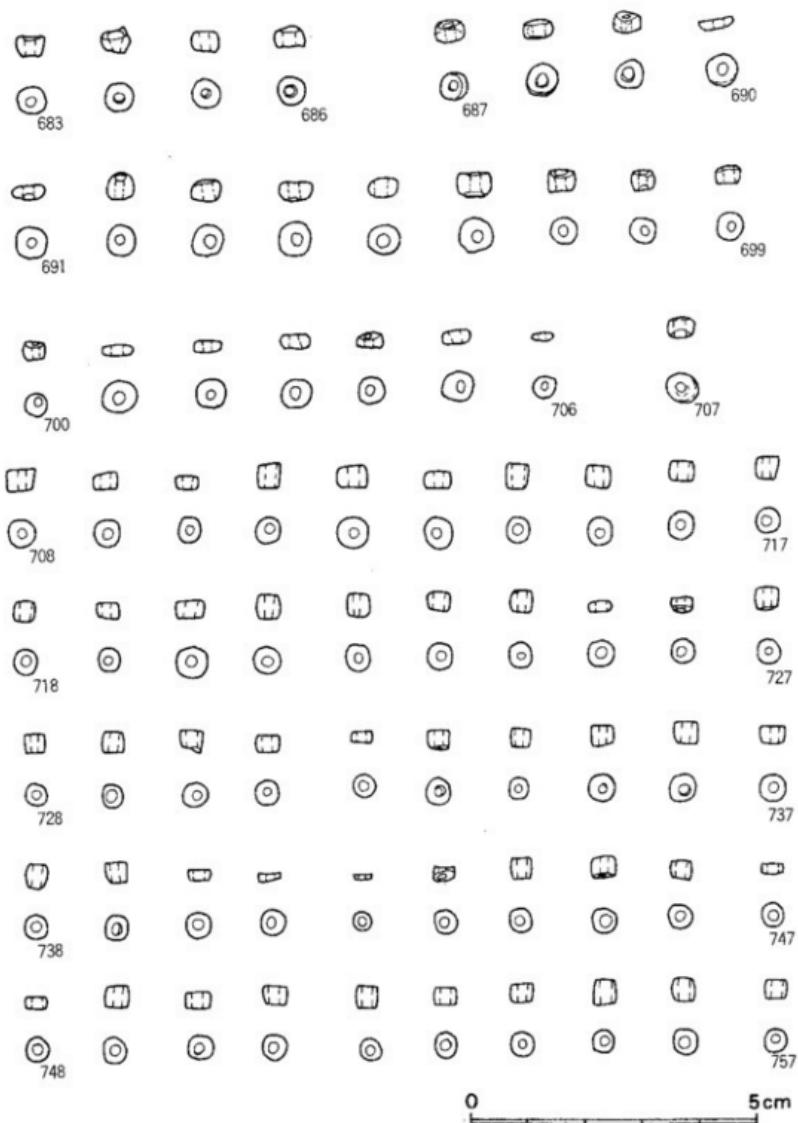
第122図 須恵器実測図



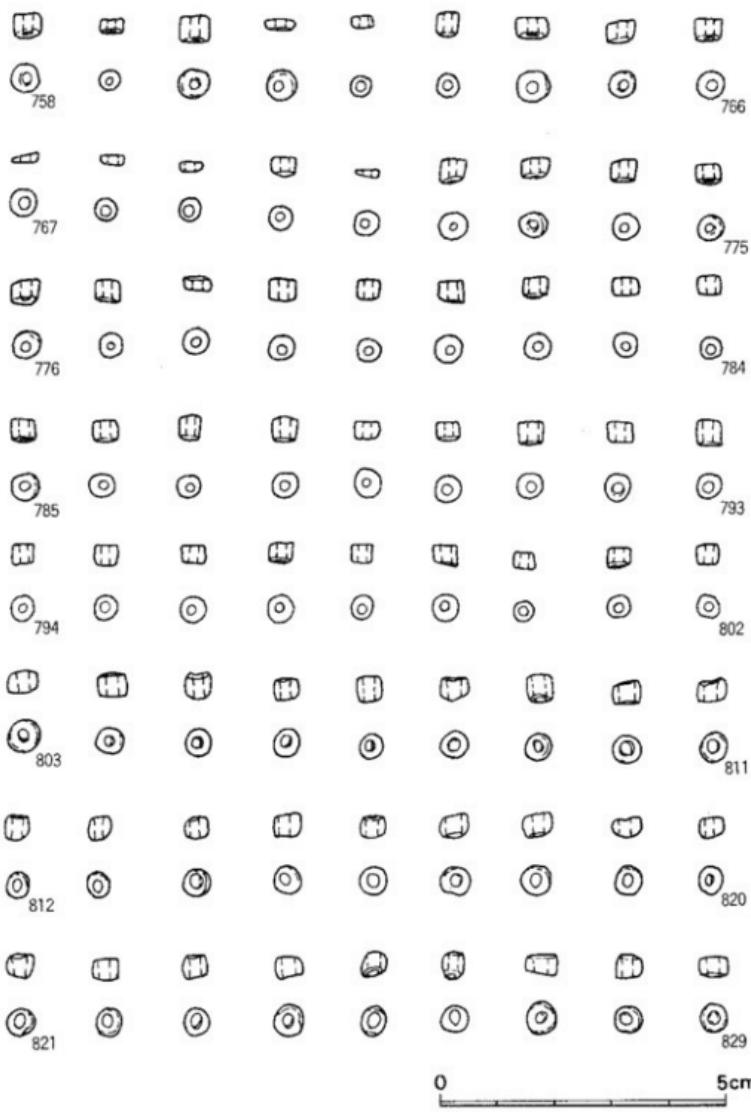
第123図 土鐘実測図



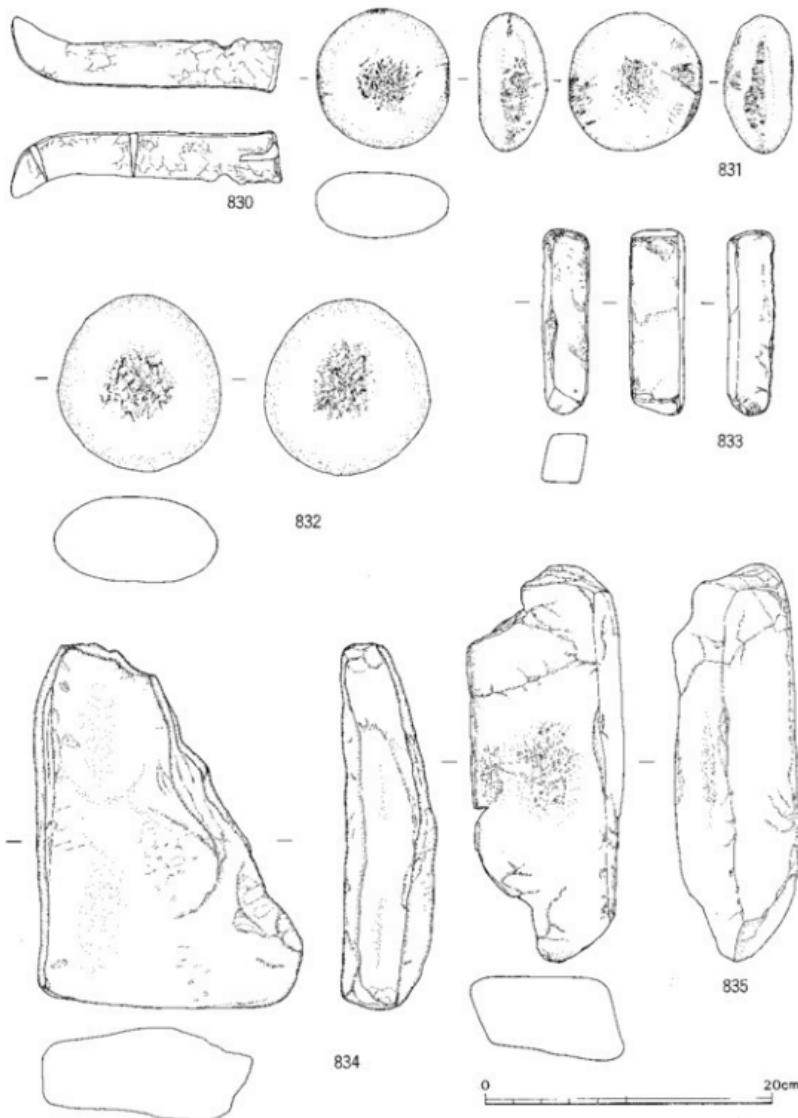
第124図 土製・石製模造品実測図



第125図 白玉実測図



第126図 玉実測図



第127図 鉄器・石器実測図

第V章 総括

1 遺構

古津賀遺跡

古津賀遺跡で検出した12個所（S F 1～12）の祭祀跡については、1つの祭祀に使われた遺物の範囲や遺物相互の共存、非共存を判別することには、かなりの困難が伴った。しかし原位置を保った状態で検出された遺物の集中地点に主眼を置いてこれらを認定したが、これ以外にも祭祀跡や祭祀に供した遺物が存在しているであろうことは十分に考えられるところである。たとえば、一般集落や住居址からの出土例がほとんど見られない須恵器の長頸壺や鉢形車などは、出土状況こそ単独的であるが、これらの遺物は「神に対する幣帛」⁽¹⁾とされるものであり、祭祀行為を証拠づけるものである。特に後者にあっては、古典に記載するところの真神に懸垂して祭ったであろうことは推察に難しくないが、遺存状況から具体的に検証することは不可能と言わざるを得ない。

また、祭祀遺物から祭祀を復元する場合、検出された遺物がそのまま祭祀行為を示すものか、それとも祭祀行為の後廃棄された二次的な状況を示すものかを明確にしなければならない。当遺跡で検出した祭祀跡は、先述した出土状況から判断して、すべて祭祀行為そのものの状況を示すものと解釈する。以上の前提のもとに、古津賀遺跡の祭祀の変遷・諸特徴等について、以下若干の考察を行う。

12個所の祭祀跡の時間的推移を表わせば、下の表のような変遷をたどることがわかる。すなわち古津賀遺跡の祭祀跡は、5世紀後葉に開始され、6世紀前葉に盛行期を迎え、中葉には衰退し、後葉に至って終息している。また各祭祀跡は、それを構成する遺物によって大きく3つの型態に分けることができる。①典型的な祭祀遺物である手捏土器のみで構成されるか、あるいは他の遺物を含みながらも手捏土器が圧倒的に多いもの（S F 1～3・9）。②日常的な土師器・須恵器のみで構成されるか、その中に少数の手捏土器を含むもの（S F 4～8・10）。③手捏土器・土製模造品と土師器で構成されるもの（S F 11）。④その他（S F 12）である。これらの各型態は、時間的变化を示すと同時に祭祀用具に見られる変化は、祭祀性格の相異、あるいは「神」という抽象的な存在に対する認識の変化発展を投影しているものと考えることができよう。

①型態は、「小範囲の特定の場を標めたてて⁽²⁾、祭祀を厳修していると解釈することが可能で、手捏土器は、咒的性格を帯びながらも、供獻的すなわち神々に捧げた幣帛として位置付けることがで

第23表 祭祀跡の時間的推移表

時期	6世紀				7世紀
	5世紀	前葉	中葉	後葉	
祭祀跡	S F 1	S F 2	S F 5, S F 6	S F 4	
	S F 9	S F 3		S F 8, S F 7	
			S F 10		
	(SF)		S F 11	(S F 12)	

きよう。そして、①型態の典型を S F 3 に求めることができる。4 本の柱で開いた方形の空間を聖域=神座として、他の空間と一線を画しこの聖域内での祭祀が考えられる。ただこのように柱根を伴う祭祀遺跡の例は、他に伊場遺跡⁽³⁾や經向遺跡⁽⁴⁾等に見られ、両者共に獨立柱建造物として報告されている。前者にあっては、造構の中央から高杯・杯・壺・手握土器等が発見されており本例と類似するものである。しかし本例は、柱の形状からして、建物とは考えられず、齋庭的⁽⁵⁾なものを想定したい。

②型態は、①とは全く対象的な祭祀と言えよう。すでに述べたように祭祀遺物を含まず、しかも須恵器を多用し、高さ 1 m 近くを測る大壺を中心に置き、まわりに小物を配している。もっとも祭祀遺物がないと言っても、古代人にとって壺は単なる容器にとどまらず、靈力の秘められた呪器であったことは播磨國風土記や常陸國風土記⁽⁶⁾等に散見するところのものである。かかる型態の祭祀は、これ以前には認め得ないものであり、6 世紀に至って出現する新たな祭祀であり、祭祀型態における一つの画期を達えたとすることができよう。

まず須恵器をこのように多用する背景には、この時期における須恵器生産の増大を考慮に入れなければならない。すなわちこの祭祀の本質を規定するものとして、生産力の発展とそれによる村落の構造的变化、またそこから派生するところの意識の変革が存在する。さて、それは具体的にどのような村落の構造が投影されているであろうか。この問題を考えるときまず想起しなければならないのは、義江影夫氏の研究であろう。氏は「儀制令春時祭田条」所引の注釈書古記説および一云説の検討から、律令以前の村落祭祀として「春秋二時の予祝・収穫祭」の存在を確認している⁽⁷⁾。すなわち村毎に存在する社首が、祭祀を主催し、その内容は「……或毎家量状取歛稻、出拳取利、預造設酒、祭田之日、設備飲食、拜人別設食、男女悉集、告國家法令知、訖即以膳居坐、以子弟等充膳部、供給飲食⁽⁸⁾」というものである。また時代は少し降るが、春時祭田が投影されているものとして、越前桑原庄の祭祀⁽⁹⁾が挙げられる。後者は、「庭が、三石受のもの二口と二石五斗受けのもの二口⁽¹⁰⁾」と巨大な壺が用意され、「木左良百口、田杯二百口」と多くの杯と皿が用いられている。

②型態の祭祀は、このような文献記載の祭祀とかなり共通点を見出せるのであり、いわばその先駆的なものとしての把握も必要であろう。大壺の存在、大壺の周辺から出土している杯類は、「木左良、田杯」に比定することができるし、また煤の付着した土師器壺は、そこで炊飯を伴ったことを証拠づけるものである。したがって②祭祀型態は社首=在地主長と村落構成員とで行われた稲魂の賦与を媒介とする自立性を前提とした「靈の分配と共有を論理⁽¹¹⁾」とした農耕祭祀として把握することができよう。もっともこの時期に本格的な社の出現を考えることは尚早であるし、S F 10 出土の杯内には意図的に小礫が入れられていることを如何に理解すべきかなど、検証を重ねなければならない問題もあるが、あながち的にはずれな想定ではなかろう。6 世紀に新たに登場する祭祀は、村落社会のあり方をかなり具体的なかたちで投影している。ここに登場する社首は、このころから盛行を見せるところの群集墳と無関係ではなく、やがて被

葬者となっていくような存在ではなかろうか。

この型態の祭祀は、6世紀後葉まで続くが次第に規模が縮少していく。この縮少化の過程の中に「稻を神に献上して、のちにこれを班給する」という原理^注の変質がうかがわれるのではないかだろうか。

③型態は、幣帛である手摺土器・土製模造鏡と共に炊飯に共する土師器甕が多く出土し、土師器甕も存在しているところから、基本的には②型態と同様の農耕祭祀として把握することが可能なものである。

(出原)

具同中山遺跡群

具同中山遺跡群は、堤防工事の際に偶然発見された。特に東神木・ボケ地区で発掘された遺物より河川に係る祭祀遺跡として全国に紹介され、その後詳細な研究もなされてきた。本稿では、遺物集中地点を遺物の年代観より、祭祀跡の時期を抽出し、さらに出土状況及び器種構成の相異から、祭祀型態のあり方及び変遷を捉えてゆくことにする。

各集中地点の時期を見ていけば、S F 1 が6世紀初頭から前半、S F 2 が5世紀後半から末、S F 3 が6世紀初頭から前半、S F 4 が5世紀末から6世紀初頭、S F 5 が5世紀後半、S F 6 が5世紀後半から末、S F 7 も S F 6 と同様で、S F 8 は5世紀末から6世紀初頭、S F 9 が5世紀末から6世紀前半と考えられる。S X は、S X 1・2 と S X 7 を除けば4世紀代に位置付けられる。時期的変遷を述べてきたが、これらの時期は祭祀跡という性格上、長期的に存続しているという意味ではなく、この期間の中で行なわれたであろうという相対的なものである。

S F とした祭祀跡には、出土遺物のセット関係、出土状況に一定の規則性が見られ、いくつかの祭祀型態のあることが明らかになった。これらの中には、時代とともに消滅していく例、また新たに登場していく型態がある。以下出土状況、器種構成により分類していくことにする。なお、S X とした集中地点は、明確に祭祀跡として位置付けるには積極的な根拠が薄く、今後の研究課題であり、祭祀分類からは除外する。

I類……河川岸の斜面に沿って集中して出土するもので S F 6・7 があげられる。この中の相異点を見ると、いずれも土師器、須恵器が主流であるが、S F 6において、土製模造鏡、石製の有孔円盤、勾玉、白玉が出土しており、S F 7 には認められないことである。いずれも時期的には5世紀後半から末にかけてのものである。

II類……河川岸であるが、水平に同じレベルで円形状を呈し出土しているもの。器種構成によってさらに細分できる。

II-①……土師器のみで構成されるもの。(S F 1・3)

II-②……須恵器、土師器で構成されるもの。(S F 2・5・8・9)

II-③……須恵器、土師器で構成されるが、中でも手摺土器が多量に出土しているもの。

(S F 4)

III類としたものは、5世紀後半から6世紀前半にかけて祭祀が行なわれている。II-①は、土

器の中でも、壺・甕・瓶・椀・脚付椀・高杯が出土しており、椀・高杯・甕が主流の祭祀跡で手捏土器はみられない。S F 1 は、S F 3 に比べれば小規模である。II-①は6世紀初頭から前半にかけて祭祀が行なわれている。II-②は、最も古く考えられるものがS F 5 で、次に S F 2, S F 8, 9 という変遷になる。器種構成を見れば、S F 5 で土師器甕・高杯・手捏土器・須恵器杯が共存し、S F 2 になると手捏土器が存在せず須恵器の壺が出現する。S F 9 になると須恵器の甕が存続し再び手捏土器が出現する。S F 8 を含め土師器の高杯がみられなくなる。II-③は、須恵器の甕、土師器の壺を除きすべての器種が出揃い、さらに S F 6 以外認められない土製模造品、石製模造品が存在する。石製模造品の中で剣形品は、鏡の稜線もみられずやや退化した形態を示し、土製模造鏡も S F 6 出土のものと比べると雑な作り方である。これら各祭祀跡から出土した遺物中に小砾を入れこんだ状態のものが存在し、特に須恵器の杯・蓋、土師器の甕に多くみられる。また、小砾のみが集中する箇所も認められる。

以上簡単に祭祀の変遷、型態の相異を概観してきたが、I類の祭祀型態は、出土した土器群も完形品が多く、河川に向って投げ込まれたような出土状態を示し、II類の型態は、祭祀場所としての位置をさほど移動していない出土状態を示している。この両型態は、5世紀後半頃の同時期に祭祀行為を行なっているということであり、そこに大きな差を導きだすことができる。しかし、その後5世紀末から6世紀初頭にかけては、I類の祭祀型態が姿を消し、II類の祭祀型態のみになってくる。II類の中で特異な現象として捉えなければならないのは、S F 4 の如く、爆発的に手捏土器が出現する祭祀跡が存在することである。以上のようにI類の祭祀型態は、川そのものを強く意識しているものと考えられ、遺物の直接投供という行為が行なわれている。II類は、川を意識した祭祀に変わりはないが、小範囲の特定の場所を設定し祭りを行なっている。これらの両型態の差が何を意味するものであるか、またII類の中での器種構成の差をいかに考えるかは今後の課題である。また各祭祀型態の差異は、祭祀の種類、つまり迎えるべ

第24表 集中地点の時期的推移表

地 点 名 集中地点	時 期
A SX 2	4 C … 5 C 後半
A SF 1	5 C 末
B SX 3	5 C 末
B SF 2	5 C 後半
B SF 3	5 C 後半
C SF 4	5 C 後半
C SF 5	5 C 後半
F SX 4	5 C 後半
F SF 6	5 C 後半
G SF 7	5 C 後半
G SX 5	5 C 後半
H SX 6	5 C 後半
H SX 7	5 C 後半
H SF 8	5 C 後半
I SF 9	6 C 初

きそれぞれの神の姿が投影されているものと考えられるが、個々の祭祀の内容までも抽出することは現段階では不可能である。中筋川流域における祭祀的行為は、5世紀後半から6世紀前半まで、さまざまな形態をもちら行なわれていたことは事実であり、また、S Xとした集中地点等を考えるとその前段階にも祭祀行為の跡を伺い知れる。これらの立地を考えると、中筋川の屈曲部に位置しており、SF 1-9は分散する形態をとっている。亀井正道氏によれば「集中型¹³」に類別できる祭祀遺跡である。河川の流域が不安定であるがゆえ、このように自山に祭祀場を選定し、分散せざるを得ない状況を作り出している。これらのことから、河川に対する畏怖と感謝の念を看取することができ、当時の河川と人間の共存関係の一端を、この河川に対する祭りという行為の跡そのものに垣間見ることができる。

(松田)

2 遺物

(1) 土師器

古津賀遺跡

当遺跡出土の土師器は、すべて後期古墳時代に属するものである。土師器は、須恵器と共に祭祀跡の重要な時期決定要素であるが、当地域における古墳時代後期の土師器編年は資料の僅少さに原因して未確立と言わざるを得ない。今次調査においては、須恵器と共に多量の資料を得ることができたが、祭祀跡（S F）の中からの一括資料として把握し得る資料はかなり限定される。ここでは前章で各器形ごとに型態分類した土師器が、各祭祀跡からどのような関係をもって出土しているかを把握しその特徴を明らかにするものである。土師器を伴う祭祀跡は、S F 4 ~ 8 · 10 · 11である。S F 4 の土師器は壺のみであり、その内訳は、A-I 類が 1 点 (27) 他はすべて B 類で構成される。S F 5 の土師器は、壺 4 点 (11 · 53 · 56 · 60) と瓶 2 点 (101 · 104) で、前者は A 類が 1 点 (11) 他は C 類 (53 · 56 · 60) である。後者は共に A 類である。S F 6 は、壺 6 点 (12 · 45 · 61 · 66 · 82) で A-I 類が 1 点 (12) B 類が 2 点 (45 · 48) C 類が 2 点 (61 · 66), 82 は底部である。S F 7 は、D-I 類の碗 1 点 (132) のみである。S F 8 は、壺 8 点 (7 · 10 · 51 · 65 · 69 · 70) で、A-I 類が 2 点 (7 · 10) である。S F 10 は壺 4 点と碗 2 点で壺は A-I 類が 1 点 (18) A-II 類が 1 点 (34) C 類が 1 点 (58), 碗は B-I 類 (114) と C 類 (131) である。S F 11 は、分類可能な壺 1 点 (40) で A-II 類に属し、壺は 5 と 6 を同一個体として扱うと 2 個体分 (3 · 5 · 6) 出土しており、A 類 (3) と B 類 (5 · 6) に属する。6 点 (115~118 · 120 · 121) 出土している碗はすべて B-I 類に属するものである。以上の出土状況を一覧表にすれば第25表のようになる。

各祭祀跡出土の土師器では壺が最も多くを占めており、且つその型態は 2 つ以上から成っており、単独の型態のみで構成されるものはない。A, C 類と共に存している須恵器を見ると S F 4 が 6 世紀後半, S F 5 が 6 世紀中葉, S F 6 が 6 世紀中葉～後半, S F 7 が 6 世紀前半～中葉, S F 10 が 6 世紀前葉に時期比定できるものである。古く位置付けられる

S F 10 は、B 類を欠き、新しい S F 4 は、B 類が最も多い。両者の中間に位置付けることのできる S F 5 では A 類と B 類の中間的な C 類が最も多い。従って壺は、A 類 → C 類 → B 類へ変化することがわかる。すなわち胴部に最大径をもつものから胴部の脛みが減ずるものへ移行していくと理解することができる。しかしながらこの変化は、須恵器に見られるような明確なもの

第25表 形態別各祭祀跡出土表

器形	壺			壺			碗			瓶	
	A-I	A-II	B	C	A	B	B-I	C	D-I	A	
S F 4			1	3							
々 5	1					3					
々 6	1				2	2					2
々 7											1
々 8	2					4					
々 10	1	1			1						
々 11	1						1	1	6		
計	6	2	5	10	1	1	6	0	1	2	

ではなく、弛やかに移行するものと考えなければならない。これをもとに S F 8・11の土師器を見ると S F 8 は 6 世紀前半に、S F 11 は 6 世紀前葉に置くことができよう。またこの各型態における量的な変化は、後述する当遺跡の祭祀跡の消長と軌を一にしている。

次に壺以外の土師器について考察を加えることにする。椀は、祭祀跡で把握できたものは 2 型態 7 点である。型態的な特徴についてはすでに触れたが、具同中山遺跡群 F 区等で出土している口縁部がわずかに外反するタイプが存在しないことは、時期比定をする上で重要な要素である。S F 7 出土の D-I 類は共伴の須恵器から 6 世紀中葉に S F 11 の B-I 類は 6 世紀前葉に位置付けることができよう。これは、両者共に新しい時期の祭祀跡から出土していないことによっても証明されよう。しかしながら遺跡の性格上出土土器の有無が、時間的差違によるものが祭祀の目的に規定されての現象かは、今後検証を重ねて行かなければならぬ問題である。個々の土器に見られる特徴を上げれば、(120) は類例が他にないために B-I 類の中に含めたが、須恵器模倣型態の椀とすることができるものであり、北部九州における出現とはほぼ時期的にも共通している¹⁴⁰。また先述したヘラ記号のある土師器については、生産地と消費地との関係等が考えられるものであるが、その出現については他地域の例¹⁴¹と差異は見られない。

高杯は、祭祀跡出土のものは存在しない。A 類は、5 世紀代に属する古い型態をとどめているが、細部を見れば口縁端・脚端部の面取りがないことや脚内部のヘラ削りの省略傾向等から具同中山遺跡群 F 区出土に比すると新しいものとしなければならない。また杯部棱の有無によって A・B に分けたが、A-I 類に属する (133) と A-II 類の (136) とは、共存を示す出土状況を示している。B 類に属する (138・141) は、共に数少ない瓦層出土の例である。(138) の口縁部外反は、古い要素であり A 類に先行する時期とることができよう。高杯は、祭祀の性格にも規定されると考えられるが、6 世紀代の例は存在しないことになる。地域性によるものであろうか。

瓶は、具同中山遺跡群 G 区出土の多孔のものはなく 1 例を除いてすべて単孔で占められている。祭祀跡出土の例は、S F 5 から 2 点出土しているのみであるが、出現期をこの時期に求めることができよう。底部 II 類に入れた壺底部に小孔を数個穿った例は図示し得なかったが、6 世紀後半に比定¹⁴²できるものである。

壺は、A 類の (3) と B 類の (5・6) とは S F 11 で共伴しており時期的におさえることが可能である。B 類の 4 は瓦層出土であり、体部がかなり扁平化しているが、古い型態を残るものである。5 世紀代に属するものである。

手捏土器は、S F 1～3・7～9・11 から出土しており、共伴の遺物及び出土層位から S F 1 と S F 9 が最も古く、S F 2・7 を新しい時期として把むことができる。従って 5 世紀後半代から 6 世紀中葉以前の時期に位置付けることができる。かなりの時代幅をもつが、各祭祀跡の中での手捏土器における型態の変化は認めることができない。したがって「型式」的編年を組み立てることができないと言わざるを得ない。これは、手捏土器が儀礼専用の特殊性を有す

ることに原因があると言えよう。ただ最も古く位置付けた S F 9 から D-Ⅱ類 (211) が出土している。これは、原形が土師器壺に求められるものであり、日詣遺跡の A 期の指標となる「原形が通常の土師器に求められる」ものに属する²²⁰。また古典にいう〈手くじり〉とされている「内壁部を底部から上縁に向かって指頭で捺文状にえぐり取²²¹」られたものは 1 点 (234) のみである。

編年の位置付けはできないが、注目すべき点として土器胎土を擧げることができる。すなわち先述のように通常の土師器胎土と異なり、砂粒を含まず精選された粘土を素地とする⑥が圧倒的に多くを占めている。手捏土器出土の遺跡は、全国に数多いが特に本例のように他の土器と区別された精良な胎土による例は、管見の限りでは、古野古墳群第14号墳出土の土製品のみである²²²。手捏土器のために特殊な粘土が準備されるという現象は、古典記載の土器に特別な威力を發揮するために特殊な粘土が用意されるという現象は、古典の「天香山の社の中の土を取りて、天平鏡八十枚を造り（中略）天神地祇を敬い祭れ²²³」などに見られる。もっとも手捏土器と平鏡は区別せねばならないが、特別の素地を用いて手捏土器が作られていることは、そこに人々が神意を仮託し呪力が發揮されることを念願した行為を看取することは可能であろう。

土製模造鏡は 3 点が S F 11 より集中して出土している。3 点ともに鉢は山形をなすものであり半環状をなす具同中山遺跡群出土のものとは明らかに型式差が見られる。亀井氏は九州に多い「山形の形状²²⁴」のものを地方色とされているが、一遺跡で変遷を求めることが可能である以上時間差に起因するものと考えるべきであろう。

(出原)

具同中山遺跡群

本遺跡から出土した土師器は、古墳時代中期に属するものが大半である。前章の遺物土師器の項で形態分類を試みたが、本稿では、これら各器種ごとに須恵器も含め、祭祀跡の中でもさらに細かく共伴関係を抽出することにより土師器の大略的ではあるが時期的変遷を捉えてみたい。

壺は、A～D 類に大きく分類したが、まず A 類は F 区の S F 6, G 区の S F 7, A 区の S X 2 から出土しており、その中でも最も多い F 区の S F 6 を抽出する。S F 6 では、(20) の周囲に同層位中で、須恵器杯身の (527・514), 杯蓋 (439), 高杯蓋 (573), 越 (594) が出土している。また、(21) の周囲には、越の (590・593) がある。また、壺 B 類の (30) も存在する。B 類は、A 類と同様に S F 6 のみ出土している。(29) は、須恵器甕 (603) と共に伴している。(30) は、A 類と同様な地点で共伴している。C 類は、C-Ⅰ と Ⅱ に細分したが、C-Ⅰ 類は、B 区の S X 3 から出土している。S X 3 はⅢ層中の集中で、外腹タタキ目を有する土師器と共に伴して出土している。C-Ⅱ 類も F 区の S X 4 と G 区の S X 5 で出土しており、S X 3 と同様な出土状態である。D 類は 1 点のみで、H 区の S X 6 からで、これらはⅣ層出土で層位的、形

態的にみても古い。

壺は全体的に古く位置付けられ、A・B類は、5世紀後半から末までに、C・D類は、4世紀代に比定できると考えられる。6世紀には壺はあまりみられない。

壺はA～E類に大きく分類したが、A-I類は2点のみで、B区のSX3、F区のSF6から出土しているが、A-II類も含め時期を決め得る共伴関係は認められない。B類は、SX2～5から出土しており、SX3～5が多く出土している。B類が出土した集中地点は、須恵器共伴は認められず、外面タタキを有する壺、椀と共に存して古い様相をもつ。C類は、C-II-①がSF6で最も多く出土しており、次いでSF7、SF4と続く。SF6を抽出すると、(92・107・134)等は、壺A類と同地点で出土しており共伴関係が認められる。C-II-②もSF6・7に多く次いでSF4となる。その他のC類は各集中地点では1点のみしか出土しておらず不明確なものが多い。D類は、SF6・7で主に出土している。その他の調査区は数点のみである。SF6では、(163・167)が、須恵器杯蓋(478・489)、高杯蓋(574)、有蓋高杯(576)等と同層位で出土しており、SF7では、(155)がC-II-①の(109)と同地点で出土している。E類は、SF5・6から出土している。SF5の(177)は、須恵器杯蓋(438)と同層位で出土しており一括で捉えることのできる集中地点出土である。

以上のことから壺は、A・B類が4世紀代、C・D類は5世紀後半から末までが主流と考えられるが、形態的変化がゆるやかであり明確な差は認められないため6世紀にも残ってくるであろう。E類は、SF5の出土状況から5世紀後半におくことができる。

瓶は、形態分類は行なわなかったが、(182・187)の多孔のものはB区のSF3、G区のSF7から出土している。SF7の(187)は、須恵器杯身(549)、土師器甕C-II-②の(143)と同地点で共伴している。単孔のものは、SF4・6・7からのものが多い。(190)の把手付の瓶はSF7からで、須恵器杯身、蓋(481・561)が同層位で出土している。

以上のことから単孔の瓶が5世紀後半から末まで、多孔のものが5世紀末から6世紀初頭に位置付けられると考えられる。

椀は、A～E類まで大きく分類した。多量に出土しているのは、SF4・6・7である。その中でSF4ではE類が多く、次にB類となる。SF6では、その多数がE類である。SF7では、E類の次にB類となる。椀の中で最も多くを占めるものは、E-I類である。E-II類もE-I類の出土量に比例する。E類を抽出すれば、SF6では(255・286)が、須恵器の甕(600)と、(249・266)は、須恵器の甕(590・593)、杯身(511)、杯蓋(485)と共に伴している。SF4では、E-I類の(243・245)が、須恵器杯蓋(475)と、E-II類の(285)は、甕(584)と共に伴している。

以上のことから椀は、A-I類はSF6等から出土していたことを考えると5世紀後半頃で、B-I・II類、C類は5世紀末から6世紀初頭、この分類の中で、(201・208)等の外面タタキを有するものは4世紀代に位置付けられる。D類の中で、D-I類は、SX3・5からのみ

出土しており、タタキ目を有する土師器と共に伴しており、4世紀代と考えられ、D-II・IIIが、5世紀末から6世紀初頭に位置付けられる。E-I・II類は同時期に共存するものと考えられ、5世紀後半から末が主流である。しかし、その中でE-I類は6世紀前半まで続くものと考えられる。

脚付椀は、椀の形態分類を適用しているが、出土地点では、S F 3・4・6・7からのものであり、その中でS F 4が多い。B類はS F 4で、(296)が須恵器杯蓋(457・474)、杯身(543)と共に伴している。C-I類は、S F 6で(303)が須恵器杯身(518・525)さらに土師器椀のE-IIと共伴している。C-II類は、S F 3・4から出土しやや新しい時期になるものと考えられる。時期的なものは、C-I類が5世紀後半から末頃で、C-II類が6世紀初頭から前半、B-I・II類は、5世紀末が主流で6世紀初頭まで続くと考えられる。全体的な脚付椀の様相は、6世紀初頭が主流で、5世紀末頃に出現し、6世紀前半頃まで残るのではないだろうか。

高杯は、A-D類に大きく分類した。この中でB・C類が多く出土している。A類はS F 6・7から出土しており、S F 6では、A-I類(309)が須恵器底(593)、土師器壺B類の(30)と共に伴している。A-II類は、S F 3からであり、時期的に新しく考えることができる。B類は、B-I類がS F 5・6から出土しており、S F 5からは2点出土しているが、須恵器杯蓋(438)の時期に比定できるものである。C類は高杯の中でも最も多く出土している。C-I類は、主にS F 4・6から出土しており、S F 6の中では、(322・324・328)等が、須恵器杯身(514・527・536)、高杯(575)と同層位に出土している。C-II類は、G区のS F 7の(354・356・357)を抽出すると、須恵器底(586)と共に伴している。D類は、S F 6・7から数点出土している。S F 6では、(366)が須恵器底(594)と同層位内で共伴している。高杯は出土状況及び形態分類と比較的一致する点が多い。

手捏土器は、S F 4から多量に出土している。A-C類はすべてS F 4から出土しており、S F 6が数点で他は1・2点である。これらのことから手捏土器は一時期に集中して出土しており、時期的変遷は捉えがたい。しかし、本遺跡での手捏土器の主流は5世紀末から6世紀初頭にあることは明らかである。

具同中山遺跡群出土の土師器は、畿内では船橋遺跡のO-I・O-IV期²⁵の範疇にはいると考えられるものであり、大型の壺の消滅の時期であり、貯蔵用具である壺が須恵器壺にとって変わる現象の終末の段階である。土師器壺は、胴部外面に煤が付着するものが多く、また他器種に比べると出土量が多い。これらのことから煮沸を中心に行なわれた祭祀の一端も伺い知ることができる。

以上やや複雑になったが、形態分類を行なった各器種の時期的変遷を第26表のグラフにまとめてみたい。

(松田)

(2) 須恵器

時期区分

古津賀遺跡と具同中山遺跡群から出土した古墳時代の須恵器は、総括的にⅠ期からⅥ期までに分けることができる。この内、古津賀遺跡ではⅡ期からⅥ期、具同中山遺跡群ではⅠ期からⅤ期及びそれ以後における古代の須恵器が出土している。ただし、これら古墳時代の須恵器はすべて祭祀遺物とみられ、かつ層的には各地区ほぼ同一層序からの出土であり、形態的に古相、新相という形でとらえられたものである。将来において、集落跡の調査が施行されれば、あるいは若干の時期の変更も生ずる可能性も存する。

なお、ここでいうところの各期を陶邑編年と比較すると、Ⅰ期がⅠ型式3段階、Ⅱ期がⅠ型式4段階、Ⅲ期がⅠ型式5段階、Ⅳ期がⅡ型式1・2段階、Ⅴ期がⅡ型式3~5段階、Ⅵ期がⅡ型式6段階にはほぼ対応できるようである。また、時期的には、Ⅰ期が5世紀後半、Ⅱ・Ⅲ期が5世紀末から6世紀初頭、Ⅳ期が6世紀前半、Ⅴ期が6世紀中葉から後半、Ⅵ期が6世紀末から7世紀前半と推考され得る。

(廣田)

古津賀遺跡

発掘調査を実施した約1,450m²の範囲から、土師器、小型手捏土器、石製模造品、石器等の遺物と共に須恵器が出土した。須恵器は、古墳時代後期に位置付けられるもので、器種構成としては、杯(蓋・身)、高杯(有蓋・無蓋)、匙、壺(長頸・短頸)、甕、提瓶がみられ、杯68% (蓋24%・身44%)、高杯10%、匙1%、壺8%、甕10%、提瓶3%で、圧倒的に杯(蓋・身)の出土数が多い。

須恵器は、形態、手法の特徴から、杯蓋が5類、杯身8類、高杯6類、匙2類、壺4類、甕5類、提瓶2類に大別される。類別した各器種について、遺物集中出土地点からの共伴例等を基に時期区分を行えば、以下の5期(Ⅱ~Ⅵ期)に区分される。

Ⅱ期

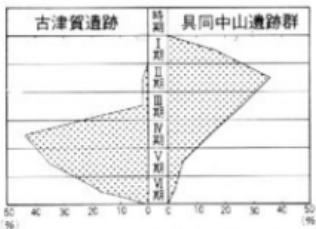
杯身、匙、甕A類が該当する。出土点数が最も少なく、いずれも最下層の遺物包含層(Ⅳ層)中から単独出土したもので、成形はきわめて丁寧である。

Ⅲ期

杯身B類、高杯A類が該当する。出土点数は少ない。Ⅱ期の須恵器に比べ、粗雑化している。

Ⅳ期

杯蓋A・B類、身C~E類、高杯B・C類、壺A類、甕B・C類が該当する。出土点数が多く、全体の44%を占める。Ⅳ期のなかでも、杯A類、身C・D類、高杯B類、甕B類は古



第128図 時期別須恵器出土比率図

相を示し、杯蓋B類、身E類、高杯C類、壺A類、甕C類は新相である。型式的には古相と新相で二型式以上に分類することが可能であるが、大甕である甕C類に伴って、杯蓋A・B類、身C・E類、高杯C類が集中して出土しており、同時期に廃棄されたものであると考えられることから、IV期のなかで包括することにした。

V期

杯蓋C・D類、身F・G類、高杯D・E類、匙B類、壺B・C類、甕D・E類、提瓶A・B類が該当する。全体の36%を占める。杯蓋C類、身F類、高杯D類、壺B類、甕D類、提瓶A類は古相で、杯蓋D類、身G類、高杯E類、匙B類、壺C類、甕E類、提瓶B類は新相である。出土点数としては、新相を示すものが多い。

VI期

杯蓋E類、身H類、高杯F・G類、壺D類が該当する。全体の16%で、IV・V期に比べて数量は減少する。なお、杯蓋E類、身H類の形態から、二・三型式に細別することが可能であるが、同一形態のものが極めて少なくなっている。

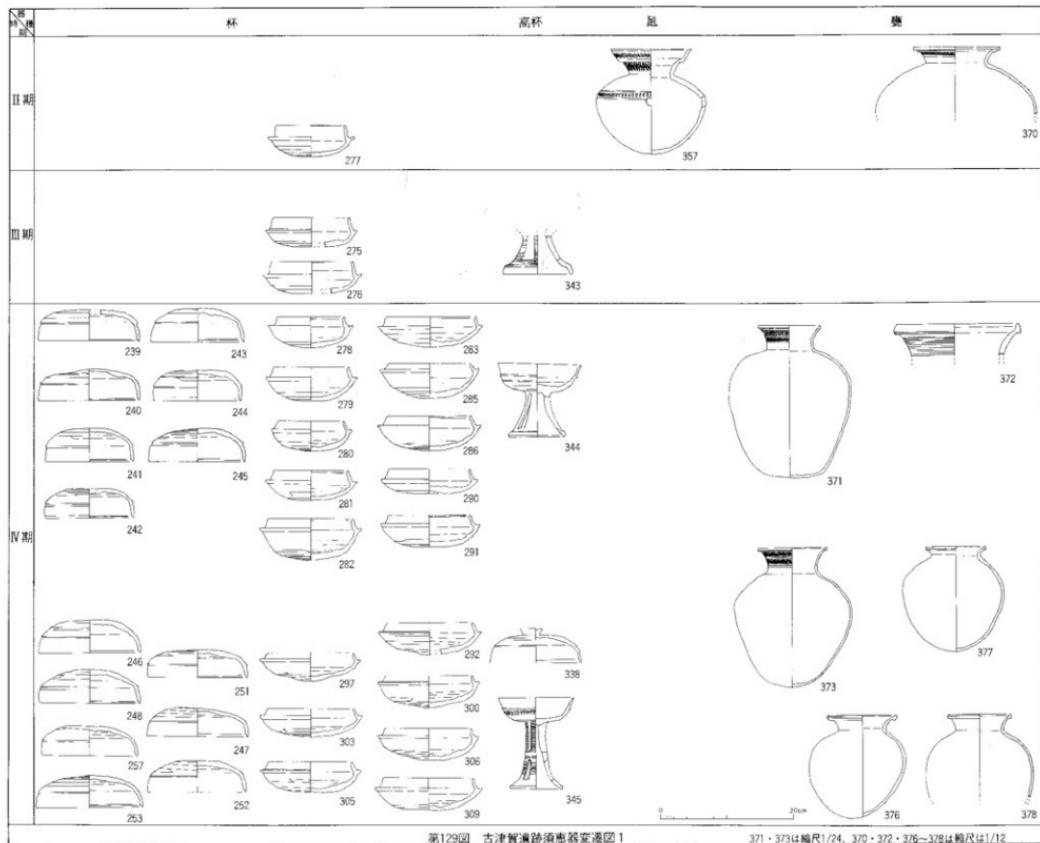
出土資料からみれば、須恵器は、II・III期が少量で、IV・V期に急増し、VI期で減少している。特に、IV期新相、V期新相を頂点とした増減がみられる。II～VI期における須恵器の量的変化は、古津賀遺跡における須恵器の需要の度合を反映したものであり、須恵器を使用した祭祀行為自体の変容に起因するものであると判断される。換言すれば、古津賀遺跡では、III・IV期に活発な祭祀行為が営まれ、その結果、多量な須恵器が使用されたものと考える。

古津賀遺跡と同様、河川沿いに形成された古墳時代後期の祭祀遺跡である具同中山遺跡群からは、発掘調査の結果、多量の須恵器が出土している。古津賀遺跡、具同中山遺跡群からの出土須恵器の比較を行い、須恵器を通して、古津賀遺跡の概観にふれれば、次のとおりである。

(1) 古津賀遺跡は、II～V期に区分される須恵器が出土し、IV・V期に盛行期を向えている。一方、具同中山遺跡群は、I～VI期に区分される須恵器が出土し、II・III期の須恵器が全体の62%を占めて、盛行期はII・III期である。I期の須恵器の存在、II・III期の須恵器の増大、IV期以降の量的な減少は、古津賀遺跡とは対照的である。古津賀遺跡に先行して活発な祭祀行為が具同中山遺跡群で営まれ、その後、古津賀遺跡が祭祀行為の主要な対象地となったことが推察される。

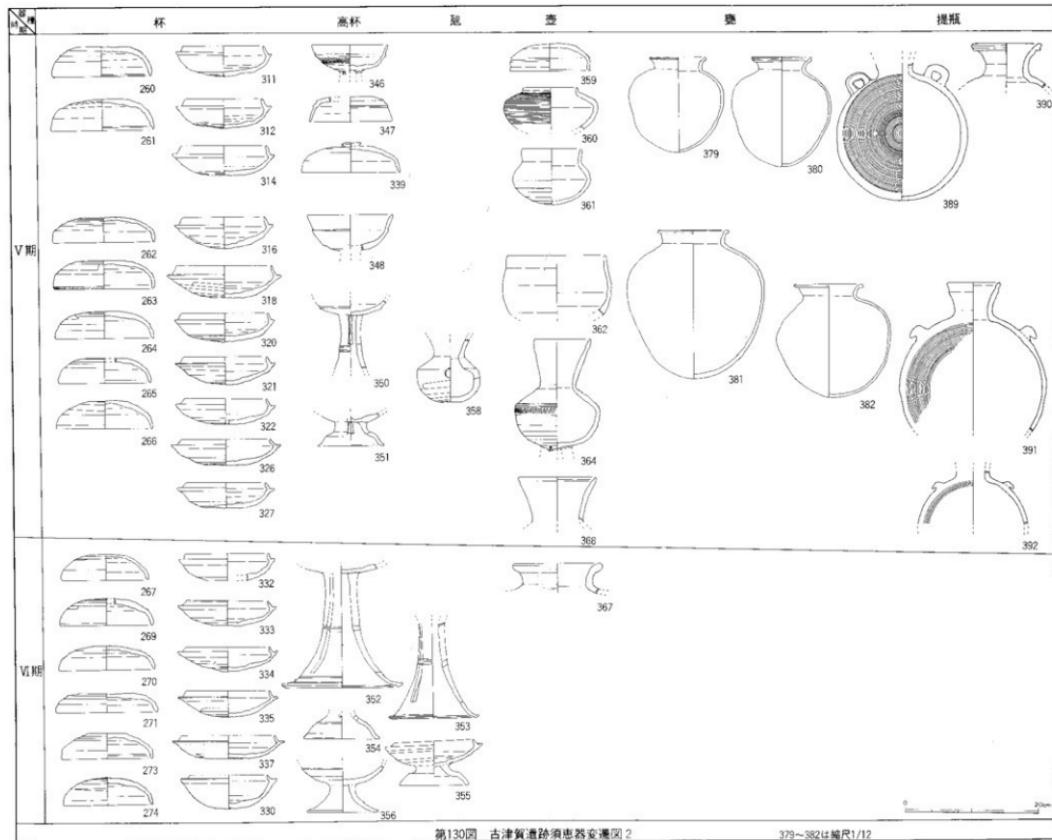
(2) 古津賀遺跡出土の須恵器のなかでIV期以降の須恵器は、同一器種（特に杯蓋、身）のなかで、明らかに成形・焼成・胎土・色調の異なるものがみられる。また、集中地点から一括して出土した須恵器についても同様な相違がみられ、複数の生産地（窯跡）から供給されたものであることがうかがわれる。

古津賀遺跡で出土した多量の須恵器は、量的にも、また、生産地を異にする須恵器の存在からも、単一の集落によって運ばれたものではなく、複数の集落が介在することによって、特定の祭祀行為を行うために集められたものと考える。



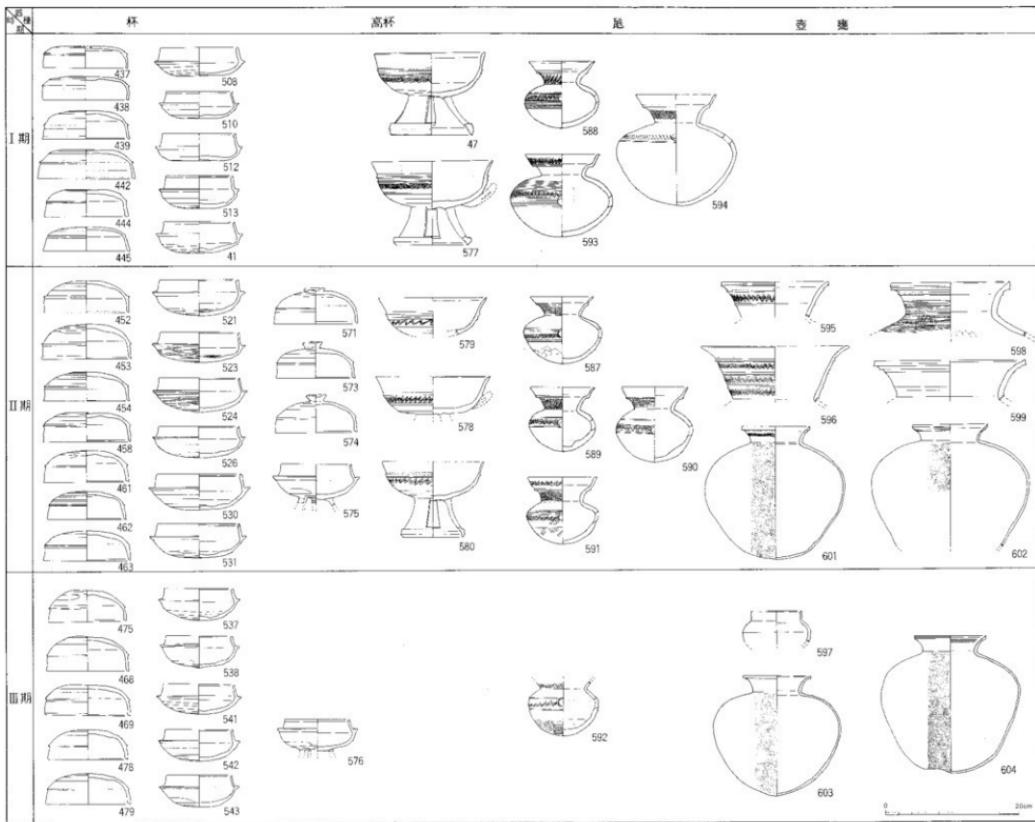
第129図 古津賀濱跡須恵器変遷図1

371・373は縮尺1/24, 370・372・376～378は縮尺は1/12



第130図 古津賀遺跡須恵器安漫図2

379~382は縮尺1/12



第131図 具同中山道跡群須恵器変遷図1

601~604は縮尺1/12, 他は縮尺1/6

(3) 須恵器の器種構成としては、全体的に杯蓋・身が圧倒的に多い。杯蓋・身が示す比率は、本遺跡周辺の集落が所有していた須恵器の一般的傾向を示す可能性が強い。なお、本遺跡からは、器台等の古墳祭祀に伴う須恵器は出土しておらず、集落で使用された日常容器類に限定されている。

(4) 古津賀遺跡の北東約600mの地点には、古津賀古墳（円墳・横穴式石室）が所在する。本遺跡のⅤ期新相に該当する須恵器（有蓋高杯1・無蓋高杯2・直口壺・平瓶・壺胴部片各1）が出土していて、古津賀遺跡盛行期の古墳である。また、渡川流域の中村市竹島地区には、Ⅴ・Ⅵ期に位置付けられる竹島土居山古墳、竹島福重古墳が所在し、中村平野においては後川、渡川流域に後期古墳が集中する。

(5) 具同中山遺跡群、古津賀遺跡は、前者が中筋川、後者が後川の流域に形成された遺跡である。中筋川水系には、宿毛市平田町の平田會我山古墳、高岡山古墳群などの5世紀前半代の前方後円墳、円墳が形成されており、中村平野のなかでも早くから古墳時代集落址が成立していくことが明らかである。これに対して、後川、渡川流域では後期古墳以外は形成されていない。

具同中山遺跡群はいわば、古くからの地域基盤を背景にした遺跡であり、須恵器導入期についても中心的役割りを荷なった集落が存在していたことが推測される。古津賀遺跡は、具同中山遺跡群に統いて盛行期を向えており、その背景には後川、渡川流域の平野部が新たに開拓される地域的な動向を基盤とするものであると推察される。

（山本）

具同中山遺跡群

本遺跡群から出土した須恵器は古式のものがほとんどである。このような古式の須恵器が出土した例としては、県内では安芸市横田遺跡、大方町早咲遺跡などがあるが、本遺跡ほど多量に出土した例は県下では珍らしい。

これら須恵器は、大きく4ヶ所に集中しており、1時期だけのものではなく数時期重複した形で各地区ほぼ同一層序中より出土している。器種には杯（蓋・身）、高杯（有蓋・無蓋）、甌（小型・大型）、壺（長頸・短頸）、甕がある。この内、杯の占める割合が76%で、全体の約76%となっている。次に、甕の9%、甌の7%、高杯の6%、壺の2%と続く。

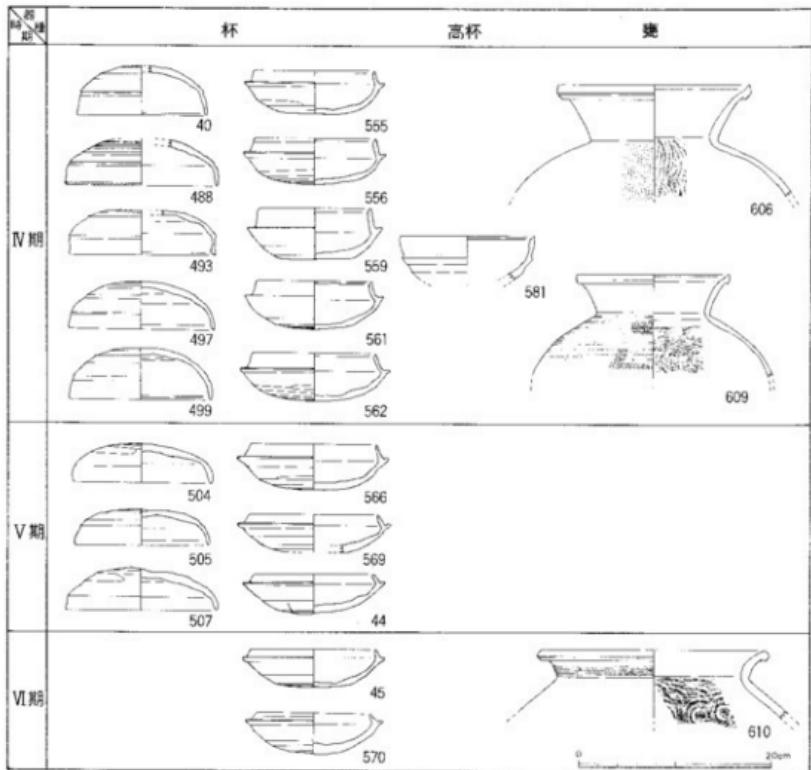
本遺跡群出土の古墳時代の須恵器は、以下の6期に大別することができる。

I期

本遺跡群では、最も古い段階のもので、杯では蓋・身ともA類、無蓋高杯のA類、甌のA類がこの時期に属すると考えられる。これらのほとんどは、作り、焼成とも丁寧であり、在地産ではなく、陶邑等からの搬入品ではなかろうか。また、中には古い形態を呈するものもみられるが、共伴関係からしてこの時期より古く位置付けることはできなかった。

II期

この時期の須恵器の出土が最も多く、全体の36%を占める。杯では蓋・身ともB類、高杯では有蓋高杯の蓋と有蓋高杯のA類、無蓋高杯のB類、甌ではB類、長頸壺、甕ではA類がそれ



第132図 具同中山遺跡群須恵器変遷図 2

それこの時期に属すると考えられる。この時期の須恵器から焼成、胎土とも不良なものが目立つて来る傾向があり、在地での生産が始まったことを示すようである。

Ⅲ期

Ⅱ期の須恵器に次いでその出土量が多く、全体の26%を占める。杯では蓋・身ともC類、高杯では有蓋高杯のB類、甌ではC類、短頸甌、甌のB類がそれぞれこの時期に属すると考えられる。全般に作りが粗雑で、在地で生産された可能性が強い。

Ⅳ期

この時期から出土量が減少し、全体に占める割合はⅠ期とほぼ同じ15%となる。杯では、蓋・身ともD・E類、無蓋高杯のC類、壺のC類がそれぞれこの時期に属すると考えられる。この時期でも杯の蓋・身のD類が古く位置付けられよう。

V期

VI期以上に出土量が少なく、全体に占める割合は5%になる。杯の蓋・身のF類のみがこの時期に属すると考えられる。

VII期

全体に占める割合が2%となり、本遺跡での最後の時期である。杯の身のG類、壺のD類がこの時期に属すると考えられる。

以上からして、本遺跡群はⅡ・Ⅲ期を中心とし、時期的には5世紀末から6世紀初頭にかけて盛行した遺跡であったといえるのではなかろうか。そして、出土量が減少するIV期からV期にかけては古津賀遺跡にその中心が移動したと考えられる。

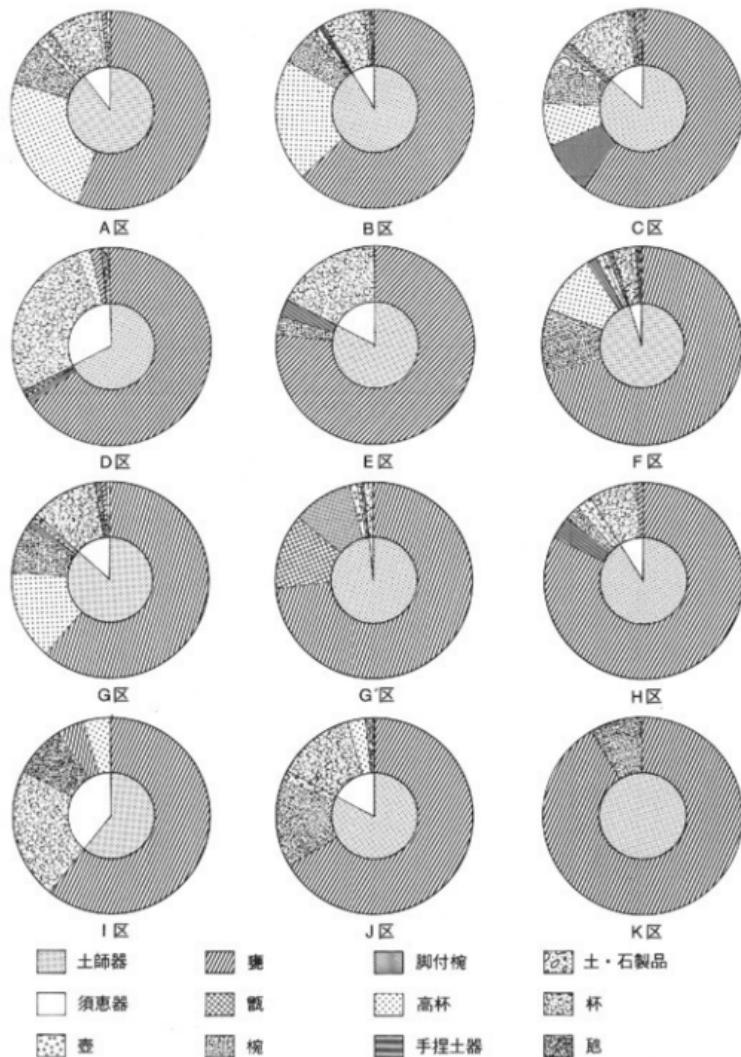
一方、本遺跡群から出土しているⅠ期の須恵器は現在のところ県下では最も古い時期に位置付けられる須恵器の1つであるが、将来的にはさらに古い段階の須恵器が発見される可能性がある。また、須恵器生産については、出土量が増加し、Ⅰ期の須恵器に比べ焼成、胎土とともに粗雑になるⅡ期段階から在地で生産されたと考える方が妥当ではなかろうか。ただし、その絶対量が多いわけではないので、短期間の窯が点在して存在するものと推考される。

なお、古墳時代以降における古代の須恵器については、出土量が少なく、遺構から出土したのはわずかに1点のみで他は散発的であり、その性格についても明確でない。時期的には、9世紀代を中心に一部は8世紀末に該当するのではないかと考えられる。 (廣田)

(註)

- (1) 小出義治「祭祀と土器」『神道考古学講座』第三巻 原始神道期2 雄山閣 1981年
- (2) 亀井正道「祭祀」「日本の考古学V 古墳時代(下)」河出書房新社 1976年
- (3) 小野真一「祭祀遺跡」所収 ニューサイエンス社 1982年
- (4) 奈良県立橿原考古学研究所『橿原』1976年
- (5) 尚遺構発見当初は、これを「結界」という表現で発表したが、当遺構が原始神道期に属するところからあえて「斎庭」という表現を採用した。
- (6) 岡田耕司「常陸國風土記」「鑑賞日本古典文学」第2巻 日本書紀・風土記 角川書店 1977年
- (7) 義江彰夫「律令制下の村落祭祀と公出奉制」『歴史学研究』380
- (8) 『国史大系』24 令集解後編 吉川弘文館 1966年
- (9) (7)に同じ
- (10) (7)に所収
- (11) 義江彰夫「日本通史I 歴史の曙光から伝統社会の成熟へ」 山川出版社 1986年

- 02 (1)と同じ
- 03 亀井正道「河神信仰の考古学的考察」『坂本太郎博士頌寿記念 日本史学論集』吉川弘文館 1983年
- 04 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係文化財調査報告』III 粕屋郡古賀町所在遺跡群の調査
2 1978年
- 05 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『高原A・B遺跡』1984年
- 06 福岡県教育委員会『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告』1986年
- 07 (3)と同じ
- 08 亀井正道「土製模造品」『神道考古学講座』第三巻 原始神道期2 雄山閣 1981年
- 09 (04)と同じ
- 20 『日本書紀』上 日本古典文学大系 岩波書店 1987年
- 21 (08)と同じ
- 22 平安学園考古学研究室『船橋遺跡』 1968年

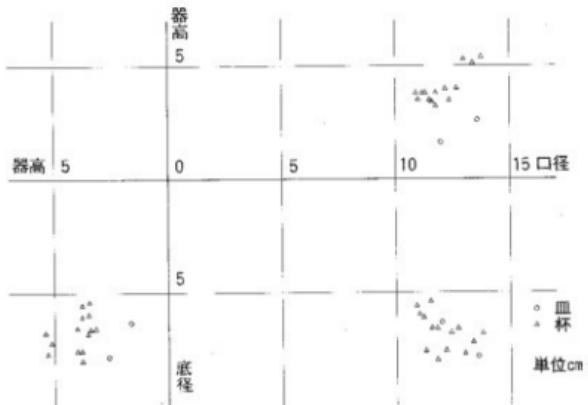


第133図 調査区分出土遺物種別内訳

第26表 土師器形態別時期の推移表

器種	時期	4 C	5 C後半	5 C末	6 C初	6 C前半
		A	B	C	D	E
壺	A	+	+	+	+	+
	B	+	+	+	+	+
	C	+	+	+	+	+
	D	+	+	+	+	+
甌	A	+	+	+	+	+
	B	+	+	+	+	+
	C	+	+	+	+	+
	D	+	+	+	+	+
碗	E	+	+	+	+	+
	A-Ⅰ	+	+	+	+	+
	A-Ⅱ	+	+	+	+	+
	B-Ⅰ	+	+	+	+	+
	B-Ⅱ	+	+	+	+	+
	C-Ⅰ	+	+	+	+	+
	C-Ⅱ	+	+	+	+	+
	C-Ⅲ	+	+	+	+	+
脚付碗	D-Ⅰ	+	+	+	+	+
	D-Ⅱ	+	+	+	+	+
	D-Ⅲ	+	+	+	+	+
	E-Ⅰ	+	+	+	+	+
	E-Ⅱ	+	+	+	+	+
	E-Ⅲ	+	+	+	+	+
高杯	A-Ⅰ	+	+	+	+	+
	B-Ⅰ	+	+	+	+	+
	B-Ⅱ	+	+	+	+	+
	C-Ⅰ	+	+	+	+	+
	C-Ⅱ	+	+	+	+	+
	C-Ⅲ	+	+	+	+	+

第27表 SK 1 出土遺物法量表



第28表 土錐計測表

図版番号	調査区	遺構・層位	全長(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)
656	E	II 層	5.9	1.9	0.7	14.3
657	B	SK 1	3.7	1.5	0.5	7.1
658	夕	夕	3.1	1.4	0.5	5.5
659	夕	夕	5.1	1.4	0.5	8.4
660	E	V 層	3.8	1.9	0.6	9.5
661	夕	II 層	2.0	1.1	0.4	1.4
662	B	SK 1	4.6	1.7	0.5	9.6
663	夕	夕	2.2	1.4	0.5	5.1
664	E	II 層	4.4	1.4	0.5	6.5
665	B	SK 1	4.7	2.1	0.5	15.8
666	夕	夕	4.1	1.6	0.7	9.6

第29表 須恵器形態別集中地点出土表

器種 形態分類 集中地點	杯(蓋)				杯(身)				有蓋高杯			無蓋高杯			懸			甕				
	A	B	C	計	A	B	C	D	F	計	A	B	計	A	B	計	A	B	計	A	B	計
S X 2								1	1	2												
S F 2	6	3	1	10		2				2										1		1
S F 4	3	3	6	12	1	2				3						1	1					
S F 5	1		1	2																		
S F 6	1	4	5	2	9	1				12	1	1	2	1		1	2	1	3	1	1	2
S F 7	1	5	2	8	3	2	6	3		14						1	1	1	1	1	1	2
S F 8		1	1		1	2				3												
S F 9			1	1		2				2										1	1	
計	9	11	12	32	5	15	13	4	1	38	1	1	2	1	1	1	3	3	1	4	2	2
																						6

第30表 土師器形態別集中地点出土表（甕）

形態分類 集中地点	A-I	B	C					D					E	計			
			C-I-①	C-I-②	C-I-③	C-II-①	C-II-②	C-II-③	D-I-①	D-I-②	D-I-③	D-II-①	D-II-②	D-II-③			
S X 2			1	1			1									3	
S X 3	1	4			1											6	
S X 4		3														3	
S X 5		3														3	
S X 7				1			1									2	
S F 2				1	2						1					4	
S F 3			1		1											2	
S F 4		1	1	5	3	1								1		12	
S F 5				1											1	2	
S F 6	1		1	3	27	5	1	1	1			2	3	1	1	47	
S F 7				1	11	6		1		1		2	1			23	
S F 8					1	1		1					1			4	
S F 9										1						1	
計	2	11	4	6	50	16	2	4	1	2	1	2	5	3	1	2	112

第31表 土師器形態別集中地点出土表（椀）

形態分類 集中地点	A		B			C			D			E		計	
	A-I	A-II	B-I	B-II	C-I	C-II	C-III	D-I	D-II	D-III	E-I	E-II			
S X 2												1			1
S X 3					1					1					2
S X 5	1			1					3						5
S F 2				1							2				3
S F 3											4	2			6
S F 4		1	2	4	1	2					10	2			22
S F 6	1					2	1		1	1	21	3			30
S F 7				2	1						6	1			10
S F 8						1					1				2
S F 9											1				1
計	2	1	4	7	2	5	1	4	1	1	46	8			82

第32表 土師器形態別集中地点出土表(壺)

形態分類 集中地點	A	B	C		D	計
			C-I	C-II		
S X 2	1					1
S X 3			1			1
S X 4				1		1
S X 5				1		1
S X 6					1	1
S F 3	1					1
S F 6	4	2				6
S F 7	1					1
計	7	2	1	2	1	13

第33表 土師器形態別集中地点出土表(高杯)

形態分類 集中地點	A	B	C			D	計	
			A-I	A-II	B-I	B-II	C-I	C-II
S X 2							1	
S F 1								1
S F 2					1		1	2
S F 3			1				1	3
S F 4						2		
S F 5					2		1	1
S F 6	1				1	1	9	6
S F 7	1					1	4	
計	2	1	4	2	13	14	6	1
							2	45

第34表 土師器形態別集中地点出土表(附付椀)

形態分類 集中地點	A-II	B		C		計
		B-I	B-II	C-I	C-II	
S F 3				1	1	2
S F 4	1	3	1			6
S F 6				1	1	2
S F 7					1	1
計	1	3	2	3	2	11

第35表 土師器形態別集中地点出土表(手捏土器)

形態分類 集中地點	A					B					C					計
	A-I	A-II	A-III	A-IV	A-V	B-I	B-II	B-III	B-IV	B-V	C-I	C-II	C-III	C-IV	C-V	
S X 2			1													1
S F 4	9	11		1	2	1	2	5	3		1	2	1	1	1	41
S F 5	1							1								2
S F 6	2						1	1	1						1	6
S F 7														1		1
S F 8	1								1							2
計	13	11	1	1	2	1	3	7	4	1	1	2	1	1	1	53

図 版

古津賀遺跡



SF 10

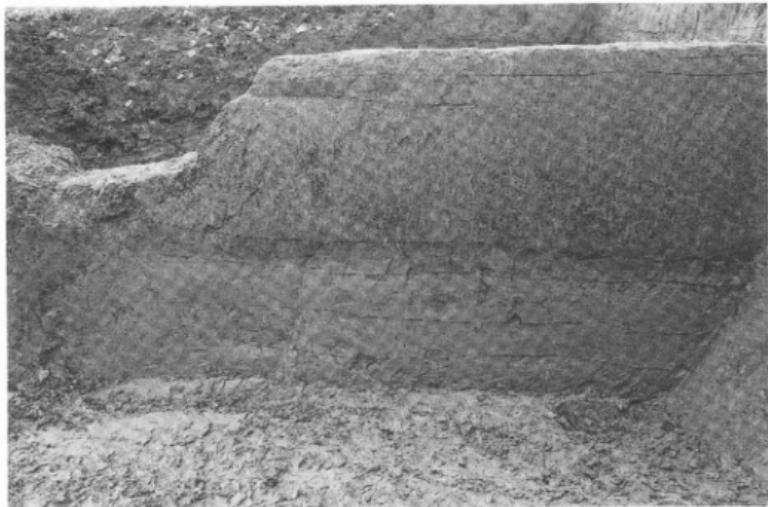


古津賀遺跡遠景(南より)

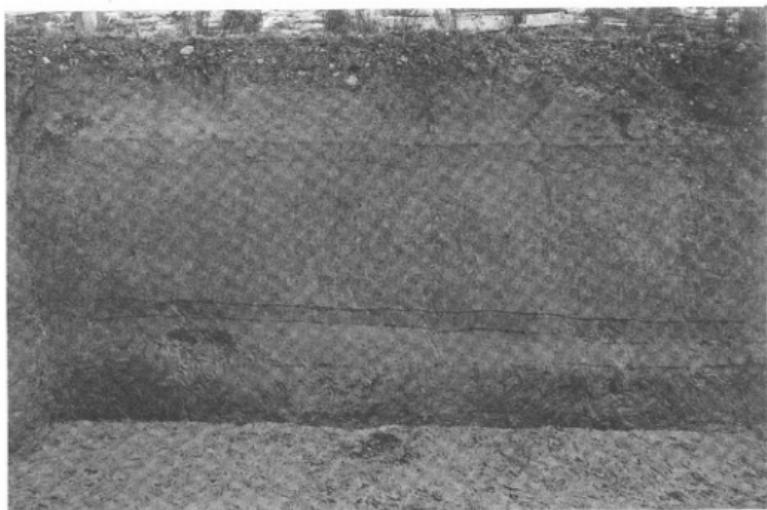


同上(北より)

図版 2



S区セクション(北壁)



S区セクション(東壁)

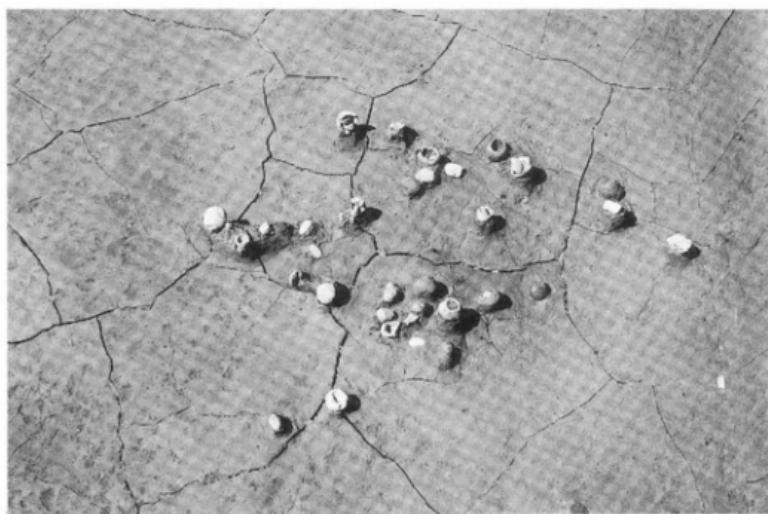


SF 10・11 遺物出土状態

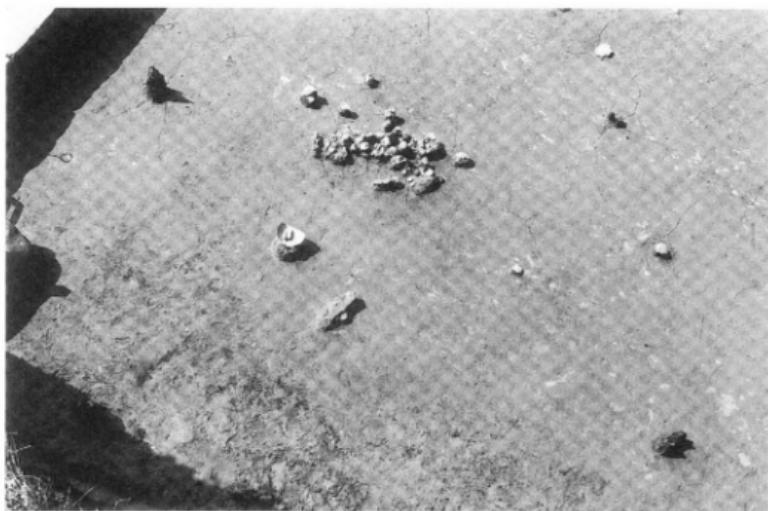
图版 4



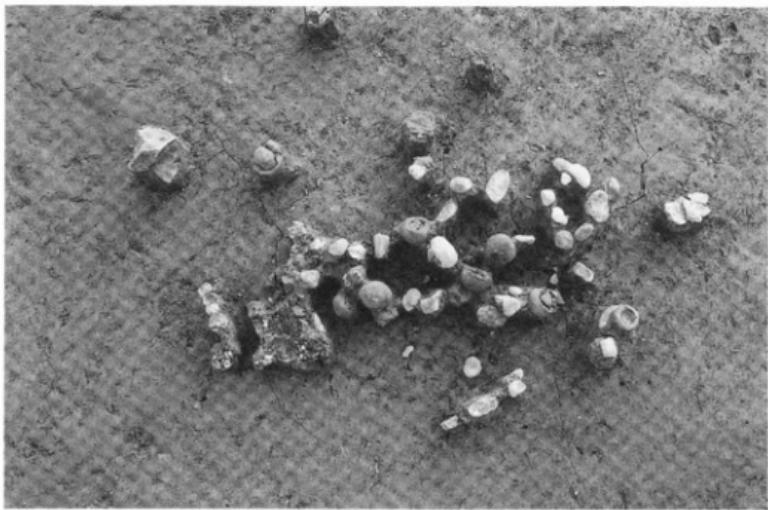
SF 1 遗物出土状態



同上



SF 3 遺物出土状態



同上

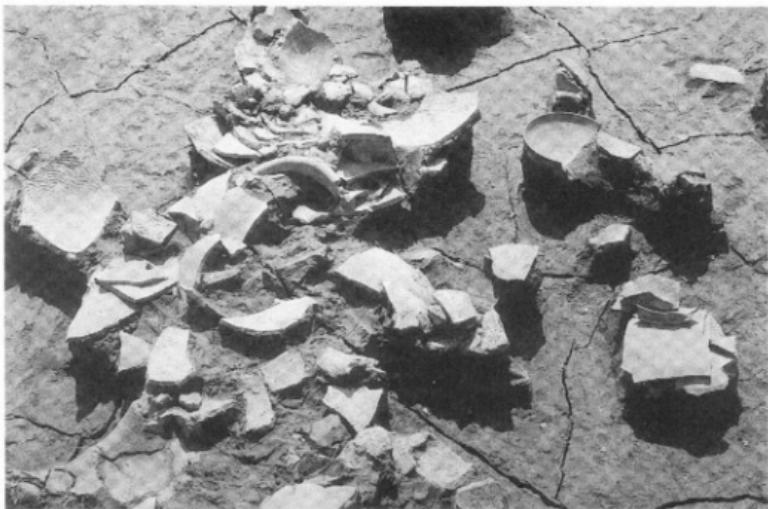
図版 6



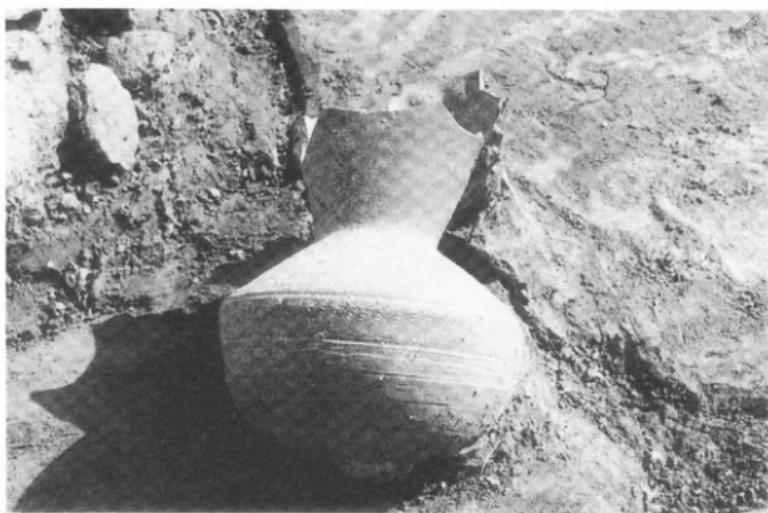
SF 2 + 3 遺物出土状態



SF 3 遺物出土状態

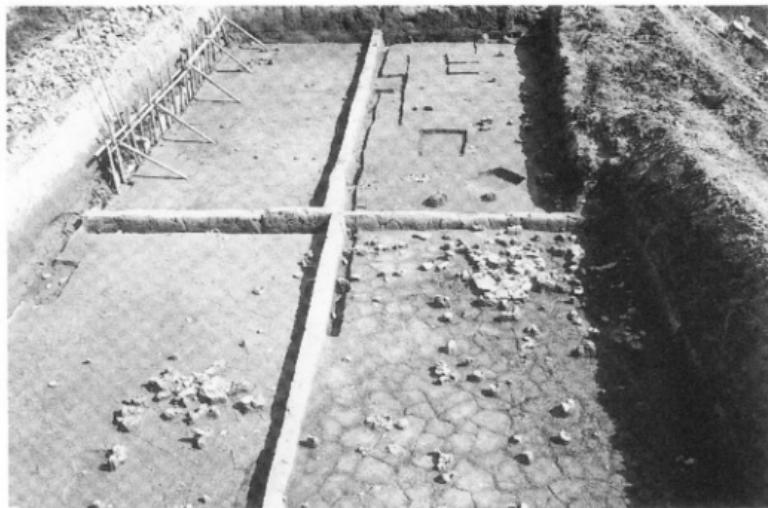


SF 4 遺物出土狀態



須惠器壺(364)出土狀態

图版 8



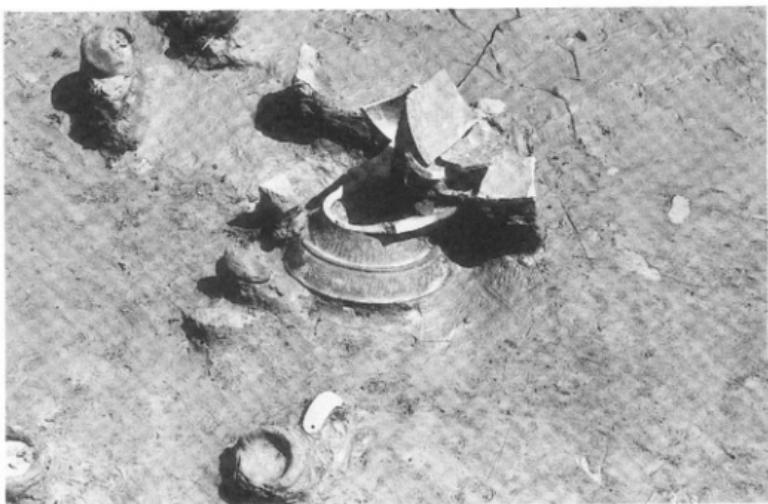
SF 4 · 5 遗物出土状態



SF 5 遗物出土状態

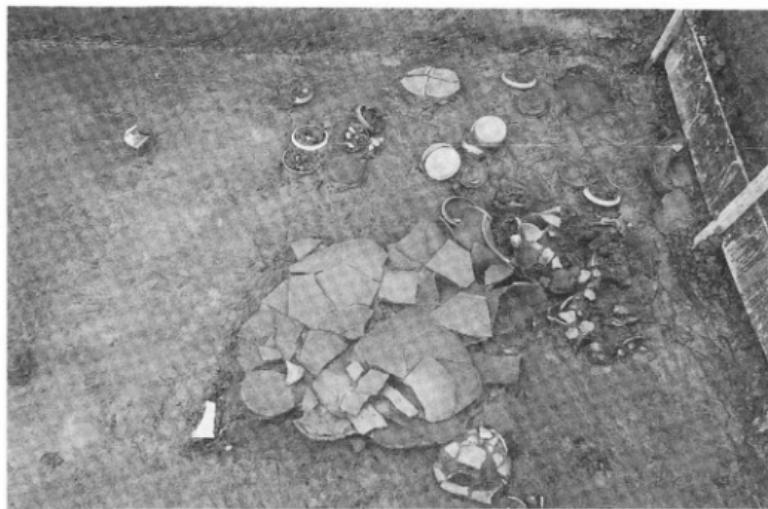


SF 9 遺物出土状態

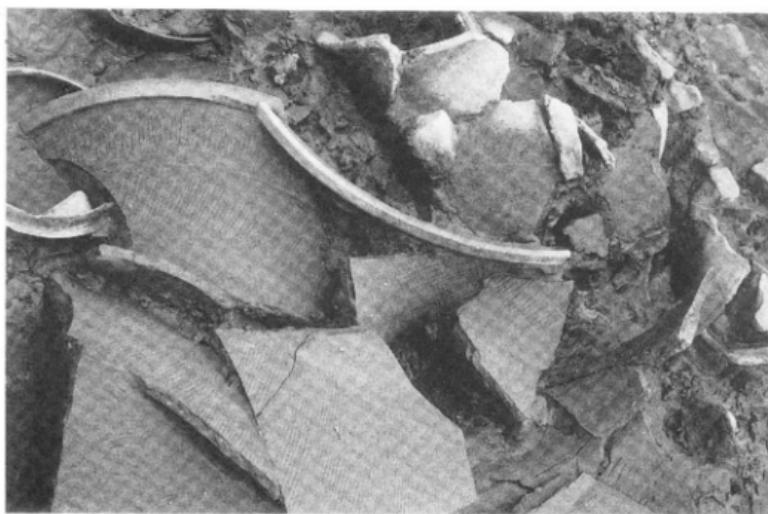


同上

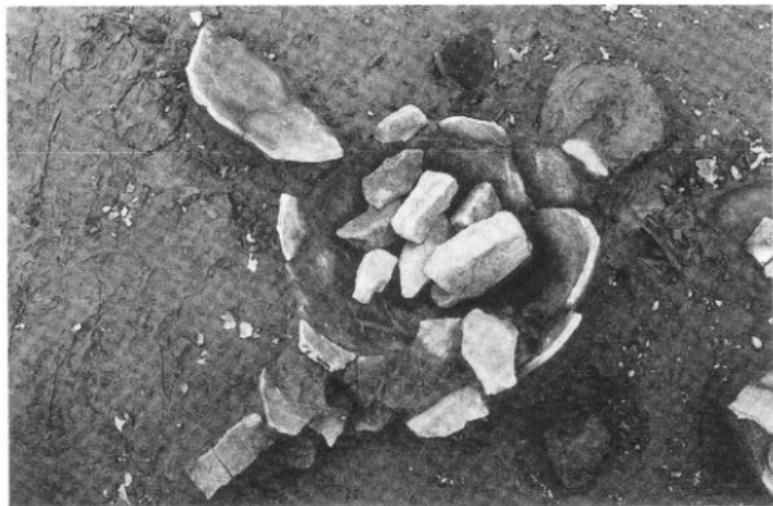
図版10



SF 10 遺物出土状態



同上(須恵器甕 373)

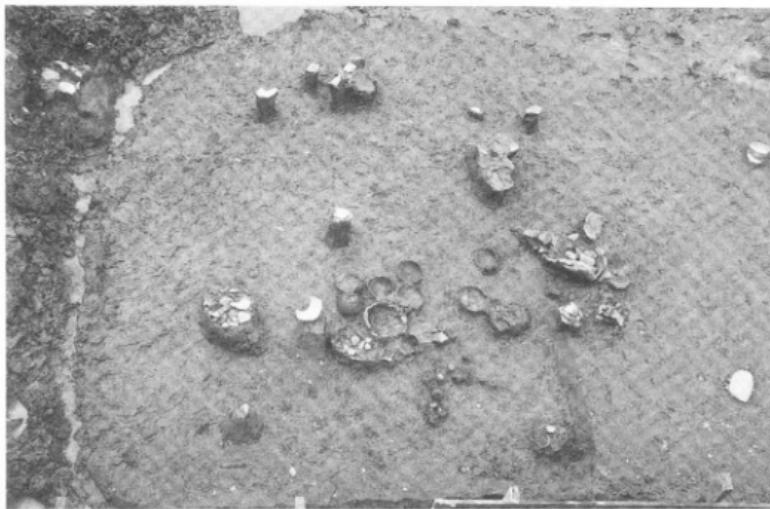


SF 11 土師器甕出土状態

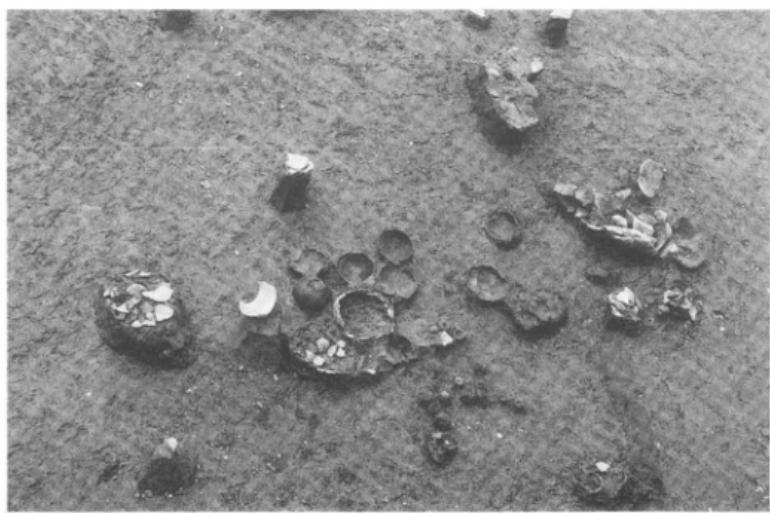


SF 10 須恵器杯出土状態

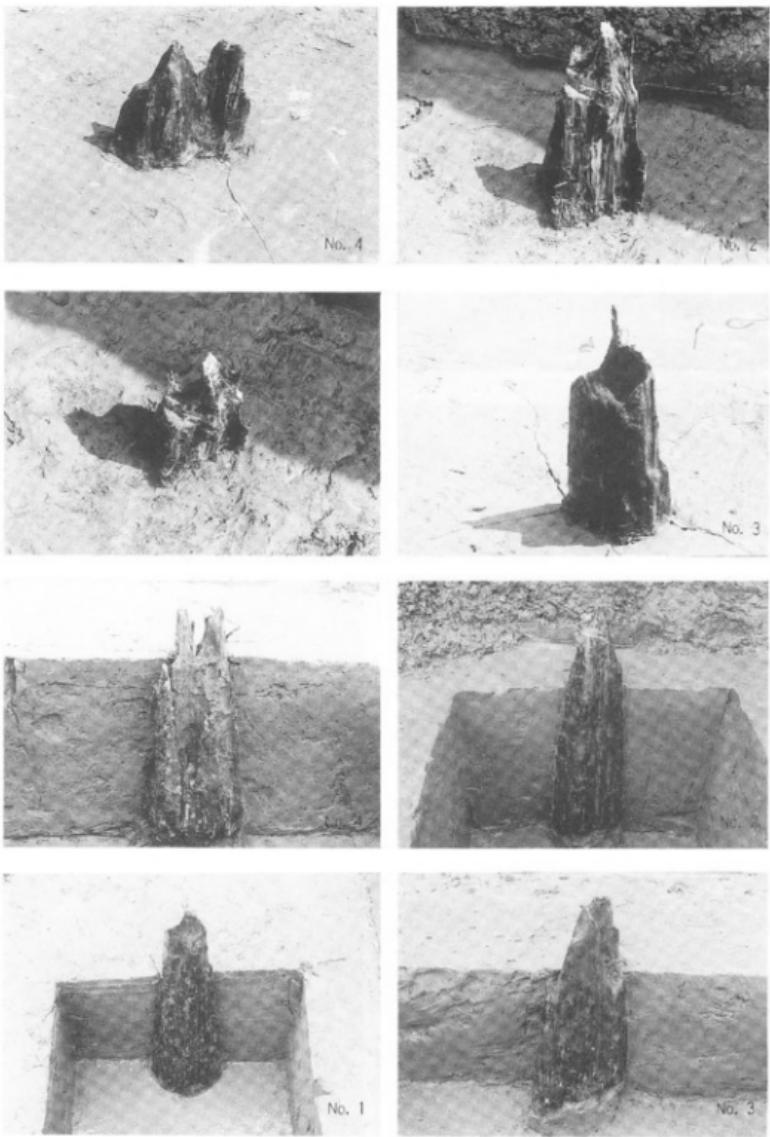
図版12



SF 11 遺物出土状態

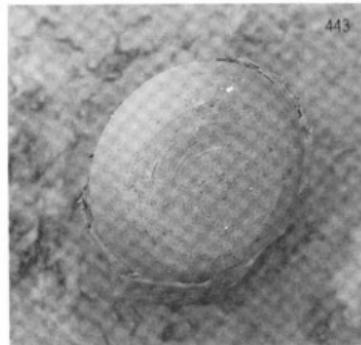
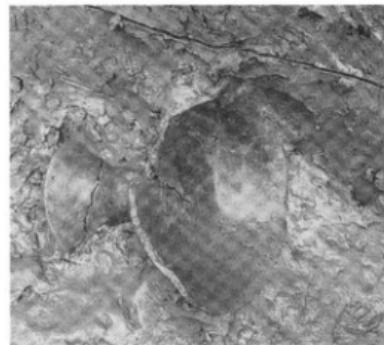
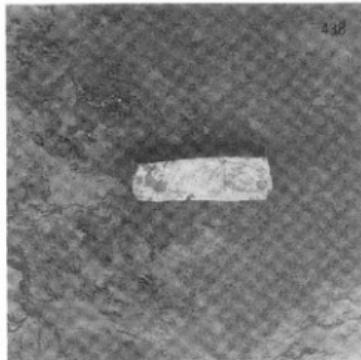
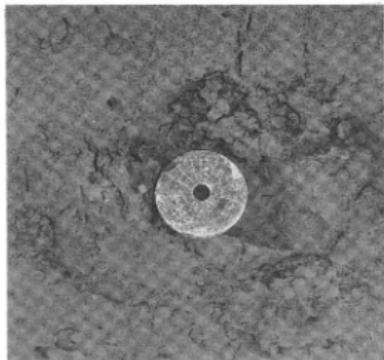


同上



SF 3 杭様出状態及び半截状態

図版14



紡錘車、硃石、土師器高杯、須恵器杯出土状態



442



443

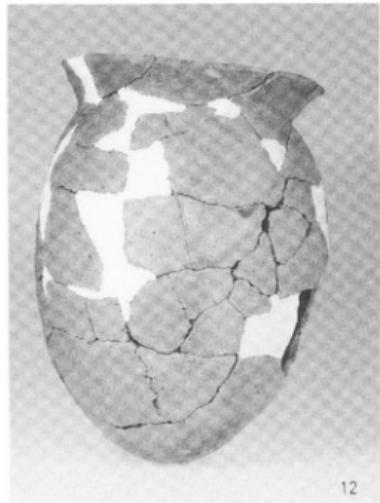


445

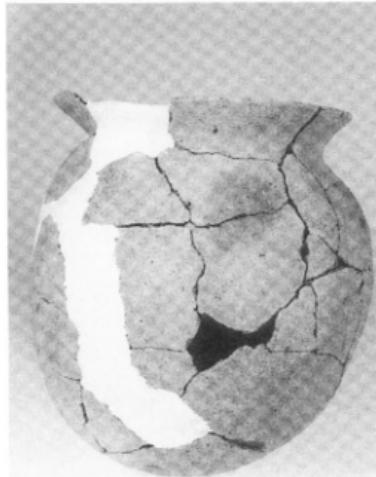


出土遺物（鉄器）

图版16



12



21



23



26

出土遗物(土师器)



31



32

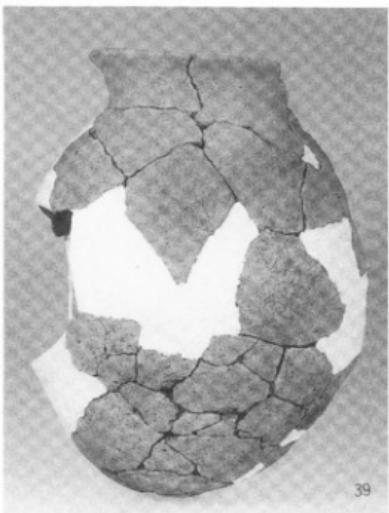


34



35

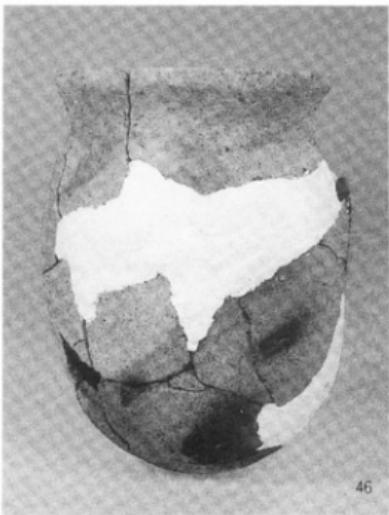
出土遗物(土师器)



39



44

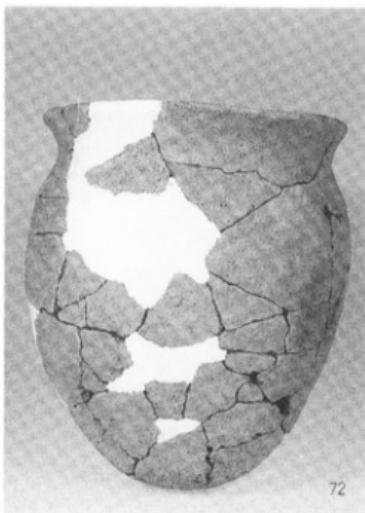
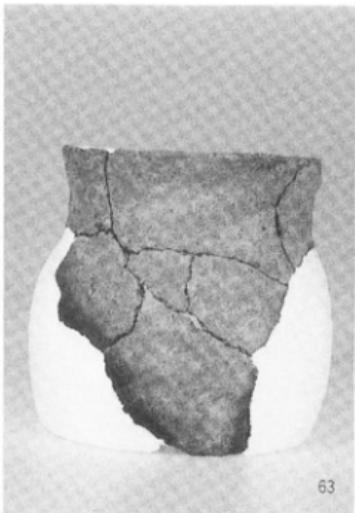
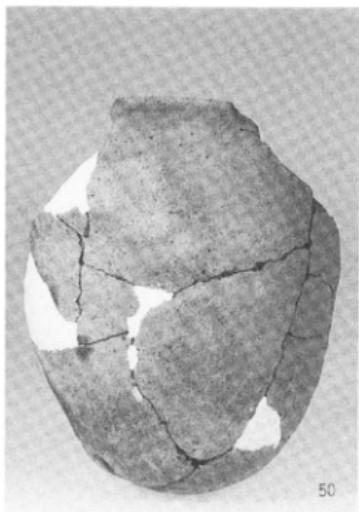


46



48

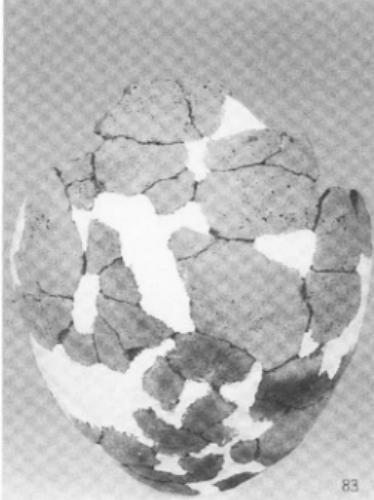
出土遺物(土師器)



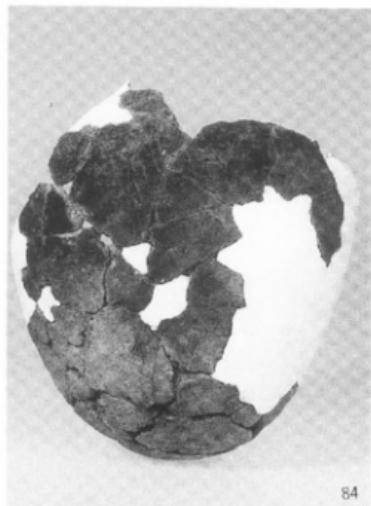
出土遺物(土師器)



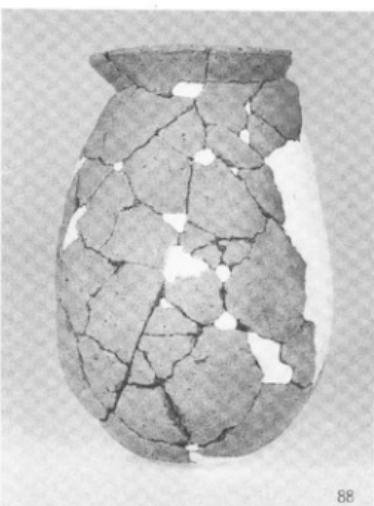
73



83

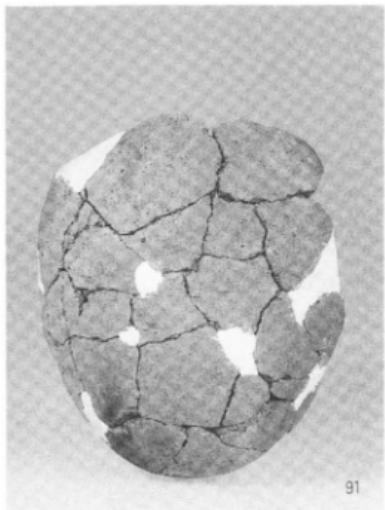


84

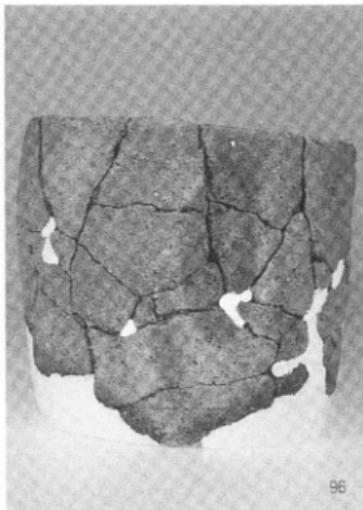


88

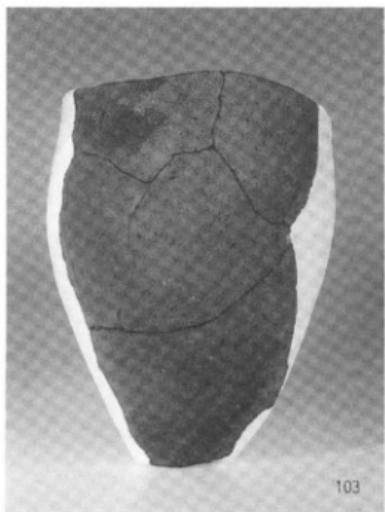
出土遺物(土器)



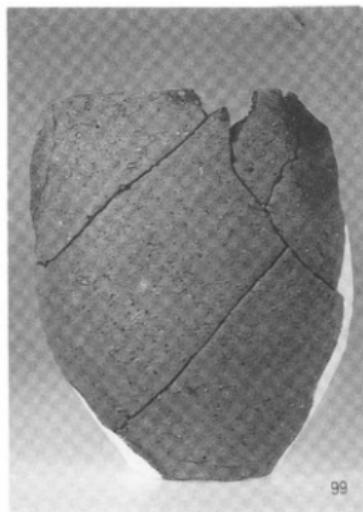
91



96



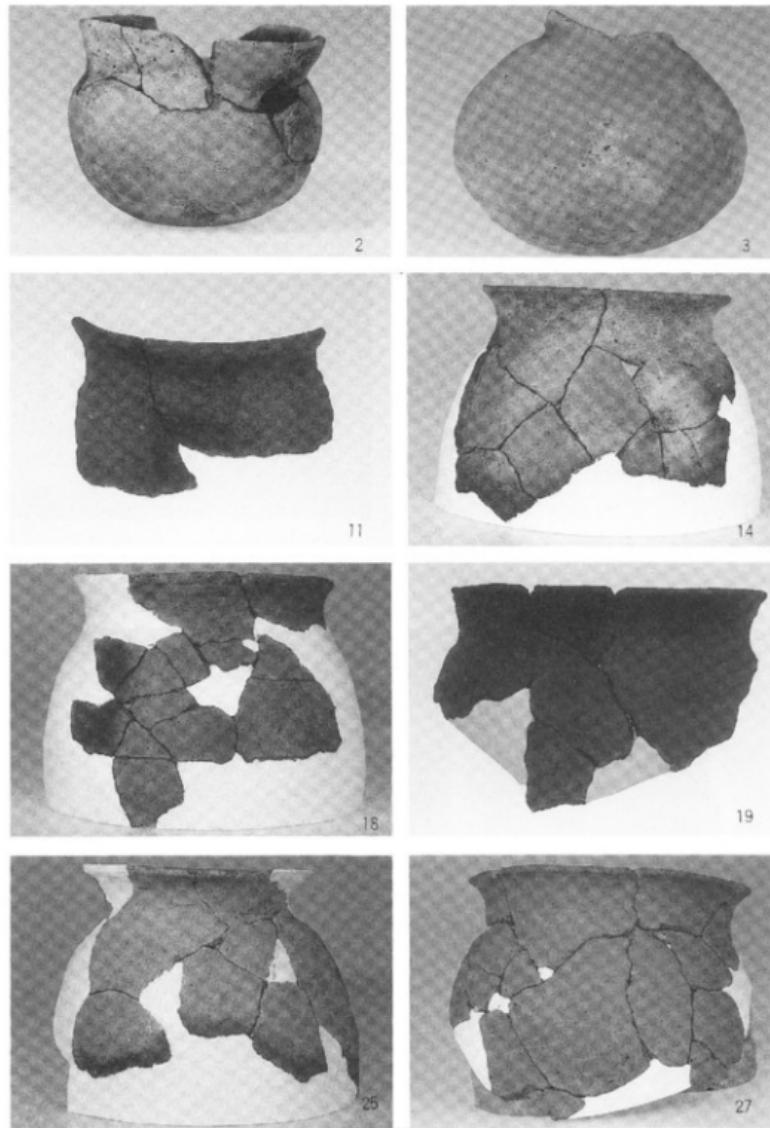
103



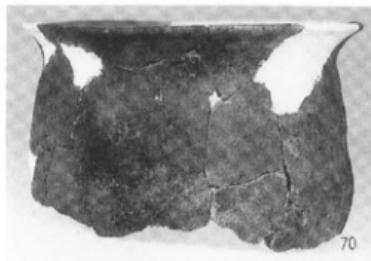
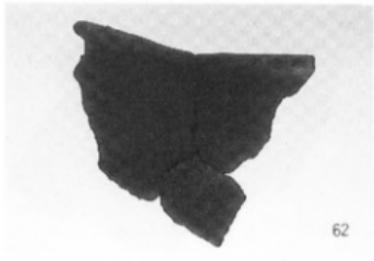
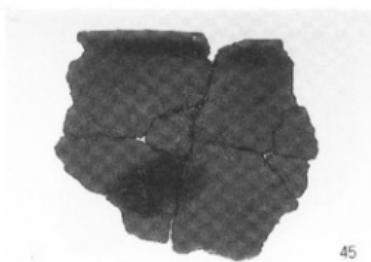
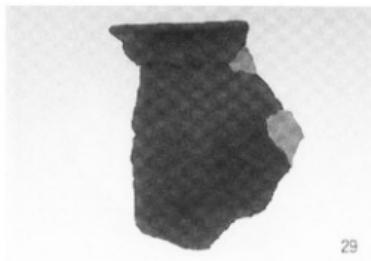
99

出土遺物(土師器)

图版22

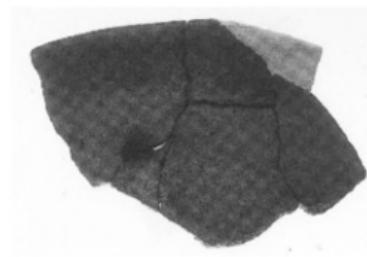
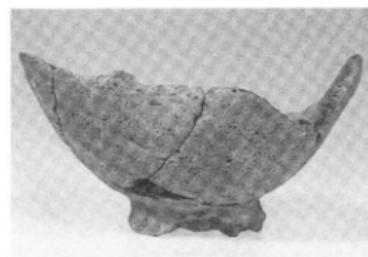
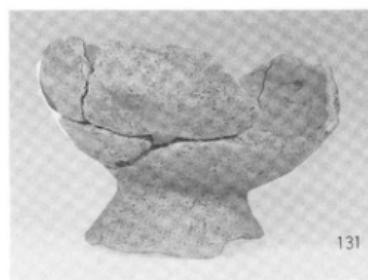
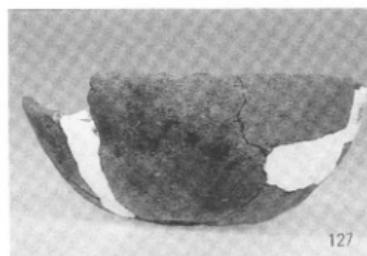
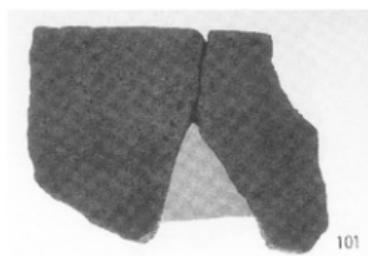
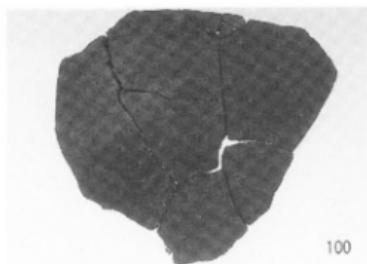
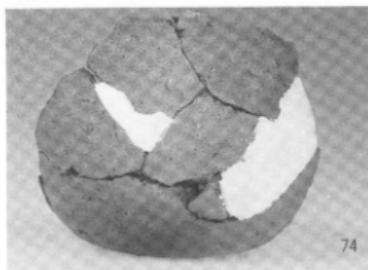


出土遺物(土器)

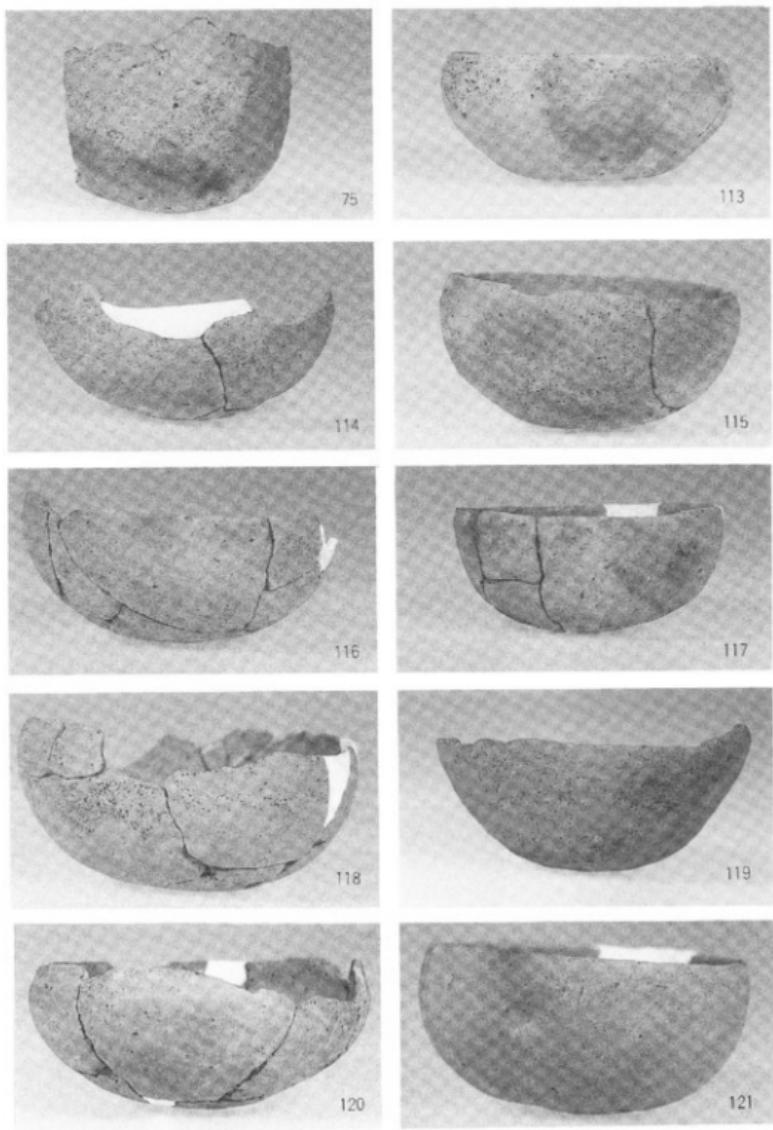


出土遺物(土器)

图版24

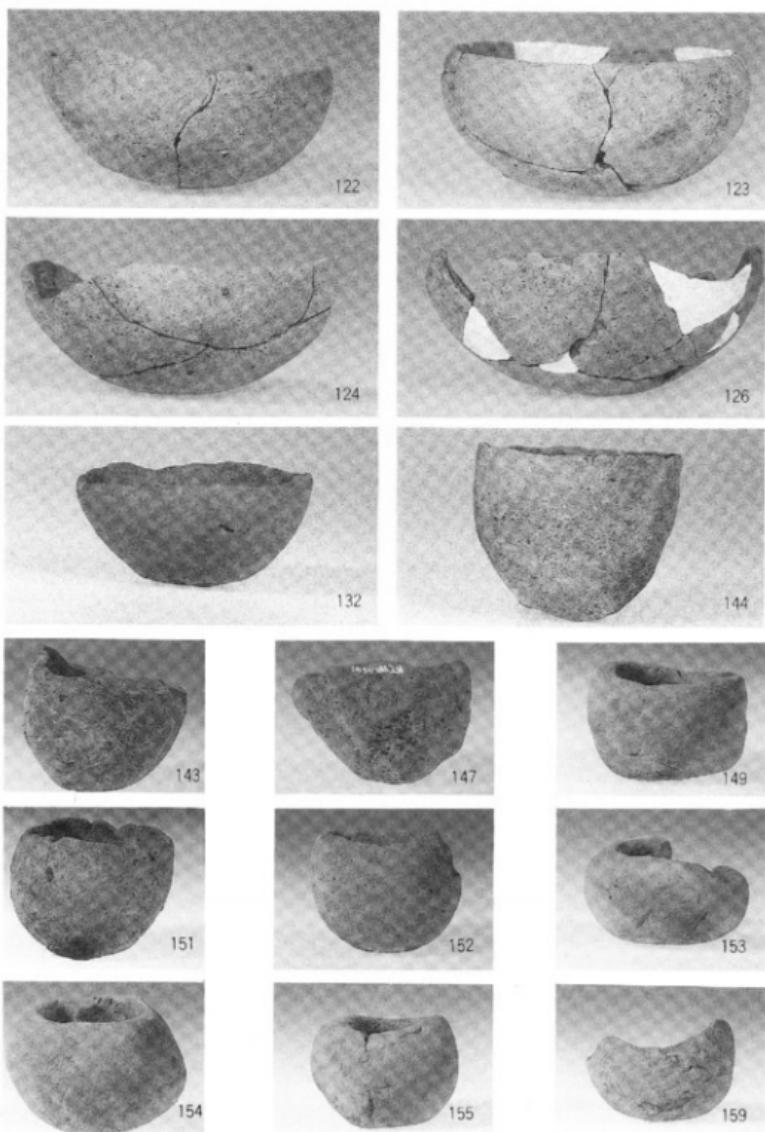


出土遗物(土师器)



出土遗物(土器)

図版26



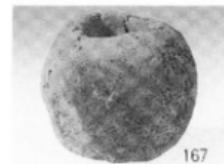
出土遺物(土師器・手捏土器)



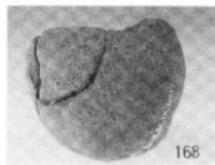
163



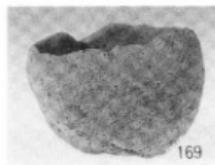
164



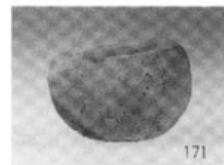
167



168



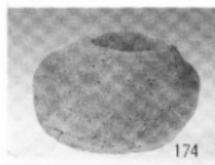
169



171



172



174



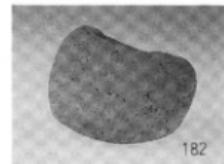
176



178



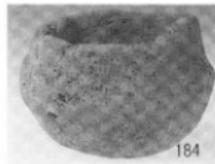
181



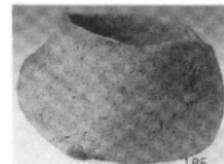
182



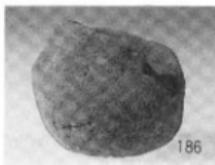
183



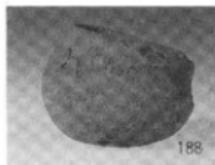
184



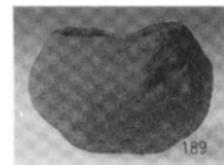
185



186



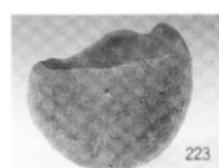
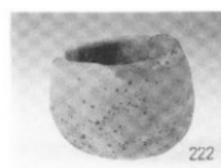
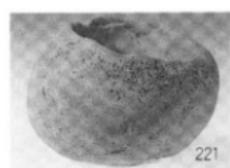
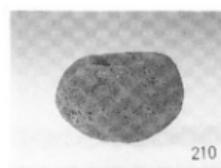
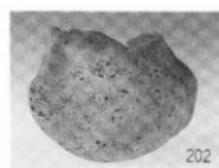
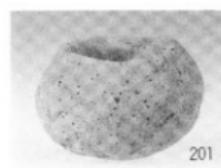
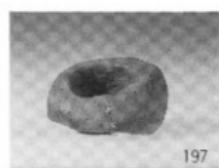
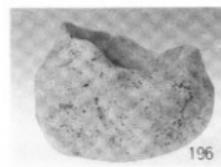
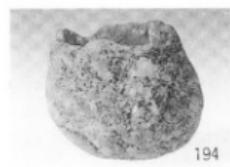
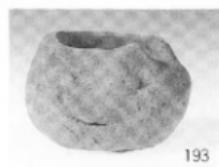
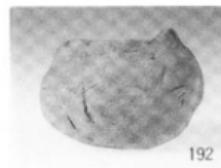
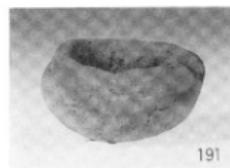
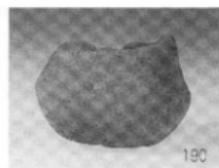
188



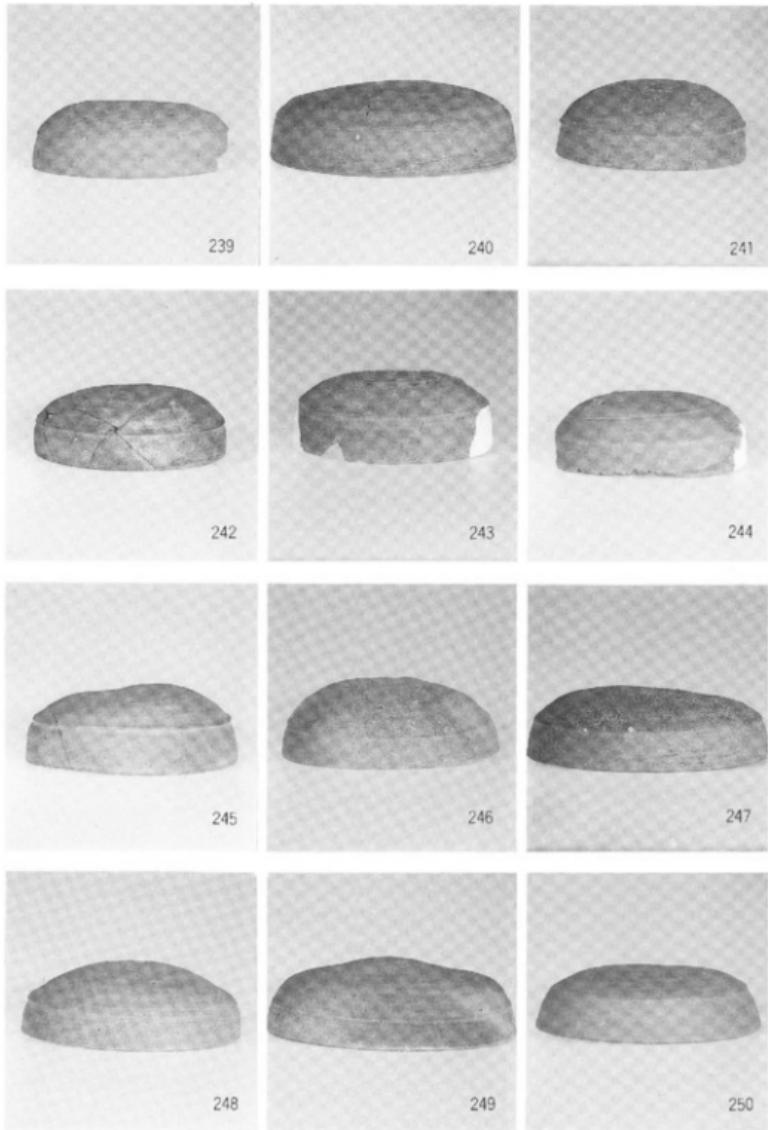
189

出土遺物(手捏土器)

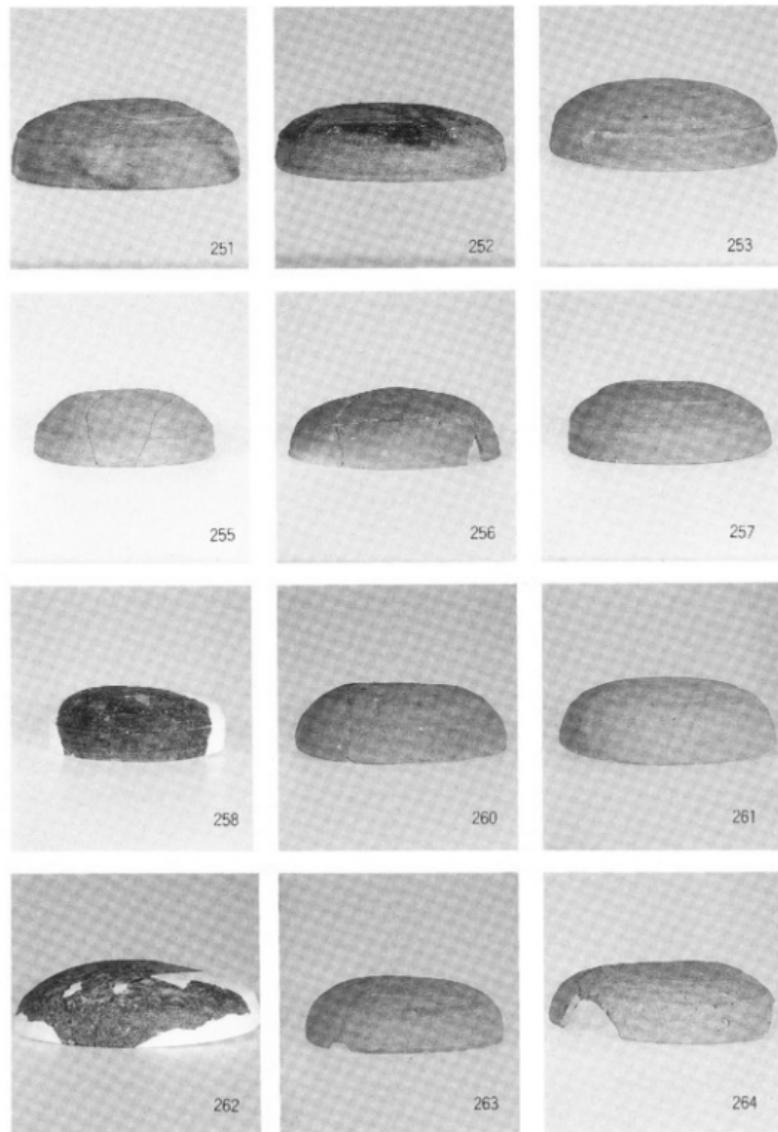
图版28



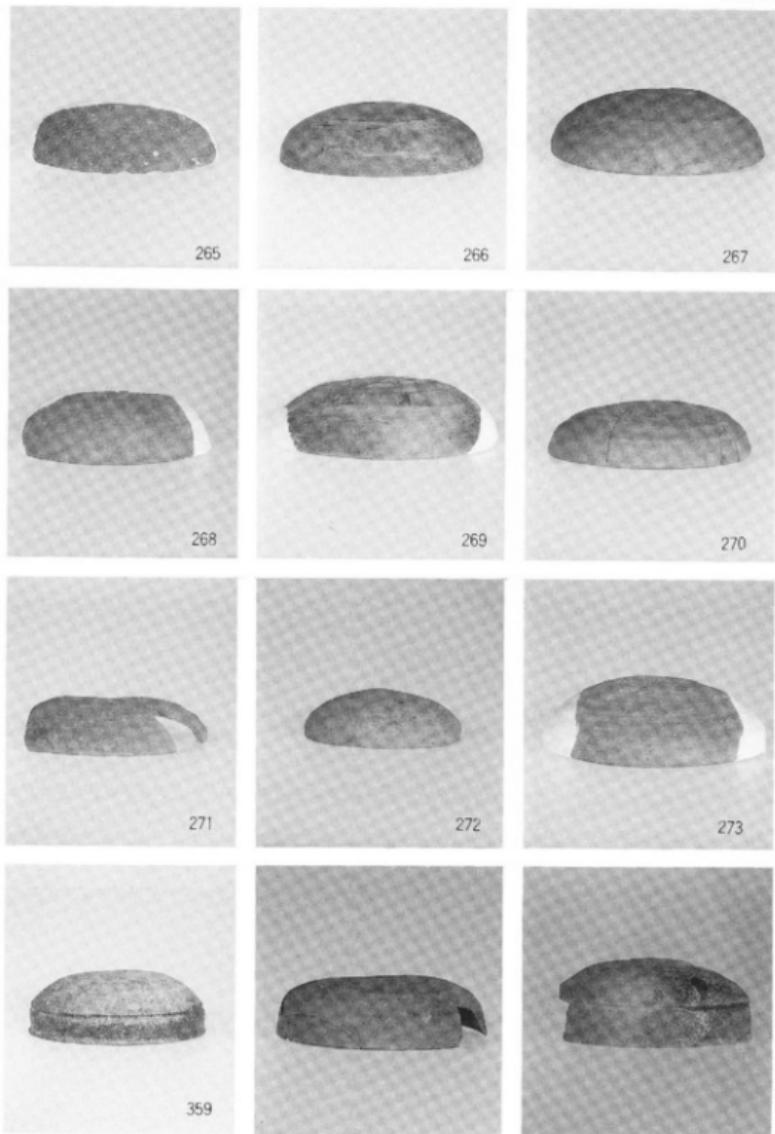
出土遗物(手捏土器·土制模造品)



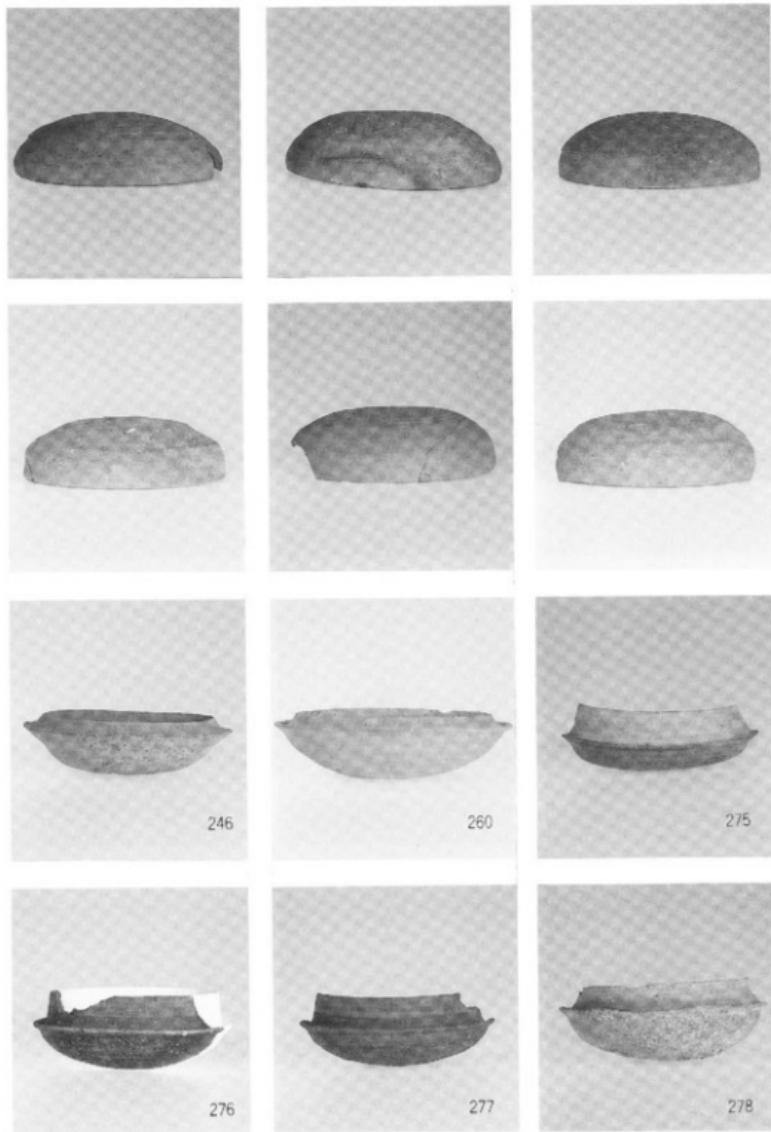
出土遺物(須恵器)



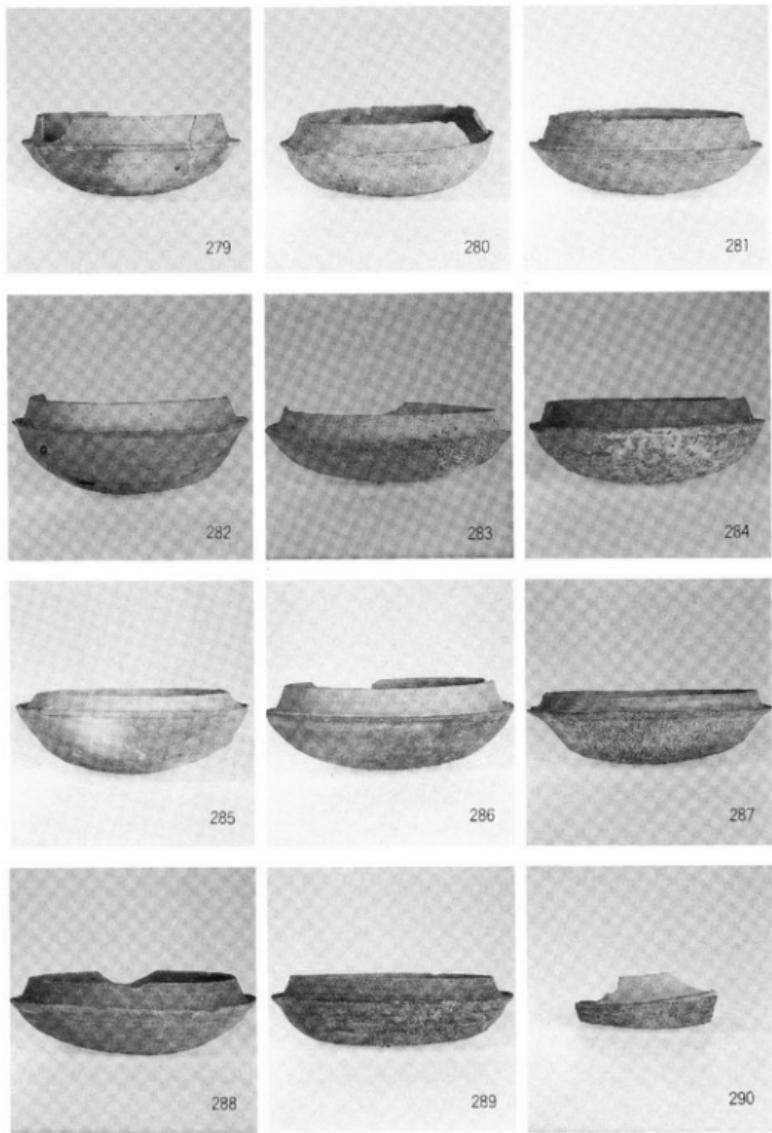
出土遺物(須恵器)



出土遺物(須恵器)

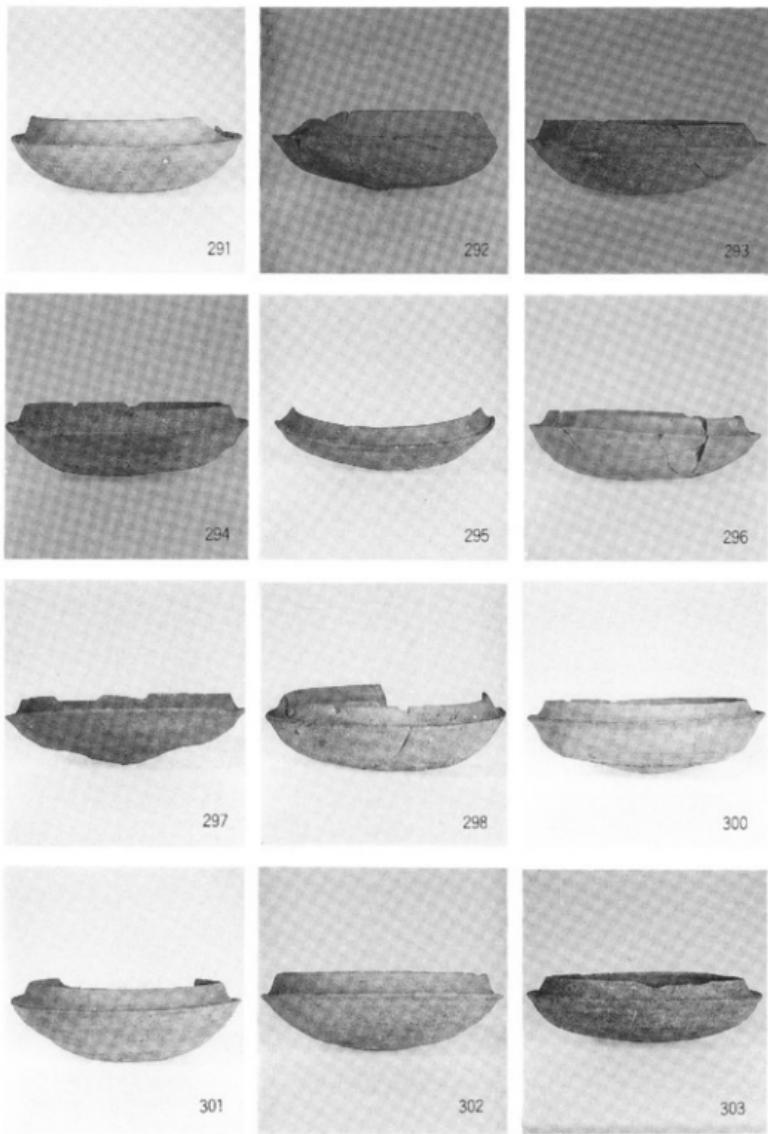


出土遺物(須惠器)

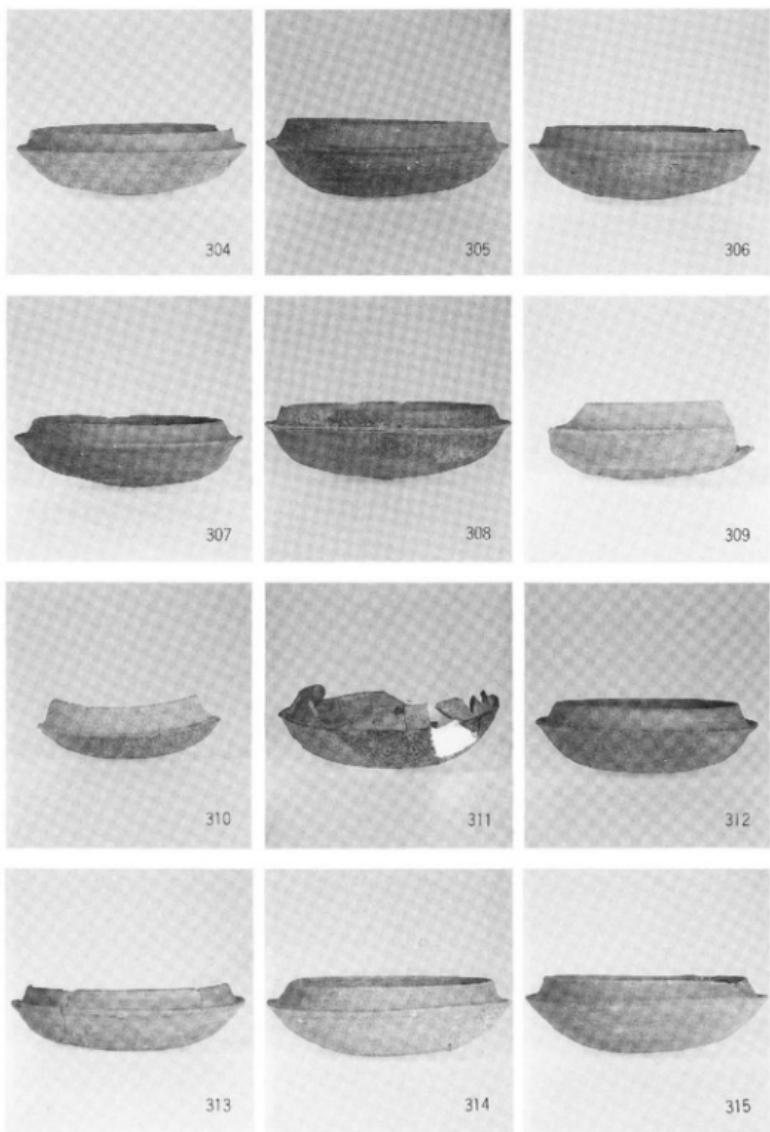


出土遺物(須恵器)

図版34

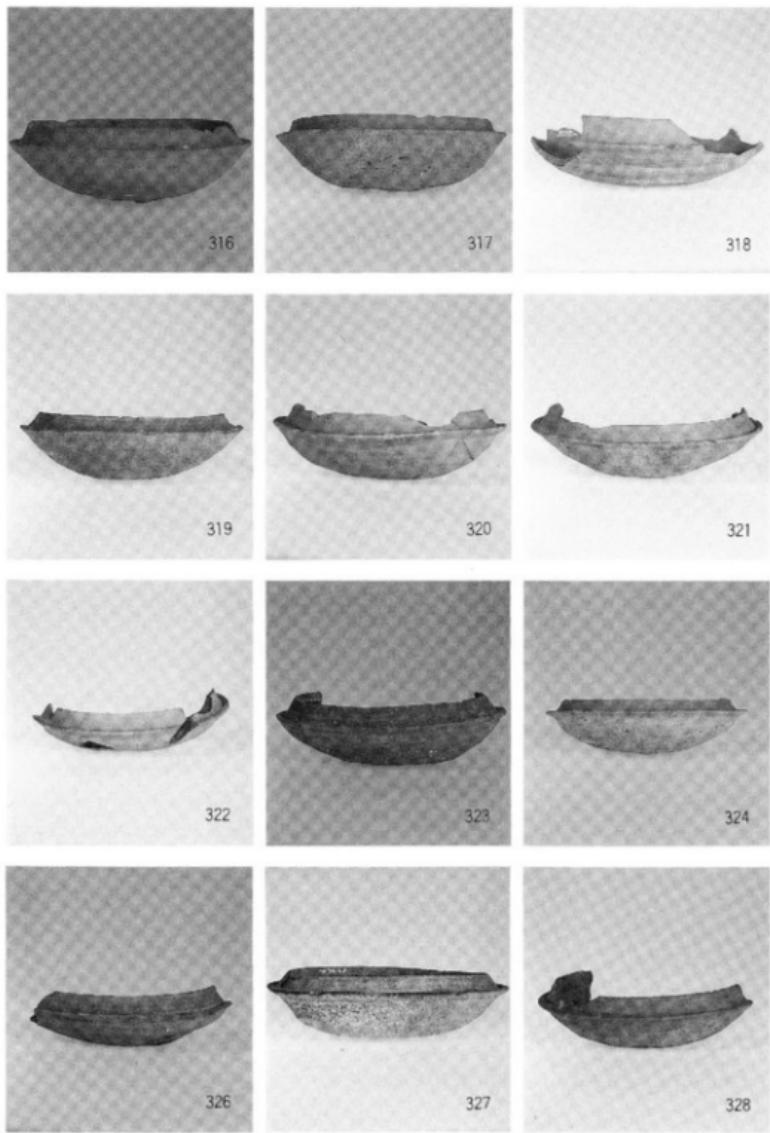


出土遺物(須恵器)

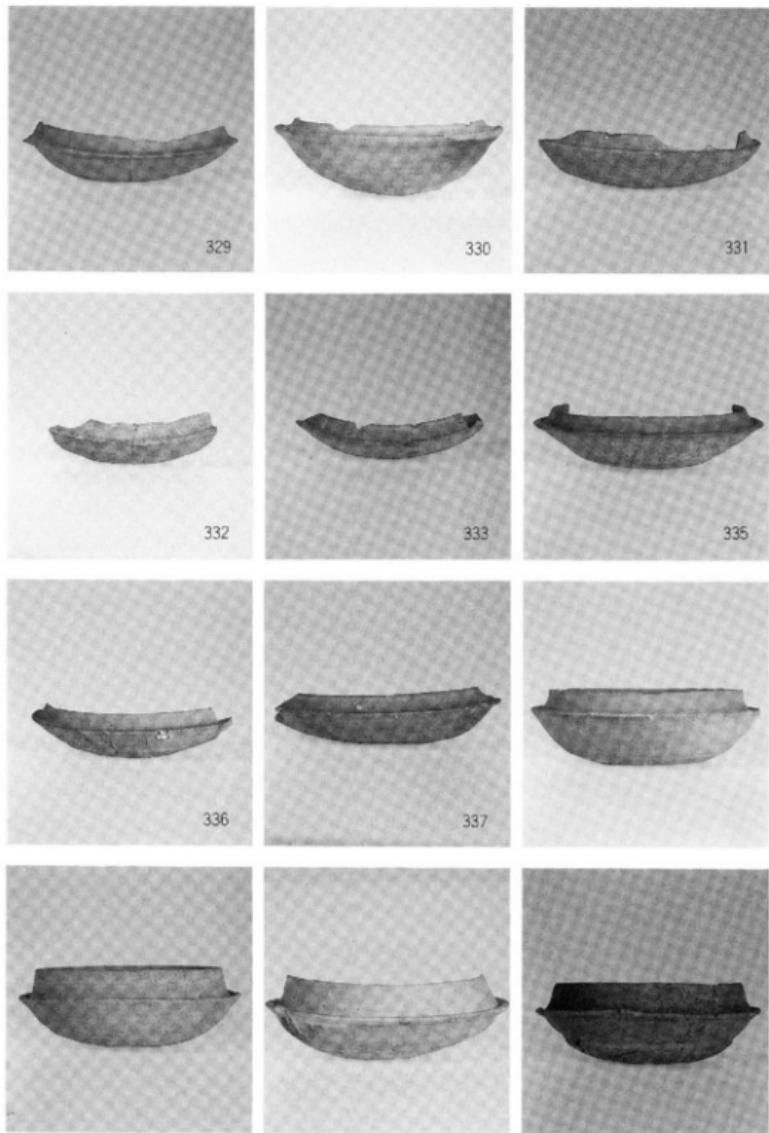


出土遺物(須恵器)

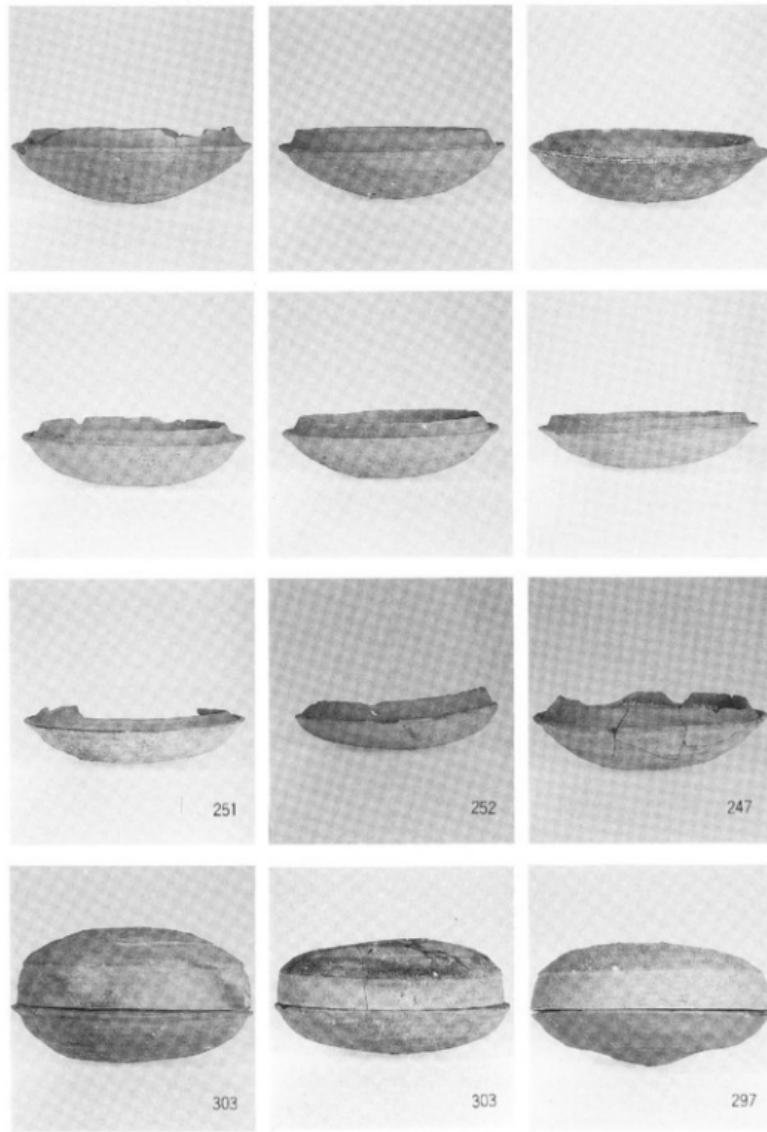
圖版36



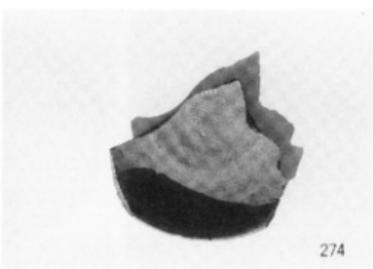
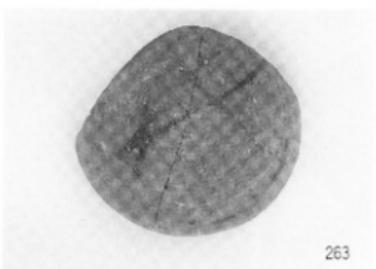
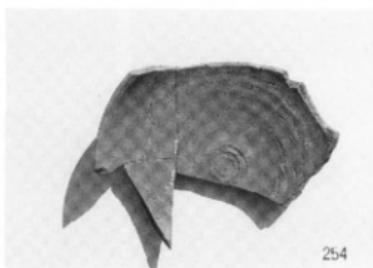
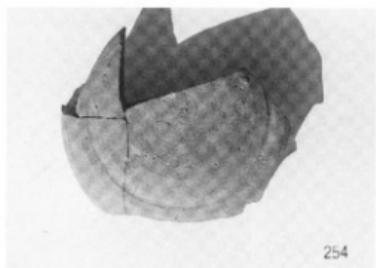
出土遺物(須惠器)



出土遺物(須恵器)

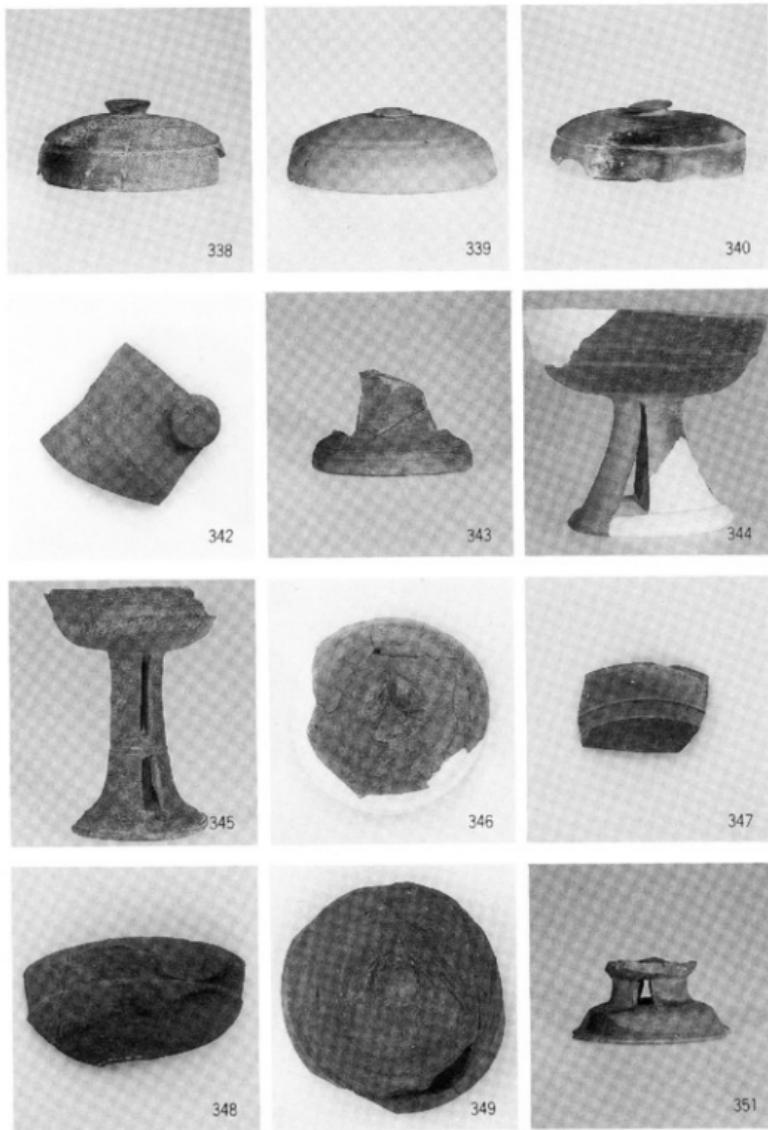


出土遺物(須惠器)

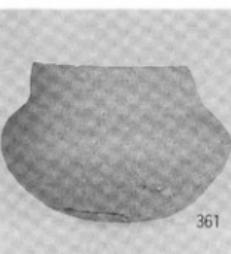
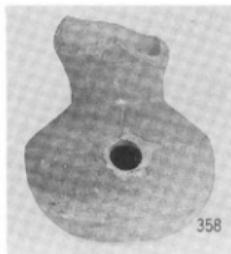
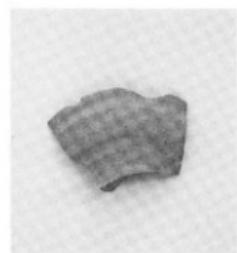
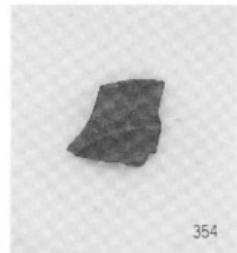
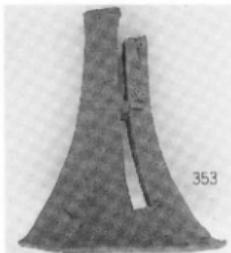


出土遺物(須恵器)

图版40

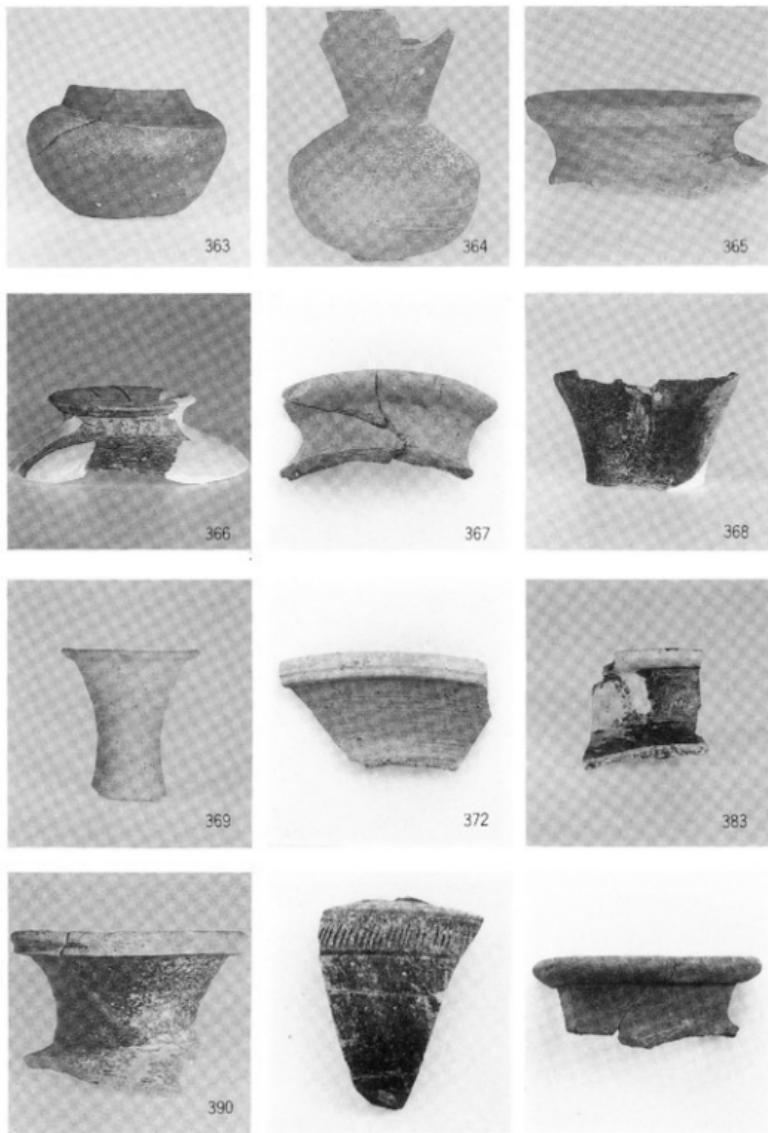


出土遺物(須惠器)



出土遺物(須恵器)

圖版42



出土遺物(須惠器)



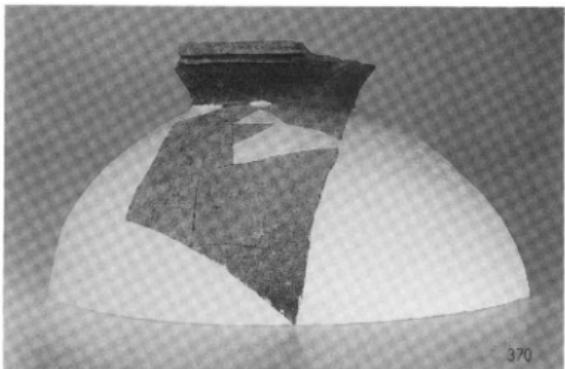
371

出土遺物(須恵器)

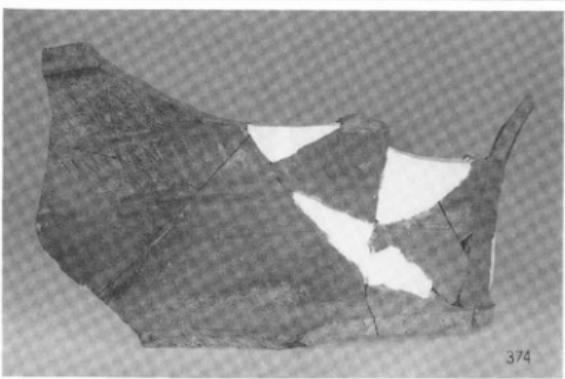


373

出土遗物(須惠器)



370



374



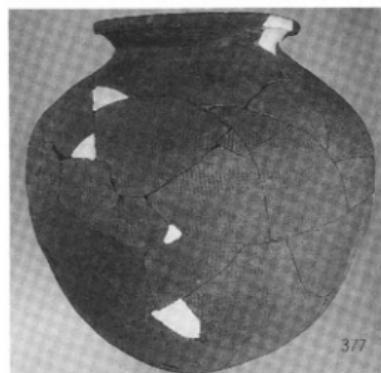
出土遺物(須恵器)



375



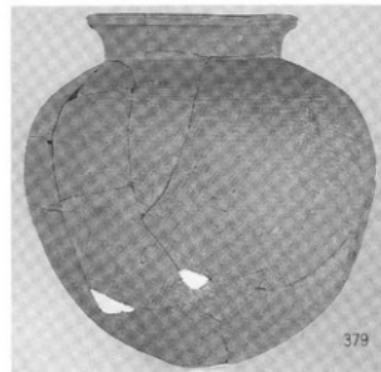
376



377



378

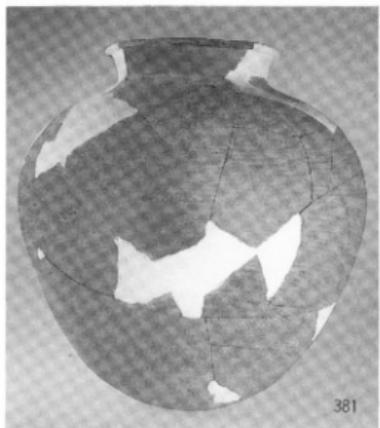


379

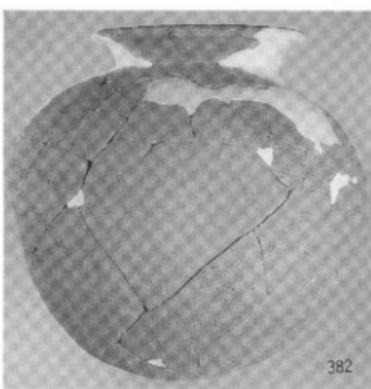


380

出土遺物(須恵器)



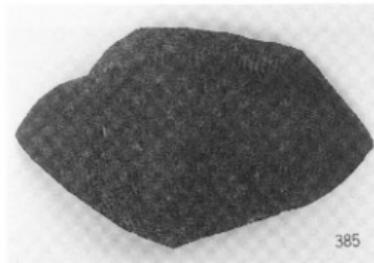
381



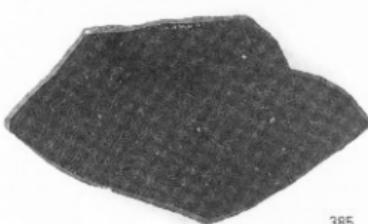
382



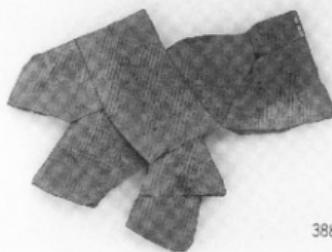
出土遺物(須恵器)



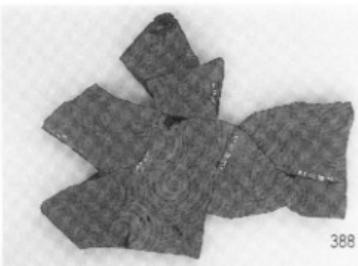
385



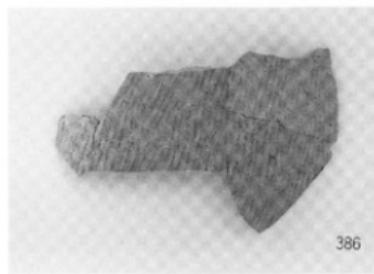
385



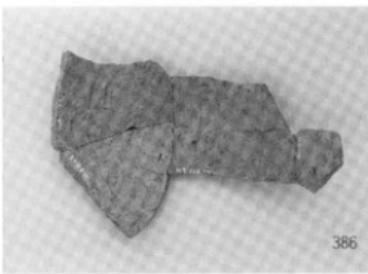
388



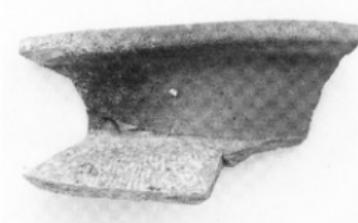
388



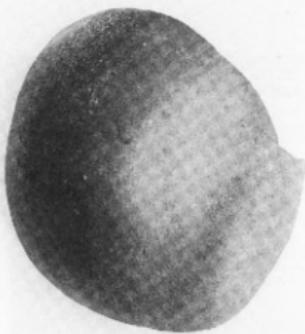
386



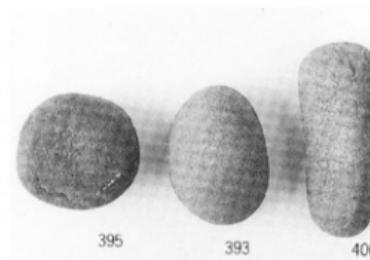
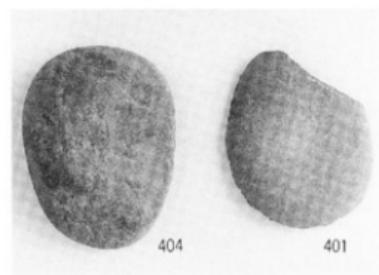
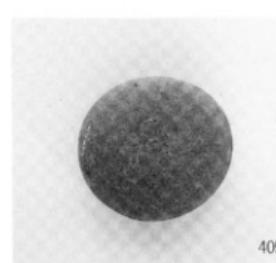
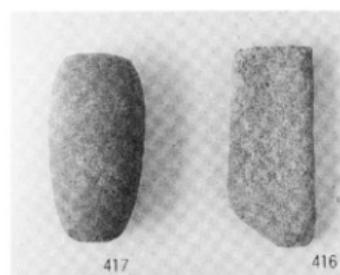
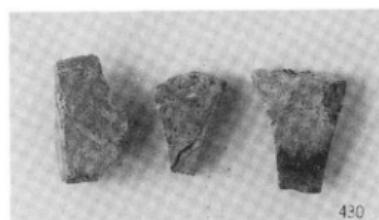
386



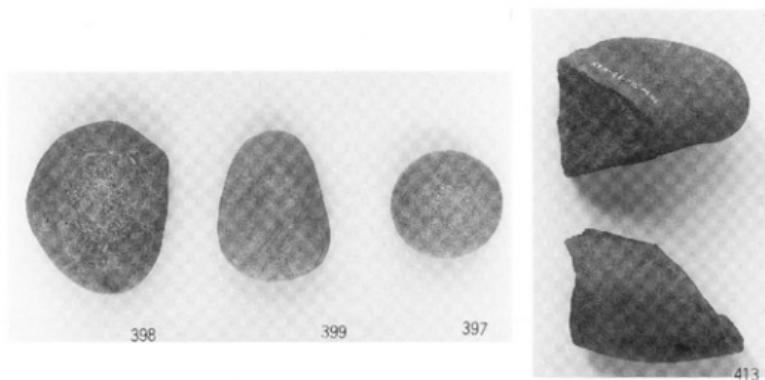
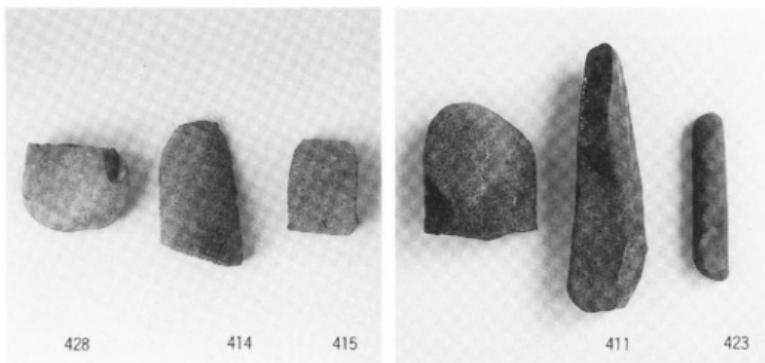
出土遗物(須惠器)



出土遺物(須惠器)

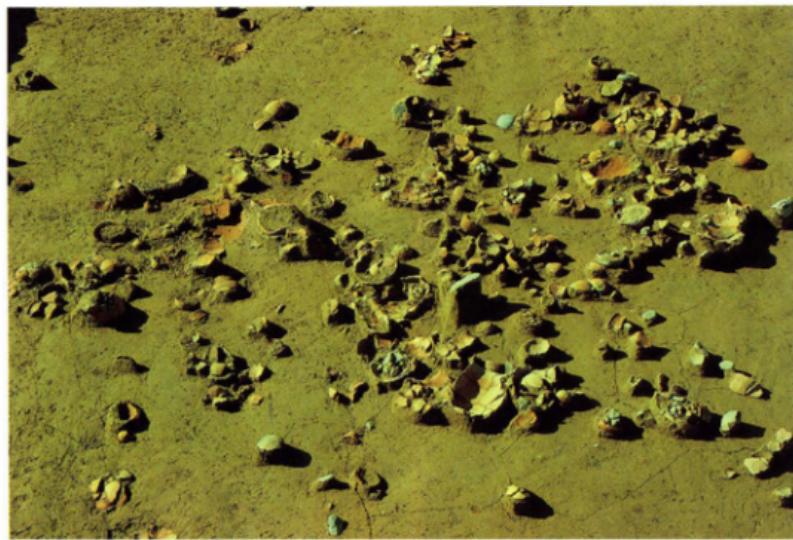


出土遺物(石器)



出土遺物(石器)

群跡遺山中山同具

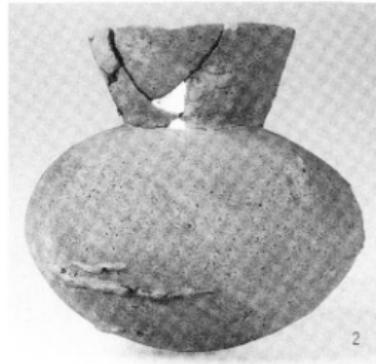


SF 4

图版52



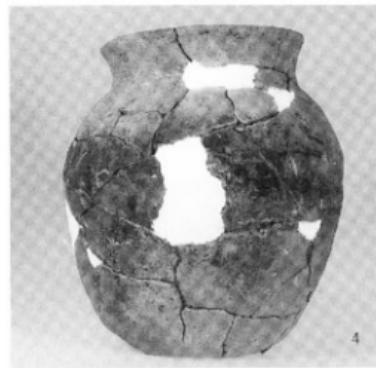
1



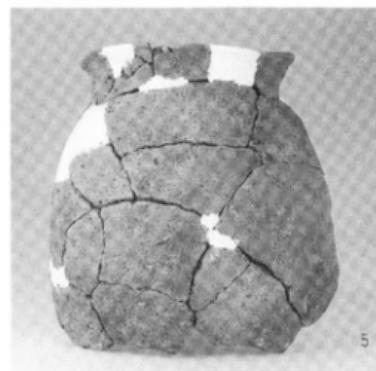
2



3



4

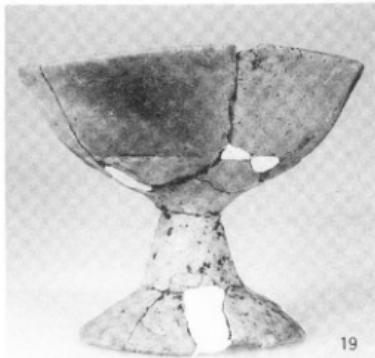


5



6

試掘調査出土遺物(土師器)



試掘調查出土遺物(土師器)



20



27



9



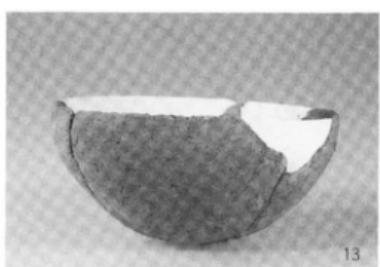
10



11



12

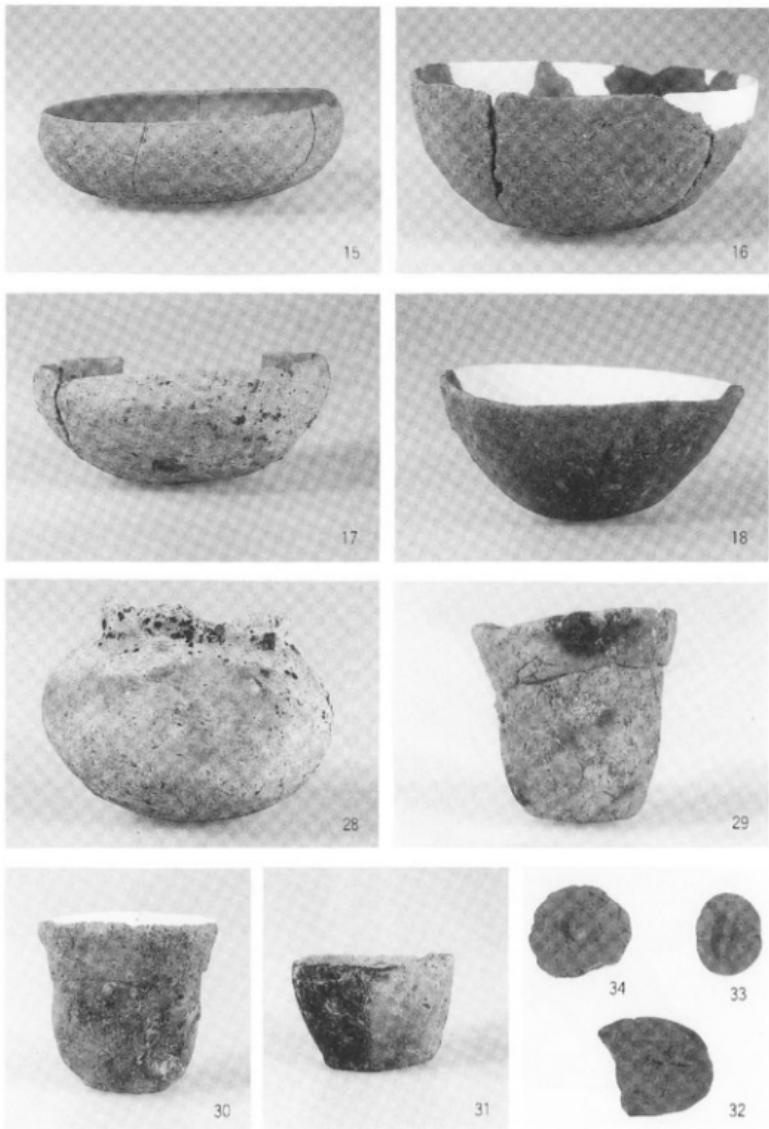


13



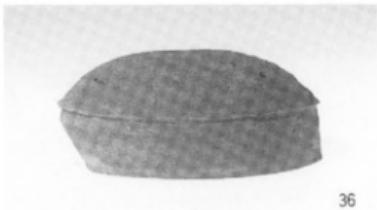
14

試掘調査出土遺物(土師器)

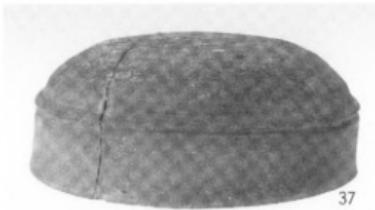


試掘調查出土遺物(土師器)

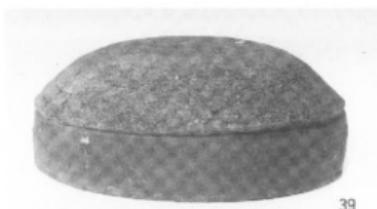
圖版56



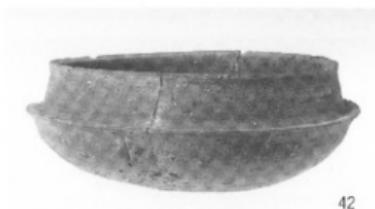
36



37



39



42



44



46



47



48

試掘調査出土遺物(須恵器)



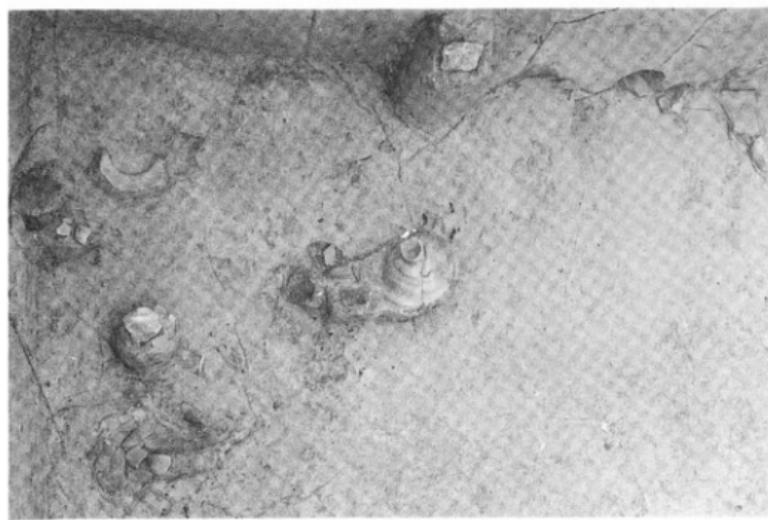
具同中山遺跡群、具同中山地区遠景(西より)



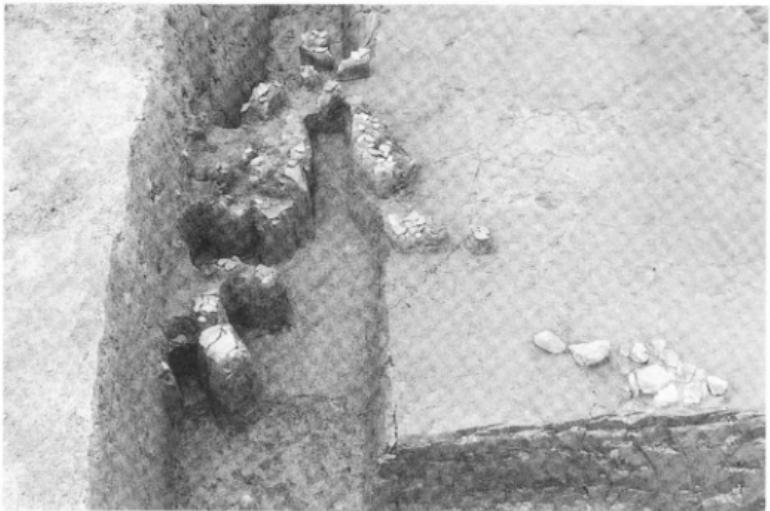
具同中山遺跡群、東神木・ボケ地区遠景(東より)



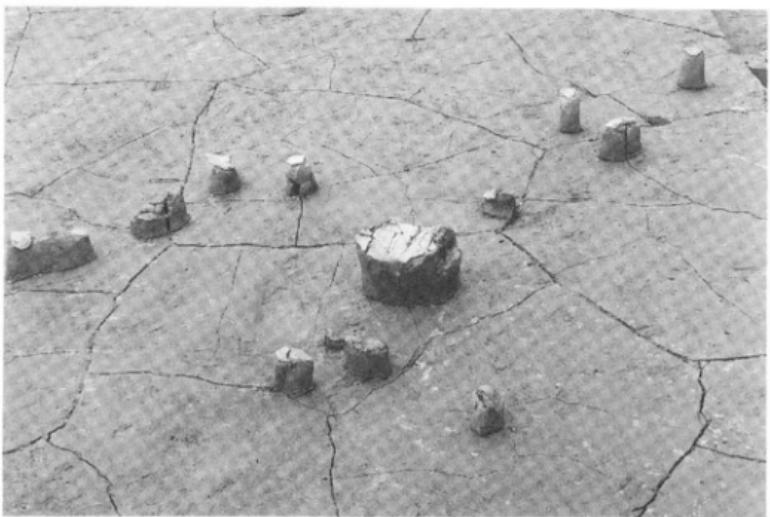
A区 SX1 遺物出土状態(南東より)



A区 SX1 遺物出土状態(南東より)



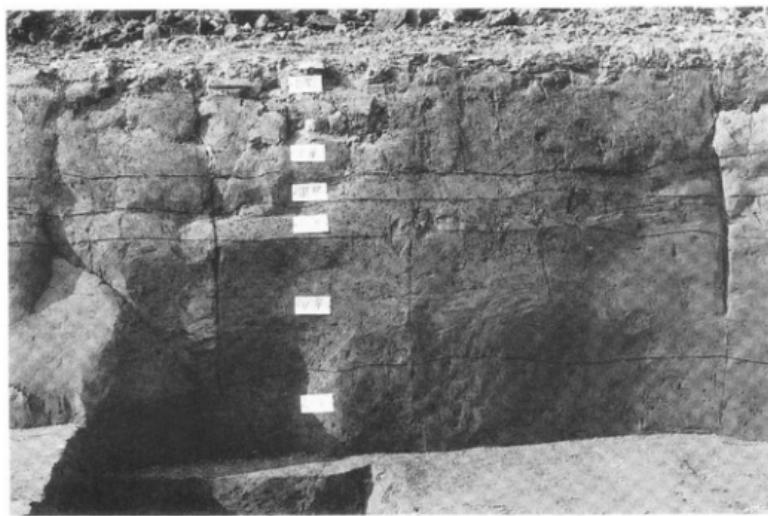
A区 SF 1 遺物出土状態(南東より)



A区 SX 2 遺物出土状態



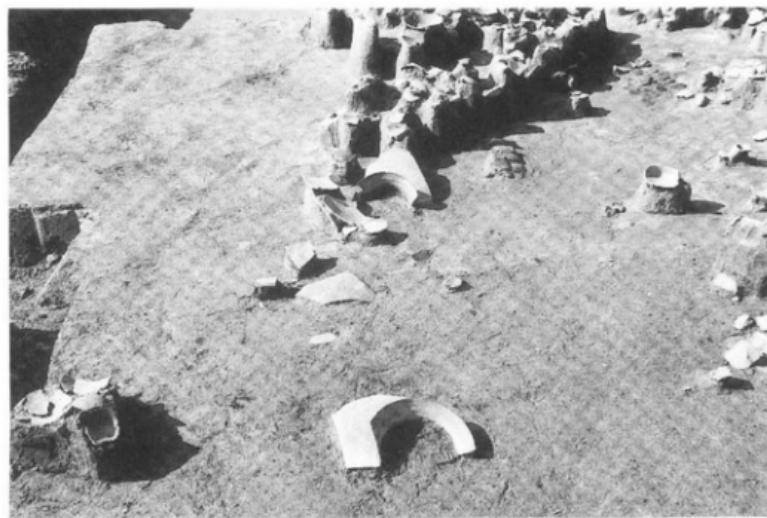
A区 全景(北東より)



A区 セクション



B区 SF2 遺物出土状態(南東より)



B区 SF2 遺物出土状態(南東より)



B区 SX3 遺物出土状態(南東より)



B区 SX3 遺物出土状態(南東より)



B区 SF3 遺物出土状態(南東より)

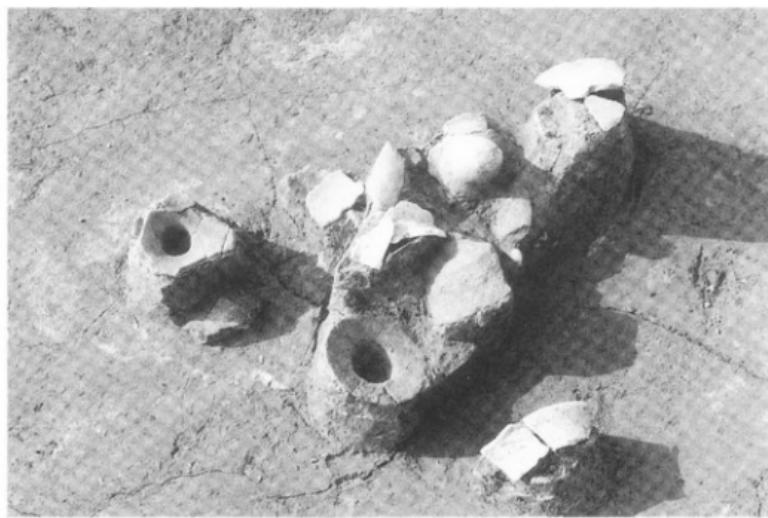


B区 SF3 遺物出土状態

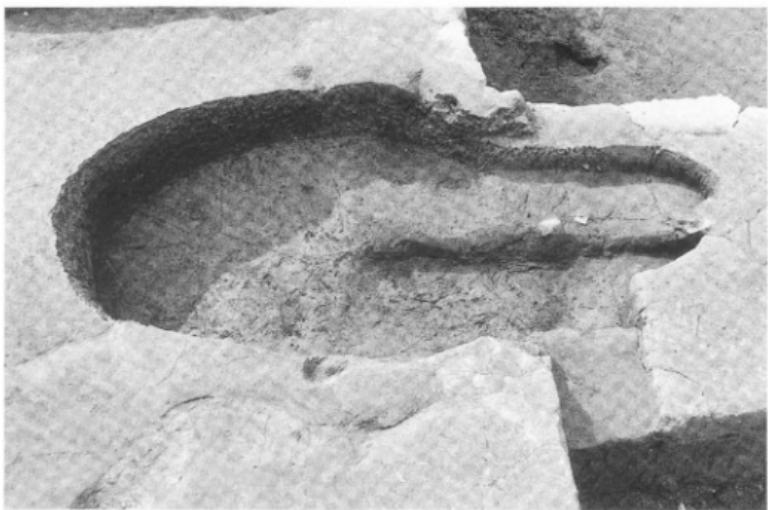
圖版64



B区 SF 3 遺物出土状態



B区 SF 3 遺物出土状態



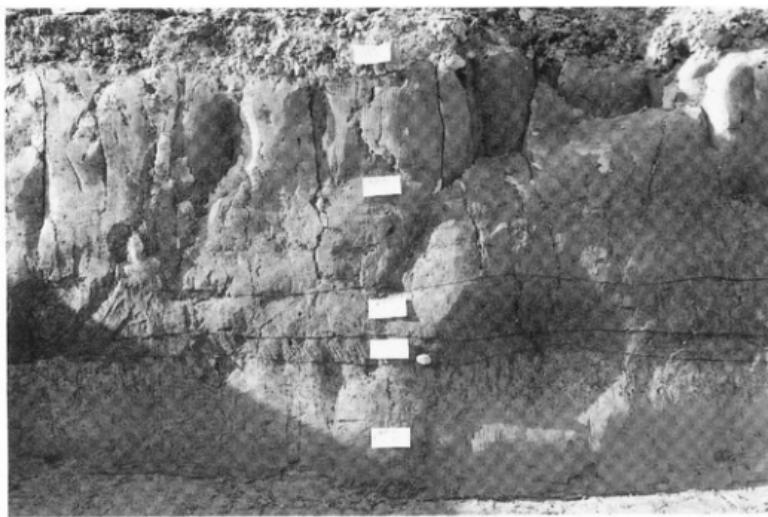
B区 SK1(北東より)



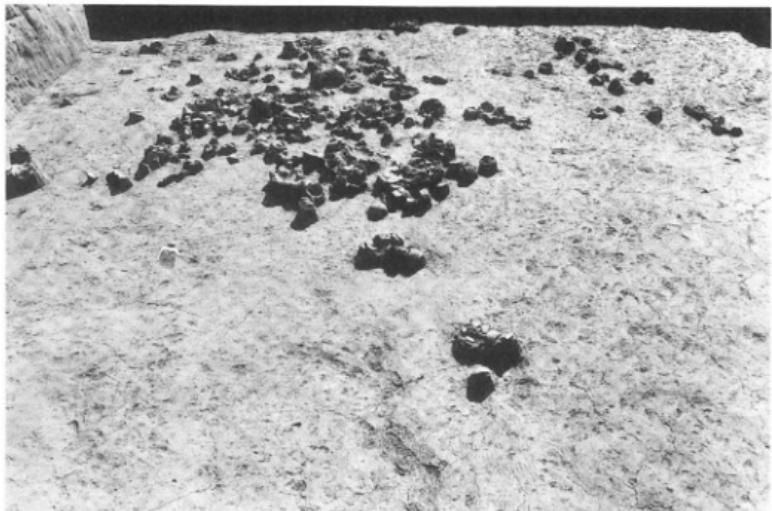
B区 全景(北東より)



C区 南西壁セクション



C区 南西壁セクション



C区 SF4 遺物出土状態(北西より)



C区 SF4 遺物出土状態(北東より)



C区 SF 4 遺物出土状態(北東より)



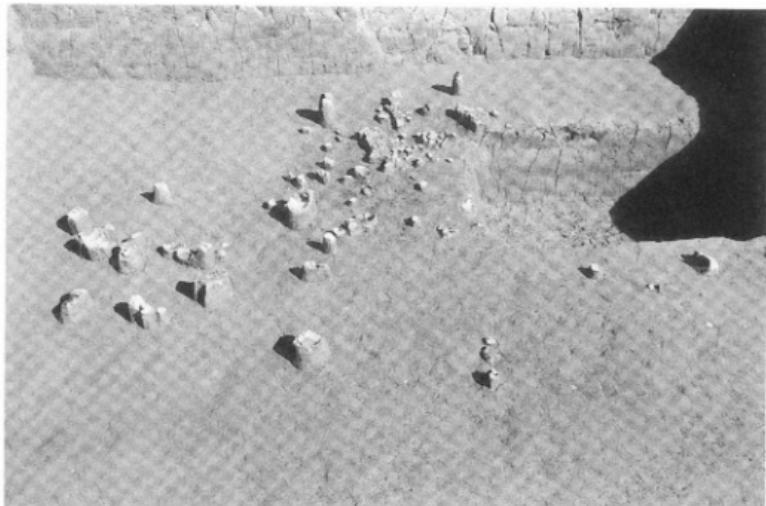
C区 SF 4 遺物出土状態(南より)



C区 SF4 遺物出土状態



C区 SF4 遺物出土状態



C区 SF5 遺物出土状態(南西より)



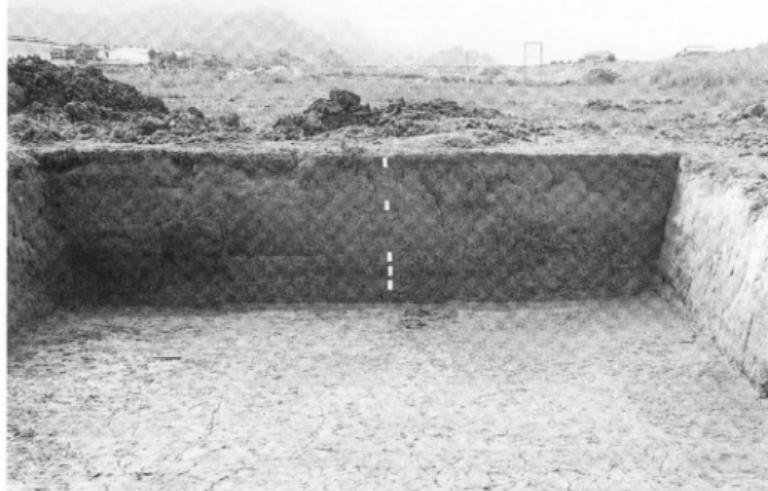
C区 SF5 遺物出土状態(南西より)



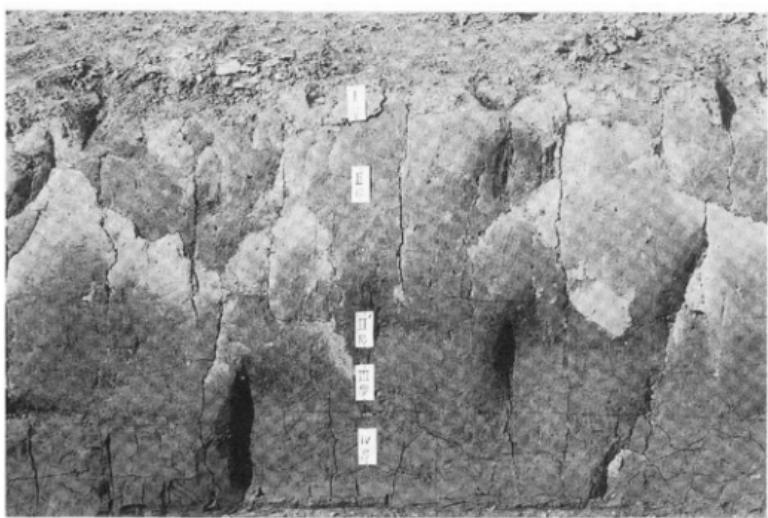
C区 SF5 遺物出土状態



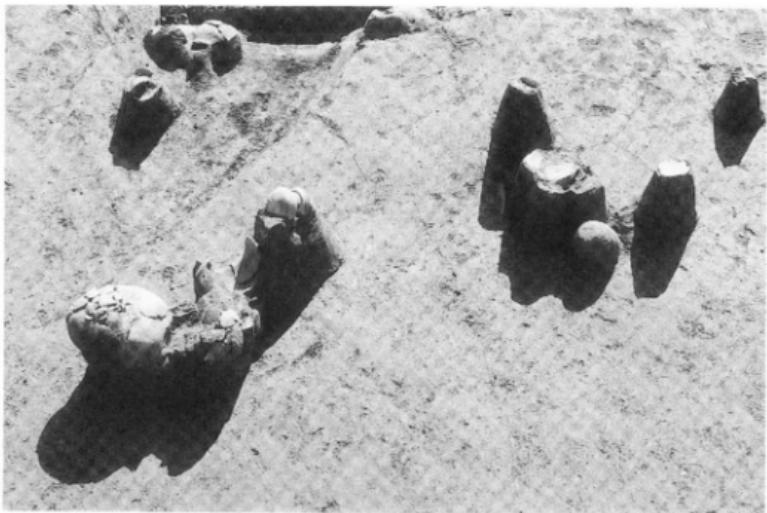
C区 全景(北東より)



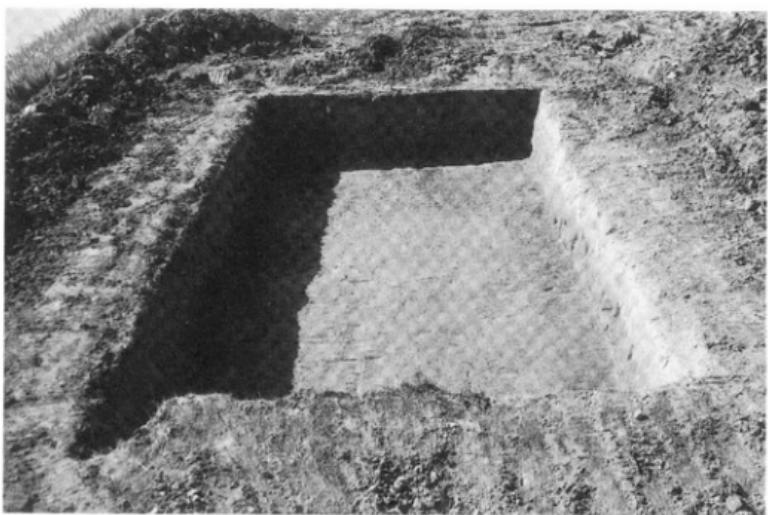
D区 南西壁セクション



D区 南西壁セクション



D区 遺物出土状態(南東より)

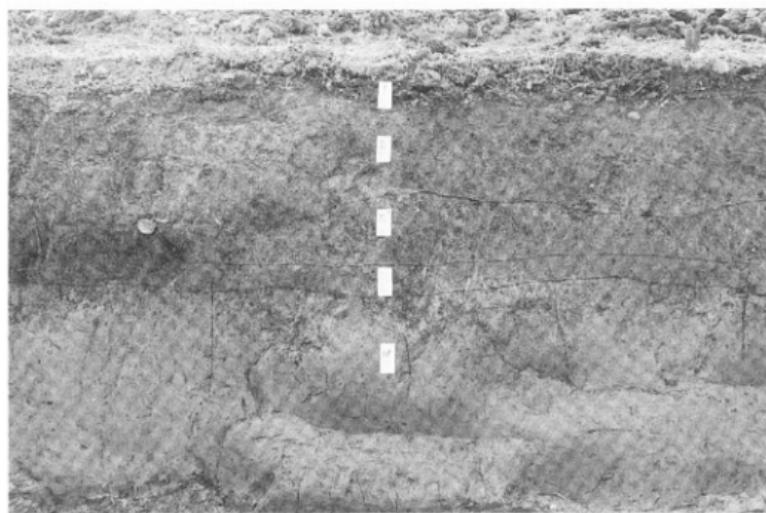


D区 全景

図版74



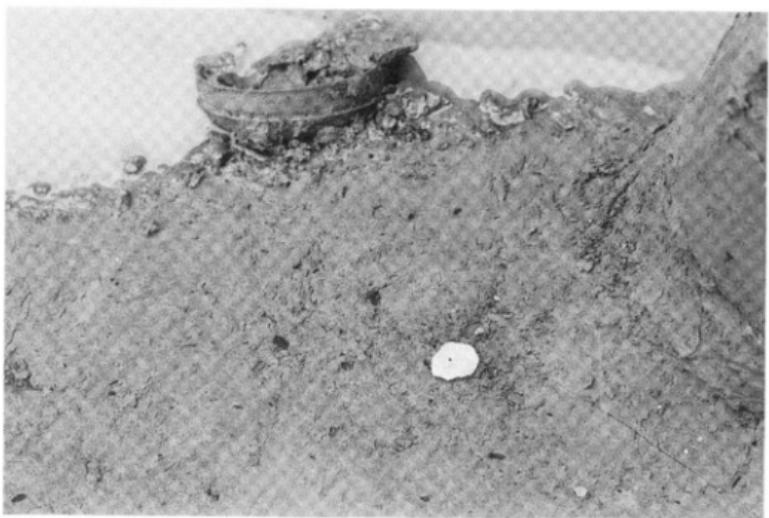
E区 全景



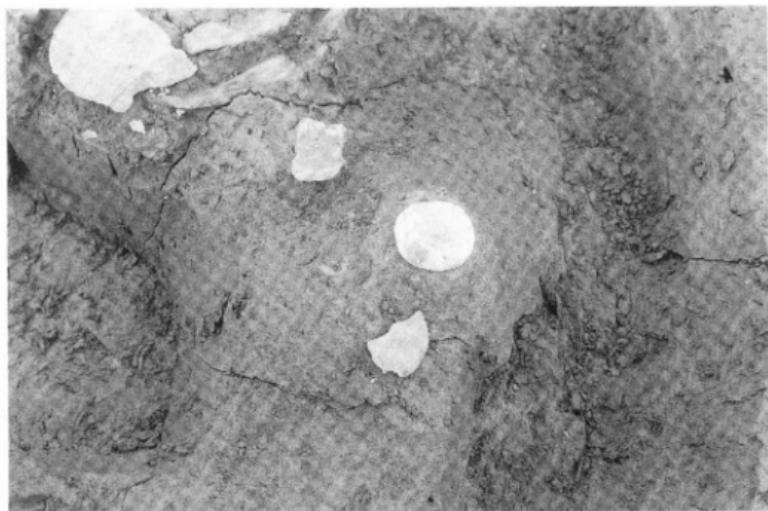
E区 西壁セクション



F区 SF6 遺物出土状態(南より)



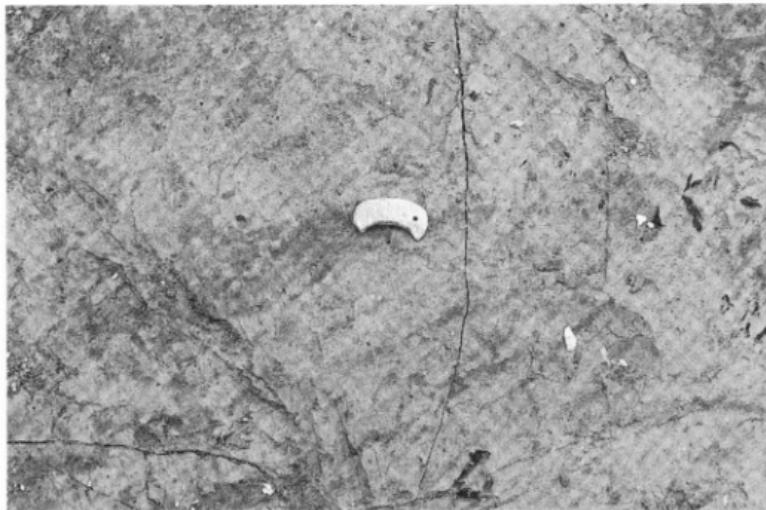
F区 SF6 遺物出土状態(南より)



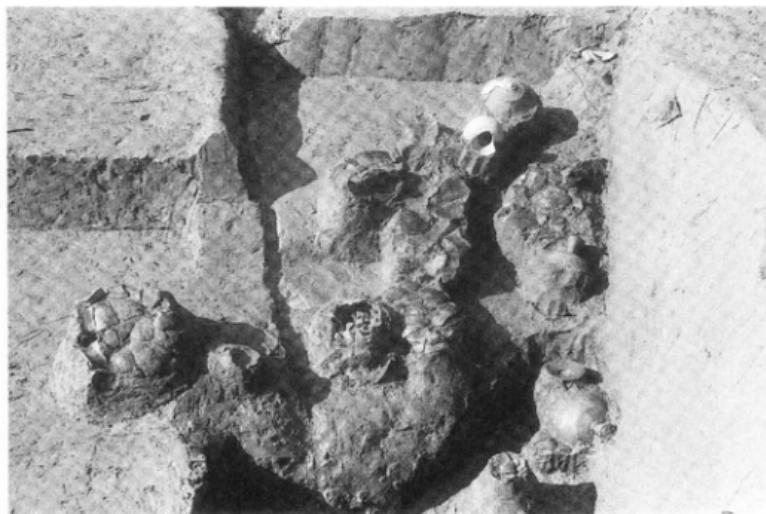
F区 SF6 遺物出土状態(南より)



F区 SF6 遺物出土状態(南より)

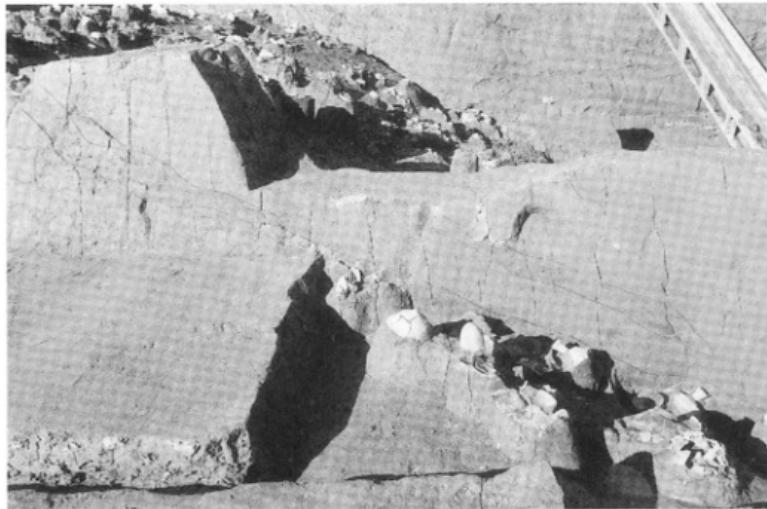


F 区 SF 6 遺物出土状態(南より)



F 区 SF 6 遺物出土状態(南より)

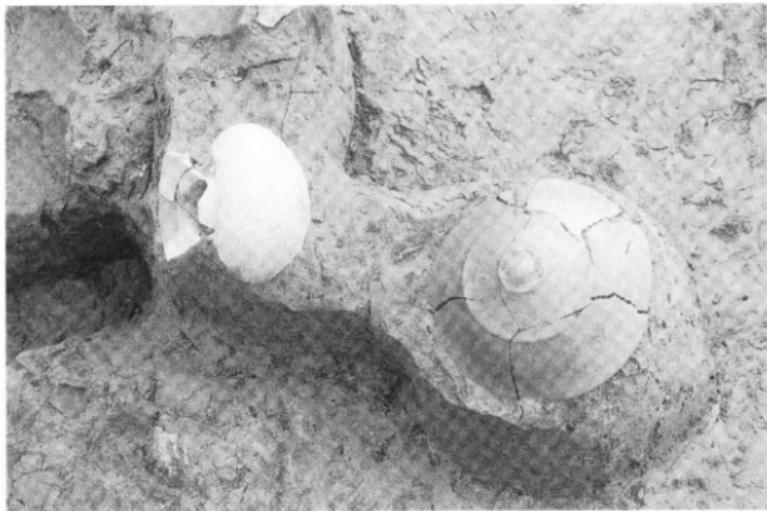
图版78



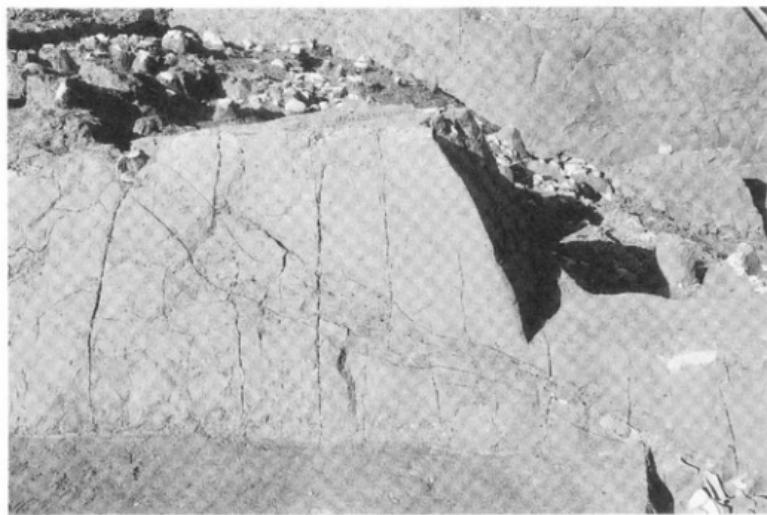
F区 SF 6 遗物出土状態



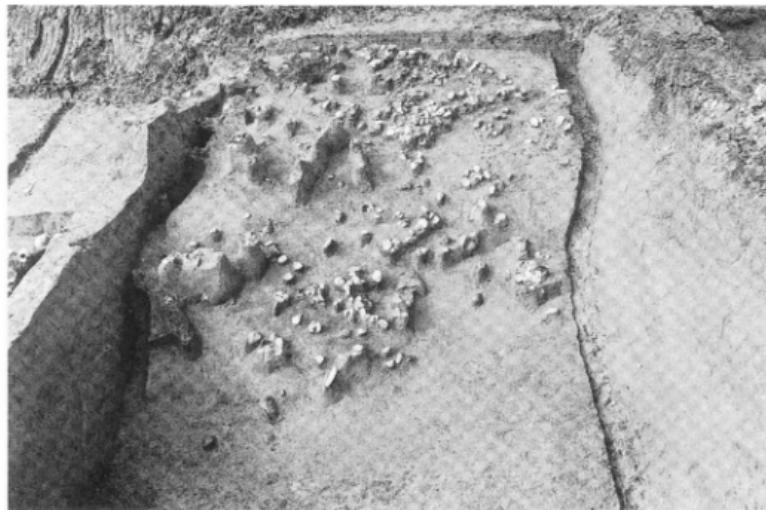
F区 SF 6 遗物出土状態



F区 SF6 遺物出土状態



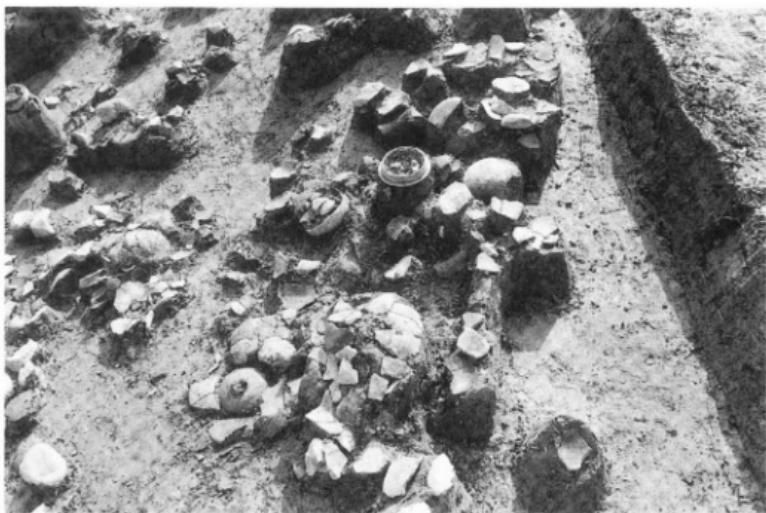
F区 セクション



F区 SF6 遺物出土状態(東より)



F区 SF6 遺物出土状態(西より)

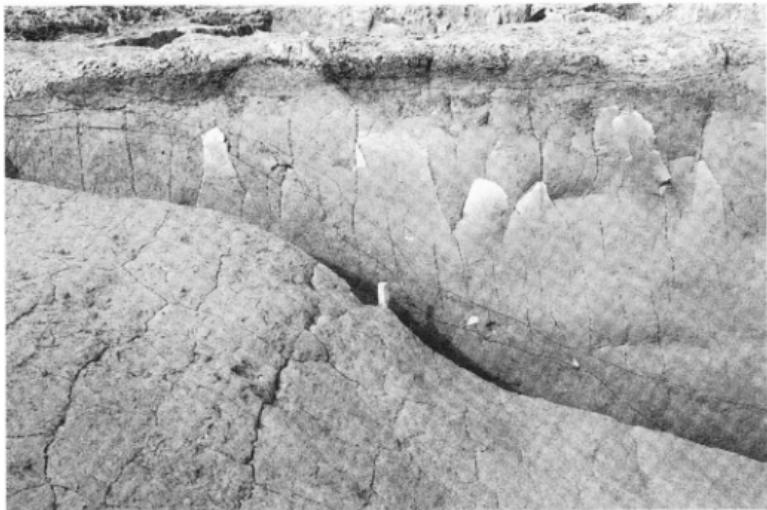


F区 SF6 遺物出土状態



F区 SF6 遺物出土状態

図版82



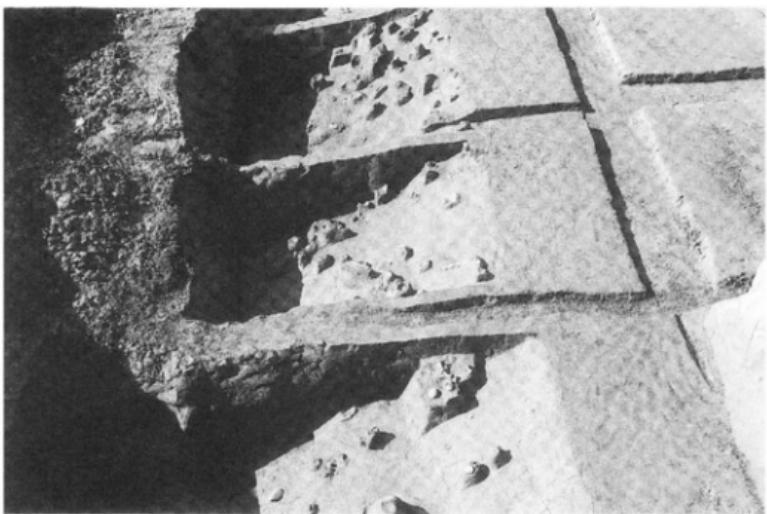
F区 セクション



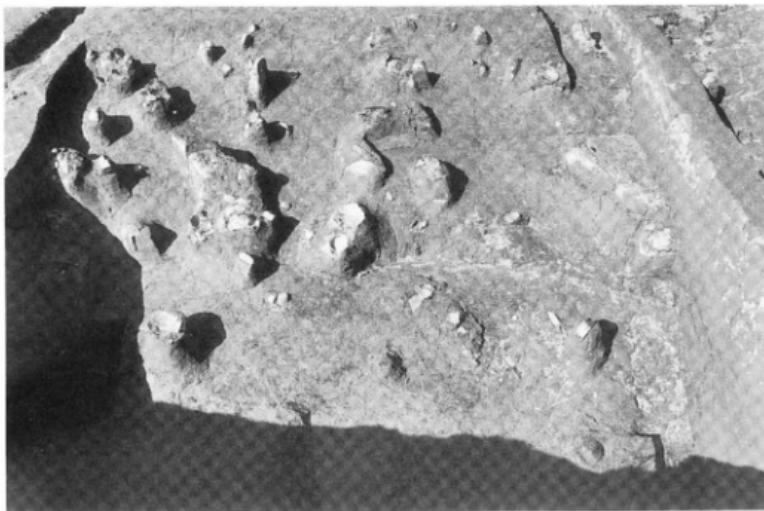
F区 全景



G区 SF 7 遺物出土状態(北東より)



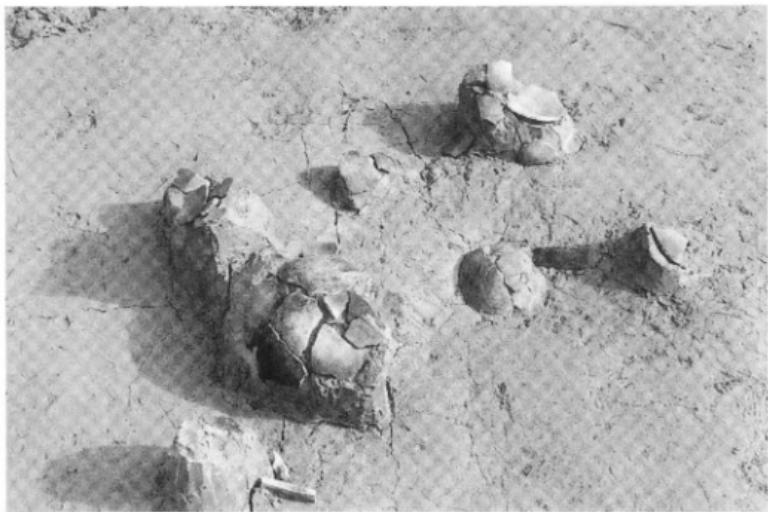
G区 SF 7 遺物出土状態(北東より)



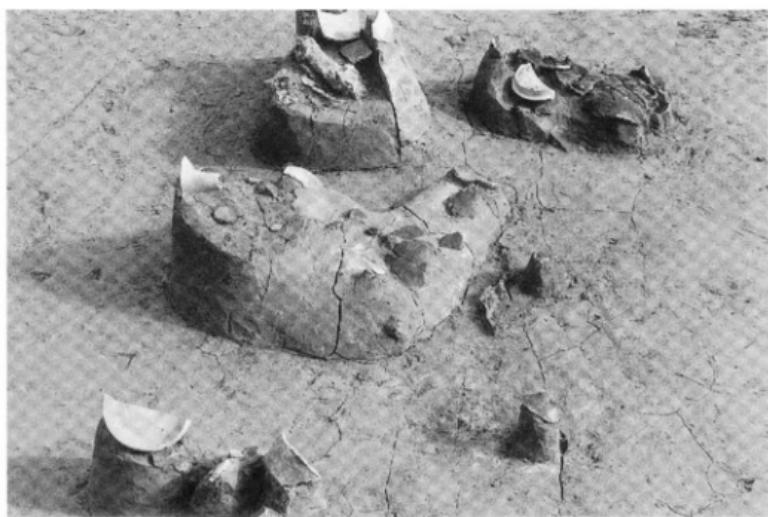
G区 SF 7 遺物出土状態



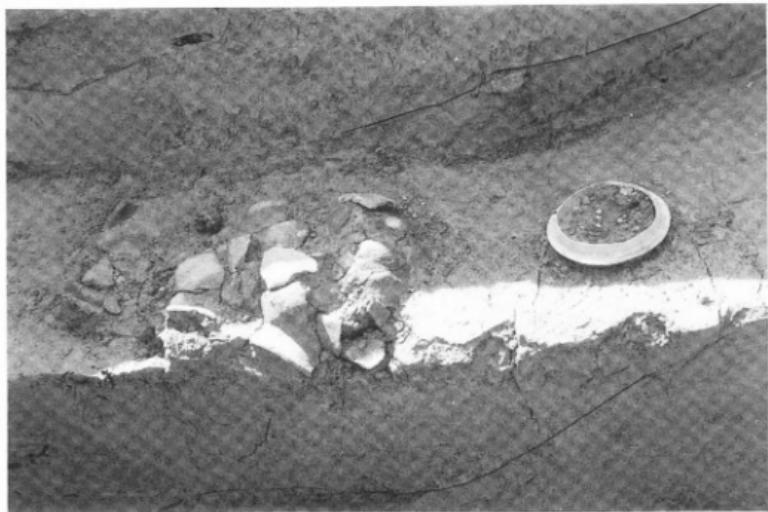
G区 SF 7 遺物出土状態



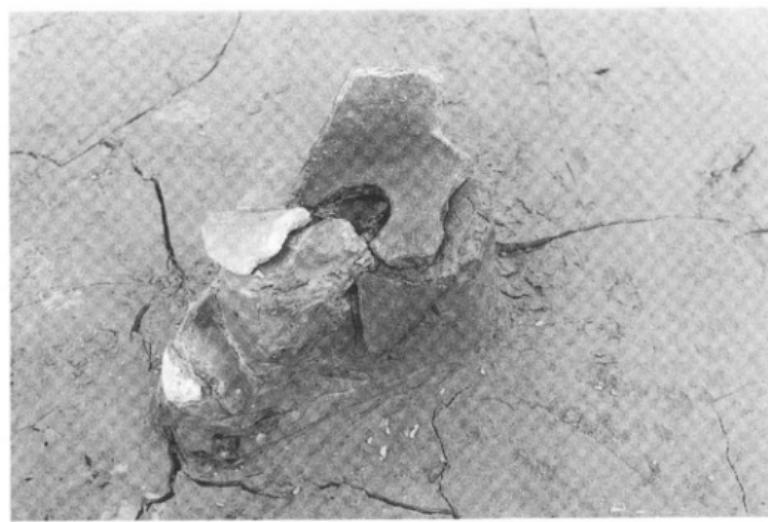
G区 SF 7 遺物出土状態



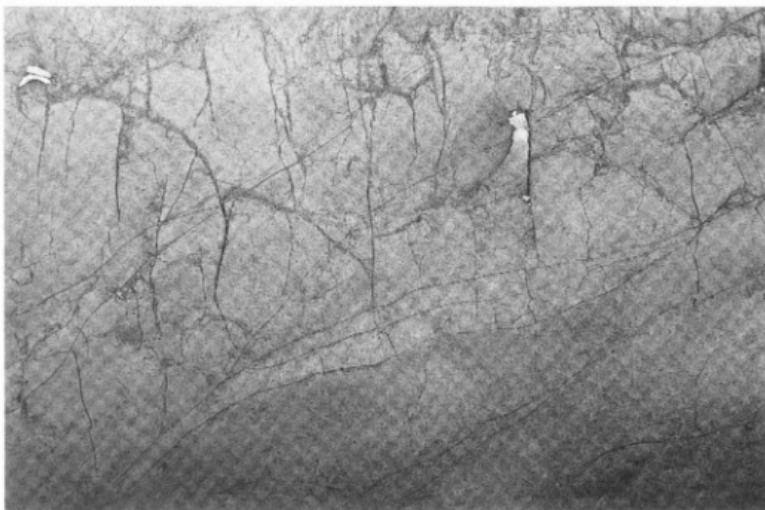
G区 SF 7 遺物出土状態



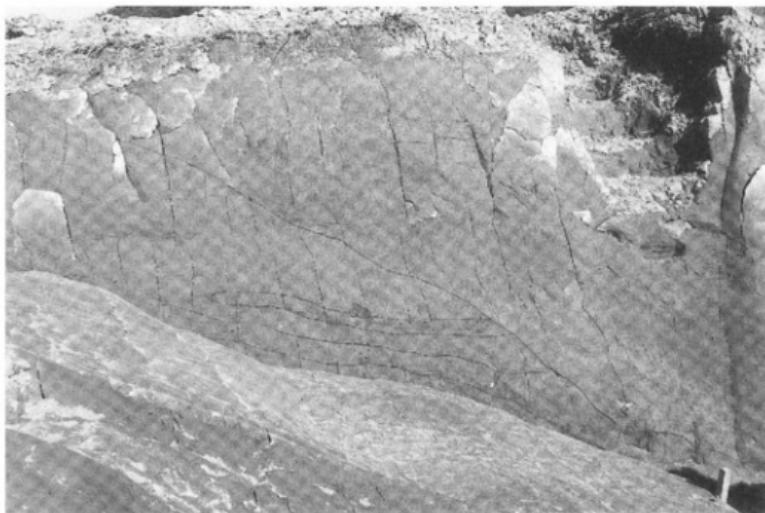
G区 SF 7 遗物出土狀態



G区 SF 7 遗物出土狀態



G区 セクション



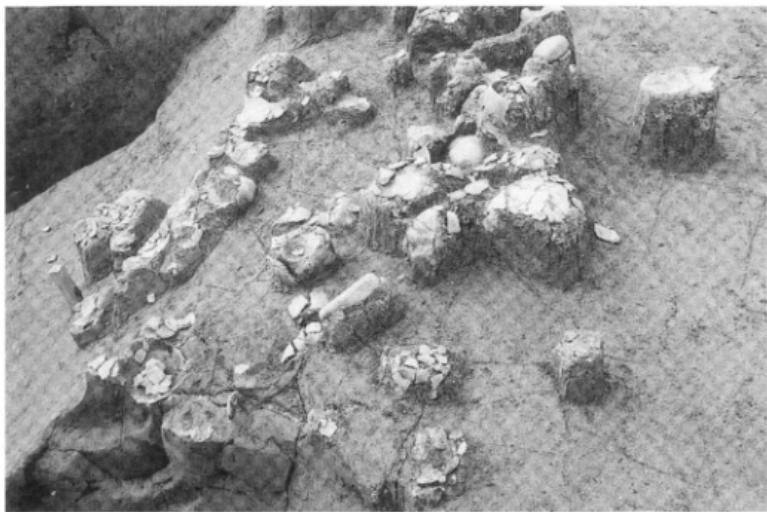
G区 セクション



G'区 SX5 遺物出土状態(北西より)



G'区 SX5 遺物出土状態(南東より)



G'区 SX 5 遺物出土状態

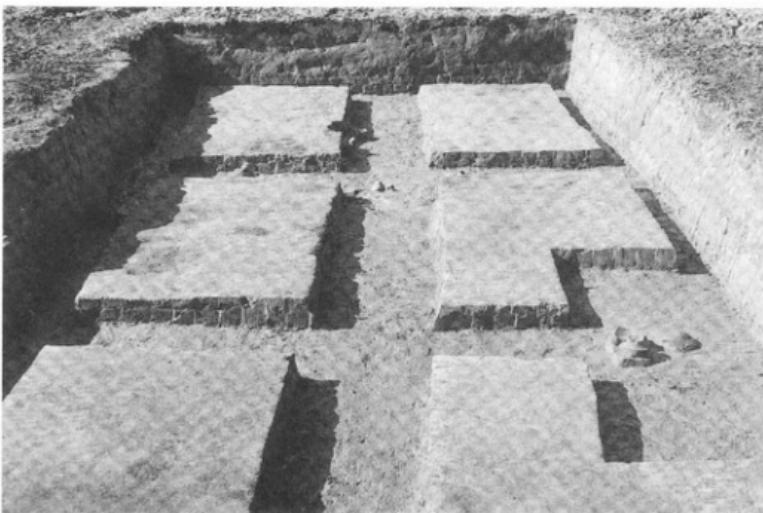


G'区 IV-2層 鉄器出土状態

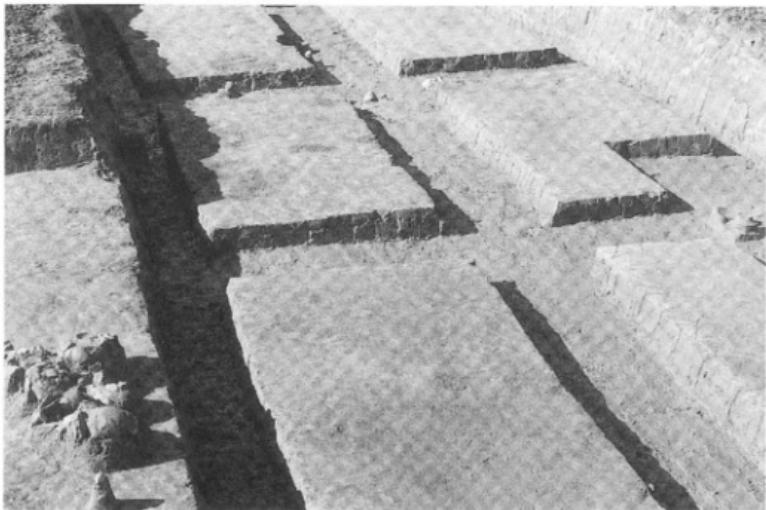
図版90



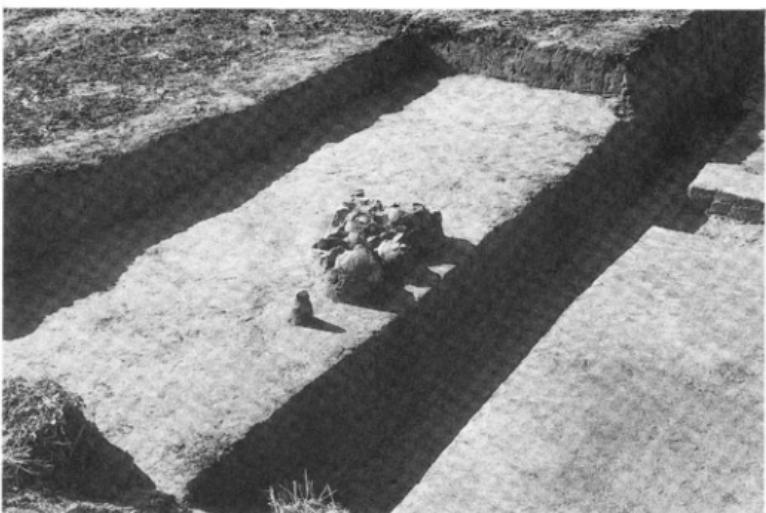
G・G'区 全景



H区 遺物出土状態(東より)



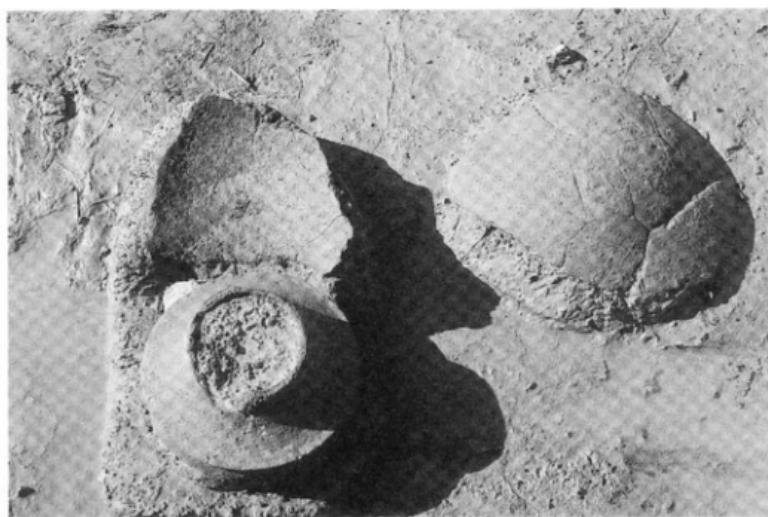
H区 SX 6・7 遺物出土状態(東より)



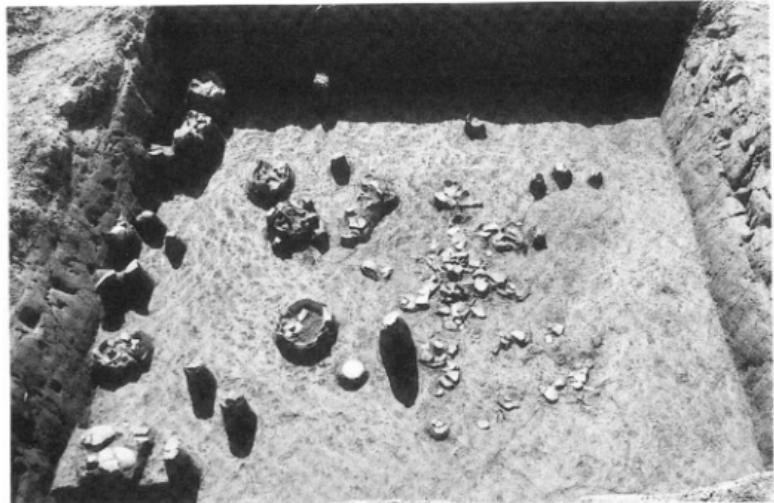
H区 SX 7 遺物出土状態(北東より)



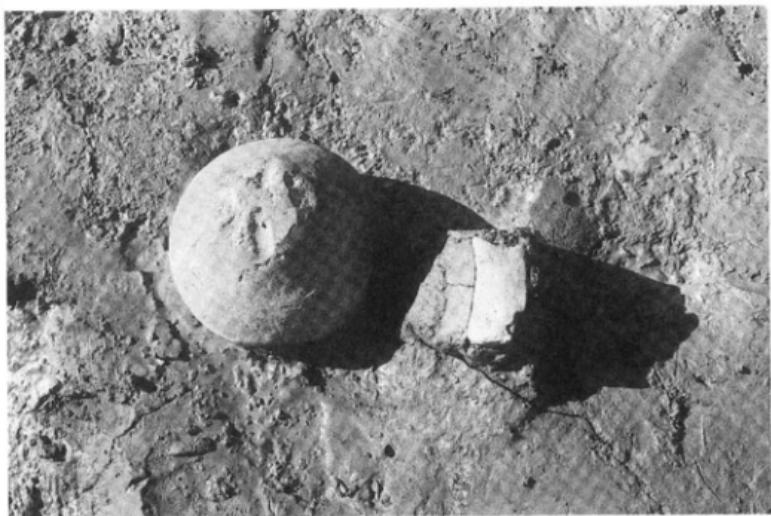
H区 SX7 遺物出土状態



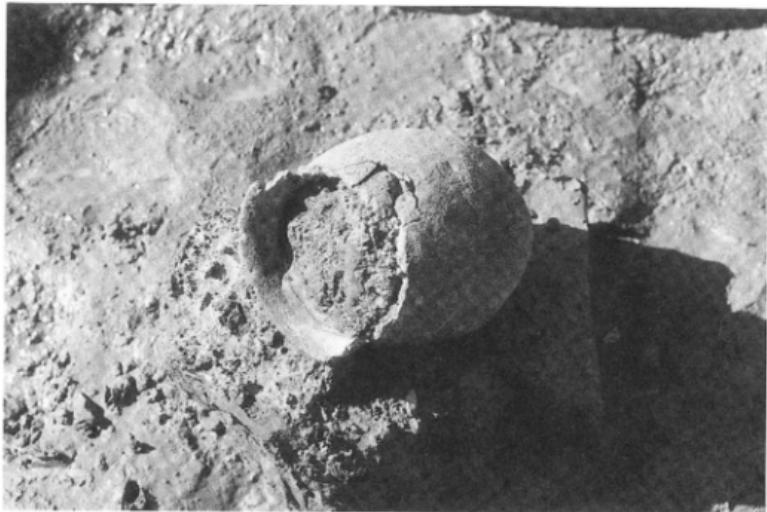
H区 SX6 遺物出土状態



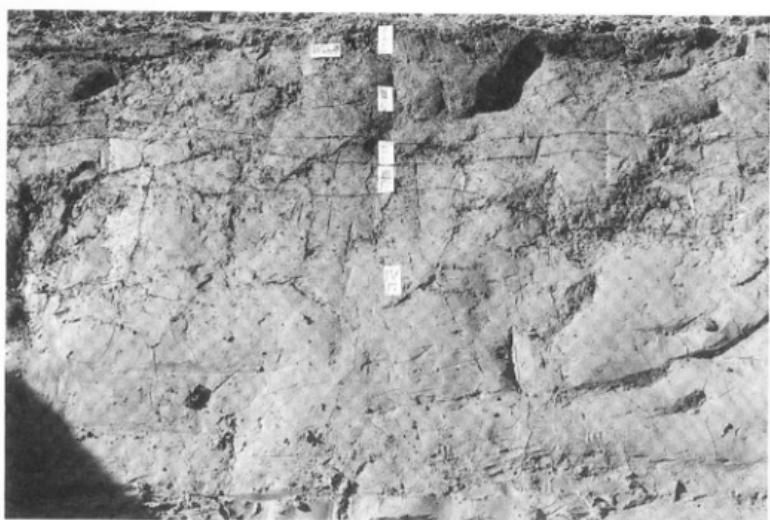
H区 SF 8 遺物出土状態(南より)



H区 SF 8 遺物出土状態



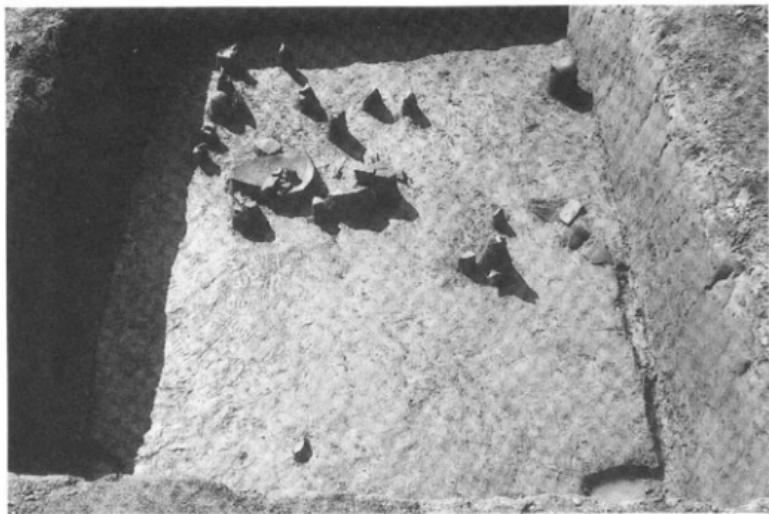
H区 SF8 遺物出土状態



H区 西壁セクション



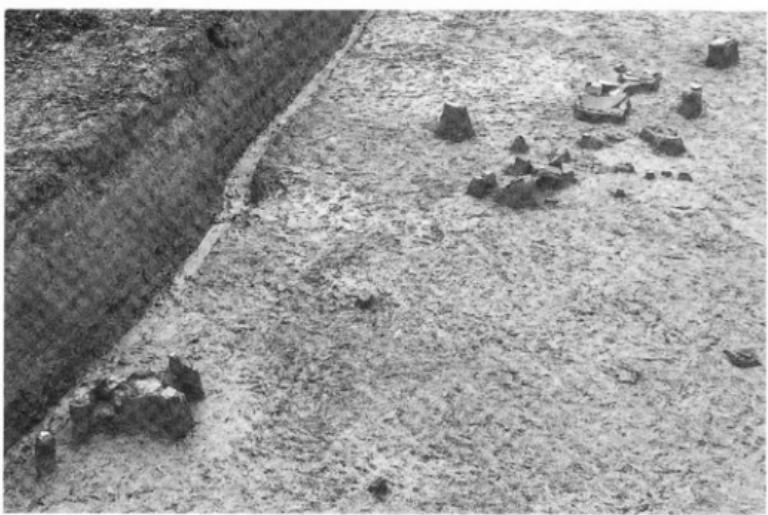
H区 全景



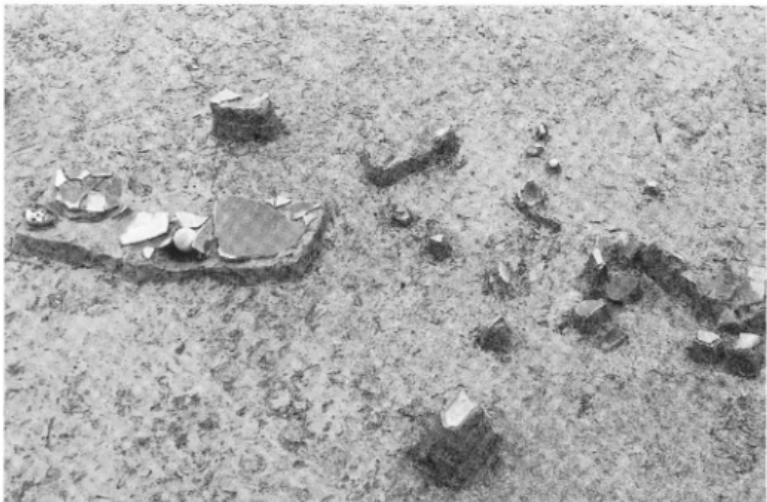
I区 SF9 遺物出土状態(東より)



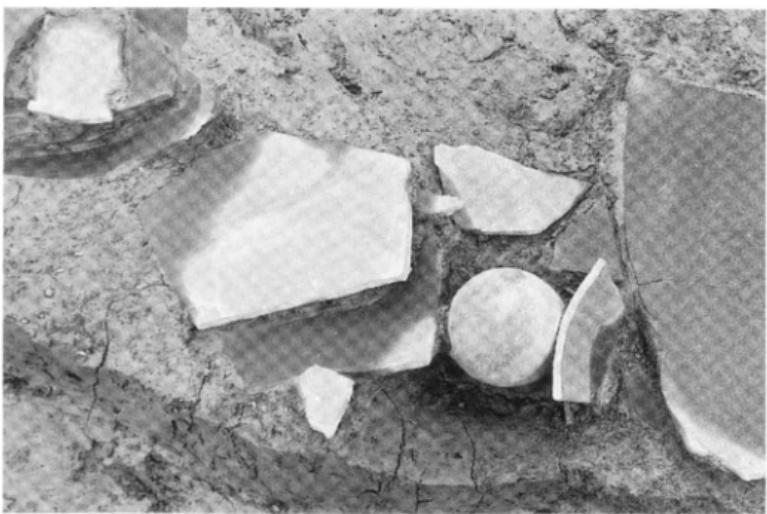
I区 SF 9 遺物出土状態



I区 SF 9 遺物出土状態

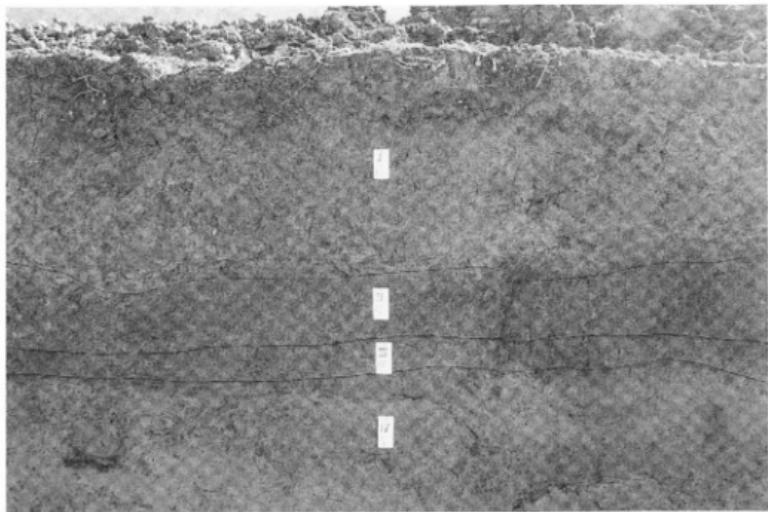


I区 SF9 遺物出土状態(南より)



I区 SF9 遺物出土状態

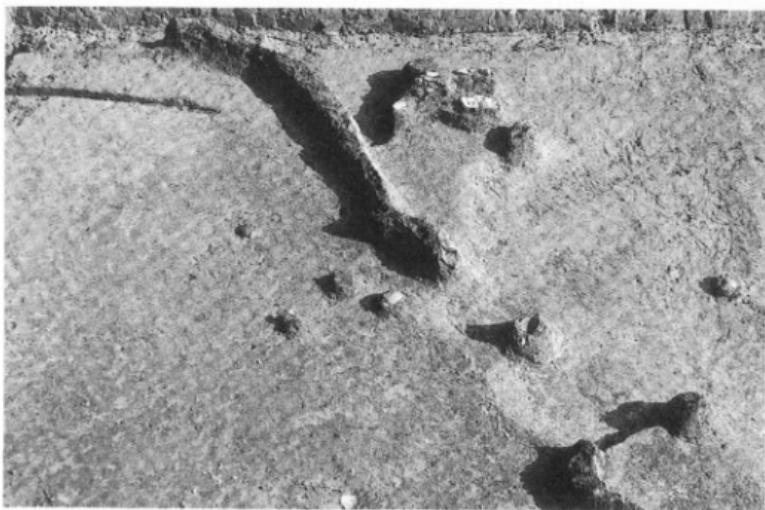
図版98



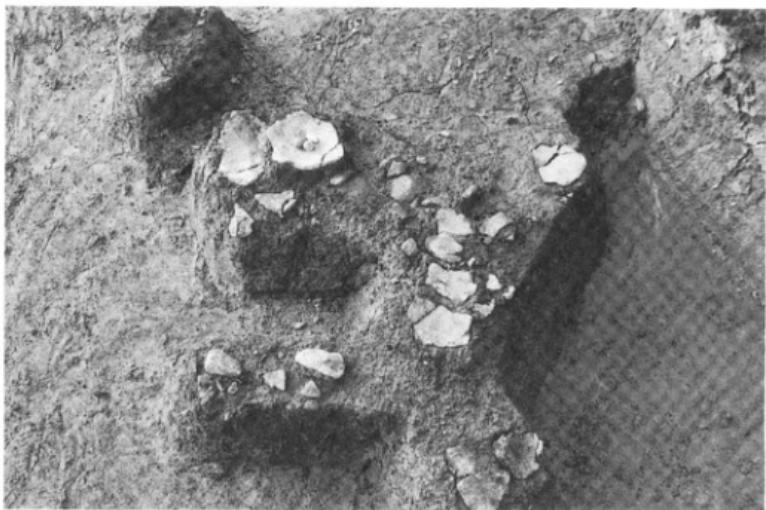
I区 西壁セクション



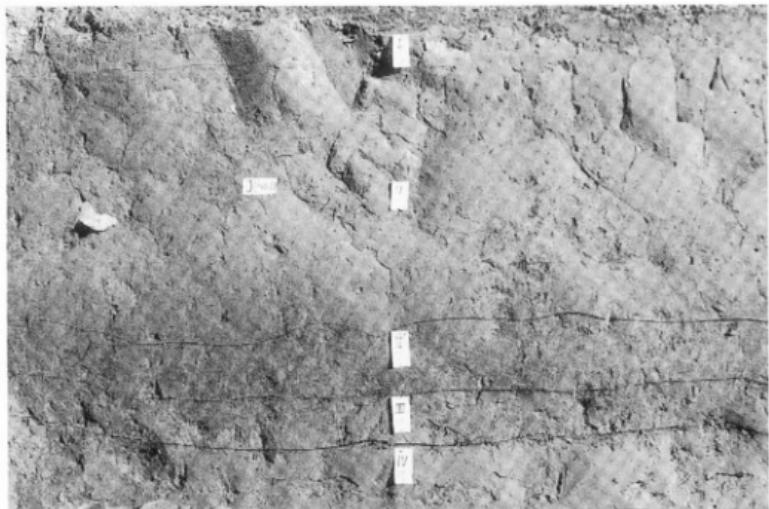
I区 全景



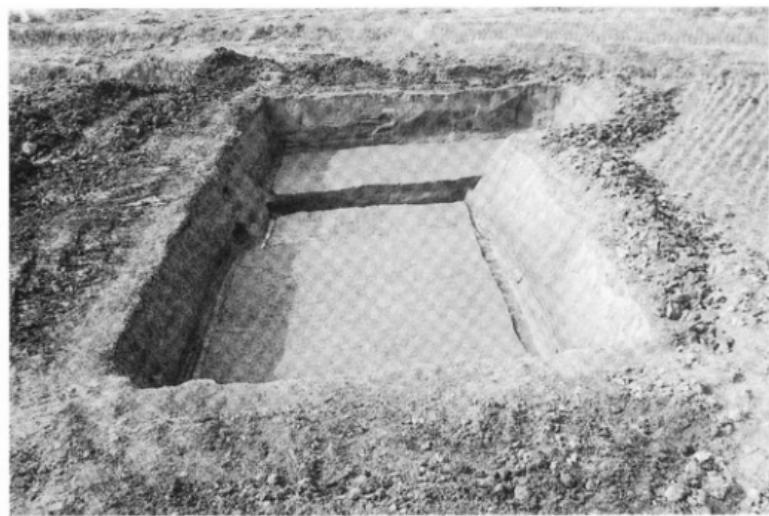
J区 遺物出土状態(東より)



J区 遺物出土状態



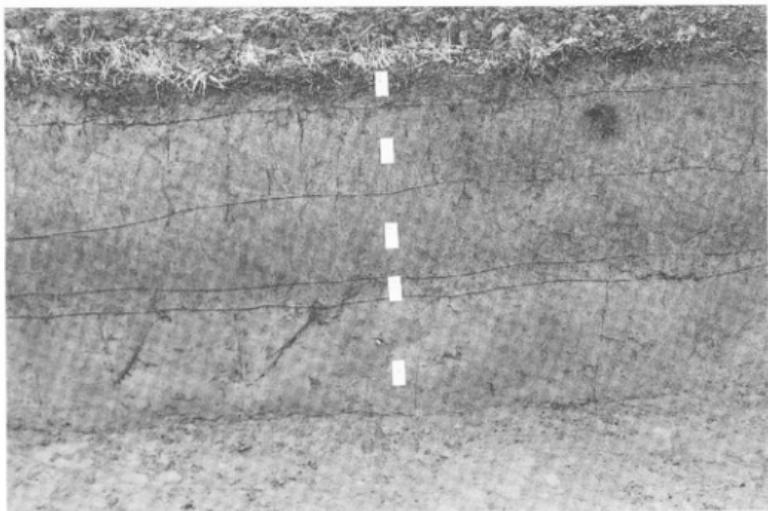
J区 東壁セクション



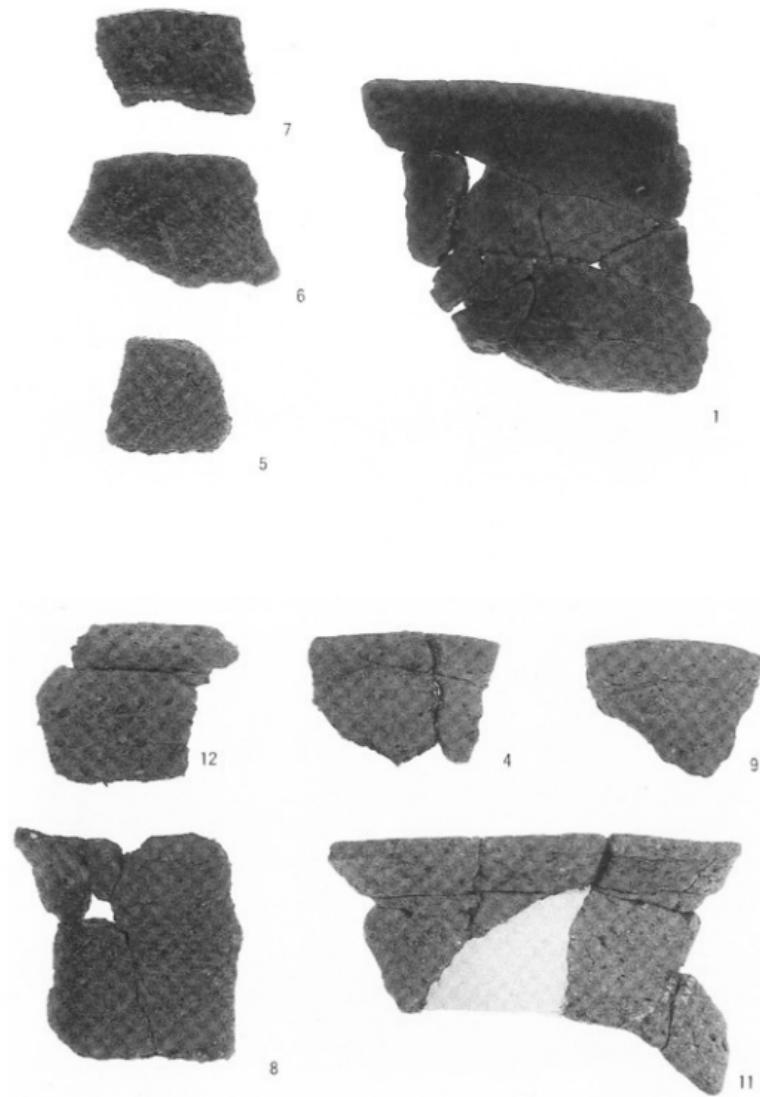
J区 全景



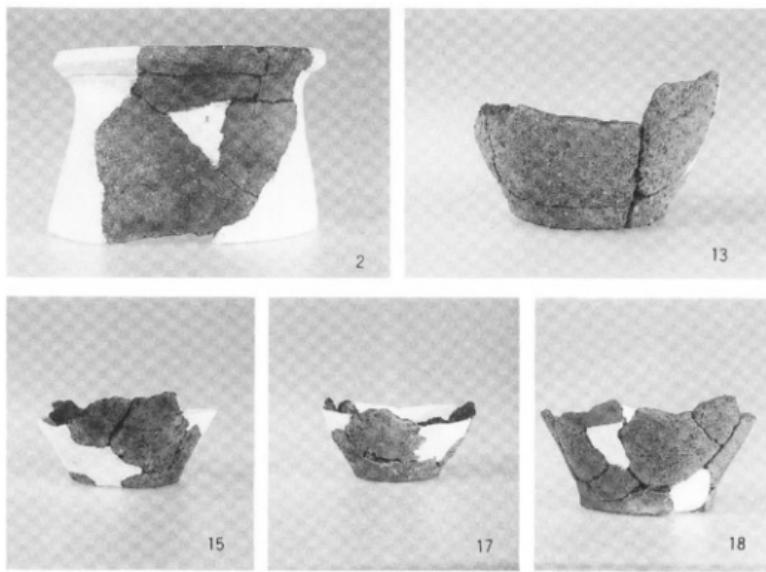
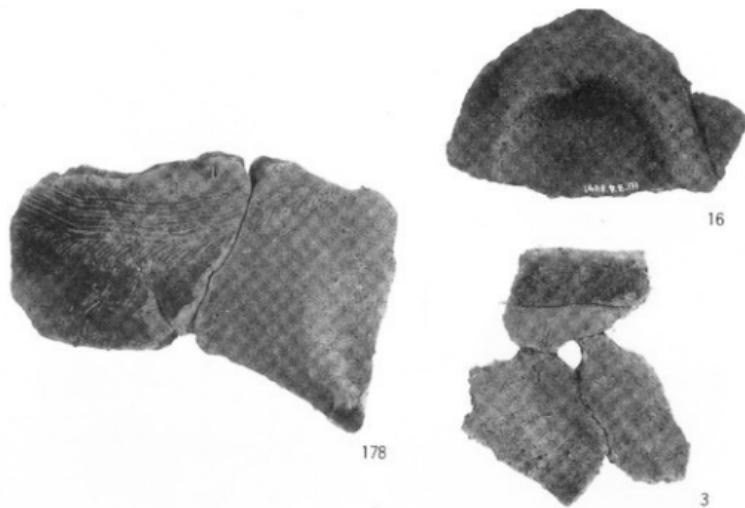
K区 全景



K区 東壁セクション

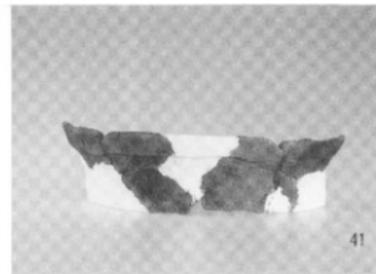
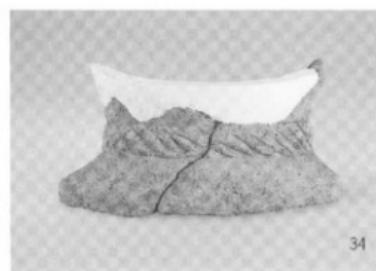
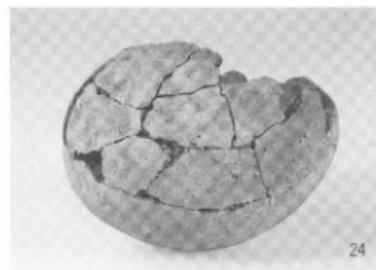
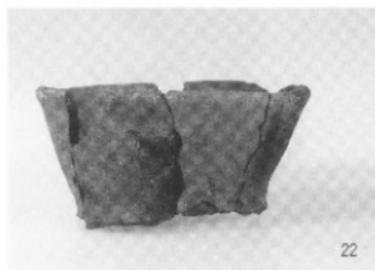
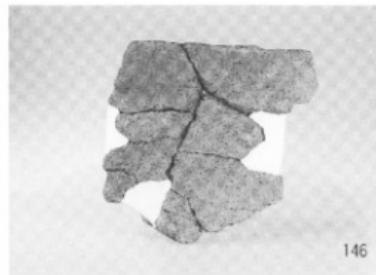


出土遺物(弥生土器)

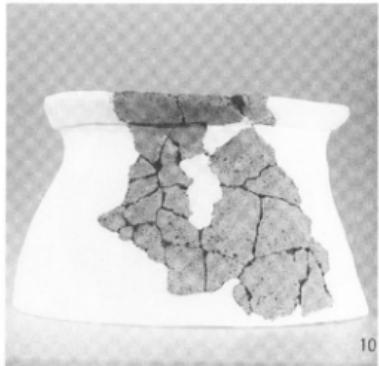


出土遺物(弥生土器・土師器)

図版104



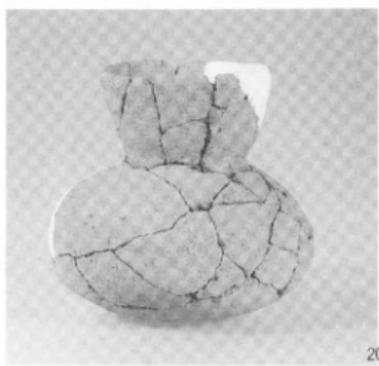
出土遺物(土師器)



10



14



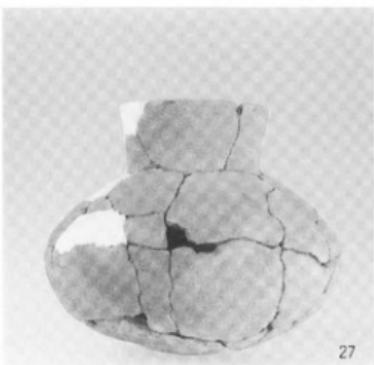
20



21

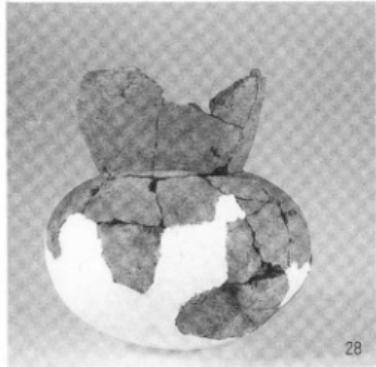


25



27

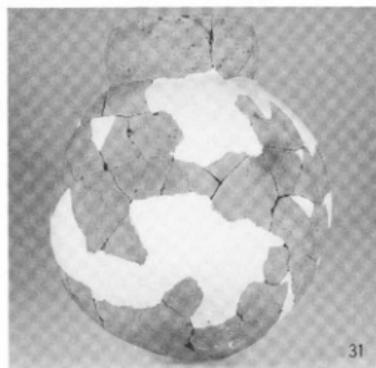
出土遺物(土師器)



28



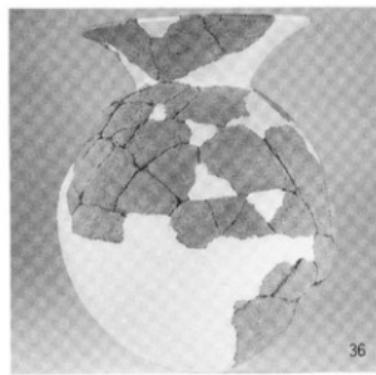
30



31



32

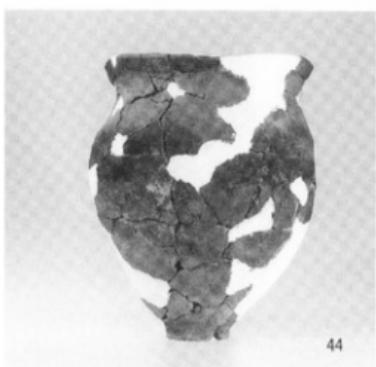
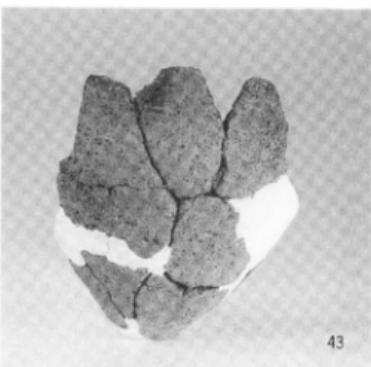
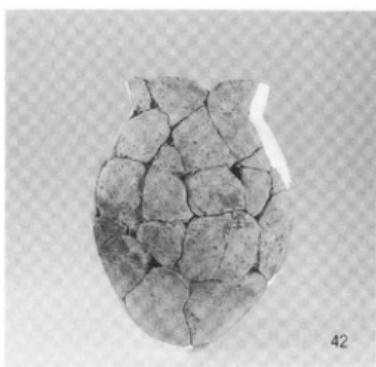
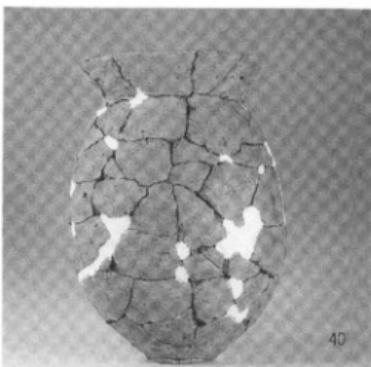
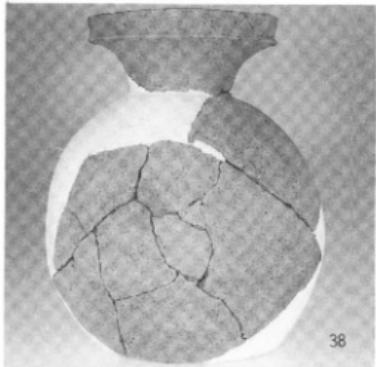


36

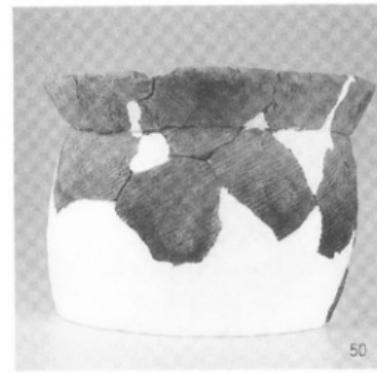
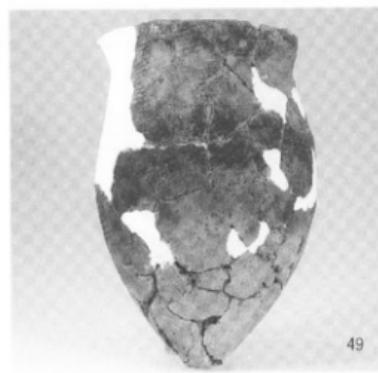
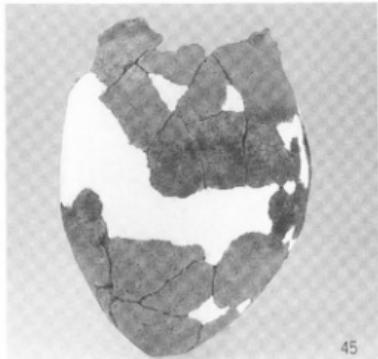


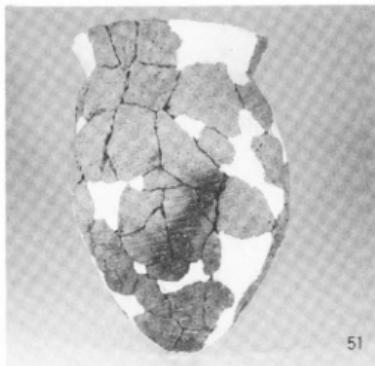
37

出土遺物(土師器)



出土遺物(土師器)

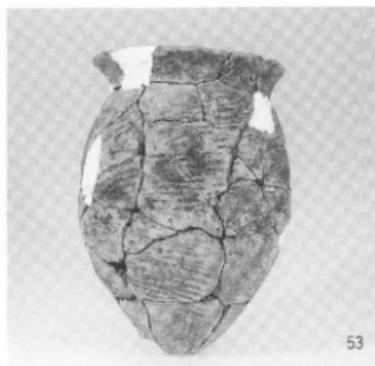




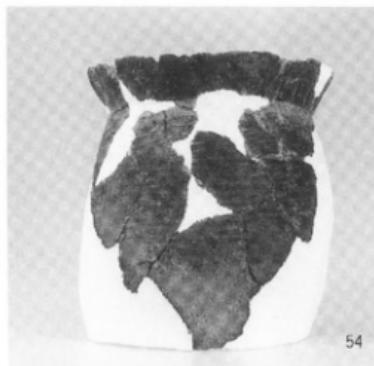
51



52



53



54



55

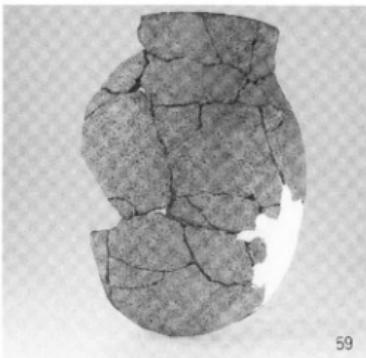


56

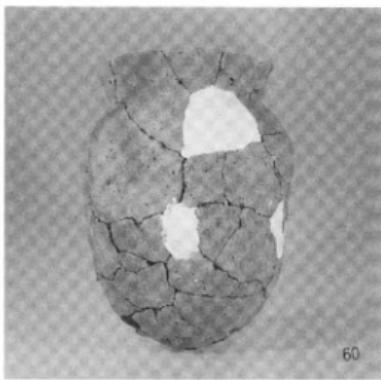
出土遺物(土師器)



58



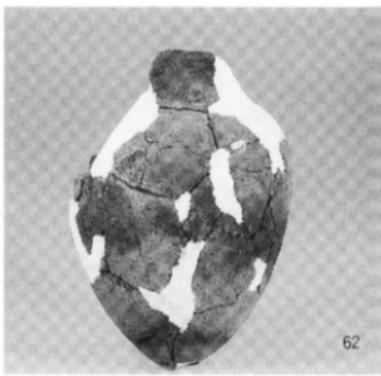
59



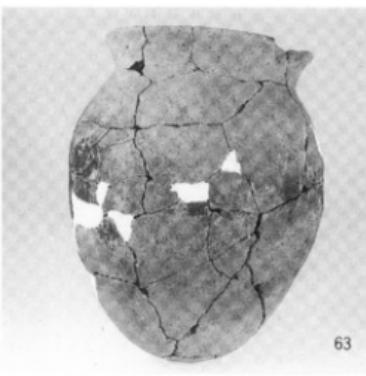
60



61

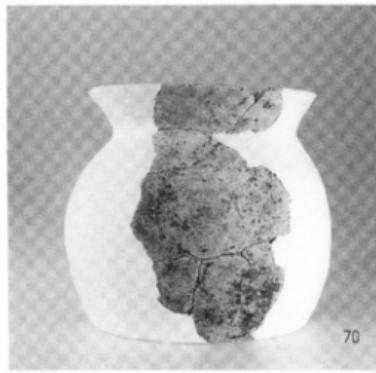
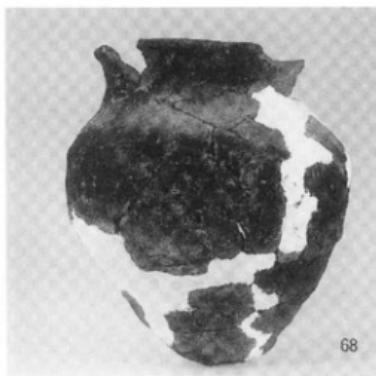
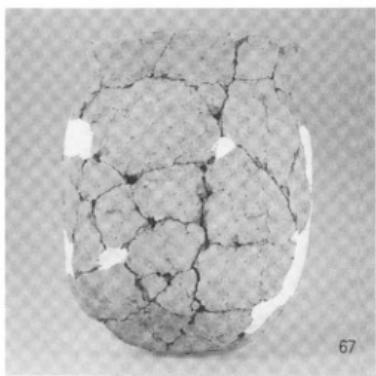
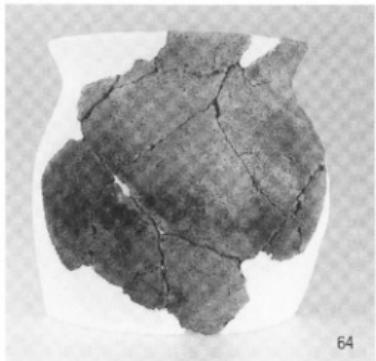


62



63

出土遺物(土器)



出土遺物(土器)



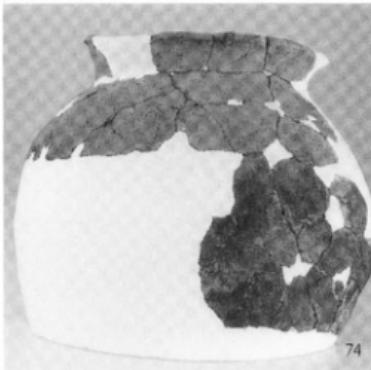
71



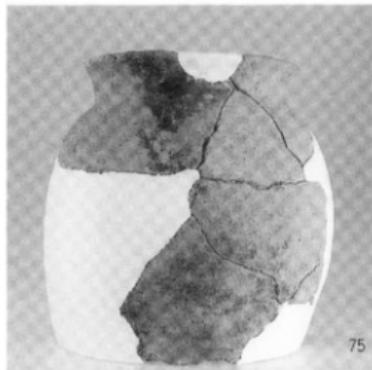
72



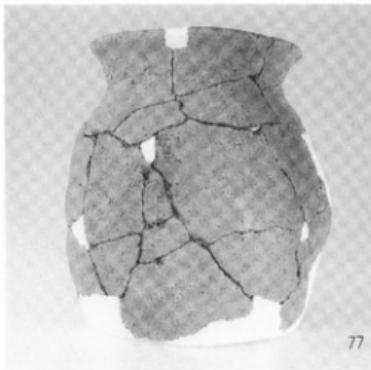
73



74

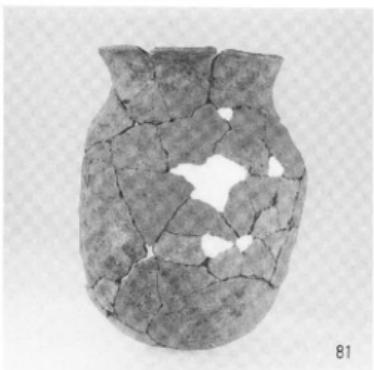
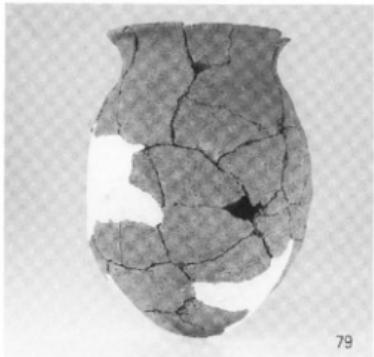
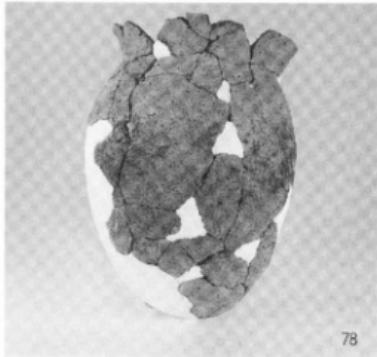


75

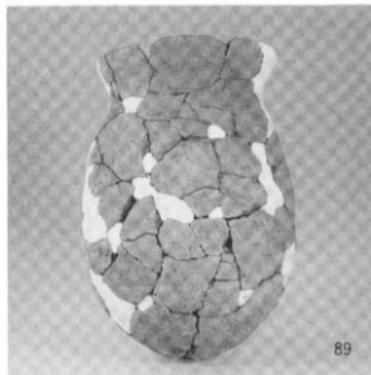
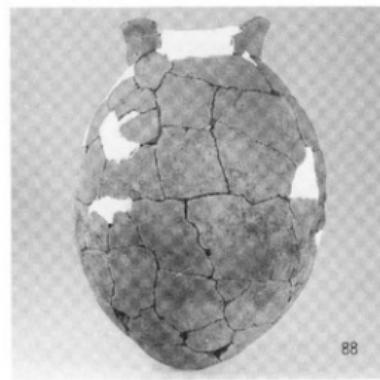


77

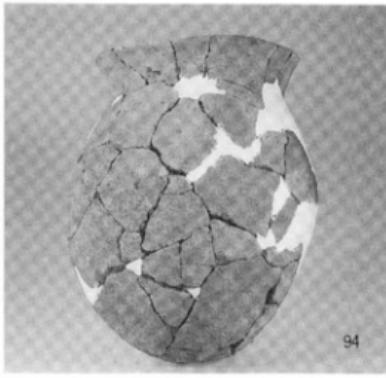
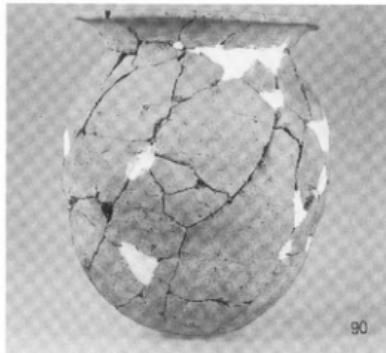
出土遺物(土師器)



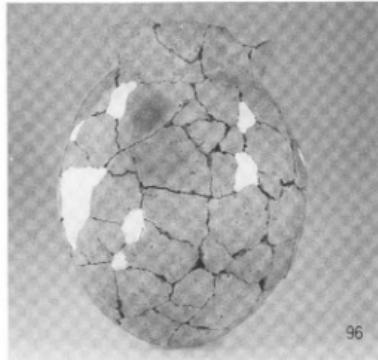
出土遺物(土師器)



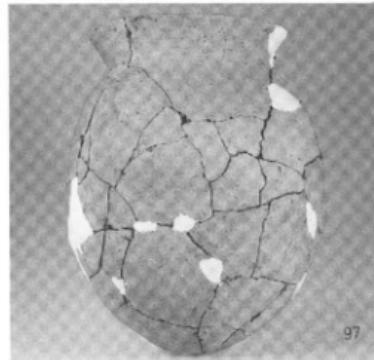
出土遺物(土師器)



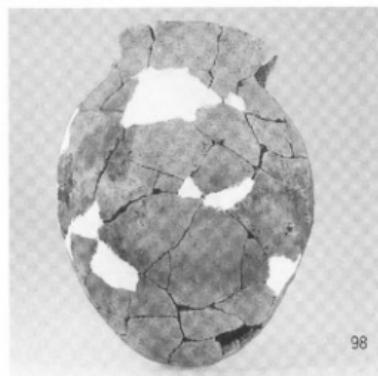
出土遺物(土師器)



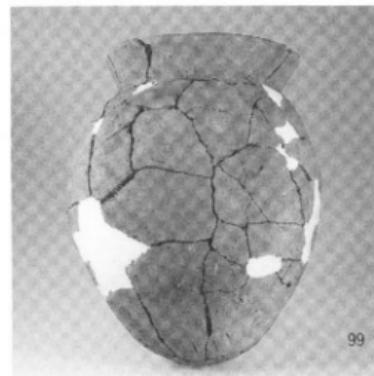
96



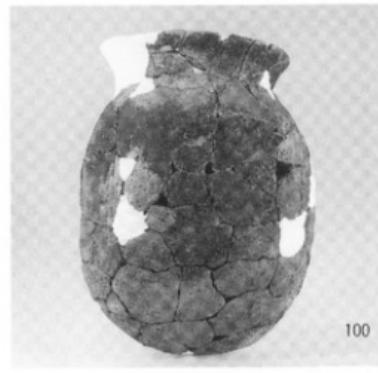
97



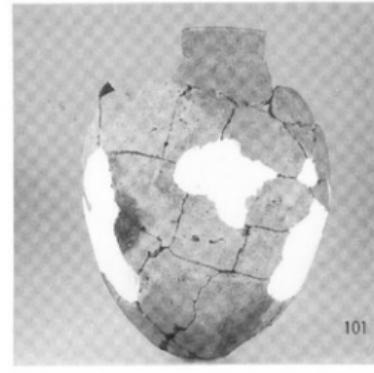
98



99

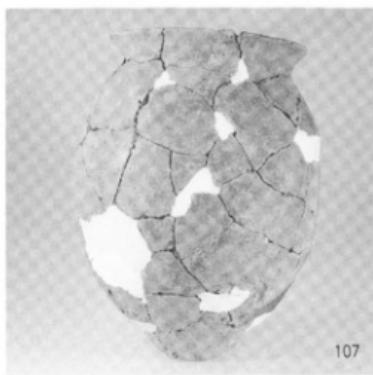
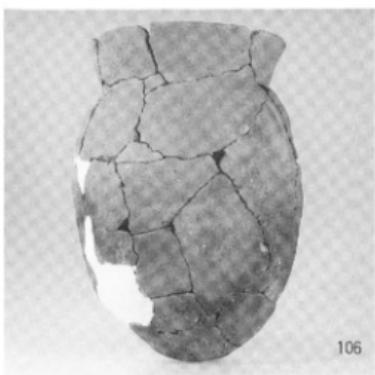
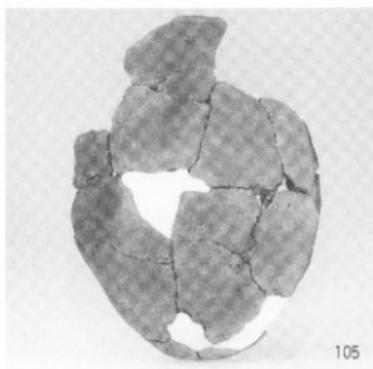
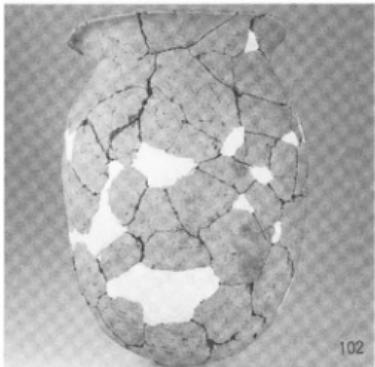


100



101

出土遺物(土師器)

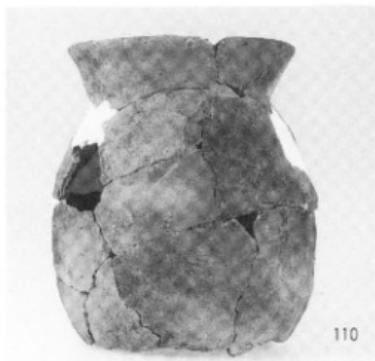




108



109



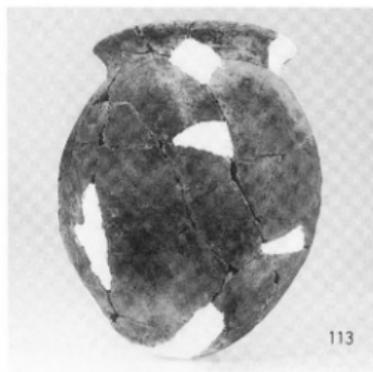
110



111

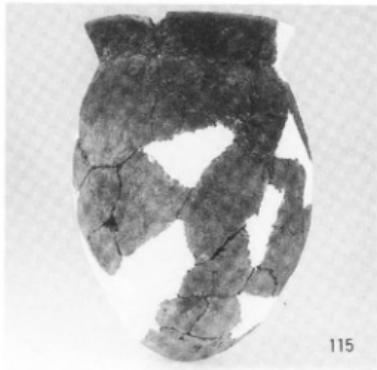


112

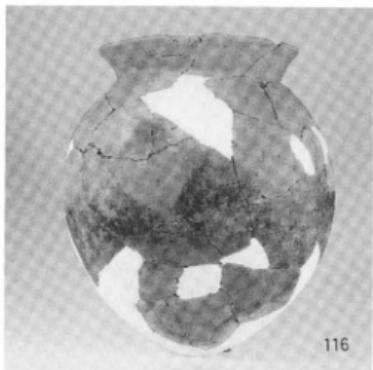


113

出土遺物(土師器)



115



116



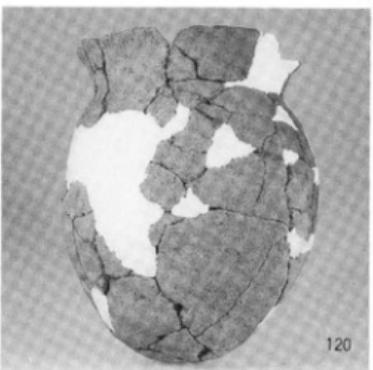
117



118

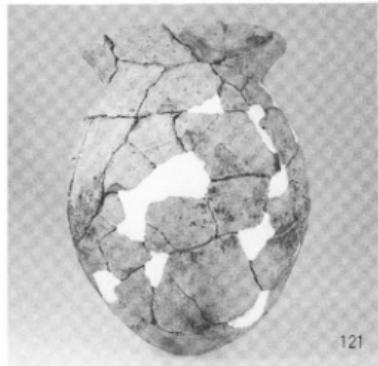


119



120

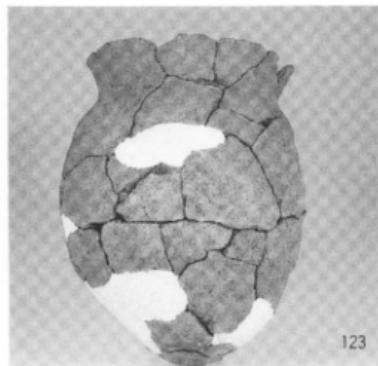
出土遺物(土師器)



121



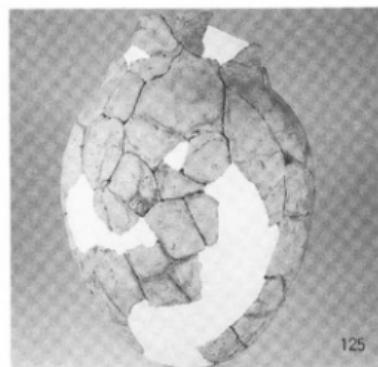
122



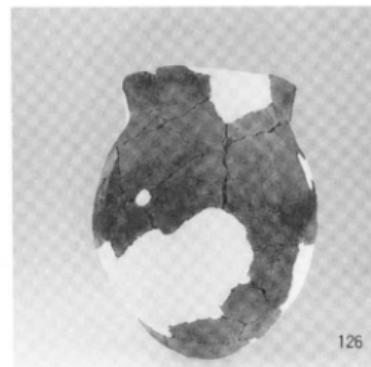
123



124



125



126

出土遺物(土師器)



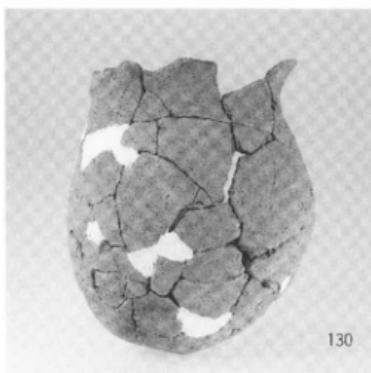
127



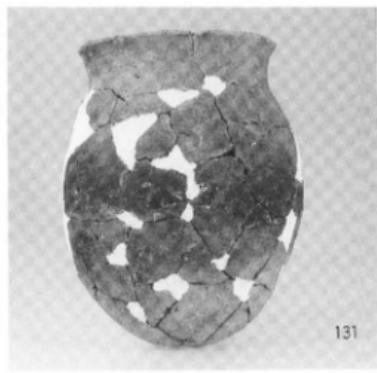
128



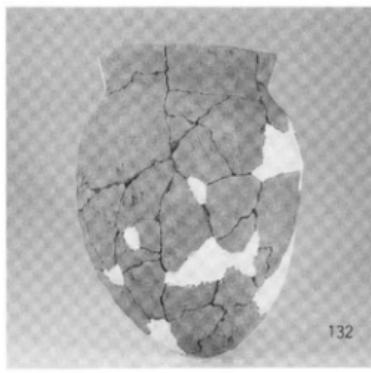
129



130



131



132

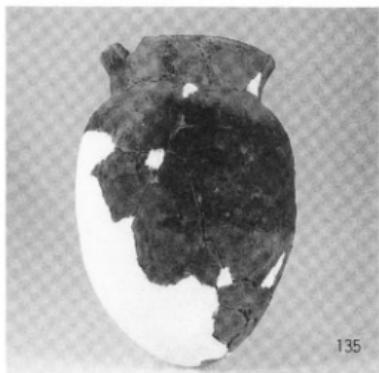
出土遺物(土師器)



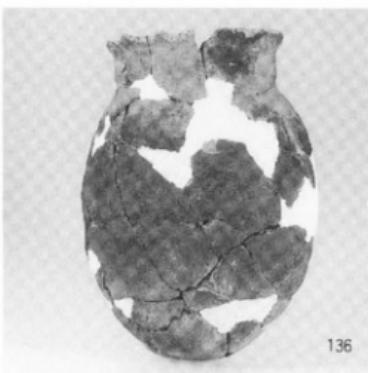
133



134



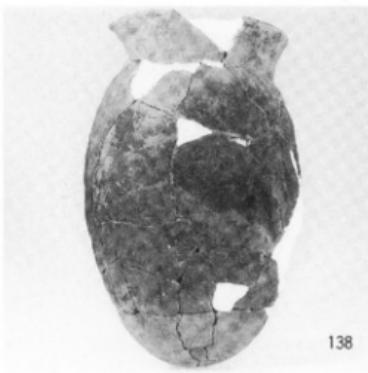
135



136

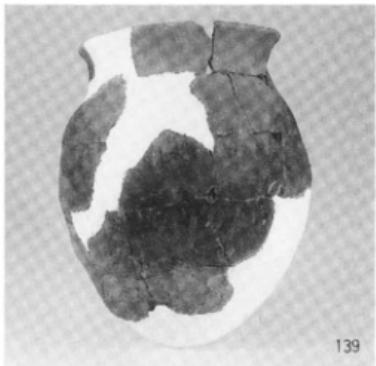


137



138

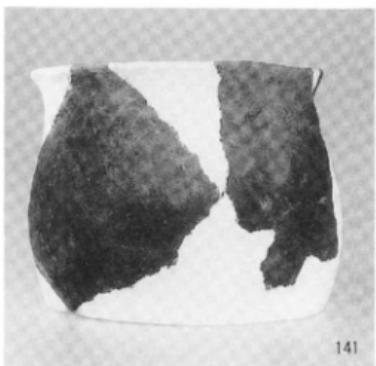
出土遺物(土師器)



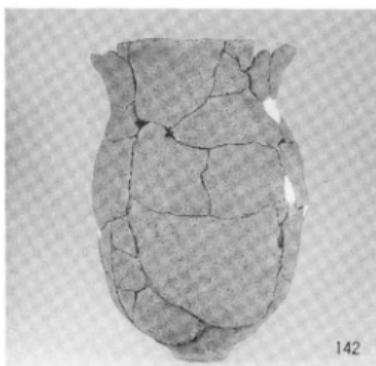
139



140



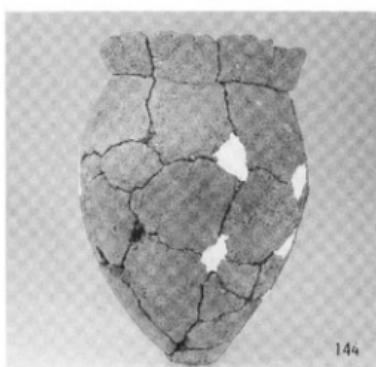
141



142

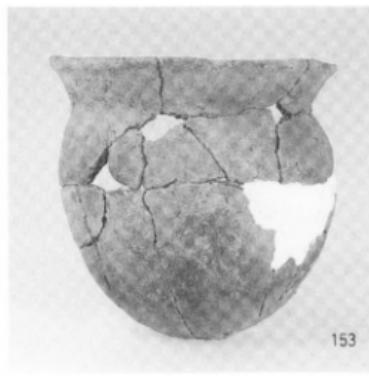
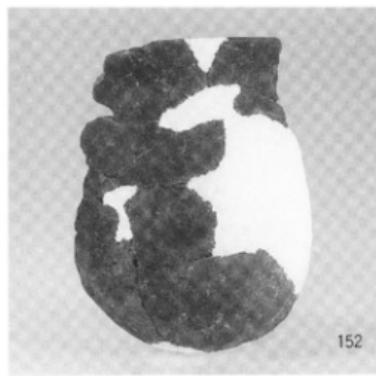
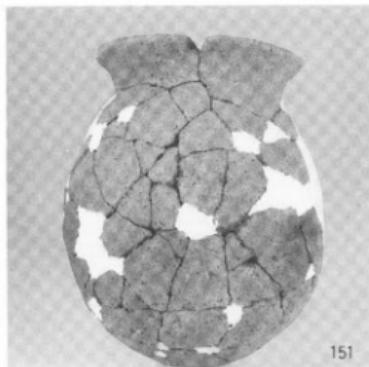
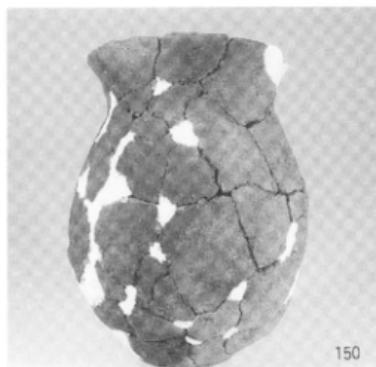
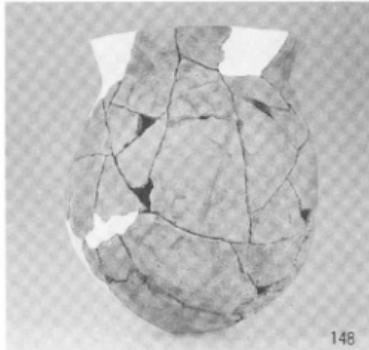


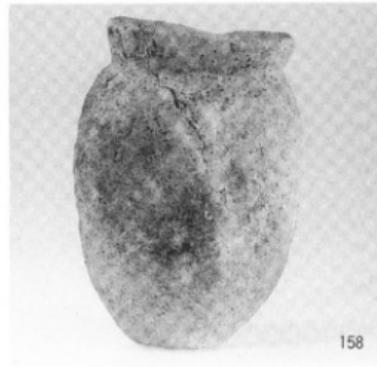
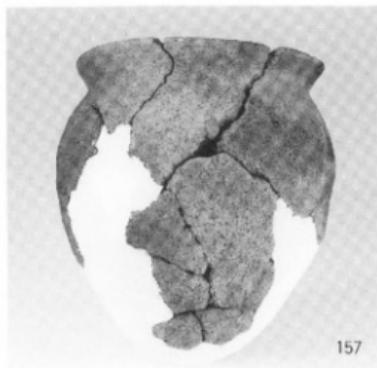
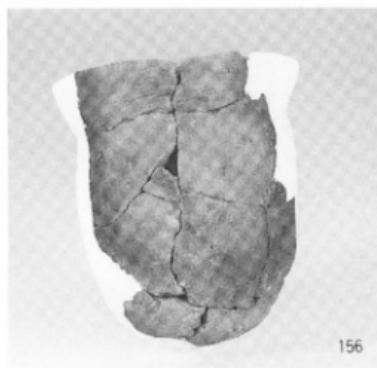
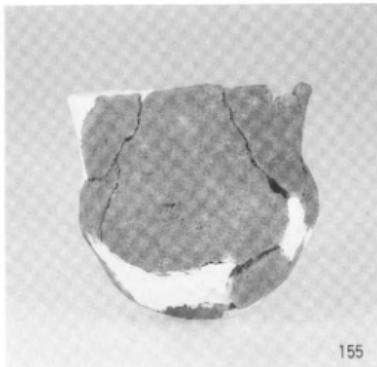
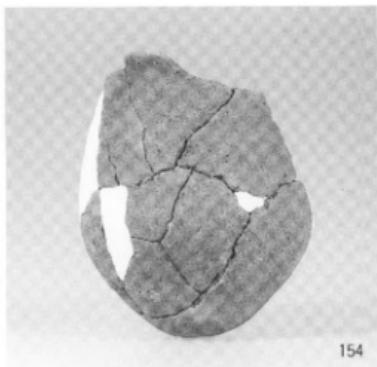
143



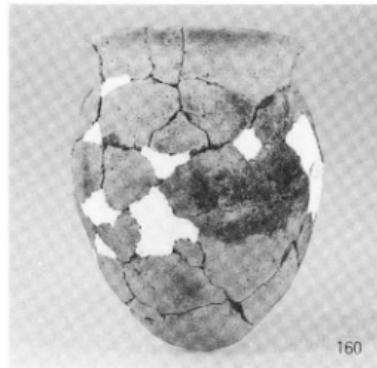
144

出土遺物(土師器)

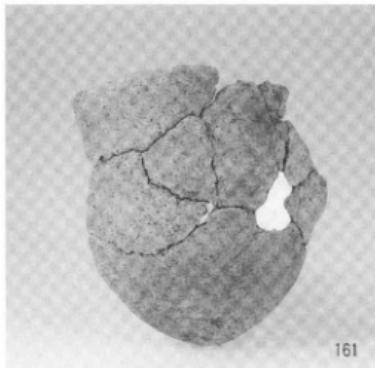




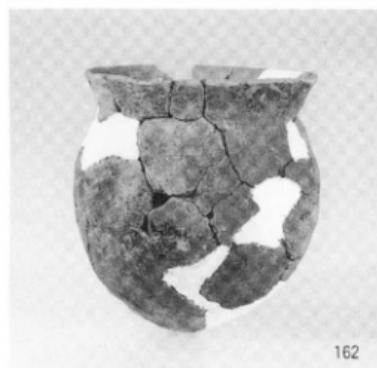
图版126



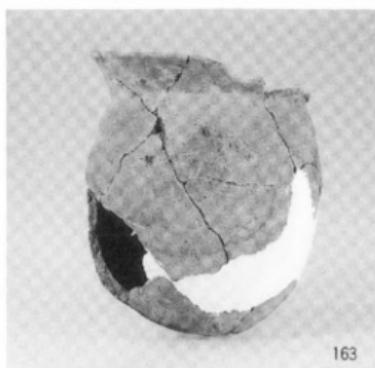
160



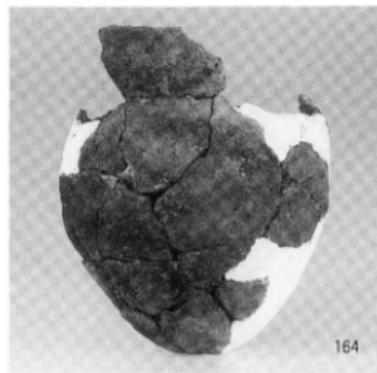
161



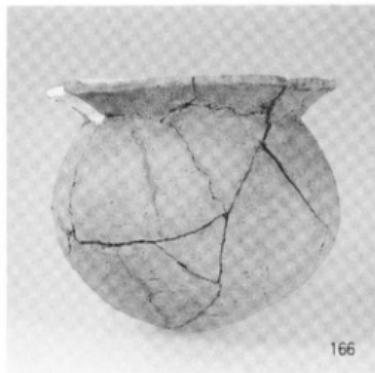
162



163



164



166

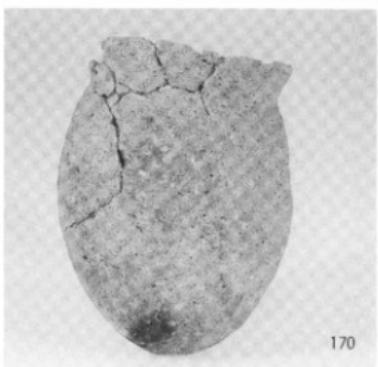
出土遗物(土器)



167



168



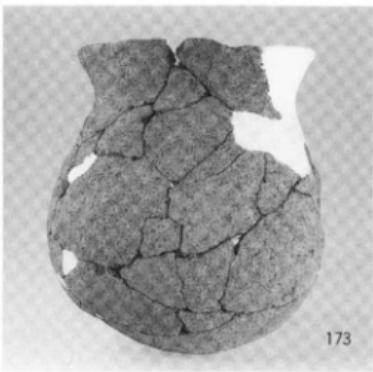
170



171

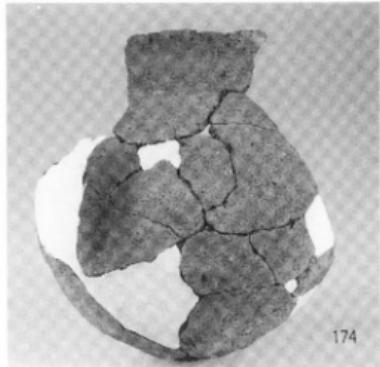


172

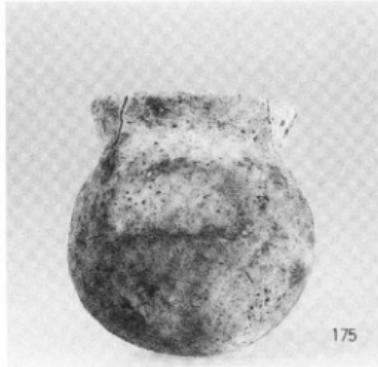


173

出土遺物(土師器)



174



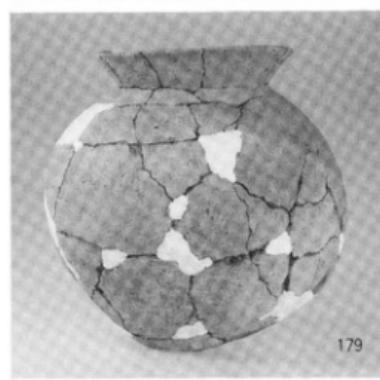
175



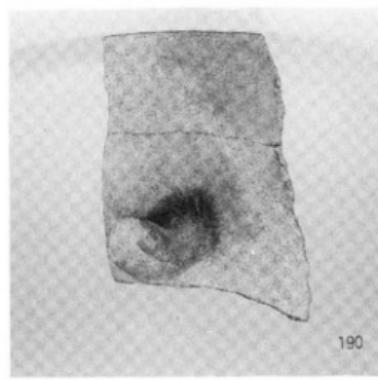
176



177

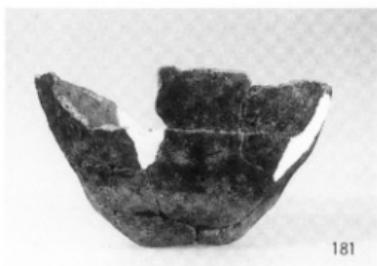
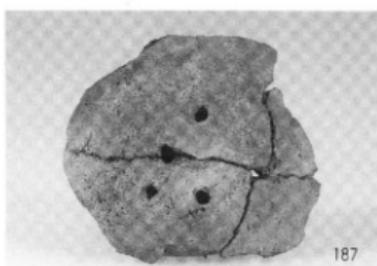
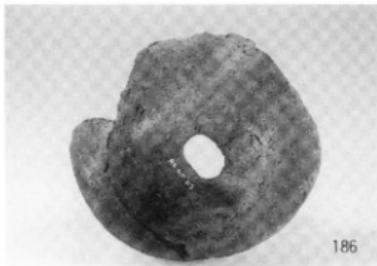
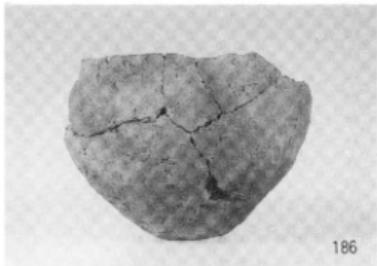


179



190

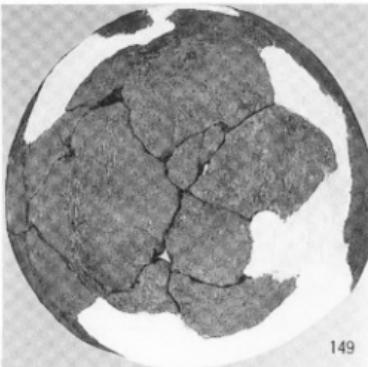
出土遺物(土師器)



出土遺物(土師器)



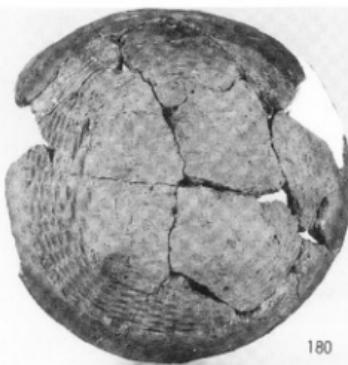
149



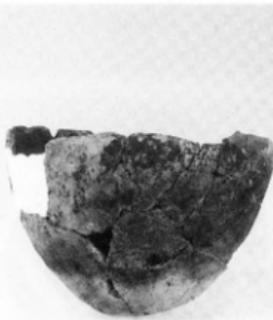
149



180



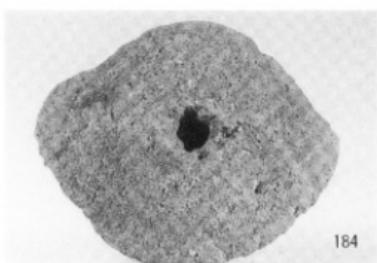
180



185



185



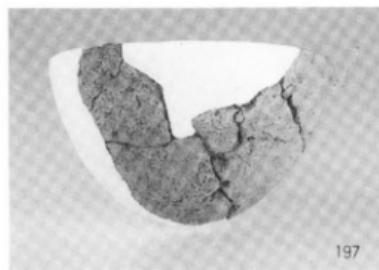
出土遺物(土師器)



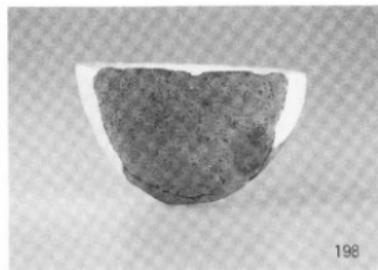
195



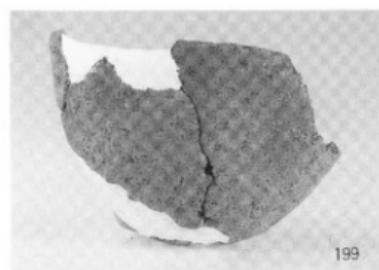
196



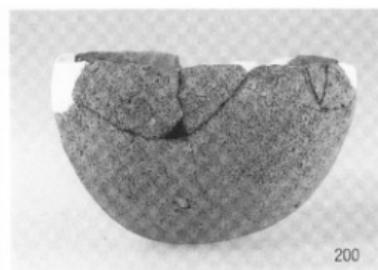
197



198



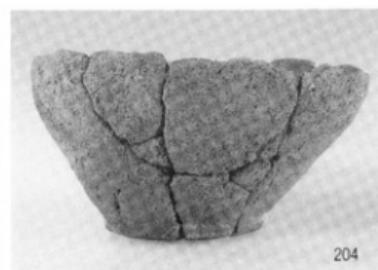
199



200



201

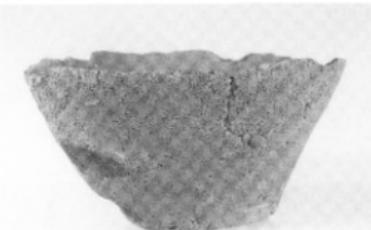


204

出土遺物(土師器)



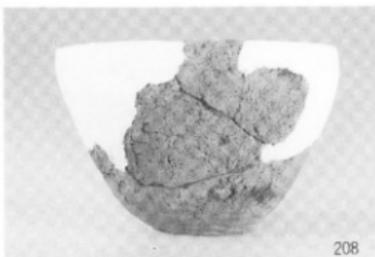
205



206



207



208



209



210



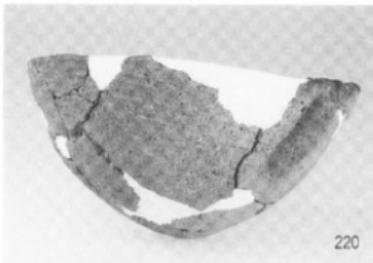
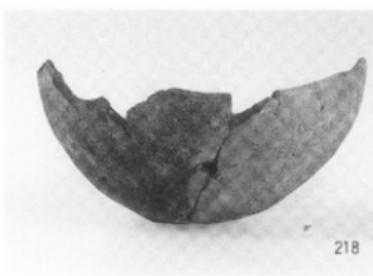
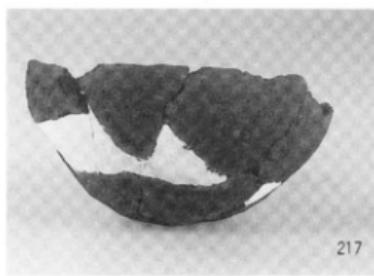
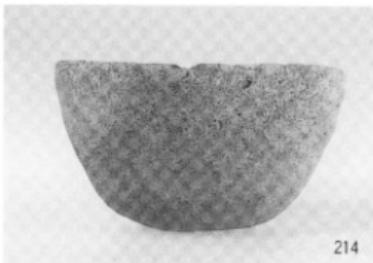
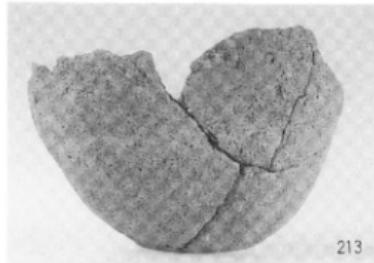
211



212

出土遺物(土師器)

図版134



出土遺物(土器器)



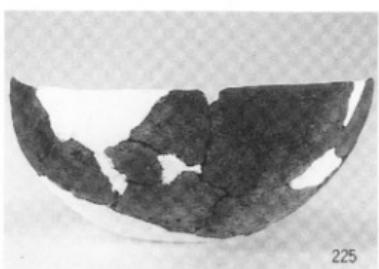
221



223



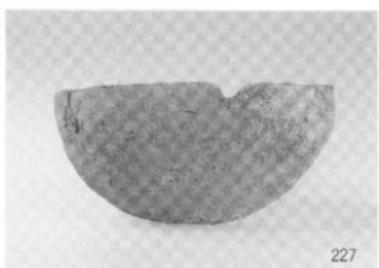
224



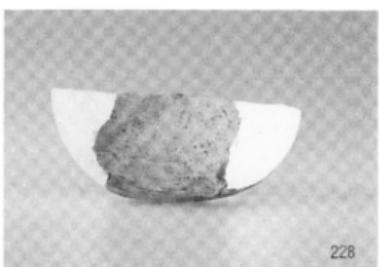
225



226



227



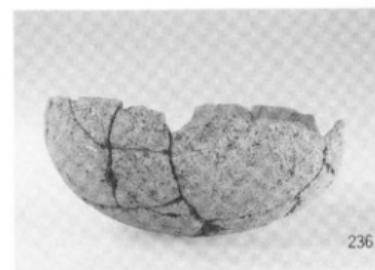
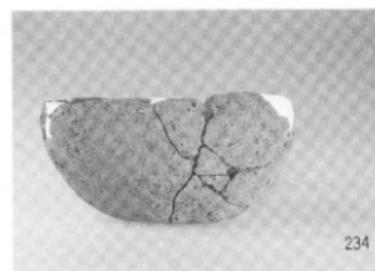
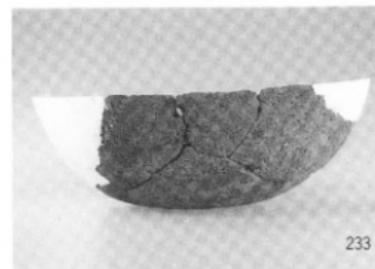
228



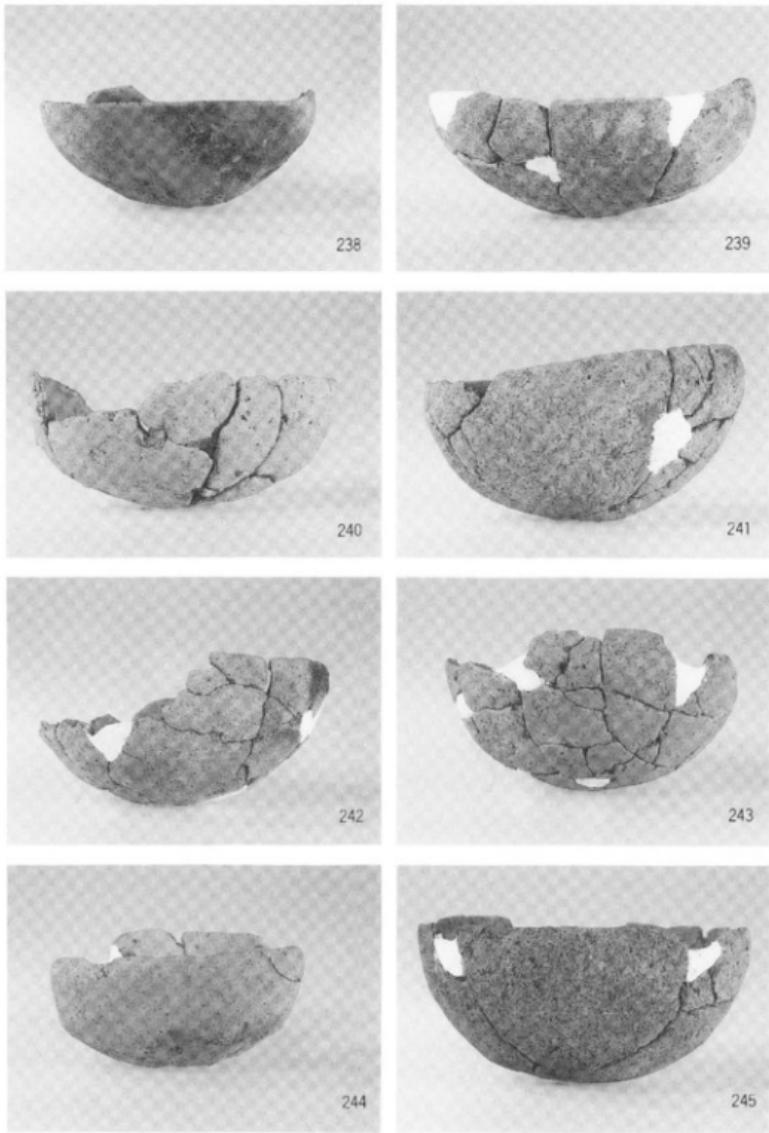
229

出土遺物(土師器)

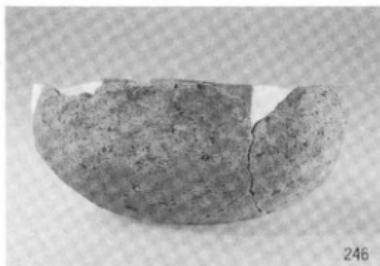
図版136



出土遺物(土師器)



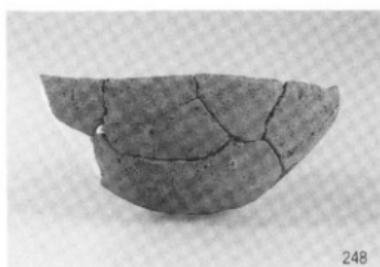
出土遺物(土師器)



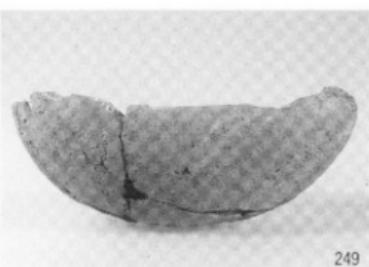
246



247



248



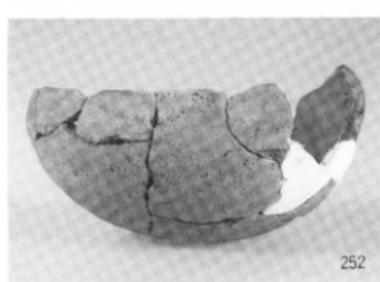
249



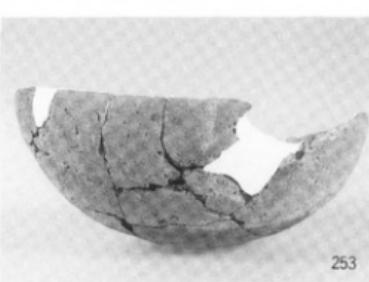
250



251



252

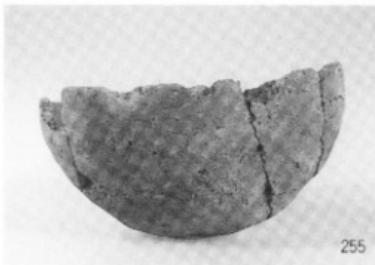


253

出土遺物(土師器)



254



255



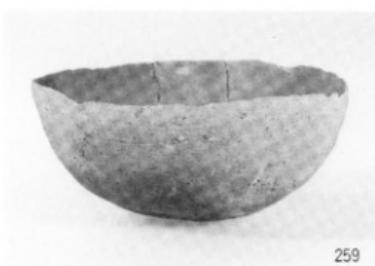
256



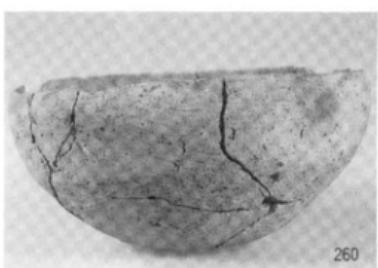
257



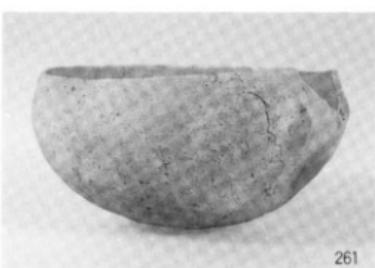
258



259

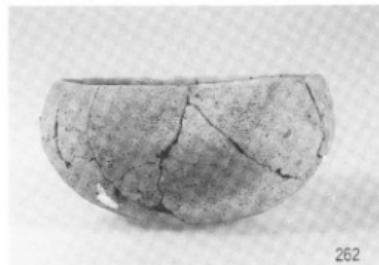


260



261

出土遺物(土師器)



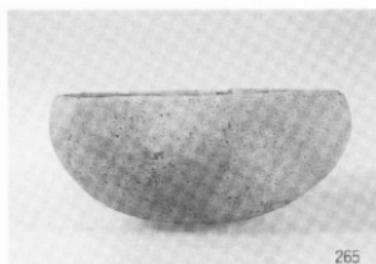
262



263



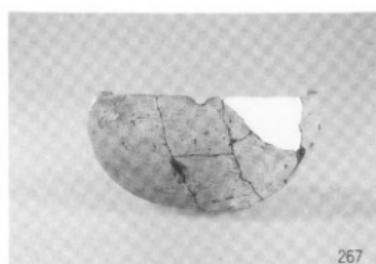
264



265



266



267



269



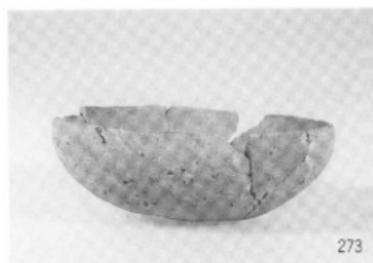
270



271



272



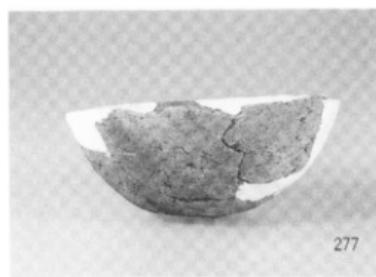
273



274



276



277



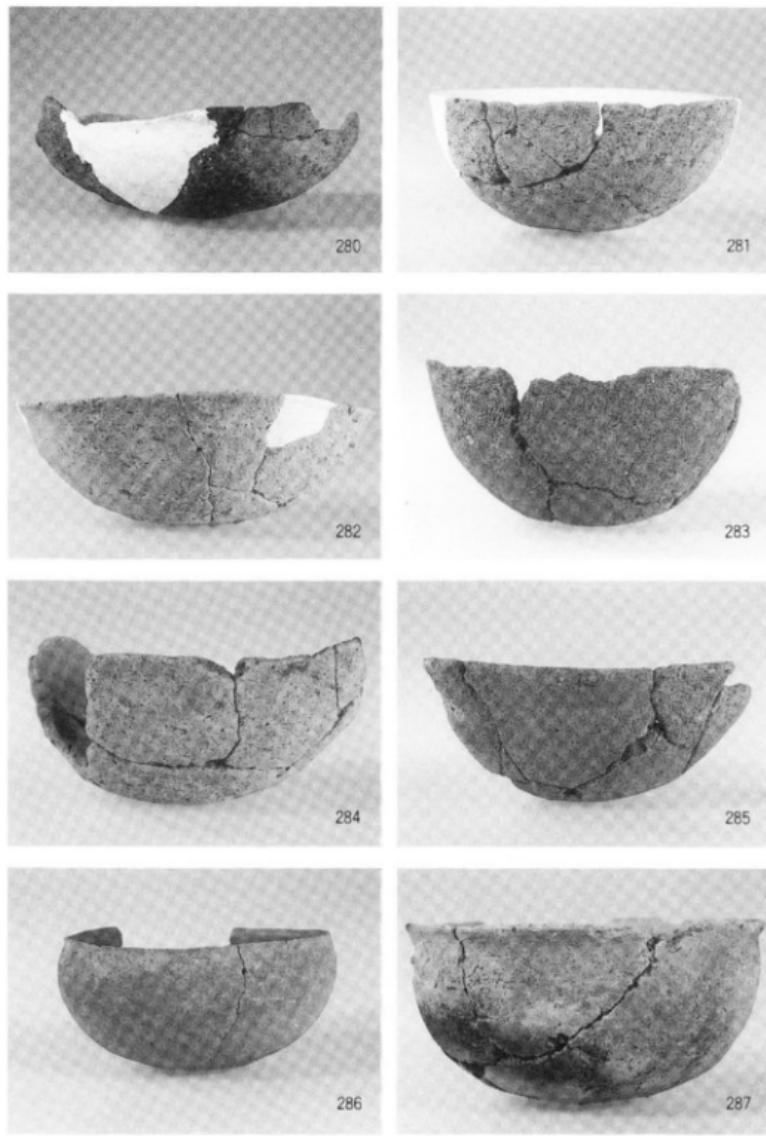
278



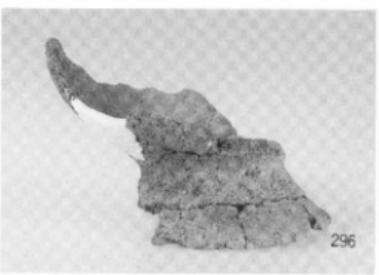
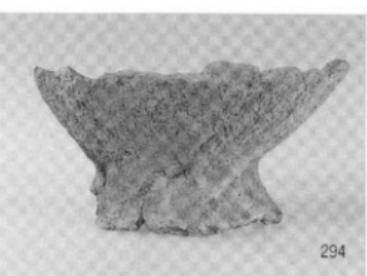
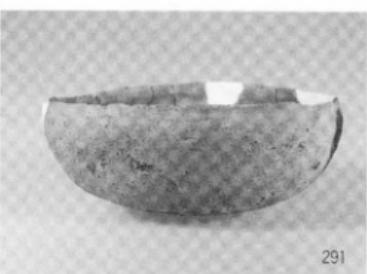
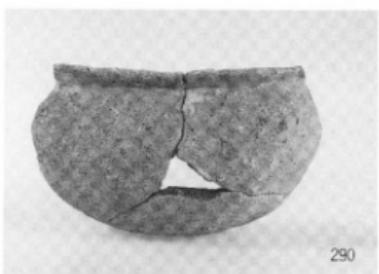
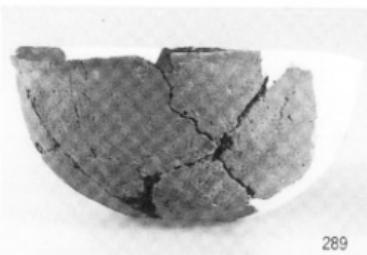
279

出土遺物(土師器)

圖版142



出土遺物(土師器)



出土遺物(土器)



295



297



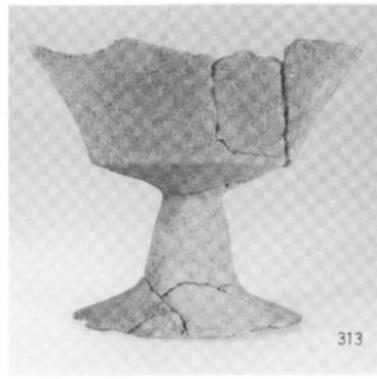
299



307

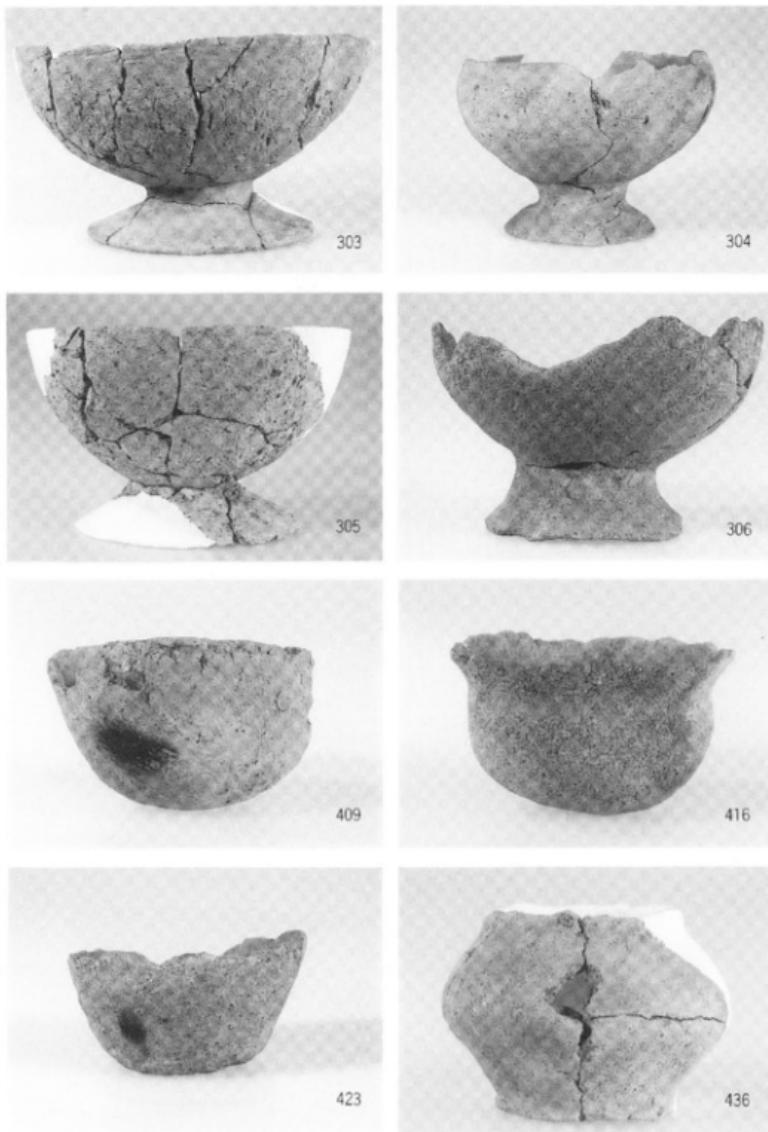


311



313

出土遺物(土師器)



出土遺物(土師器)



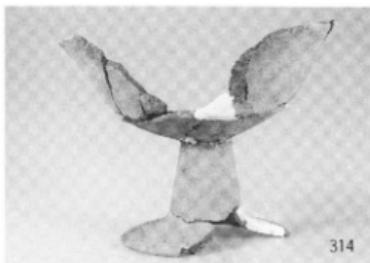
308



309



310



314



320



321

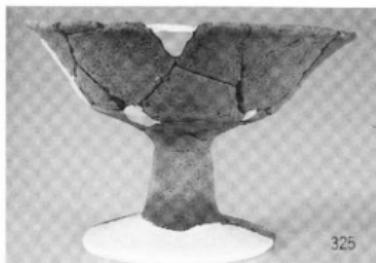


322



323

出土遗物(土器)

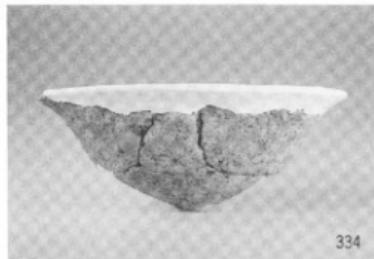


出土遺物(土師器)

圖版148



332



334



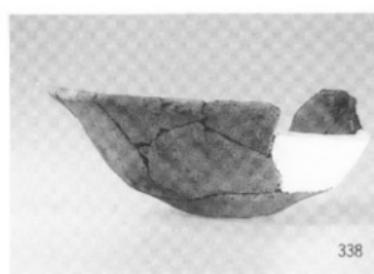
335



336



337



338

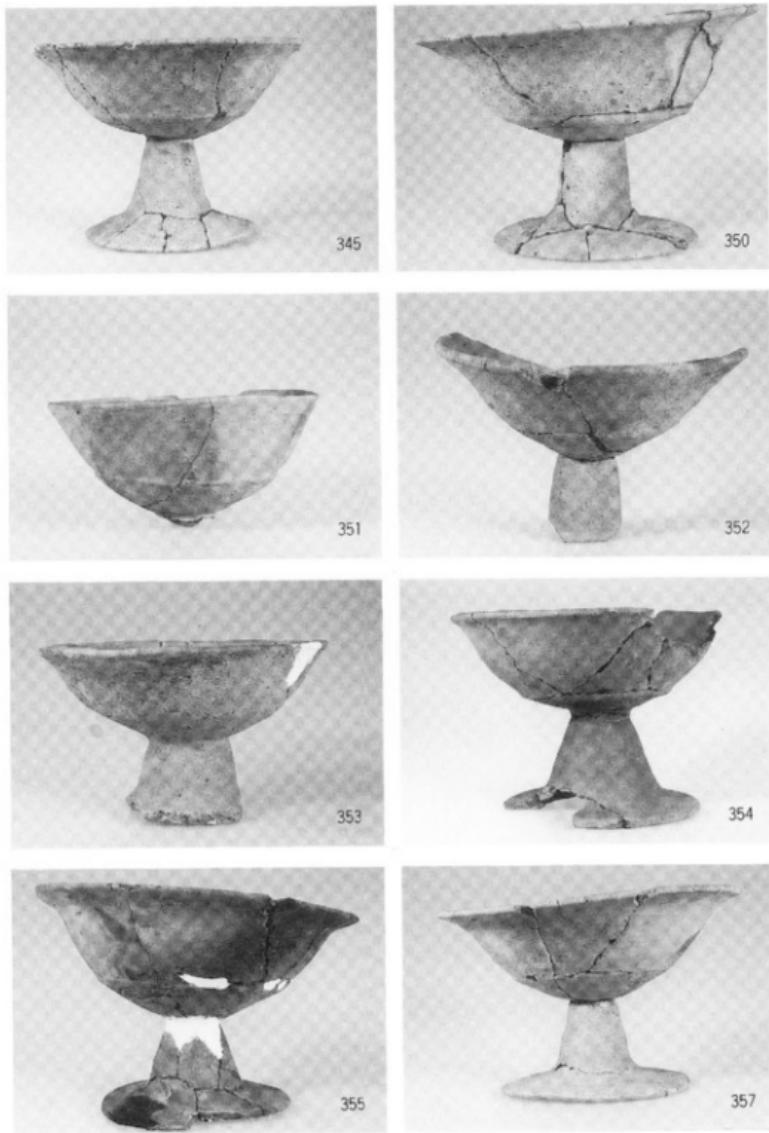


340



341

出土遺物(土師器)



出土遗物(土師器)

図版150



358



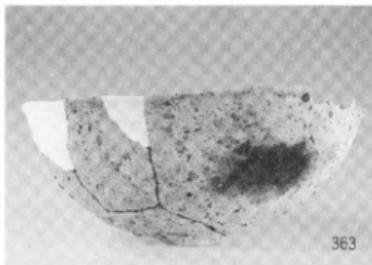
359



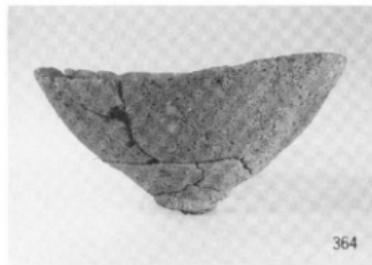
360



362



363



364



366

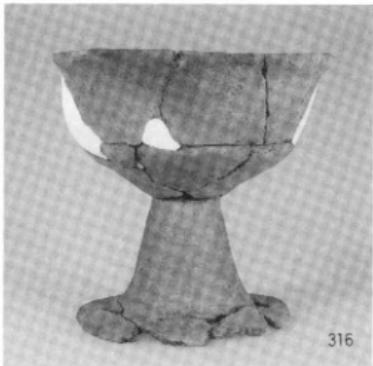


367

出土遺物(土師器)



315



316



317



318



339



342

出土遺物(土師器)



343



344



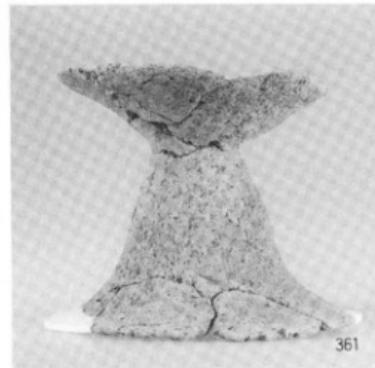
347



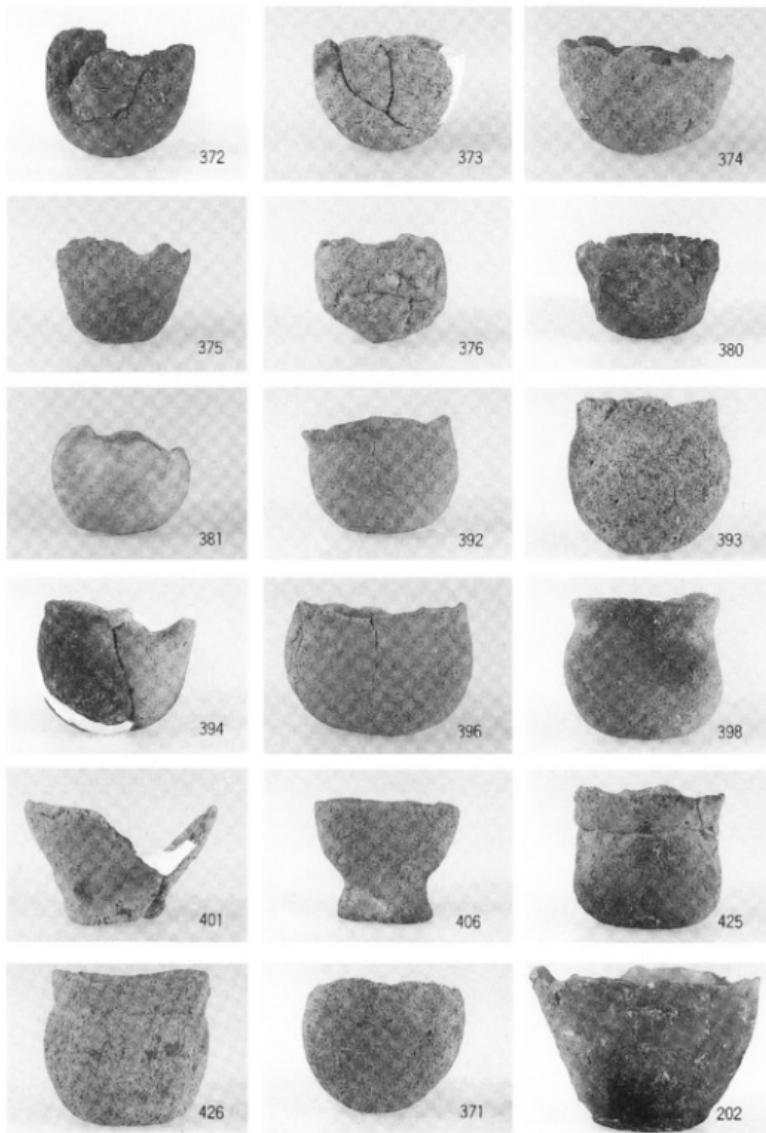
348



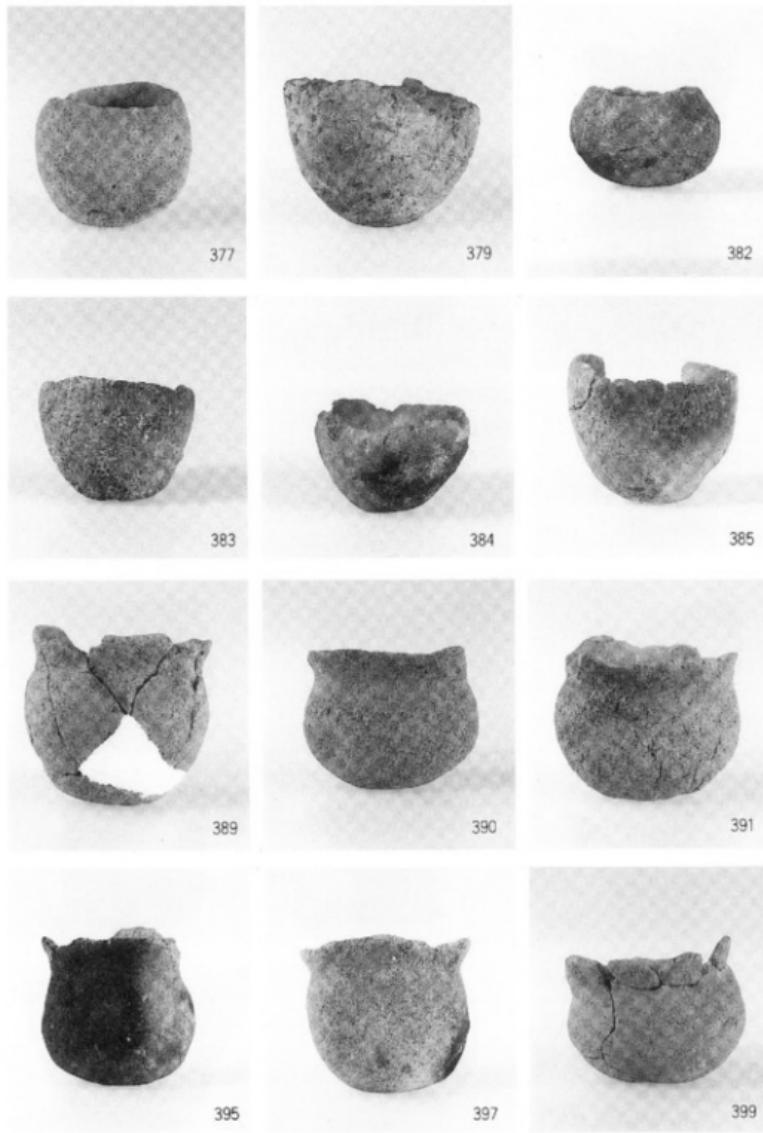
356



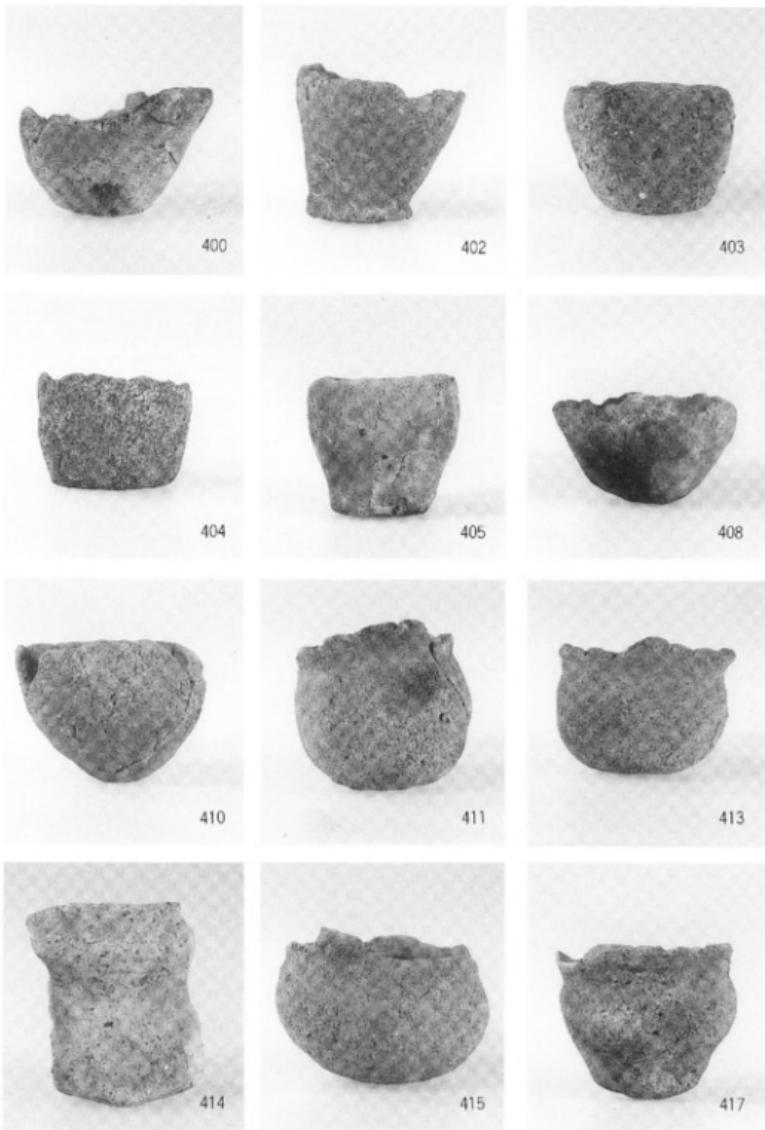
361



出土遺物(手捏土器)



出土遗物(手捏土器)



出土遺物(手捏土器)

図版156



418



420



421



424



427



431



433



435



435



434



369



370

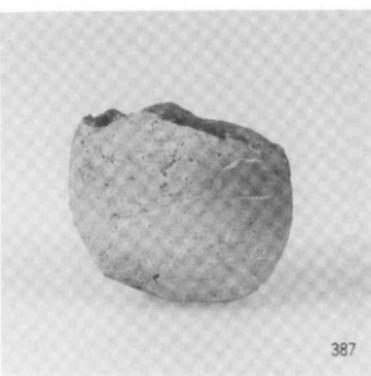
出土遺物(手捏土器)



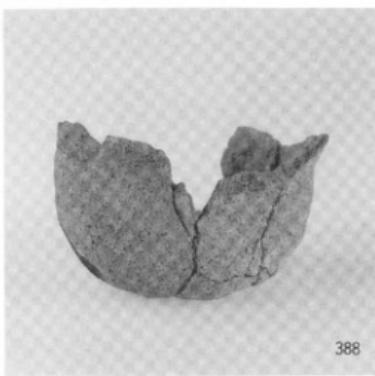
378



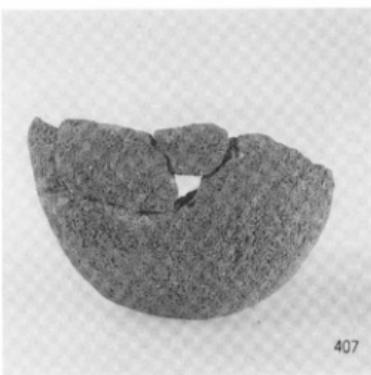
386



387



388

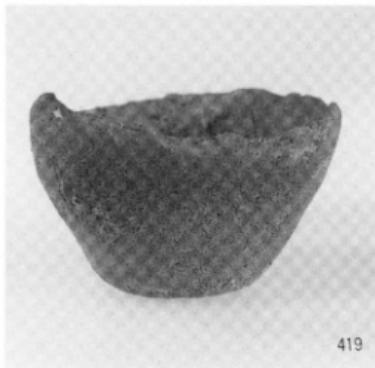


407

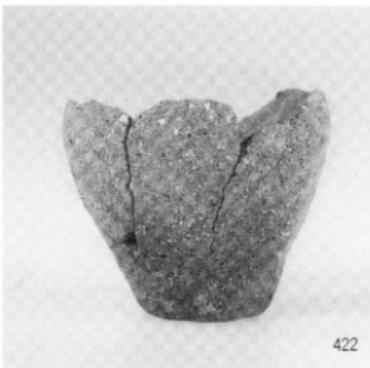


412

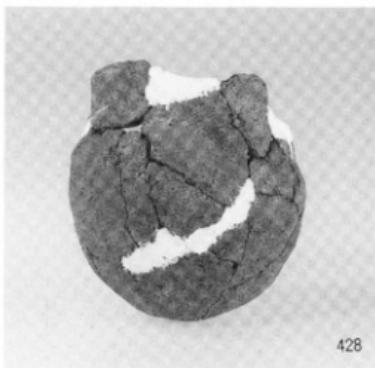
出土遺物(手捏土器)



419



422



428



429

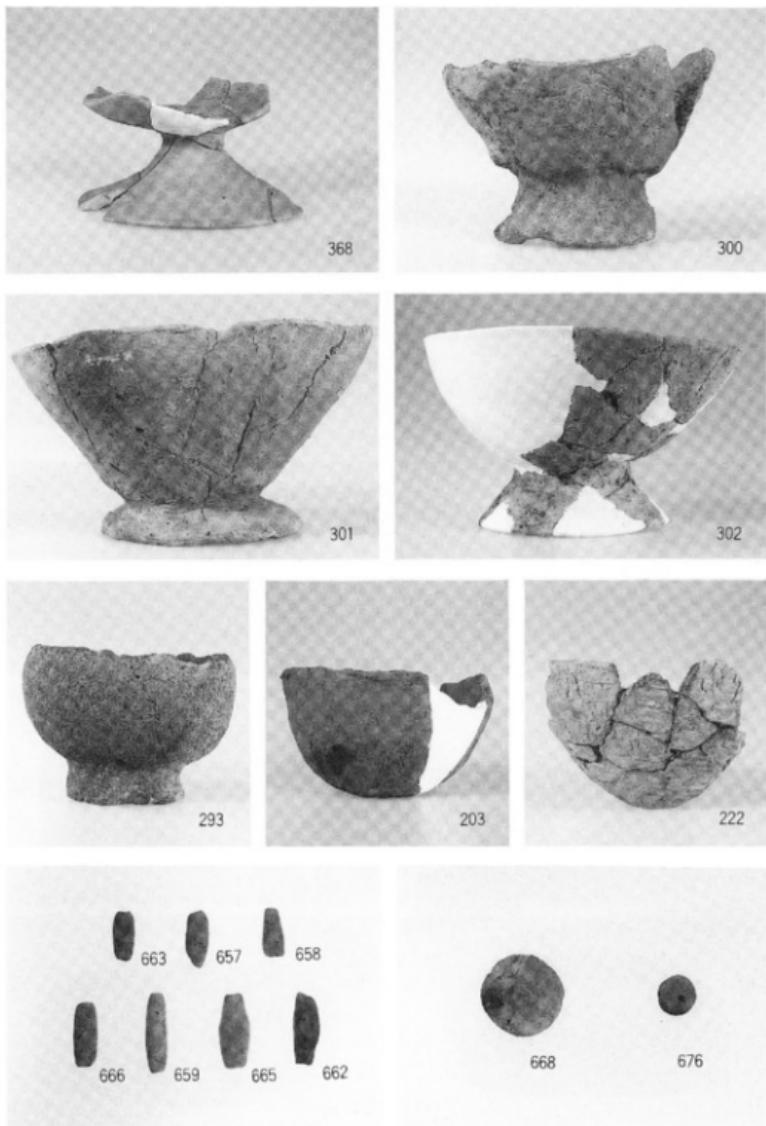


430

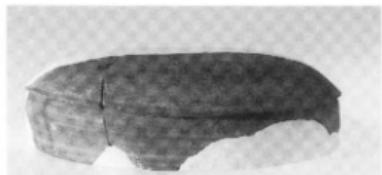


432

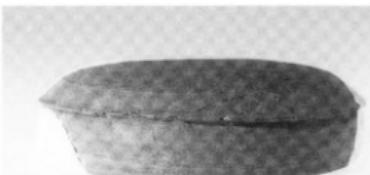
出土遺物(手捏土器)



出土遺物(土師器・土錘・土製模造品)



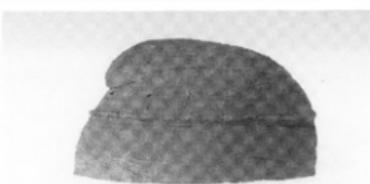
437



438



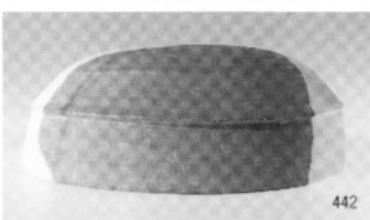
439



440



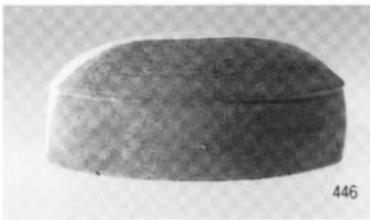
441



442



444



446

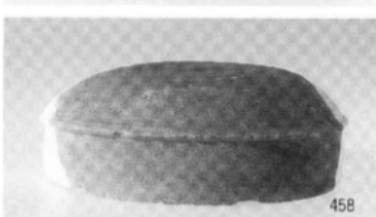
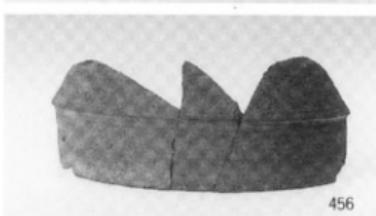
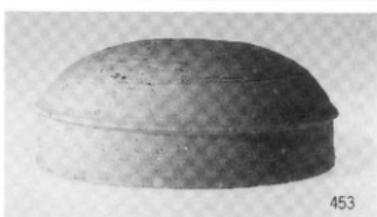
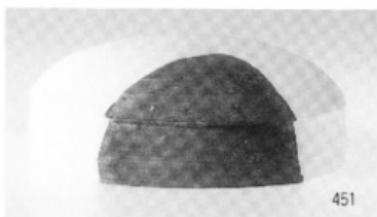
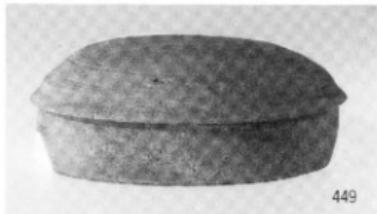


447



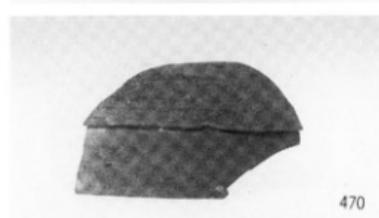
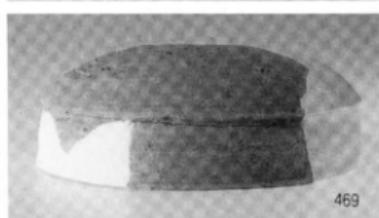
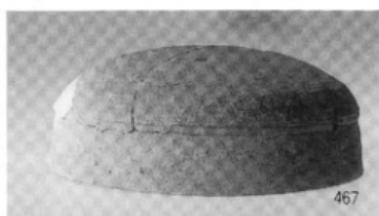
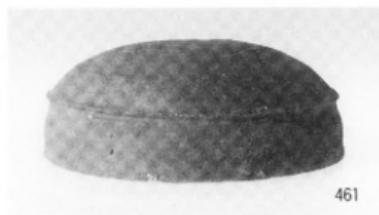
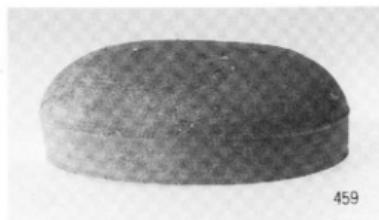
448

出土遺物(須惠器)

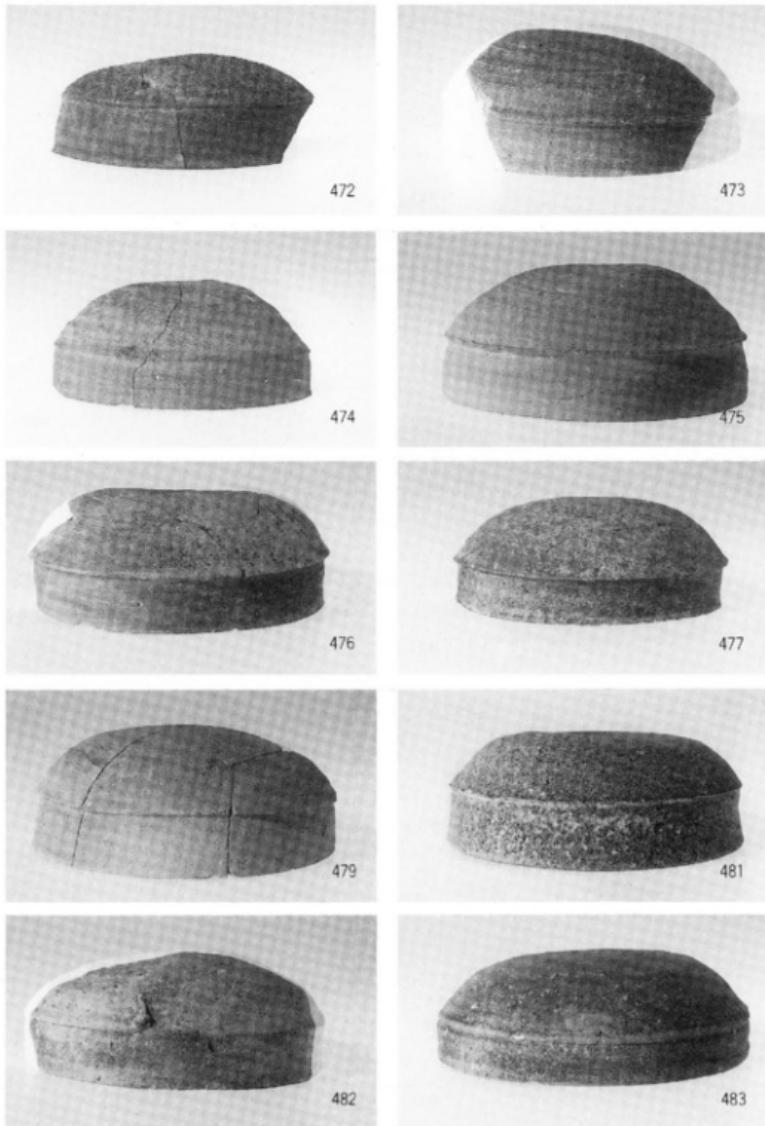


出土遺物(須惠器)

図版162

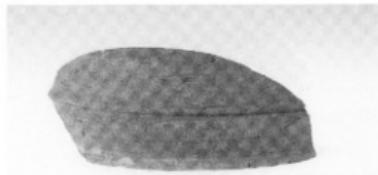


出土遺物(須恵器)

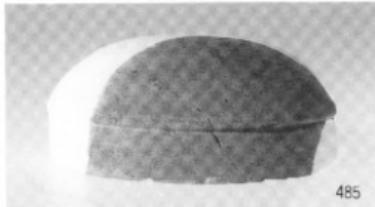


出土遺物(須恵器)

図版164



484



485



486



488



489



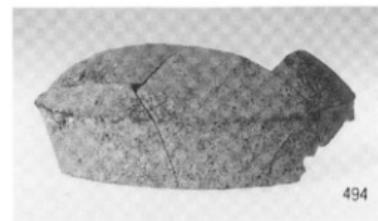
490



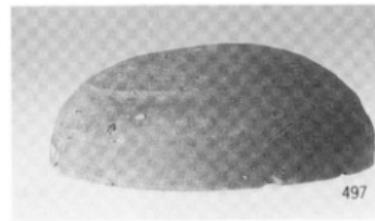
491



493

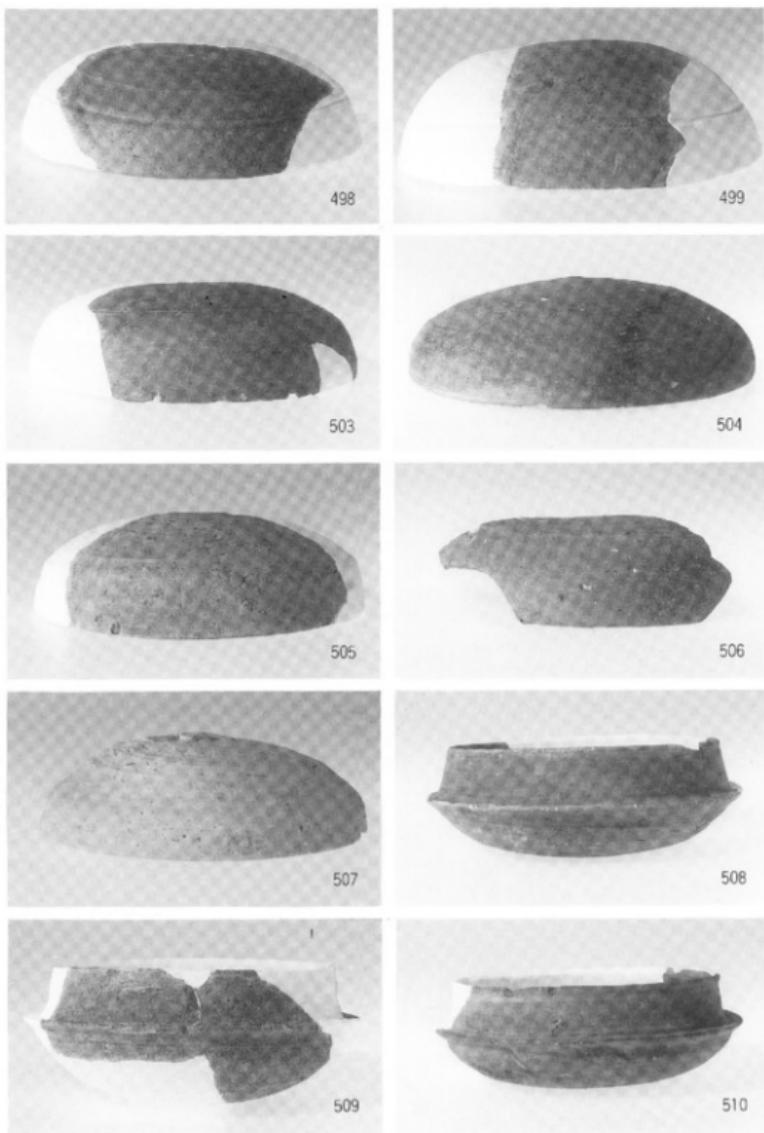


494



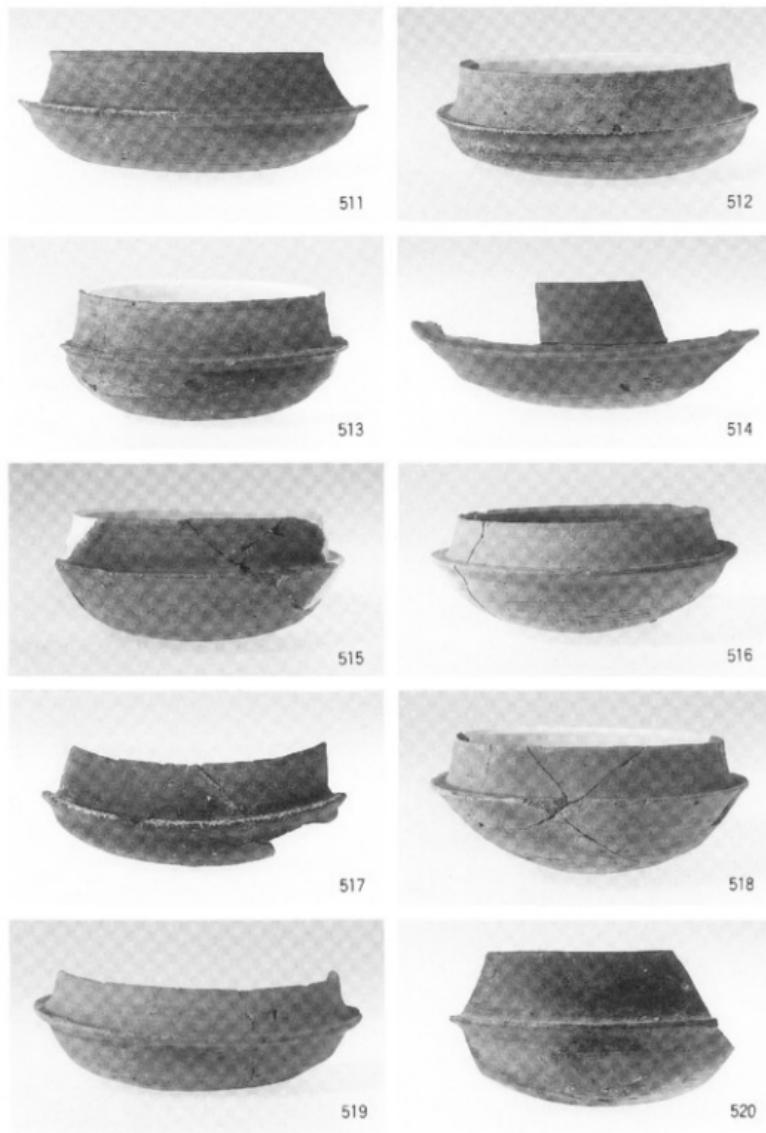
497

出土遺物(須恵器)

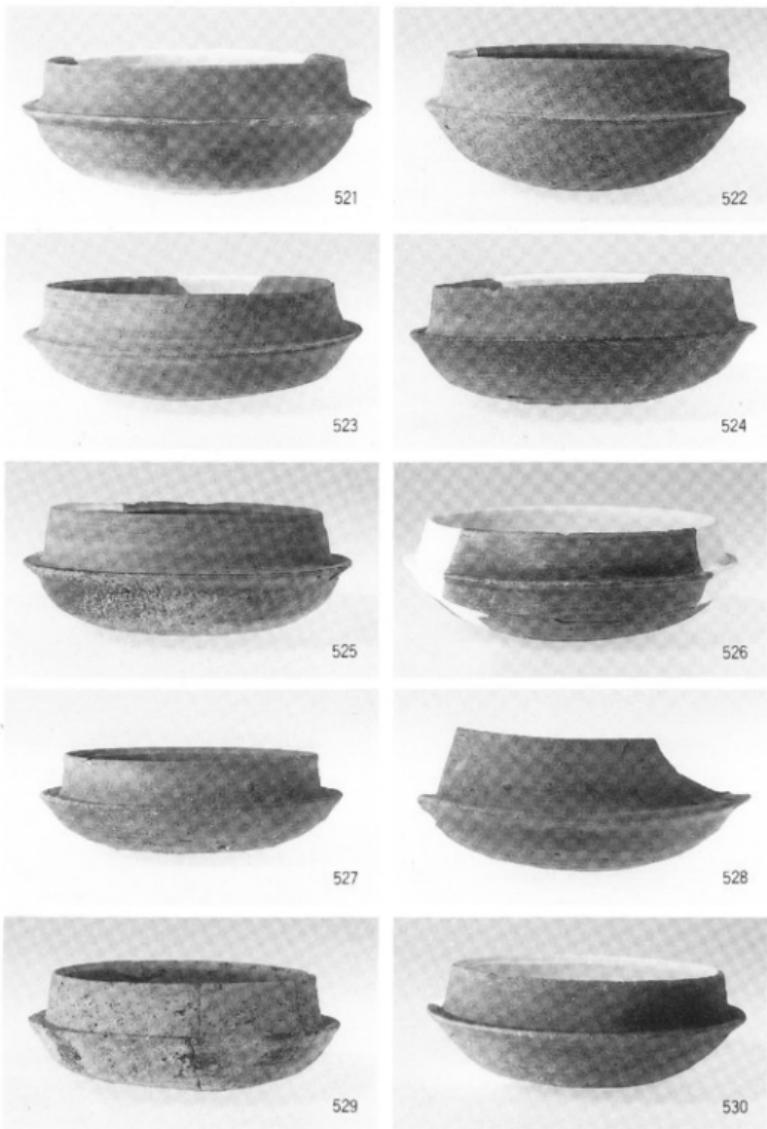


出土遺物(須恵器)

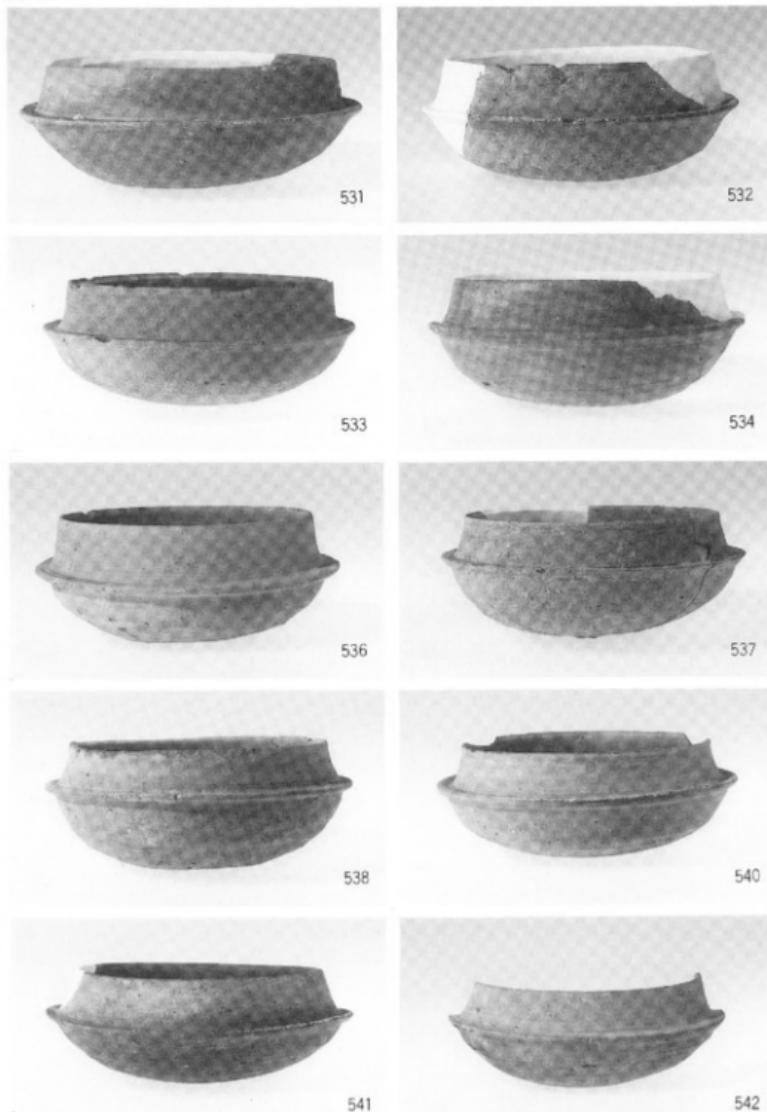
圖版166

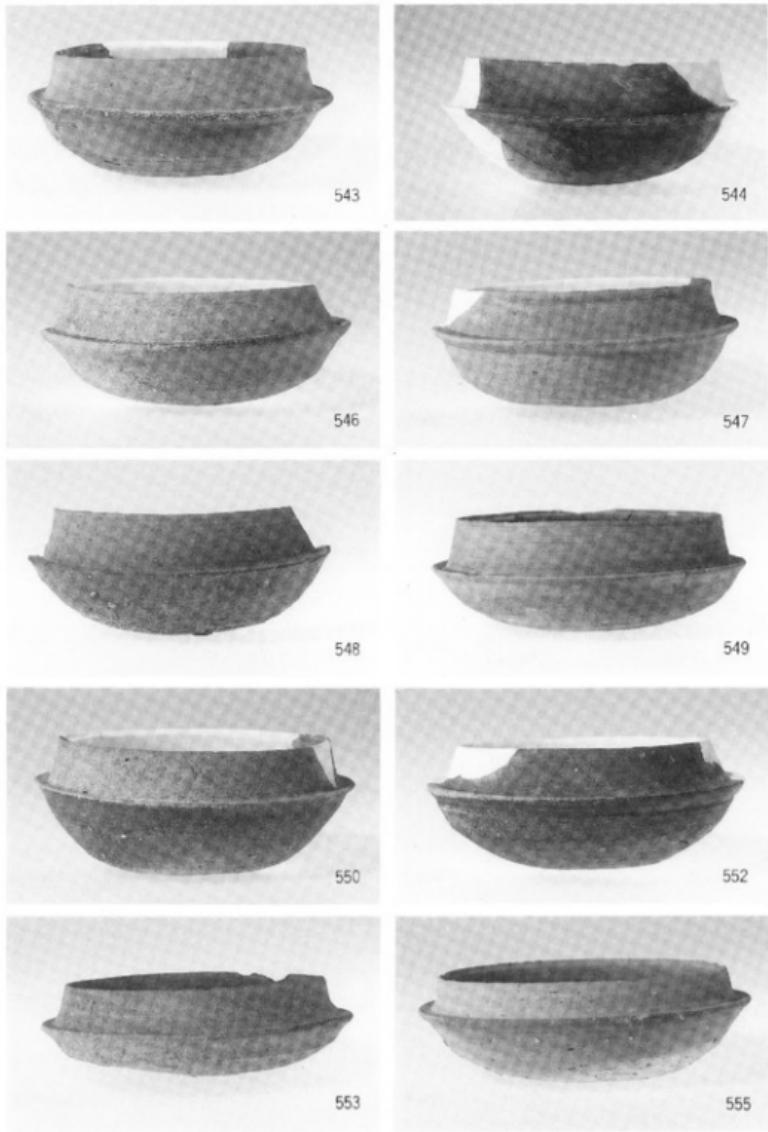


出土遺物(須惠器)



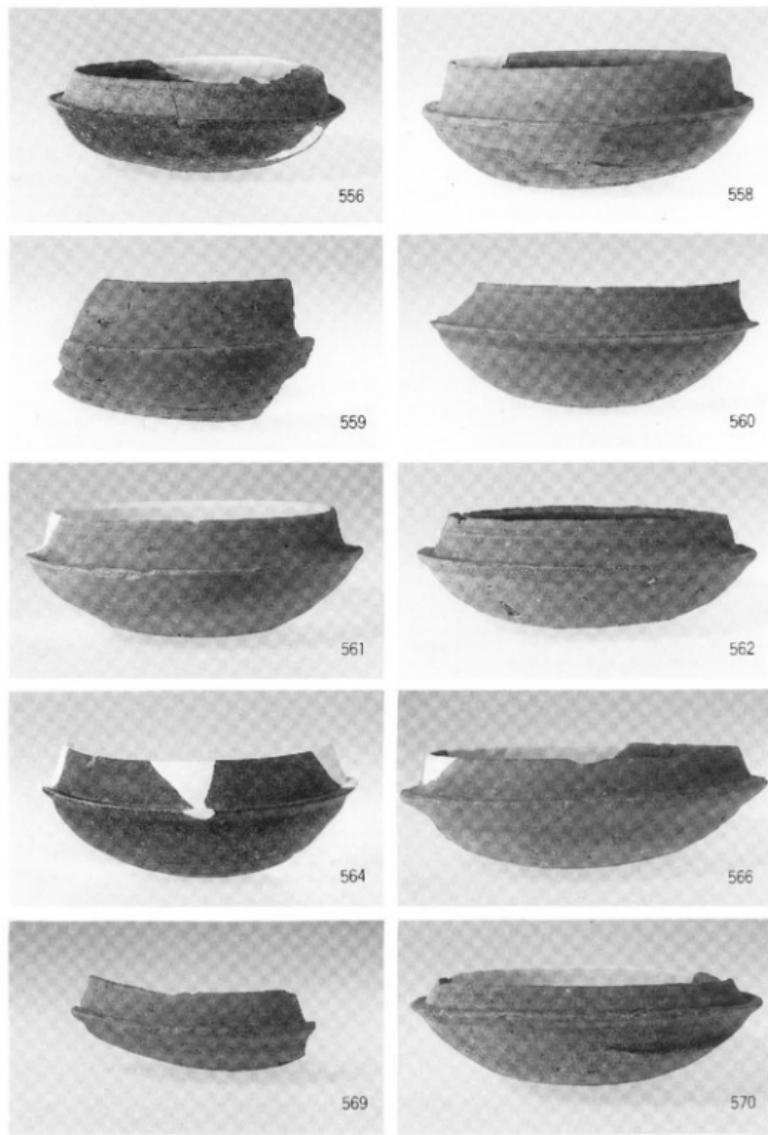
出土遺物(須惠器)





出土遺物(須惠器)

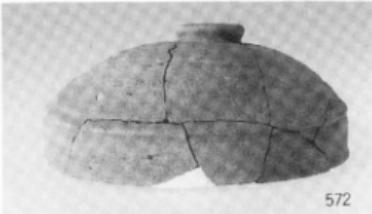
圖版170



出土遺物(須惠器)



571



572



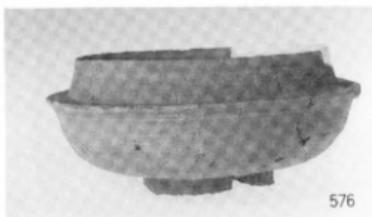
573



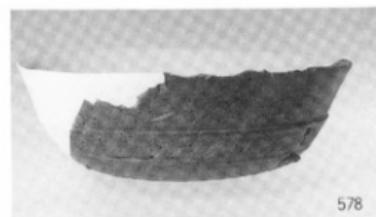
574



575



576



578



582

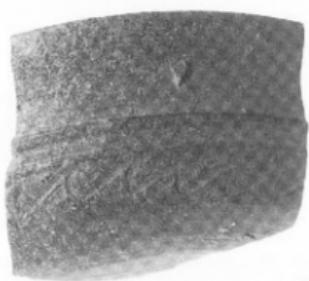


583



584

出土遺物(須惠器)

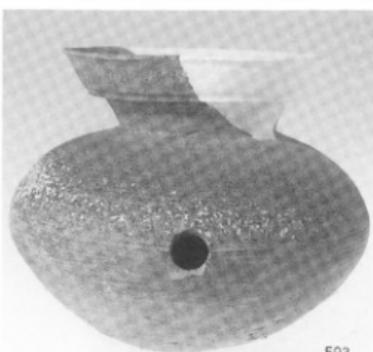




590



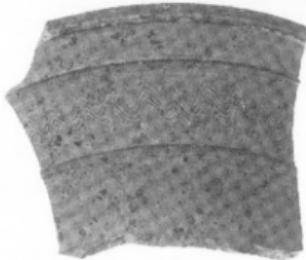
591



593



594



595



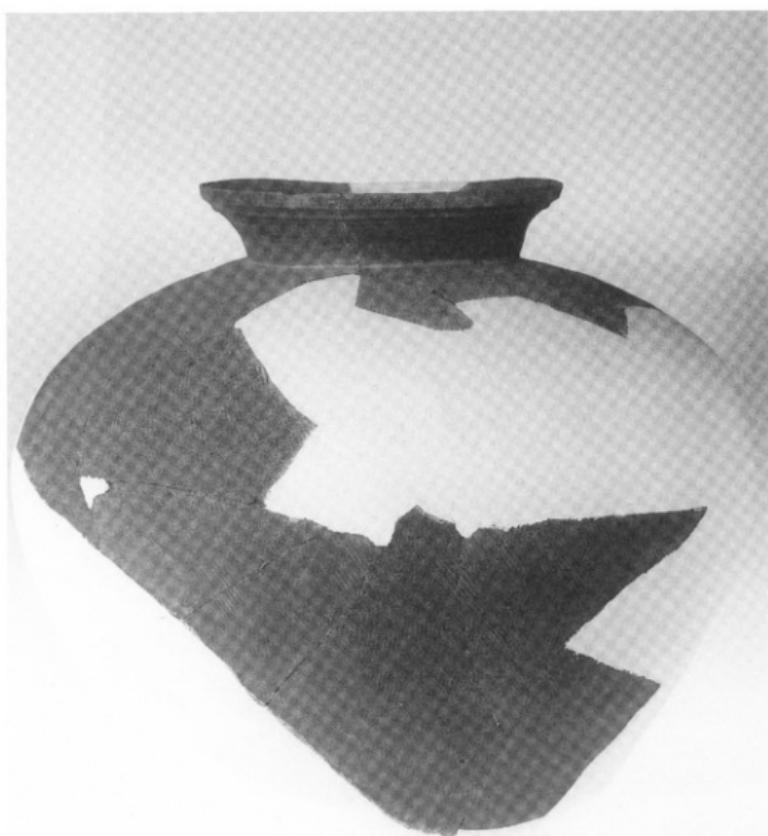
596

出土遺物(須惠器)



601

出土遺物(須惠器)



602

出土遗物(须惠器)



603

出土遗物(須惠器)



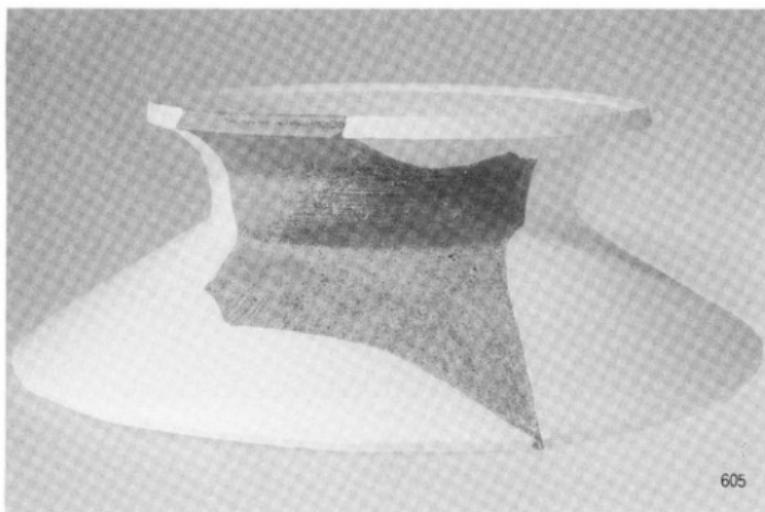
604

出土遺物(須恵器)

图版178

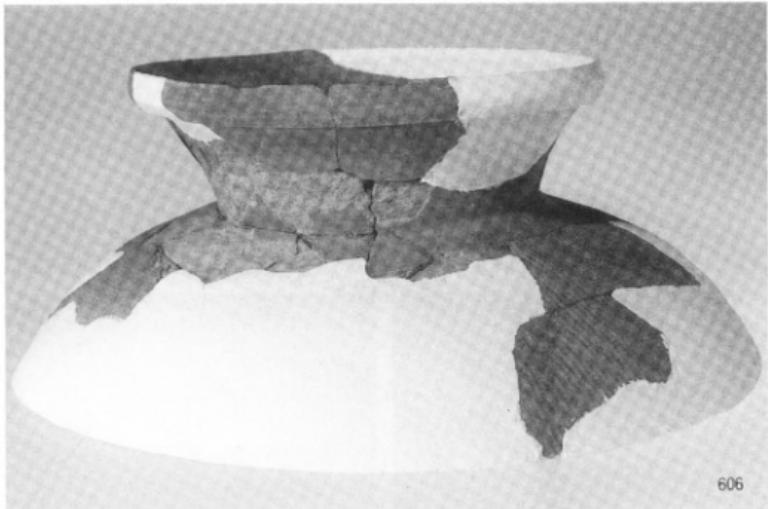


598

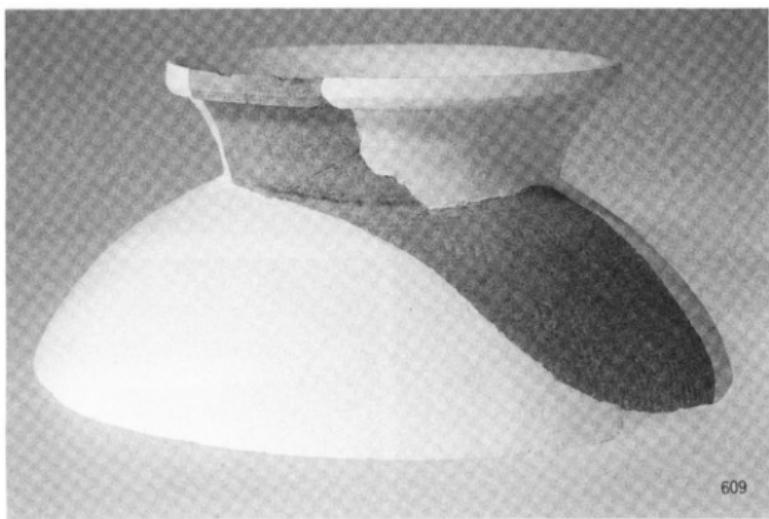


605

出土遗物(須惠器)



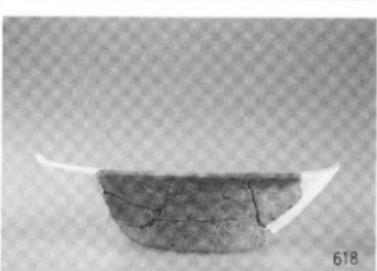
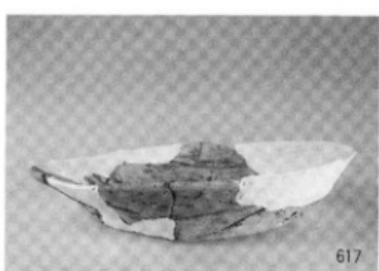
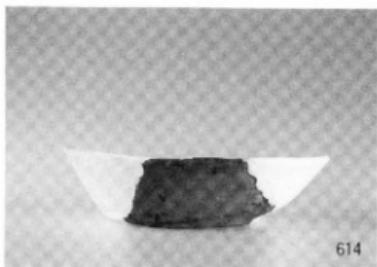
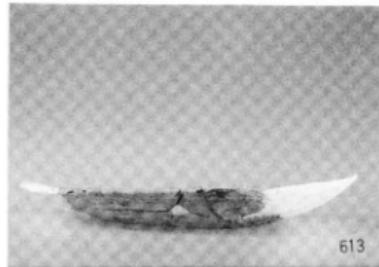
606



609

出土遺物(須惠器)

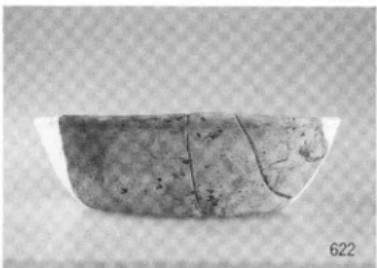
图版180



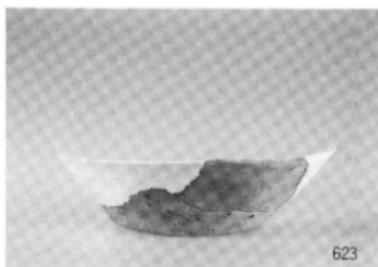
出土遗物(土師器)



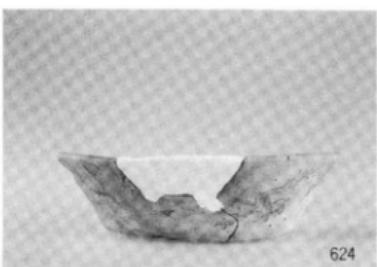
621



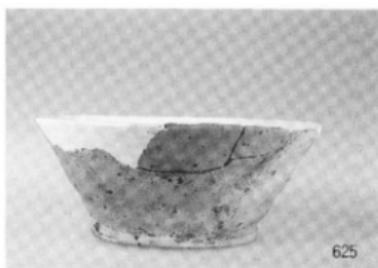
622



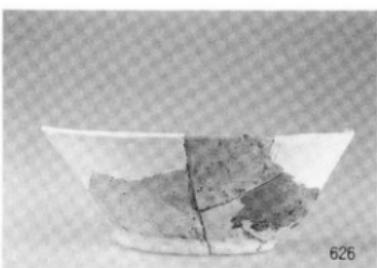
623



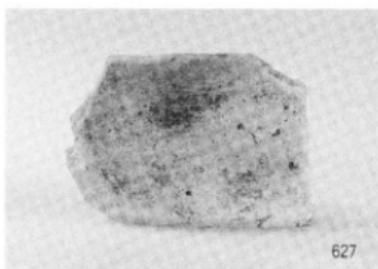
624



625



626

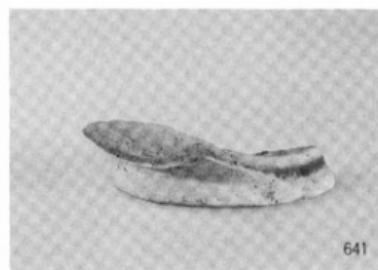
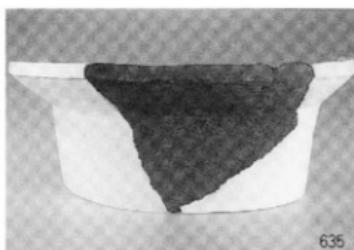
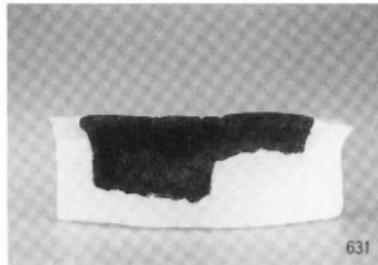


627

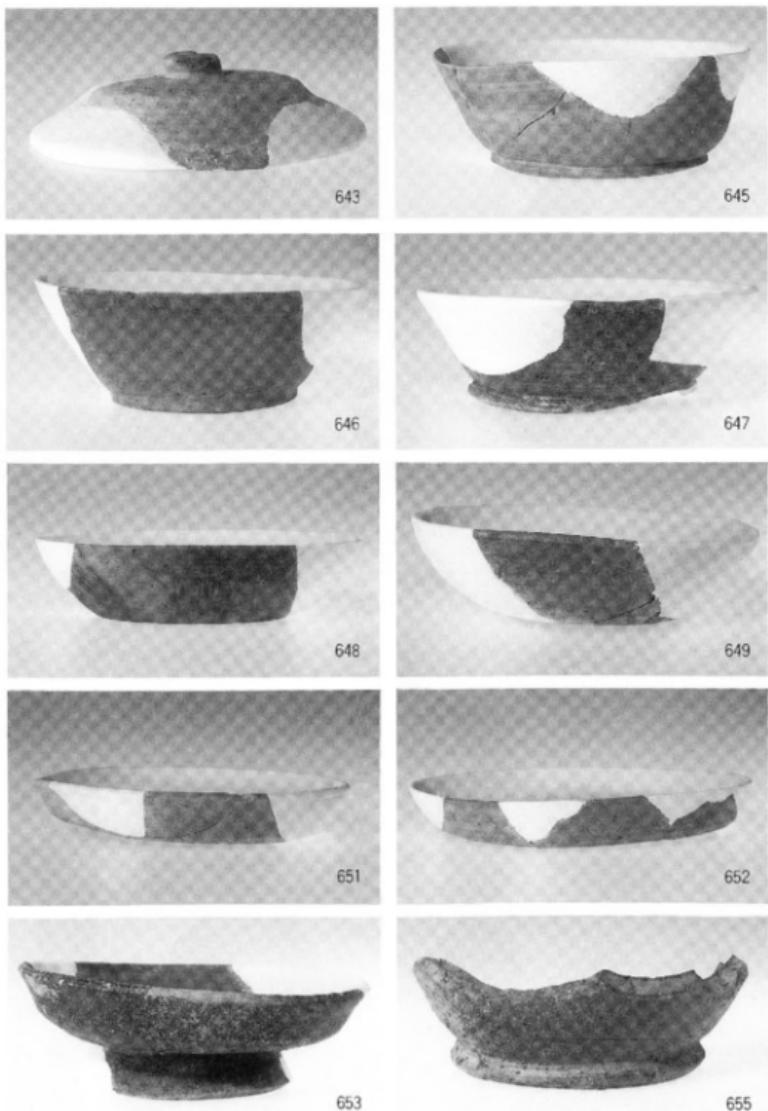


628

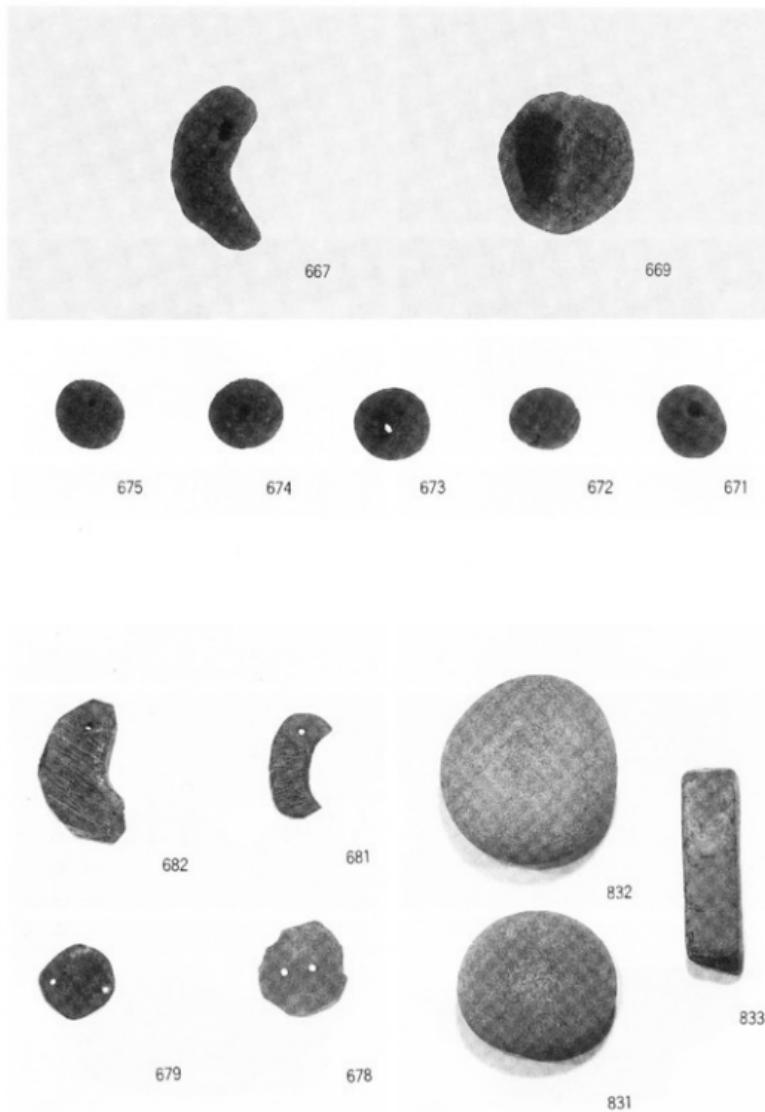
出土遺物(土師器)



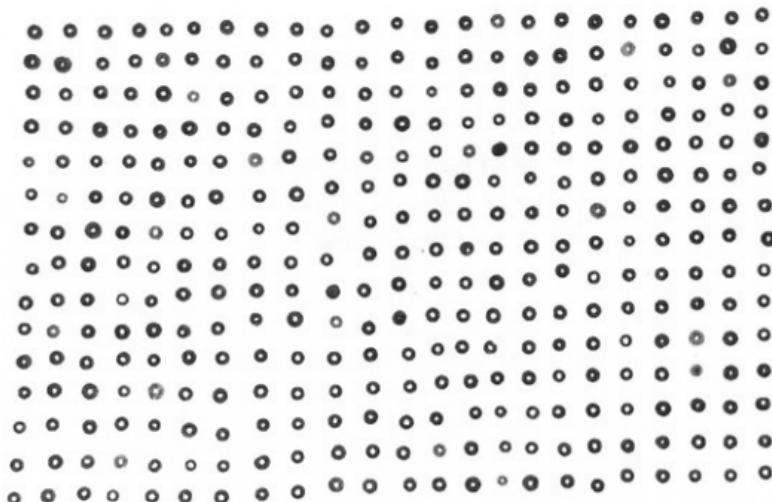
出土遺物(土師器・綠釉陶器・輸入陶磁器)



出土遺物(須惠器)



出土遗物(土製・石器模造品・石器)



後川・中筋川
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

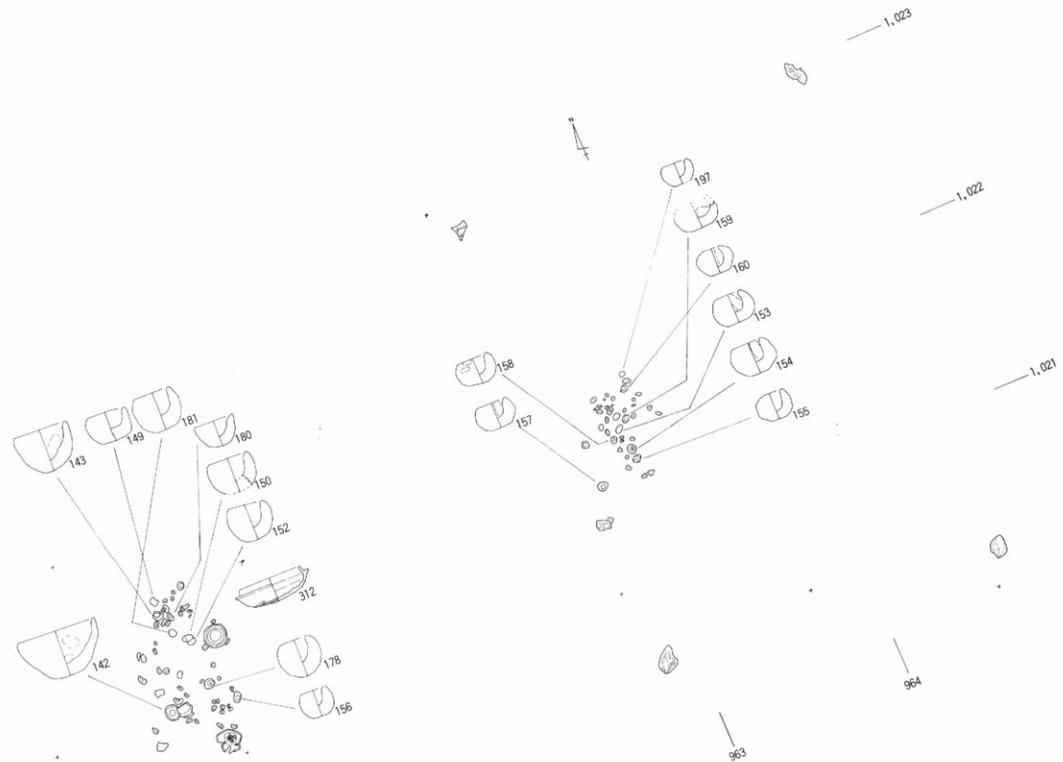
古津賀遺跡
具同中山遺跡群

1988年6月

編集 高知県教育委員会
発行 高知市丸ノ内1丁目7番52号
電話 (0888)21-4761
印刷 西村謄写堂

付 図 目 次

- 付図1 古津賀遺跡S F 2・S F 3遺物出土状態
- 付図2 タ S F 4・S F 5・S F 6遺物出土状態
- 付図3 タ S F 10・S F 11遺物出土状態
- 付図4 具同中山遺跡群S F 1, SX 1遺物出土状態
- 付図5 タ SX 2遺物出土状態
- 付図6 タ S F 2・S F 2下層, SX 3遺物出土状態
- 付図7 タ S F 3遺物出土状態
- 付図8 タ S F 4・S F 5遺物出土状態
- 付図9 タ S F 6, 第Ⅲ層包含層遺物出土状態
- 付図10 タ S F 6, SX 4遺物出土状態
- 付図11 タ S F 7遺物出土状態
- 付図12 タ SX 5遺物出土状態
- 付図13 タ S F 8, SX 6・SX 7遺物出土状態
- 付図14 タ S F 9遺物出土状態



付図1 古津賀遺跡SF2・SF3遺物出土状況

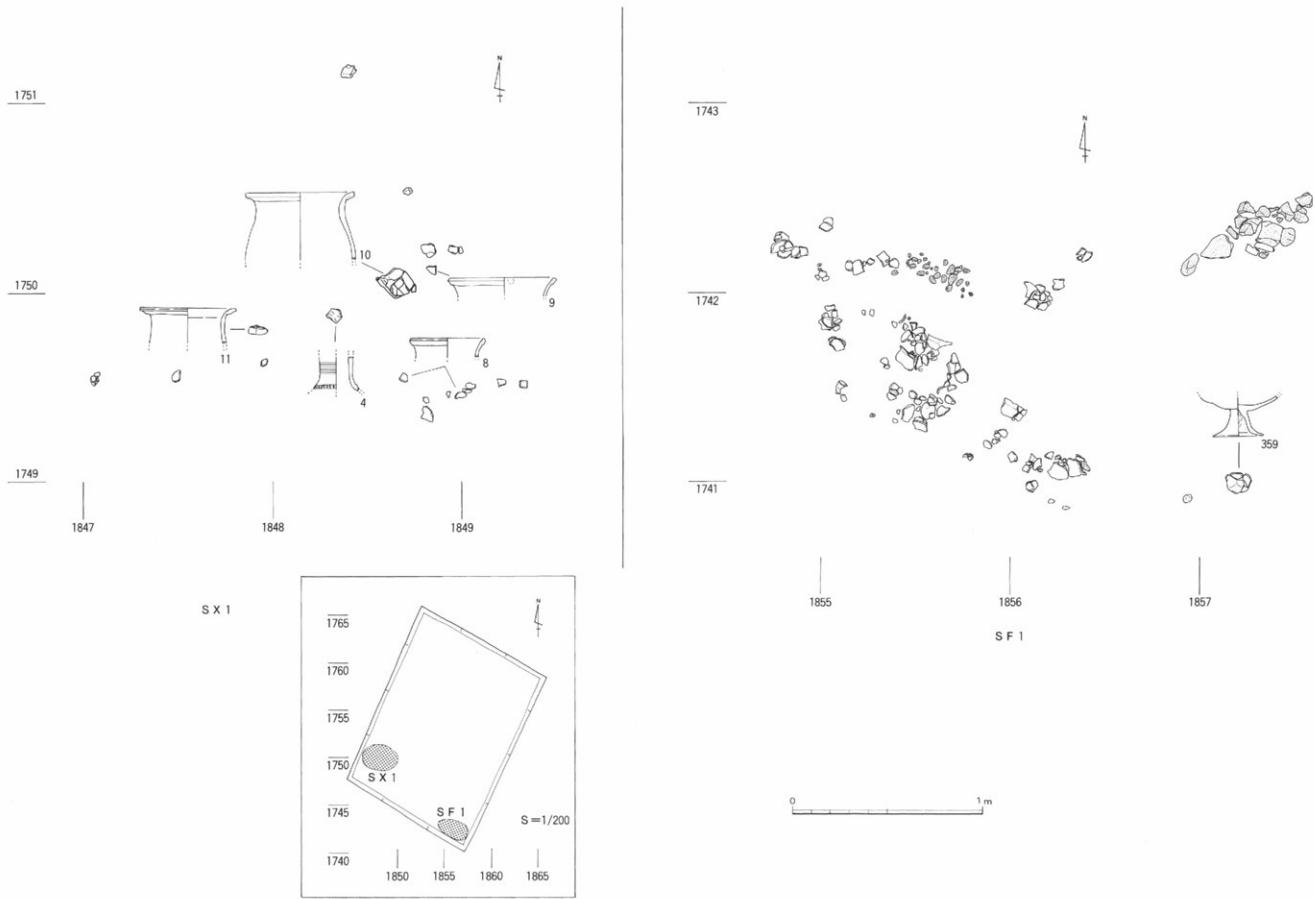
0 1m



付图2 古津寶遺跡SF 4・SF 5・SF 6遺物出土状況



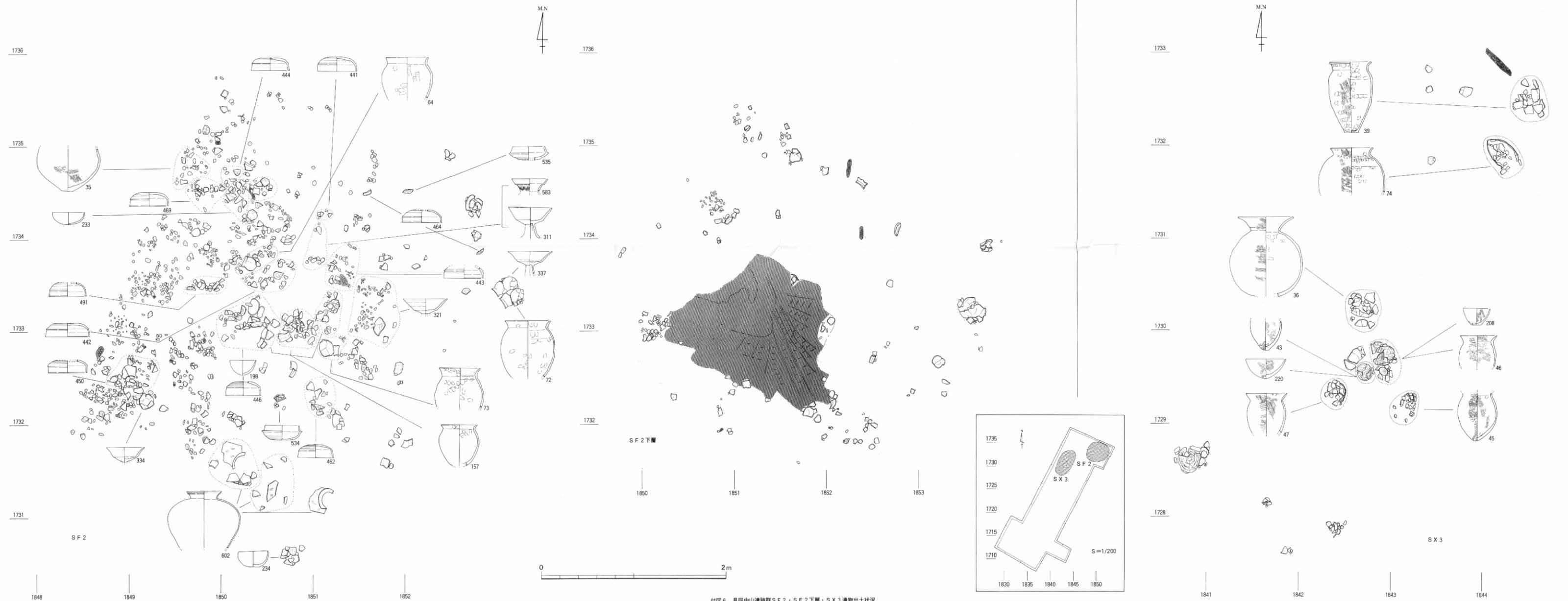
付図3 古津賀遺跡S F10・S F11遺物出土状況



附图4 具合中山道路群S F 1·S X 1遗物出土状况



付图5 具同中山遺跡群S X 2遺物出土狀況



1718

1717

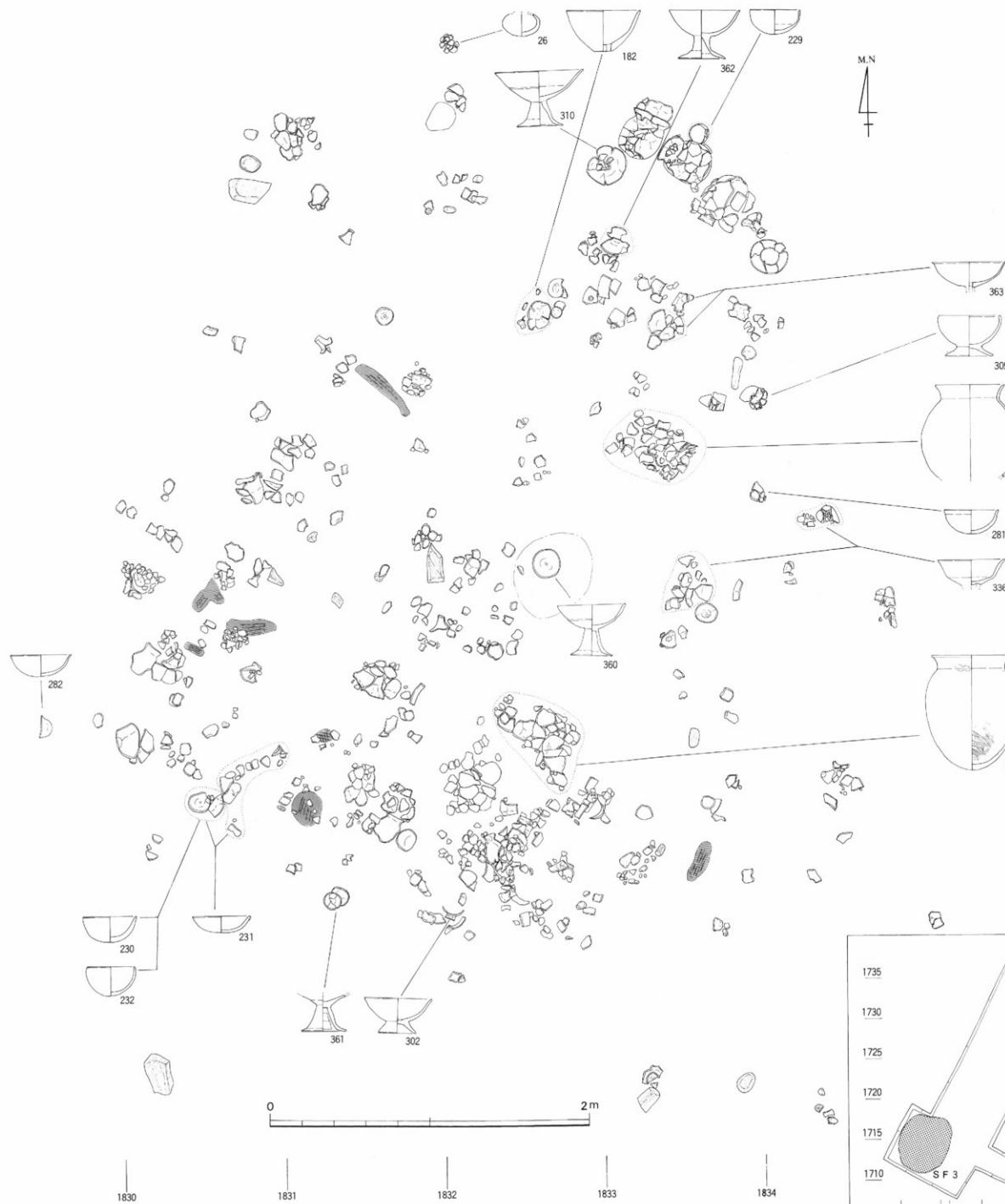
1716

1715

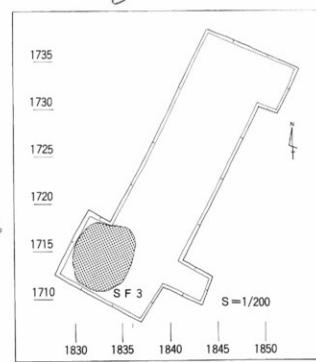
1714

1713

1712

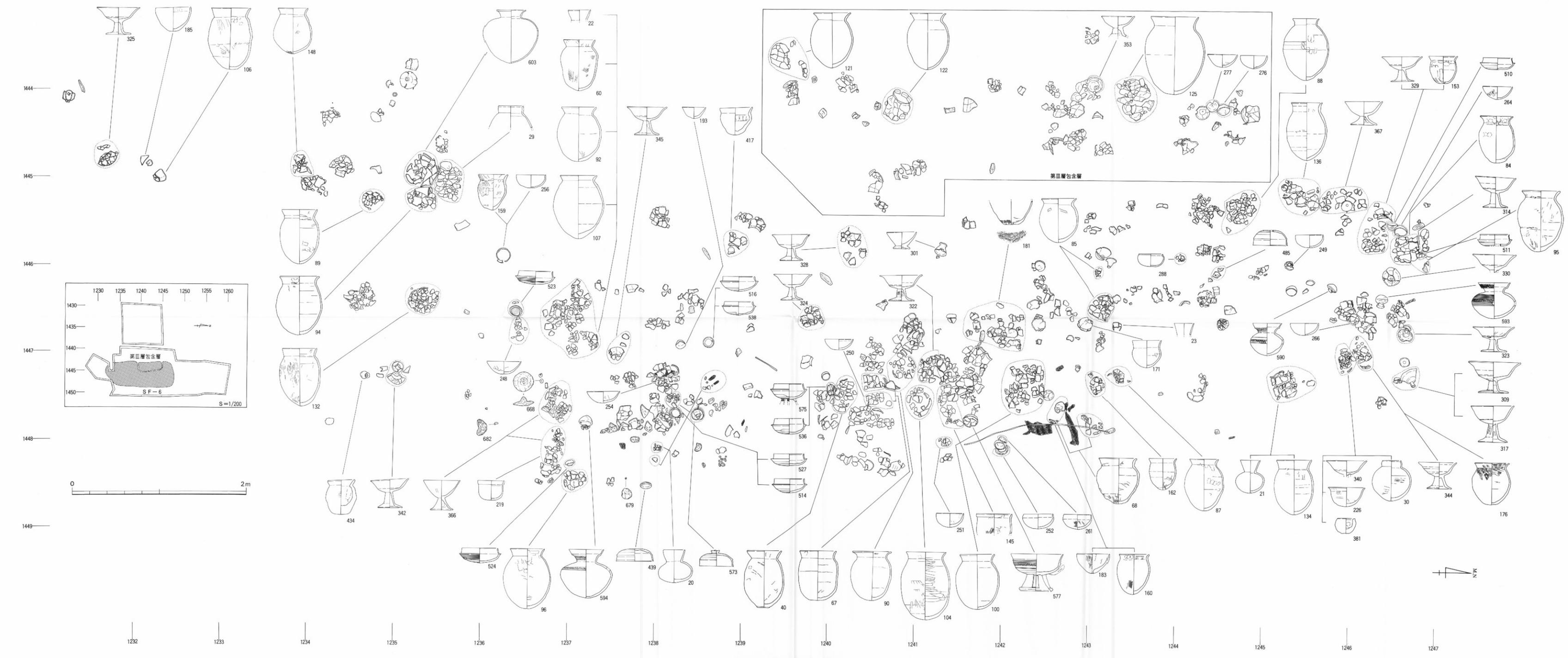


付図7 具同中山遺跡群S.F.3遺物出土状況

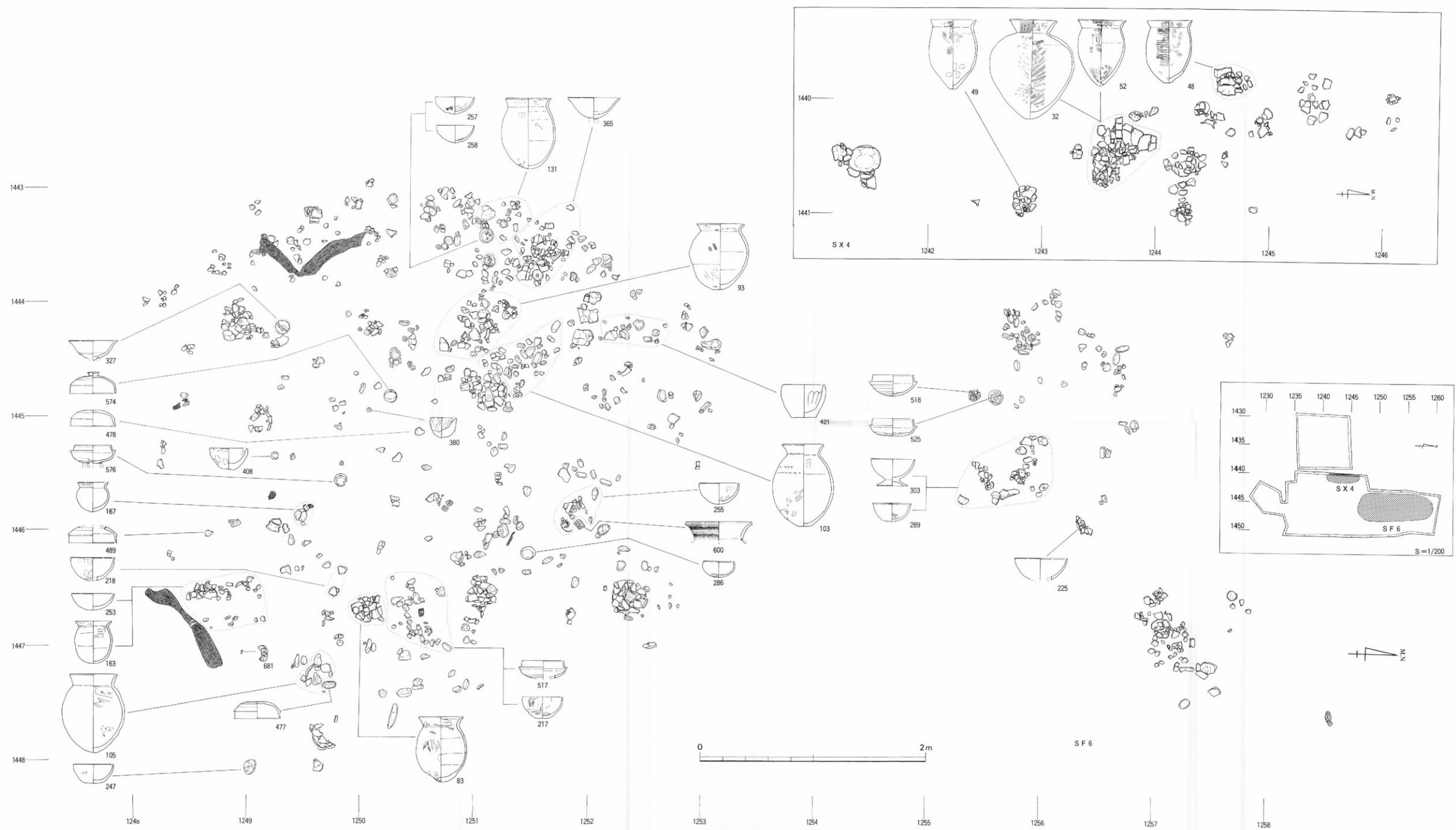




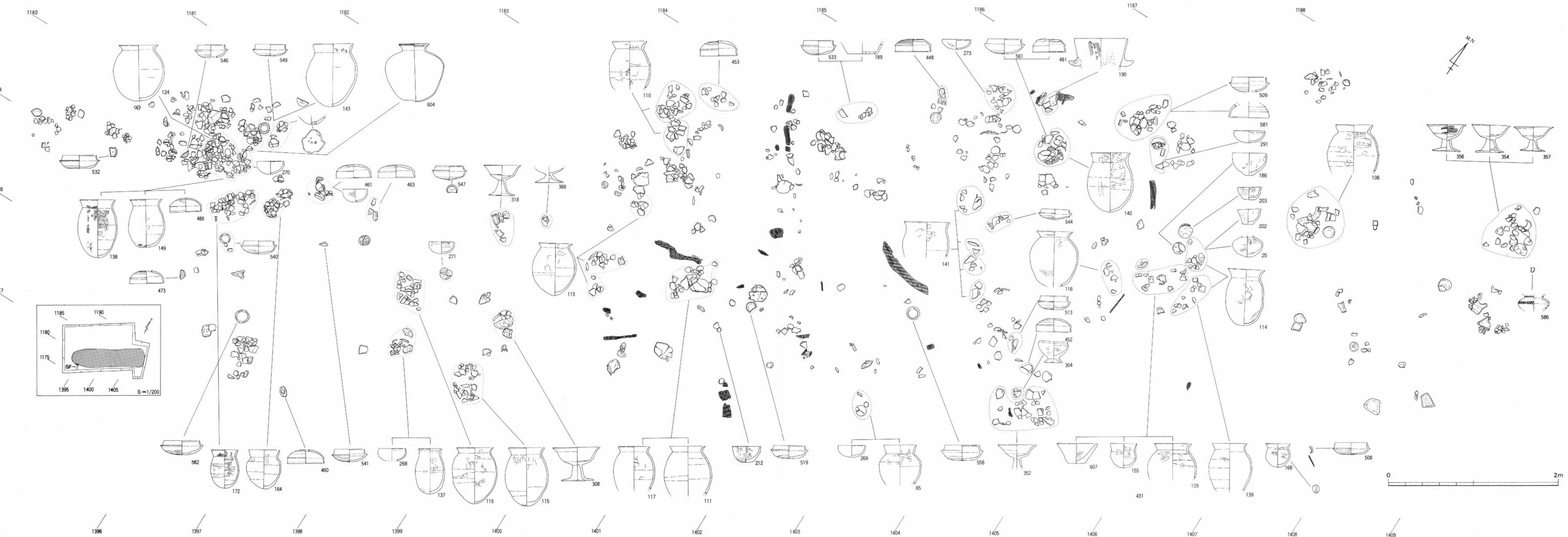
付图8 具同中山道路群SF 4·5出土物出土状况



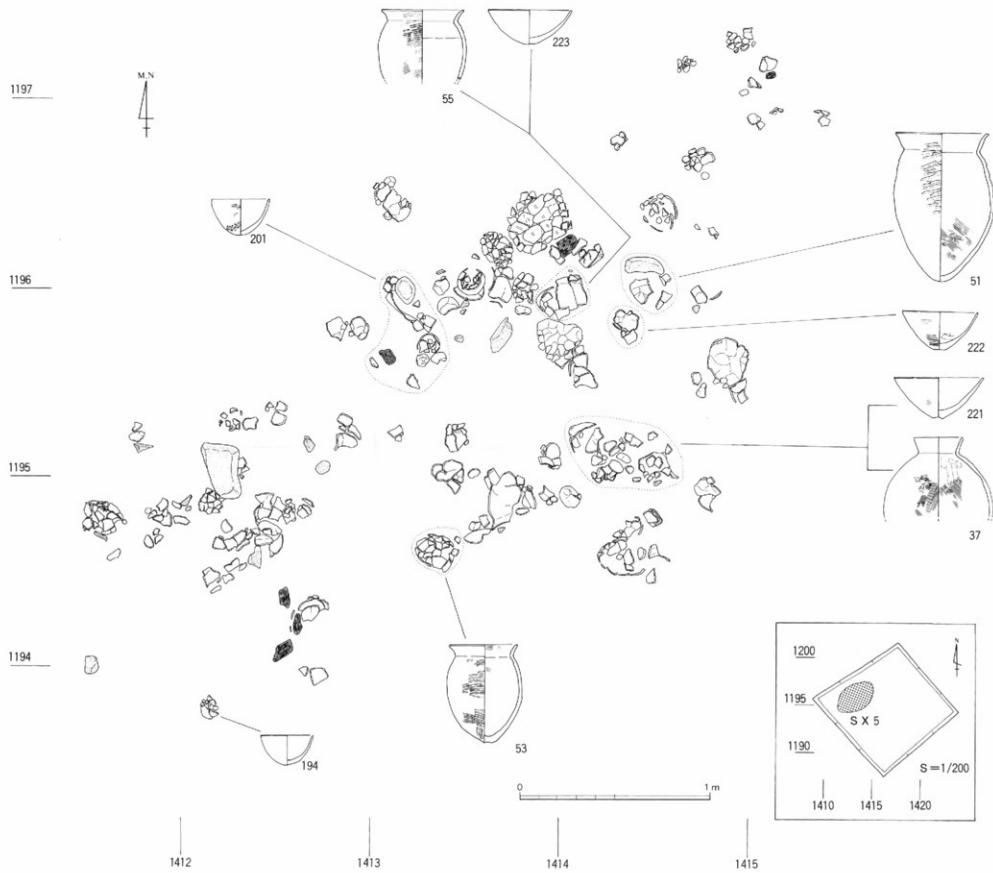
付図9 具同中山遺跡群S.F.6・第Ⅲ層包含層遺物出土状



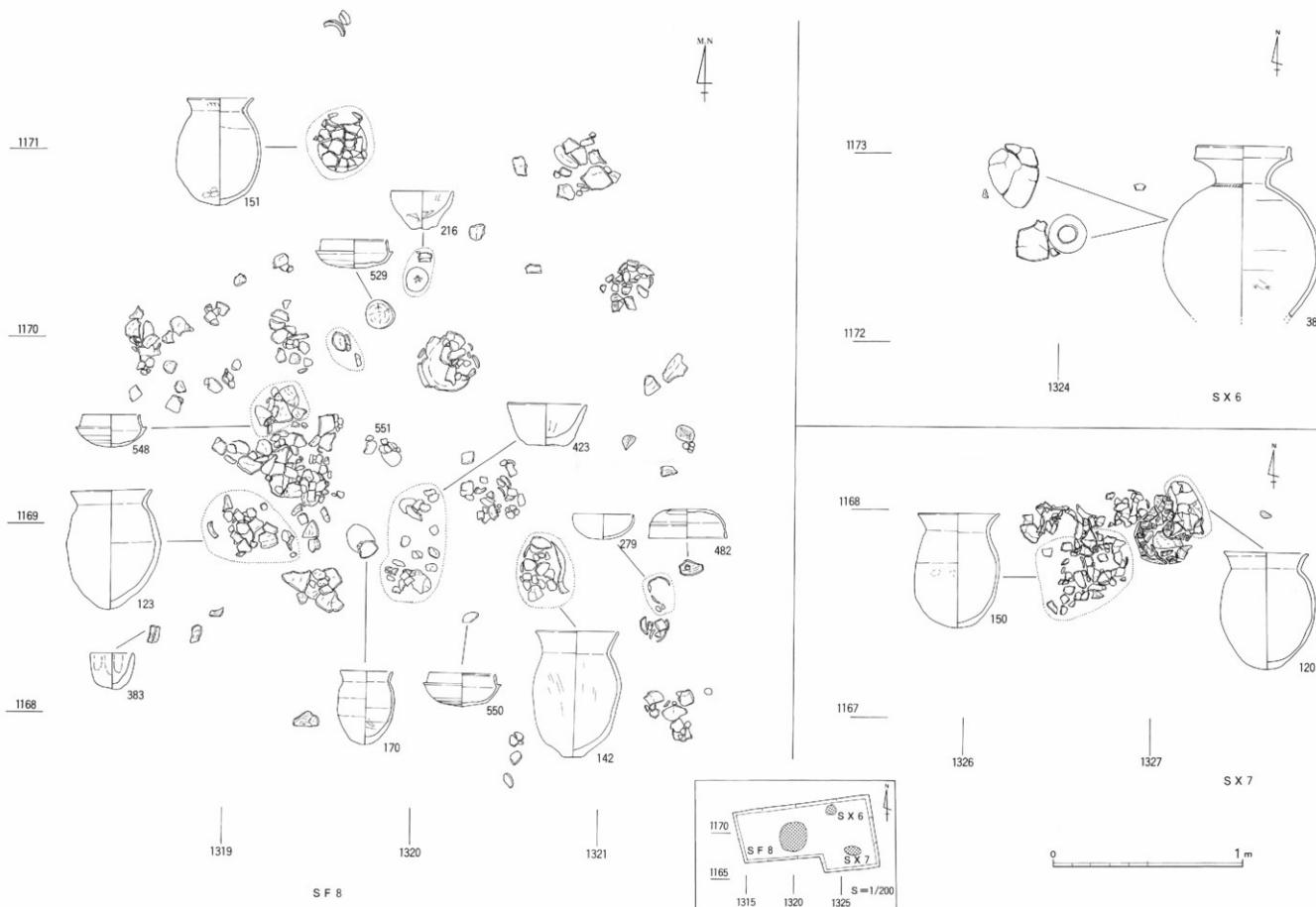
付図10 具同中山遺跡群 S F 6・S X 4 遺物出土状況



付图11 具同中山遺跡群 SF 7 遺物出土狀況



付图12 具同中山遺跡群S X 5遺物出土狀況

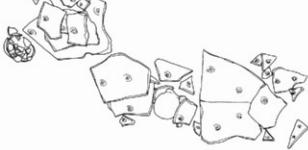


付图13 具同中山遺跡都S F 8・S X 6・S X 7遺物出土状況

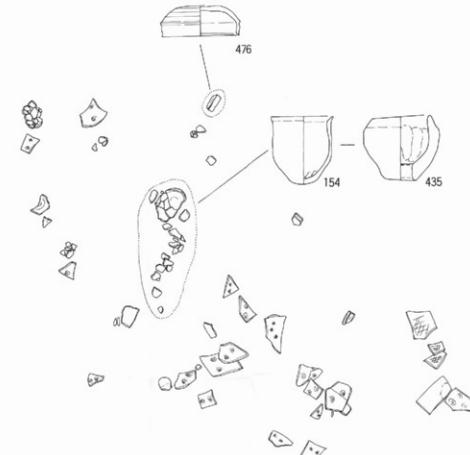
1156



1155



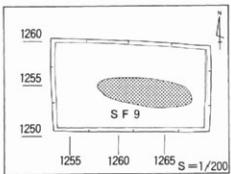
1154



1153



1152



0 1m

1259

1260

1261

1262

1263

1264

1265

1266

1267

付图14 具同中山遺跡群 SF 9 遺物出土狀況

M.N.

